空港跡地整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第８冊

空港跡地遺跡Ⅷ

２００４．９

香川県教育委員会

香川県土地開発公社

空港跡地整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第８冊

空港跡地遺跡Ⅷ

２００４．９

香川県教育委員会

香川県土地開発公社

序　　文

空港跡地遺跡は、空港跡地整備事業に伴い発掘調査が行われた香川県高松市林町に所在する遺跡です。

発掘調査は、香川県教育委員会からの委託で、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成２～９年度に用地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施し、弥生時代後期～江戸時代の遺構が検出されました。特に、本報告書に掲載したＨ地区とＬ地区では、弥生時代後期～古墳時代前期の、竪穴住居を中心とした住居群、農業に伴うと考えられる出水や基幹水路が検出され、当時の集落の実態が明らかになりました。

このたび、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成15年４月から平成16年３月まで実施しました整理事業が終了し、財団の解散に伴い、これを引き継いだ香川県埋蔵文化財センターが『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財報告第８冊　空港跡地遺跡Ⅷ』として刊行することになりました。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と感心を一層深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、関係機関並びに地元関係各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表すとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成16年９月30日

香川県埋蔵文化財センター
所長　中村　仁

例　　言

1. 本報告書は、空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第８冊で、香川県高松市林町（かがわけんたかまつしはやしちょう）に所在する空港跡地遺跡（くうこうあとちいせき）のＨ地区とＬ地区の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土地開発公社から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 空港跡地遺跡の発掘調査は、予備調査が平成２年４月～９月まで実施され、本調査が平成２年12月～９年11月まで実施された。本報告書に収録された地区については、平成３年７月～平成５年11月まで本調査が実施された。
4. 発掘調査にあたって以下の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同・敬称略）
   英明高等学校・林地区開発協議会・地元自治会
5. 報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
   本報告書の編集は乗松真也が担当し、乗松・真下拓哉（現坂出高等学校）・濱野圭司（現善通寺第一高等学校）が執筆した。執筆の分担は以下のとおりである。
   第１章第１節１・２（１）・第２節、第２章、第３章第１節、第４章・・・・・乗松
   第１章第１節２（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・真下
   第１章第１節２（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・濱野
   なお、第２章については、発掘調査時に作成された『空港跡地遺跡発掘調査概報』中の文章を一部引用している。また、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成15年度末に廃止となったため、報告書刊行業務は香川県埋蔵文化財センターが実施した。
6. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい。（敬称略・五十音順）
   梅木謙一・大久保徹也・大嶋和則・久住猛雄・近藤玲・篠宮正・田崎博之・中村豊・平井典子・吉田広
7. 本遺跡の報告にあたっては、以下のとおり分析を依頼した。
   弥生土器の胎土分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・パリノ・サーヴェイ株式会社
8. 挿図の一部に国土地理院５万分の１地形図「高松北部」「高松南部」、1962年撮影空中写真を使用した。
9. 本書で用いる方位の北は、国土座標第Ⅳ座標系（日本測地系）の北であり、標高は東京湾平均海水面（Ｔ．Ｐ．）からのプラス値である。また、座標・標高の記載はすべてｍ単位である。
10. 遺構は以下の略号によって表示している。
    ＳＨ　竪穴住居　　ＳＢ　掘立柱建物　　ＳＤ　溝・水路　　ＳＥ　井戸　　ＳＫ　土坑
    ＳＰ　柱穴・小穴　　ＳＸ　出水・その他の遺構
11. 竪穴住居（ＳＨ）の可能性がある遺構については、①平面形、②中央土坑・柱穴などの付帯施設、③旧地表面から掘り込まれる垂直に近い壁　の３項目のうち、２項目以上有するものを竪穴住居とした。１項目のみのものについては、その他の遺構（ＳＸ）としたが文章中で竪穴住居の可能性を指摘している。
12. 遺構名は発掘調査時及び概報とは異なっているが、番号に関しては発掘調査時のものを踏襲している。変更に関しての原則は以下のとおりである。
    (1) 遺構略号と番号の間に地区名（英小文字）が入る。
    例）Ｈ地区‥‥ＳＫｈ001、ＳＨｈ02　　Ｌ地区‥‥ＳＰｌ0001、ＳＥｌ01

⑵　Ｈ地区

・ＳＥは２桁の数字、ＳＫ・ＳＤは３桁の数字。

Ⅲ－15・16・17・18・19・20区‥‥発掘調査時の番号（番号の先頭に０を付す）

Ⅲ－40区‥‥‥‥‥発掘調査時の番号（数字の先頭に１が付してある）

Ⅲ－49区‥‥‥‥‥発掘調査時の番号の先頭に２を付す

Ⅲ—50区‥‥‥‥‥発掘調査時の番号の先頭に３を付す

Ⅲ－３区‥‥‥‥‥発掘調査時の番号の先頭に４を付す

Ⅲ－10区‥‥‥‥‥発掘調査時の番号の先頭に５を付す

例）Ⅲ－15区ＳＫ02→ＳＫｈ002　　Ⅲ－３区ＳＤ01→ＳＤｈ401

・ＳＰは４桁の数字。

Ⅲ－15区‥‥‥‥‥ＳＰｈ00XX

Ⅲ－16区‥‥‥‥‥ＳＰｈ01XX、02XX

Ⅲ－17区‥‥‥‥‥ＳＰｈ03XX

Ⅲ－18区‥‥‥‥‥ＳＰｈ04XX、05XX

Ⅲ－19区‥‥‥‥‥ＳＰｈ06XX、07XX、08XX

Ⅲ－20区‥‥‥‥‥ＳＰｈ09XX、10XX、11XX

Ⅲ－40区‥‥‥‥‥ＳＰｈ12XX、13XX

Ⅲ－49区‥‥‥‥‥ＳＰｈ20XX

Ⅲ－50区‥‥‥‥‥ＳＰｈ30XX

Ⅲ－３区‥‥‥‥‥ＳＰｈ40XX

Ⅲ－10区‥‥‥‥‥ＳＰｈ50XX

例）　Ⅲ－18区ＳＰ12→ＳＰｈ0412　　Ⅲ－19区ＳＰ104→ＳＰｈ0704

・ＳＨ・ＳＢ、および遺構種別を変更したものについては新たな遺構番号を付している。

⑶　Ｌ地区

・ＳＫは３桁の数字、ＳＰは４桁の数字。

Ｉ－６区‥‥‥‥‥発掘調査時の番号（番号の先頭に０を付す）

Ｉ－６区水路北Ｔｒ‥‥‥発掘調査時の番号の先頭に１を付す

Ｉ－７区‥‥‥‥‥発掘調査時の番号の先頭に２を付す

Ｉ—12区‥‥‥‥‥発掘調査時の番号の先頭に３を付す

Ｉ－５区‥‥‥‥‥発掘調査時の番号の先頭に４を付す

例）Ｉ－６区ＳＫ04→ＳＫｌ004　　Ｉ－７区ＳＰ22→ＳＰｌ2022

・ＳＨ・ＳＢ・ＳＥ・ＳＸ、および遺構種別を変更したものについては新たな遺構番号を付している。

13. 土層注記の記載ついては発掘調査時の担当者の考えを尊重し、あえて統一していない。よって土層注記は、同一調査区内（同一観察者）の相対的な観察記録となっている。

14. 遺物実測図中、土器の外郭線の外側にある線（ト　ナ）は黒班部分を、石製品の外郭線の外側にある線は摩耗痕（使用痕）の範囲を示す。砥石の薄いトーン部分は砥面を示す。

15. 添付ＣＤのビューワはトリワークス（http://www.kuraemon.com）「蔵衛門10」を使用した。

本文目次

第１章　調査の経緯と経過…… 1

第１節　発掘調査の経緯と経過…… 1

1　発掘調査の体制…… 1

2　普及・啓発活動…… 6

第２節　整理作業の経緯…… 9

1　整理作業の経緯…… 9

2　整理作業の体制…… 9

第２章　発掘調査の記録…… 10

第１節　地形と層序…… 10

第２節　Ｈ地区の遺構と遺物…… 27

1　弥生時代後期の遺構と遺物…… 27

2　古墳時代後期～古代の遺構と遺物…… 84

3　古代末～中世の遺構と遺物…… 95

4　近世以降の遺構と遺物…… 112

第３節　Ｌ地区の遺構と遺物…… 139

1　弥生時代前期の遺構と遺物…… 139

2　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物…… 145

3　古墳時代後期～古代の遺構と遺物…… 187

4　古代末～中世の遺構と遺物…… 192

5　近世以降の遺構と遺物…… 211

第４節　近世以降の瓦…… 214

第３章　弥生土器の胎土分析…… 217

第１節　分析の目的と今後の課題…… 217

第２節　高松平野内遺跡出土弥生土器の胎土分析…… 220

第４章　調査の成果…… 243

挿図目次

第１図　空港跡地遺跡位置図１・・・・・・・・・　2
第２図　空港跡地遺跡位置図２・・・・・・・・・　2
第３図　空港跡地遺跡調査区割図・・・・・・・・　4
第４図　空港跡地遺跡報告地区割図・・・・・・・　5
第５図　空港跡地遺跡東西方向土層断面略図、
　Ｈ・Ｌ地区土層断面位置図・・・・・　11～12
第６図　明治21年地籍図に表された田地の等級・・
　・・・・・・・・・・・・　13～14
第７図　『順道図絵』に表された田地・畑地の等級と
　弥生時代後期中葉の遺構・・・・・・・・・・　15
第８図　Ⅰ－５区北壁土層断面図・・・・・・・・　16
第９図　Ⅰ－６区南壁土層断面図・・・・・・・・　17
第10図　Ⅰ－７区南壁土層断面図・・・・・・・・　18
第11図　Ⅰ－７区東壁、Ⅰ－12区北壁西部分・
　北壁東端土層断面図・・・・・・・・・・・・　19
第12図　Ⅲ－３区南壁・東壁（北部）・東壁（南部）
　土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・　20
第13図　Ⅲ－10区南壁・東壁、Ⅲ－50区東壁、
　Ⅲ－18区ＳＸｈ02トレンチ土層断面図・・　21
第14図　Ⅲ－15区北壁土層断面図・・・・・・・・　22
第15図　Ⅲ－15区深堀トレンチ土層断面図・・・　23
第16図　Ｈ地区弥生時代後期主要遺構配置図
　・・・・・・・・・・・　25～26
第17図　ＳＨｈ01平・断面図、出土遺物実測図・　27
第18図　ＳＨｈ02平・断面図・・・・・・・・・　28
第19図　ＳＨｈ02出土遺物実測図・・・・・・・・　29
第20図　ＳＨｈ03平・断面図、出土遺物実測図・　30
第21図　ＳＨｈ04平・断面図・・・・・・・・・　31
第22図　ＳＢｈ01平・断面図、出土遺物実測図・　32
第23図　ＳＢｈ02・ｈ03・ｈ04平・断面図・・　33
第24図　ＳＢｈ05・ｈ06平・断面図、
　ＳＢｈ05出土遺物実測図・・・・・・・・・　34
第25図　ＳＢｈ07・ｈ08平・断面図・・・・・・　36
第26図　ＳＫｈ012平・断面図・・・・・・・・・　37
第27図　ＳＫｈ012出土遺物実測図１・・・・・　38
第28図　ＳＫｈ012出土遺物実測図２・・・・・　39
第29図　ＳＫｈ028・ｈ033平・断面図、
　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・　40
第30図　ＳＫｈ034平・断面図・・・・・・・・・　41
第31図　ＳＫｈ034出土遺物実測図・・・・・・・　42
第32図　ＳＫｈ049・ｈ050・ｈ052平・断面図、
　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・　43
第33図　ＳＫｈ062平・断面図・・・・・・・・・　44
第34図　ＳＫｈ062出土遺物実測図・・・・・・・　45
第35図　ＳＫｈ108平・断面図・・・・・・・・・　46
第36図　ＳＫｈ108出土遺物実測図・・・・・・・　47
第37図　ＳＫｈ129平・断面図、出土遺物実測図
　・・・・・・・・・・・・・・・　48
第38図　ＳＫｈ130平・断面図・・・・・・・・・　48
第39図　ＳＫｈ130出土遺物実測図・・・・・・・　49
第40図　ＳＫｈ141平・断面図・・・・・・・・・　50
第41図　ＳＫｈ141出土遺物実測図１・・・・・　52
第42図　ＳＫｈ141出土遺物実測図２・・・・・　53
第43図　ＳＫｈ142平・断面図、ＳＫｈ142・ｈ147
　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・　54
第44図　ＳＫｈ143平・断面図・・・・・・・・・　54
第45図　ＳＫｈ143出土遺物実測図・・・・・・・　55
第46図　ＳＫｈ505平・断面図、出土遺物実測図
　・・・・・・・・・・・・・・　56
第47図　ＳＫｈ506平・立面図・・・・・・・・・　57
第48図　ＳＫｈ506出土遺物実測図１・・・・・　58
第49図　ＳＫｈ506出土遺物実測図２・・・・・　59
第50図　ＳＫｈ507平・立面図、出土遺物実測図
　・・・・・・・・・・・・・・　60
第51図　ＳＫｈ508・ｈ509・ｈ515・ｈ516
　平・断面図、ＳＫｈ509出土遺物実測図・・　61
第52図　ＳＫｈ517平・断面図、出土遺物実測図
　・・・・・・・・・・・・・・　62
第53図　ＳＫｈ001・ｈ006・ｈ007平・断面図・　63
第54図　ＳＫｈ019・ｈ026平・断面図・・・・・　63
第55図　ＳＫｈ045・ｈ046・ｈ047・ｈ048
　平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・　64
第56図　ＳＫｈ131・ｈ134平・断面図・・・・・　64
第57図　ＳＫｈ104・ｈ082・ｈ103平・断面図・　65
第58図　ＳＫｈ161・ｈ162・ｈ163・ｈ191
　平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・　65
第59図　ＳＫｈ204・ｈ206・ｈ228・ｈ230・ｈ303・
　ｈ305平・断面図・・・・・・・・・・・・　66
第60図　ＳＫｈ306・ｈ307・ｈ312・ｈ313・ｈ316・
　ｈ318・ｈ322・ｈ324平・断面図・・・・　67
第61図　ＳＸｈ01平・断面図・・・・・・・・・　68
第62図　ＳＸｈ01出土遺物実測図・・・・・・・　69
第63図　ＳＸｈ02平・断面図、出土遺物実測図・　70
第64図　ＳＸｈ12平・断面図・・・・・・・・・　71
第65図　ＳＤｈ016断面図・・・・・・・・・・　72
第66図　ＳＤｈ016出土遺物実測図１・・・・・　73
第67図　ＳＤｈ016出土遺物実測図２・・・・・　74
第68図　ＳＤｈ016出土遺物実測図３・・・・・　75
第69図　ＳＤｈ016出土遺物実測図４・・・・・　76
第70図　ＳＤｈ016出土遺物実測図５・・・・・　77
第71図　ＳＤｈ016出土遺物実測図６・・・・・　78
第72図　ＳＤｈ016出土遺物実測図７・・・・・　79
第73図　ＳＤｈ007・ｈ029・ｈ030・ｈ033・ｈ034・
　ｈ040・ｈ049・ｈ057・ｈ065・ｈ403・ｈ504
　断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・　80
第74図　ＳＤｈ033出土遺物実測図、ＳＤｈ034
　出土遺物実測図１・・・・・・・・・・・・　81
第75図　ＳＤｈ034出土遺物実測図２・・・・・　82
第76図　ＳＤｈ051出土遺物実測図・・・・・・　82

第77図　ＳＰｈ0610・ｈ0657・ｈ0937出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・83
第78図　遺構外出土遺物実測図・・・・・・・・・83
第79図　Ｈ地区古墳時代後期～古代主要遺構配置図・・・・・・・・・・・85～86
第80図　ＳＤｈ010断面図・・・・・・・・・・・87
第81図　ＳＤｈ010出土遺物実測図１・・・・・88
第82図　ＳＤｈ010出土遺物実測図２・・・・・89
第83図　ＳＤｈ006・ｈ044・ｈ045断面図・・・90
第84図　ＳＤｈ064・ｈ066・ｈ502断面図・・・91
第85図　ＳＤｈ006・ｈ064・ｈ076出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・92
第86図　Ｈ区古代末～中世主要遺構配置図・93～94
第87図　ＳＢｈ09・ｈ10・ｈ11平・断面図・・96
第88図　ＳＢｈ12・ｈ13・ｈ14平・断面図・・97
第89図　ＳＥｈ02平・立面図・・・・・・・・・98
第90図　ＳＫｈ018平・断面図、出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・99
第91図　ＳＫｈ013・ｈ020・ｈ029・ｈ030・ｈ031・ｈ032・ｈ035・ｈ037平・断面図・・・・100
第92図　ＳＫｈ039・ｈ040・ｈ041・ｈ042・ｈ043・ｈ059・ｈ060・ｈ071・ｈ074平・断面図・・・・・・・・・・・・・101
第93図　ＳＫｈ080・ｈ202・ｈ221・ｈ224・ｈ301・ｈ304・ｈ501平・断面図・・・・・・・・102
第94図　ＳＫｈ013・ｈ089・ｈ144・ｈ145・ｈ202出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・103
第95図　ＳＫｈ502・ｈ503・ｈ504・ｈ510・ｈ514平・断面図・・・・・・・・・・・・・・104
第96図　ＳＫｈ511・ｈ512平・断面図・・・・105
第97図　ＳＤｈ008・ｈ013・ｈ015・ｈ017・ｈ018・ｈ019・ｈ028・ｈ203・ｈ207・ｈ407・ｈ408断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・106
第98図　ＳＤｈ001・ｈ015・ｈ018・ｈ048・ｈ203・ｈ407出土遺物実測図・・・・・・・・・107
第99図　中世ＳＰ出土遺物実測図・・・・・・・108
第100図　Ｈ地区近世～近代主要遺構配置図・・・・・・・・・・111～112
第101図　ＳＫｈ022・ｈ053・ｈ058・ｈ065出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・113
第102図　ＳＫｈ057・ｈ058・ｈ075平・断面図・・・・・・・・・・・・・114
第103図　ＳＫｈ066・ｈ072・ｈ075・ｈ076出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・115
第104図　ＳＫｈ077平・立面図・・・・・・・116
第105図　ＳＫｈ077出土遺物実測図・・・・・117
第106図　ＳＫｈ072・ｈ073・ｈ079平・断面図・・・・・・・・・・・・・118
第107図　ＳＫｈ078平・立面図・・・・・・・119
第108図　ＳＫｈ085・ｈ086・ｈ097・ｈ119・ｈ120・ｈ121・ｈ133・ｈ137・ｈ138平・断面図・・・・・・・・・・・・・120
第109図　ＳＫｈ078・ｈ079・ｈ102・ｈ105出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・121
第110図　ＳＫｈ106出土遺物実測図・・・・・122
第111図　ＳＫｈ107・ｈ110出土遺物実測図・・123
第112図　ＳＫｈ116出土遺物実測図・・・・・124
第113図　ＳＫｈ119出土遺物実測図・・・・・124
第114図　ＳＫｈ123・ｈ126出土遺物実測図・・125
第115図　ＳＫｈ201・ｈ203・ｈ205・ｈ207・ｈ208・ｈ209・ｈ210・ｈ302平・断面図・・・・126
第116図　ＳＫｈ309・ｈ314・ｈ315・ｈ403平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・127
第117図　ＳＫｈ135・ｈ139・ｈ140・ｈ309・ｈ402・ｈ404・ｈ405出土遺物実測図・・・・・・128
第118図　ＳＫｈ391平・断面図、出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・129
第119図　ＳＫｈ404・ｈ405・ｈ406平・断面図・・・・・・・・・・・・・130
第120図　ＳＥｈ01平・立面図、出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・131
第121図　ＳＥｈ03出土遺物実測図・・・・・・132
第122図　ＳＸｈ14・ｈ31・ｈ33平・断面図・・133
第123図　ＳＤｈ004・ｈ036・ｈ038・ｈ048・ｈ067・ｈ201・ｈ202・ｈ203・ｈ204・ｈ209・ｈ414断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・134
第124図　ＳＤｈ038・ｈ202・ｈ411、ＳＰｈ0147出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・135
第125図　Ｌ地区弥生時代前期主要遺構配置図・・・・・・・・・・137～138
第126図　ＳＫｌ014平・断面図、出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・140
第127図　ＳＫｌ213・ｌ303平・断面図、出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・141
第128図　ＳＫｌ316・ＳＸｌ22平・断面図、出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・142
第129図　弥生時代後期～古墳時代前期主要遺構配置図・・・・・・・・・・・・・143～144
第130図　ＳＨｌ01平・断面図・・・・・・・・146
第131図　ＳＨｌ01出土遺物実測図・・・・・・147
第132図　ＳＨｌ02平・断面図１・・・・・・・148
第133図　ＳＨｌ02平・断面図２・・・・・・・149
第134図　ＳＨｌ02出土遺物実測図・・・・・・150
第135図　ＳＨｌ03平・断面図、出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・151
第136図　ＳＨｌ04平・断面図・・・・・・・・152
第137図　ＳＨｌ04出土遺物実測図・・・・・・153
第138図　ＳＨｌ05平・断面図・・・・・・・・155
第139図　ＳＨｌ05出土遺物実測図１・・・・・156
第140図　ＳＨｌ05出土遺物実測図２・・・・・157
第141図　ＳＨｌ06平・断面図・・・・・・・・158
第142図　ＳＨｌ06出土遺物実測図・・・・・・159
第143図　ＳＨｌ07平・断面図、出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・160

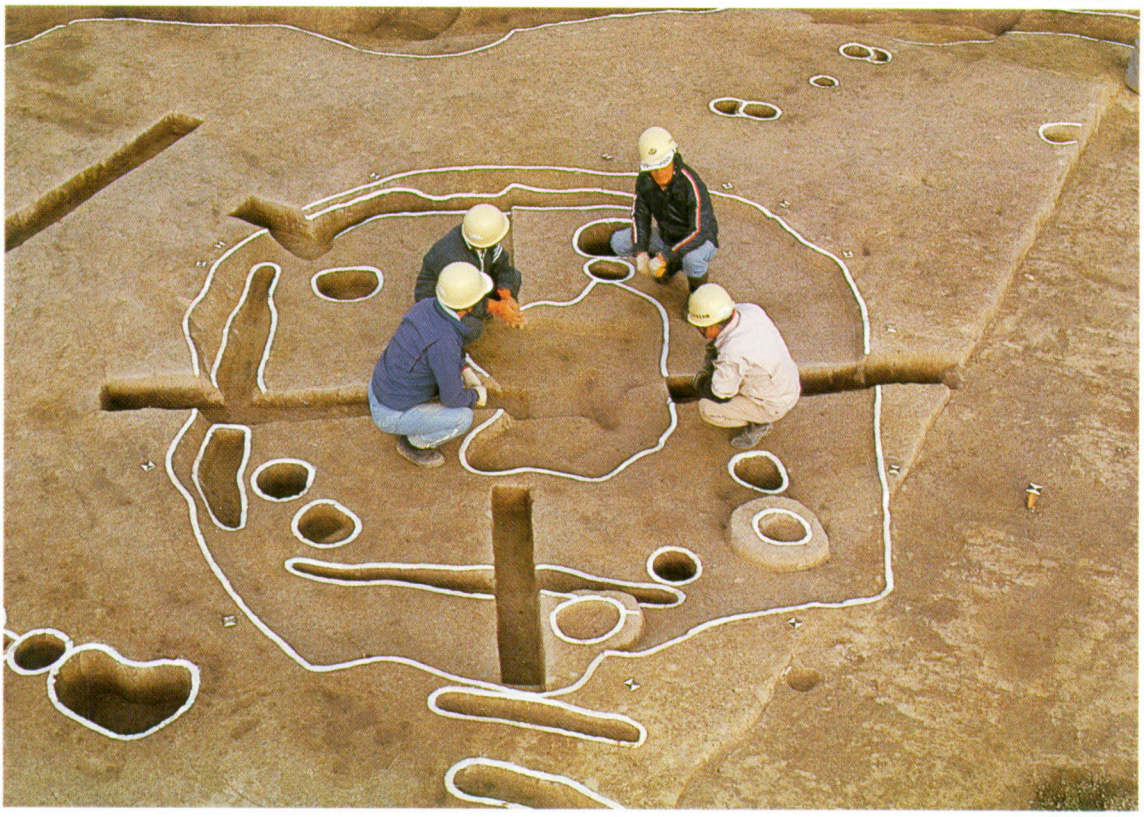
第144図　ＳＨ１08平・断面図・・・・・・・・・161
第145図　ＳＨ１08出土遺物実測図・・・・・・162
第146図　ＳＨ１09平・断面図・・・・・・・・・163
第147図　ＳＨ１09出土遺物実測図・・・・・・164
第148図　ＳＨ１10平・断面図・・・・・・・・・165
第149図　ＳＨ１10出土遺物実測図１・・・・・166
第150図　ＳＨ１10出土遺物実測図２・・・・・167
第151図　ＳＥ１01出土遺物実測図１・・・・・168
第152図　ＳＥ１01平・断面図・・・・・169～170
第153図　ＳＥ１01出土遺物実測図２・・・・・171
第154図　ＳＥ１01出土遺物実測図３・・・・・172
第155図　ＳＥ１01出土遺物実測図４・・・・・173
第156図　ＳＥ１01出土遺物実測図５・・・・・174
第157図　ＳＥ１01出土遺物実測図６・・・・・175
第158図　ＳＥ１01出土遺物実測図７・・・・・176
第159図　ＳＥ１01出土遺物実測図８・・・・・177
第160図　ＳＥ１01出土遺物実測図９・・・・・178
第161図　ＳＥ１01出土遺物実測図10・・・・・179
第162図　ＳＫ１026・１210・１221平・断面図、
１203・１207・１221出土遺物実測図・・180
第163図　ＳＫ１248出土遺物実測図・・・・・181
第164図　ＳＸ１01・１02平・断面図、ＳＸ１02
出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・182
第165図　ＳＸ１25平・断面図、ＳＸ１11・１25
出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・183
第166図　ＳＰ１0014・１2008・遺構外出土遺物
実測図・・・・・・・・・・・・・・・・184
第167図　古墳時代後期～古代主要遺構配置図
・・・・・・・・・・185～186
第168図　ＳＨ１11平・断面図、出土遺物実測図
・・・・・・・・・・・・・・187
第169図　ＳＢ１01・１02平・断面図、ＳＢ１01
出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・188
第170図　ＳＤ１003・１004・１037・１201・
１202断面図・・・・・・・・・・・・・189
第171図　ＳＤ１027・１037・１303・ＳＰ１4001・
１4021・１4029・遺構外出土遺物実測図・190
第172図　Ｌ地区古代末～中世主要遺構配置図
・・・・・・・・・・193～194
第173図　ＳＢ１03～１06平・断面図・・・・195
第174図　ＳＥ１02平・断面図、出土遺物実測図
・・・・・・・・・・・・・・196
第175図　ＳＫ１007・１008・１301平・断面図・
・・・・・・・・・・・・・・197
第176図　ＳＫ１224・１302平・断面図・・・・198
第177図　ＳＤ１002平・断面図・・・・・・・199
第178図　ＳＤ１002出土遺物実測図１・・・・・201
第179図　ＳＤ１002出土遺物実測図２・・・・・202
第180図　ＳＤ１002出土遺物実測図３・・・・・203
第181図　ＳＤ１002出土遺物実測図４・・・・・204
第182図　ＳＤ１002出土遺物実測図５・・・・・205
第183図　ＳＤ１301・１302・１307・１308・
１309・１312断面図・・・・・・・・・・206
第184図　ＳＤ１308出土遺物実測図・・・・・207
第185図　ＳＤ１034・１301・１302・１305
出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・208
第186図　ＳＫ１010・１301・ＳＰ１0095・
１0097・１4002・１4006・１4007・１4008
出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・209
第187図　ＳＫ１005・１201・１202・１205
平・断面図・・・・・・・・・・・・・・211
第188図　ＳＫ１206・１211平・断面図、
ＳＫ１009・１017出土遺物実測図・・・・212
第189図　軒平瓦拓影図・・・・・・・・・・・214
第190図　軒丸瓦・丸瓦・垂木瓦拓影図・・・・215
第191図　試料一覧図・・・・・・・・・・・・218
第192図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)
・・・・・・・・・・・・・225
第193図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)
・・・・・・・・・・・・・226
第194図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(3)
・・・・・・・・・・・・・227
第195図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(4)
・・・・・・・・・・・・・228
第196図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(5)
・・・・・・・・・・・・・229
第197図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(6)
・・・・・・・・・・・・・230
第198図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(7)
・・・・・・・・・・・・・231
第199図　孔隙・砂粒・基質の割合・・・・・・232
第200図　胎土中の砂の粒径組成(1)・・・・・・233
第201図　胎土中の砂の粒径組成(2)・・・・・・234
第202図　特徴的な元素の割合・・・・・・・・236
第203図　空港跡地遺跡弥生時代後期中葉～古墳時代
前期初頭主要遺構配置図・・・・・・・・243

表目次

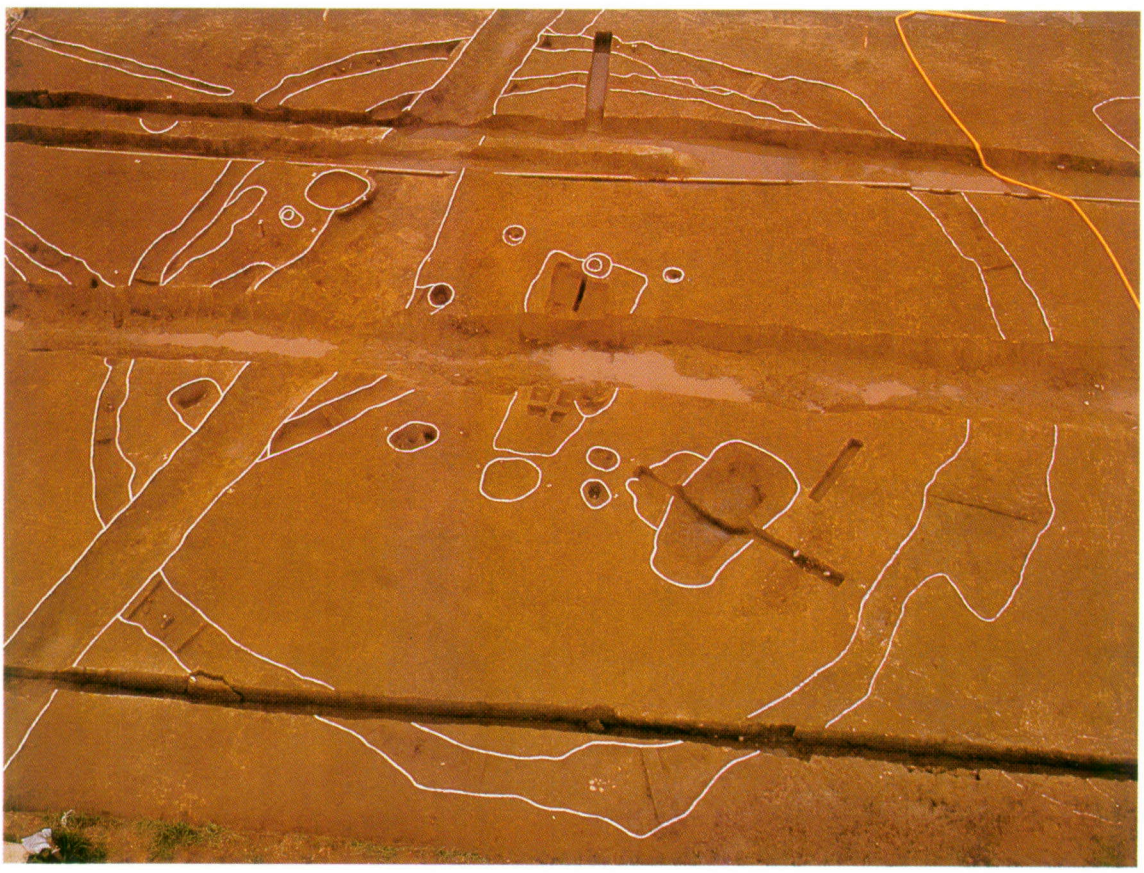
第１表　空港跡地遺跡Ｈ・Ｌ地区発掘調査工程表
・・・・・・・・・・・・・・3
第２表　空港跡地遺跡報告地区別報告書一覧表・・5
第３表　14～15世紀における高松平野出土土器・
陶磁器組成表・・・・・・・・・・・・・200
第４表　胎土分析試料一覧表・・・・・・・・・217
第５表　薄片観察結果(1)・・・・・・・・・・221
第６表　薄片観察結果(2)・・・・・・・・・・222
第７表　薄片観察結果(3)・・・・・・・・・・223
第８表　薄片観察結果(4)・・・・・・・・・・224
第９表　蛍光Ｘ線分析結果（化学組成）・・・・・235
第10表　胎土分類結果・・・・・・・・・・・・237

空港跡地遺跡と高松平野

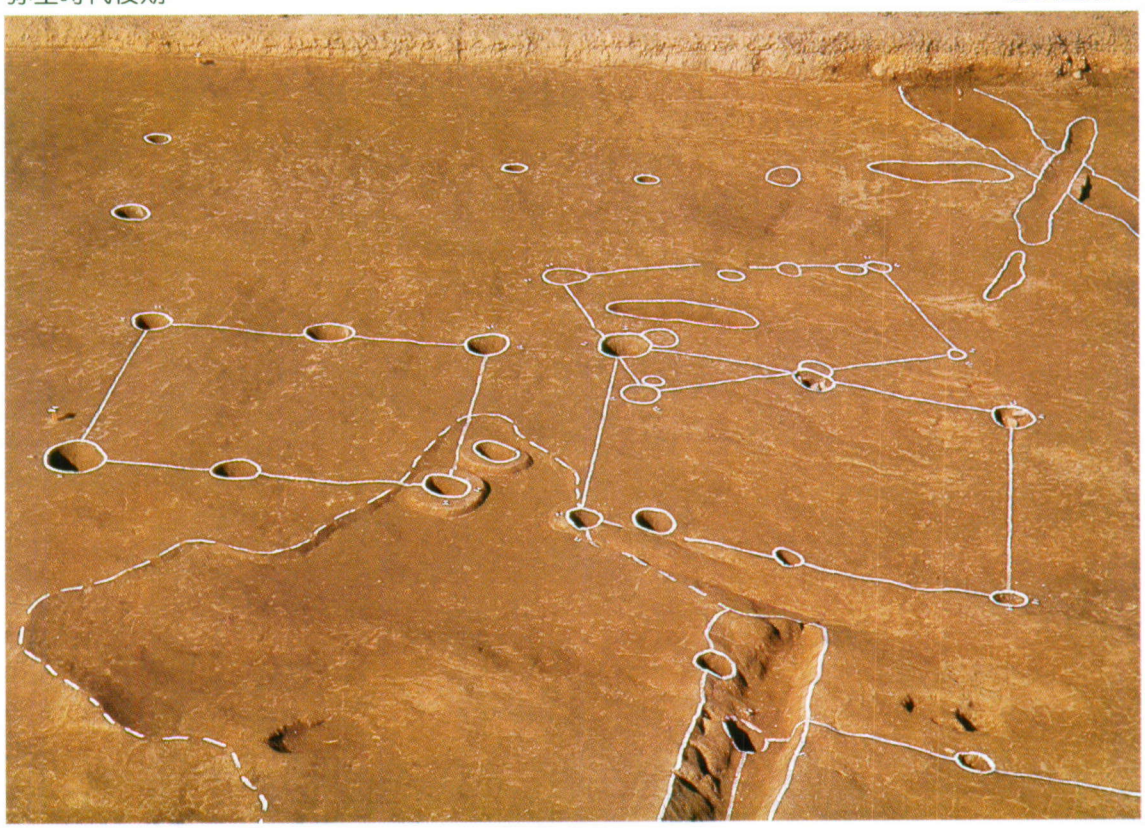
空港跡地遺跡付近空中写真



竪穴住居　ＳＨｈ01



竪穴住居　ＳＨｈ02



掘立柱建物群

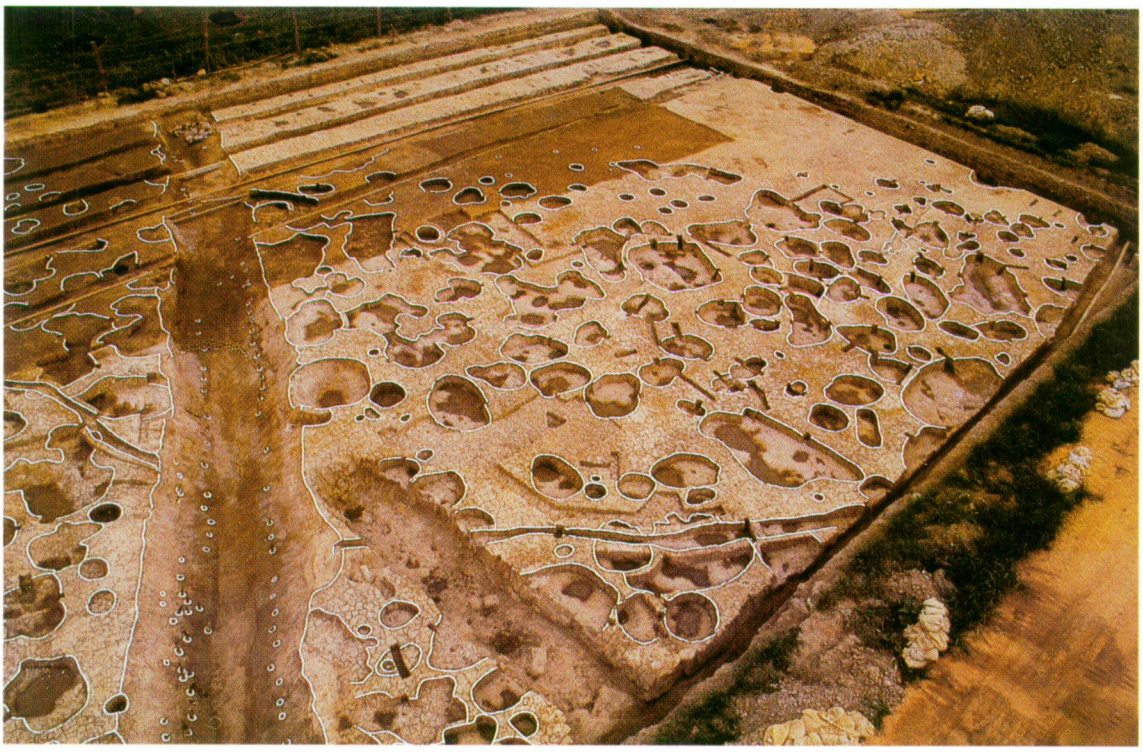
掘立柱建物　ＳＢｈ01

出水ＳＸｈ01

出水と水路

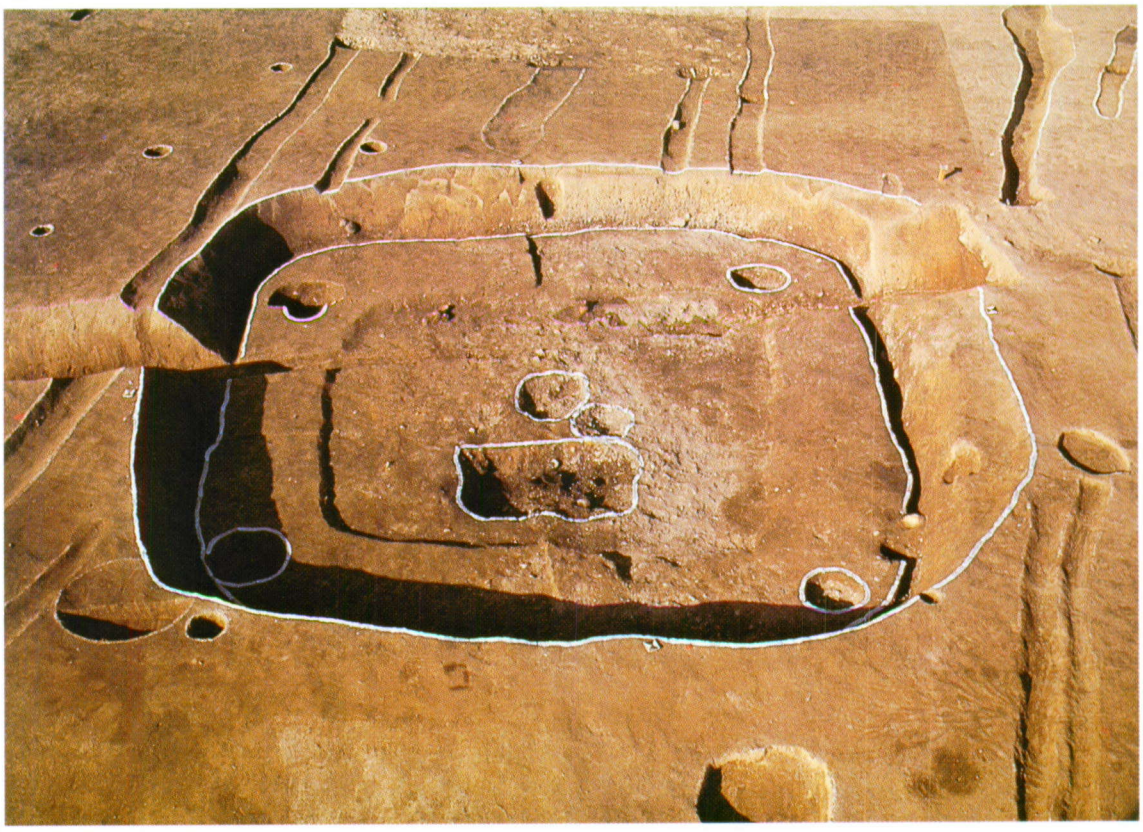
井戸ＳＥ１01

井戸ＳＥ１01出土土器



粘土採掘抗（『空港跡地遺跡Ⅵ』参照）

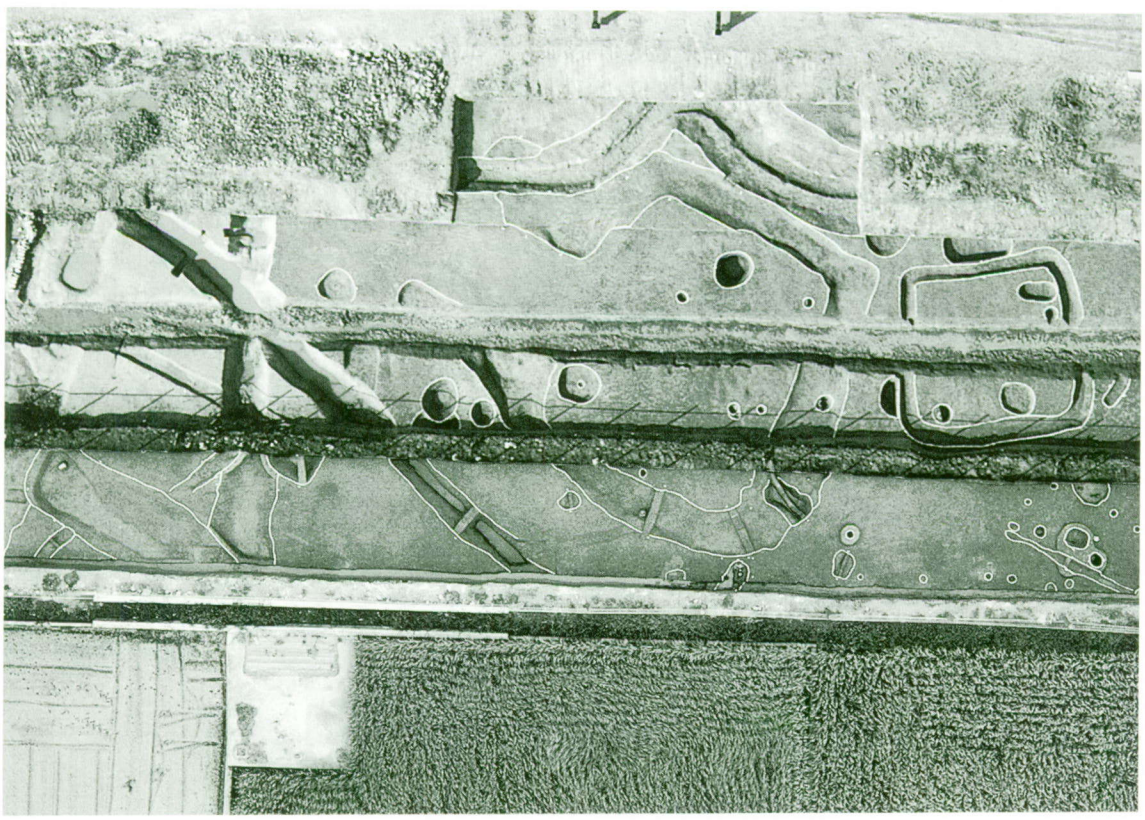
周溝墓の可能性のある遺構ＳＤｋ06（『空港跡地遺跡（Ｋ地区）』参照）



竪穴住居ＳＨＩ01

竪穴住居ＳＨＩ10

ＳＴａ05出土土器（『空港跡地遺跡Ⅴ』参照）



前方後方墳ＳＴａ05（『空港跡地遺跡Ⅴ』参照）

第１章　調査の経緯と経過

第１節　発掘調査の経緯と経過

空港跡地整備事業に伴う空港跡地遺跡の発掘調査に至る経緯・経過は『空港跡地遺跡Ⅰ』で詳述されているため割愛し、本節では、本書収録地区における発掘調査の体制、工程及び、普及・啓発活動の記録のみを掲載することとする。

１.発掘調査の体制

平成３年度

香川県教育委員会文化行政課

総　　括：課　長　中村仁　　主　幹　菅原良弘
　　課長補佐　小原克己（6.1～）
総　　務：係　長　宮内憲生　　主任主事　横田秀幸（～5.31）
　　主　事　桜木新士（6.1～）・石川恵三子
埋蔵文化財：係　長　藤好史郎　　主任技師　岩橋孝
　　技　師　北山健一郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総　　括：所　長　松本豊胤　　次　長　安藤道雄
総　　務：係　長　加藤正司（～5.31）・土井茂樹（6.1～）・今田修（6.1～）
　　主　査　山地修（～5.31）　　主任主事　斉藤正好
調　　査：参　事　篠丸博　　係　長　廣瀬常雄
　　主任技師　真鍋嘉宏・植松邦浩・西岡達哉・真下拓哉
　　技　師　　山本主悦・森格也・山下平重・佐藤竜馬
　　調査技術員　高橋佳緒里・間瀬香・白川悦世

平成４年度

香川県教育委員会文化行政課

総　　括：課　長　中村仁　　主　幹　菅原良弘
　　課長補佐　小原克己
総　　務：係　長　宮内憲生（～5.31）・源田和幸（6.1～）
　　主　事　桜木新士・石川恵三子
埋蔵文化財：係　長　藤好史郎　　主任技師　國木健司
　　技　師　北山健一郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総　　括：所　長　松本豊胤　　次　長　市原敏則
総　　務：係　長　土井茂樹・今田修　　主任主事　斉藤正好

第１図　空港跡地遺跡位置図１

第２図　空港跡地遺跡位置図２（S=1/100,000）

地区	面積(㎡)	調査区	平成3年(1991年)度							平成4年(1992年)度												平成5年(1993年)度				
			7	8	9	10	11	12	1	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	7	8	9	10	11
H	19,375	Ⅲ－3	佐藤																							
		Ⅲ－10				西岡																				
		Ⅲ－15								佐藤																
		Ⅲ－16								佐藤																
		Ⅲ－17											佐藤													
		Ⅲ－18											佐藤													
		Ⅲ－19													佐藤											
		Ⅲ－20													佐藤											
		Ⅲ－40																	佐藤							
		Ⅲ－49																				山元				
		Ⅲ－50																						山元		
L	6,200	Ⅰ－5			森																					
		Ⅰ－6				山下																				
		Ⅰ－7				森																				
		Ⅰ－12																	蔵本							

第１表　空港跡地遺跡Ｈ・Ｌ地区発掘調査工程表

調　　査：　参　事　糸目末夫　　係　長　大山真充
文化財専門員　中川芳和　　技　師　濱野圭司・蔵本晋司・佐藤竜馬
調査技術員　井原靖子・安藤くに子

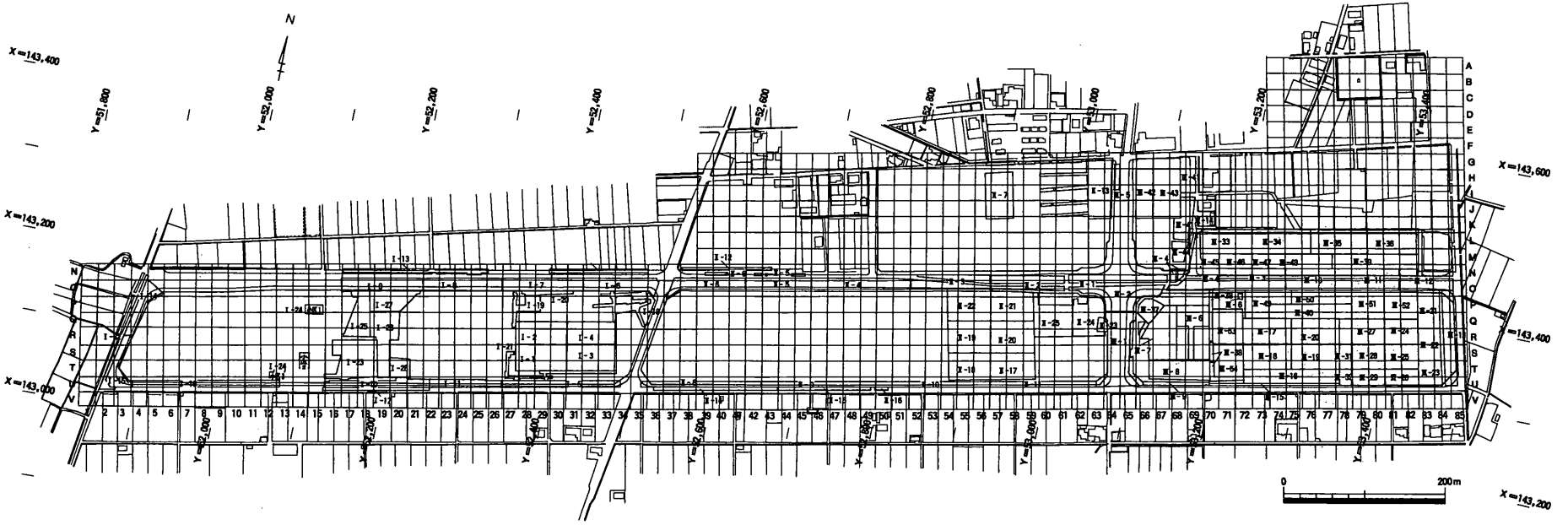
平成５年度

香川県教育委員会文化行政課

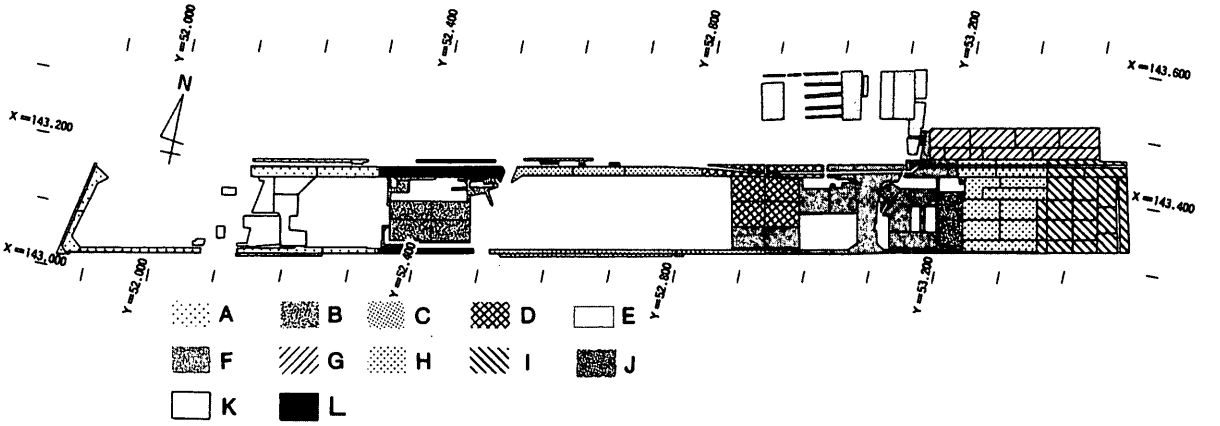
総　　括：　課　長　中村仁　　主　幹　菅原良弘
課長補佐　小原克己
総　　務：　係　長　源田和幸（6.1～）
主　事　桜木新士・石川恵三子（～5.31）・藤原和子（6.1～）
埋蔵文化財：係　長　藤好史郎　　主任技師　國木健司
技　師　森下英治

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総　　括：　所　長　松本豊胤　　次　長　真鍋隆幸
総　　務：　係　長　土井茂樹・今田修（～5.31）・上林和明（6.1～）
主任主事　斉藤正好（～5.31）・西村厚二（6.1～）
調　　査：　参　事　糸目末夫　　係　長　大山真充
主任技師　山元素子
技　師　山本主悦　　調査技術員　森澤千尋



第３図　空港跡地遺跡調査区割図（S=1/8000）



第４図　空港跡地遺跡報告地区割図（S=1/12,000）

報告地区名	面積（㎡）	報告書名
A	12,200	木下晴一編 2002『空港跡地整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　空港跡地遺跡Ⅴ』
B	9,833	（2006 年度刊行予定）
C	11,890	西岡達哉編 1996『空港跡地整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　空港跡地遺跡Ⅰ』
D	12,567	西岡達哉編 2004『空港跡地整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告第７冊　空港跡地遺跡Ⅶ』（近刊）
E	14,599	蔵本晋司編 1997『空港跡地整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　空港跡地遺跡Ⅱ』
F	27,836	佐藤竜馬編 2000『空港跡地整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ』
G	13,280	蔵本晋司・真鍋昌宏編 2003『空港跡地整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告第６冊　空港跡地遺跡Ⅵ』
H	19,375	乗松真也編 2004『空港跡地整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告第８冊　空港跡地遺跡Ⅷ』（本書）
I	20,205	森下友子編 1998『空港跡地整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告第３冊　空港跡地遺跡Ⅲ』
J	2,780	片桐孝浩編 1997『四国工業技術研究所増築に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告　空港跡地遺跡（Ｊ地区）』
K	12,200	山元素子編 2003『インテリジェントパーク整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告　空港跡地遺跡（Ｋ地区）』
L	6,200	乗松真也編 2004『空港跡地整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告第８冊　空港跡地遺跡Ⅷ』（本書）

第２表　空港跡地遺跡報告地区別報告書一覧表

2．普及・啓発活動

(1) はじめに

空港跡地遺跡の発掘調査現場では、普及・啓発活動として発掘調査体験学習や現地説明会が行われた。ここでは、本書収録地区で行われた普及・啓発活動について、『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成４年度』に記載されたものを語句など一部を修正して、再掲載することとする。なお、発掘調査体験学習については、市村ほか 1993 に詳細な経過の記録と将来的な課題が提示されている。

(2) 発掘調査体験学習

当財団の普及・啓発活動の一環として、空港跡地遺跡で行われた発掘体験学習の概要を報告する。発掘体験学習は、空港跡地遺跡の位置する高松市林町を校区とする高松市立林小学校の依頼により、当財団が計画・実施した。計画するにあたり、学習の目標を①遺跡発掘がどのようなものか理解する、②自らの手で郷土の歴史を復元する、の２つにおいた。参加対象児童は、現場の受け入れ体制に制限があったため、正課クラブの郷土史クラブ（５・６年生 13 名）の児童となった。この目標にもとづき、事前学習を２回設定し、その後に発掘体験学習を実施した。その概要は以下のとおりである。

○　第１回事前学習（平成４〈1992〉年７月７日　約 60 分）

①　遺跡検出

②の写真を見て、気付いたことを発表する。

※期待する答え・・・・・色が違うところがある。形が違う。

②　色が違うところが昔の人の生活の跡（＝遺構）であることを知る。

③　なぜ色が違うところがあるのか考える。

※土層の図を見せながら理解させる。

④　なぜ色々な形があるのか考える。

※竪穴住居・掘立柱健物・溝などの遺構とその復元図を見せながら説明する。

⑤　広い範囲での遺構の写真（川津一ノ又遺跡Ⅳ区）とその復元図を見て、遺跡発掘によって、その地域の昔の人の生活の様子がわかることを理解する。

⑥　現場に出て、遺構を見つけ、その遺構が何なのかを考える。

○　第２回事前学習（平成４〈1992〉年７月８日　約 70 分）

①　遺構の時代を知るには、土器が重要な役割をもっていることを知る。

②　同一種類の土器（椀）を古い順に並べる。

③　現代の茶椀と古い土器（弥生土器）を比較し、どこが違うのかを考える。

※期待する答え・・・・・素材・形・焼き・模様

④　違いをもとにしながら、土器を順番に並べる。

⑤　年表で整理をする。

⑥　土器の種類と用途を知る。

⑦　弥生土器の作り方を知る。

⑧　弥生土器を作る。

○　発掘体験学習（平成４〈1992〉年７月29日）

①　１日の活動内容を知る。

②　イメージビデオを見て、遺構掘削の方法を知る。(9:00 ～ 9:20)

③　発掘を行う。(9:20 ～ 12:00　途中20分の休憩を２回入れる)

・道具を準備して、安全に関する注意を受ける。

・現場へ出て、遺構を検出する。

・各班で遺構を掘る。

④　遺物洗浄作業を行う。(13:00 ～ 13:50)

・洗いながら遺物の検討をする。

⑤　遺構と遺物のまとめをする。(14:00 ～ 14:30)

・現場で説明を聞き、遺構の性格と時代を理解する。

⑥　各自が学習の成果をまとめる。(14:30 ～ 15:00)

今回の体験学習は、児童ばかりでなくわれわれ職員にとっても初めてのであり、準備の時には戸惑うことが多かった。特に学習成果をあげるのに適した遺構を探すのは、工程の都合などもあって容易なことではなく、結局十分な発掘体験を得られずに終わった感がある。しかし事前学習の成果もあわせれば、発掘調査についてある程度の理解が得られたと言ってよいだろう。教育現場への普及・啓発活動のあり方を考える上で、よい資料が得られたと思われる。

(3)　現地説明会

平成４（1992）年８月30日に、Ⅲ―15 ～ 18区を会場として現地説明会が開催された。８月末の厳しい残暑にもかかわらず、148名の参加者が空港跡地遺跡に集まった。今回の現地説明会では主として弥生時代の遺構を中心に据え、「人と水」「人と墓」と題して、出水・井戸・溝や円形周溝墓（註１）などを紹介した。今回の現地説明会は「よくわかる」説明会を目標として、準備を進めていった。まず、現地説明会資料の遺構・遺物の実測図は最小限必要なもののみ掲載し、代わりに想像復元図を多用した。また説明文も平易になるよう心がけ、中学生が理解できる程度の内容を考えて作成した。そして当日の説明内容については担当者間で十分な検討がなされ、その話し方についても事前に練習を行い本番に備えた。当日は、当財団の参事の挨拶に始まり、遺跡概要の説明、遺構検出のデモンストレーション、各遺構の説明、出土遺物の説明の順に進められた。炎天下で１時間を超える説明が続いたが、参加者は思い思いにメモをとり、写真を撮りながら、説明を聞き、時には質問も飛び出した。ただし出水や井戸のような小さな遺構の周りを、100名以上の人々が一度に取り囲んだため、後方で聞いていた参加者には説明している部分が分からず、遺構の説明を十分には理解してもらえない部分があったのは残念である。全体説明の後に、参加者をいくつかの小グループに分けて遺構の説明を行うといった見学方法の工夫が今後必要であろう。

また、現地説明会に関するアンケートを、参加者全員を対象に実施した。収数は71部であり、全参加者の約47％から回答が得られた。集計結果については以下のとおりである。

①　見学者の性別・年齢別構成

［男性］50才代以上が多く75％（30名）を占める。最高年令は85歳。40歳代と20歳代が０％であり、アンケート未回収者の中にこの年齢層が含まれていたとしても、極めてわ

ずかな存在といえるだろう。

［女性］男性の年齢構成とほぼ対照的なあり方を示す。50歳代以上は32％（９名）にとどまり、10歳代から60歳代までほぼ均等な人数構成となっている。10歳代が最も多く、25％（７名）であった。

② 見学者の住所

住所録に記名した148名のうち、最も多かったのが高松市内（108名：72.9％）であった。遺跡所在地の林町は21名であり、高松市内の19％を占めた。

③ 周知について

「本日の現地説明会を何で知りましたか」という設問に対して、最も多かったのが新聞（59.7％）であった。説明会当日までに新聞３紙に説明会の周知が掲載されたため、その効果が大きかったようである。また、テレビ・ラジオがこれに次いでおり（12.9％）、報道機関による周知が今回の場合最も効果的であったようである。なお地元自治会へ事前に周知したが、その回覧によって見学に来たと回答したのはわずか１名（1.2％）にとどまった。「少し早めにローカルニュースか有線放送等でお知らせ下さればと思います」（林町・62歳男性）という指摘もあり、地元への周知方法をよりきめ細かにする必要性を感じた。

④ 現地説明会資料について

内容と図面について設問したところ、内容については「適当である」との回答が73.2％（52名）に達しており、当初の狙いどおりの効果が一応は出たといえる。しかし、「難しい」と回答した人も4.2％（３名：うち小学生２名、71歳１名）おり、さらに内容やレイアウトの工夫を行う必要があるだろう。

図面に関しては、「見やすい」との回答が82.8％（58名）であったが、やはり「見づらい」と答えた人もおり（１名：1.4％）、さらに見やすく分かりやすい資料を作成するよう努力しなければなるまい。

⑤ 説明について説明内容と話し方について設問した。

内容について「難しい」との回答はなく、「適当である」との回答が最も多い88.6％（58名）であった。説明内容について担当者間で事前に検討したことが表れたのであろうか。

話し方は「よく分かる」が77.7％（56名）と最も多く、「分かりづらい」はわずか１名（1.3％）であり、事前準備がそれなりの効果をあげたといえるだろう。

上記の項目以外にも、自由意見として「質問の時間があればよかった」（29歳・女性）、「この遺跡を数カ所後世のために保存しておいてほしい」（69歳・男性）、「報告書を一般の人にも手に入るようにして下さい」（56歳・男性）などの意見をはじめ、説明の内容に関する不備な点もいくつか指摘していただいた。以上のアンケート結果を、今後の現地説明会に反映しつつ、埋蔵文化財と地域の人々を結ぶ接点として、現地説明会がより充実したものとなるように努力していきたい。

註１　発掘調査時には円形周溝墓としたが、本報告では竪穴住居ＳＨｈ 02として報告している。

第２節　整理作業の経緯

１．整理作業の経緯

本報告書では、Ⅲ－３・Ⅲ－10・Ⅲ－15・Ⅲ－16・Ⅲ－17・Ⅲ－18・Ⅲ－19・Ⅲ－20・Ⅲ－40・Ⅲ－49・Ⅲ－50をＨ地区（19,375㎡）、Ⅰ－５・Ⅰ－６・Ⅰ－７・Ⅰ－12をＬ地区（6,200㎡）として報告する。

空港跡地遺跡の報告書作成業務開始段階（平成７年度）でＨ地区に含まれていたⅢ－11・Ⅲ－12（計6,000㎡）については、Ⅰ地区の一部として『空港跡地遺跡Ⅲ』で報告済みである。また、当初Ｂ地区としていた部分（16,533㎡）については、基盤整備部分（Ⅰ－５・Ⅰ－６・Ⅰ－７・Ⅰ－12　計6,200㎡）と県立図書館・文書館部分（Ⅰ－１・Ⅰ－２・Ⅰ－３・Ⅰ－４・Ⅰ－18・Ⅰ－19・Ⅰ－20・Ⅰ－21　計9,833㎡）に分割して報告書を作成することとなったため、基盤整備部分をＢ地区から切り離し、Ｌ地区として本報告書で報告することとなった。

２．整理作業の体制

平成15年度

香川県教育委員会文化行政課

総　　括：　課　長　北原和利　　課長補佐　森岡修

総務・芸術文化グループ：主　任　香川浩章　　主　査　須崎陽子　　主　事　八木秀憲

文化財グループ：副主幹　大山真充　　主　任　片桐孝浩　　文化財専門員　佐藤竜馬

主任技師　松本和彦

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総　　括：　所　長　中村仁　　次　長　渡部明夫

総 務 係：　副主幹　野保昌弘　　係　長　多田敏弘　　主　査　塩崎かおり

主任主事　田中千晶

調 査 係：　主任文化財専門員　真鍋昌宏　　主任技師　乗松真也

整理作業員　西桶右子・三谷和子・岡野雅子・佐々木博子・北濱敦子・渡辺美穂・山田昌代・境敦子

第２章　発掘調査の記録

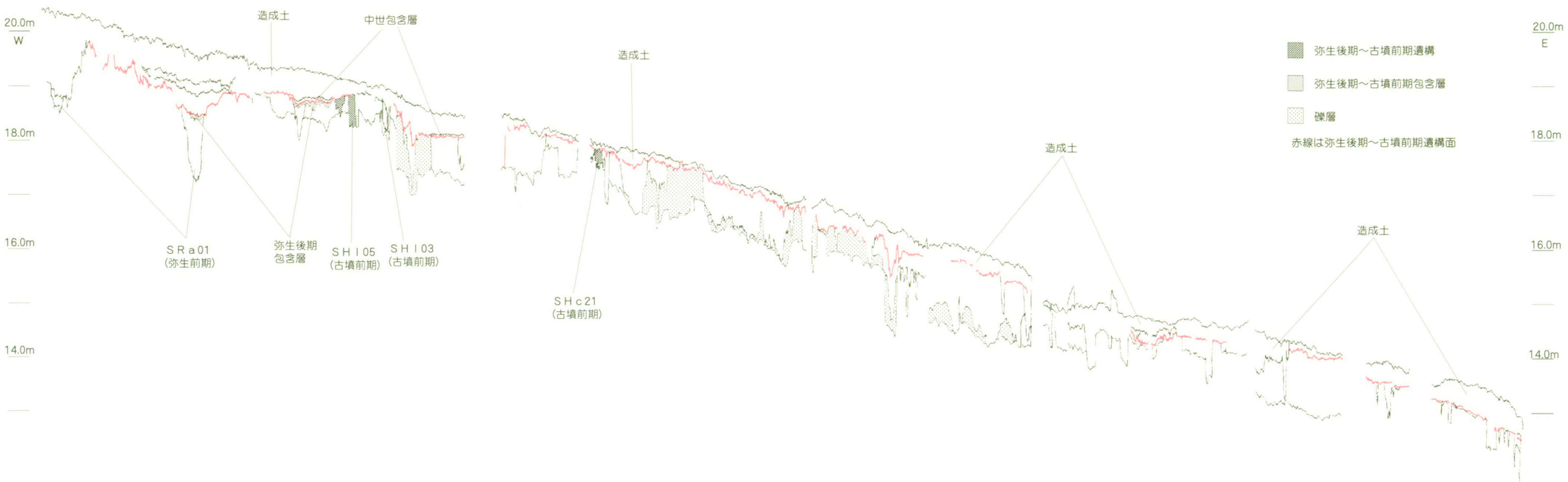
第１節　地形と層序

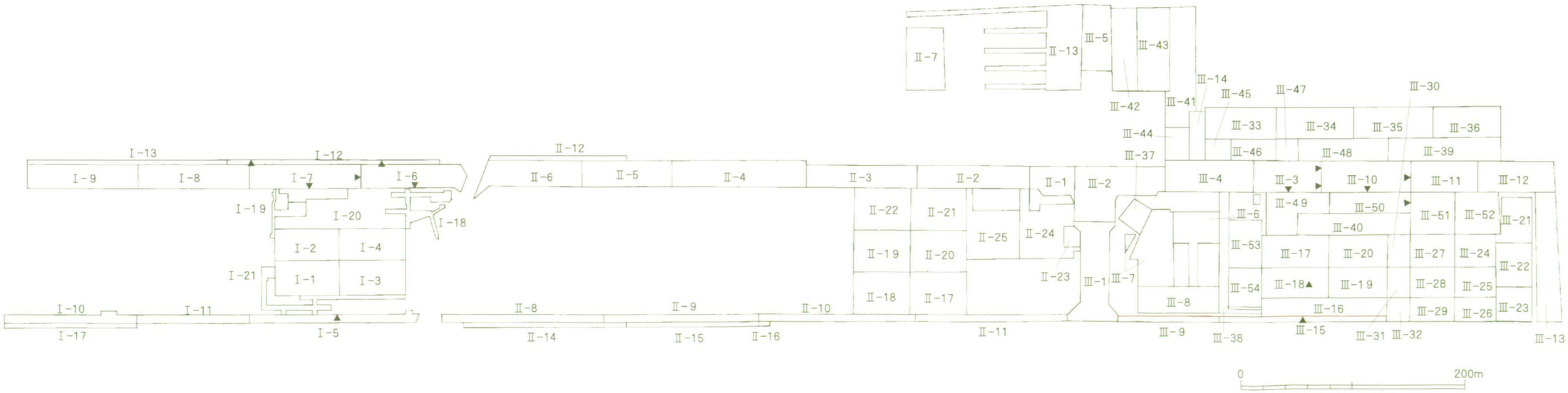
空港跡地遺跡内の層序について報告書で対象地区を中心に報告されているが、遺跡内の大局的な地形・層序についての記述は認められない。そこで本節では、「北辺道路」と称されるⅠ－９・Ⅰ－８・Ⅰ－７・Ⅰ－６・Ⅱ－６・Ⅱ－５・Ⅱ－４・Ⅱ－３・Ⅱ－２・Ⅱ－１・Ⅲ－４・Ⅲ－３・Ⅲ－10・Ⅲ－11・Ⅲ－12区の壁面土層断面図を繋げて作成した、遺跡内を東西に横断する土層断面図（第５図）から遺跡内の地形について概観し、その後近世の絵図・近代の地籍図から旧地形を推定する。さらに、それと関連してＨ地区、Ｌ地区の層序について触れることとする。

空港跡地遺跡とその周辺地域は、1944（昭和19）年の旧陸軍飛行場建設に伴って大規模な整地が実施されている。しかし調査地内においては、整地層の下層に旧耕作土が認められることから、飛行場建設に際してはほとんど削平されていない。遺構の大部分は旧耕作土直下で検出され、遺構検出面は、基本的には遺跡西部の標高が高く、東方に向かうに従って緩やかに低くなり、遺跡東西端で約７ｍの標高差がある。ただし、遺構検出面は概ね黄色系のシルトで構成されているものの、Ⅰ－６区やⅡ－５・４区のように礫層が認められる箇所もあり、遺跡内で東端から西端にかけて緩やかな勾配がある、といった単純なものではない。なお、土層断面図からは判断できなかったが、Ⅰ－９・８区でも遺構検出面で礫層が確認できるようである。

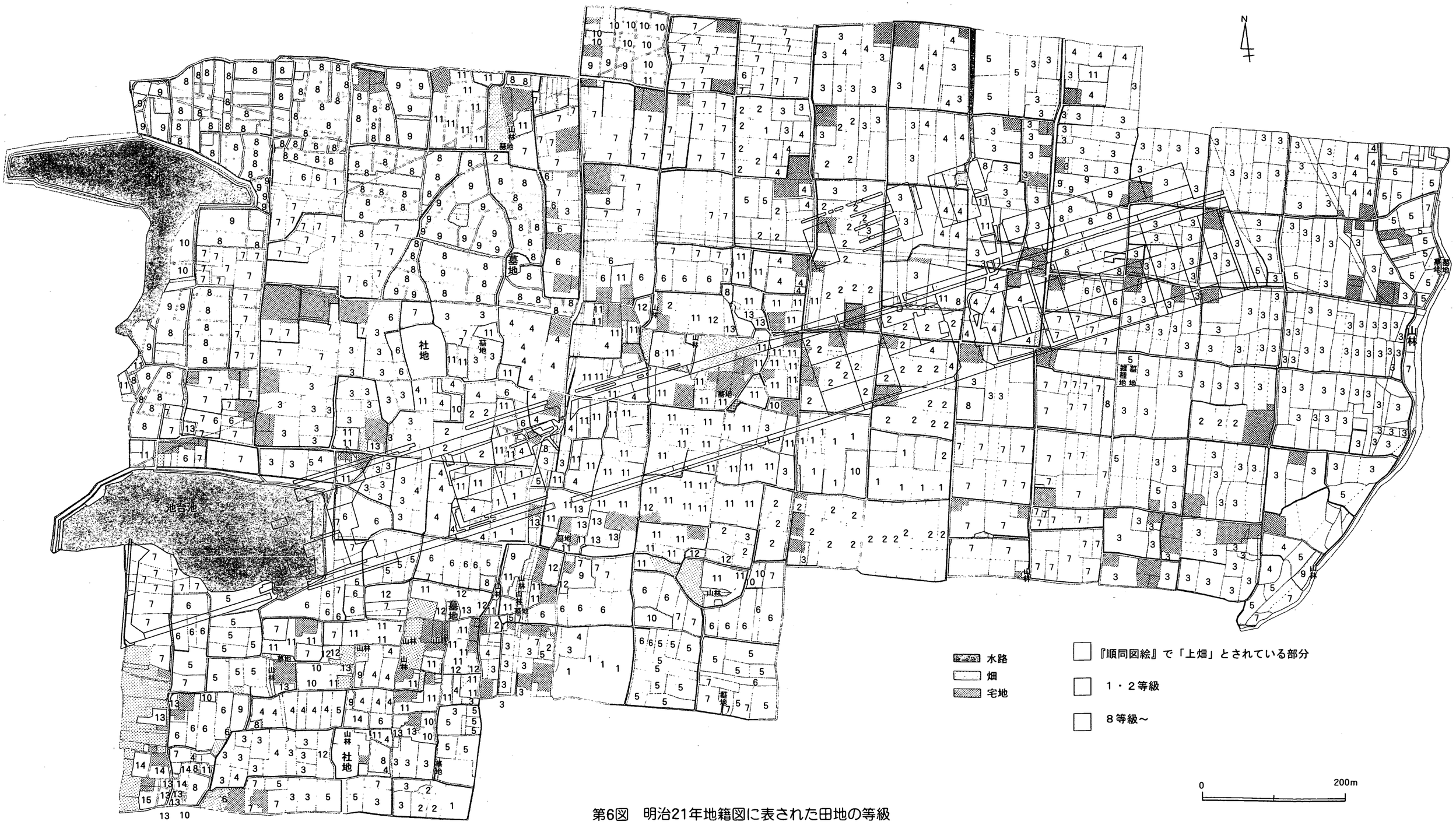
第６図は明治21年作成の地籍図に記載された田地の等級を示したものである。田地の等級は「１」が最上と思われ、おそらく収穫高、もしくは米の品質を表現していると考えられる。そうであれば、表記されている数字は土地の起伏を暗示している可能性があり得るため、空港跡地遺跡と周辺地域の田地等級を検討した。等級１・２の部分はⅠ－３～５・Ⅰ－７区、Ⅱ－２・Ⅱ－３・Ⅱ－10・Ⅱ－11・Ⅱ－17～22・Ⅱ－24・Ⅱ－25区の２ヶ所に分布し、概ねこの部分が高操な土地条件で高い標高を有し、ここから西・北西・北に向かって下ることがわかる。

次に、11等級が広範囲に認められる部分（Ⅱ－４～６・Ⅱ－８～10・Ⅱ－12・Ⅱ－14～16区）について検討する。第７図は佐藤2000ａで提示された図を一部改変（空港跡地遺跡の位置、弥生時代後期中葉の主要遺構分布を追加）したものである。この図は近世の『順道図絵』に表現された土地等級をもとに、地形の高い部分と低い部分とを想定したものである。『順道図絵』では、田地は「上々田」から「下々田」の５等級、畑地は「上畑」から「下々畑」の４等級に分類され、「上畑」が最も高操な土地条件を有し、下々田が湿潤で低い土地であると想定されている。図中の黒い部分は「上畑」、網掛け部分は「下々田」を示している（佐藤2000ａ）。この図と第６図を見比べると、第６図の11等級が広がる一帯（網掛けが最も薄い部分）は、第７図の「上畑」と一致することがわかる。これは、標高が高いために、近世には取水が不可能で畑地とされていたものが、近代の段階で、灌漑技術の向上や灌漑網の整備により田地として利用が可能となったが、その取水が限定的であったため田地の等級としては低いものに留まったためと考えられる。つまり、第６図の11等級部分は、周辺の１・２等級よりもさらに標高が高い部分として評価することが可能で、それを裏づけるように土層断面図に見られる礫層が盛り上がる部分と一致する。

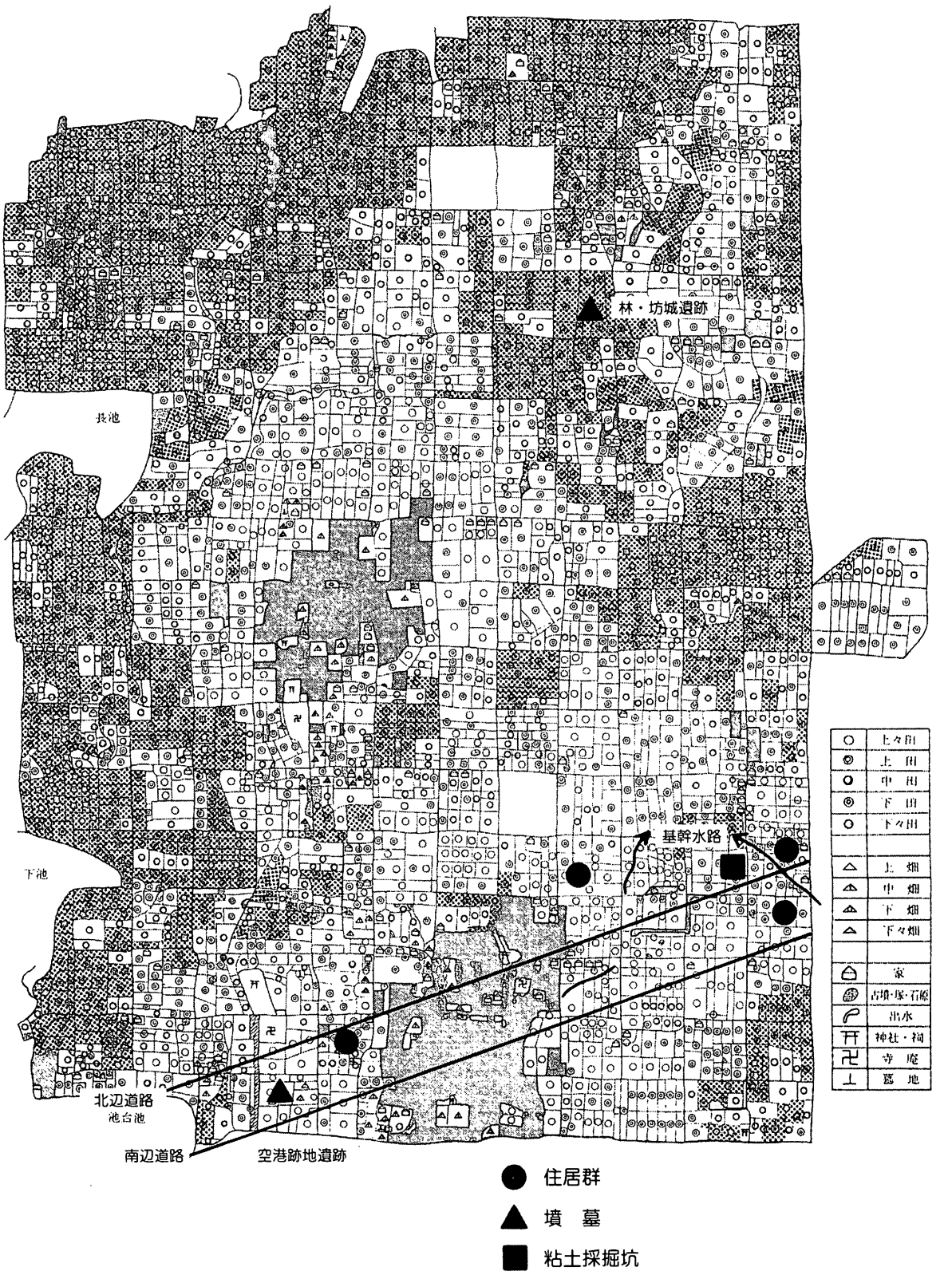




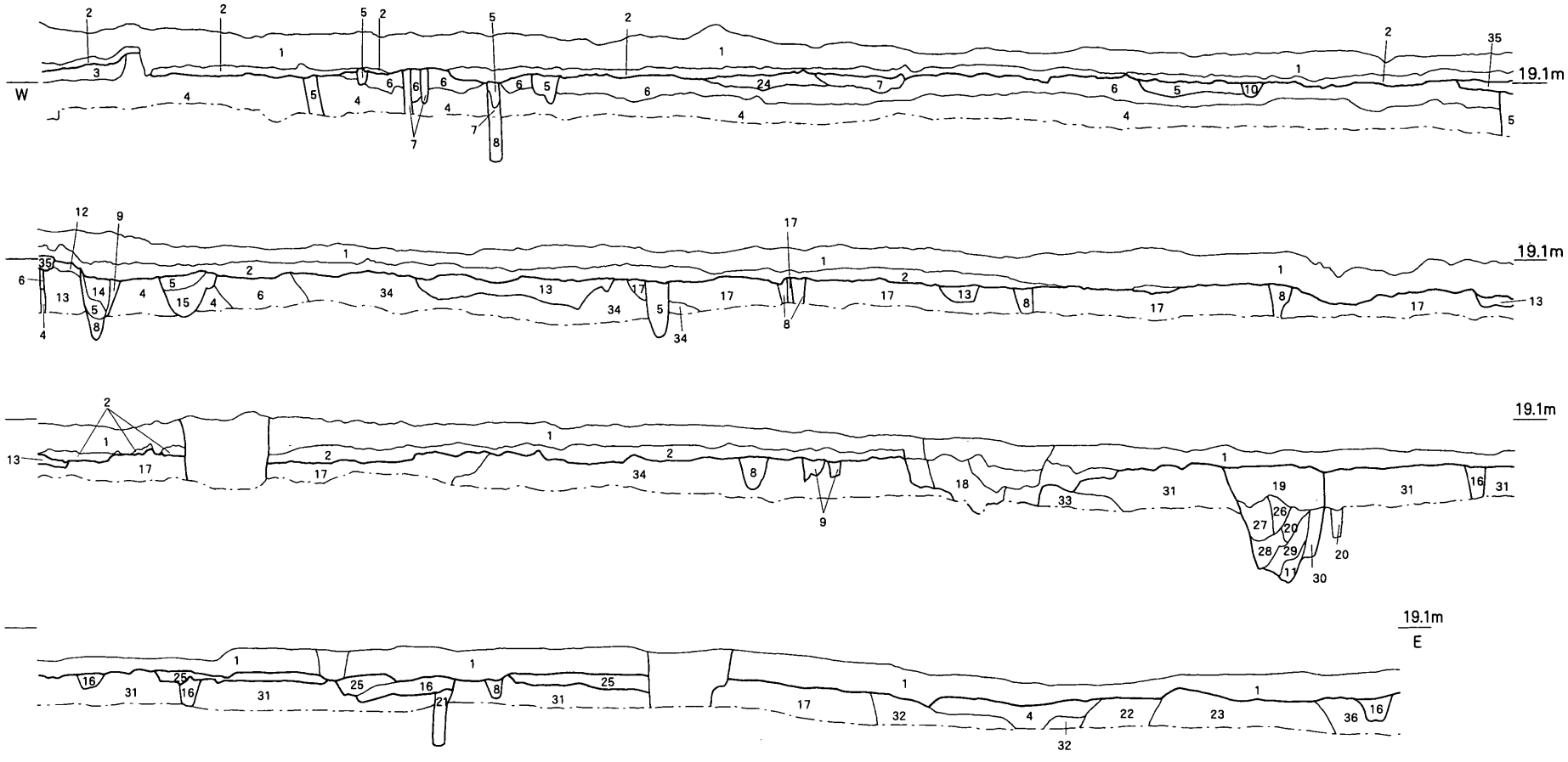
第5図　空港跡地遺跡東西方向土層断面略図、Ｈ・Ｌ地区土層断面位置図(S=1/4,000・1/80)



第6図　明治21年地籍図に表された田地の等級



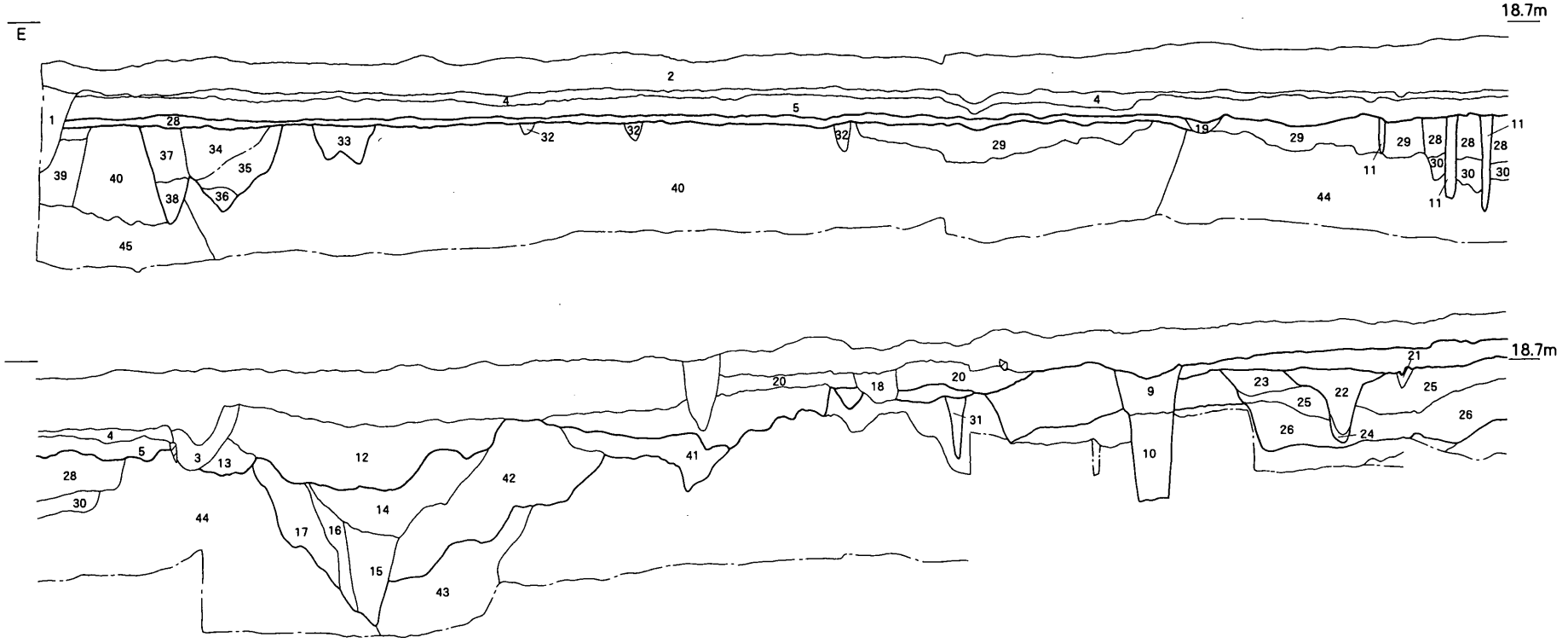
第７図　『順道図絵』に表された田地・畑地の等級と弥生時代後期中葉の遺構

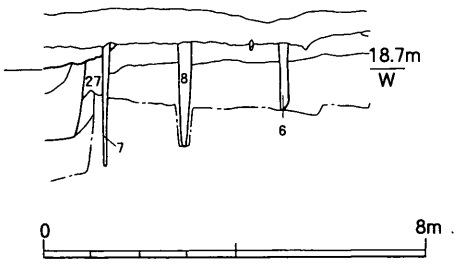


1 旧耕作土
2 床土
3 灰色砂混じり粘質土層
Mn少量含む
4 褐色粘質土層 Mn含む 基盤層
5 暗灰色粘質土層 遺構
6 暗黄褐色粘質土層 基盤層
7 灰色砂質土層 遺構
8 灰色粘土層 遺構
9 明灰色砂質土層 遺構
10 暗茶灰色粘質土層
黄褐色粘土ブロック含む 遺構
11 灰茶色粘質土層 SDI401
12 茶褐色粘質土層 基盤層
13 黒褐色粘質土層 遺構？
14 灰色砂礫層 径5cmの礫含む 遺構
15 灰色粘質土層 遺構
16 暗茶褐色粘質土層 遺構？
17 黒茶色粘質土層 基盤層
18 褐色砂質土層 撹乱
19 黒茶色粘質土層 SDI401
20 茶灰色砂混じり粘質土層 SDI401
21 暗茶色粘土層 遺構？
22 茶褐色砂質土層 基盤層
23 暗茶色砂質土層
径2～3cmの礫含む 基盤層
24 暗灰色粘質土層 遺構？
25 灰色砂質土層 包含層？
26 暗茶褐色粘質土層 SDI401
27 灰色砂質土層 SDI401
28 黒茶色粘質土層 SDI401
29 灰色砂質土層 SDI401
30 茶灰色砂混じり粘質土層 SDI401
31 灰茶色粘質土層 基盤層
32 黒茶色粘質土層 基盤層
33 灰色粘質土層 基盤層
34 暗茶褐色粘質土層 基盤層
35 灰茶色粘質土層 包含層？
36 茶灰色混じり粘質土層 基盤層

0 8m

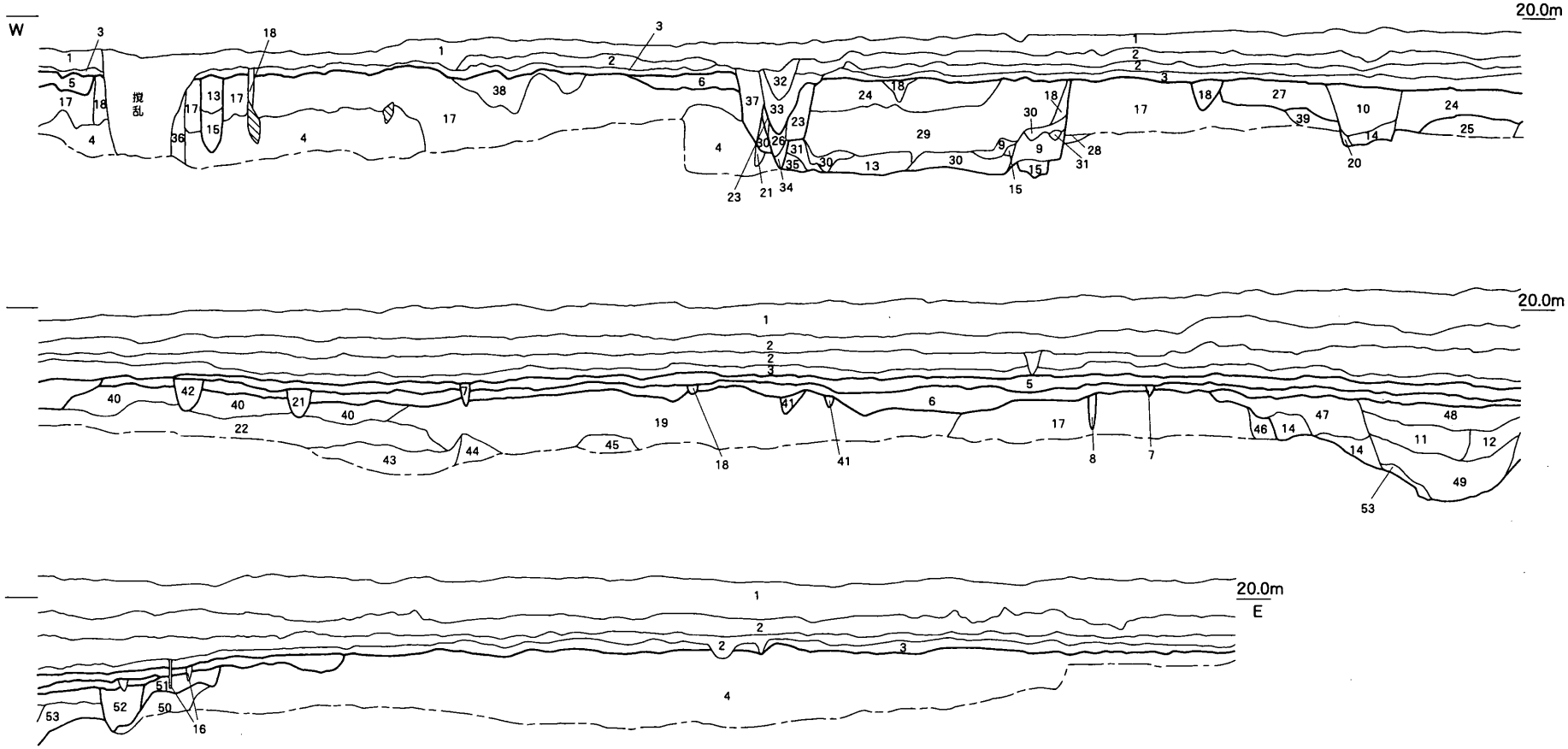
第8図 Ⅰ-5区北壁土層断面図(S=1/40・1/160)





1 撹乱
2 造成土
3 白灰シルト層 床土
4 淡黄灰色シルト～白灰色シルト層 床土
5 淡褐灰色シルト層 床土
6 灰茶色シルト層 弥生後期？SP
7 白灰色シルト層 中世SP
8 白灰色シルト層 中世SP
9 灰白色シルト層及び灰茶シルト層のブロック状堆積 SK
10 灰白色シルト層 径10～20cmの円礫含む SK
11 灰色シルト層 中世SP
12 淡茶灰色シルト層？
13 淡茶灰色シルト層 灰色細砂～粗砂含む？
14 黒灰色粘土層 SDI002
15 灰黒色粘土層 泥炭層 SDI002
16 黒灰色シルト～灰色粗砂層 径5cmの円礫含む SDI002
17 白灰色及び淡黄灰色シルト層 黄褐色粗砂のラミナ状堆積 SDI002
18 白灰色シルト～粗砂層 撹乱？
19 淡茶灰色シルト層
20 白灰色シルト層 床土
21 白灰色シルト層
22 淡茶灰色シルト層 中世SP
23 淡茶灰色シルト層 SHI03
24 灰茶色シルト層 中世SP
25 黒茶色シルト層 SHI03
26 淡灰茶シルト層 SHI03
27 淡茶灰色シルト層 基盤層
28 灰褐色シルト層 基盤層
29 黄褐色シルト層 基盤層
30 灰茶色シルト層 基盤層
31 白黄色シルトブロック含む灰茶シルト層 SP
32 茶色シルト層 SP
33 淡茶灰色シルト層 SDI005
34 淡茶灰色シルト層 SDI037
35 灰色シルト層 灰色粗砂のラミナ状堆積 SDI037
36 白灰色シルト層 中細のラミナ SDI037
37 淡茶灰色シルト層 SDI003
38 灰白色中～細砂層 径10cmの円礫含む SDI003
39 淡茶黄色シルト層 基盤層
40 白黄色シルト層 基盤層
41 灰色シルト層 灰色粗砂 径5cmの円礫含む 基盤層
42 灰色粗砂層 径5cmの円礫含む 基盤層
43 白灰色シルト層及び黒白色シルト層 灰色粗砂ラミナ状堆積 基盤層
44 灰色粗砂層 径5cmの円礫 基盤層
45 灰色粗砂層 径10cm以下の円礫

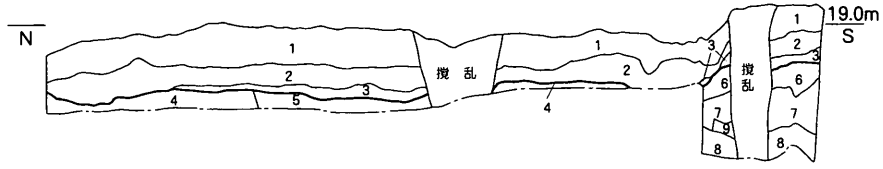
第9図 Ⅰ-6区南壁土層断面図(S=1/40・1/160)



1 造成土
2 旧耕作土
3 床土
4 褐色砂礫層　径2～10cmの礫　基盤層
5 淡灰色粘質土層　中世包含層
6 灰茶色粘質土層　Mn含む　弥生後期包含層
7 灰褐色粘質土層　SP
8 暗灰色粘質土層　弥生後期SP
9 暗茶色粘質土層　SHI05
10 黒褐色粘質土層　SHI05
11 黒褐色粘土層　粘性強い　落ち込み
12 暗茶褐色粘土層　落ち込み
13 暗茶色粘質土層　SHI05
14 暗灰茶色粘土層　落ち込み
15 暗茶灰色粘質土層　SHI05
16 淡黄色砂質土層　中世SP
17 黄褐色粘質土層　基盤層
18 灰色砂質土層　中世SP
19 褐色砂混じり粘質土層　SHI05
20 暗褐色砂質土層　固くしまる　SXI25
21 灰褐色粘質土層　SDI201
22 暗黄褐灰色砂混じり弱粘質土層　基盤層
23 灰茶色砂混じり粘質土層　Mn含む　中世SD
24 黒茶色粘質土層　SHI05
25 暗黄灰色粘質土層　基盤層
26 暗灰茶色砂混じり粘質土層　中世SD
27 茶灰色粘質土層　SXI25
28 茶色砂質土層　基盤層
29 茶褐色粘質土層　SHI05
30 暗灰色粘土層　炭化物多量に含む　SHI05
31 焼土層　SHI05
32 暗灰色粘質土層　撹乱
33 灰色粘質土層　撹乱
34 灰黄色粘質土層　中世SD
35 黄灰色粘質土層　SHI05
36 褐色砂混じり粘質土層　基盤層
37 褐色砂礫層　径2～10cmの礫含む　撹乱
38 灰茶色粘質土層　Mn含む　基盤層
39 黒茶色粘質土層　SXI25
40 灰茶色砂混じり粘土層　Mn含む
41 黒褐色粘質土層　弥生後期SP
42 黒褐色粘質土層　SDI202
43 暗茶色粘質土層　基盤層
44 灰褐色粘質土層　基盤層
45 暗褐色砂質土層　基盤層
46 暗茶色粘質土層　基盤層
47 暗茶色粘質土層　落ち込み
48 黒褐色粘質土層　落ち込み
49 黒褐色粘質土層　落ち込み
50 暗茶色粘質土層　基盤層
51 暗茶灰色粘質土層　基盤層
52 黒褐色粘土層　粘性強い　SDI203
53 暗茶色粘質土層　落ち込み

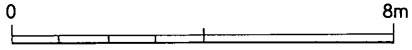
0　8m

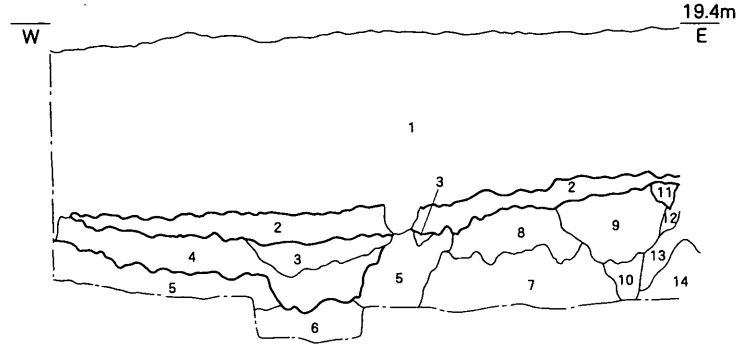
第10図　Ⅰ-7区南壁土層断面図（S=1/40・1/160）



1 造成土
2 旧耕作土
3 床土
4 淡黄褐色粘質土層 基盤層
5 暗黄褐色砂混じり粘質土層 基盤層
6 茶灰色粘質土層 SHI05
7 暗茶褐色粘土層 SHI05
8 茶褐色砂混じり粘質土層 SHI05
9 炭化物 SHI05

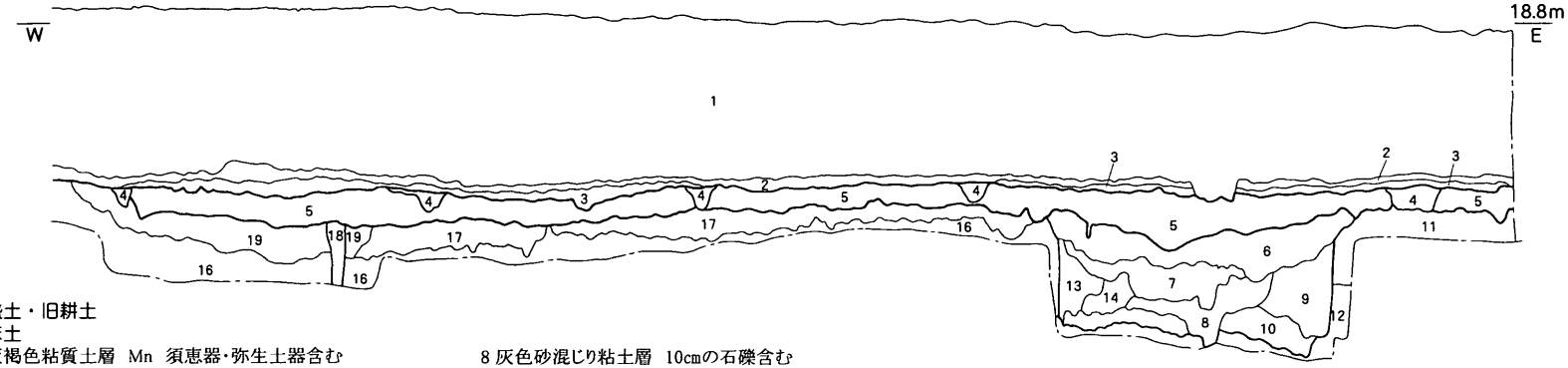
Ⅰ-7東壁





Ⅰ-12北壁西部分

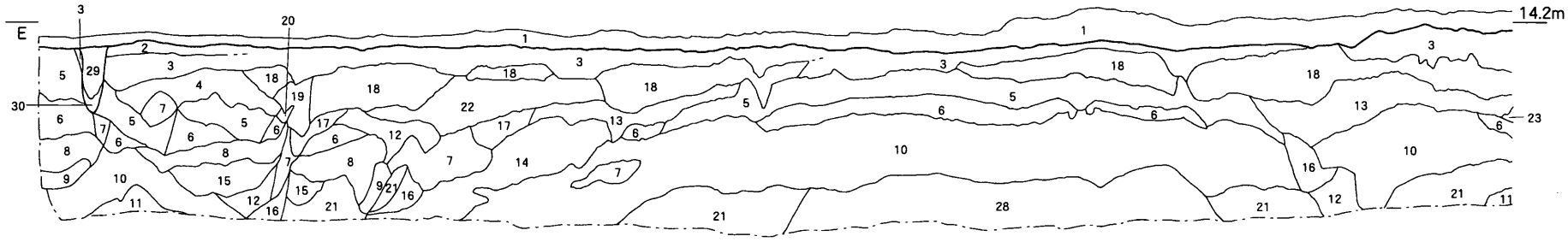
1 造成土・旧耕作土
2 灰橙色粘質土層 Fe・Mn炭化物粒含む 古代～中世包含層
3 黒褐色粘質土層 Fe径3cm以下の小石粒含む 弥生包含層
4 黒褐色粘質土層 弥生包含層
5 灰黄色粘質シルト層 Fe含む 基盤層
6 灰色粘質シルト層 上層に近似 5層よりやや暗い 基盤層
7 灰色砂礫層 径～15cmの石礫 基盤層
8 茶褐色シルト層 Mn 基盤層
9 明黄褐色粘質シルト層 Mn 基盤層
10 灰黄褐色粘質シルト層 Mn 基盤層
11 黒褐色粘質土層 Mn・炭化物粒含む 基盤層 弥生SDか？
12 黄褐色粘質シルト層 径5cm以下の小石多量に含む 基盤層
13 黄褐色粒砂層 径5cm以下の小石含む 基盤層
14 茶褐色砂質シルト層 基盤層

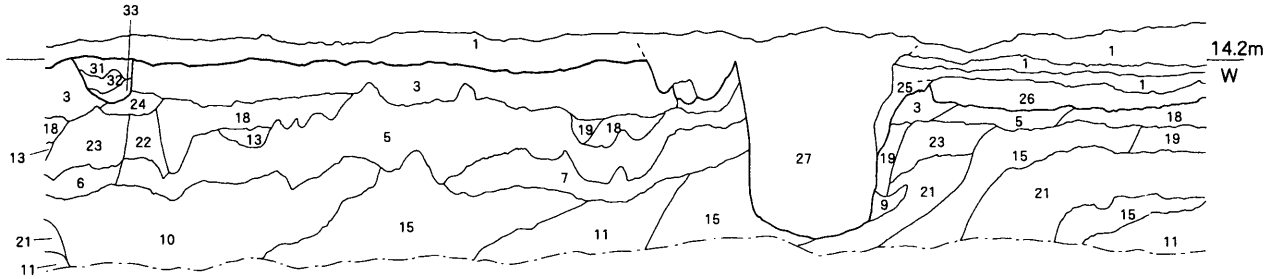


Ⅰ-12北壁東端

1 盛土・旧耕土
2 床土
3 灰褐色粘質土層 Mn 須恵器・弥生土器含む
4 灰橙褐色粘質土層 Mn 径2cm以下の小石含む 3層に近似
5 黒褐色粘質土層 Mn 土器破片多量に含む 弥生後期～古墳前期包含層
6 灰茶褐色砂質シルト層 径1cm以下の小石多量に含む 土器少ない 6・7層近似 SHI10
7 灰褐色砂質シルト層 径1cm以下の小石多量に含む 土器少ない 6・7層近似 SHI10
8 灰色砂混じり粘土層 10cmの石礫含む 10層ブロック状に含む 土器多い SHI10
9 茶褐色砂質シルト層 径1cm以下の小石多量に含む SHI10
10 明灰色シルト層 濁灰色粗砂ラミナ・暗灰色シルトブロック状に含む SHI10
11 灰褐色シルト層 基盤層
12 明灰茶色シルト層 基盤層
13 暗灰色粘質土層 炭化物・土器多量に含む SHI10
14 灰色粗砂層 8層ブロック状に含む SHI10
15 灰色粗砂層 基盤層
16 黄色粘土層 基盤層
17 濁黒褐色粘質土層 Mn・16層ブロック含む
18 黒褐色粘土層
19 濁黒褐色粘質土層 Mn・16層ブロック含む

第11図 Ⅰ-7区東壁、Ⅰ-12区北壁西部分・北壁東端土層断面図（S=1/40・1/160）



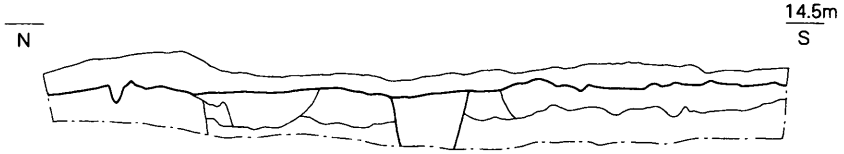


Ⅲ-3南壁

1 旧耕作土
2 黄白灰色砂質土層
3 白灰橙色混砂質土層
礫少量含む
4 当淡茶灰色砂質土層
礫少量含む
5 橙灰色混密礫砂質土層
6 銀灰色混粗礫中砂層
7 橙灰色中砂層　やや粘性あり
8 灰紫色混粗礫中～細砂層
9 灰色粘質細砂層
10 濁暗茶褐色混密礫粗砂層
11 濃銀灰色混粗礫粗砂層
12 褐灰色混礫細～粗砂層
ラミナ状
13 橙褐淡灰色砂質土層
14 淡灰～濁淡褐色細～中細砂層
15 褐灰橙色混礫中～粗砂層
ラミナ状
16 淡青灰色粘質細砂層
17 濃灰色粘質細砂層　白灰色細砂層と混じる
18 淡青灰黄色粘土層～粘質土層
19 淡青灰褐色シルト層
20 褐黄灰色混砂礫粘質土層
21 橙茶灰色混粗礫粗砂層
22 淡青灰黄色シルト層
23 灰橙色混密礫砂質土層
5層より礫小さい
24 白灰橙色混砂粘質土層
25 淡茶明灰色砂質土層　SDh406
26 紫灰色混砂粘質層　SD
27 SDh406
28 濁橙灰色混粗礫中細層　ラミナ状
29 暗橙褐灰色混礫砂粘質土層　遺構
30 暗灰色混細砂層粘質土層　遺構
31 茶褐明灰色砂質土層　SD
32 橙茶灰色砂質土層　SD
33 褐淡灰色粘質細砂層　SD

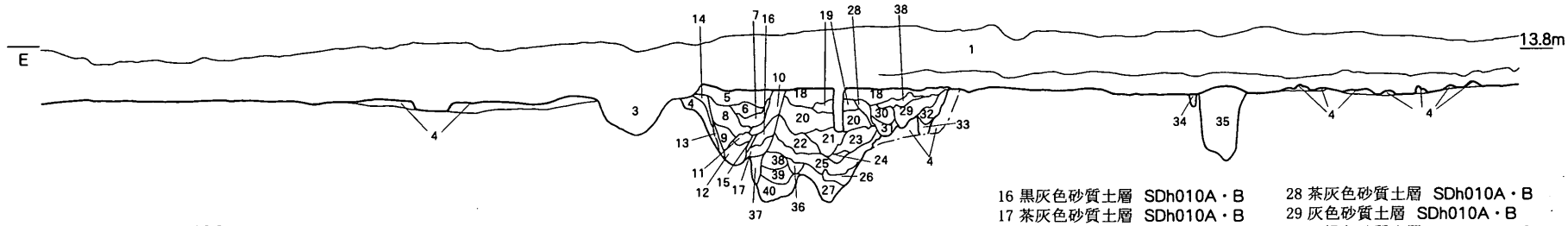
0　8m

Ⅲ-3東壁(北部)



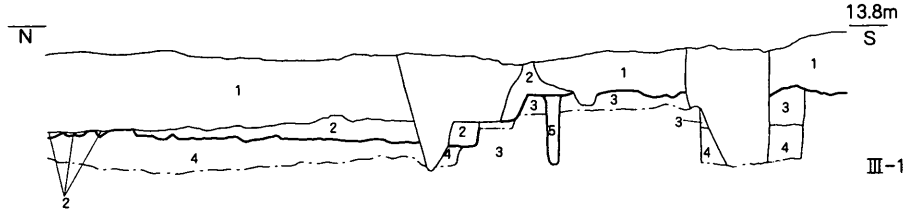
Ⅲ-3東壁(南部)

第12図　Ⅲ-3区南壁・東壁（北部）・東壁（南部）土層断面図（S=1/40・1/160）



Ⅲ-10南壁

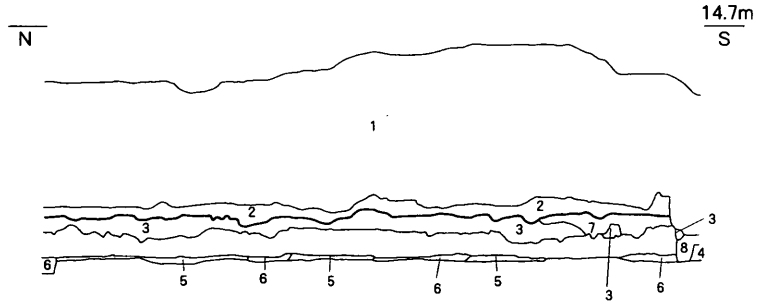
1 造成土・旧耕作土
2 橙灰色砂質土層　床土
3 SDh010c
4 灰色砂質土層　基盤層
5 灰褐色砂質土層　SDh010A・B
6 灰色砂質土層　SDh010A・B
7 茶灰色砂質土層　SDh010A・B
8 黒灰色砂質土層　SDh010A・B
9 灰褐色砂質土層　SDh010A・B
10 茶灰色砂質土層　SDh010A・B
11 黒灰色粘質土層　SDh010A・B
12 黒灰色砂質土層　有機物の堆積により形成された層と考えられる　SDh010A・B
13 黒灰色粘質土層　SDh010A・B
14 茶灰色砂質土層　SDh010A・B
15 黒色砂質土層　SDh010A・B
16 黒灰色砂質土層　SDh010A・B
17 茶灰色砂質土層　SDh010A・B
18 灰色砂質土層　SDh010A・B
19 黒灰色砂質土層　SDh010A・B
20 灰褐色砂質土層　SDh010A・B
21 茶灰色砂質土層　SDh010A・B
22 黒灰色砂質土層　SDh010A・B
23 黒灰色粘質土層　SDh010A・B
24 黒褐色砂質土層　SDh010A・B
25 褐色砂質土層　SDh010A・B
26 灰色砂層　SDh010A・B
27 砂礫層　SDh010A・B
28 茶灰色砂質土層　SDh010A・B
29 灰色砂質土層　SDh010A・B
30 灰褐色砂質土層　SDh010A・B
31 黒褐色砂質土層　SDh010A・B
32 灰褐色砂質土層　SDh010A・B
33 黒灰色砂質土層　SDh010A・B
34 黒色砂質土層　SDh064
35 灰褐色砂質土層　SKh510
36 黒灰色砂質土層　SDh010A・B
37 茶灰色砂質土層　SDh010A・B
38 灰白色砂質土層　SDh010A・B
39 灰色砂質土層　SDh010A・B
40 砂礫層　SDh010A・B



Ⅲ-10東壁

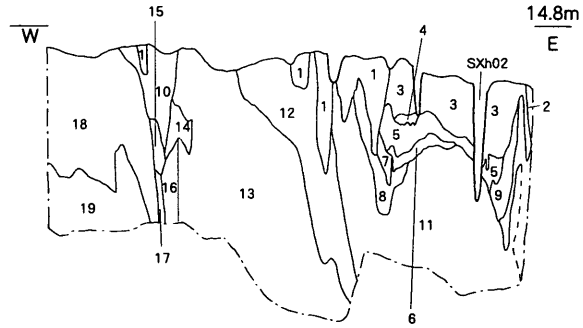
1 造成土・旧耕作土
2 灰白色砂質土層　耕作土に伴う盛土　床土
3 黒灰色砂質土層　無遺物
4 灰色砂質土層　無遺物
5 黒褐色砂質土層　SP

0　8m



1 造成土
2 旧耕作土
3 黄灰色砂混じり粘土層　礫含む
4 明青灰色粘土層　Fe含む
5 暗茶褐色砂礫層
6 黒褐色粘質土層
7 褐色砂礫層
8 青灰色粘土層

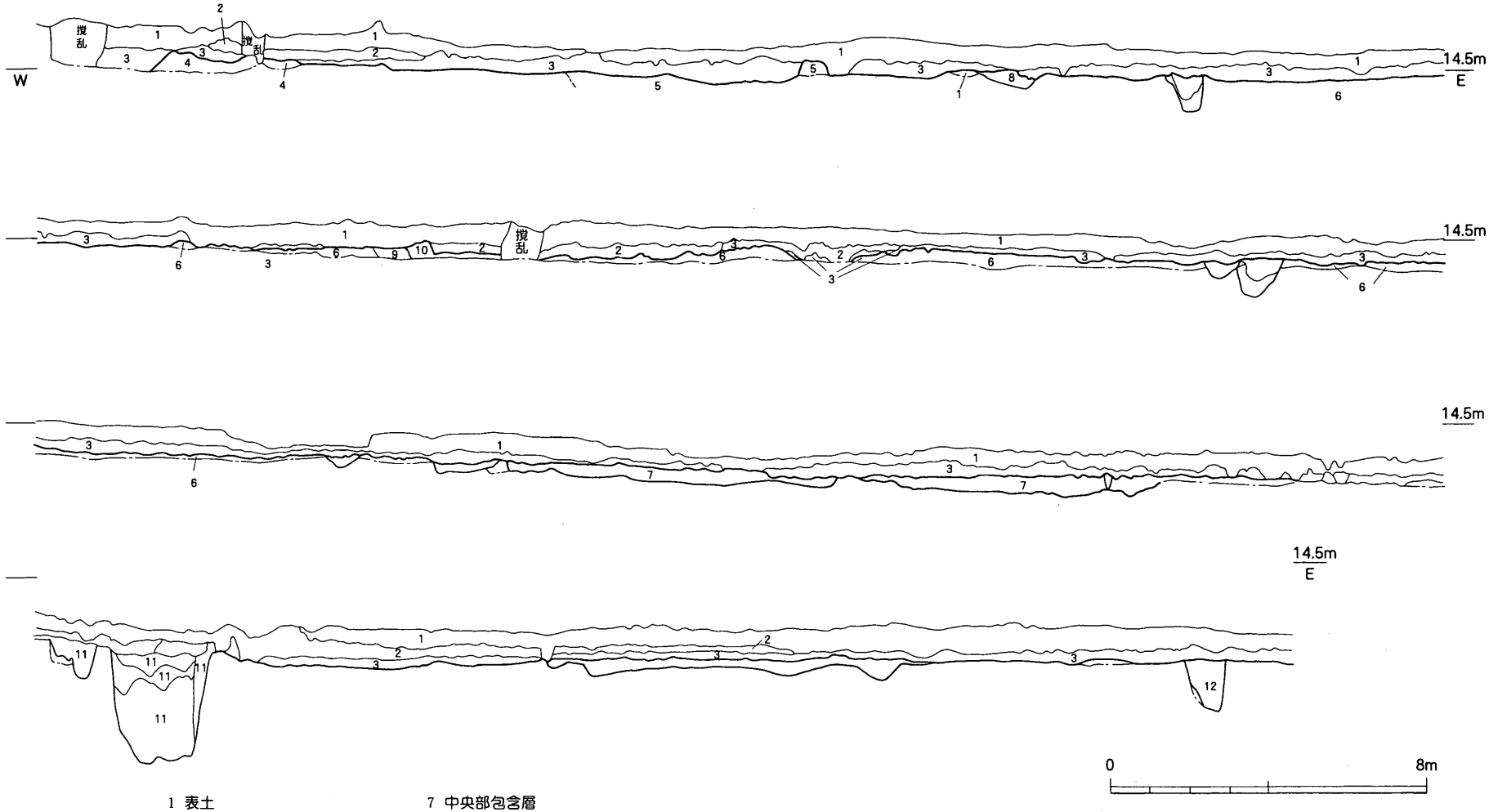
Ⅲ-50東壁



Ⅲ-18SXｈ02トレンチ

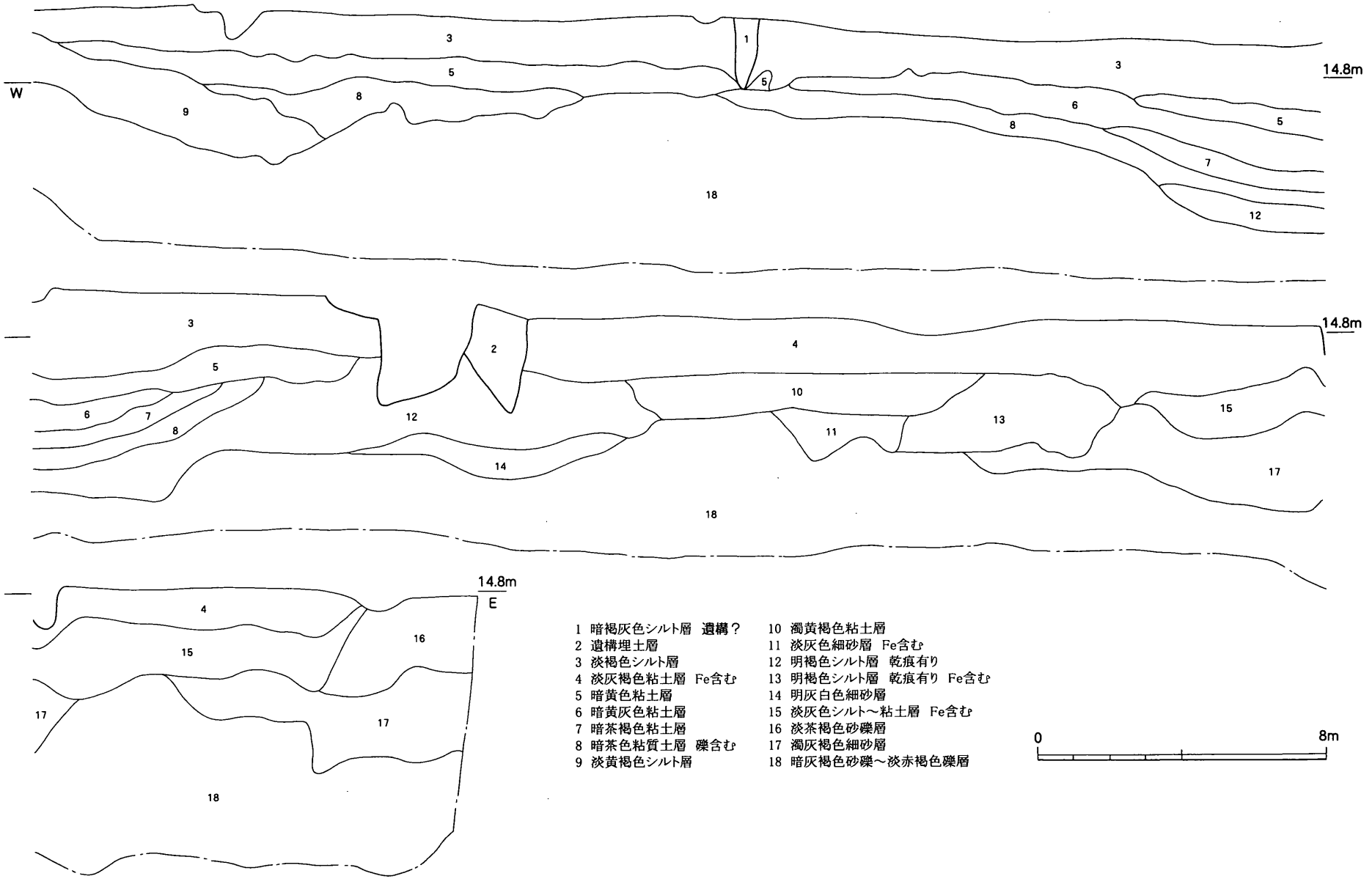
1 暗灰褐色シルト層　基盤層
2 淡灰褐色細砂～シルト層　基盤層
3 暗褐色粗砂層　基盤層
4 暗赤褐色細砂層　粘性有り　基盤層
5 暗黄色粘土層　基盤層
6 暗灰白色粘土層　基盤層
7 淡暗黄色シルト層　小礫含む　基盤層
8 暗灰色シルト　基盤層
9 濁茶灰色シルト層　基盤層
10 暗黄褐色シルト層
11 暗灰色砂礫層　砂・小礫主体　基盤層
12 暗赤褐色砂礫層　やや締まった砂主体　基盤層
13 暗灰褐色砂礫層　礫主体　基盤層
14 濁黄褐色粗砂層　基盤層
15 淡黒灰色シルト～細砂層　基盤層
16 暗灰色粗砂層　基盤層
17 淡黒灰色細砂層　基盤層
18 暗灰色砂礫層　礫主体　基盤層
19 暗灰褐色砂礫層　礫主体　基盤層

第13図　Ⅲ-10区南壁・東壁、Ⅲ-50区東壁、Ⅲ-18区ＳＸｈ02トレンチ土層断面図（S=1/40・1/160）



1 表土
2 淡黒灰色砂質土層 旧耕作土
3 淡赤灰色砂質土層 Fe含む 床土
4 灰色礫層 基盤層
5 濁褐黄色シルト層 基盤層
6 灰褐色砂質土層 Mn含む 基盤層
7 中央部包含層
8 SD
9 遺構
10 SP
11 SDh010A・B・C
12 SDh016

第14図 Ⅲ-15区北壁土層断面図（S=1/40・1/160）

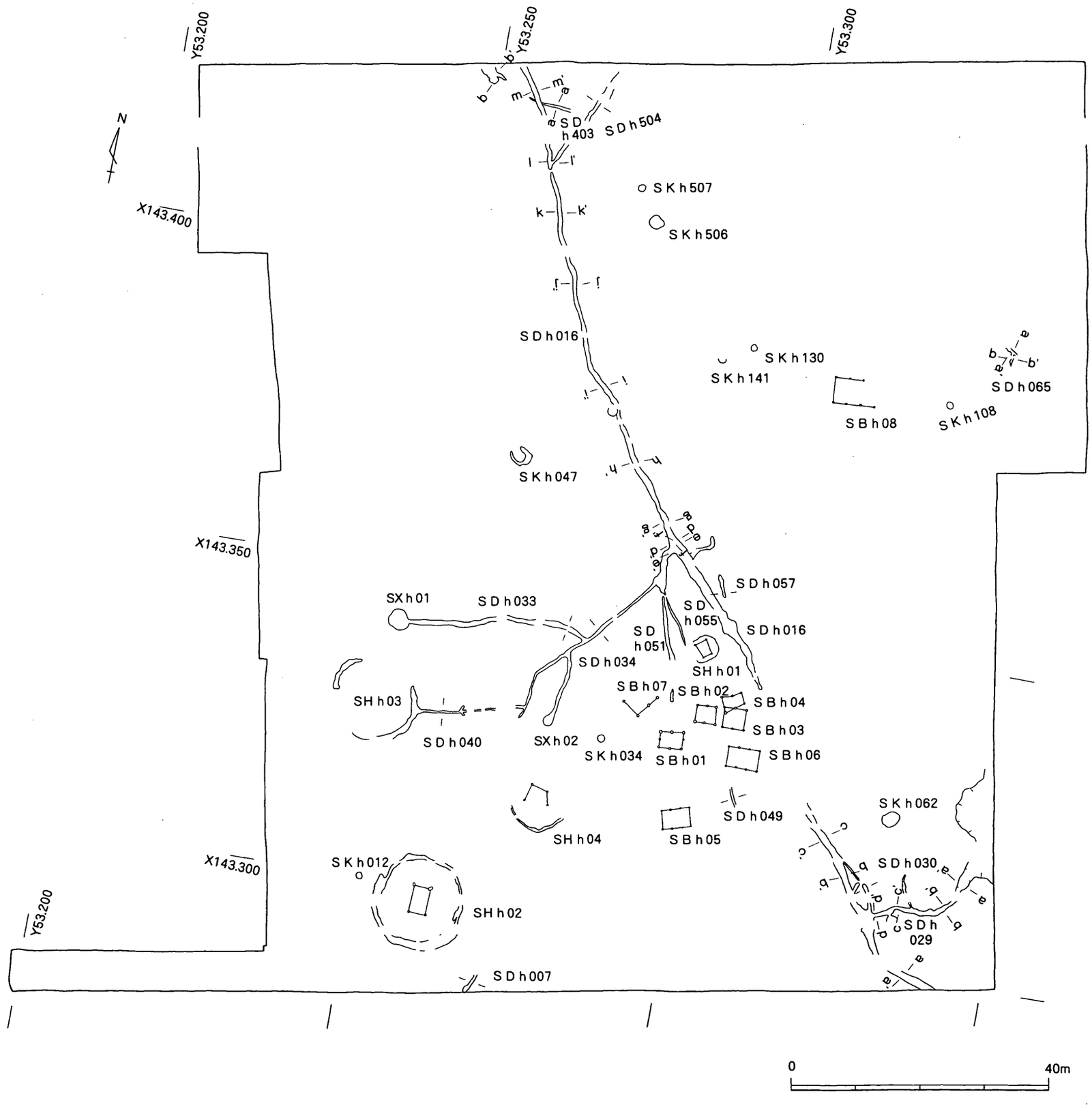


第15図　Ⅲ-15深堀トレンチ土層断面図（S=1/40・1/160）

また、２箇所の高い部分の間にはやや低い部分が看取されるが、これはⅡ－６区西部で検出した、弥生時代後期と想定されている落ち込みと合致する。

Ｈ地区は遺跡東部に位置し、第６図から想定される地形では若干低い部分にあたる。後述するように、この部分には弥生時代後期中葉の出水と南北に伸びる基幹水路、住居群などが認められるが、古代以降の削平をかなり被っており、弥生時代後期の遺構の残存状況は良くない。しかし、土坑や水路中に含まれる土器量からは、さらに多くの遺構が展開していた可能性が想定できる。

Ｌ地区は西側微高地の頂部から若干下った位置にある。Ｌ地区では、特にⅠ－12・７区や、Ⅰ－６区水路北トレンチで弥生時代後期～古墳時代前期の包含層が確認され、部分的に中世包含層が存在する。Ｌ地区の東に隣接するＣ地区西端部では、弥生時代後期と考えられている落ち込みが認められるが、Ｌ地区（Ⅰ－６区）東端部は撹乱により破壊されているため、Ⅰ－６区ではこの落ち込みは確認できない。ただし上述のとおり、Ⅰ－６・12区に見られる弥生時代後期～古墳時代前期の包含層は、東に向かってやや厚い堆積となっており、この落ち込みの存在と対応するものと思われる。このため、Ｈ地区に比べて遺構の残存状況は良好である。



第16図　H地区弥生時代後期主要遺構配置図（S=1/800）

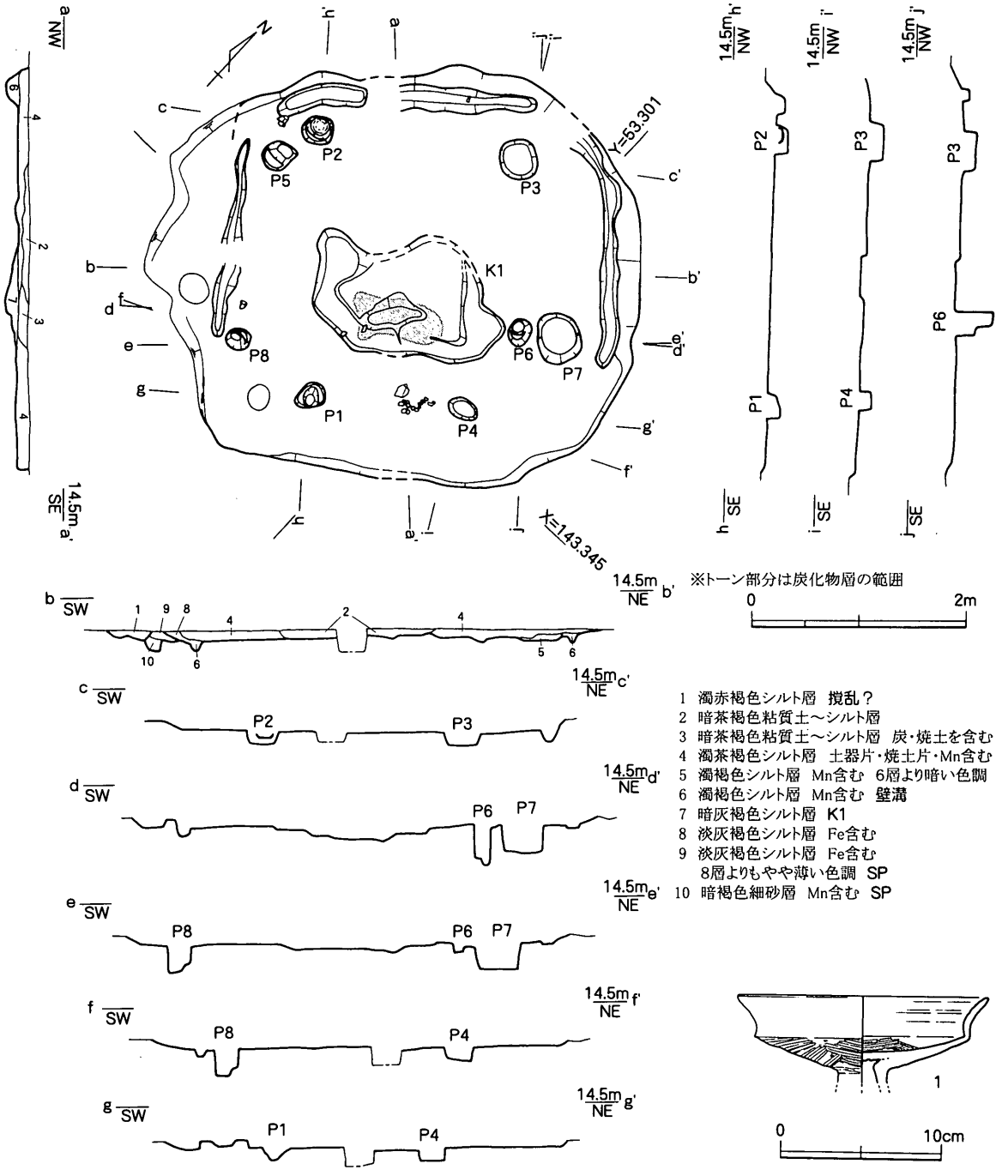
第２節　Ｈ地区の遺構と遺物

１．弥生時代後期の遺構と遺物

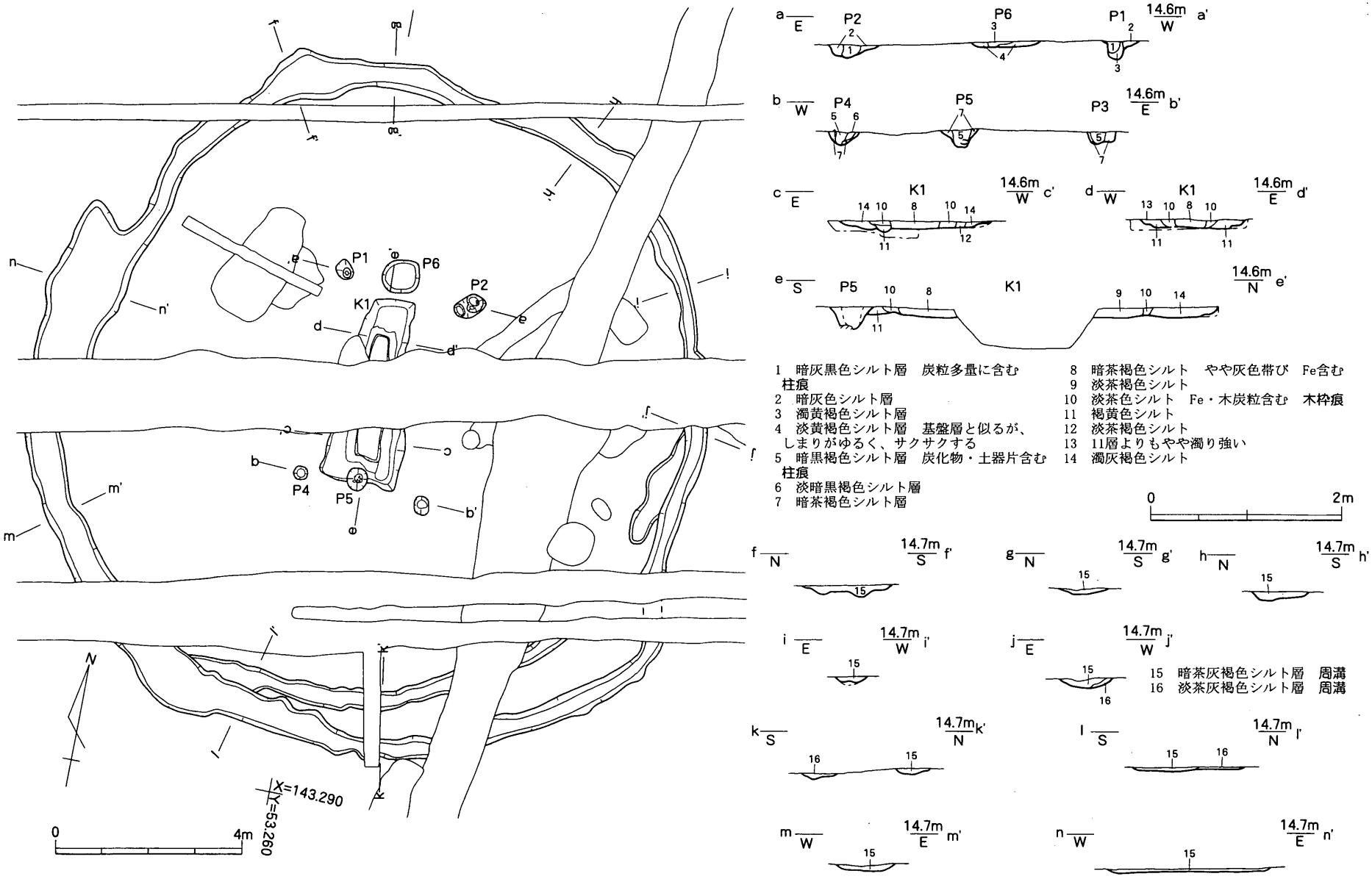
竪穴住居（ＳＨ）

ＳＨｈ 01（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 20 区ＳＨ 01　概報遺構名：ＳＨ 65）

Ⅲ－ 20 区で検出した平面形が隅丸方形の竪穴住居。短軸長 3.7 m、検出面から深さは 0.1 mである。後述するように、南西辺の壁面を検出していないため確実ではないが、壁溝から想定できる長



第 17 図　ＳＨｈ 01 平・断面図（1/60）、出土遺物実測図（S=1/4）



第18図　ＳＨｈ 02平・断面図（S=1/120・1/60）

軸長は約 4.0 mである。

北東・北西・南西辺に巡る壁溝のコーナー部分は途切れる。南西辺の壁溝から外側の部分については、壁面の立ち上がりが緩やかなこと、本竪穴住居とはやや異なる埋土（１層）であることから、本竪穴住居埋没後に掘り込まれた遺構（？）であると判断した。

主柱穴はＰ１～Ｐ４の４基を想定しているが、Ｐ４はややずれるため主柱穴ではない可能性がある。また、Ｐ２内からは、脚部を欠く香東川下流域産高杯（１）が完存する杯部を上に向けた状態で出土している。この高杯は、杯部より一回り程度大きい直径しかもたない柱穴からの出土のため埋没時の混入とは考え難く、柱を抜き取る際に意図的に埋納されたものと理解できる。

床面中央部には炉と考えられる土坑（Ｋ１）が認められるが、埋土中に焼土や炭化物は含まない。また、この中央土坑の上面には４層を切り込むかたちで焼土片・炭化物を多量に含む層（３層）が一定範囲に拡がっている。この焼土片・炭化物集中範囲が炉と想定できる中央土坑であるとすれば、４層上面で柱穴を確認していないものの、４層を貼床と捉えられる。なお、４層は焼土片を全体的に含み、人為的な埋め戻し土である可能性が高い。

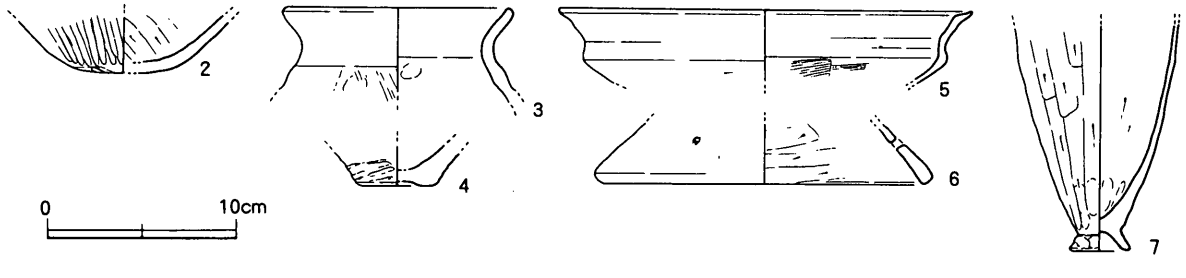
出土遺物　西隅の柱穴Ｐ２出土の、ややサイズの小さな香東川下流域産（下川津Ｂ類土器）高杯（１）は、摩滅はしているものの杯部内外面の分割ヘラミガキが明瞭に残る。その他、図化は行っていないが、Ｋ１のやや南東から細片化した甕が出土している。

時期　出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。

ＳＨｈ 02（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 16 区円形周溝墓　概報遺構名：ＳＴ 10）

Ⅲ－ 16 区で検出した、発掘調査時および概報作成時には円形周溝墓とされていた遺構。しかし、後述する理由により円形周溝墓とするのは困難で、本報告では円形の周溝を持つ住居と判断した。周溝内部に掘り込みは確認できなかったため、竪穴を有する住居とは断定できない。

周溝間の長さは、最長で約 15.6 m、最短で約 14.4 mである。周溝幅は 0.35 m～ 1.7 m、検出面からの深さは 0.02 ～ 0.1 mである。周溝は、平面形がやや歪んだ円形を呈し、南半部では２本に分離したような状況となっている。この２本の周溝は埋土が若干異なっていることから、先後関係をもつ溝が重複しているようにも見えるが、この土層の違いは、周溝が分離していない箇所でも認めることができる。すなわち、上層の暗茶褐色シルト層は分離している南側の周溝埋土と同一であり、下層の淡茶褐色シルト層は北側の周溝埋土と一致する。断面観察では、下層が堆積状況から周溝内側から流入したことが窺え、その後外側に上層が堆積している。この状況は、周溝土層が周溝で囲まれた部分の流入によって形成されたことを想定させ、埋没段階の差を示しているといえる。周溝南半部で周溝が分離するのは、顕著な削平によって本来１本であった周溝底面の深い部分のみが遺



第 19 図　ＳＨｈ 02 出土遺物実測図（S=1/4）

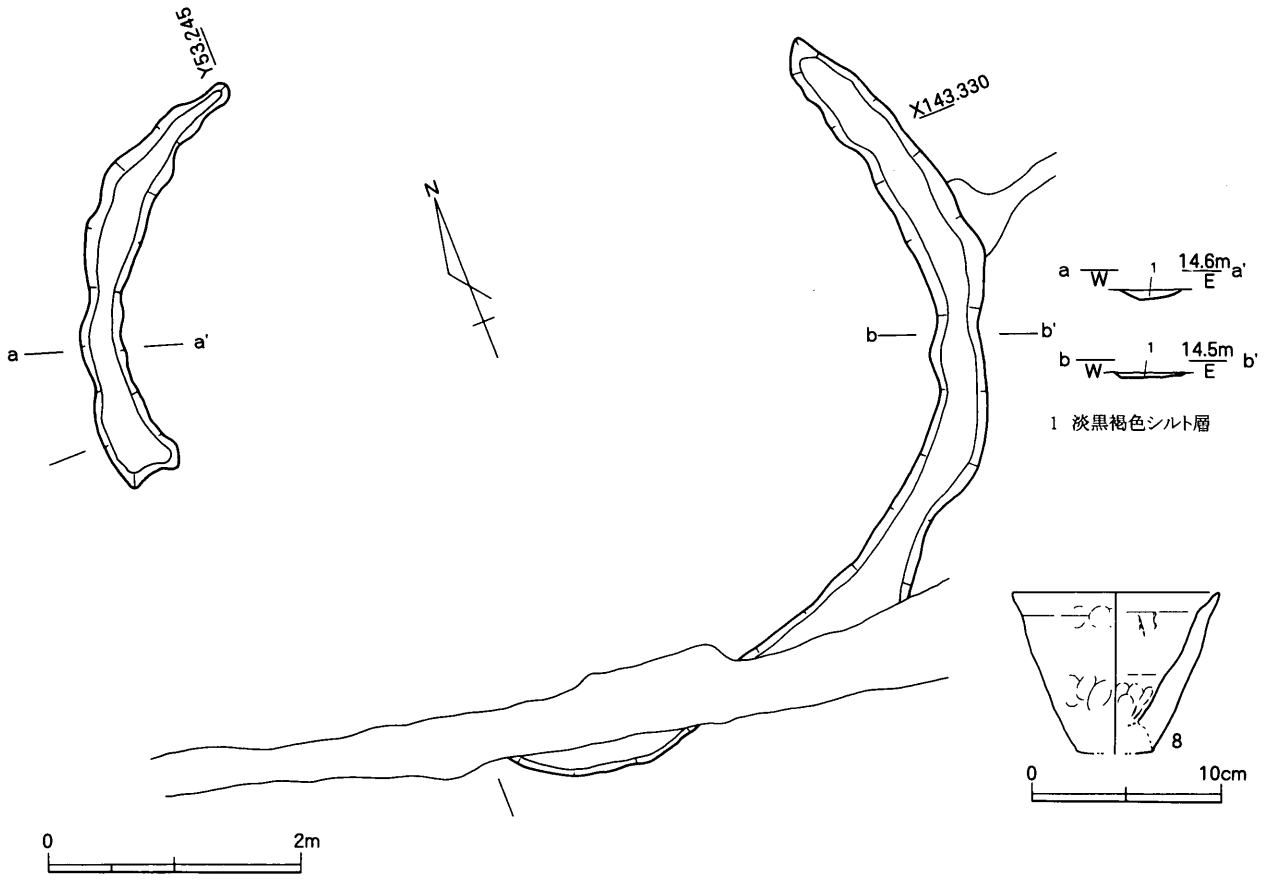
存したための、見かけ上の現象とするのが妥当であろう。

主柱穴は４基（Ｐ１～Ｐ４）で、これらを結ぶと南北方向にやや長い矩形となる。

また、周溝で囲まれた部分の中心部と西端部で土坑が検出された。これらの土坑は、発掘調査時および概報作成時には墓坑と捉えられ、本遺構を円形周溝墓とする根拠となっていた。しかし、西端部の土坑（ＳＫｈ 162・ｈ 163）については、周辺に広がる弥生時代後期の土坑群（ＳＫｈ 046・ｈ 048・ｈ 049・ｈ 050）と同様の性格を有するものと考えられ、本住居に伴うものではないと考える。中心部にある土坑Ｋ１については、その位置関係から周溝に伴うものと考えて差し支えないと思われるが、墓坑とする積極的な根拠には乏しい。また、Ｋ１底面のレベルと、周溝底面のレベルとほぼ同様であることから、墳丘を有する円形周溝墓とは考えにくい。Ｋ１は、平面形が長方形で、長軸長 3.15 m、短軸長 0.85 m～ 1.65 m、検出面からの深さは 0.1 mである。内部には、木質は残存していないが、土層上明確に土坑埋土とは識別できる長軸長 3.15 m、短軸長 0.6 m～ 1.0 mの木枠痕跡が残る。この痕跡から、木枠は側板が小口を挟む型式のものであることが判明した。木枠痕跡を示す層の内側には、炭化物を多量に含む層が堆積している。

出土遺物　２・３・５・６は周溝内からの出土。２は香東川下流域産の壺底部。３は白色系（香東川下流域産とは明瞭に区別できる灰白色～黄橙色の胎土を有し、つくりがやや粗雑な土器群）の甕。５・６は香東川下流域産の高杯。５の杯部内面下半部には、ヘラミガキではなくハケが施されている。４は主柱穴出土の白色系甕底部。タタキが明瞭に残る。７はＰ５出土の香東川下流域産の製塩土器。Ｐ５はＫ１埋没後に掘り込まれているため本住居に伴わない柱穴の可能性もあるが、参考資料として提示した。

時期　出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。



第20図　ＳＨｈ 03平・断面図（S=1/60）、出土遺物実測図（S=1/4）

ＳＨｈ 03（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 18 区円形周溝墓２　概報遺構名：ＳＴ 11）

Ⅲ－ 18 区西部で検出した孤を描く２本の溝で、概報作成時には円形周溝墓とされている遺構である。

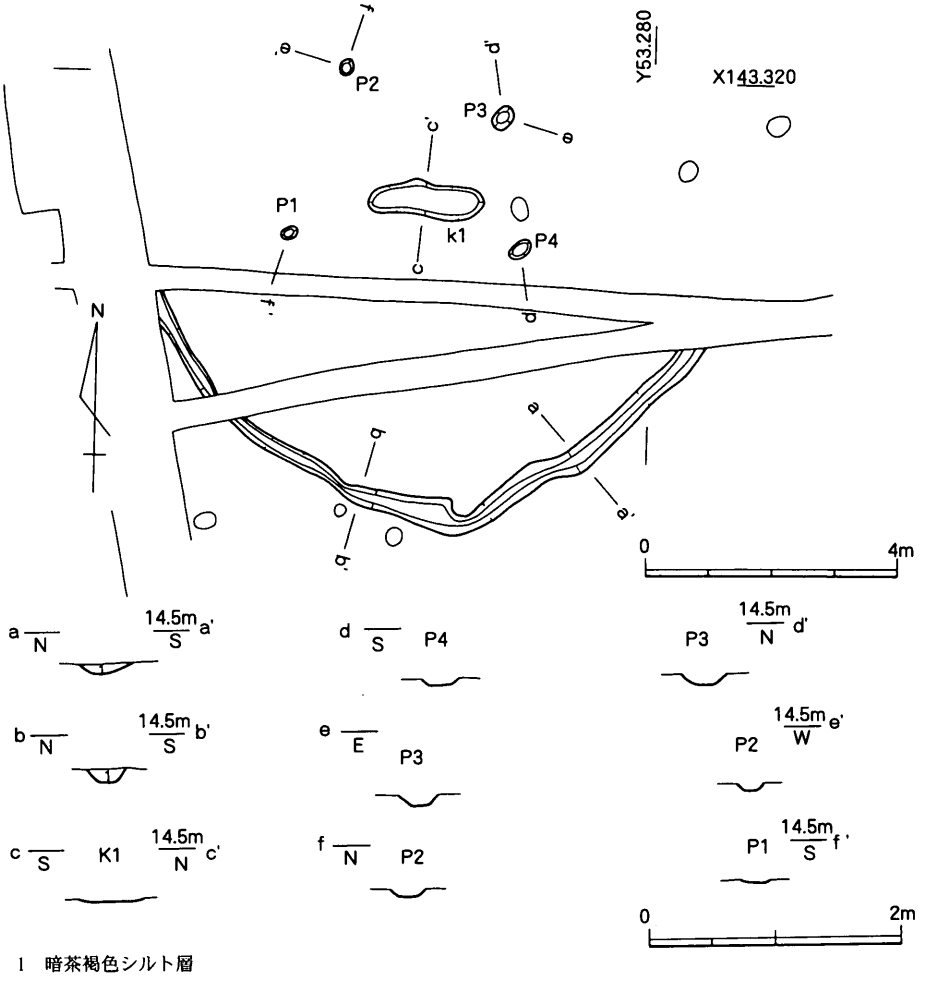
２本の溝は、ともに検出面から底面までの深さが約0.1ｍと非常に浅いことや、その位置関係から、本来連続して直径 13 ｍの円形に巡るものと考えられる。なお、溝の幅は約 0.8 ｍである。南東部の溝からは東方にＳＤｈ 040 が延び、ＳＤｈ 034 と合流した後、その先で基幹水路ＳＤｈ 016 と合流する。このように、溝が水路網に取り込まれていることから、本遺構を円形周溝墓とするのは困難で、２つの溝から復元される周溝の規模がやや南方にある竪穴住居ＳＨｈ 02 の周溝と同程度の規模であることから、両溝は竪穴住居の周溝と想定できる。また、南東部の溝からは少量の弥生土器が出土している。

出土遺物　8 は白色系の鉢。仕上げが甘く、内外面に絞り目が残る。焼成は良好で断面に黒化層は認められない。

時期　出土遺物および周辺遺構の状況から弥生時代後期中葉と考えられる。

ＳＨｈ 04（調査時遺構名：Ⅲ－ 18 区ＳＤ 41　概報遺構名：ＳＨ 64）

Ⅲ－ 18 区で検出した弧状の溝。溝の内側には４基の柱穴（Ｐ１～４）と柱穴群に取り囲まれるよ



1　暗茶褐色シルト層

第 21 図　ＳＨｈ 04 平・断面図（S=1/120・1/60）

うに長楕円形の土坑（Ｋ１）が存在する。本遺構は、柱穴の配置状況から、１基欠落する五角形の主柱穴を有する竪穴住居と思われる。

南部に巡る溝は、壁溝とするにはやや規模が大きく、外側の壁面の立ち上がりも緩やかなことから、周溝の残存部とするのが妥当であろう。

出土遺物　後期と考えられる弥生土器細片が周溝から数点出土したのみである。

時期　周辺遺構との関係から、弥生時代後期中葉の住居と考えられる。

掘立柱建物（ＳＢ）

ＳＢｈ 01（発掘調査時遺構名：Ⅲ－19 区ＳＢ 03　概報遺構名：ＳＢ 52）

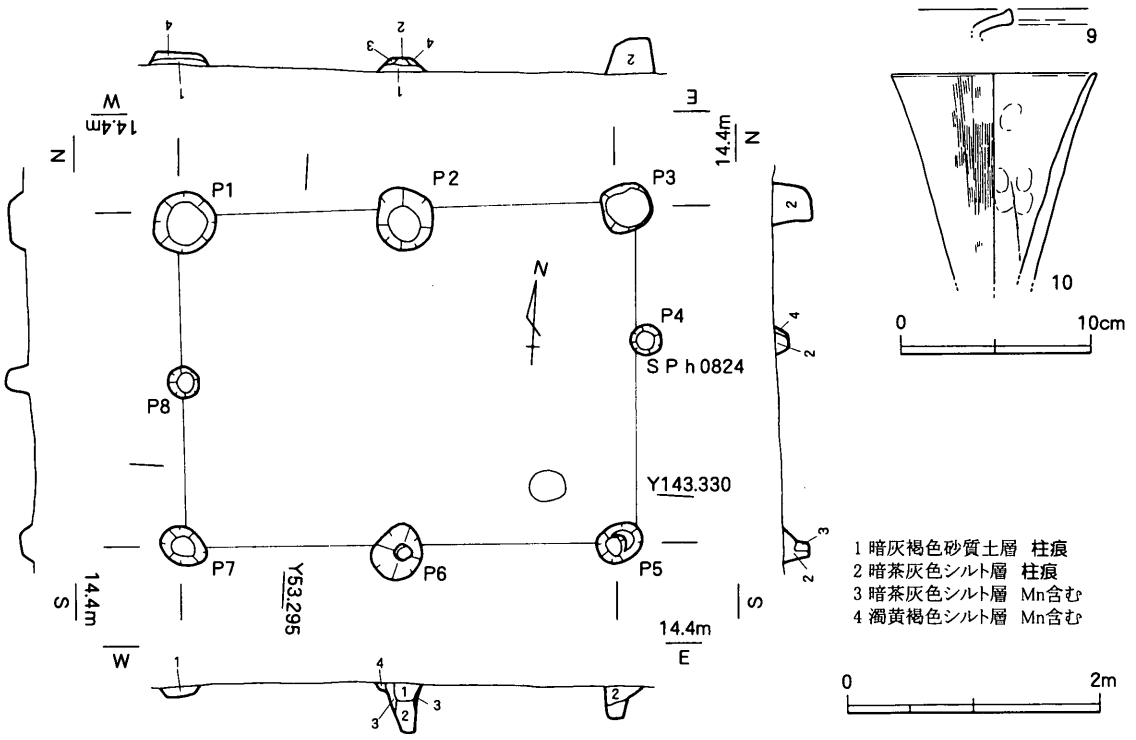
Ⅲ－19 区で検出した２間×２間の掘立柱建物。桁行長が 3.5 ｍ、梁行長は 2.6 ｍで、柱間の距離は梁行に比べて桁行の方が短い。周辺のＳＢｈ 02・ｈ 03・ｈ 06 とは主軸をほぼ同じくする。東辺の３基および北辺・南辺の中央の柱穴には柱痕が残る。

出土遺物　**9**・**10** はいずれもＰ６から出土している。**9** は白色系甕の口縁部片。**10** は香東川下流域産の細頸壺頸部片。

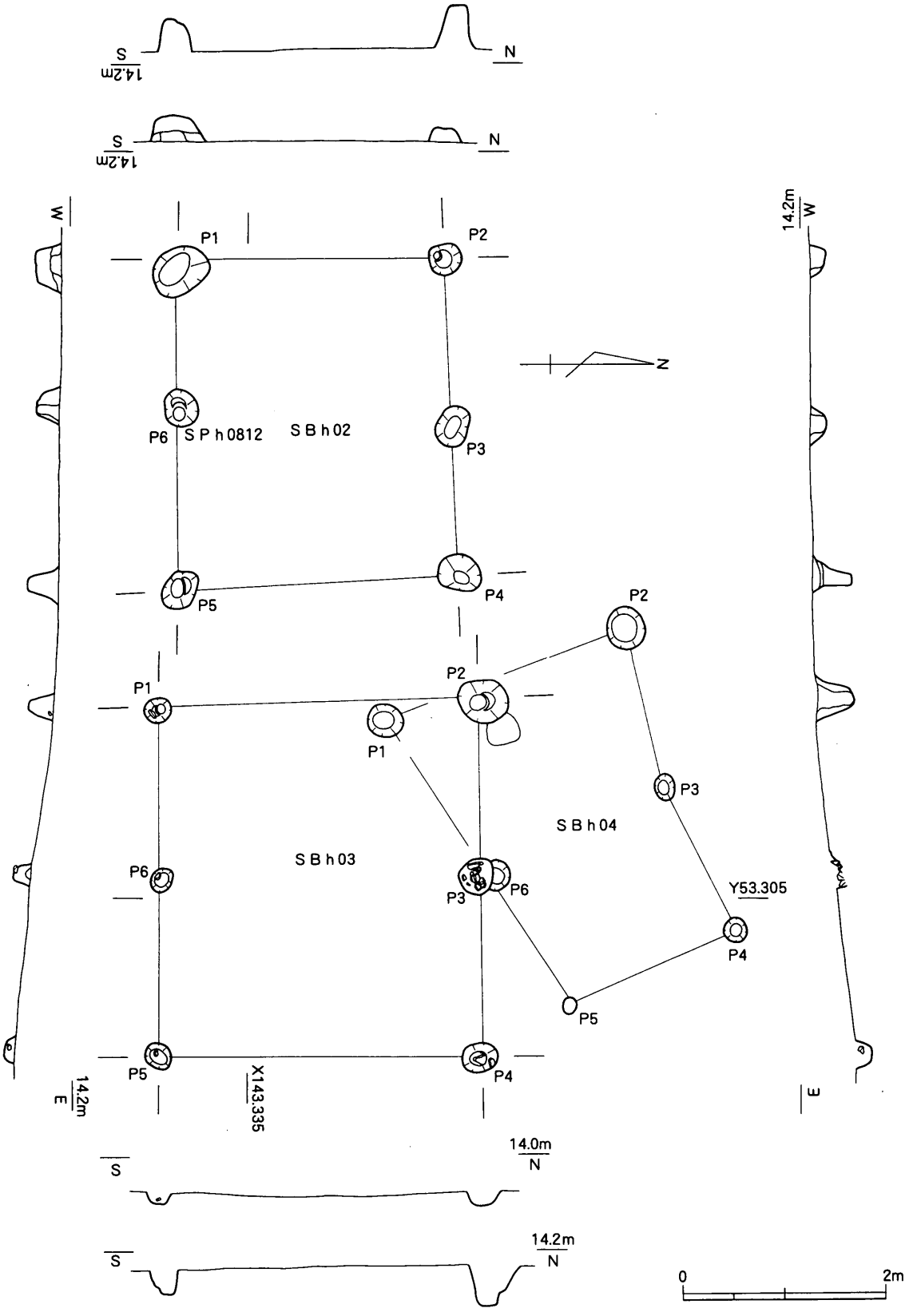
時期　出土遺物および周辺遺構の状況から弥生時代後期中葉と考えられる。

ＳＢｈ 02（発掘調査時遺構名：Ⅲ－19 区ＳＢ 04　概報遺構名：ＳＢ 53）

Ⅲ－19 区で検出した２間×１間の掘立柱建物。桁行は 3.1 ｍ、梁行は 2.8 ｍ。ＳＢｈ 03 と並列するためＳＢｈ 03 と４間×１間の同一建物を構成する可能性も否定できないが、Ｐ５とＳＢｈ 03 Ｐ１との位置関係に若干のずれが認められるため、２棟の建物と判断した。柱穴の土層断面図を見る



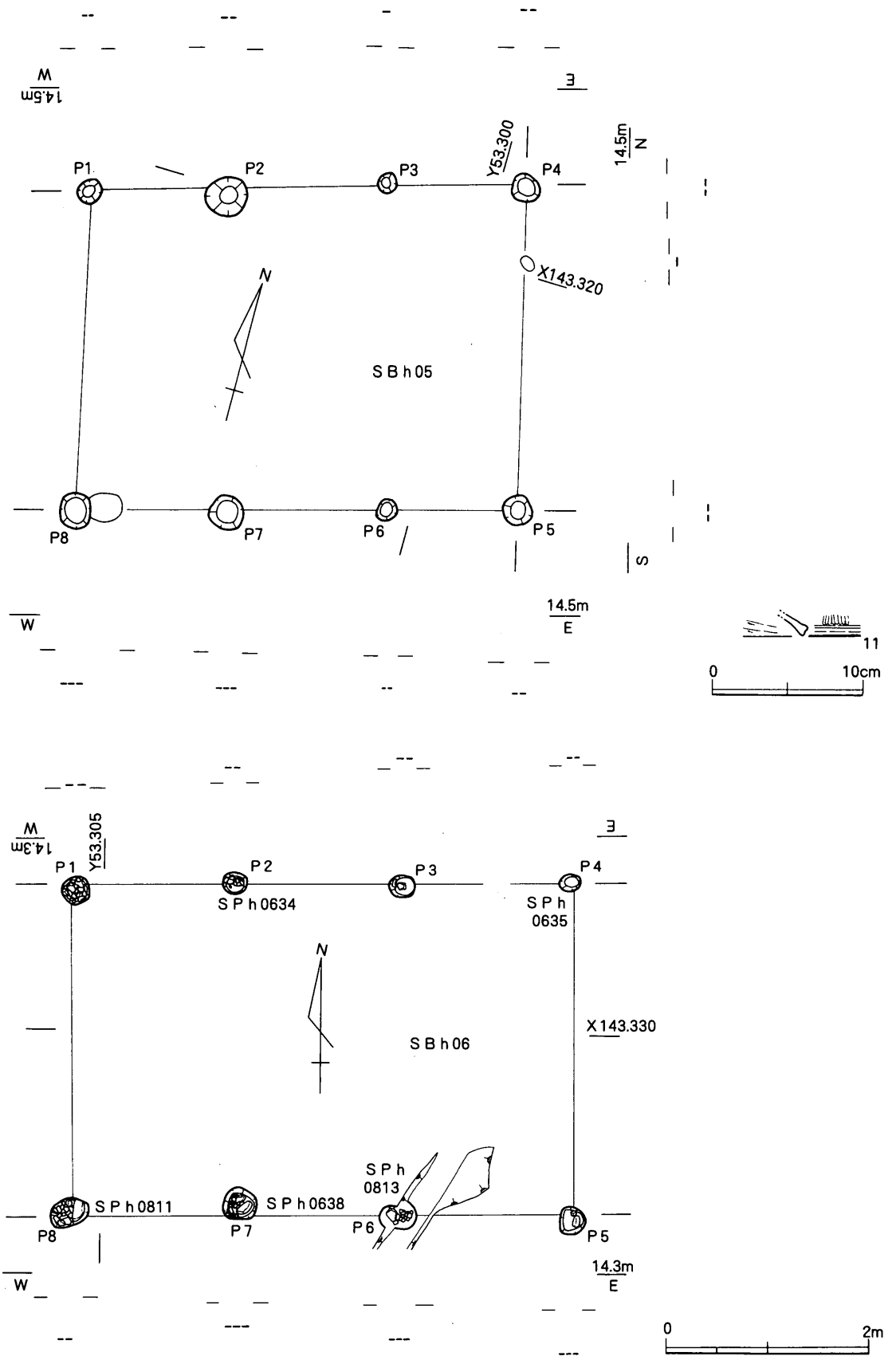
第 22 図　ＳＢｈ 01 平・断面図（S=1/60）、出土遺物実測図（S=1/4）



第23図　ＳＢｈ 02・ｈ 03・ｈ 04平・断面図（S=1/60）

限りＰ１～４・６には柱痕が残るようであるが、土層注記の記録がないため詳細は不明である。

時期　遺物が出土していないため時期決定は困難であるが、埋土の状況や周辺遺構との関係から弥生時代後期中葉の遺構と考えられる。



第24図　ＳＢｈ 05・ｈ 06平・断面図（S=1/60）、ＳＢｈ 05出土遺物実測図（S=1/4）

ＳＢｈ 03（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＢ 05　概報遺構名：ＳＢ 57）

Ⅲ－ 19 区で検出した２間×１間の掘立柱建物。桁行 3.5 ｍ、梁行 3.2 ｍの規模を有する。

Ｐ２の土層断面図には柱痕らしき表現が看取されるが、土層注記の記録が残されていないため詳細は不明である。また、Ｐ３にはＳＢｈ 06 と同様、多量の小礫が詰められている。

時期　遺物が出土していないため時期決定は困難であるが、埋土や周辺遺構との関係から弥生時代後期中葉と考えられる。

ＳＢｈ 04（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＢ 08　概報遺構名：ＳＢ 54）

Ⅲ－ 19 区で検出した２間×１間の掘立柱建物。平面形はいびつな矩形を呈する。桁行長は 3.3 ｍ、梁行長は 2.5 ｍ・1.8 ｍである。本建物の主軸方向は、ＳＢｈ 02・ｈ 03 のそれと異にし、Ｐ６とＳＢｈ 03 Ｐ３の重複関係から本建物がＳＢｈ 03 に先行することが確実である。

時期　遺物が出土していないため時期は決定し難いが、周辺遺構との関係から弥生時代後期中葉と考えられる。

ＳＢｈ 05（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＢ 06　概報遺構名：ＳＢ 55）

Ⅲ－ 19 区で検出した３間×１間の掘立柱建物。桁行長は 4.4 ｍ、梁行長は 3.1 ｍである。周辺のＳＢｈ 01・ｈ 02・ｈ 03・ｈ 06 に比べ主軸方向はやや西に振る。土層断面に関する記録が残されていないため、柱痕の有無については不明である。

出土遺物　11 は香東川下流域産の高杯。

時期　出土遺物、および埋土や周辺遺構との関係から弥生時代後期中葉の遺構と考えられる。

ＳＢｈ 06（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＢ 07　概報遺構名：ＳＢ 55）

Ⅲ－ 19 区で検出した３間×１間の掘立柱建物で、桁行は 5.0 ｍ、梁行は 3.3 ｍである。主軸方向は周辺のＳＢｈ 01・ｈ 02・ｈ 03 とほぼ同様である。柱穴内に充填されている小礫については、柱を固定するためのものか、柱抜き取り後に入れられたものか判断できない。

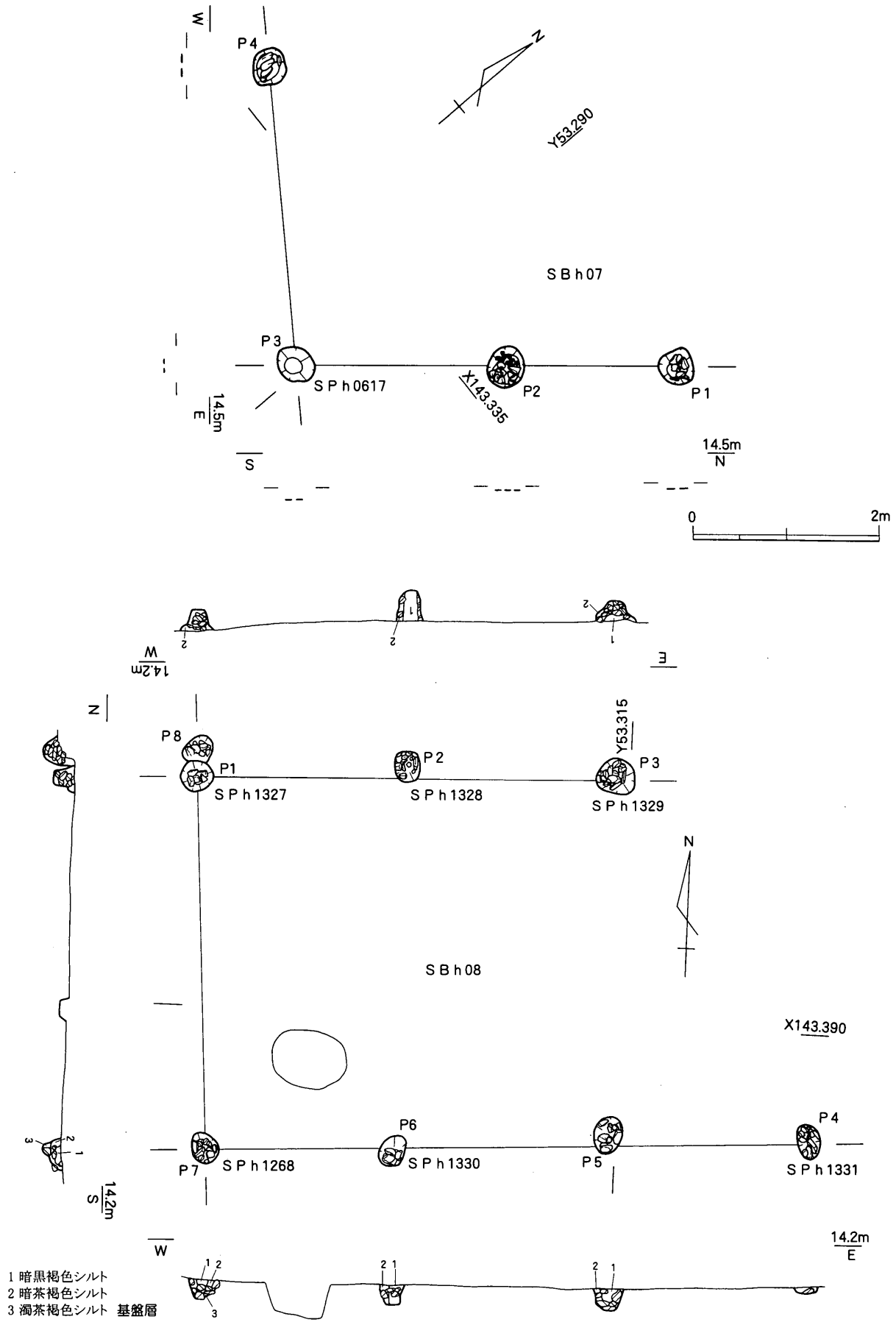
時期　遺物が出土していないため時期決定は困難であるが、埋土や周辺遺構との関係から弥生時代後期中葉の遺構と考えられる。

ＳＢｈ 07（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＢ 09　概報遺構名：ＳＢ 58）

Ⅲ－ 19 で検出した掘立柱建物。ただし、検出した柱穴４基から復元できるのは直角を挟んだ２辺のみである。ただし、Ｐ１・２・４にＳＢｈ 06・ｈ 08 同様に小礫が充填されていることから掘立柱建物と判断した。ＳＢｈ 06・ｈ 08 を参考にすれば桁行は３間の可能性が高い。なお、主軸は周辺の建物群ＳＢｈ 01・ｈ 02・ｈ 03・ｈ 06 と異なる。

時期　遺物が出土していないため時期決定は困難であるが、埋土や周辺遺構との関係から弥生時代後期中葉の遺構と考えられる。

ＳＢｈ 08（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 40 区ＳＢ 10）



第25図　ＳＢｈ07・ｈ08平・断面図（S=1/60）

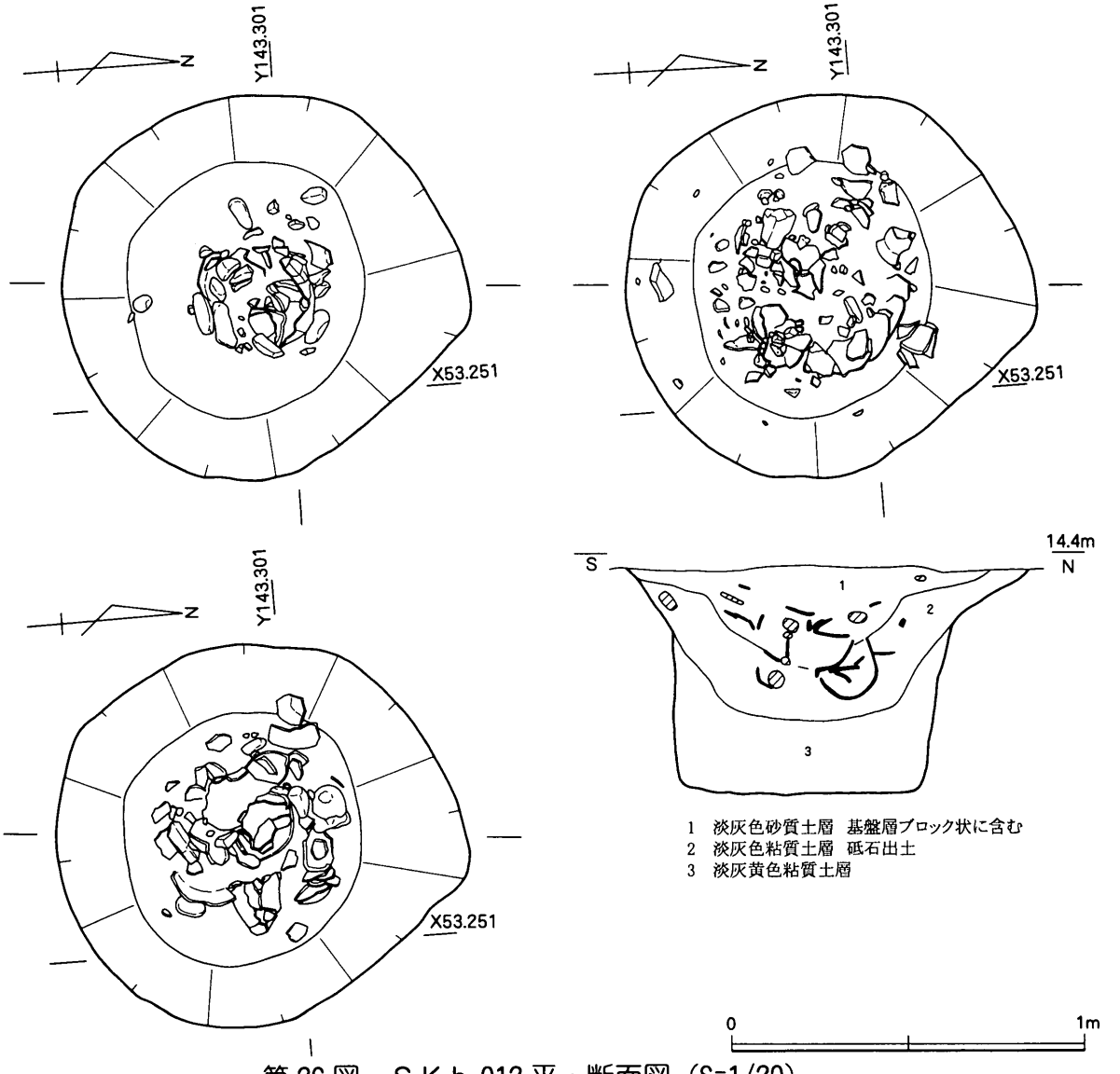
Ⅲ－40区で検出した梁行１間の掘立柱建物。北東隅の柱穴を確認していないため桁行の間数は不明であるが、ＳＢｈ05・ｈ06を参考にすれば３間の可能性が高い。梁行の長さは4.0ｍ、桁行の長さは３間とすれば6.5ｍである。Ｐ１～８には小礫が充填されている。Ｐ２については、小礫の間に柱痕が残っているため、小礫は柱の固定を目的としたものと考えられる。

時期　遺物が出土していないため時期決定は困難であるが、埋土や周辺遺構との関係から弥生時代後期中葉の遺構と考えられる。

ＳＢｈ15（概報遺構名：ＳＢ51）

Ⅲ－18区で検出した５基の柱穴（ＳＰｈ0429～ｈ0433）は、発掘調査時には掘立柱建物とは認識されていないが、概報作成時に２間×１間の掘立柱建物とされている。復元される南北辺と東辺によるコーナー部分が直角とならないこと、ＳＢｈ06・ｈ08に見られるような小礫の充填も認められないことから、掘立柱建物とする積極的な根拠に乏しいが、ここでは概報作成時の見解を尊重し、掘立柱建物としておく。

時期　埋土や周辺遺構との関係から弥生時代後期中葉の遺構と考えられる。なお、遺物は出土し



第26図　ＳＫｈ012平・断面図（S=1/20）

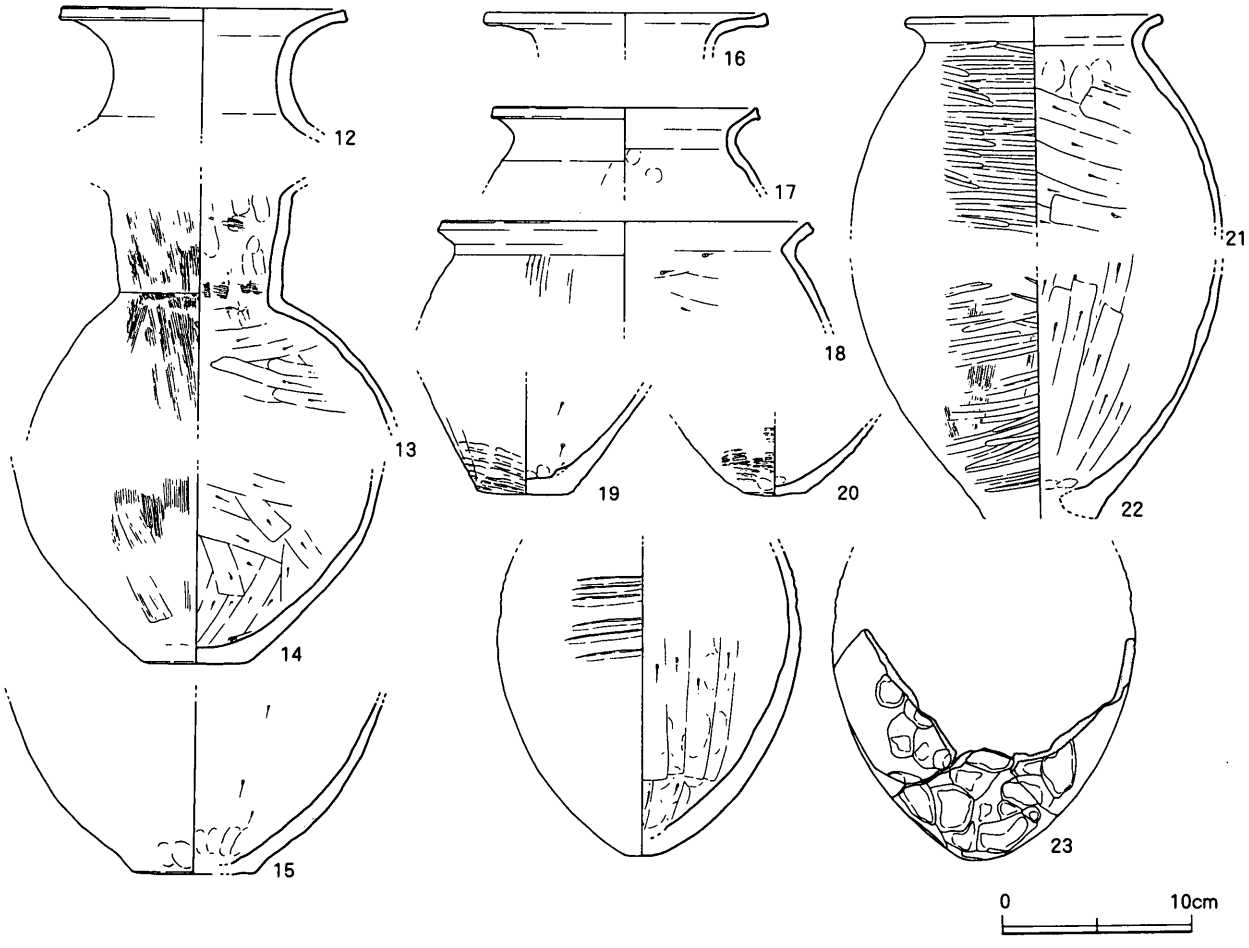
ていない。

土坑（ＳＫ）

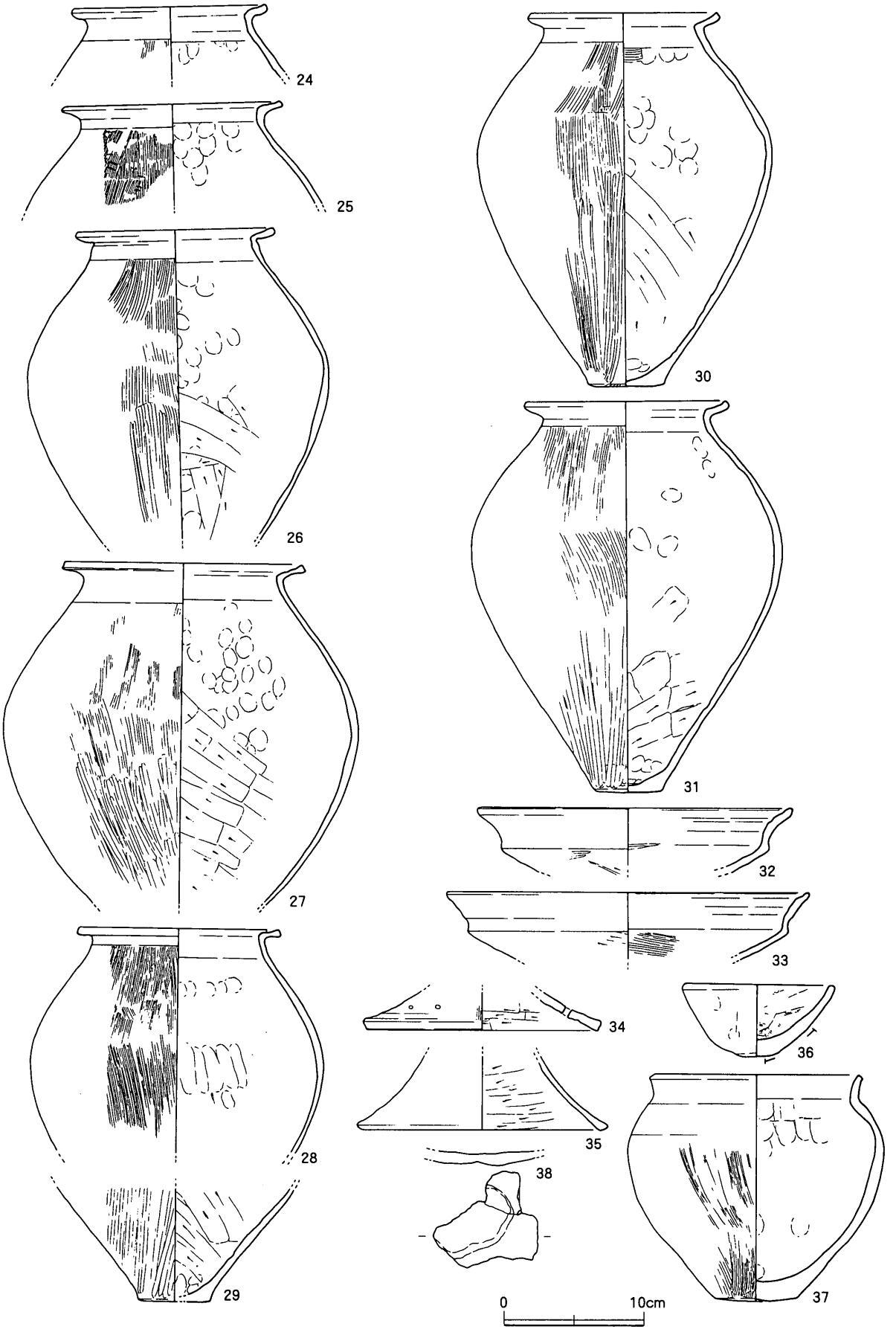
ＳＫｈ 012（発掘調査時遺構名：Ⅲ－16区ＳＫ12　概報遺構名：ＳＫ13）

Ⅲ－16区東部、ＳＨｈ 02の北西で検出した土坑。壁面の立ち上がりは、底部から中位にかけては垂直に近いが、それより上位はやや緩やかとなる。このような断面形状から本土坑が井戸である可能性も考えられるが、底部付近の基盤層が湧水層であるのか否かについての記録がないため判断はできない。下層の３層は遺物をほとんど含まないが、１・２層は多量の弥生土器と礫を含み、１層は基盤層ブロックを含有することから、埋め戻しに際して廃棄が行われたものと考えられ、出土遺物の一括性は高いといえる。

出土遺物　12～15は白色系の壺。12は口縁部の断面の一部に黒化層が見られるのみで、白色系では比較的焼成が良好な部類に入る。13の長頸壺は頸部上位がやや外開きになる形態である。断面には黒化層が認められ、胴部内面に至っては表面に黒化層が露出している。この露出は器面の摩滅に伴うものであるが、ヘラケズリが明瞭に残ることを鑑みれば、焼成の良好な部分が残存していたとしてもかなり薄いものであったと思われる。13と同一個体の可能性がある14も、断面に黒化層が存在し、内面の器面は全て黒化層が露出している。摩滅が顕著な15はかろうじて内面にヘラ

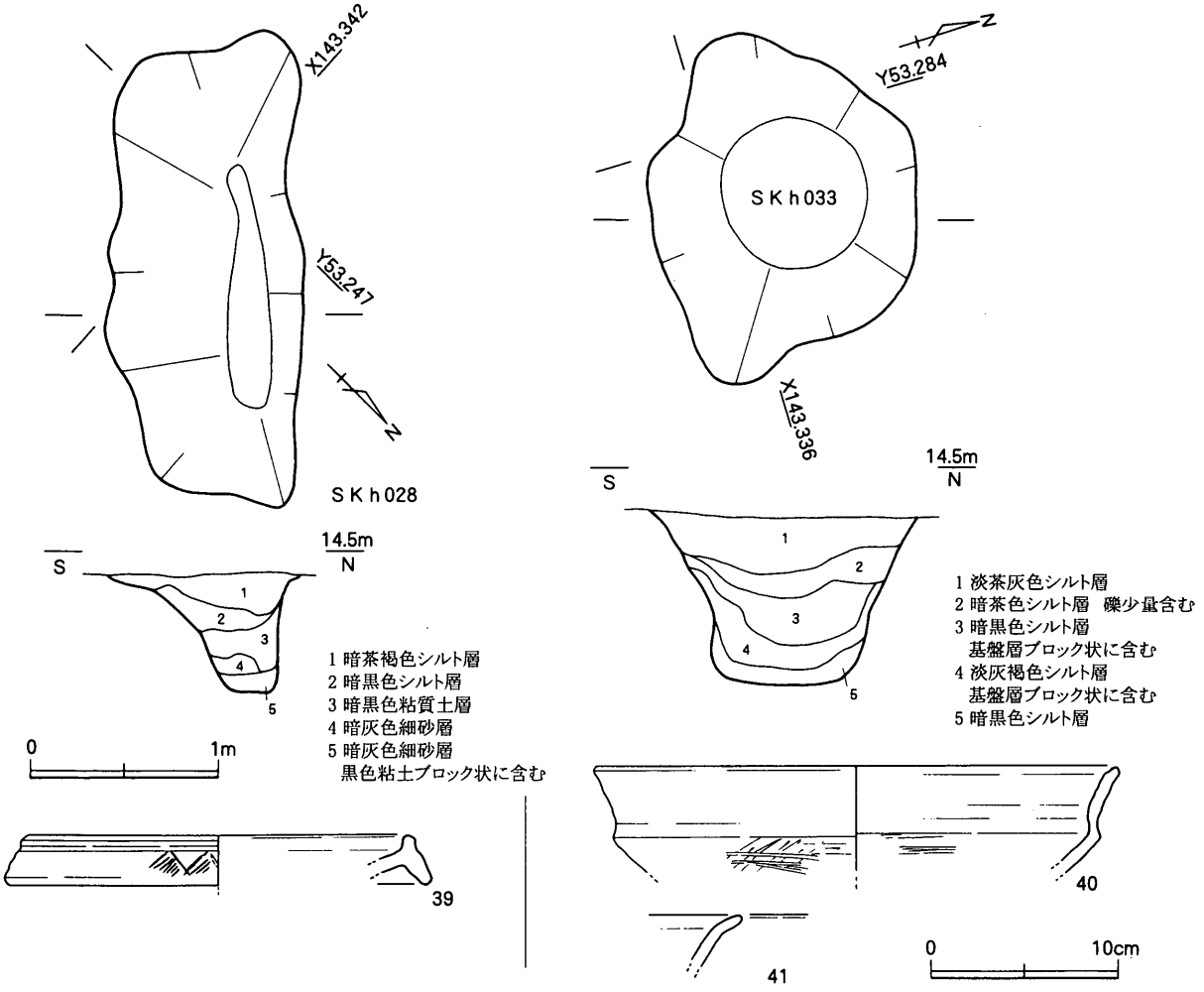


第27図　ＳＫｈ 012出土遺物実測図１（S=1/4）



第28図　ＳＫｈ 012出土遺物実測図２（S=1/4）

ケズリが確認できるのみである。やはり断面の大部分は黒化層が占め、内外面の器面から1 mm程度にのみ良好な焼成が確認できる。16は香東川下流域産の壺口縁部。17～23は白色系の甕。頸部の屈曲が緩やかな17に対して、18は頸部内面に明瞭な屈曲部を有する。なお両者とも摩滅により器表面の大部分が剥落している。19は底部近くに若干黒化層が見られるのみである。対称的に20の断面には厚い黒化層が存在し、内外面ともに器面から1 mm以下にのみ焼成良好な部分が認められる。21･22は接点がないものの同一固体と考えられる。外面には縦方向のハケの後、横方向のヘラミガキが密に施されている。焼成は良好で断面に黒化層が見られない。23は摩滅が顕著で、外面の調整はわずかにタタキ痕が確認できるのみである。外面底部付近の器面には、連続する不正円形の剥離面が認められる。24～31は香東川下流域産の甕。26の胴部上半部に施されるハケは、一般的な香東川下流域産のものに比べて条間の幅が広い。また、断面の内面付近には薄い黒化層が確認でき、内面の大部分の器面が剥落していることから、その黒化層が露出している。同様に、30の断面にも内面付近に若干の黒化層が見られる。32～35は香東川下流域産の高杯。33の内面には凹線状の窪みが残る。34は破片資料であるが、２孔一対の透かしが認められる。36・37は白色系の鉢。36は摩滅が著しいが、断面には黒化層が見られない。37の口縁部は、ナデにより端部に平坦面がつくり出される一方、外面の仕上げが甘いために粘土がやや下方にはみ出す現象が生じている。底



第29図　ＳＫｈ 028・ｈ 033平・断面図（S=1/40）、出土遺物実測図（S=1/4）

部から胴部下端の一方にのみ黒班が認められる。また、断面には黒化層が存在し、摩滅は顕著である。38は器種不明の白色系の破片資料。器表面には不整円形の剥離が見られる。

時期　出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。

ＳＫｈ 028（発掘調査時遺構名：Ⅲ－17区ＳＫ28）

Ⅲ－17区で検出された平面形が長方形に近い不整形を呈する土坑。壁面は、検出面付近まで垂直に近い角度で立ち上がる。写真を見る限り、底部近くの最下層にのみではなく、それより上位の層中にもブロックの含有が認められる。以上の状況から短期間での埋め戻し行為が想定できる。

出土遺物　39は白色系の壺口縁部。拡張された口縁の外面には凹線文施文の後、鋸歯文が施されている。摩滅が著しい。

時期　出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。

ＳＫｈ 033（発掘調査時遺構名：Ⅲ－18区ＳＫ33）

Ⅲ－18区で検出した平面形不整円形の土坑。埋土はブロックを含有し、最終的には埋め戻されたことが分かる。

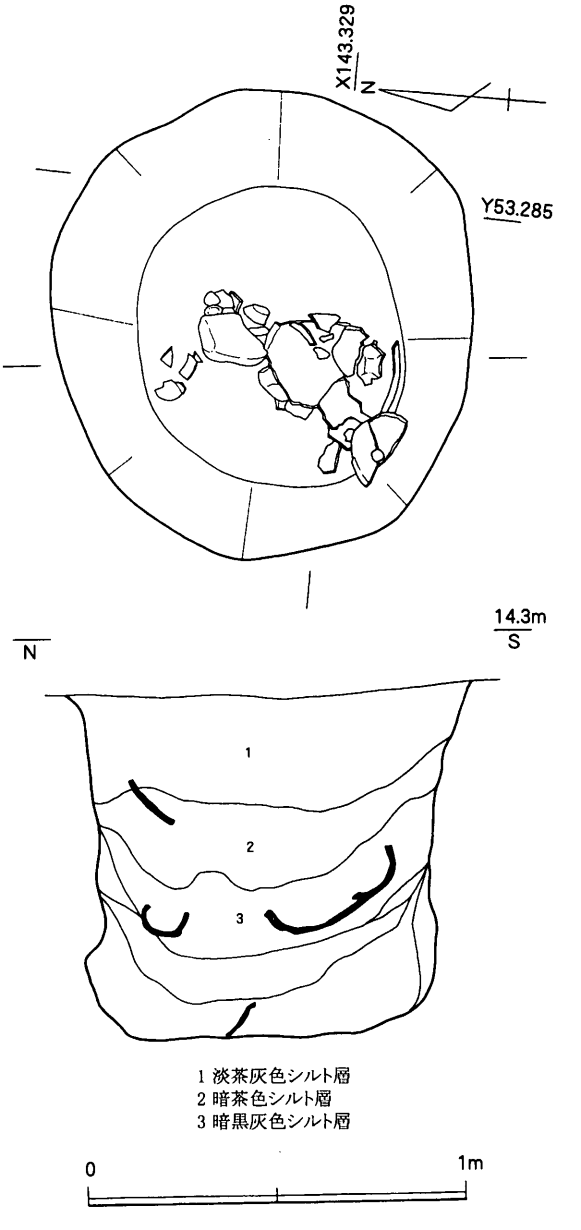
出土遺物　40は香東川下流域産の高杯の杯部。41は小片で器種の断定は困難だが、高杯の口縁部片と判断した。胎土は香東川下流域産に類似する。

時期　40から弥生時代後期中葉と考えられる。

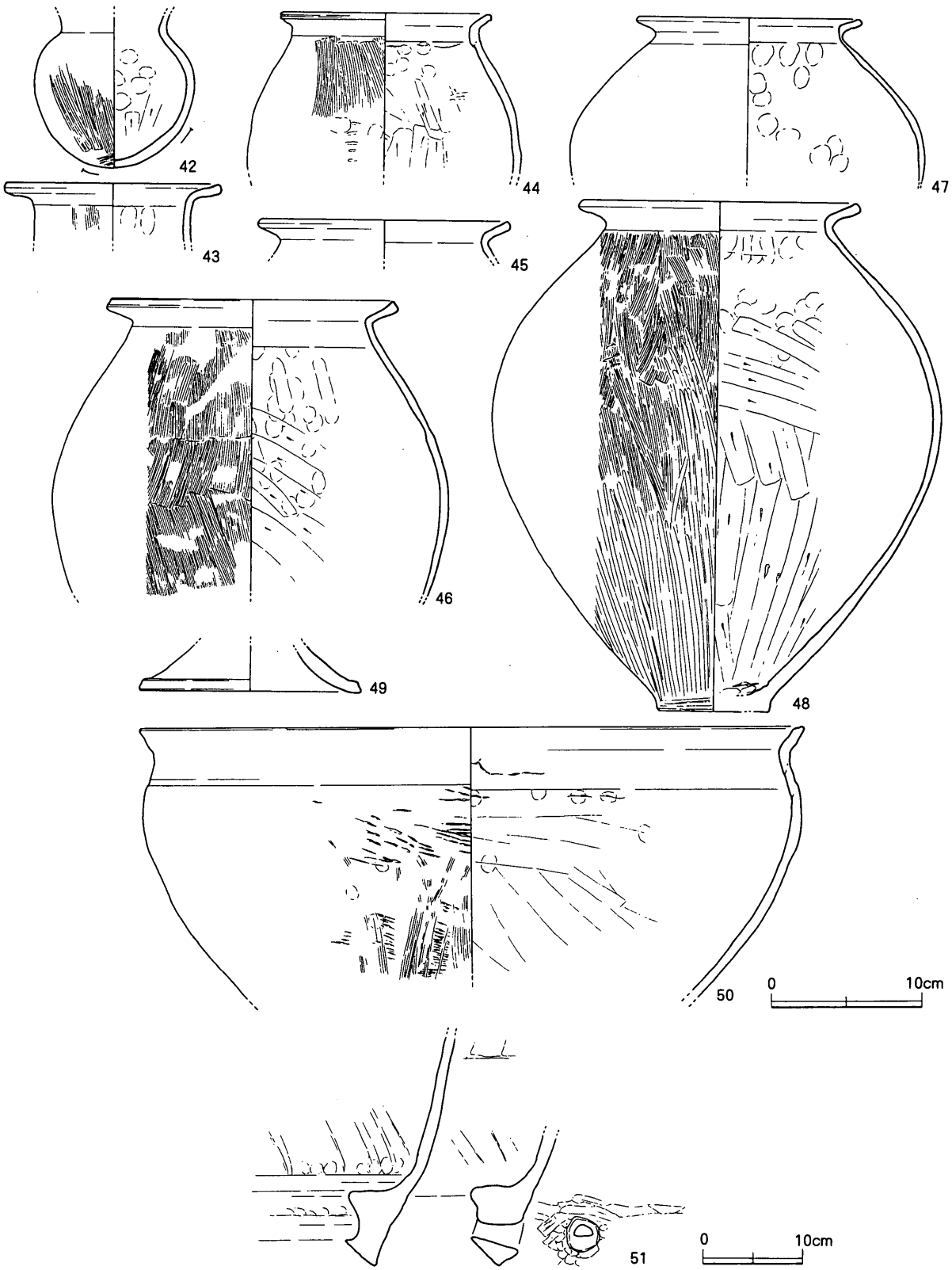
ＳＫｈ 034（発掘調査時遺構名：Ⅲ－18区ＳＫ34
概報遺構名：ＳＫ14）

Ⅲ－18区で検出した平面形円形の土坑。壁面の立ち上がりは急で、底部付近はややオーバーハングする。写真からは、埋土中に基盤層ブロックが含まれることが確認され、本土坑が比較的短期間で埋め戻されたことが想定できる。土坑内中位からは残存状況の良好な弥生土器がまとまって出土し、埋土の状況も加味して出土遺物の一括性は高いと判断できる。

出土遺物　42は底部に平坦面を持たない壺もしくは甕。胎土は香東川下流域産に類似し、黒雲母の他に角閃石も含む。底部から胴部下半の一方向にかけて黒班が認められる。43は白色系の長頸壺。器表面の剥落が著しく、断面には黒化層が見られる。44は白色系の甕。外面のハケは頸部より若干下った位置から施されている。外面の焼成は良好



第30図　ＳＫｈ 034平・断面図（S=1/20）



第31図　ＳＫｈ 034出土遺物実測図（S=1/4・1/6）

だが、内面はやや不良で黒化層が露出している部分もある。45～48は香東川下流域産甕。胴部がやや膨らむ形態の48には、一部胴部最大径より上位にまでヘラミガキが施されている。49は白色系の高杯脚部。摩滅が顕著で調整は確認できない。この他に図化は行っていないが香東川下流域産

高杯の小片がある。50は白色系の鉢。51は近世末～近代の土師質土器風呂釜。明らかに混入と見られるが、詳細な出土状況は不明である。

時期　51を除いた遺物は概ね弥生時代後期中葉に収まり、本土坑の埋没はその時期と考えられる。なお、42は底部形態からやや新しい時期に比定される可能性もあるが、その他の遺物の量的過多から遺構の埋没時期に影響はないと考える。

ＳＫｈ 052（発掘調査時遺構名：Ⅲ－18区ＳＫ52）

Ⅲ－18で検出した土坑。平面形は楕円形に近い不整形を呈する。

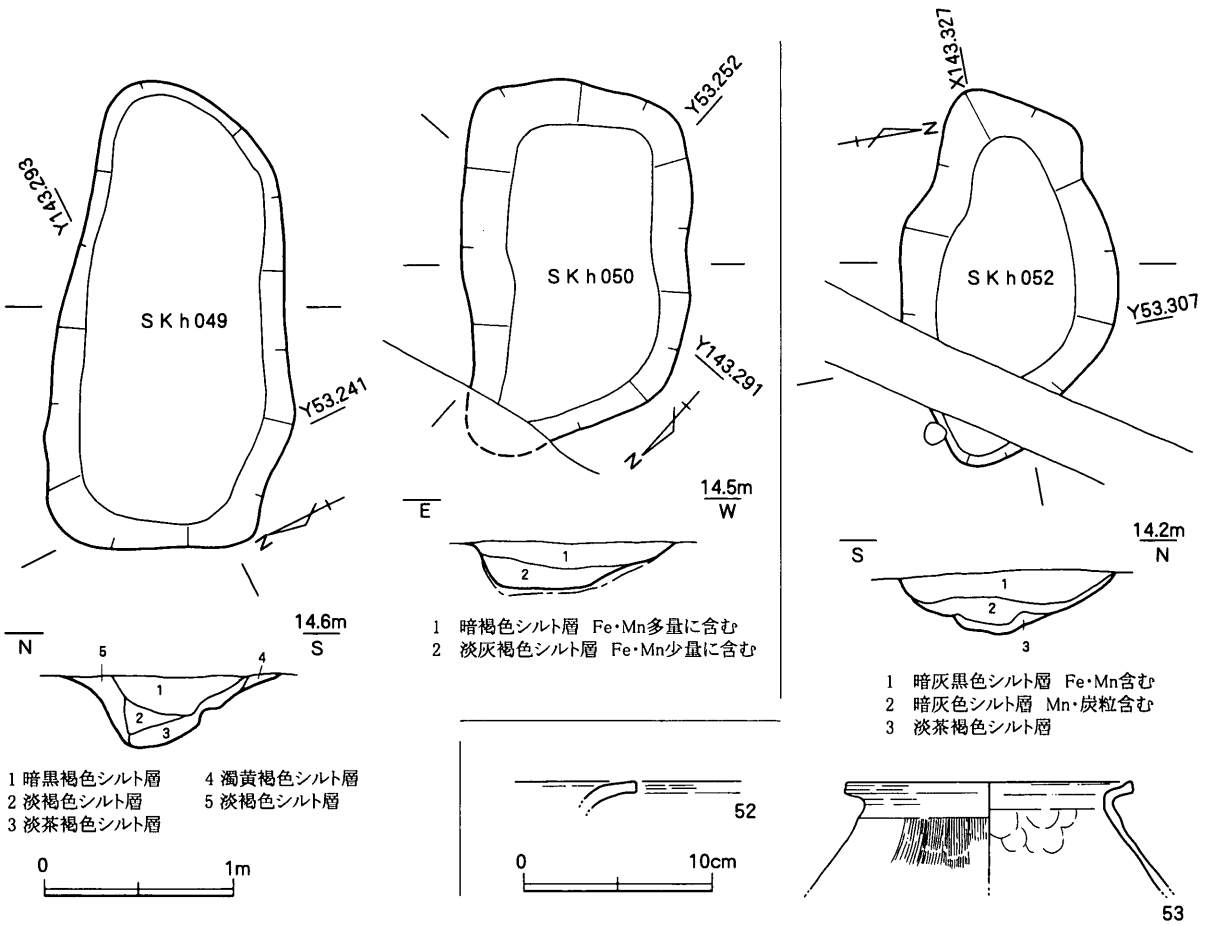
出土遺物　52は白色系の壺口縁部片と思われるが、小片のため断定はできない。53は香東川下流域産の甕。

時期　53および周辺に展開する遺構との関係から、弥生時代後期中葉と考えられる。

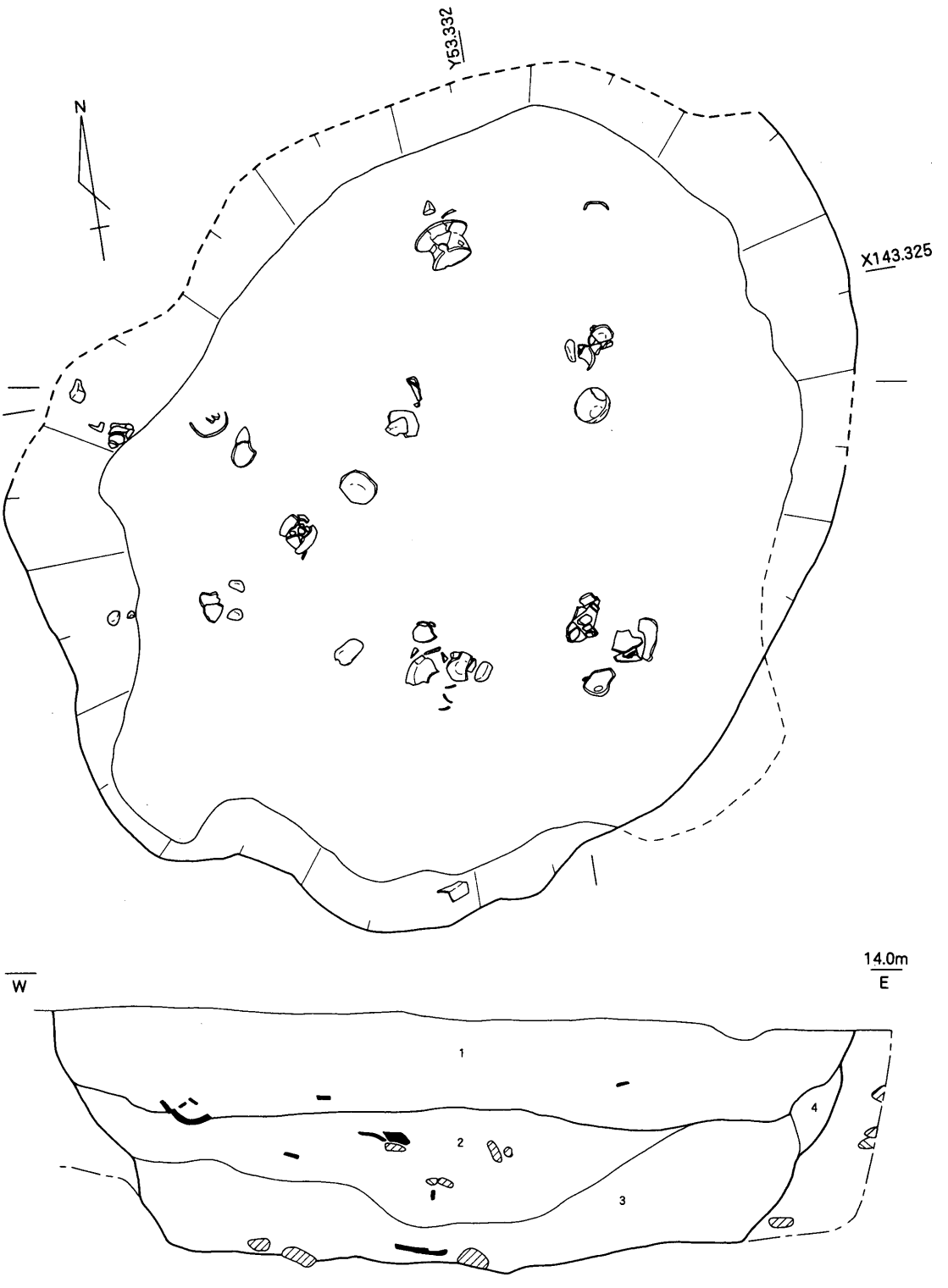
ＳＫｈ 062（発掘調査時遺構名：Ⅲ－19区ＳＫ62）

Ⅲ－19区で検出された平面形が不正円形の土坑。埋土は最下層（４層）が淡褐色であるほかは、黒色系粘質シルト～シルト層である。さらに、写真からは埋土に細かなブロックが含まれていることが分かる。よって本土坑は短期間で埋め戻されたものと考えられる。また、中位付近出土の弥生土器は、散在的な出土状況ではあるものの、埋土の状況から一括性は高いと思われる。

出土遺物　54～57は白色系の壺。いずれも、断面には内外面の器表面より1.0～1.5mm程度を

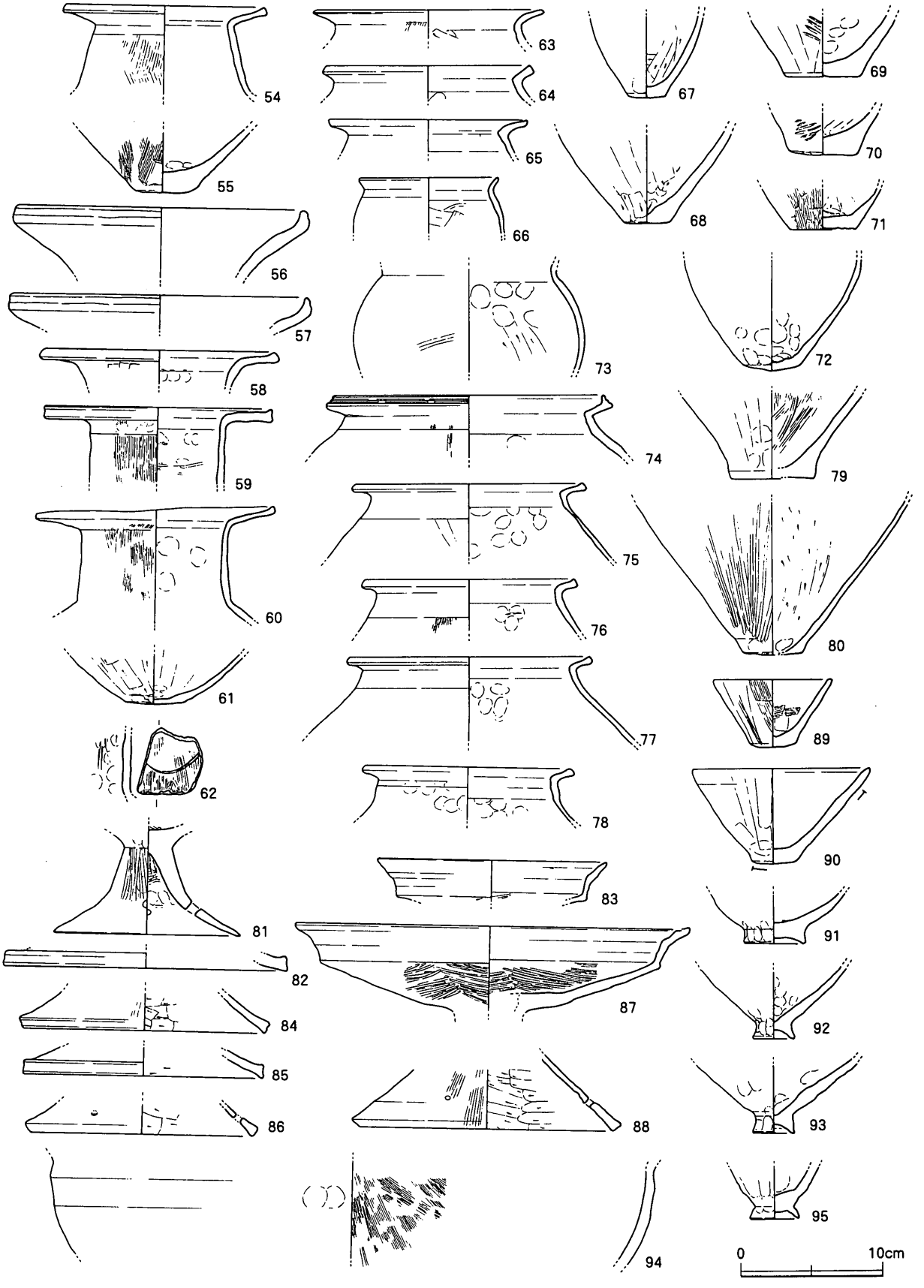


第32図　ＳＫｈ 049・ｈ 050・ｈ 052平・断面図（S=1/40）、出土遺物実測図（S=1/4）



1 淡黒色シルト層　径2～3cmの礫多量に含む　上層
2 暗黒色シルト層　径2～3cmの礫多量に含む　下層
3 暗黒色粘質シルト層　下層
4 淡褐色シルト層　やや濁った色調　下層

第33図　ＳＫｈ 062 平・断面図（S=1/20）



第34図　ＳＫｈ 062出土遺物実測図（S=1/4）

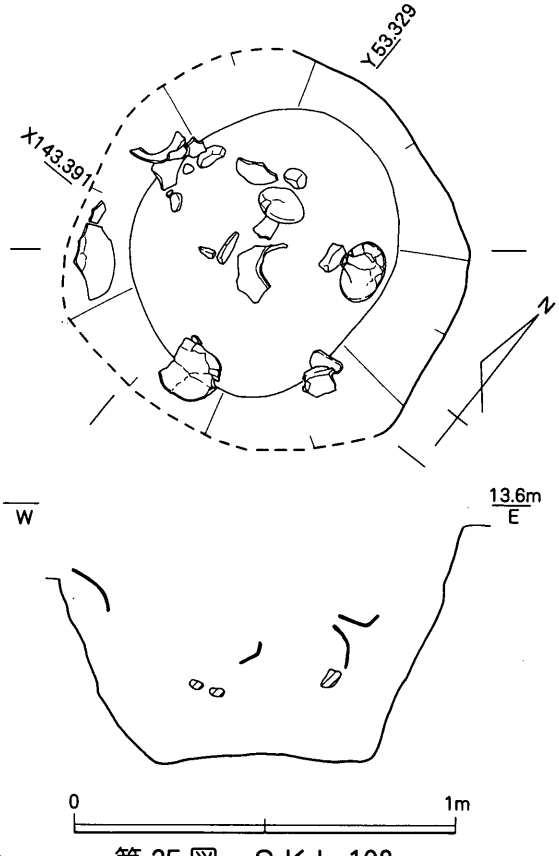
除いて黒化層が確認できる。56･57 の口縁部は外に大きく開き、端部は緩く屈曲してほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部外面にはやや広めで浅い１条の沈線が施されている。54 ～ 60 は香東川下流域産の壺。61 の壺底部外面には顕著なヘラケズリが確認できる。胎土中には黒雲母と角閃石が含まれるが、石英粒が目立つことや色調の差異から香東川下流域産の胎土とは確実に区別できる。62 は白色系長頸壺の頸部片。外面にはヘラにより弧状の文様（記号）が描かれている。63 ～ 73 は白色系の甕。63・65 ～ 67・70 ～ 72 の断面には黒化層が見られる。いずれも幾分かは摩滅しているが、特に 72 は顕著で内外面ともに器面は残存していない。71 は外面底端部から上位に向かってハケが施されている。73 は白色系とも香東川下流域産とも異なる胎土を有する甕。石英粒を多く含み、若干の黒雲母・角閃石が認められる。74 ～ 78・80 は香東川下流域産の甕。74 の口縁部は上方に拡張され、その外面には凹線文が施されている。甕の底部と想定される 79 の胎土は、細かな角閃石を多量に含有し、後期初頭の胎土１類によく似る。ただし、内面にハケが施され外面の仕上げが板ナデで行われているなど、その調整手法は異なる。81・82 は白色系の高杯。81 の断面には厚い黒化層が看取され、摩滅もかなり顕著で器表面はほとんど残っていない。83 ～ 88 は香東川下流域産高杯。89 ～ 94 は白色系の鉢。90 は白色系の中では比較的焼成が良好なもの。対して 91 は摩滅がかなり激しく、断面には黒化層が認められる。94 の胎土は香東川下流域産に類似するが、含まれる石英粒がやや多いようにも思える。95 は白色系の製塩土器。香東川下流域産のものに比べて器壁が厚い。

時期　74 は弥生時代後期初頭に位置づけられる。その他の出土遺物は、概ね弥生時代後期中葉の所産であり、本土坑の埋没時期はこの段階として捉えられる。

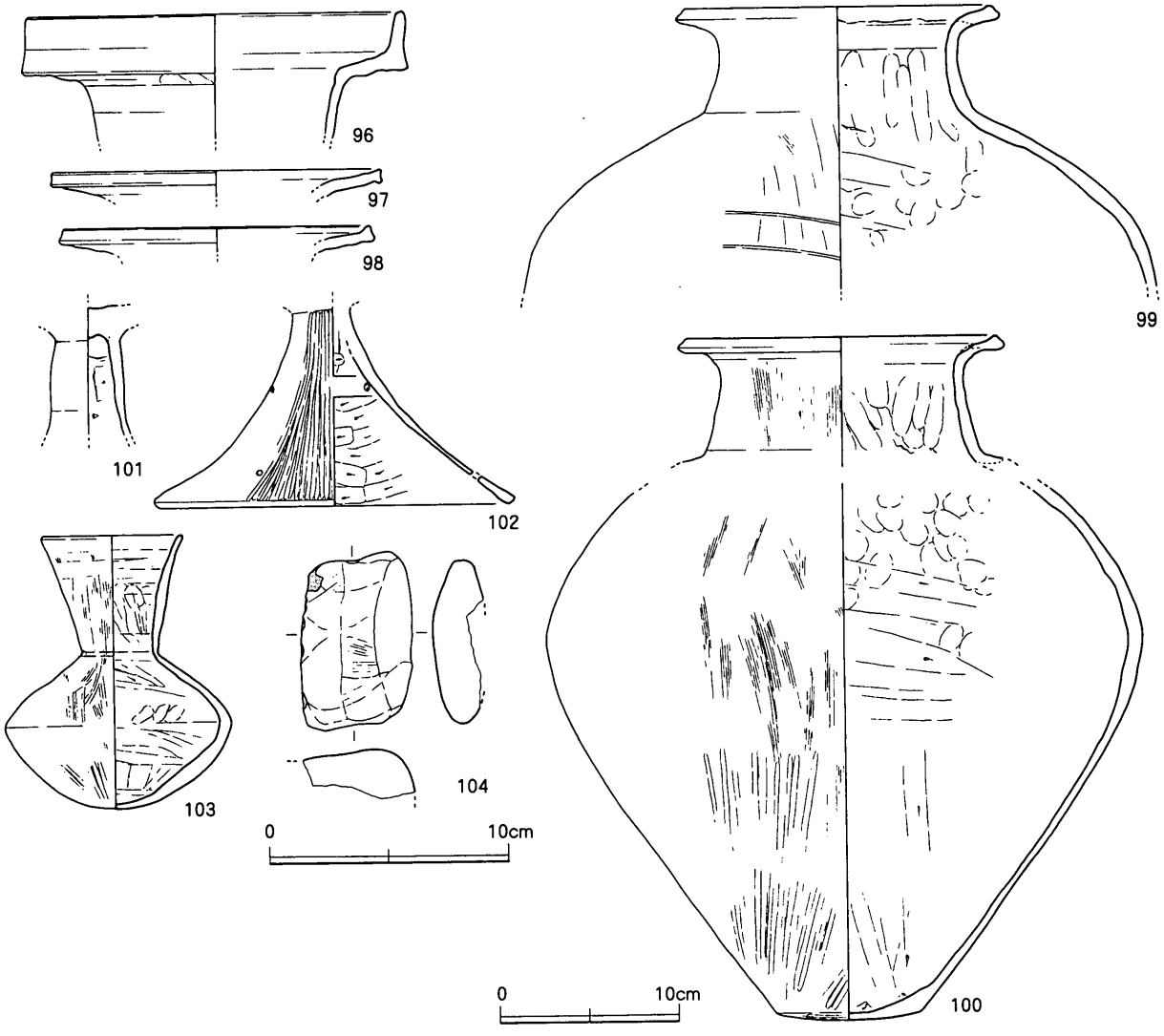
ＳＫｈ 108（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 40 区ＳＫ 108）

Ⅲ－ 40 区で検出された平面形が円形の土坑。土層断面の記録が無いため詳細な堆積状況等は不明であるが、写真では、埋土に小礫と基盤層ブロックの含有が確認できる。また、中位付近から比較的残存状況の良好な弥生土器がまとまって出土している。この弥生土器の出土状況は、短期間に土坑が埋め戻される過程によるものと考えられ、出土遺物の一括性は保障されているといえよう。

出土遺物　96 は白色系の壺。断面には内外面から 0.5 ～ 1.0mm 程度を除いて黒化層が確認できる。摩滅が著しく、内面に至っては器面がほとんど残存していない。97 ～ 100 は香東川下流域産の壺。99 は摩滅が激しく、外面のヘラミガキはかろうじて確認できる程度である。100 は頸部より上位と胴部以下の２破片の接点は無いものの、胎土・復元径から同一個体と判断した。101 は白色系高杯脚部片。摩滅が顕著で、断面には杯部との接合部分を中心と



第 35 図　ＳＫｈ 108
平・断面図（S=1/20）



第36図　ＳＫｈ 108出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

して黒化層が見られる。102は香東川下流域産の高杯脚部。上下２段の孔が３方に認められる。103は香東川下流域産の直口壺。砂岩礫104には被熱の痕跡が認められる。

時期　出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。

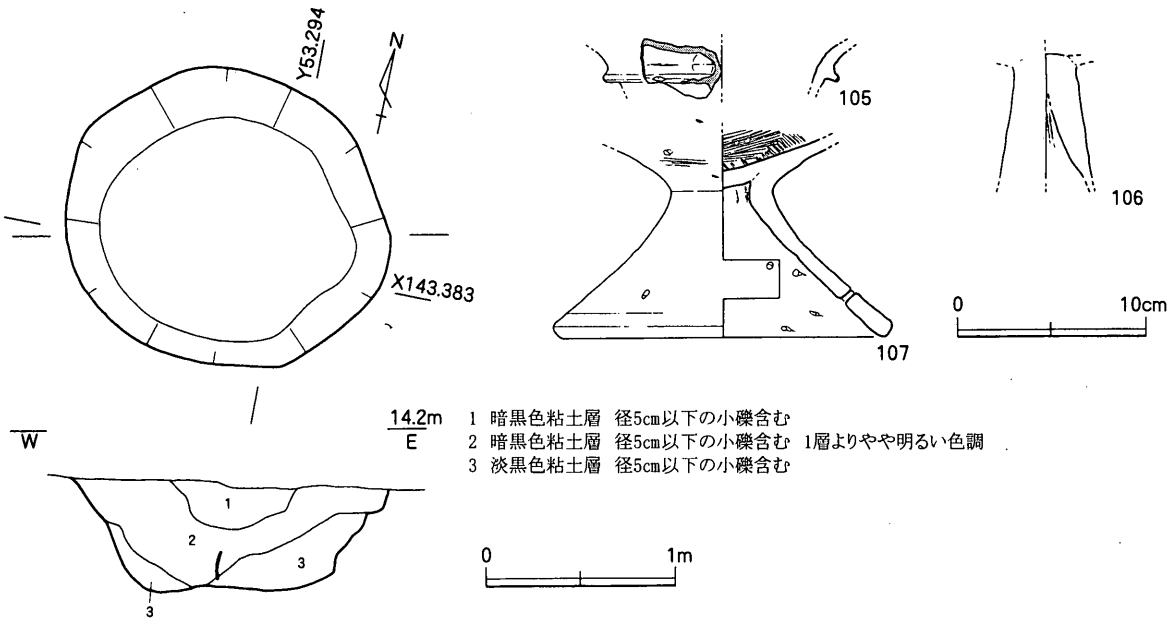
ＳＫｈ 129（発掘調査時遺構名：Ⅲ－40区ＳＫ129）

Ⅲ－40区で検出した平面形円形の土坑。埋土は径５cm以下の小礫が含まれる黒色粘土層で構成される。さらに写真からはブロックの含有も確認され、埋め戻された痕跡が認められる。

出土遺物　突帯を有する小片105の胎土は白色系に類似するが、含まれる石英の粒径がやや大きい。前期の壺頸部の可能性も考えられるが、その場合、実測図の天地は逆となる。106は摩滅が激しい白色系の高杯脚部片。断面の一部には黒化層が認められる。107は香東川下流域産高杯。２段の孔はやや位置を違えて３方に穿たれている。

時期　出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。

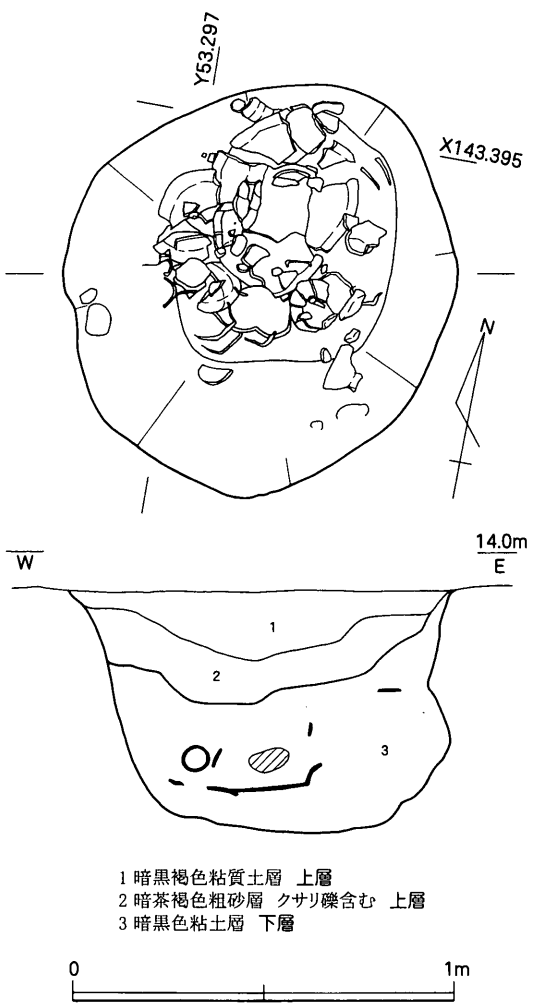
ＳＫｈ 130（発掘調査時遺構名：Ⅲ－40区ＳＫ130）



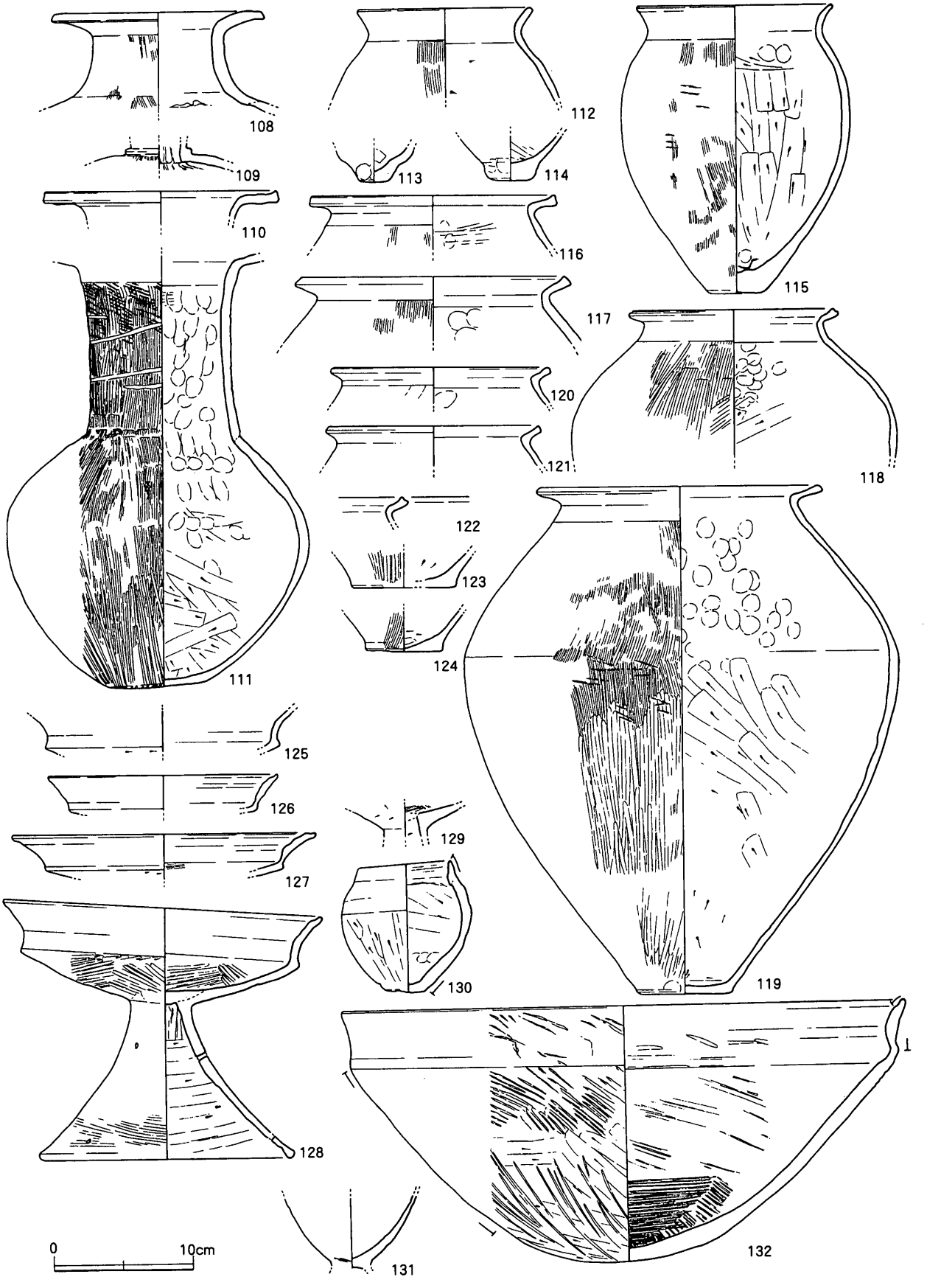
第37図　ＳＫｈ 129 平・断面図（S=1/40）、出土遺物実測図（S=1/4）

Ⅲ－40区で検出した土坑。平面形はやや楕円形に近い不整円形を呈する。底部に近い3層からは残存状況の比較的良好な弥生土器がまとまって出土している。写真では、周囲の基盤層に含有されている小礫や、細かなブロックが埋土中に認められるため、最終的には埋め戻されたものと考えられる。これらの状況から、出土遺物は短期間の埋め戻しとともに廃棄されたものと想定され、出土遺物の一括性は高いと判断できる。

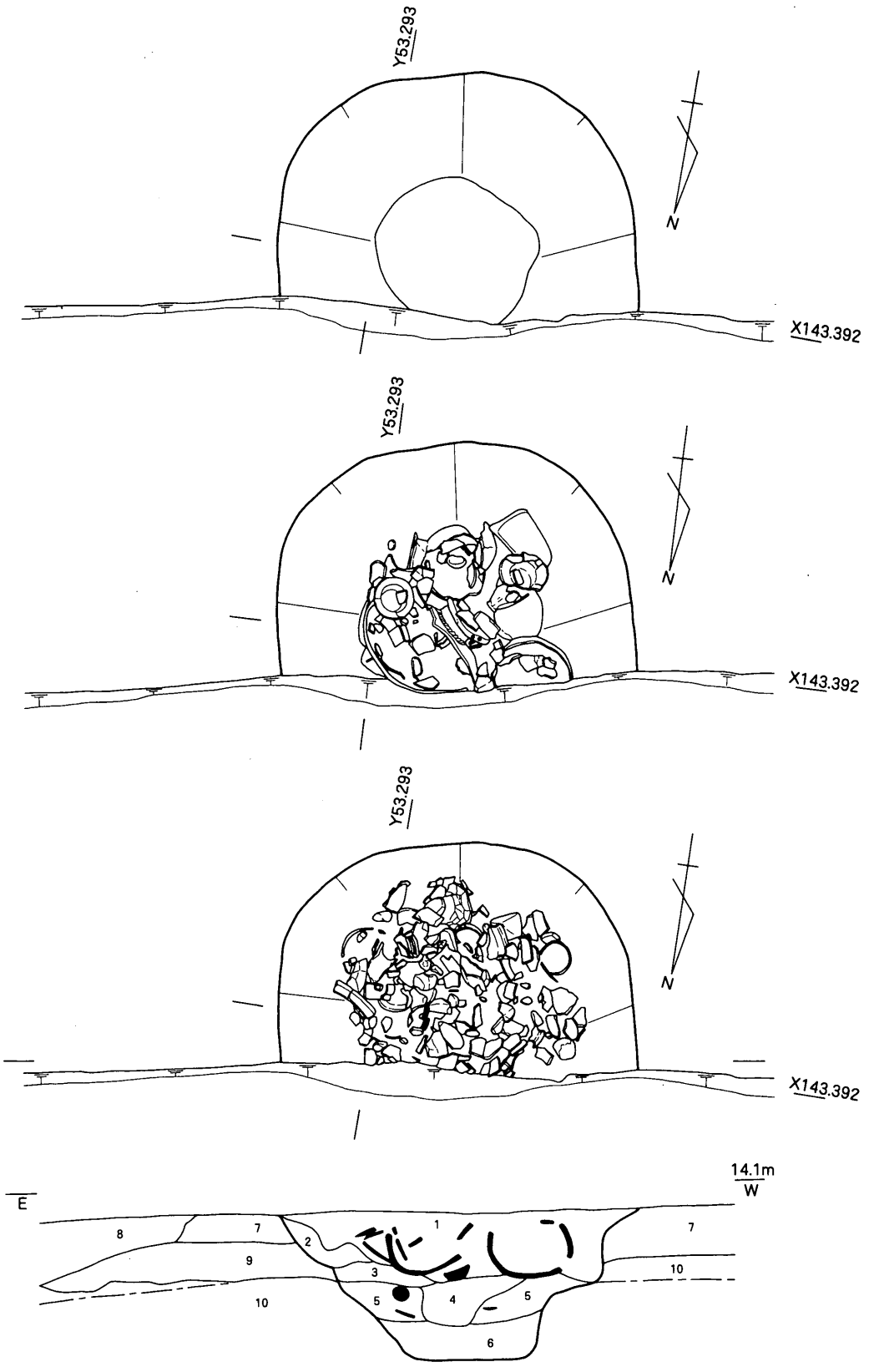
出土遺物　108は口頸部境および頸胴部境の屈曲が緩い白色系の広口壺。断面の一部には黒化層が見られる。109は壺の破片と思われるもの。頸胴部境と思われる部分には突帯が巡らされ、それより下位には縦方向のヘラミガキが施されている。110・111は香東川下流域産の壺。111は調整の残りが良好で、頸部にはハケに先行するタタキの痕跡が見られる。112～115は白色系の甕。113～115はいずれも断面に黒化層が認められ、摩滅が著しい。112についても、摩滅は顕著で器面の残りは良くない。116～124は香東川下流域産の甕。116～119は口縁部および頸部に強い横ナデが施されることにより、口縁端部がやや厚くなっている。125～129は香東川下流域産の高杯。130は白色系の鉢。仕上げは非常に甘く、内面の頸胴部



第38図　ＳＫｈ 130
平・断面図（S=1/20）



第39図　ＳＫｈ130出土遺物実測図（S=1/4）



1 暗赤褐色粘質土層　礫含む
2 淡灰白色粗砂層　9層の再堆積
3 暗黒褐色粘質土層
4 暗黒褐色粘質土層　3層より色調暗い　礫含む
5 暗黒褐色粘質土層　砂混じり礫含む
6 暗黒色粘土層
7 淡茶褐色砂礫層　基盤層
8 淡灰褐色粗砂層　基盤層
9 暗褐色粗砂層　基盤層
10 黄灰色粘土層　基盤層

0　1m

第40図　ＳＫｈ 141 平・断面図（S=1/20）

境には接合痕が残る。断面には、内外面の器面から 0.5mm 程度を除いて黒化層が認められる。さらに器面の剥落によって一部黒化層が露出している。131 は白色系の脚台付鉢。断面には黒化層が見られる。器面の摩滅によって調整は確認できない。132 は香東川下流域産の大型鉢。外面の胴部上半から口縁部にかけてタタキの痕跡が認められる。一方の胴部とその反対側の口縁部に黒班がある。

時期　出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。

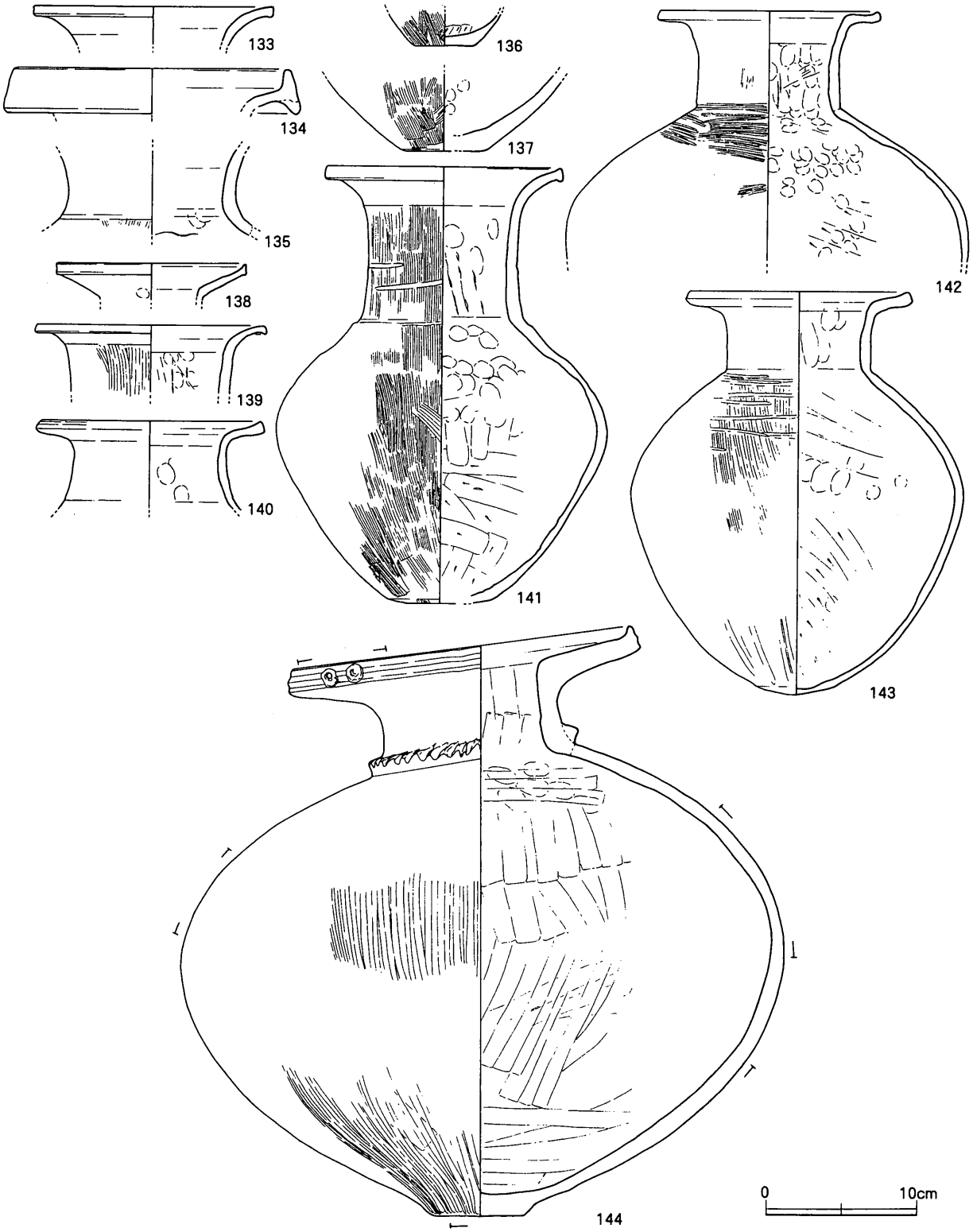
ＳＫｈ 141（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 40 区ＳＫ 141）

Ⅲ－ 40 区で検出した平面形が円形と想定される土坑。なお、北 1/3 程度はトレンチにより破壊されている。写真からは、本土坑がブロックを含む埋土で構成されることが確認され、最終的に埋め戻されたものと想定できる。中位より上層には、小礫とともに比較的残存状況の良好な土器が含まれる。これらの遺物は、埋土の堆積状況も鑑みて一括廃棄の可能性が高いと考えられる。

出土遺物　133 ～ 137 は白色系の壺。133 については高杯脚部、136 については小型の甕底部の可能性もある。135 は焼成がやや不良で、断面の中位から内面にかけて黒化層が存在する。摩滅も顕著である。138 は口頸部境が強く屈曲し、口縁端部がやや上方に立ち上がる形態の壺。胎土は白色系とやや異なる。139・141 は香東川下流域産の長頸壺。140・142・143 は広口壺。143 は、通常の広口壺に比べて胴部最大径が長頸壺同様やや下った位置にあり、底部に明瞭な平坦面が認められないもの。144 はラグビーボール状の胴部を有する広口壺。口縁端部外面には２条の凹線文と２個１組の円形浮文が貼付され、頸胴部境には突帯が巡らされている。外面の調整の残りは良好でないものの、かろうじて縦方向のヘラミガキが確認できる。黒班は、一方が胴部最大径付近および胴部下半部から底部にかけて、もう一方が胴部最大径やや上位と口縁部内面にある。なお、144 はにぶい黄橙色を呈し、胎土中には径 3.0mm 以下と比較的大きな砂粒（石英もしくは長石）を含み、白色系、香東川下流域産とは明瞭に胎土が異なる。145 ～ 148 は白色系の甕。つくりが粗雑な 145 は、焼成がやや不良なためか摩滅が激しい。外面にタタキ痕が明瞭に残る 146 も内面の仕上げが甘く、２段の接合痕が残る。黒班は、一方の頸部やや下位から底部にかけて認められる。145･146 ともに、断面には内外面の器表面から 1.0 ～ 1.5mm 程度を除いて黒化層が存在する。147 の内外面の口縁部から頸部にかけては、強い横ナデが施されている。149 ～ 157 は香東川下流域産の甕。158 ～ 161 は香東川下流域産高杯。脚部 160 の外面に認められる円形の窪みは内面にまで貫通せず、「孔」となっていない。162 は装飾高杯の脚部片。胎土中には細粒の角閃石が多量に含まれ、弥生時代後期初頭の胎土１類に類似する。163・164 は断面に黒化層が確認できる白色系の鉢。163 は摩滅が顕著で、器表面が剥落している内面には黒化層が露出している。165・166 は香東川下流域産の鉢。165 は高杯とも考えられる。167 の鉢は、胎土中に黒雲母・角閃石を少量含むが、石英の粒径がやや大きい点などが香東川下流域産と異なる。168 は香東川下流域産の直口壺。径は、小破片からの復元であるためやや小さくなる可能性もある。169・170 は香東川下流域産の製塩土器。いずれも脚部から胴部下端にかけて黒班が存在する。

時期　弥生時代後期初頭～前葉と想定される 162 を除いた出土遺物からは、概ね弥生時代後期中葉と考えられる。

ＳＫｈ 142（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 40 区ＳＫ 142）

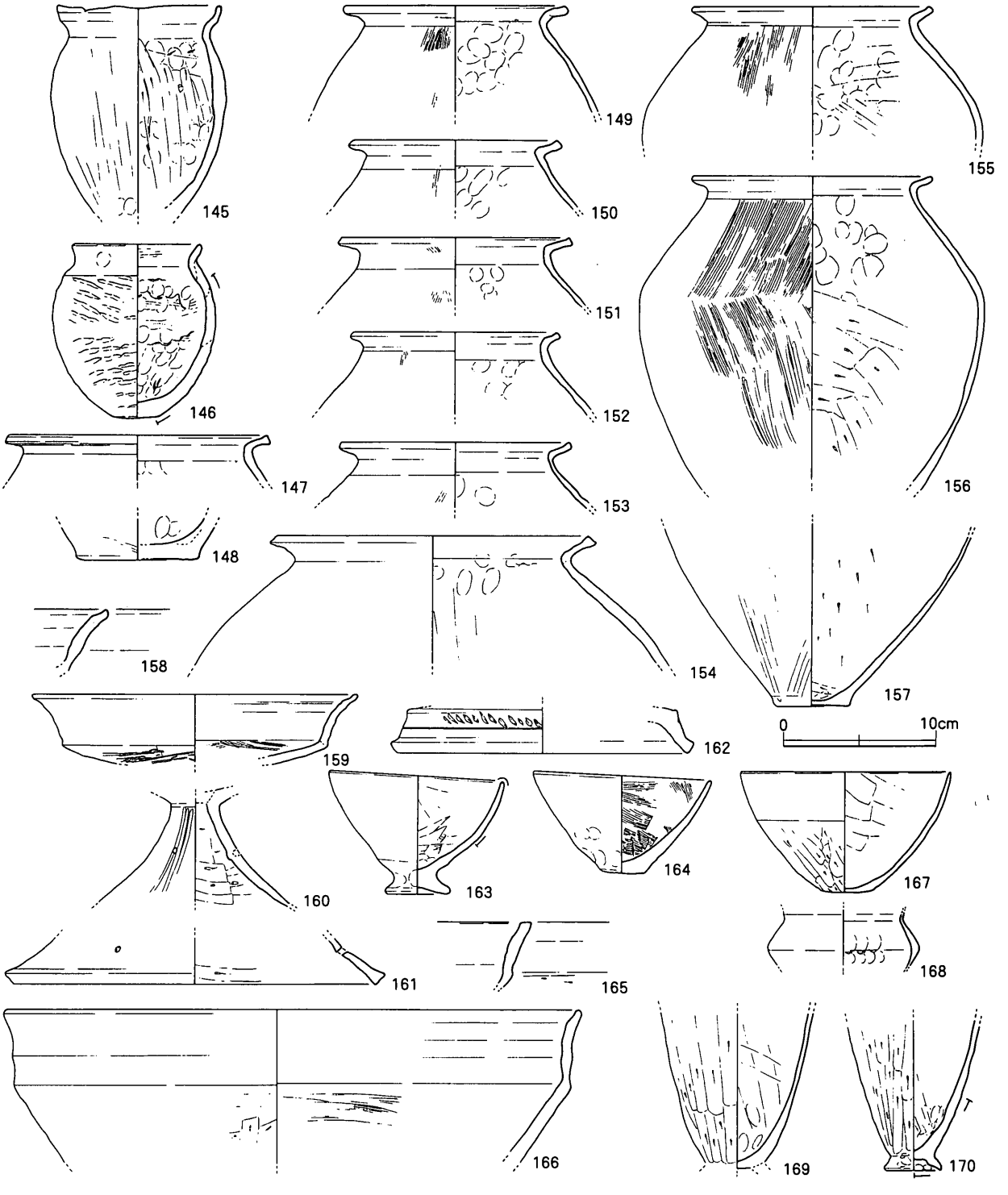


第41図　ＳＫｈ141出土遺物実測図１（S=1/4）

Ⅲ－40区で検出した楕円形に近い平面形を有する土坑。長軸長0.07ｍ、短軸長0.05ｍと小規模で、柱穴の可能性も考えられる。

出土遺物　171は白色系の壺。口頸部境および頸胴部境の屈曲は非常に弱い。頸部内面には、指オサエの後横方向のハケが施されている。172～175は香東川下流域産の高杯。

時期　出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。



第42図　ＳＫｈ 141 出土遺物実測図２（S=1/4）

ＳＫｈ 147（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 40 区ＳＫ 147）

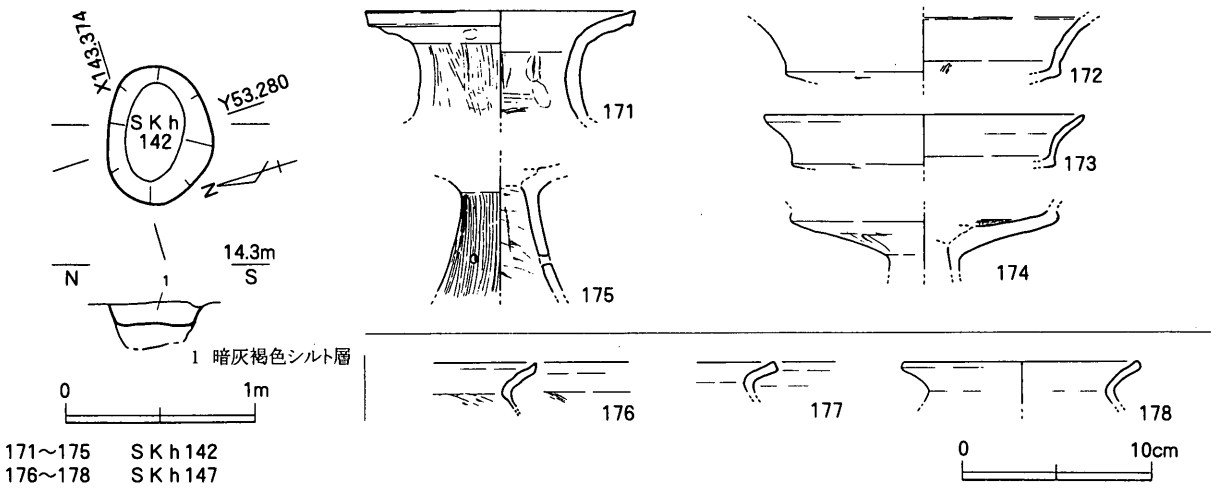
Ⅲ－ 40 区で検出した土坑。

出土遺物　176・178 は白色系の甕。177 は香東川下流域産の甕。

時期　出土遺物および周辺遺構との関係から弥生時代後期中葉と考えられる。

ＳＫｈ 143（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 40 区ＳＫ 143）

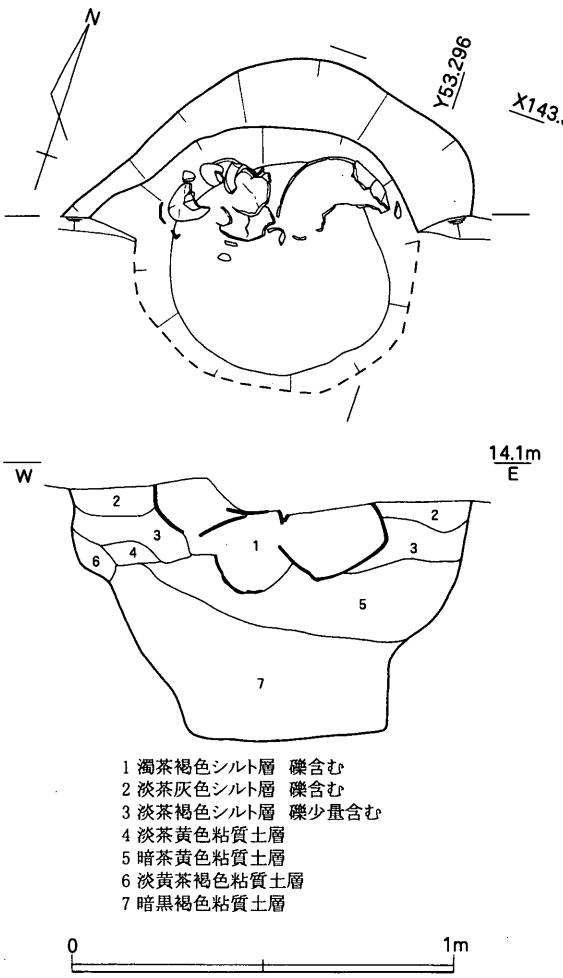
Ⅲ－ 40 区で検出した平面形円形の土坑。南半部の上位は撹乱により破壊されている。壁面は検出面から底部に向かって緩やかに傾斜し、底部は平坦である。埋土は粘質土の下層（４～７層）と



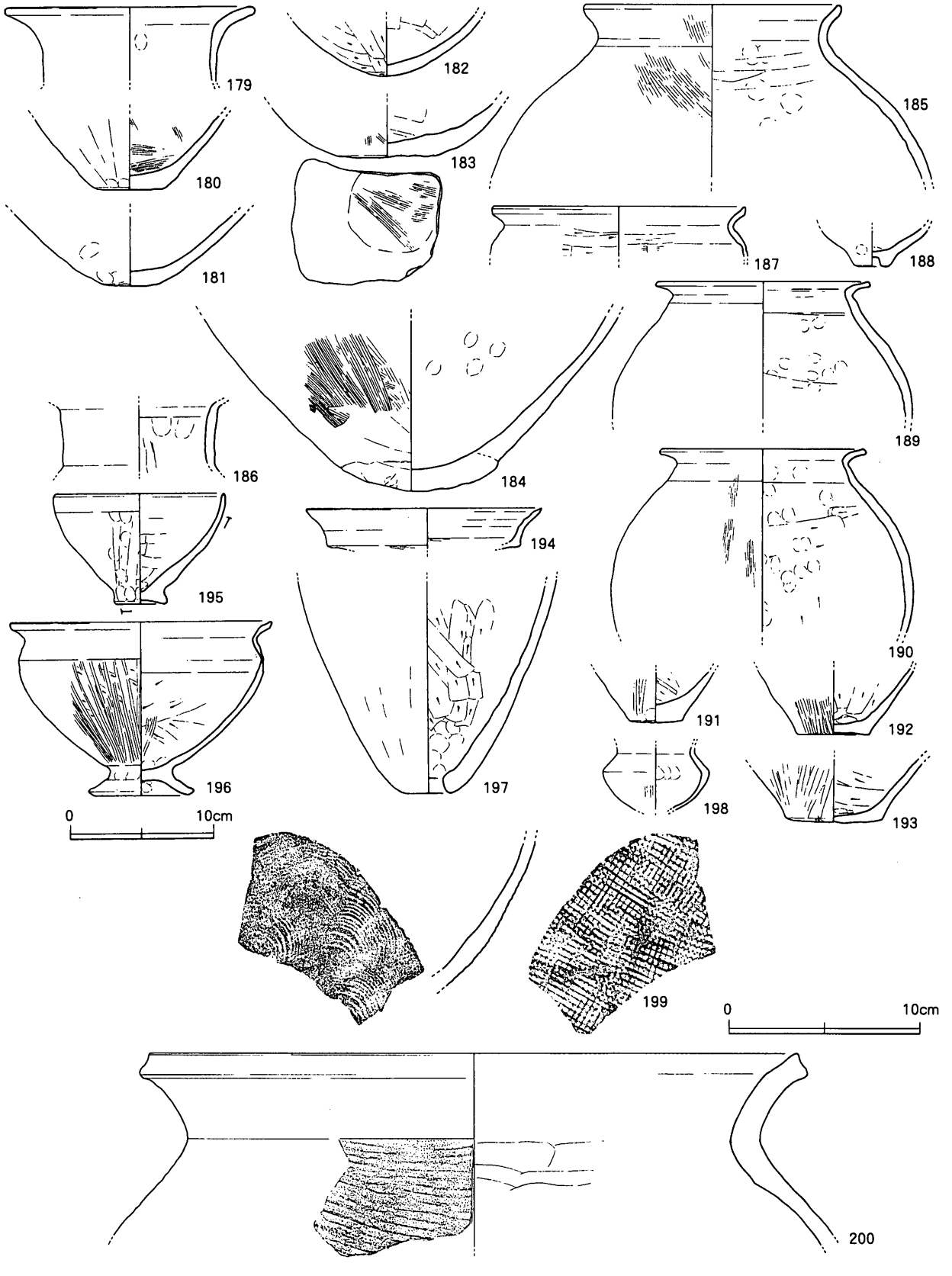
第43図　SKh 142平・断面図（S=1/40）、SKh 142・h 147出土遺物実測図（S=1/4）

小礫を含むシルト層で構成される上層（1～3層）からなる。上層には小礫と弥生土器が含まれ、写真を見る限り基盤層ブロックも含まれることから、最終的には短期間での廃棄、埋め戻しが行われたものと考えられる。

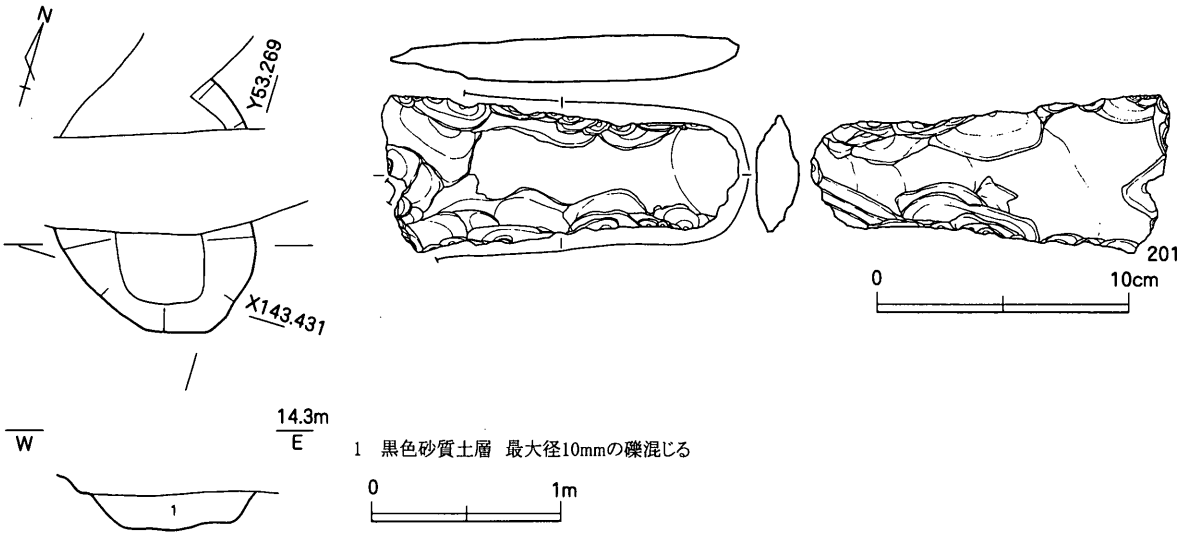
出土遺物　179～184は白色系の壺。179は断面に黒化層が存在しないが、摩滅は顕著である。181・182・184の断面には黒化層が確認され、うち181・184は内外面ともにかなり摩滅している。183の底部外面にはハケが施されている。185は白色系の甕もしくは壺。断面には一部にのみ黒化層が確認できる。摩滅は顕著。186は香東川下流域産の広口壺頸部片。甕187の口縁端部は、強いナデが施されることによりやや立ち上がり気味となり、さらに端部外面は面を持つ。また、頸部直下の外面には横方向のヘラケズリが認められる。胎土は白色系、香東川下流域産のいずれとも異なる。白色系の甕188は底部外面中央部に窪みが見られる。断面には、内外面の器表面から1.0mm程度の幅を残して黒化層が存在する。また摩滅が著しいため外面の一部は剥落し、黒化層が露出している。189・190は香東川下流域産の甕。191・193は香東川下流域産の甕底部片。191は通常の香東川下流域産に比べて若干明るい色調で、胎土に含有される角閃石が細粒であるため、やや遡る時期のものである可能性もある。甕底部片192は、底部外面が若干窪み、外面にはハケが施される。胎土は香東川下流域産とは明瞭に異なり、白色系と比較しても含まれる石英がやや多く、色調もやや褐色に近い。193は香東川下流域産の甕底部片。194は香東川下流域産の高杯。195・196は



第44図　SKh 143
平・断面図（S=1/20）



第45図　ＳＫｈ 143出土遺物実測図（S=1/4・1/3）



第46図　ＳＫｈ 505 平・断面図（S=1/40）、出土遺物実測図（S=1/3）

白色系の台杯鉢。ともに断面に黒化層が確認できるが、195 の方が顕著で、焼成もあまり良好ではない。器壁がやや厚めの 197 は、底部に孔を有し、若干内湾しながら上方に広がる胴部をもつ鉢。胴部上半の断面には黒化層が看取される。胎土は白色系のものに近い。198 は香東川下流域産直口壺。199・200 は須恵器甕。

時期　古墳時代後期以降の 199・200 は明らかに混入である。その他の遺物は概ね弥生時代後期中葉と考えられるため、本土坑の埋没時期も当該時期と考えられる。

ＳＫｈ 505（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 10 区ＳＫ 05）

Ⅲ－ 10 区で検出した楕円形に近い平面形を有する土坑。中央部はトレンチにより東西に、北西部は中世の溝によって破壊されている。

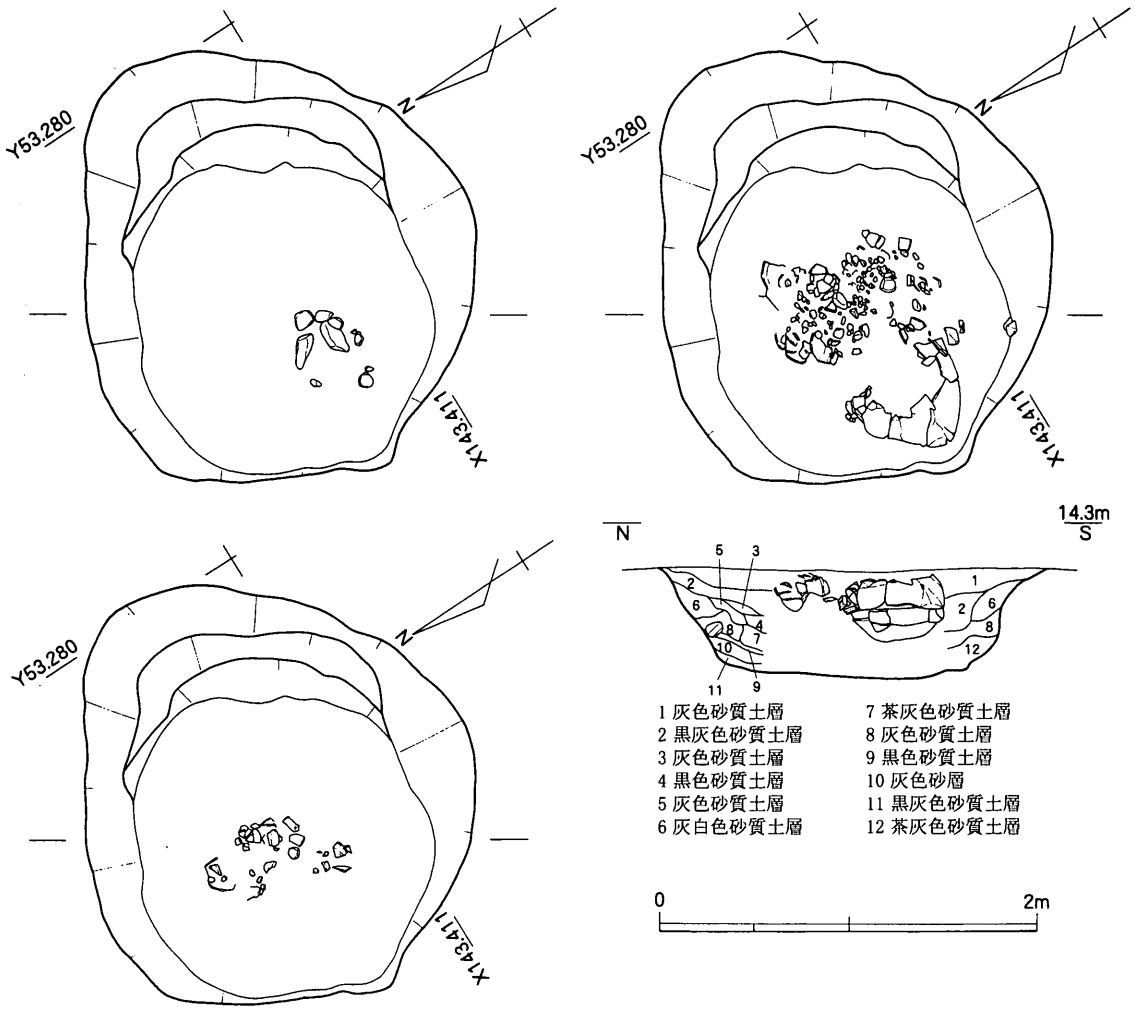
出土遺物　201 は結晶片岩製の石製品。両側縁部に摩耗痕が看取される抉りを有することから石庖丁と判断した。ただし、一方の面（実測図の左側）には研磨面が見られ、刃部も認められることから伐採斧の転用品であることは明白である。なお、肉眼で観察する限り刃部には伐採斧としての使用痕が確認できない。

時期　201 のみでは時期決定が困難であるが、周辺に展開する遺構から、弥生時代後期中葉の土坑であるとしたい。

ＳＫｈ 506（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 10 区ＳＫ 06　概報遺構名：ＳＫ 03）

Ⅲ－ 10 区で検出した、平面形が隅丸方形に近い不正円形の土坑。土層注記の記録はないものの、写真ではブロックの含有が確認できることから、最終的に埋め戻されたことは確実である。土坑西部の、底部より若干上位のレベルで拳大の礫が 10 個弱認められ、さらにその上位に胴部最大径（肩部）より下位が残存する大型の広口壺（226）が横位に据えられている。226 の口縁頸部は破片となって胴部最大径付近に散乱している。また、226 の東側にあたる土坑中央部では、その他の弥生土器（202 ～ 224）と小礫が、226 の中位レベルから検出面付近にかけて認められる。

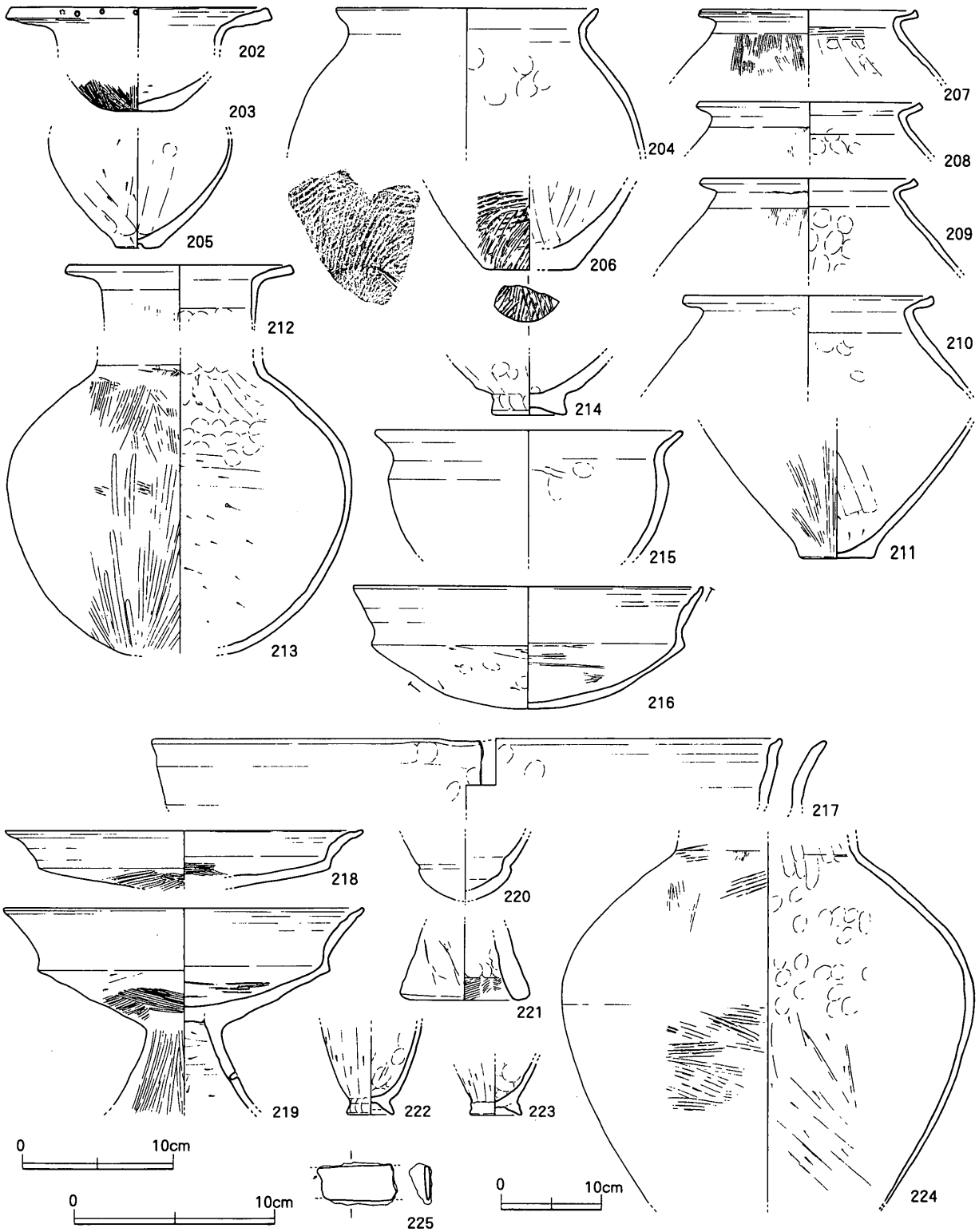
226 は、そのサイズと、前述のように胴部最大径より上位が意図的に割られている可能性もあることから、土器棺としての使用も考えられる。しかし、226 が底面から浮いていること、他の遺物



第47図　ＳＫｈ 506 平・立面図（S=1/40）

も破片として含まれることから、226 が土器棺として埋納されたとは考え難く、ある程度本土坑の埋め戻しが行われた段階で、他の遺物と同時に廃棄されたとする方が妥当と思われる。よって、本土坑は概報作成時に想定されたような土器棺墓ではないと考える。

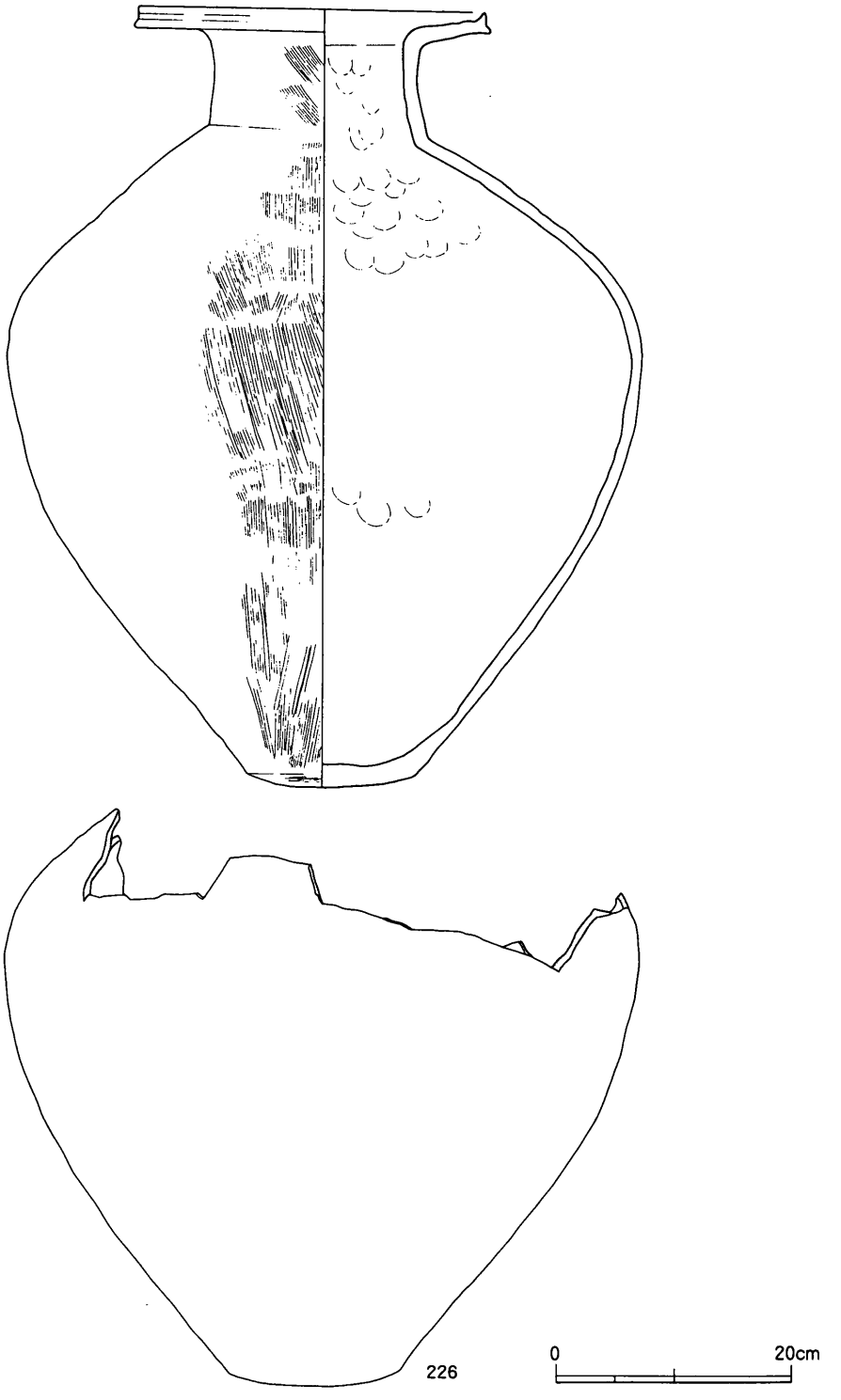
出土遺物　202・212・213 は香東川下流域産の壺。202 は口縁端部外面には竹管文が施されている。213 は断面に黒化層が認められる。203 は白色系の甕。胴部のみではなく、底部外面にも一方向のハケが施されている。内面は摩滅が顕著で、断面には黒化層が見られる。204 は白色系の甕。内外面ともに摩滅が著しく、断面には薄く黒化層が認められる。205 は底部外面に窪みを有する甕。色調・胎土は香東川下流域産に類似するが、香東川下流域産に比べて含まれる石英・長石の粒径がやや大きいように思える。206 は白色系の甕。外面に残るタタキ痕は底部から胴部にかけて連続している。断面には、内外面の器面 1 mm 程度を残して黒化層が認められる。207 ～ 211 は香東川下流域産の甕。214・215 は白色系の鉢。ともに焼成はあまり良好ではなく、摩滅が著しい。215 の内面には、仕上げが甘いために接合痕が残る。また、断面には外面 2 mm、内面 0.5mm 程度を除いて黒化層が見られる。216・217 は香東川下流域産の鉢。216 の残存率は 6 割程度である。218・219 は香東川下流域産高杯。220 は白色系の小型直口壺。顕著な摩滅により調整は残っていない。器種不明の 221 は、外面に絞り目が残り、内面下端部には横方向のハケが施されている。色調・胎土は白色系によく似る。222・223 は香東川下流域産製塩土器。223 は、脚部から胴部下位にかけ



第48図　ＳＫｈ 506出土遺物実測図１（S=1/4・1/3・1/6）

て黒班が認められる。224は香東川下流域産の広口壺。摩滅は顕著である。225は長軸方向の片面に刃部をもつ鉄製品。刀子か。226は香東川下流域産の広口壺。摩滅が著しいため、調整の残りは悪く、外面下位にかろうじてヘラミガキが確認できるのみである。

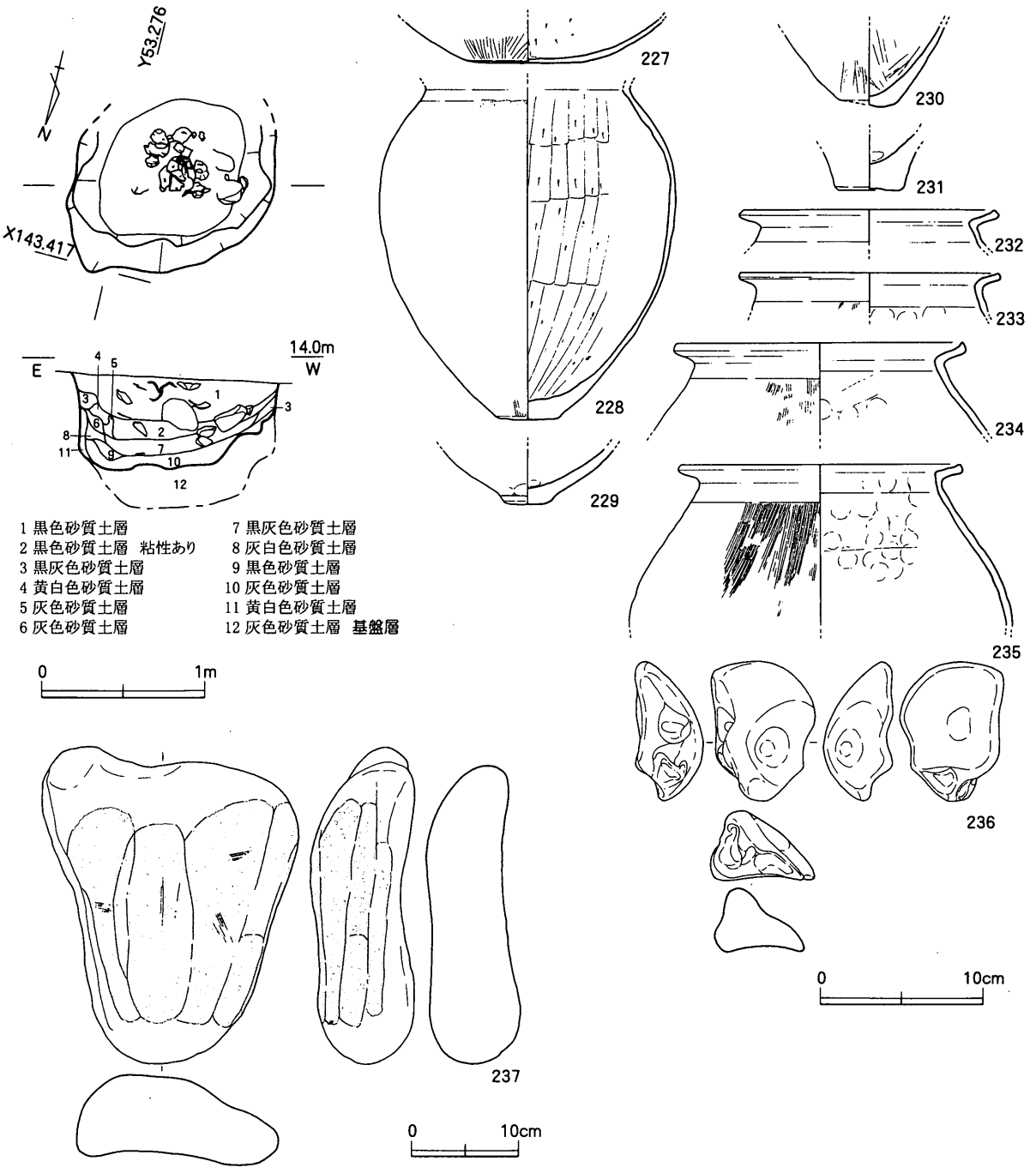
時期　出土遺物から弥生時代後期中葉の埋没と考えられる。



第49図　ＳＫｈ 506出土遺物実測図２（S=1/6）

ＳＫｈ 507（発掘調査時遺構名：Ⅲ－10区ＳＫ07）

Ⅲ－10区で検出された平面形不整円形の土坑。埋土の色調は黒～灰色系で、土質の記録は「砂質土」となっているが写真を見る限り粘質シルト～シルト層に近い土質であると思われる。また、写真ではブロックを多量に含むことが明らかで、埋め戻し行為が想定できる。埋土の中位には径20cm程度以下の礫および砂岩製砥石（237）が、それより上位には残存状況の良好な弥生土器が含まれる。よって、埋め戻し途中で礫および砥石が廃棄され、その後まとめて土器が廃棄されたものと考えられる。前述のように土坑埋没の期間は短いと想定できるが、特に礫から上位の土器群に関して

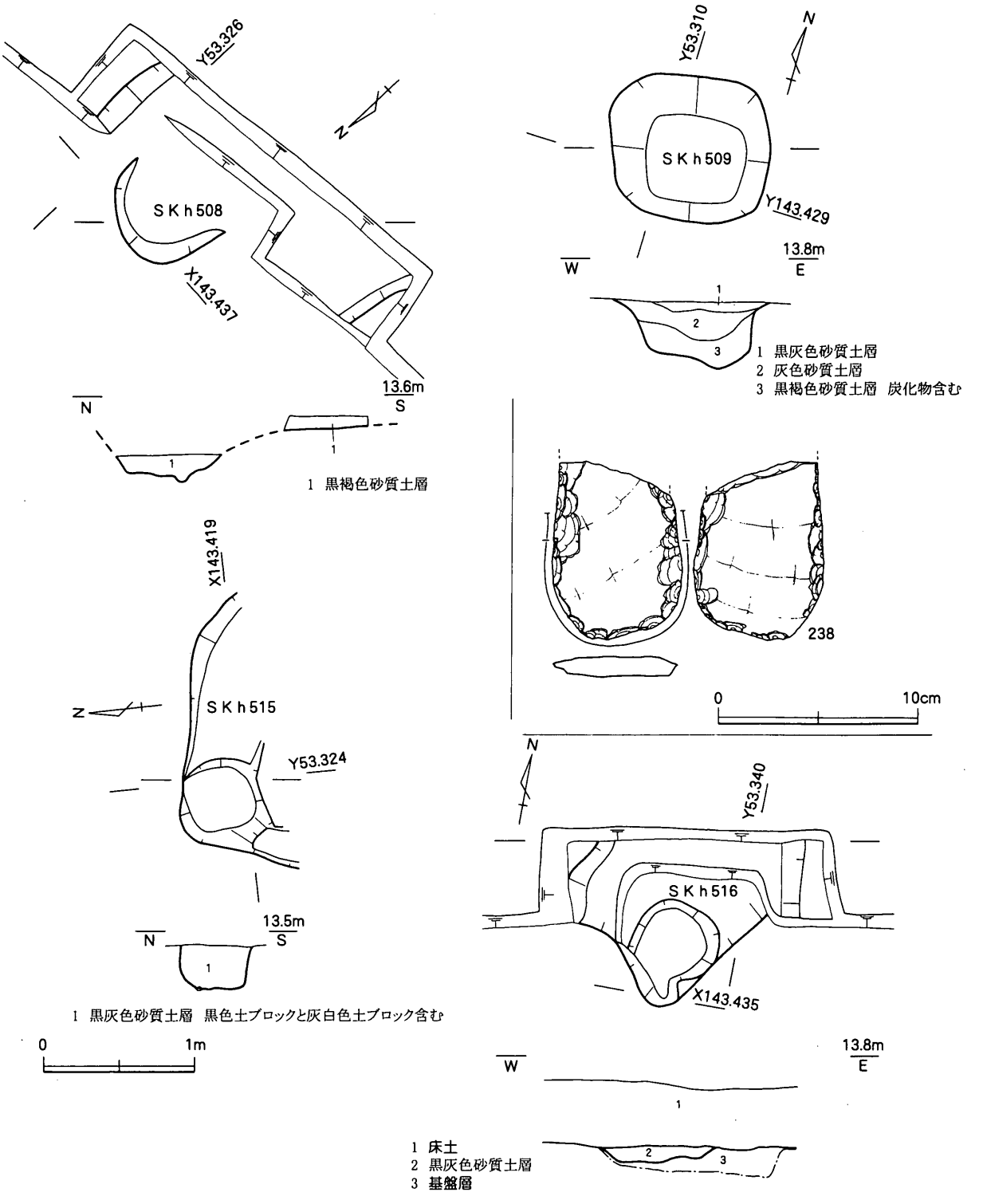


第50図　ＳＫｈ507平・立面図（S=1/40）、出土遺物実測図（S=1/4・1/6）

は一括性がかなり高いと捉えられる。

出土遺物　227は香東川下流域産の壺。228～230は断面に黒化層が確認できる白色系の甕。228は焼成がやや不良で、内面頸部直下については器表面が剥落している。231も白色系甕であるが、明らかに焼成不良で外面の器表面はほとんど剥離・剥落し、黒化層が露出している。232～235は香東川下流域産の甕。236は器種不明の土製品。平面形は楕円形に近い不整形、断面形は一辺が内湾する隅丸の不等辺三角形に近い形状で、指で押さえつけられたような窪みが数箇所に認められる。焼成は不良で全体的に暗灰色を呈し、ひび割れも複数確認できる。237は砂岩製の砥石。長軸に並行して楕円形の使用面が複数箇所に認められる。

時期　出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。



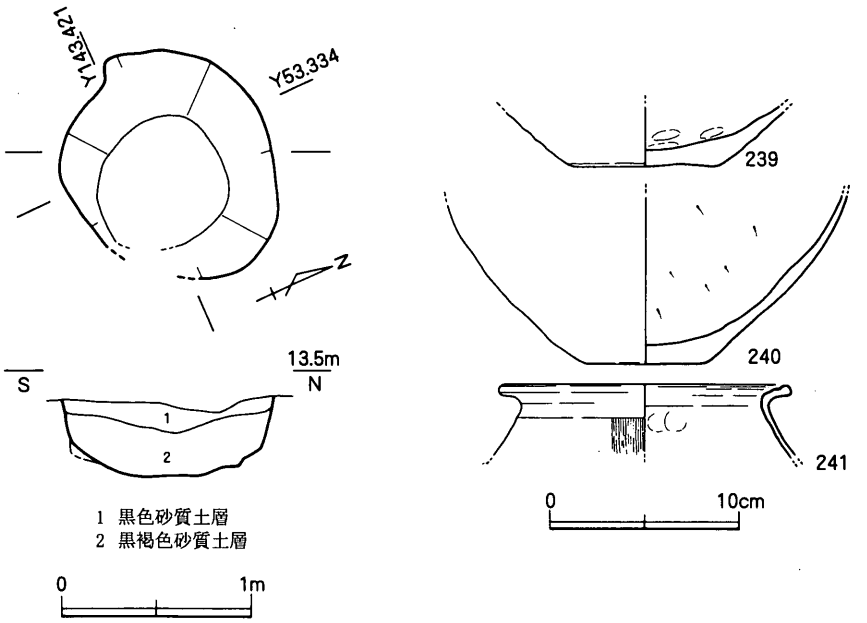
第51図　SKh 508・h 509・h 515・h 516平・断面図（S=1/40）、
SKh 509出土遺物実測図（S=1/3）

SKh 509（発掘調査時遺構名：Ⅲ－10区SK 09）

Ⅲ－10区で検出された隅丸方形の平面形を有する土坑。

出土遺物　238はサヌカイト製のスクレイパーか。周縁部はかなり摩耗している。

時期　出土遺物からの時期比定は困難であるが、埋土および周辺遺構との関係から弥生時代後期中葉頃と考えられる。



第52図　ＳＫｈ 517 平・断面図（S=1/40）、出土遺物実測図（S=1/4）

ＳＫｈ 517（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 10 区ＳＫ 17）

Ⅲ－ 10 区で検出された平面形円形の土坑。埋土は砂質土層と記録されているが、写真ではブロックを含む粘質シルト～シルト層であると判断でき、短期間での埋め戻しが想定できる。また、底部からは弥生土器片数点（239 ～ 241）がまとまって出土している。

出土遺物　239・240 は白色系の甕。いずれも断面には黒化層が認められ、摩滅がかなり激しい。240 については、内面の器面が剥落しているために黒化層が露出している。241 は香東川下流域産の甕口縁部片。幾分摩滅しているものの、239・240 程ではない。

時期　出土遺物から弥生時代後期中葉と判断できる。

ＳＫｈ 162・ｈ 163・ｈ 191（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 16 区円形周溝墓第２主体部・第３主体部　概報遺構名：ＳＴ 10 第２主体部）

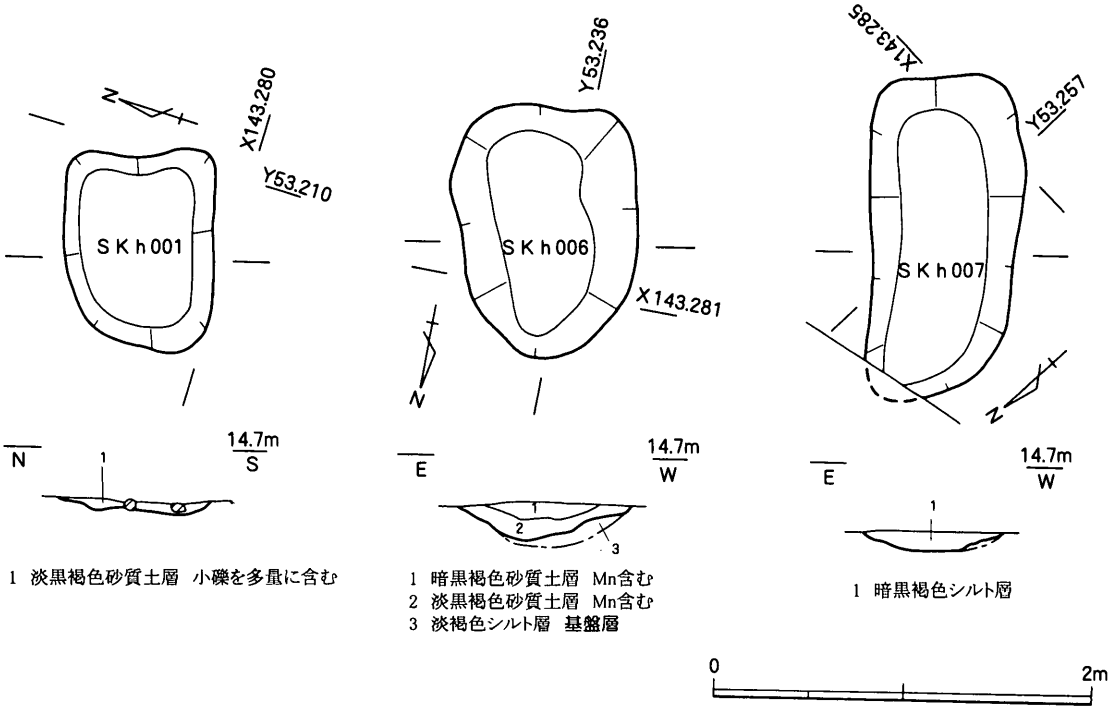
Ⅲ－ 16 区西部で検出した土坑群。いずれもＳＨｈ 02 周溝の内部に位置し、発掘調査時にはＳＨｈ 02 が円形周溝墓と認識されていたため、中心にある土坑（ＳＨｈ 02 Ｋ１）も含めて主体部とされていた。しかし、ＳＨｈ 02 Ｋ１を除くこれらの土坑は、ＳＨｈ 02 に伴うとするよりもその平面・断面形態、規模等からⅢ－ 15・16 区西端部に広がる土坑群（ＳＫｈ 046・ｈ 048・ｈ 049・ｈ 050）と同様の性格を有するものとする方が妥当であると考える。

時期　重複関係からＳＨｈ 02 に先行する時期の所産と判断できるが、遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。ただし、埋土の状況からは弥生時代後期の遺構であることは疑いない。

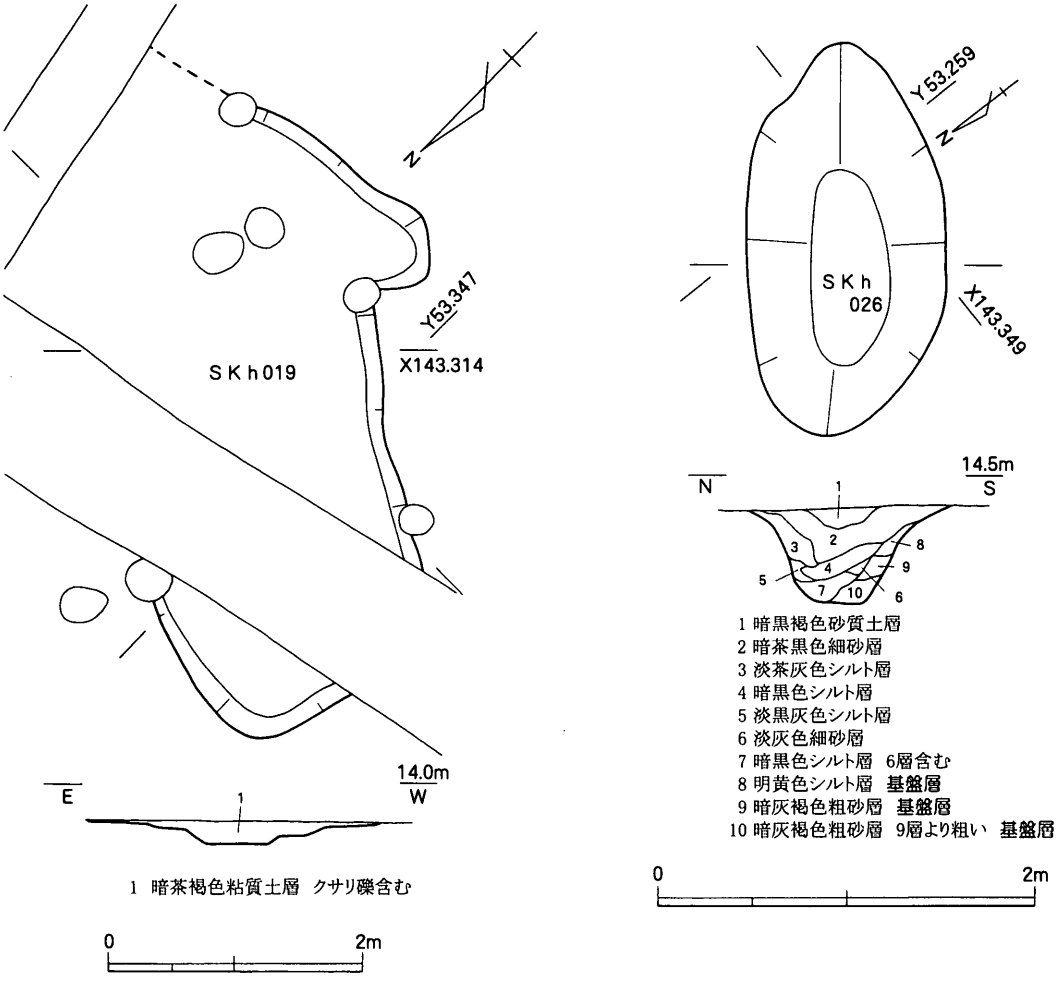
その他の遺構（ＳＸ）

ＳＸｈ 01（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 17 区ＳＫ 24　概報遺構名：ＳＸ 03）

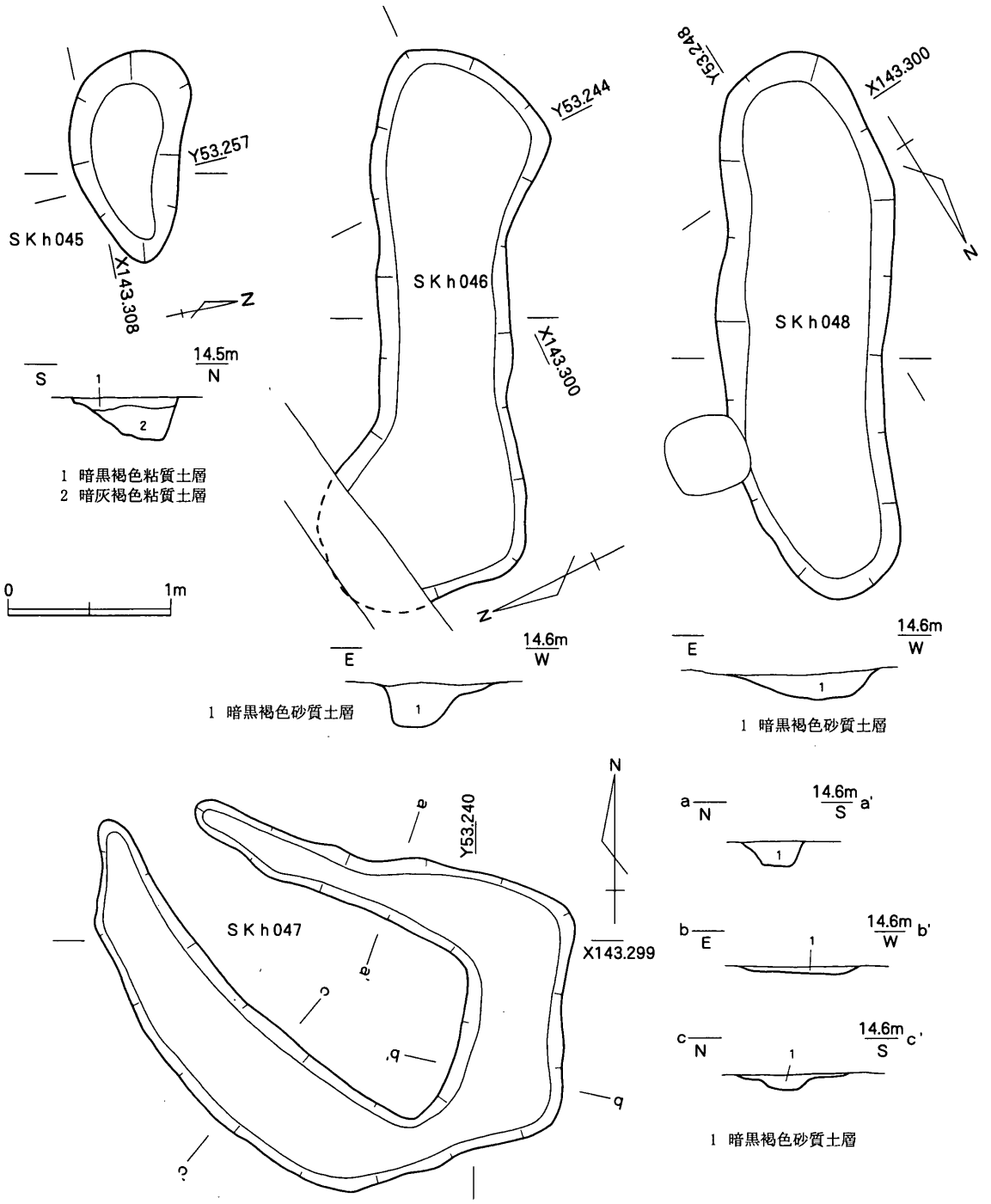
Ⅲ－ 17 区で検出された出水。平面形は不整円形で、長軸長は 3.4 ｍ、短軸長は 3.0 ｍ、検出面か



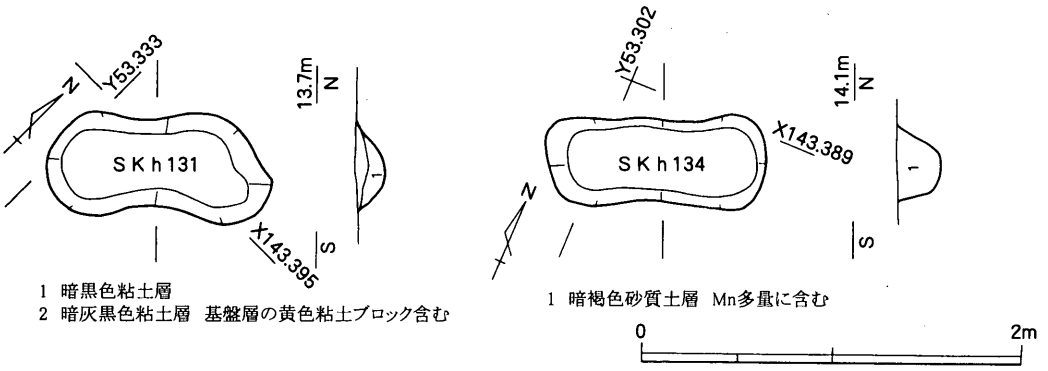
第53図 SKh 001・h 006・h 007平・断面図 (S=1/40)



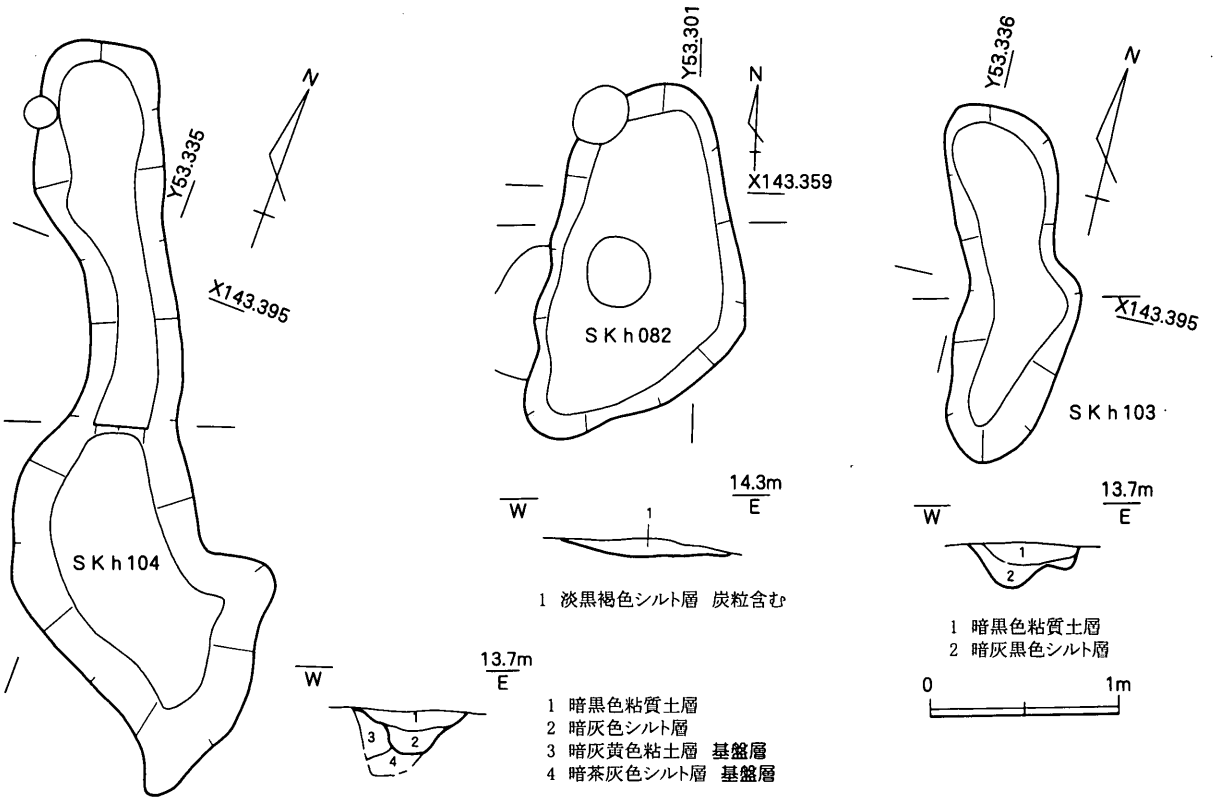
第54図 SKh 019・h 026平・断面図 (S=1/60・1/40)



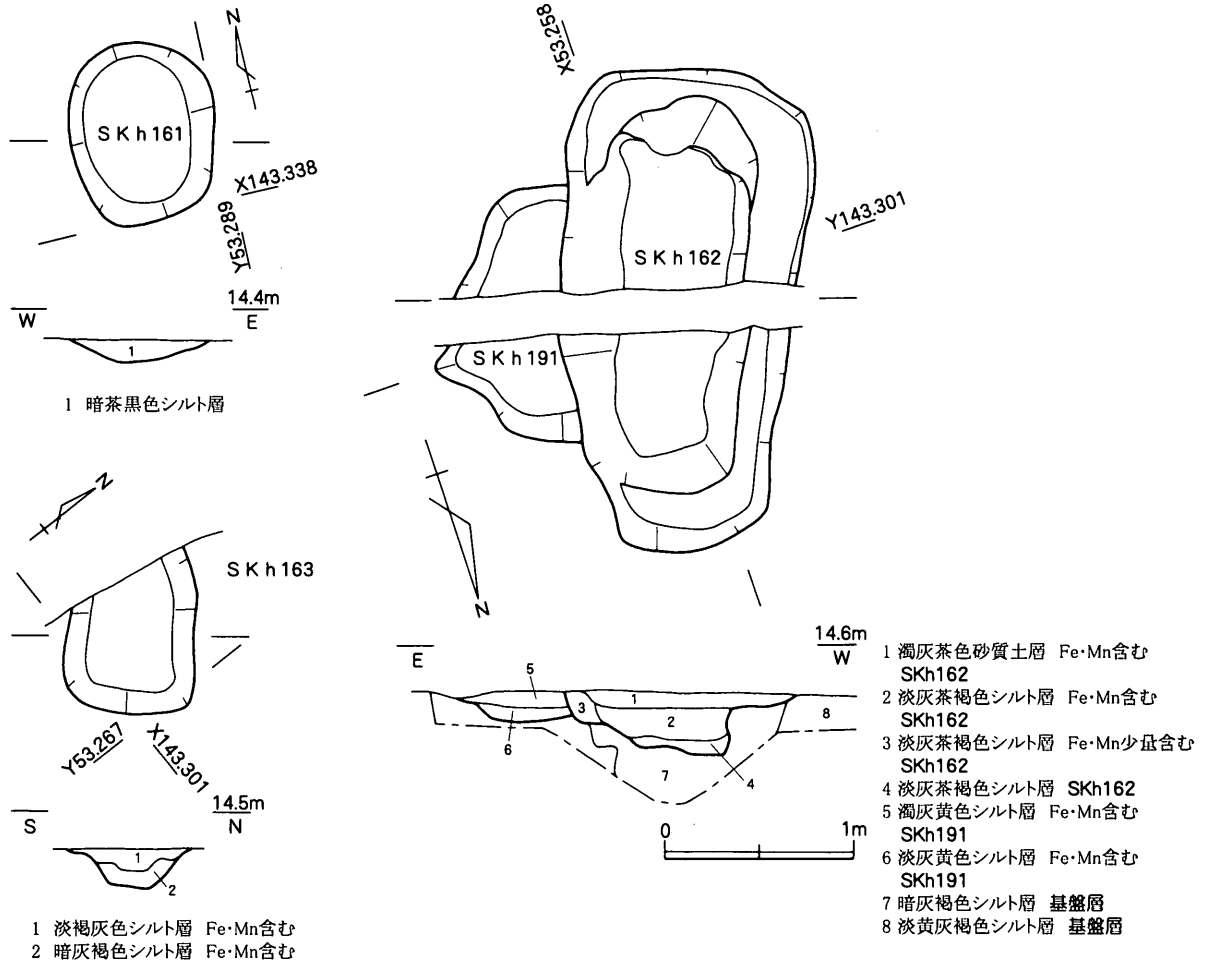
第55図　ＳＫｈ 045・ｈ 046・ｈ 047・ｈ 048 平・断面図（S=1/40）



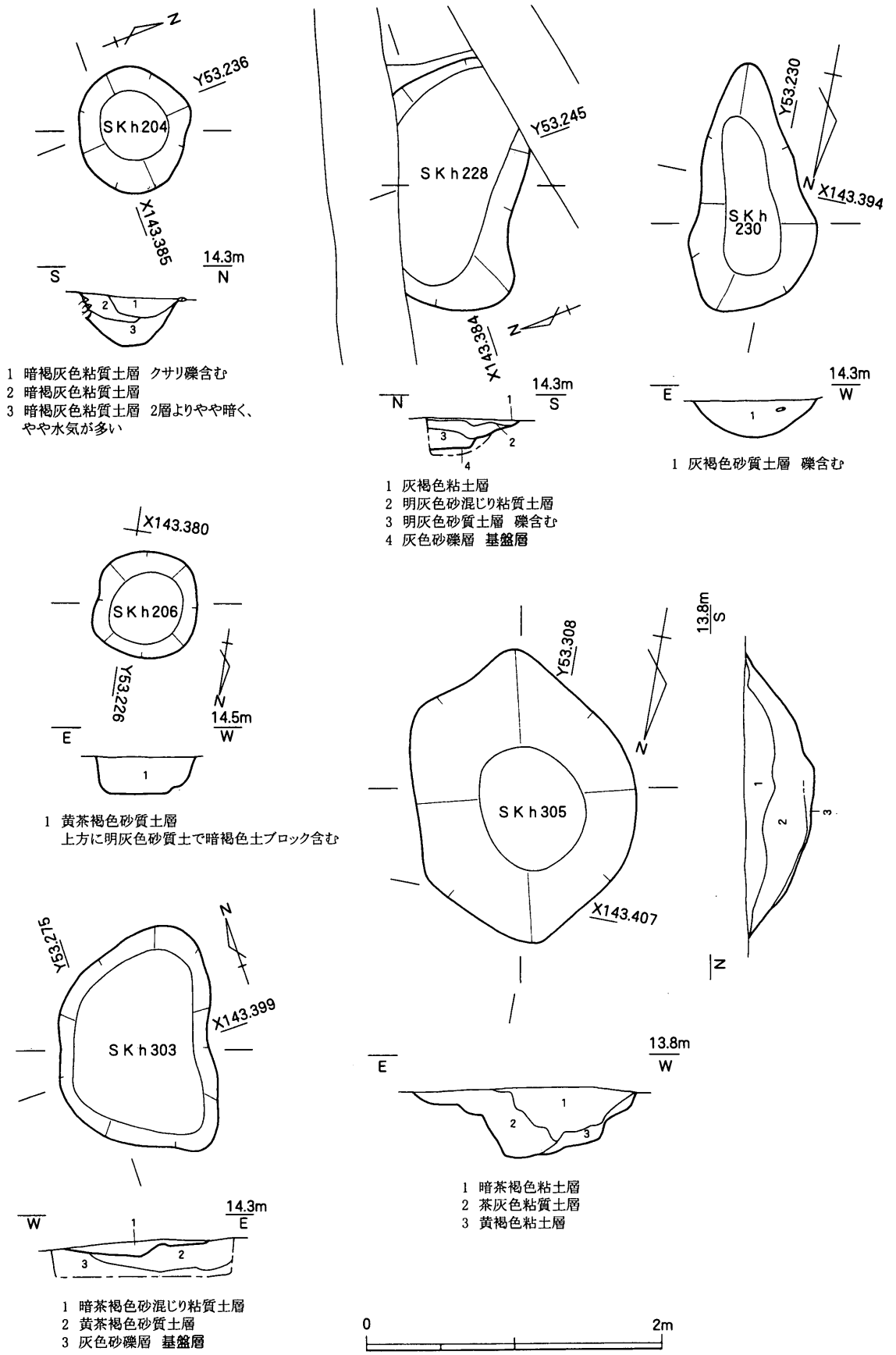
第56図　ＳＫｈ 131・ｈ 134 平・断面図（S=1/40）



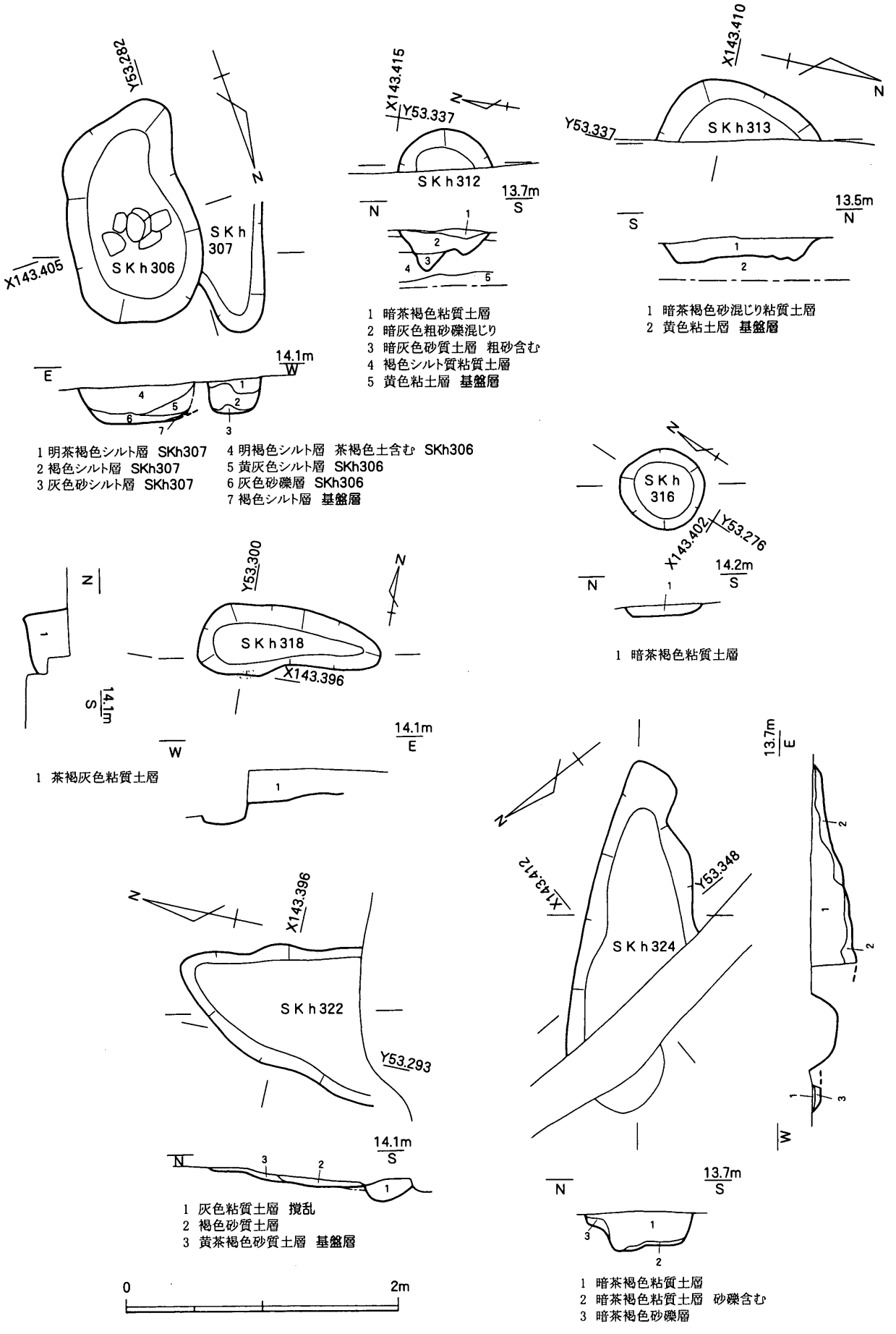
第57図　SKh 104・h 082・h 103 平・断面図（S=1/40）



第58図　SKh 161・h 162・h 163・h 191 平・断面図（S=1/40）



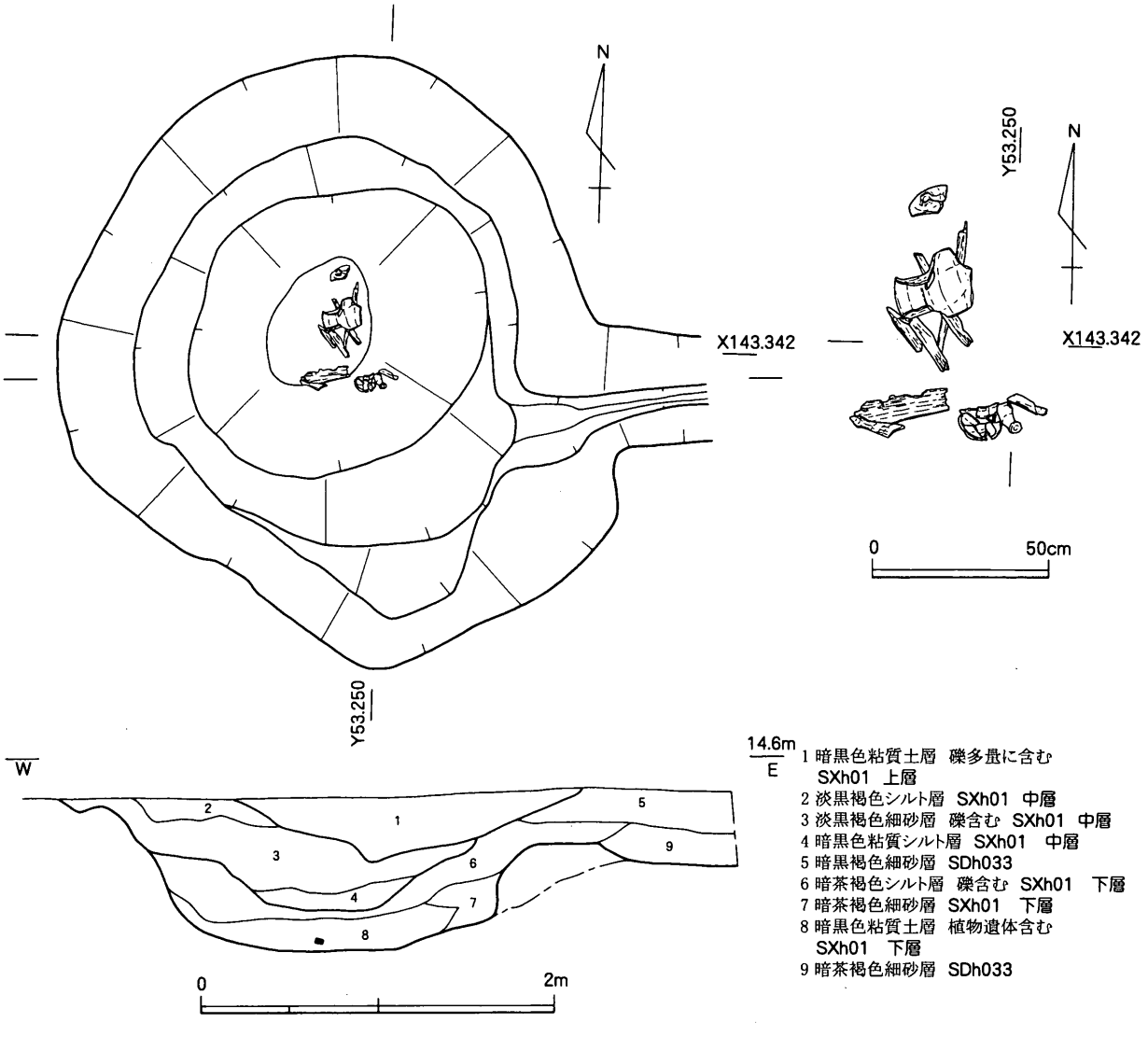
第59図 SKh 204・h 206・h 228・h 230・h 303・h 305 平・断面図 (S=1/40)



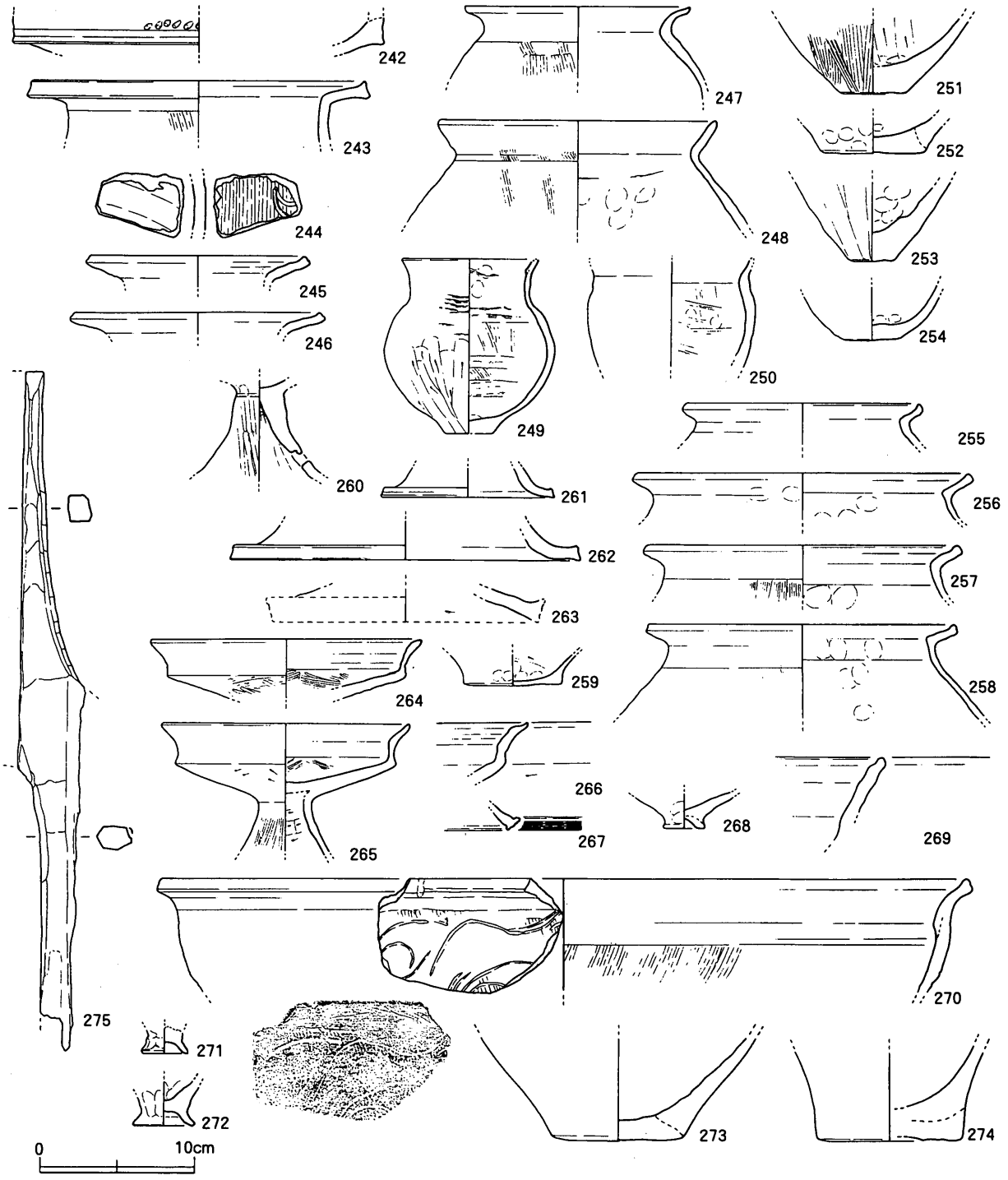
第60図 SKh 306・h 307・h 312・h 313・h 316・h 318・h 322・h 324
平・断面図 (S=1/40)

らの深さは1.4ｍである。壁面は緩やかに立ち上がる。底部はほぼ平坦であるが、中央部付近のみ約0.5ｍ掘り下げられ、湧水層に達している。また、本遺構の東端に取り付くＳＤｈ033は、東方向に伸びてＳＤｈ034と合流し、さらにその先で基幹水路と考えられるＳＤｈ016と合流し、本遺構が広範な水路網の一端となっている。これらの状況から本遺構が出水であると判断した。やや掘り下げられた中央部からは、木製の曲柄又鍬（275）が出土している。

出土遺物　本出水から出土している土器は基本的に摩滅している。242の胎土は香東川下流域産に類似する。壺としたが、装飾高杯の脚部片の可能性もある。243・244は白色系の壺。243の断面は、内外面の器面から0.5mm程度を残して黒化層で占められる。頸部片である244にはヘラで文様（記号）が施されている。なお、243とは対称的に断面に黒化層は認められない。245・246は香東川下流域産の壺。247・248・250～254は白色系の甕。247・248・251・252・254の断面には黒化層が認められ、特に247・248・252については黒化層の占有率が高い。249は白色系の小型壺。仕上げが甘く、口縁部内面には接合痕が残る。底部から一方の胴部下半にかけて黒班が認められ、断面にはやはり黒化層が看取される。255～259は香東川下流域産の甕。260～263は白色系の高杯。260・263は摩滅が著しく、断面には黒化層が存在する。264～266は香東川下流



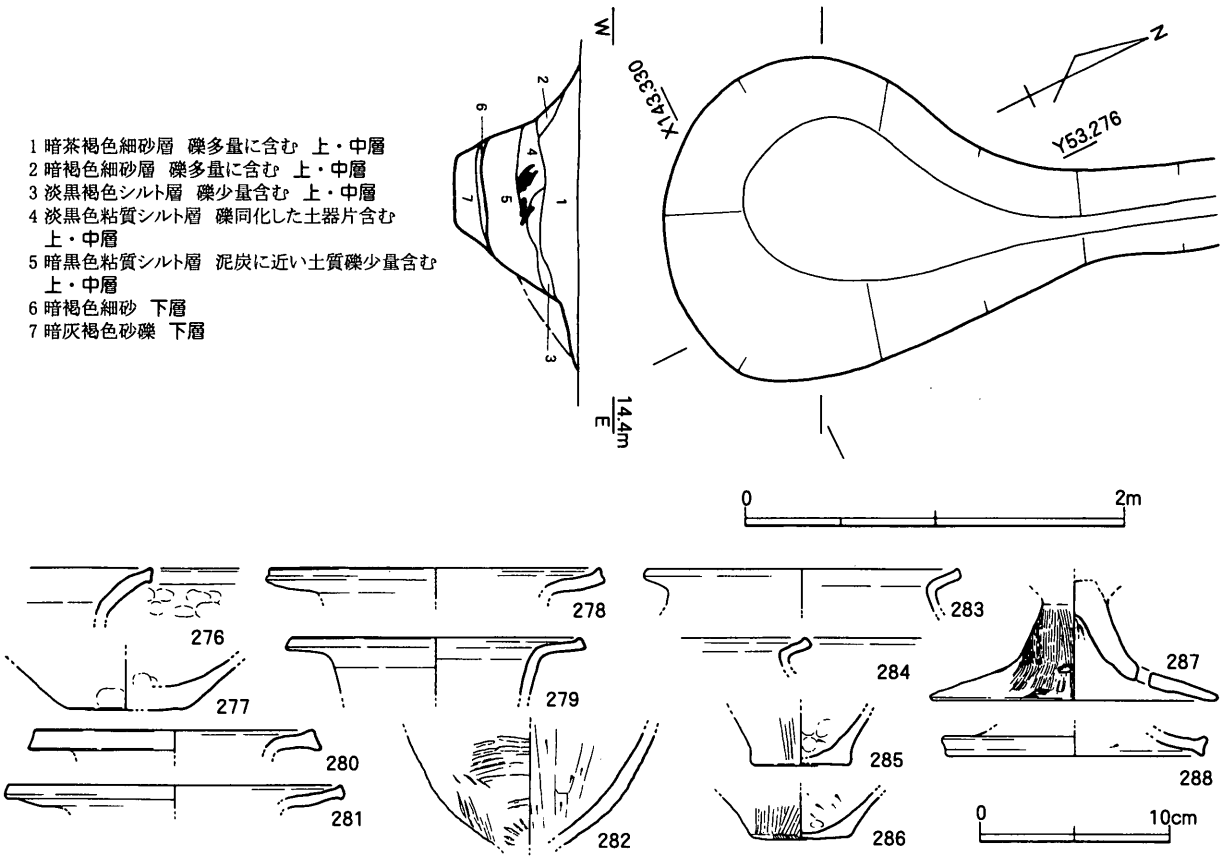
第61図　ＳＸｈ01平・断面図（S=1/40・1/20）



第62図　ＳＸｈ01出土遺物実測図（S=1/4）

域産の高杯。267は後期初頭に位置づけられる胎土１類の高杯。268は白色系の台付鉢。断面には内外面の器面から0.5～1.0mmを除いて黒化層が見られる。269は香東川下流域産鉢。白色系の鉢270の外面には曲線を組み合わせた文様（記号・絵画）が描かれている。271・272は香東川下流域産の製塩土器。273は弥生時代前期の壺底部片、274は弥生時代前期の甕底部片。275は木製曲柄又鍬。なお、概報で「鏃形木製品」として図化・公表されたものについては、「鏃形木製品」と断定する根拠に乏しく、器種特定不可能な木片と判断して今回は図化していない。

時期　267は弥生時代後期前半と考えられるが、273・274を除く他の資料は概ね弥生時代後期



第63図　ＳＸｈ02平・断面図（S=1/40）、出土遺物実測図（S=1/4）

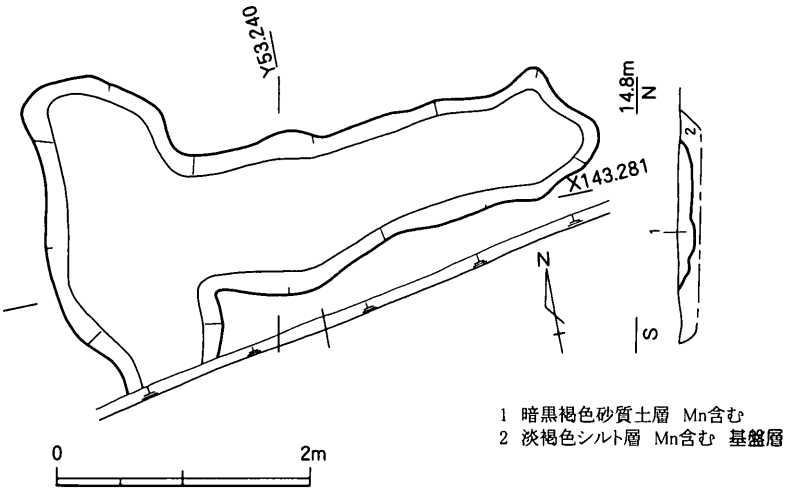
中葉に比定できるため、埋没はこの時期と考えられる。

ＳＸｈ02（発掘調査時遺構名：Ⅲ－18区出水２　概報遺構名：ＳＸ04）

Ⅲ－18区東部で検出された出水。平面形は不定円形で、直径は1.6ｍ、検出面からの深さは0.65ｍである。断面形は底部に向かってすぼみ、擂鉢状を呈している。底面は平坦で湧水層に達する。埋土は、最下層が基盤層の崩落土とみられる灰褐色砂礫層で、その上層に黒色粘質シルト層が堆積し、さらにその上位に礫を包含する茶褐色細砂層が堆積している。これらの状況から、底面が基盤層の崩落で埋没した後、一定期間堆水状態にあり、基盤層が大量に流れ込んで埋没したものと考えられ、ＳＸｈ01とはやや異なる埋没過程を示している。

出土遺物　ＳＸｈ01出土遺物同様、本出水出土土器も基本的には摩滅している。276・277は白色系の壺。いずれも断面には黒化層が確認できる。278～281は香東川下流域産の壺。282は胴部外面にタタキ痕が残る白色系の甕。断面には一部黒化層が見られる。283～286は香東川下流域産の甕。287・288は白色系高杯。脚部片287の外面には縦方向のハケが施されている。また、断面は内外面の器面から1.0mm程度を除いて黒化層で占められる。共伴する他の遺物に比べて、特に摩滅が顕著である。288の断面には黒化層が確認できない。

時期　出土遺物はいずれも小片で、詳細な時期比定が困難であるが、弥生時代後期中葉と考えられる。



第64図　ＳＸｈ 12 平・断面図（S=1/60）

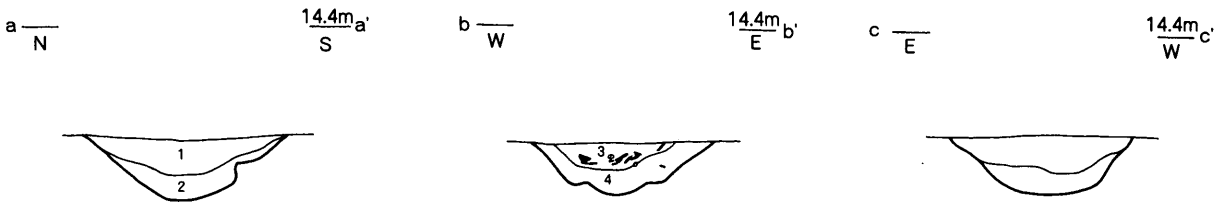
溝・水路（ＳＤ）

ＳＤｈ 016（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 15・16・19・20・40 区ＳＤ 16、Ⅲ－ 49 区ＳＤ 08、Ⅲ－ 3 区ＳＤ 02　概報遺構名：ＳＤ 39）

Ⅲ－ 15 区からⅢ－ 3 区にかけて検出した溝。Ⅲ－ 16 区で東方のＩ地区から流入するＳＤｈ 029 と合流し、出水ＳＸｈ 01・ｈ 02 から延びる水路ＳＤｈ 034・ｈ 051・ｈ 055 から水を集めて南方のＧ地区へ流れ、ＳＤｇ 03 に連続する。第１節で触れたように、本溝は想定される等高線にほぼ並行し、周辺部よりも若干低い部分にあたることから、さらに標高の低い南方へ水を供給する基幹水路であったと考えられる。

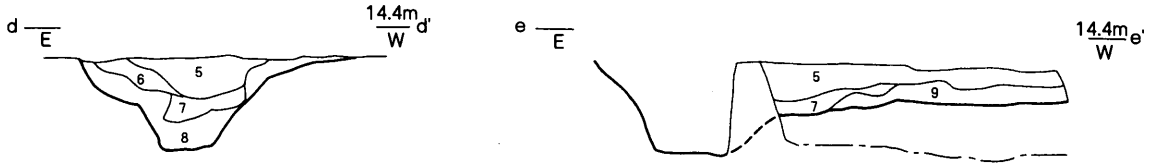
埋土中には多くの弥生土器片が含まれ、部分的にまとまって出土している。また、ブロックも多量に含まれることから水路廃絶に際して土器の廃棄および埋め戻しが行われたことが分かる。

出土遺物　289 ～ 306 は白色系の壺。頸部片 303 の外面には弧を描く２本の線と列点状の文様（記号）が施されている。289 ～ 293・295 ～ 306 の断面には黒化層が認められ、290・291・293・304 は特に摩滅が著しく、調整の残りは良くない。307 は後期初頭に比定できる胎土１類の直口壺。頸部上半部には３条１組の凹線文が２段施され、下半部には斜線文が２段巡らされる。308 ～ 319・322 ～ 324 は香東川下流域産の壺。うち 308・319 は広口壺、309 ～ 311・322 は長頸壺である。309 の頸部に巡らされる沈線は、数回の単位によって施された痕跡が確認できる。広口壺 320・321 は、胎土が香東川下流域産に類似するものの、含有される黒雲母・角閃石が少量で、石英粒がやや目立つ点、口頸部境の屈曲が緩い点、仕上げが甘いため頸胴部の接合痕が残る点が香東川下流域産とは異なる。なお、両者ともに焼成がやや不良で、断面の一部には黒化層が確認できる。325 は突帯部片。吉備系壺の一部か。なお、胎土は白色系・香東川下流域産とは明瞭に異なる。326 ～ 339・341 ～ 366・368・369 は白色系の甕。326 ～ 331・333 ～ 334・336・338 ～ 339・341 ～ 362・364 ～ 366・368 の断面には黒化層が看取され、大部分のものについては摩滅が目立つ。黒化層が確認できないもののうち 328・332・337・363・369 の摩滅は著しい。甕 340 は胎土中に黒雲母・角閃石が少量含まれるが、石英の粒径が大きい。甕 367 は褐色系の色調を呈し、胎土中には 4.0mm 以下と比較的粒径の大きな石英が含まれ、白色系・香東川下流域産とは異



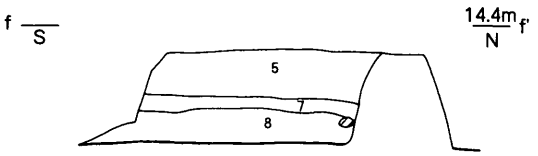
1 暗茶黒色粘質土層 シルト気味
2 暗茶灰色砂質土層

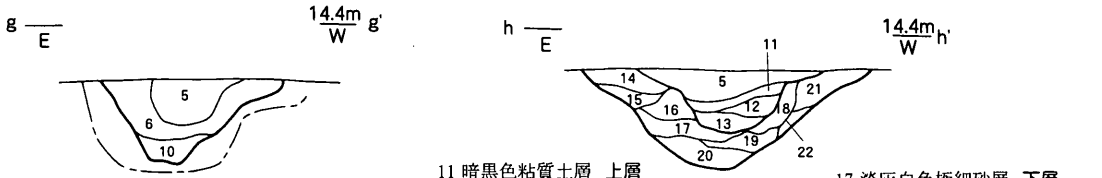
3 暗黒褐色シルト層 上層
4 淡茶褐色細砂層 礫含む 下層



0

5 暗黒色粘土層 礫含む
6 暗黒褐色粘土層 礫含む
7 淡黒灰色シルト層 礫含む 粘性強い
8 暗褐色粗砂層
9 暗灰黒色細砂層 粘性帯びる

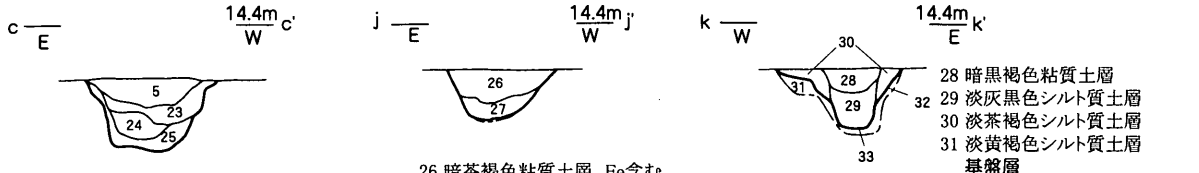




10 暗黒色粘土層 礫含む

11 暗黒色粘質土層 上層
12 暗黒色粘質土層 細砂を多量に含む 上層
13 淡黒色シルト層 上層
14 暗茶褐色粘質土層 下層
15 暗茶褐色粘質土層
14層より細砂を多量に含む 下層
16 淡黒灰色細砂層 下層

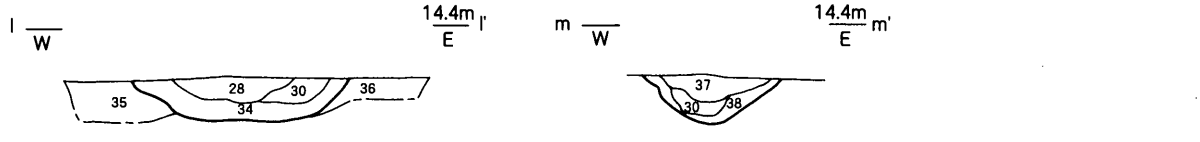
17 淡灰白色極細砂層 下層
18 淡灰白色極細砂層 下層
19 淡灰白色細砂層 下層
20 淡黒色シルト～細砂層 下層
21 不明
22 不明



23 暗黒色砂質土層 やや粘性帯び細砂含む
下層
24 暗黒色粘質土層 下層
25 暗灰色粗砂層 礫含む

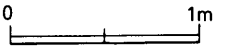
26 暗茶褐色粘質土層 Fe含む
27 暗褐灰色粘質土層 クサリ礫含む

28 暗黒褐色粘質土層
29 淡灰黒色シルト質土層
30 淡茶褐色シルト質土層
31 淡黄褐色シルト質土層
基盤層
32 淡灰褐色シルト質土層細砂層
基盤層
33 淡灰褐色細砂層 礫含む
基盤層

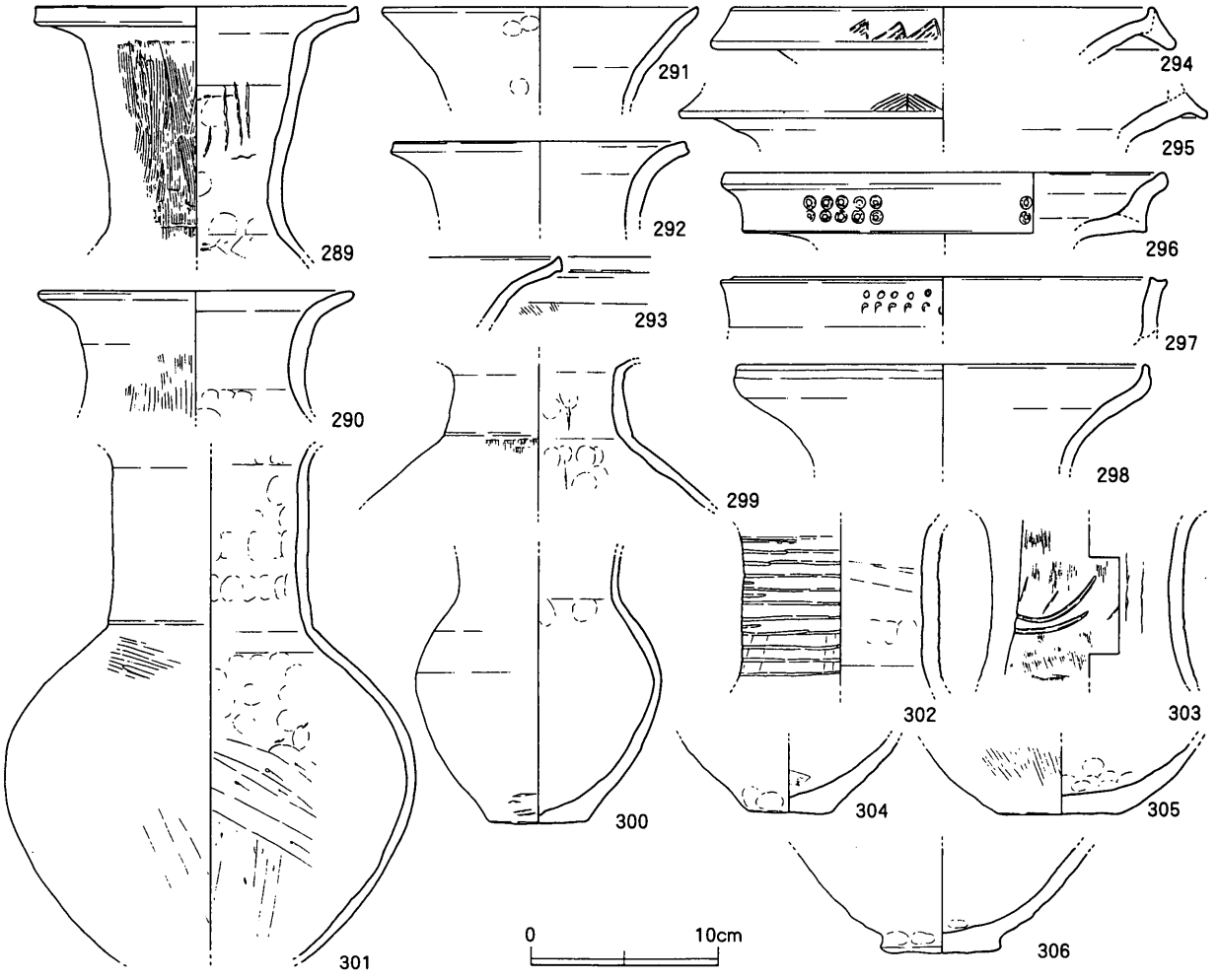


34 淡黒褐色シルト質土層
35 淡黄褐色シルト質土層細砂層 基盤層
36 淡灰褐色細砂層 クサリ礫含む 基盤層

37 暗黄褐色シルト質土層
38 淡黄灰褐色シルト質細砂層



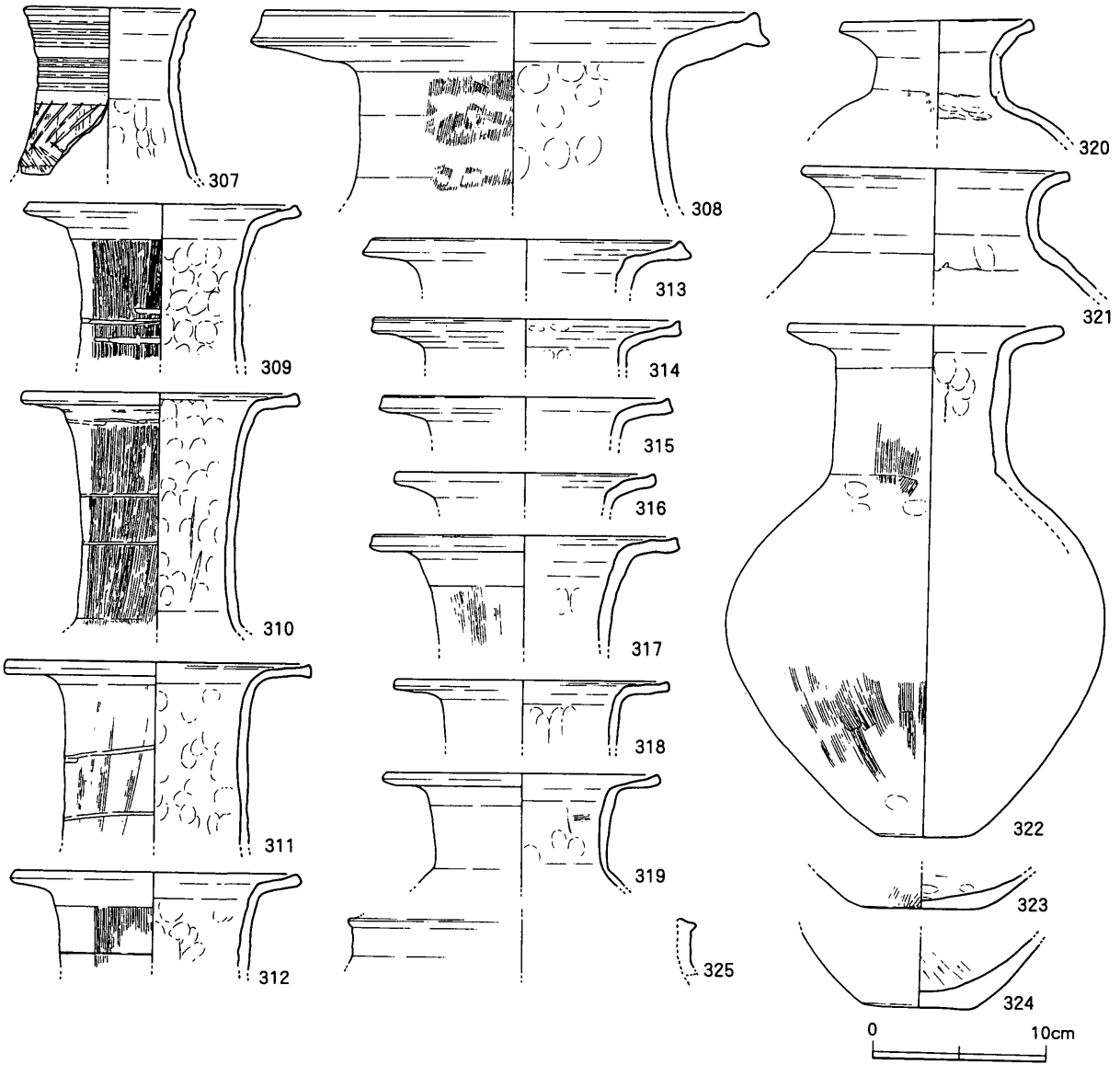
第65図 ＳＤｈ 016 断面図（S=1/40）



第66図　ＳＤｈ016出土遺物実測図１（S=1/4）

なる。370～417は香東川下流域産の甕。413の断面には、明瞭な黒化層とは言えないが、やや焼成不良な箇所が認められる。418～420・422～427は白色系の高杯。418・420・422～427の断面には黒化層が見られ、419を除いて摩滅が激しい。421は、杯屈曲部外面に１条の沈線が施され、それより上位に縦方向のヘラミガキが看取される。内面は摩滅により調整が確認できない。胎土中に含まれる石英粒が若干多いように思えるが、胎土１類の高杯としてよいだろう。428～442・444～455は香東川下流域産の高杯。443は後期初頭に位置付けられる胎土１類の高杯脚部片。456～460・462は白色系の鉢。456～459・462の断面には黒化層が確認できる。459の底部には焼成前に孔が穿たれている。461は、石英粒をやや多量に含むが、その他の胎土的特徴は香東川下流域産に類似する鉢。463～466は香東川下流域産の鉢。466は口縁部上端面に２条の凹線文が施されている。467は香東川下流域産の直口壺。468・469は香東川下流域産製塩土器。470は香東川下流域産の細頸壺。471は白色系の器台。断面は、内外面から1.0mm程度を除いて黒化層で占められる。472・473は弥生時代前期の遺物。472は甕、473は鉢。474・476は砂岩製の砥石。474は１面にのみ使用痕が認められる。476は断面形が不等辺の三角形から台形に近い形状を呈する。使用痕は複数面に看取されるが、いずれも弧状に窪み、使用方向がおよそ一定方向であったことを示している。475は須恵器杯身。

時期　弥生時代後期前葉の遺物（307・421・443）も少量含まれるが、その他の遺物はおおよそ弥生時代後期中葉に位置づけられる。よって、本溝の埋没はこの時期であると考えられる。古墳時



第67図　ＳＤｈ016出土遺物実測図２（S=1/4）

代の遺物（475）は１点のみであり混入とするのが妥当であろう。

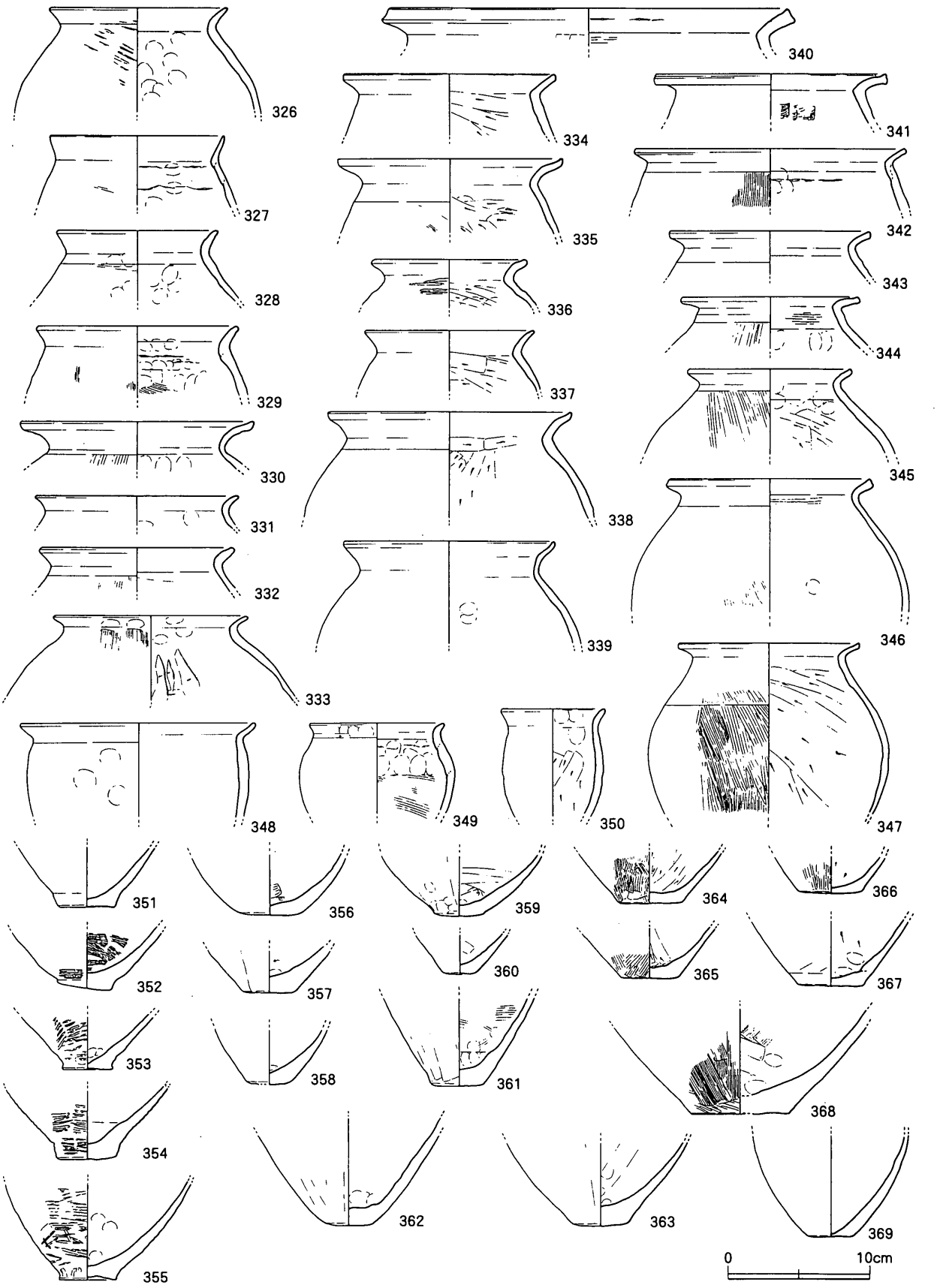
ＳＤｈ033・ｈ034

（発掘調査時遺構名：Ⅲ－17区ＳＤ33、Ⅲ－17・18区ＳＤ34　概報遺構名：ＳＤ37・38）

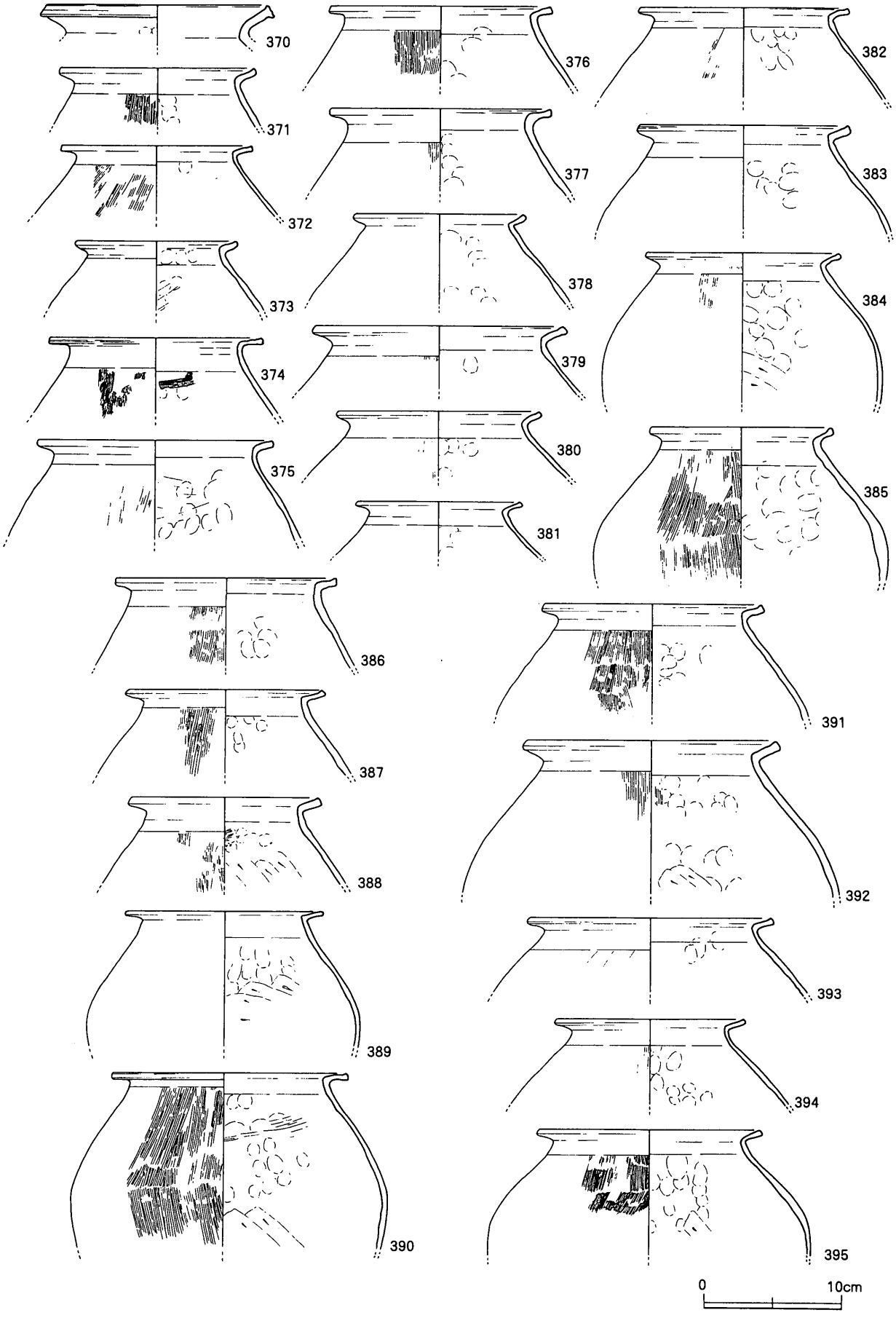
出水ＳＸｈ01・ｈ02および竪穴住居ＳＨｈ03周溝から派生し、最終的にはＳＤｈ016に合流する溝。埋土にはブロックが含まれることから、廃絶に際して埋め戻されたものと考えられる。

ＳＤｈ033出土遺物　477～479は白色系の壺。478･479の断面には黒化層が認められる。480は香東川下流域産の長頸壺口縁部。481・482は香東川下流域産の甕。483は白色系の鉢。断面には器面から0.5mm程度を除いて黒化層が存在する。484・485は香東川下流域産の高杯。

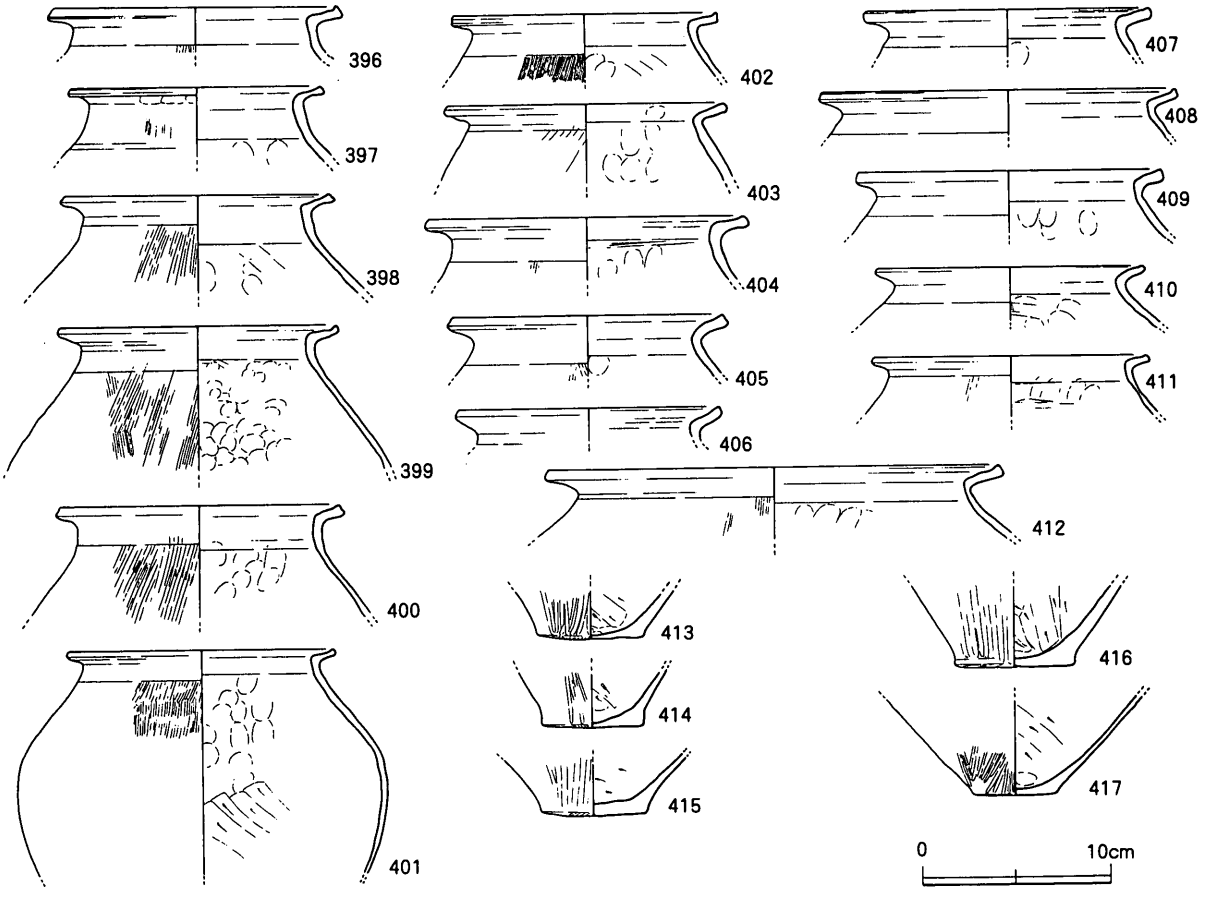
ＳＤｈ034出土遺物　486～499はＳＤｈ033との合流部より南部分（上流）にあたるⅢ－18区からの出土。486～492は香東川下流域産の壺。うち486･491は広口壺。493は香東川下流域産の細頸壺。494は断面に黒化層が確認できる白色系の甕。内面の頸部直下には横方向のハケが施されている。495・496は香東川下流域産の甕。497は白色系の高杯。断面には黒化層が看取され、摩滅も顕著である。498・499は香東川下流域産高杯。



第68図　ＳＤｈ 016出土遺物実測図３（S=1/4）



第69図　ＳＤｈ016出土遺物実測図４（S=1/4）



第70図　ＳＤｈ 016出土遺物実測図５（S=1/4）

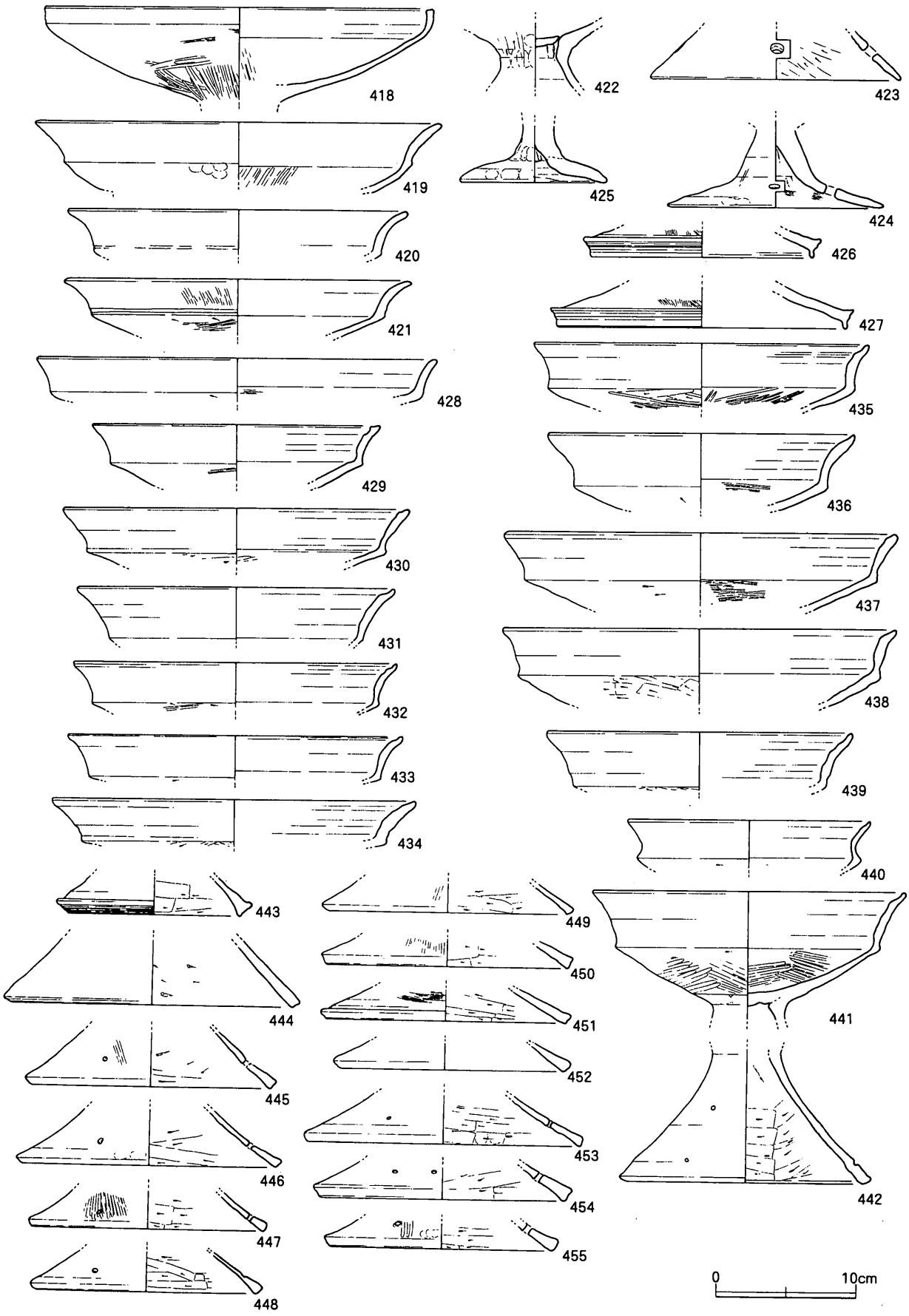
500～516はＳＤｈ 033との合流部からＳＤｈ 016までの区間であるⅢ－17・20区からの出土。500・501～503は白色系の壺。500・501・503の断面には黒化層が存在する。500の頸胴部境内面には、胴部ヘラミガキ後の接合痕が明瞭に残る。504～506は香東川下流域産の壺。507～512は香東川下流域産の甕。513は黒化層が断面に見られる白色系の甕底部片。514は白色系高杯。515は香東川下流域産の高杯。516は香東川下流域産の鉢。断面には、黒化層ではないが、若干焼成不良の痕跡がある。

時期　出土遺物から両溝とも廃絶時期は弥生時代後期中葉頃と考えられる。

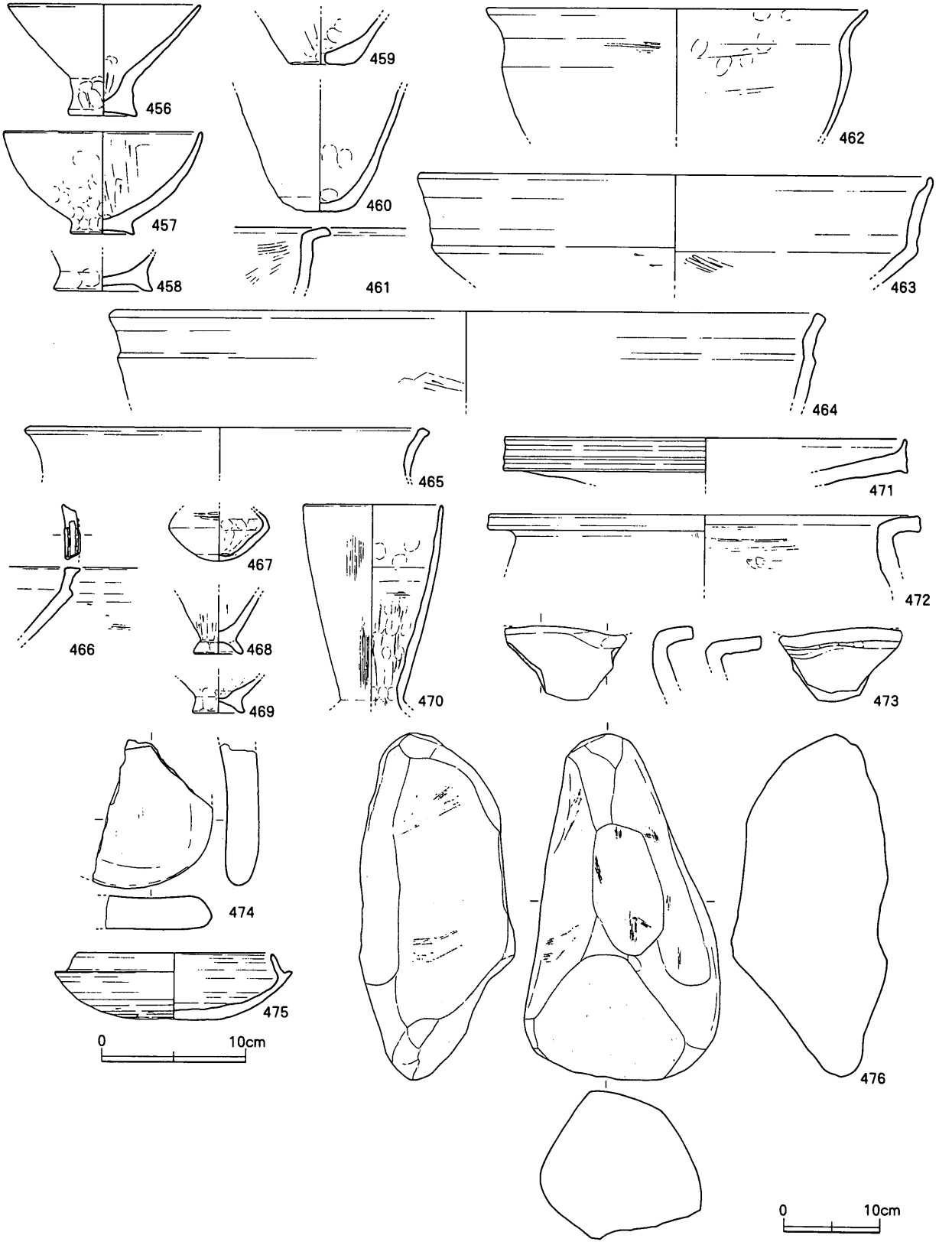
ＳＤｈ 051・ｈ 055（発掘調査時遺構名：Ⅲ－20区ＳＤ51・55）

両溝ともⅢ－20区で検出された南北方向の溝で北端部はＳＤｈ 034に合流する。南方は、削平によりどこまで延びるのか（どこから派生するのか）不明であるが、ＳＤｈ 051についてはその位置関係からＳＤｈ 049に連続するものと考えられる。周辺の溝と同様、廃絶に際して埋め戻されたようで、埋土には多量のブロックが含有されている。

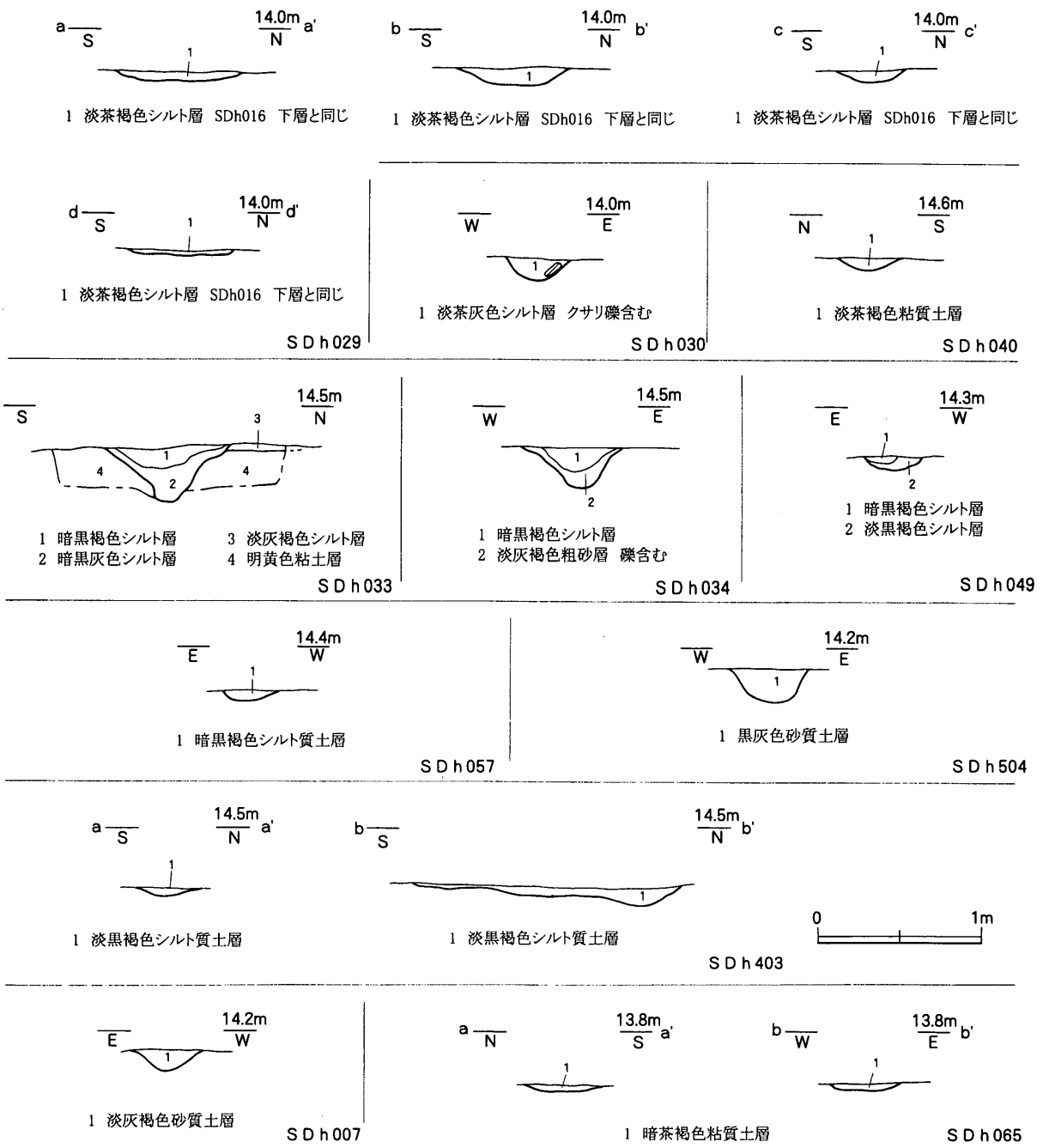
ＳＤｈ 051出土遺物　517は白色系の壺。断面は、器面から1.0mm程度を残して黒化層で占められる。518は香東川下流域産の壺。519・520は白色系の甕。いずれも黒化層が断面に認められる。519の口縁部は直立する。521～523は香東川下流域産の甕。524～526は香東川下流域産高杯。527は香東川下流域産の製塩土器。



第71図　ＳＤｈ016出土遺物実測図6（S=1/4）

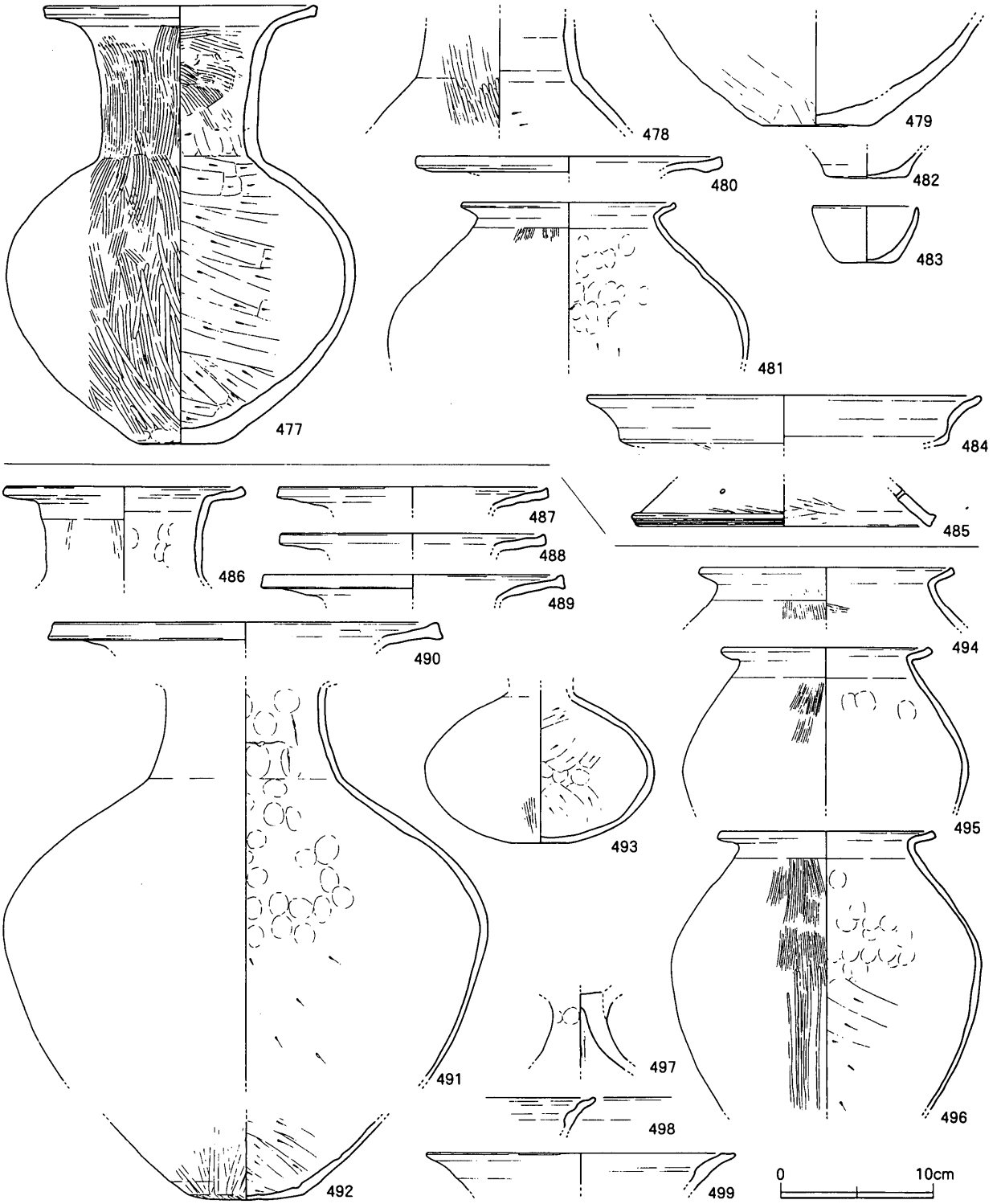


第72図　ＳＤｈ016出土遺物実測図７（S=1/4・1/6）



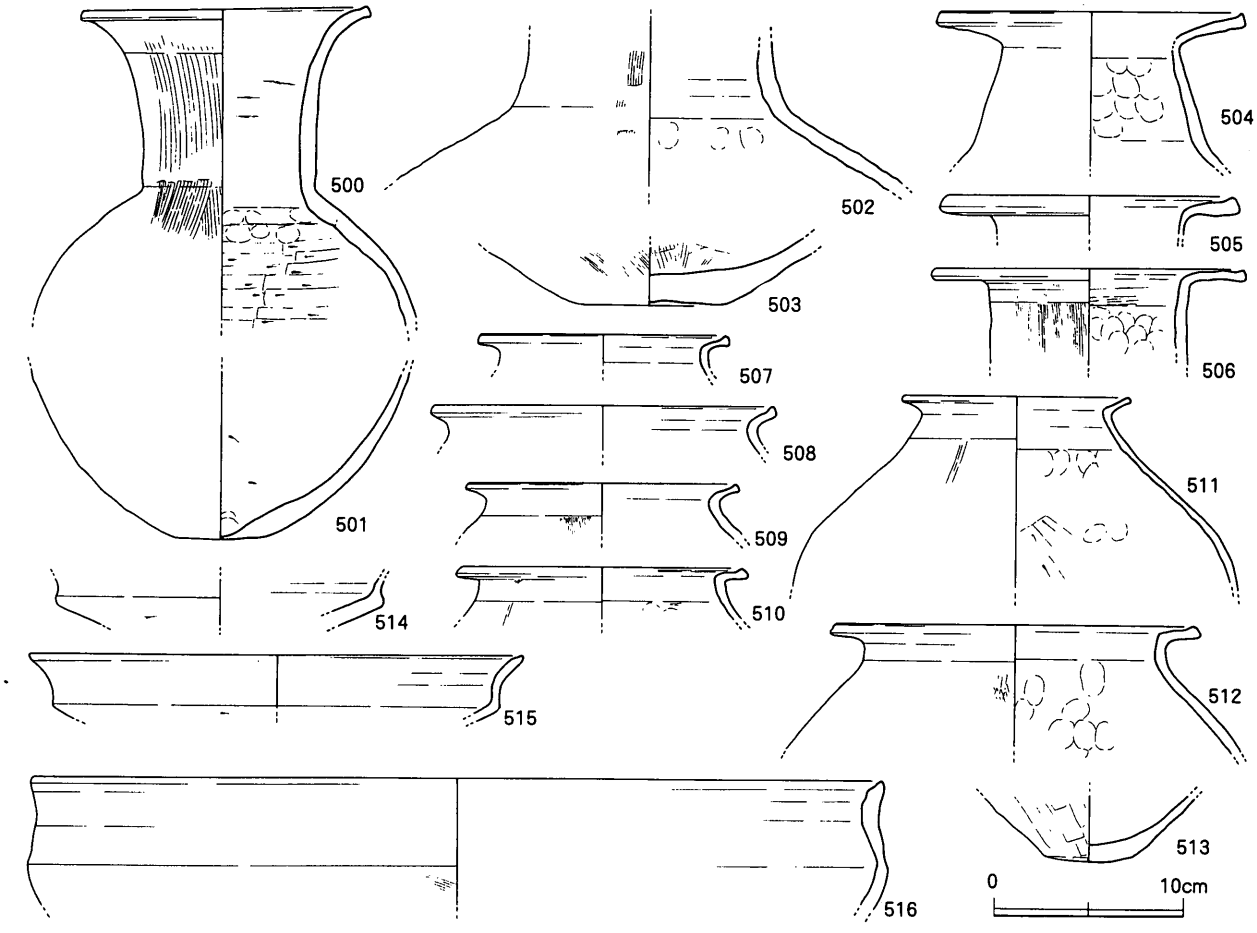
第73図　ＳＤｈ 007・ｈ 029・ｈ 030・ｈ 033・ｈ 034・ｈ 040・ｈ 049
ｈ 057・ｈ 065・ｈ 403・ｈ 504 断面図（S=1/40）

時期　出土遺物から、ＳＤｈ 051の廃絶時期は弥生時代後期中葉と想定できる。同じくＳＤｈ 016に流入するＳＤｈ 055についても、ＳＤｈ 051が後期中葉の埋没である以上、ほぼ同時期の廃絶と考えられる。

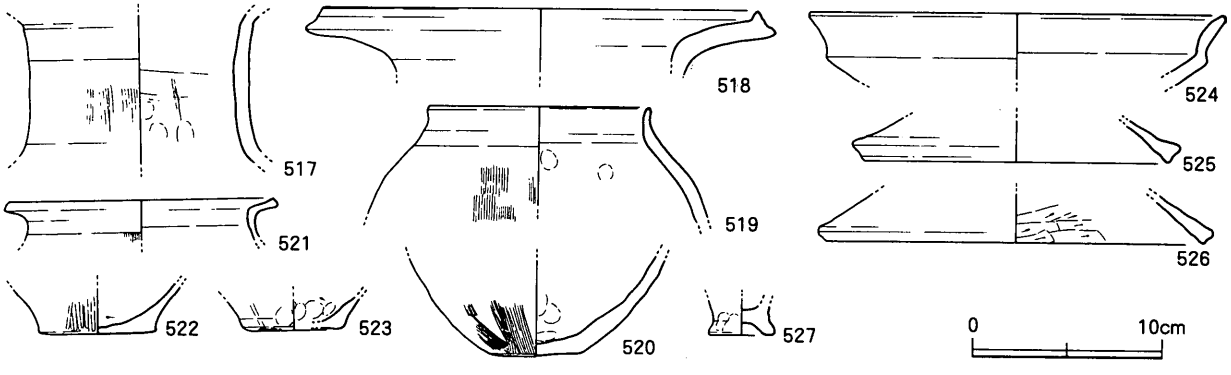


477～485　ＳＤｈ033
486～499　ＳＤｈ034

第74図　ＳＤｈ 033出土遺物実測図、ＳＤｈ 034出土遺物実測図１（S=1/4）



第 75 図　ＳＤｈ 034 出土遺物実測図 2 （S=1/4）



第 76 図　ＳＤｈ 051 出土遺物実測図 （S=1/4）

柱穴・小穴（ＳＰ）

ＳＰｈ 0610（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＰ 10）

出土遺物　528 は白色系の甕。底部外面中央部は円形にやや窪む。黒化層が断面に認められる。

時期　出土遺物から弥生時代後期後半と考えられる。

ＳＰｈ 0657（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＰ 57）

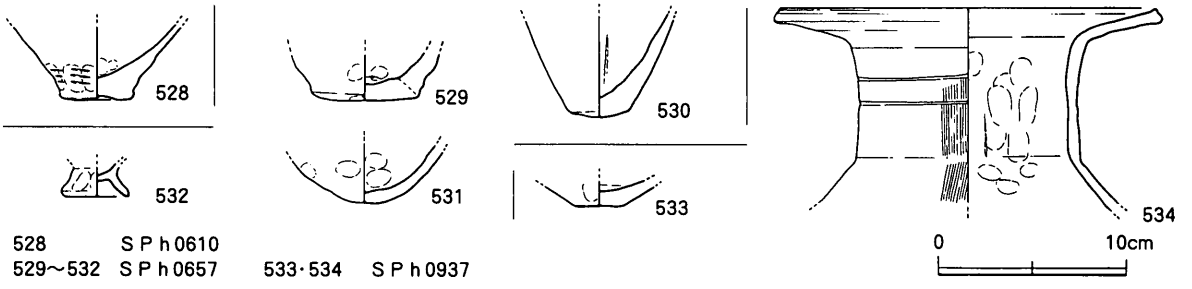
出土遺物　529 ～ 531 は白色系の鉢。530 の断面には器面から 1.0 ～ 1.5mm 程度を除いて黒化層が確認できる。532 は香東川下流域産の製塩土器。

時期　出土遺物から弥生時代後期後半と考えられる。

ＳＰｈ 0937（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 20 区ＳＰ 37）

出土遺物　533 は白色系の壺底部片か。534 は香東川下流域産の広口壺。頸部には長頸壺によく見られる螺旋状の沈線が巡らされている。

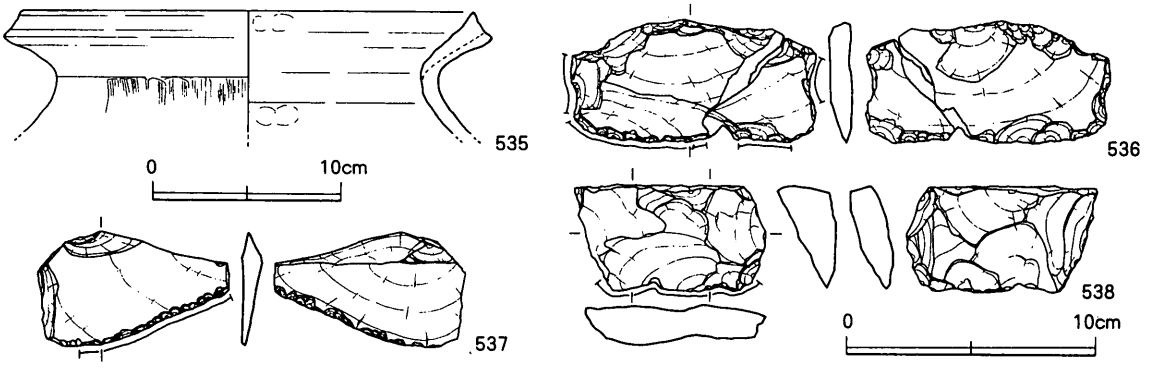
時期　出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。



第 77 図　ＳＰｈ 0610・ｈ 0657・ｈ 0937 出土遺物実測図（S=1/4）

遺構外出土遺物

535 は弥生時代中期後葉の甕。胎土中には細粒の角閃石と黒雲母が含まれている。536 はサヌカイト製石包丁。537 はサヌカイト製スクレイパー。538 は結晶片岩製のスクレイパー。



第 78 図　遺構外出土遺物実測図　（S=1/4・1/3）

２．古墳時代後期～古代の遺構と遺物

溝（ＳＤ）

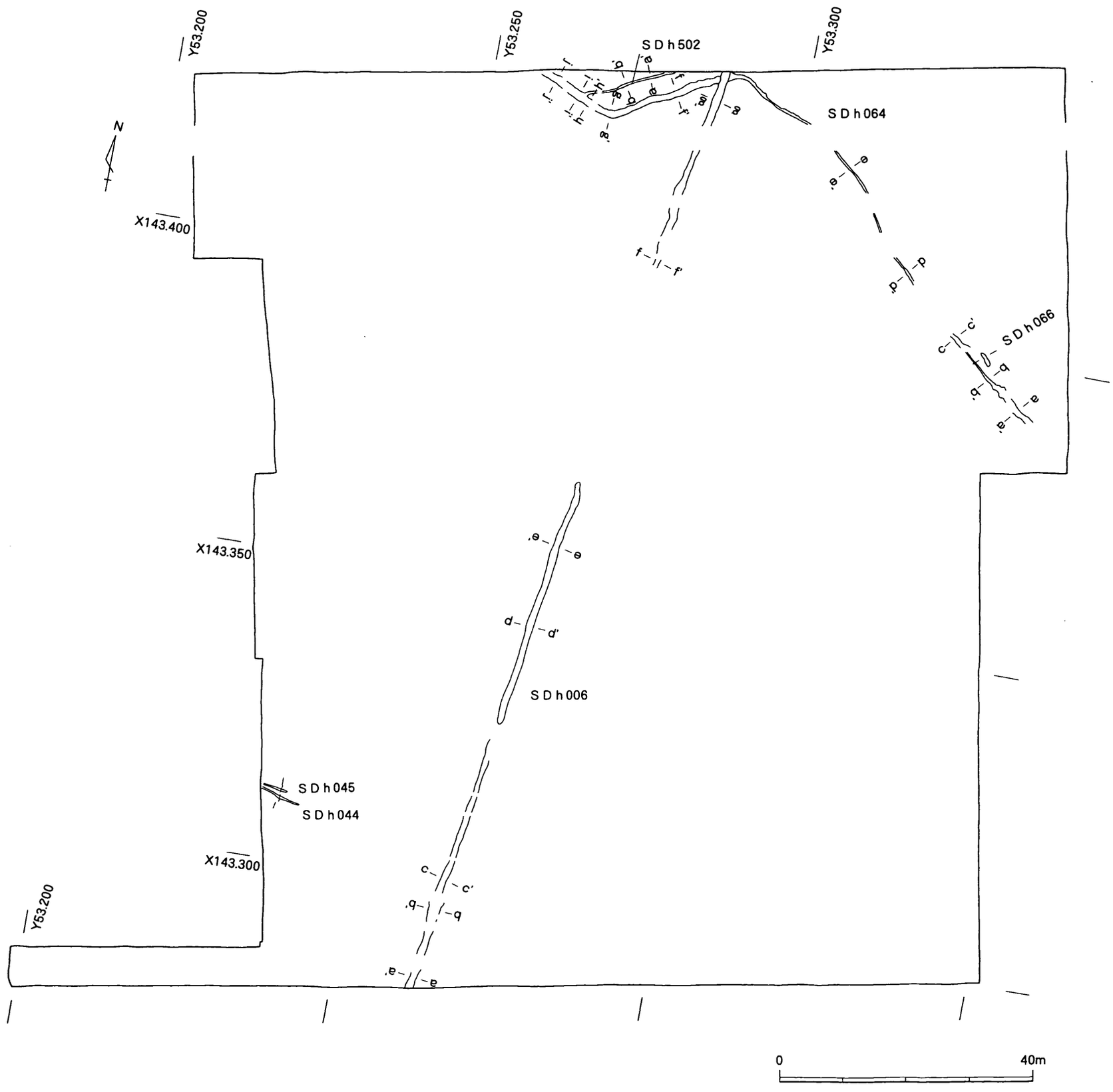
ＳＤｈ010Ａ・Ｂ・Ｃ

（発掘調査時遺構名：Ⅲ－15・16・19・20・40区ＳＤ10ａ・ｂ・ｃ他　概報遺構名：ＳＤ08・58）

Ⅲ－15区からⅢ－10区を南北に貫く、条里型地割に沿う溝。Ⅲ－40区以南ではひとつの溝として捉えられているが、Ⅲ－10・50区の断面では底部のピークが２箇所に認められ、少なくとも２本の先後関係を持つ溝（Ａ・Ｂ）であったと考えられる。なお、Ⅲ－10区の北ではＧ地区ＳＤｇ28・ｇ75に連続し、Ⅲ－10・50区で２本の溝が想定されていることと合致する。Ａ・Ｂの東にはやはり南北方向の溝Ｃが存在するが、この溝は旧陸軍の飛行場整備に伴って埋め戻されており、最終埋没は1944（昭和19）年である。

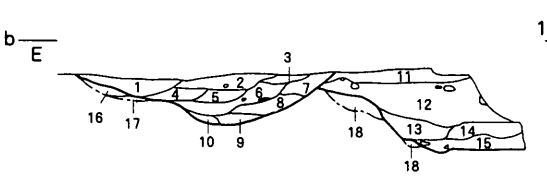
出土遺物　539は須恵器甕。540は須恵器杯。541は土師器鍋。542は土師質土器小皿。543・544は土師質土器杯。545～550は黒色土器椀。いずれも十瓶山窯産の可能性が高い。551・552は土師質土器羽釜。553は土師質土器鍋。554・555は同一個体と思われる須恵器壺。556は器種不明の土師質土器。鉢の片口部分とも考えられる。557・558は方柱状の砥石（乗松２類　以下中世の砥石については乗松2004bの分類を使用する）。砂岩製の557には、長軸方向の４面に使用痕が認められる。両小口面は欠損している。558は安山岩製で、長軸方向の相対する２面が使用されている。長軸方向の残り２面は折損しているが、方柱状にするための加工に伴うものなのか、廃棄後の破損なのかは判断できない。なお、両小口面は欠損している。砂岩製の砥石559は、短軸方向の断面形が台形状を呈するなど形態が不定形であるため乗松３類と判断した。小口（？）面と最も面積の広い面の以外の４面に使用痕が残る。560～566は弥生土器。560は白色系の甕。口縁部の仕上げが甘いためか、口縁下端部に粘土がはみ出しているように見える。断面には黒化層が見られる。摩滅が著しく、内面の大部分は黒化層が露出している。561は甕の口縁部か。色調は鈍い橙色を呈し、胎土中には黒雲母を多量に含むが、角閃石は確認できない。小破片のため復元口径は不安定である。口縁部外面には強いナデにより凹線状の窪みが認められる。562～564は香東川下流域産の甕。いずれも摩滅が顕著で、器壁が非常に薄い562に至っては、器面が幾分剥落している可能性もある。565・566は香東川下流域産の高杯。567は脚部を持つ鉢状のもの。胎土・焼成・色調から、とりあえず弥生土器と判断した。復元径の約1/4残存している脚部には杏仁状の透かしが１孔認められる。摩滅のため上面（内面）には調整が残っていない。脚部の上端部外面にはハケが施され、鉢部との接合後、鉢底部の粘土を脚部上端までナデつけ、さらにハケによる調整が行われている。568はＣから出土した結晶片岩製の伐採斧。刃部はかなり摩耗し、刃先は潰れている。また、微妙ではあるが、双方向への使用痕が確認できる。なお、基部は欠損している。サヌカイト製の569はスクレイパーと考えられるが、明瞭な刃部は持たない。剥片は定型的な横長剥片剥離技術によって作出されている。実測図の上下にあたる縁辺部には両極打法による剥離が認められ、左側の側縁部にもやはり両極打法に伴う折れが確認できる。

時期　Ａ・Ｂ出土遺物には弥生時代～中世のものが含まれるが、条里型地割に沿うため、弥生時代の遺物は間違いなく混入と判断できる。残りの遺物では、古代末のものが中心となることから、

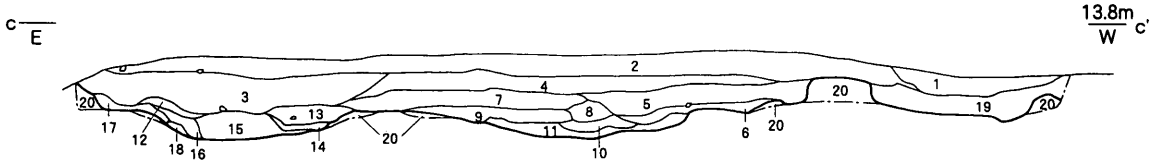


第79図　H地区古墳時代後期～古代主要遺構配置図（S=1/800）

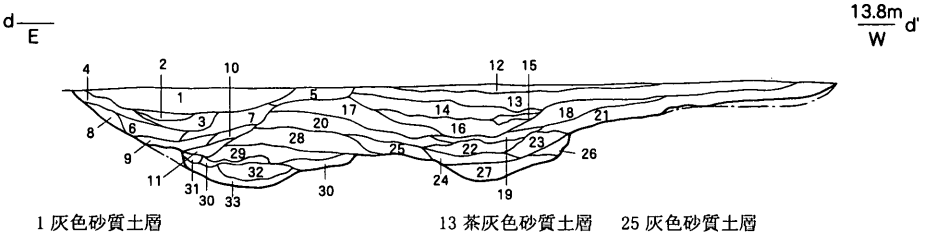
1 暗灰褐色シルト層　Fe･Mn含む
2 暗灰色粘質土層



1 明灰色粘質土層　赤褐色土含む
2 灰色砂混じり粘質土層
3 褐色砂混じり粘質土層
4 灰色シルト混じり粘土層
5 明褐色砂層
6 明褐色砂礫層
7 黄茶褐色砂混じり粘質土層
8 白灰色粘土層
9 明褐色砂層
10 明灰色粘土層
11 茶褐色粘質土層　Fe･Mn含む
12 茶褐色粘質土層　砂含む
13 茶灰色シルト混じり粘質土層
14 茶灰色礫混じり粘質土層
15 茶灰色砂礫層
16 赤茶灰色粘質土層　基盤層
17 赤茶褐色粘質土層　基盤層
18 明黄灰色粘質土層　基盤層



1 黄茶褐色粘質土層　暗茶褐色小ブロック少量含む　溜まり？
2 茶褐色砂混じり粘質土層　Fe含む
3 灰褐色粘質土層　礫含む
4 灰褐色粘質土層　砂混･礫少量含む　暗茶褐色粘質土層で取り上げ
5 茶褐灰色シルト質粘質土層
6 暗褐灰色シルト混じり粘質土層
7 淡茶灰色シルト層
8 茶灰色シルト層　礫少量含む　灰色砂質土層中層で土器取り上げ
9 黄茶灰色小礫混じり砂質土層
10 明褐色細砂　ラミナ状　砂礫層　最下層で土器取り上げ
11 褐灰色砂礫層　砂礫層　最下層で土器取り上げ
12 暗褐灰色クサリ混じり砂色土層
13 灰色シルト層　15層よりやや多くクサリ礫含む
14 明灰色砂層
15 灰色砂礫層
16 褐灰色砂混じりシルト層
17 明灰色粘土層
18 褐灰色砂層
19 淡褐色粘質土層　暗茶褐色粘土ブロック多量に含む　溜まり？
20 黄色粘土層　基盤層



1 灰色砂質土層
2 灰褐色砂質土層
3 黒灰色砂質土層
4 黒灰色砂質土層　粘性あり
5 茶灰色砂質土層
6 灰色砂質土層
7 茶灰色砂質土層
8 灰色砂質土層　最大径5mmの礫含む
9 灰色砂質土層
10 灰色砂質土層
11 灰色砂質土層　最大径5mmの礫多量に含む
12 灰白色砂質土層
13 茶灰色砂質土層
14 灰色砂質土層
15 褐色砂質土層
16 灰色砂質土層
17 灰色砂質土層
18 茶灰色砂質土層
19 黒灰色砂質土層
20 灰白色砂質土層
21 灰色砂質土層
22 砂層
23 灰色砂質土層
24 茶灰色砂質土層
25 灰色砂質土層
26 灰褐色砂質土層　粘性あり
27 褐色砂質土層
28 黒褐色砂質土層
29 灰褐色砂質土層
30 黒灰色砂質土層
31 砂層
32 茶灰色砂質土層
33 灰白色砂質土層

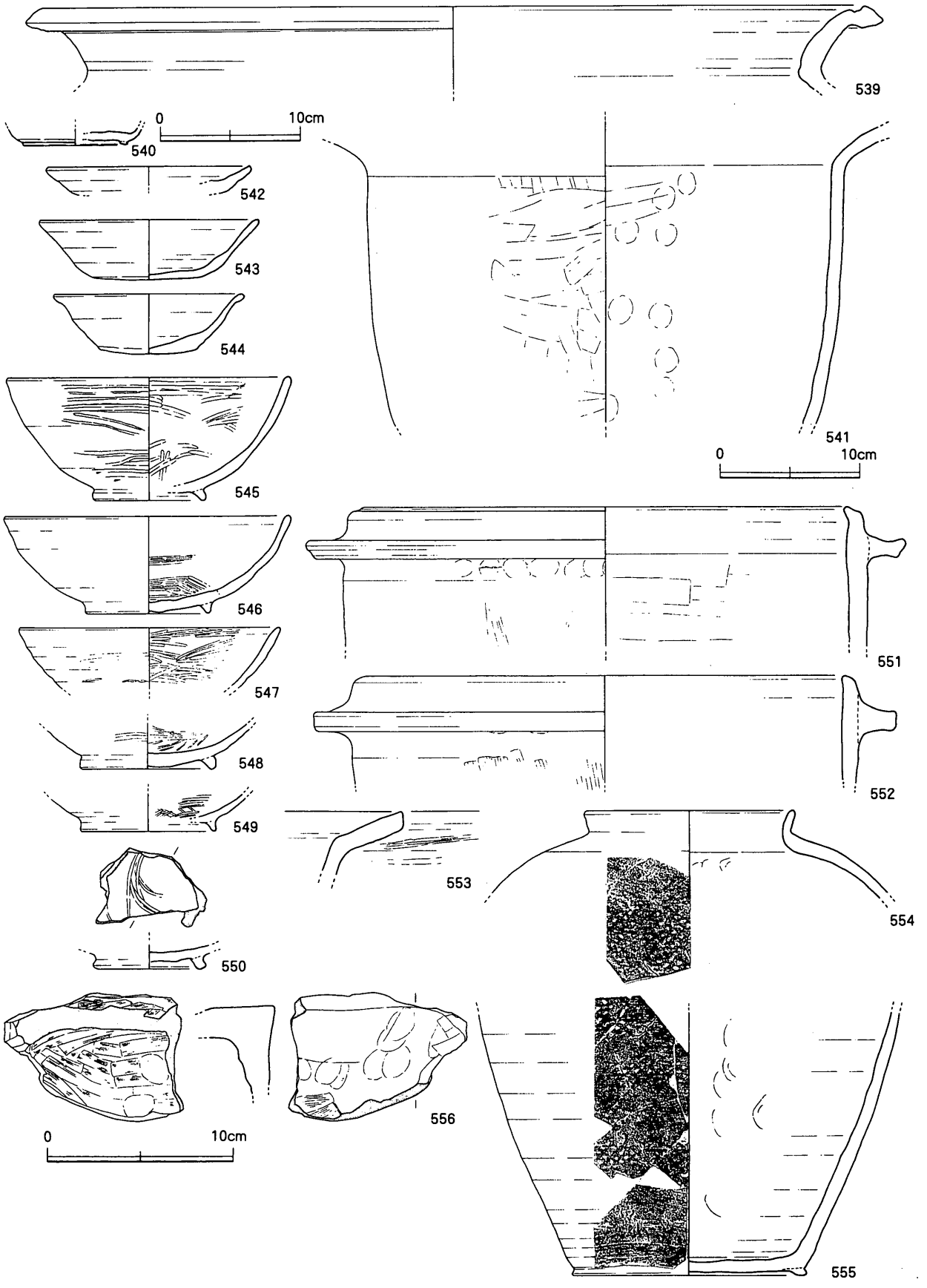
0　2m

第80図　ＳＤｈ 010 断面図（S=1/60）

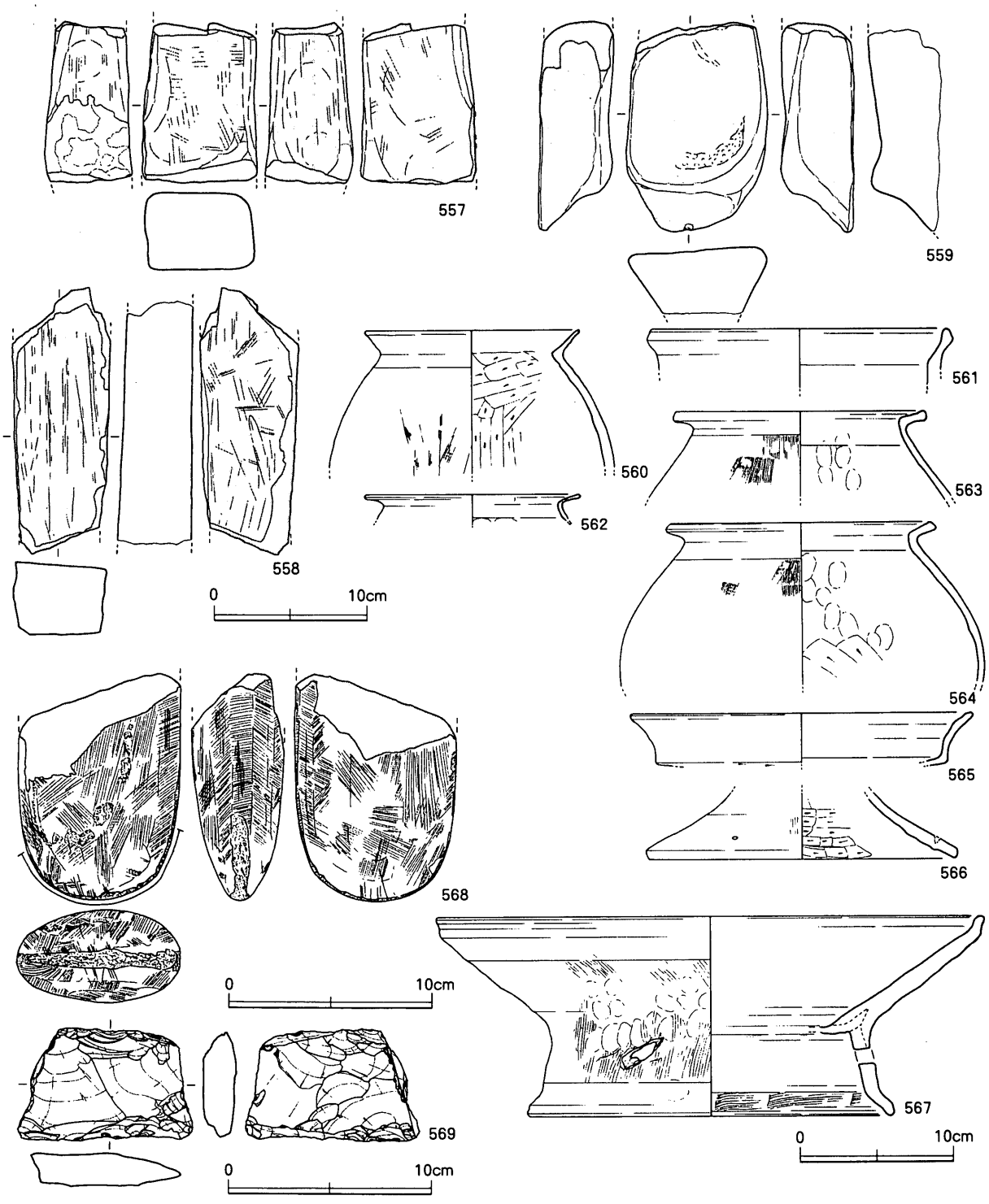
この時期にＡ・Ｂが機能していたものと考えたい。ただし、少量ではあるが古代の遺物も含むため、上限がやや遡る可能性もある。Ｃについては、前述のとおり、埋没時期が 1944 年であることが明確である。含まれる遺物の多くは図化していないが、近代のものが多数を占めるため、その時期を中心として機能していたと思われる。

ＳＤｈ 006（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 15 ～ 18 区ＳＤ 06 他　概報遺構名：ＳＤ 45）

Ⅲ－ 10・15 ～ 18・40・50 区にまたがる南北方向の条里地割に沿った溝。この溝は、空港跡地遺



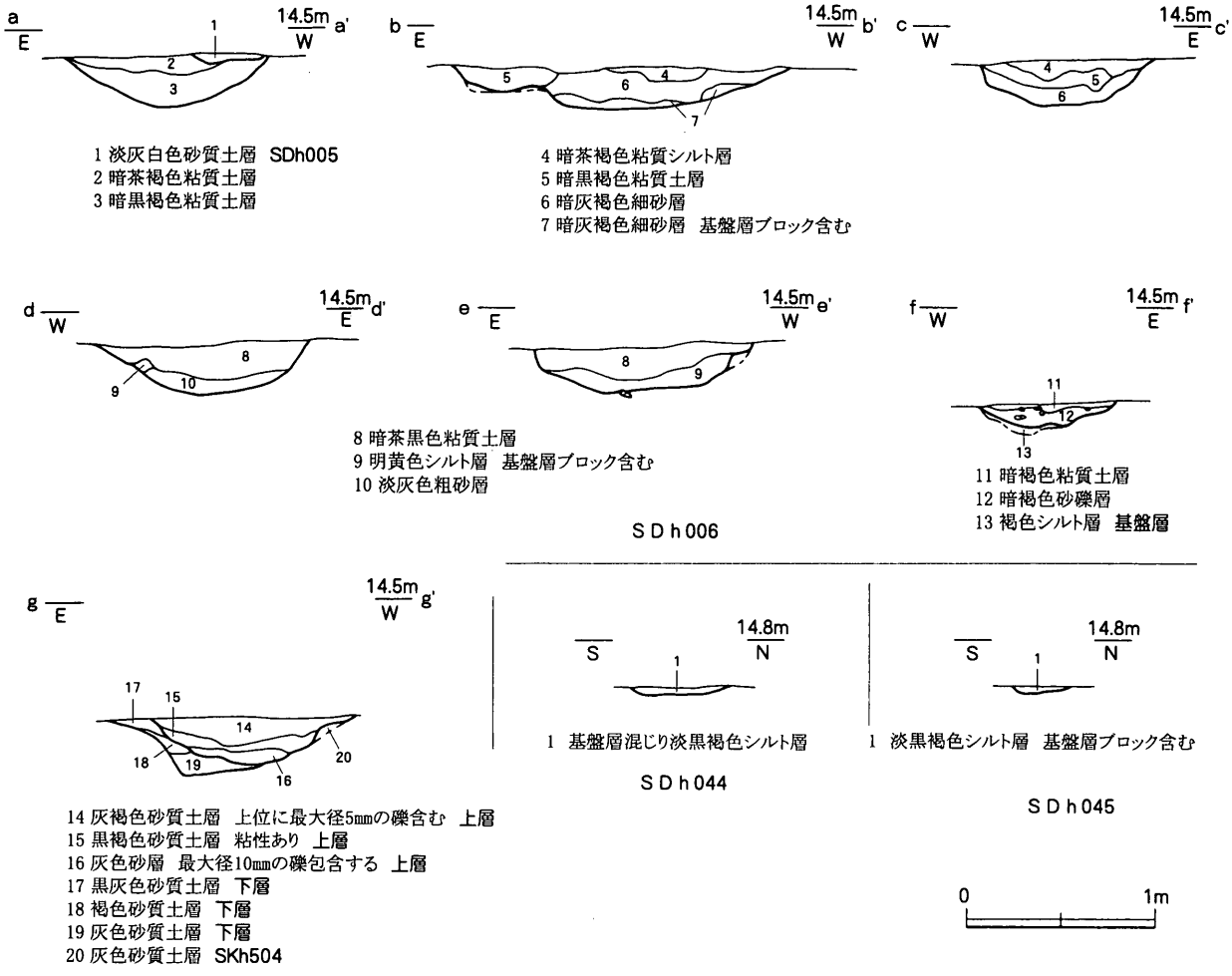
第81図　ＳＤｈ 010出土遺物実測図１（S=1/4・1/3）



第82図　ＳＤｈ010出土遺物実測図２（S=1/4・1/3）

跡内での条里型地割の初現を示す可能性がある。また、東西方向の溝は、小規模なＳＤｈ044・ｈ045のみであることから、周辺地域では南北方向の地割に合致する溝が先行して整備されたものと思われる。その背景には、標高の高い南部から低い北部への導水を目的としたことが想定され、坂出市川津地域において山間部側から大束川へ流入する東西方向の地割が明瞭に残る（大久保1990a）ことと類似する。

なお本溝は、後世の地割から復元される坪界線とは異なる位置にある。



第83図　ＳＤｈ 006・ｈ 044・ｈ 045断面図（S=1/40）

出土遺物　570 ～ 572 は須恵器。570 は杯蓋としたが、杯身の可能性もある。571 は甕。572 は提瓶もしくは平瓶の口縁部。573 は香東川下流域産の広口壺。574 は弥生土器壺底部片。香東川下流域産である。575 は複数面に使用痕が確認できる砂岩製の砥石。形状から弥生時代のものと考えられる。

時期　573 ～ 575 は混入と捉え、ＴＫ 217 型式並行期の 572 から 7 世紀中葉と判断できる。

ＳＤｈ 076（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 40 区ＳＤ 76）

Ⅲ－ 40 区で検出された、東西方向の条里型地割に沿った溝。Ⅲ－ 49 区のＳＤｈ 203 とほぼ同様の埋土を有し、位置的に連続するとも考えられることから、両溝は同一遺構の可能性がある。

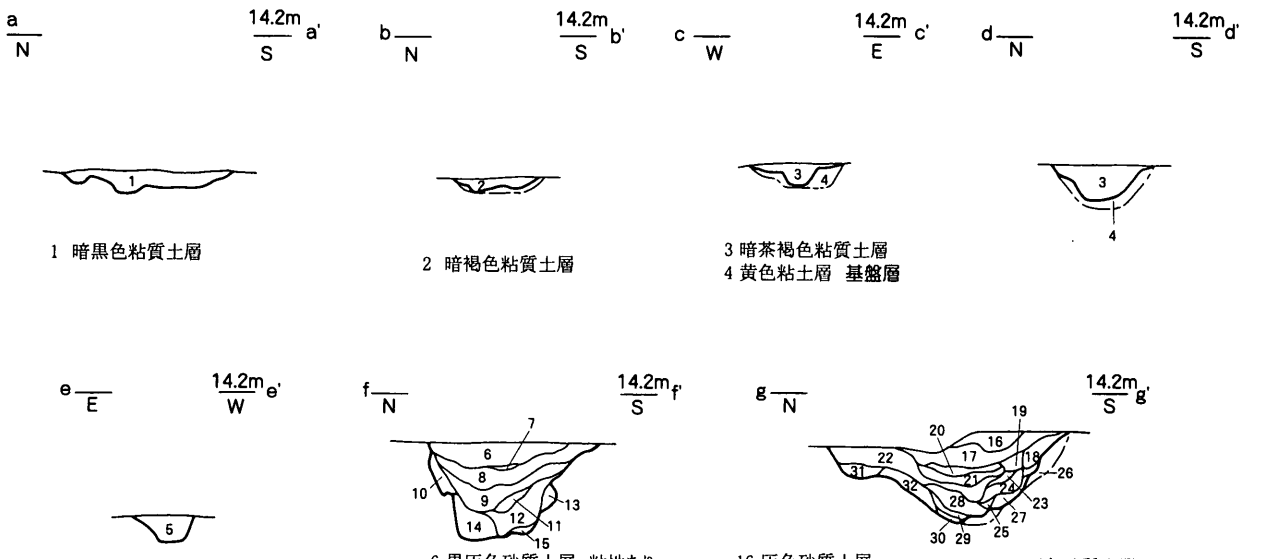
出土遺物　576・577 は須恵器蓋。578 は黒色土器椀。

時期　出土遺物は古墳時代後期～古代であるが、ＳＤｈ 203 との位置関係や、埋土の状況から判断して、古代末～中世の遺構と捉えられる。

ＳＤｈ 064（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 40 区ＳＤ 64、Ⅲ－ 10 区ＳＤ 01　概報遺構名：ＳＤ 08）

Ⅲ－ 40 区からⅢ－ 10 にかけて伸びる溝。旧地形から想定される等高線に沿って南部へ流出する。埋土は暗褐色～暗黒色の粘土～シルト層が主体で、自然堆積による埋没であることがわかる。

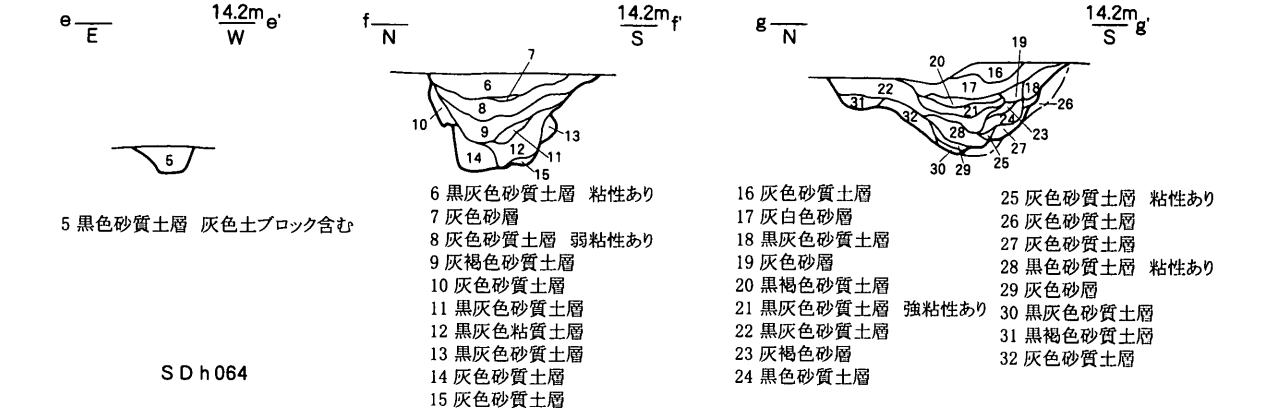
出土遺物　579 は須恵器杯身。580・581 は須恵器壺。582 ～ 587 は弥生土器。いずれも摩滅が



1 暗黒色粘質土層

2 暗褐色粘質土層

3 暗茶褐色粘質土層
4 黄色粘土層 基盤層



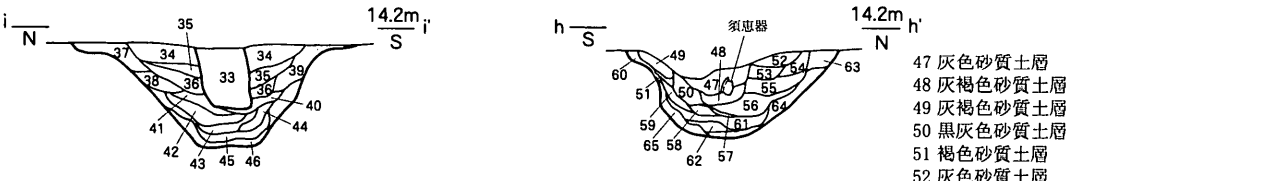
5 黒色砂質土層 灰色土ブロック含む

SDh064

6 黒灰色砂質土層 粘性あり
7 灰色砂層
8 灰色砂質土層 弱粘性あり
9 灰褐色砂質土層
10 灰色砂質土層
11 黒灰色砂質土層
12 黒灰色粘質土層
13 黒灰色砂質土層
14 灰色砂質土層
15 灰色砂質土層

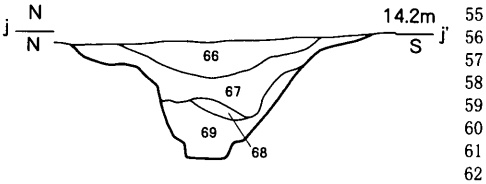
16 灰色砂質土層
17 灰白色砂層
18 黒灰色砂質土層
19 灰色砂層
20 黒褐色砂質土層
21 黒灰色砂質土層 強粘性あり
22 黒灰色砂質土層
23 灰褐色砂層
24 黒色砂質土層

25 灰色砂質土層 粘性あり
26 灰色砂質土層
27 灰色砂質土層
28 黒色砂質土層 粘性あり
29 灰色砂層
30 黒灰色砂質土層
31 黒褐色砂質土層
32 灰色砂質土層

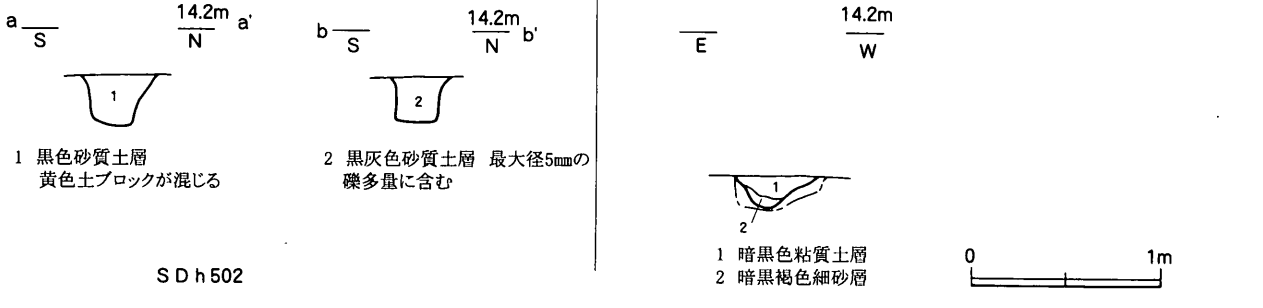


33 黒褐色砂質土層 SDh502
34 茶灰色砂質土層
35 灰色砂質土層
36 褐色砂質土層
37 灰色砂質土層
38 黒灰色砂質土層
39 灰色砂質土層
40 灰白色砂質土層
41 灰褐色砂質土層
42 黒灰色砂質土層
43 黒色砂質土層
有機物の堆積により形成された層
44 灰色砂質土層
45 灰色砂層
46 灰白色砂層

47 灰色砂質土層
48 灰褐色砂質土層
49 灰褐色砂質土層
50 黒灰色砂質土層
51 褐色砂質土層
52 灰色砂質土層
53 灰褐色砂質土層
54 灰色砂質土層
55 黒灰色砂質土層
56 黒灰色砂質土層
57 灰褐色砂質土層
58 黒色砂質土層
59 茶灰色砂質土層
60 褐色砂質土層
61 黒褐色砂質土層
62 黒色砂質土層
有機物の堆積により形成された層
63 茶灰色砂質土層
64 黒灰色砂質土層
65 灰色砂質土層



66 暗黒褐色粘質土層
67 暗黒褐色シルト質土層
68 暗灰色細砂層
69 暗黒色粘質土層 砂含む



1 黒色砂質土層
黄色土ブロックが混じる

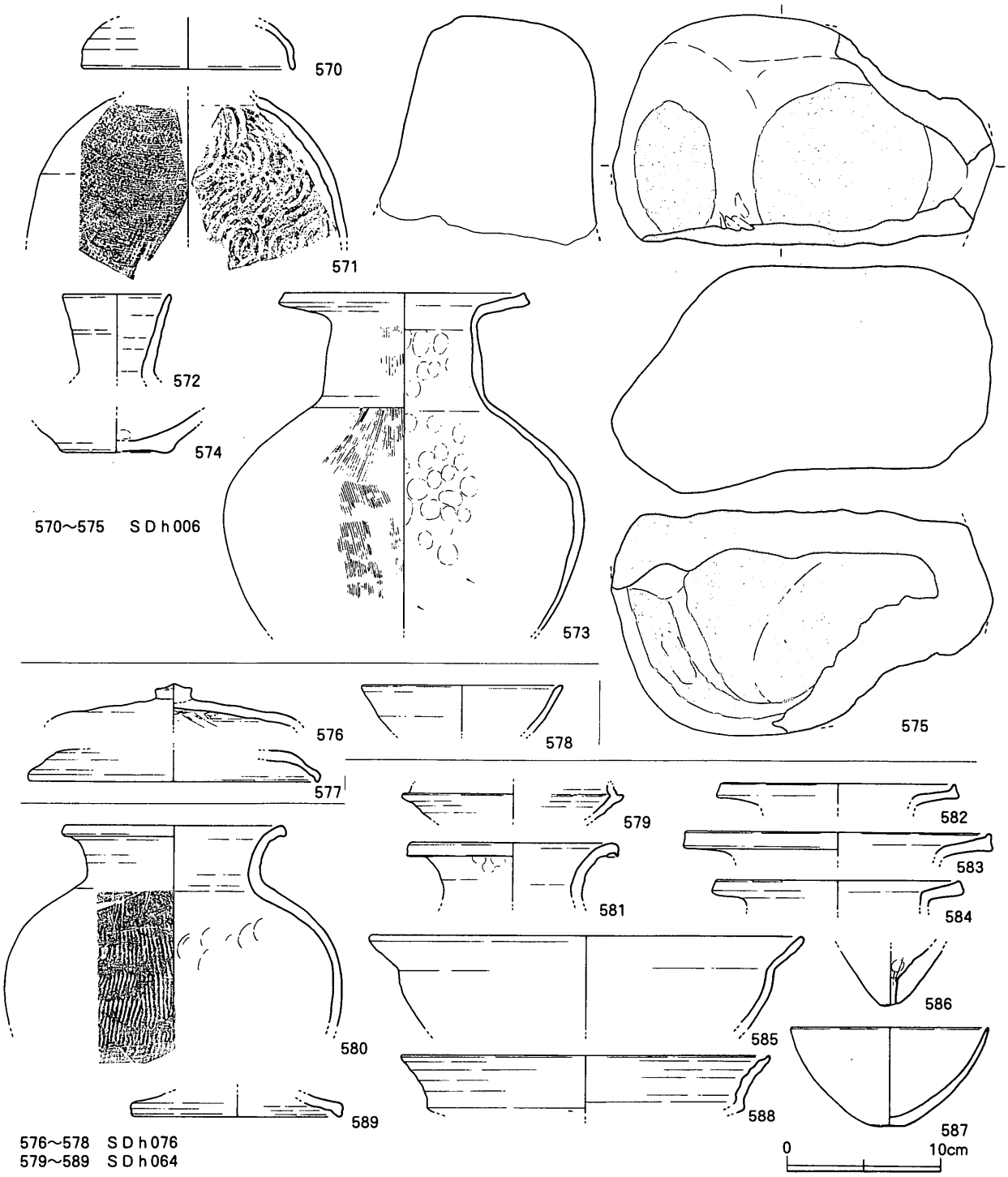
2 黒灰色砂質土層 最大径5㎜の
礫多量に含む

SDh502

1 暗黒色粘質土層
2 暗黒褐色細砂層

SDh066

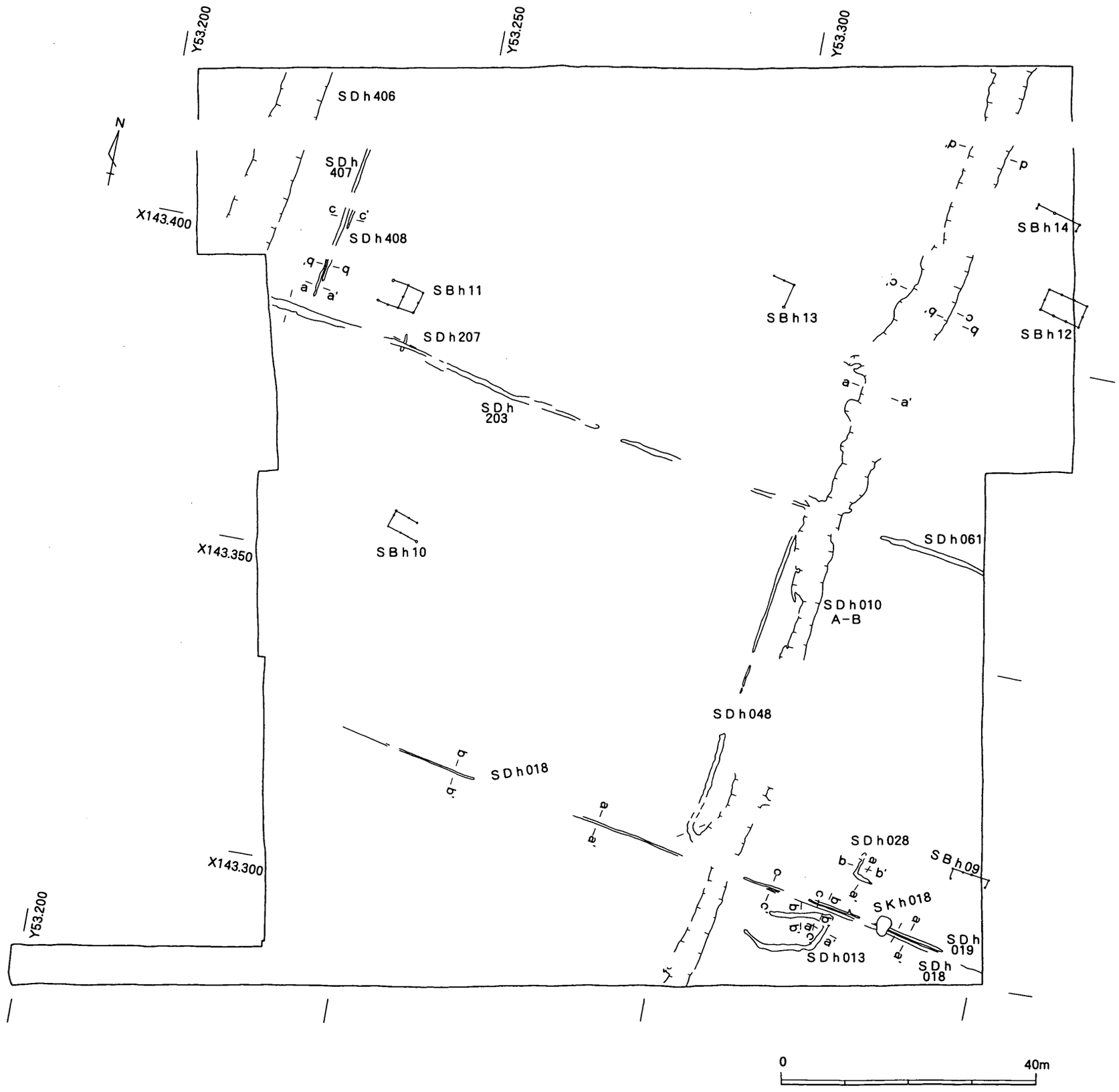
第84図 SDh 064・h 066・h 502断面図 (S=1/40)



第85図　ＳＤｈ006・ｈ064・ｈ076出土遺物実測図（S=1/4）

著しい。582・583は白色系の壺口縁部。582は器表面１～２ mmのみ焼成による色調変化が認められる。584は香東川下流域産の広口壺。585～587は白色系の鉢。いずれも断面のほとんどは黒化層で占められる。586は底部に焼成前の穿孔が行われている。588・589は香東川下流域産の高杯。

時期　出土した須恵器から６世紀中葉～後半と考えられる。弥生土器は混入であろう。



第86図　H地区古代末～中世主要遺構配置図（S=1/800）

３．古代末～中世の遺構と遺物

掘立柱建物（ＳＢ）

ＳＢｈ 09（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 16 区ＳＢ 02）

Ⅲ－ 16 区東端部からＩ地区にかけて検出した２×３間の掘立柱建物。柱穴土層断面の分層記録から、北辺の柱穴に柱痕が確認できる。

時期　柱穴（ＳＰｈ 0199・ｈ 0228）の出土遺物から 14 世紀前半と判断できる。

ＳＢｈ 10

Ⅲ―17 区西部で検出された柱穴群から、報告書作成時に掘立柱建物を復元した。梁間を構成する４基の柱穴は間隔が不揃いであるため、ＳＰｈ 0314・ｈ 0316 の２基は本掘立柱建物を構成する柱穴ではない可能性もある。桁行は４基の柱穴によって構成される。

時期　出土遺物が無く、時期決定は困難であるが、埋土の状況から古代末～中世の建物と判断できる。

ＳＢｈ 11（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 49 区ＳＢ 01）

発掘調査時には、Ⅲ－ 49 区北部のＳＰｈ 2031・ｈ 2032・ｈ 2034 ～ｈ 2036・ｈ 2039 の６基の柱穴で構成される１間×２間の掘立柱建物を想定していたが、報告書作成時にＳＰｈ 2053・ｈ 2027 と併せて梁間２間、桁行２間以上の建物を復元した。東辺の柱穴３基に認められる、柱痕らしき層中には木片が多量に含まれる。

時期　遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、埋土の土質・色調から古代末～中世の建物と考えられる。

ＳＢｈ 12（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 50 区ＳＢ 01）

Ⅲ－ 50 区東端部からＩ地区にかけて検出した２×３間の掘立柱建物。柱穴中には柱痕が確認された。本建物の南部には、並行する建物ＳＢｈ 14 が存在する。

時期　埋土の状況から古代末～中世の遺構と判断できるが、詳細な時期は不明である。

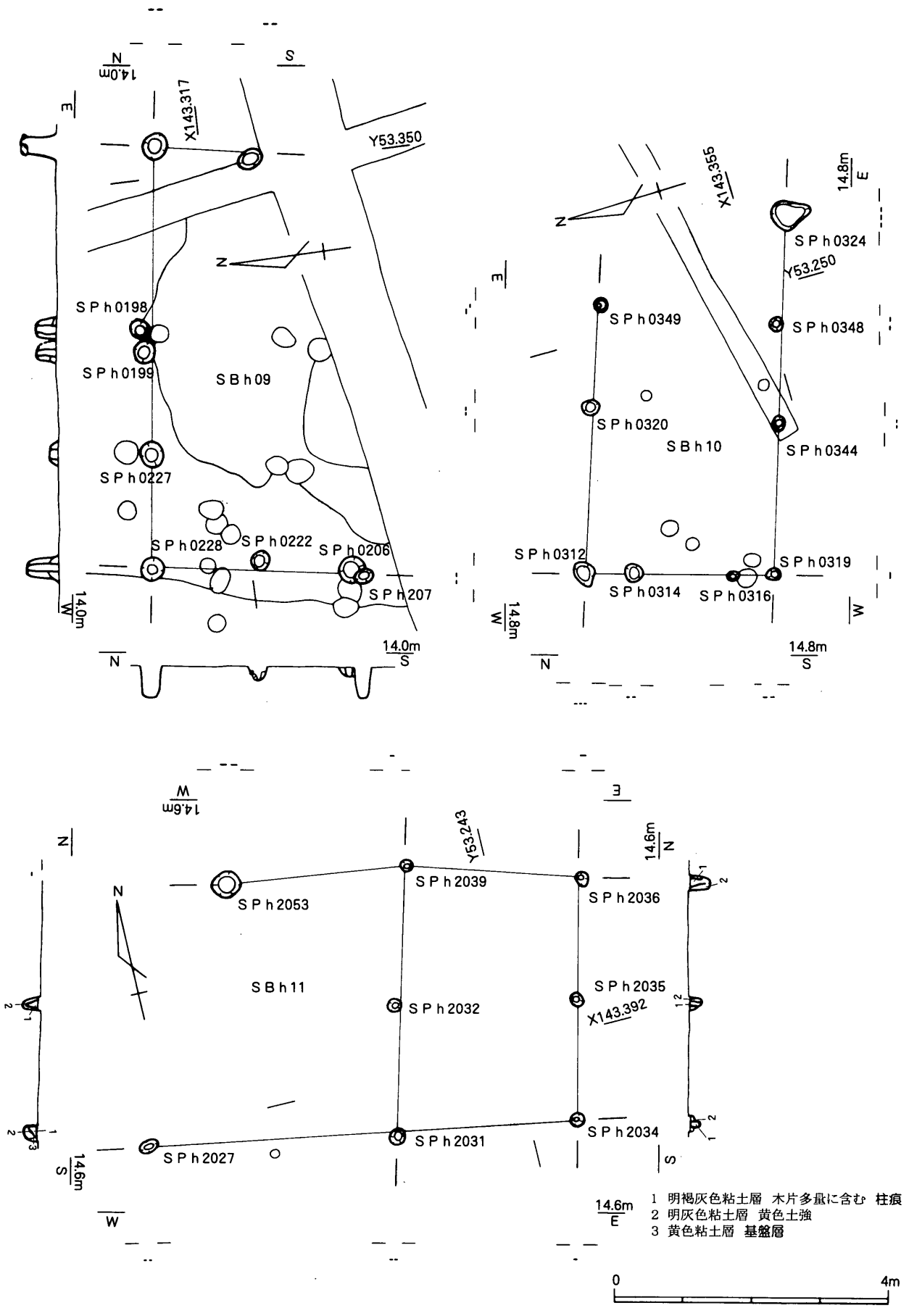
ＳＢｈ 13（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 50 区ＳＡ 01）

Ⅲ－ 50 区西部で検出した、１間×２間以上の掘立柱建物。発掘調査時には北辺の柱穴３基による柵列を想定していたが、報告書作成時にＳＰｈ 3025 と併せて掘立柱建物とした。しかし、２辺のみであるため当初のように柵列である可能性も残る。

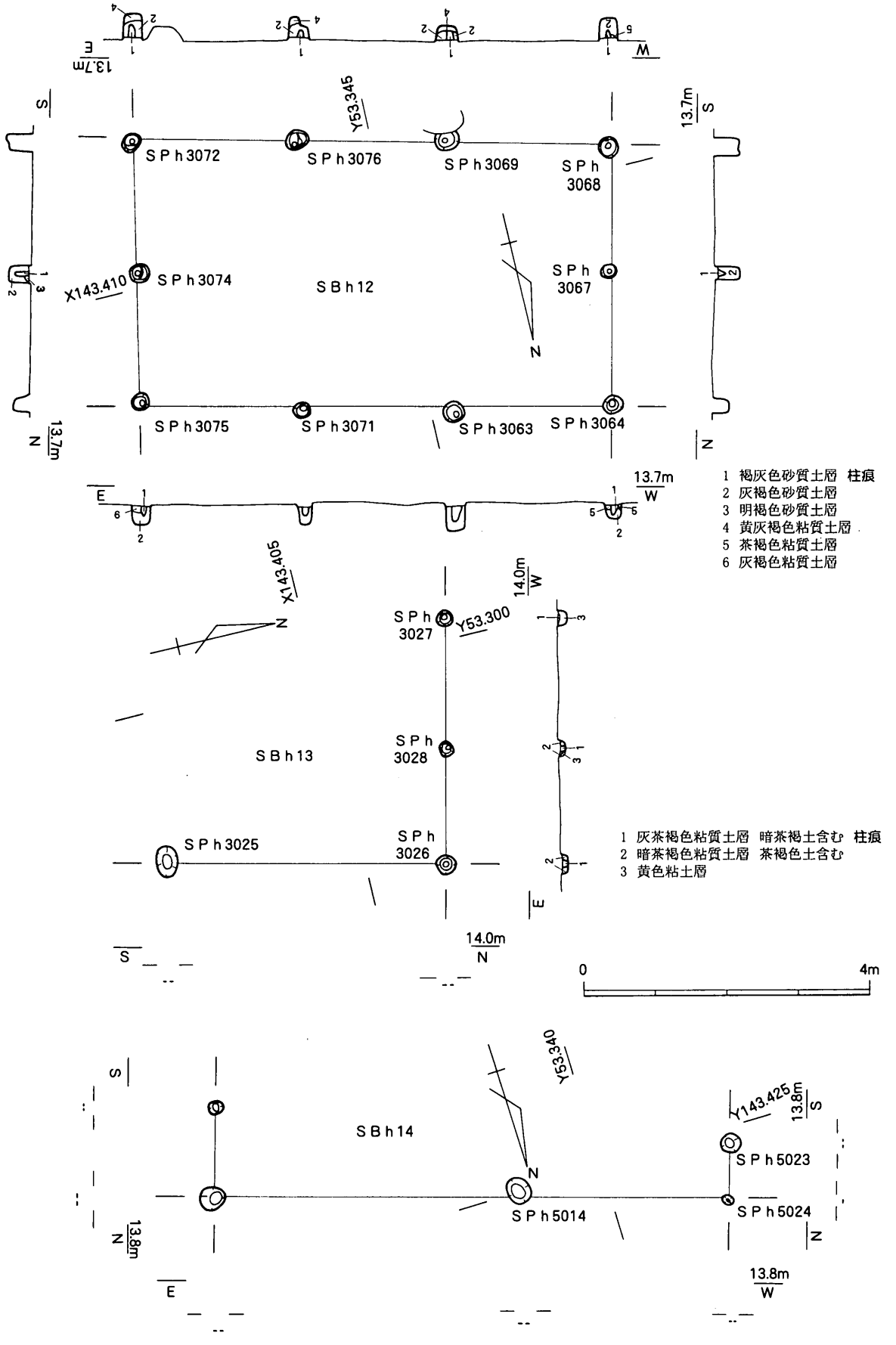
時期　出土遺物が無く、時期決定は困難であるが、埋土の状況から古代末～中世の建物と判断できる。

ＳＢｈ 14（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 50 区ＳＢ 01）

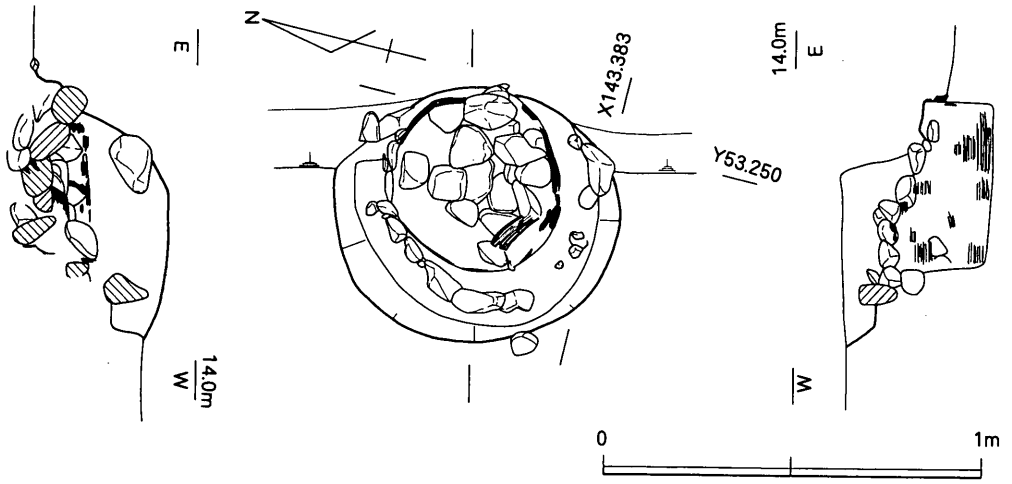
Ⅲ－ 50 区東端部からＩ地区にかけて検出した掘立柱建物。東西辺の一部と南辺は確認できてい



第87図 SBh 09・h 10・h 11 平・断面図 (S=1/80)



第88図　SBh 12・h 13・h 14平・断面図（S=1/80）



第89図　ＳＥｈ02平・立面図（S=1/20）

ないため、規模は不明である。なお、北部には本建物に並行するＳＢｈ12が存在する。

時期　埋土の状況から古代末～中世の遺構と判断できるが、詳細な時期は不明である。

井戸（ＳＥ）

ＳＥｈ02（発掘調査時遺構名：Ⅲ－50区ＳＥｈ02）

Ⅲ－50区で検出した井戸と思われる遺構。直径約0.7ｍの土坑の壁面に径10cm程度の小礫が積まれ、その内側に曲物（？）が設置されていた。底面が湧水層に達しているか否かについては、記録がないため判断できないが、発掘調査時の所見に従い本遺構を井戸とした。ただし、Ⅲ－20区で検出した近世井戸ＳＥｈ01の底面標高が11.9ｍであるのに対し、本遺構の底面が13.0ｍと1ｍ以上差があるため、本遺構が井戸ではない可能性もある。

時期　出土遺物が皆無であるため、時期決定は困難であるが、埋土の色調から古代末～中世の遺構と判断した。

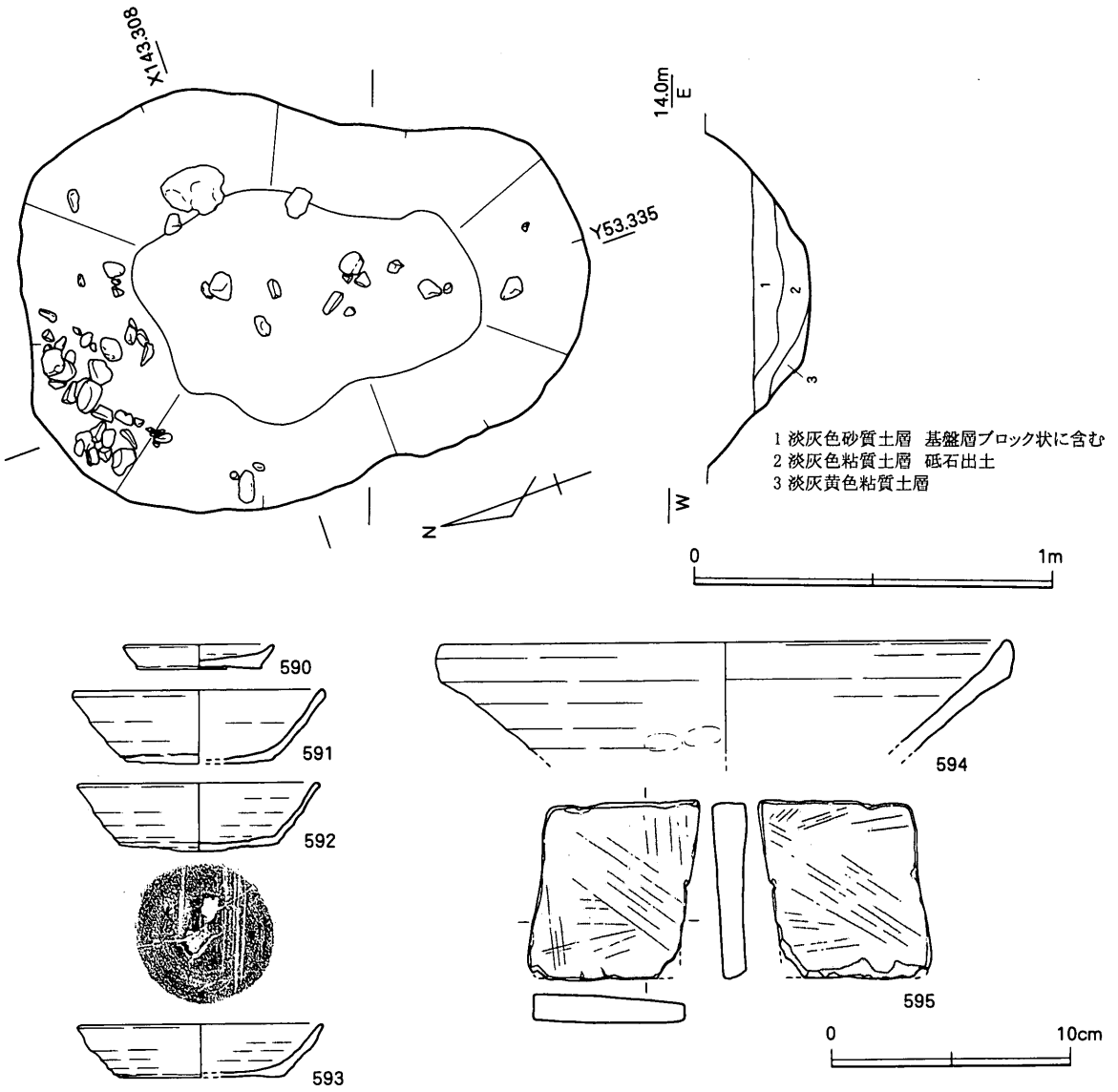
土坑（ＳＫ）

ＳＫｈ018（発掘調査時遺構名：Ⅲ－16区ＳＫ18　概報遺構名：ＳＫ30）

Ⅲ－18区で検出した、平面形がややいびつな楕円形の土坑である。その規模は、長軸約3.1ｍ、短軸約2.3ｍ、検出面からの深さ約0.6ｍである。埋土は大別して上層の淡灰色砂質土層と下層の淡灰色粘質土層に分かれる。後述する遺物は、被熱の痕跡が認められる礫とともに下層から出土している。特に砥石（595）は底部に貼り付くようなかたちで出土し、周辺の礫同様、被熱の痕跡が確認できる。

出土遺物　590は土師質土器小皿。591～593は土師質土器杯。594は東播系須恵器鉢。595は流紋岩製砥石。板状を呈し、面積の広い2面が使用されているが、擦痕の方向に規則性は認められない。前述のとおりこの砥石には被熱痕がある。

時期　最も時期の降る593から、本土坑の埋没時期は14世紀中葉と判断できる。なお、590～592は13世紀後半～14世紀初頭を示す。



第90図　ＳＫｈ 018 平・断面図（S=1/20）、出土遺物実測図（S=1/3）

ＳＫｈ 013（調査時遺構名：Ⅲ－ 16 区ＳＫ 13）

出土遺物　596 は須恵器杯の底部片。

時期　596 は 10 世紀代にまで遡り得るが、埋土の色調と周辺遺構の状況から古代末～中世の遺構と判断した。

ＳＫｈ 089（概報遺構名：ＳＫ 31　調査時遺構名：Ⅲ－ 20 区ＳＫ 89）

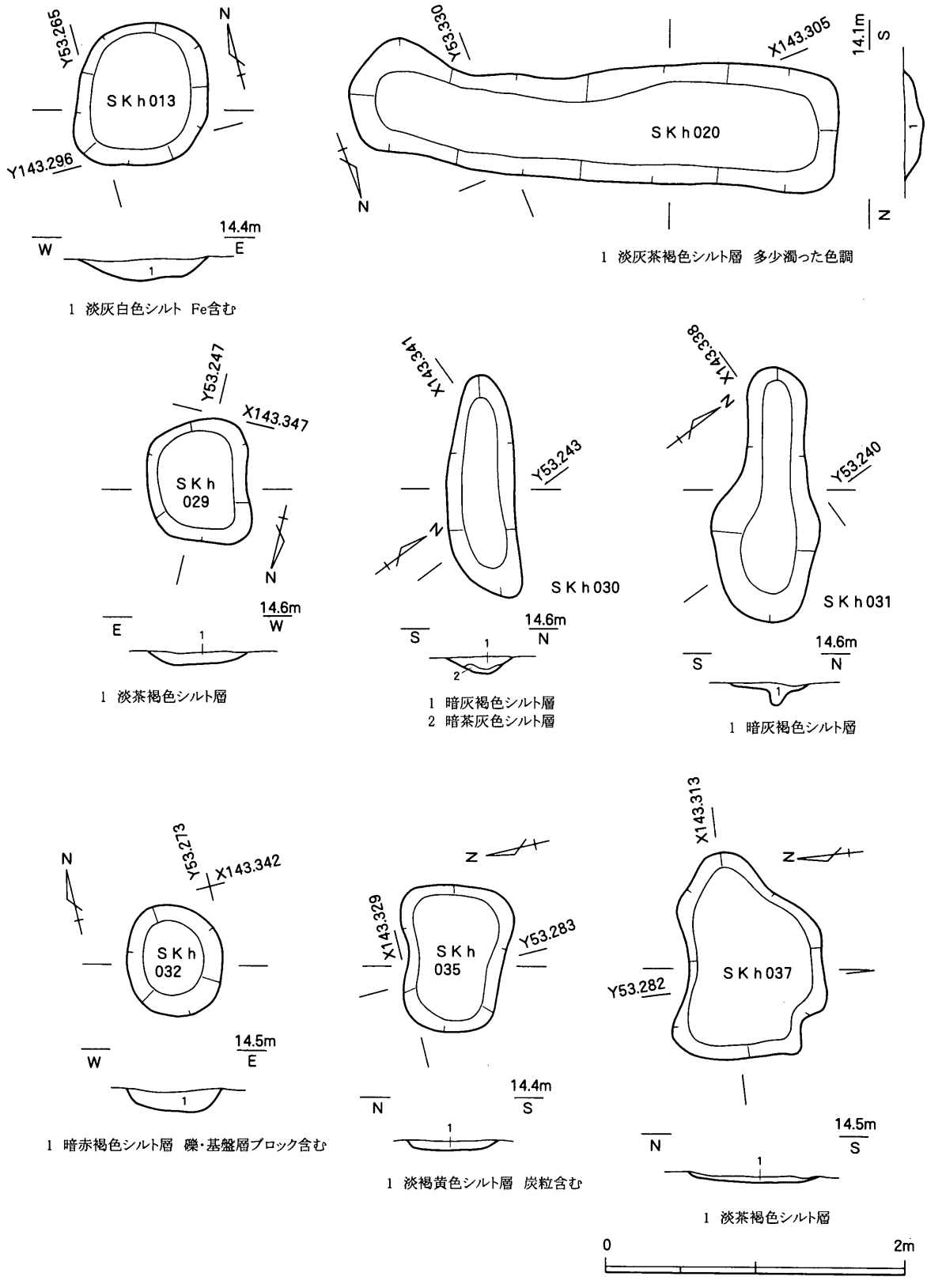
出土遺物　597 は瓦質土器鍋。底部に若干煤が付着している。598 は土師質土器足鍋。外面の煤の付着は口縁部にまで達している。

時期　597 から 14 世紀末～ 15 世紀前葉と考えられる。

ＳＫｈ 144（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 40 区ＳＫ 144）

出土遺物　599 は器種不明の瓦質土器。

時期　埋土から古代末～中世の遺構と判断した。

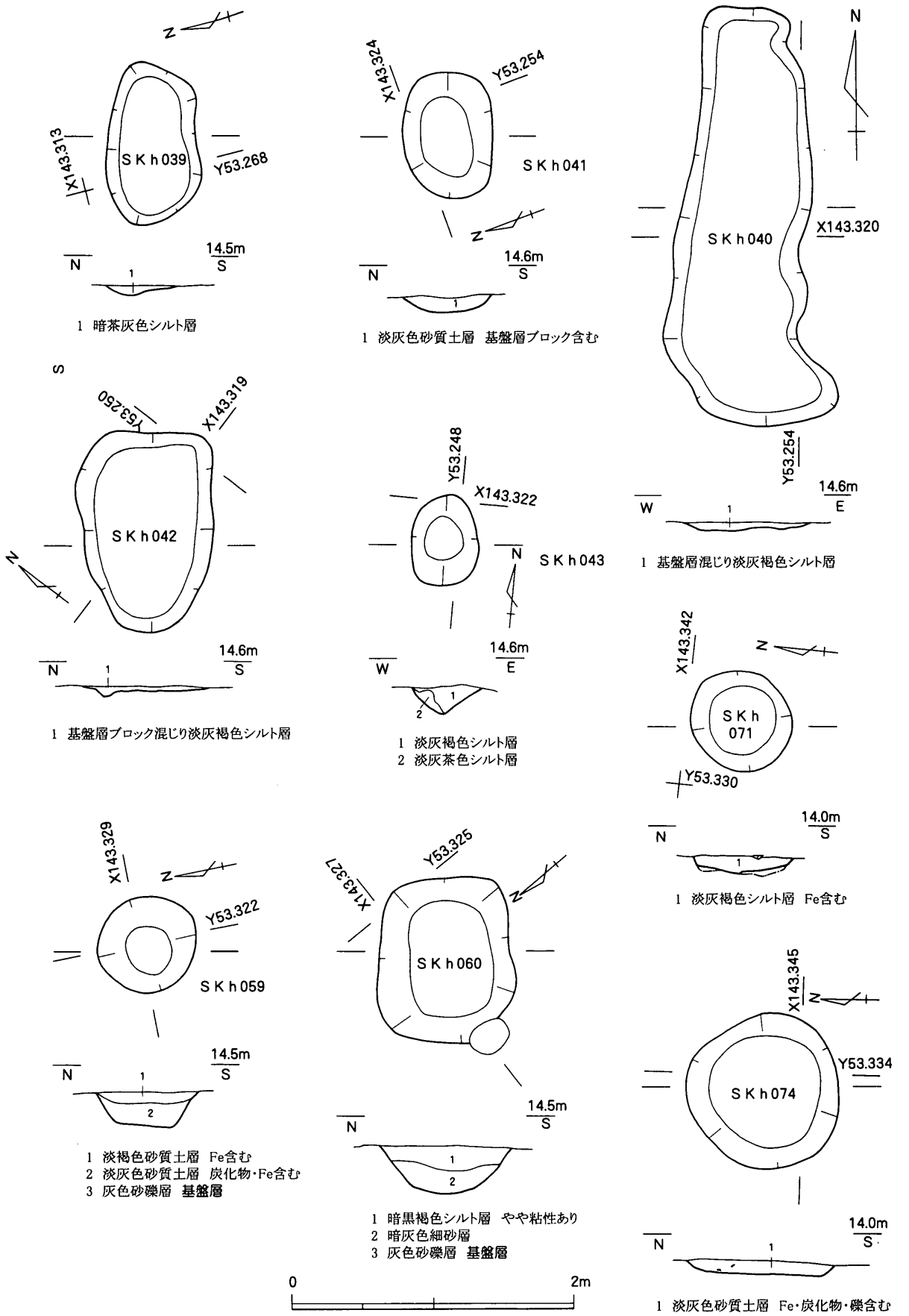


第91図　SKh 013・h 020・h 029・h 030・h 031・h 032・h 035・h 037 平・断面図（S=1/40）

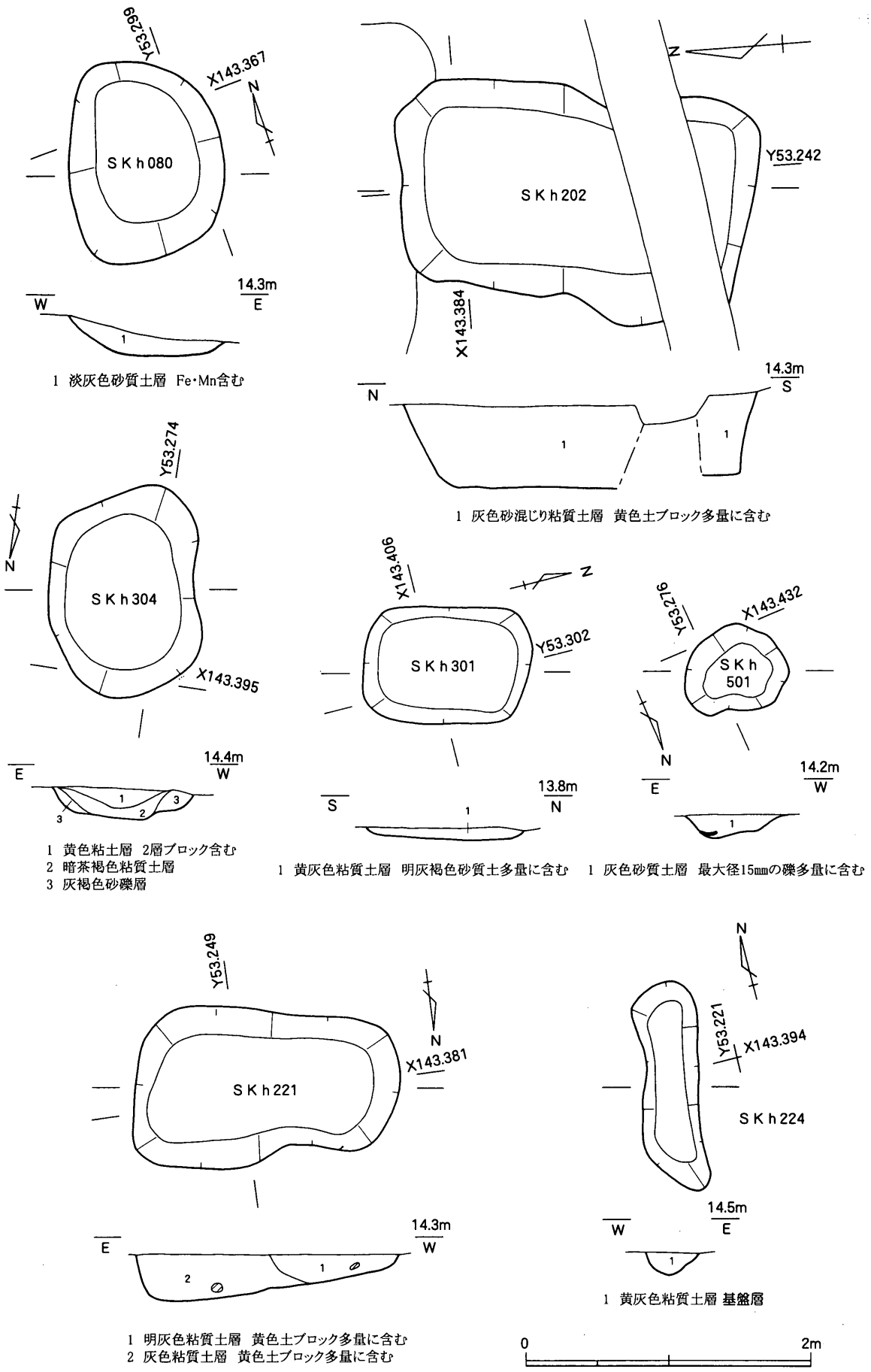
SKh 145（発掘調査時遺構名：Ⅲ－40 区SK 145）

出土遺物　600 は土師質土器足釜脚部片。

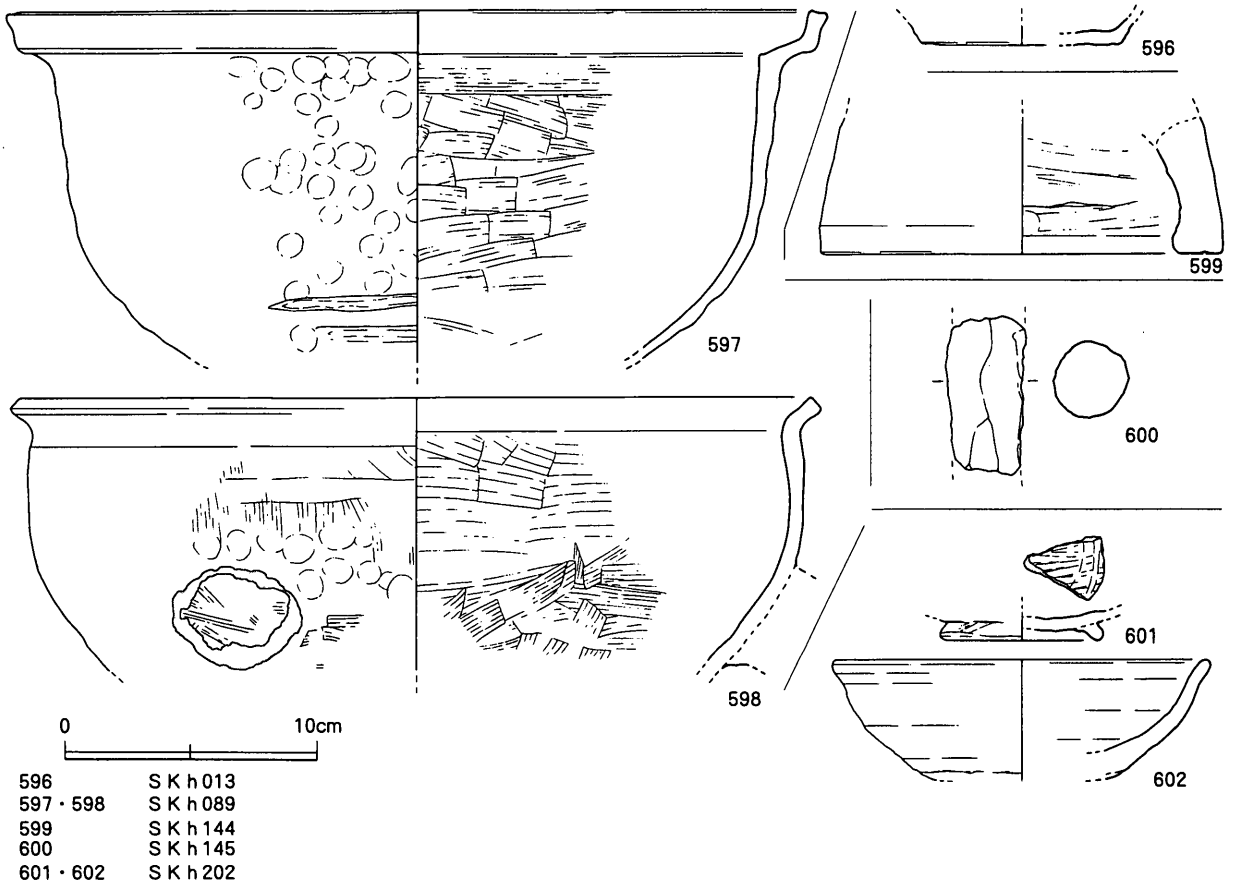
時期　出土遺物からは 13 世紀中葉以降と考えられる。



第92図 SKh 039・h 040・h 041・h 042・h 043・h 059・h 060・h 071・h 074 平・断面図（S=1/40）



第93図 SKh 080・h 202・h 221・h 224・h 301・h 304・h 501
平・断面図 (S=1/40)



第94図　ＳＫｈ013・ｈ089・ｈ144・ｈ145・ｈ202出土遺物実測図（S=1/3）

ＳＫｈ202（発掘調査時遺構名：Ⅲ－49区ＳＫ02）

出土遺物　601は内黒の黒色土器椀。602は焼成不良の須恵器椀。

時期　601・602から12世紀前半と考えられる。

溝（ＳＤ）

ＳＤｈ001（発掘調査時遺構名：Ⅲ－15区ＳＤ01）

出土遺物　603は土師質土器小皿。底部外面には回転糸切りの痕跡が残る。

時期　603から12世紀代と考えられる。

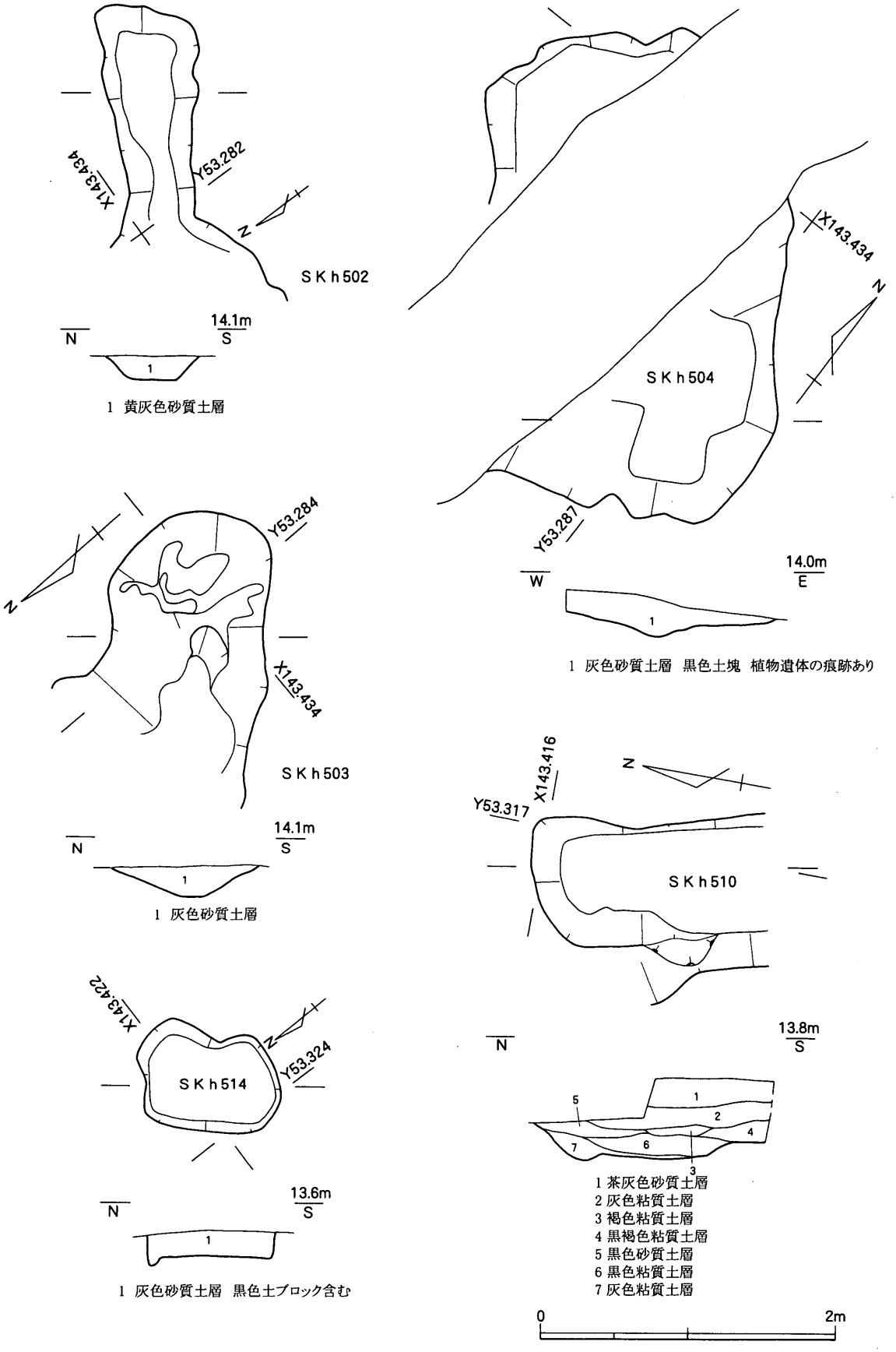
ＳＤｈ015（発掘調査時遺構名：Ⅲ－15区ＳＤ15）

出土遺物　604は鞴の羽口。外面には溶解物の付着が認められ、外側は硬化し、色調が変化している。

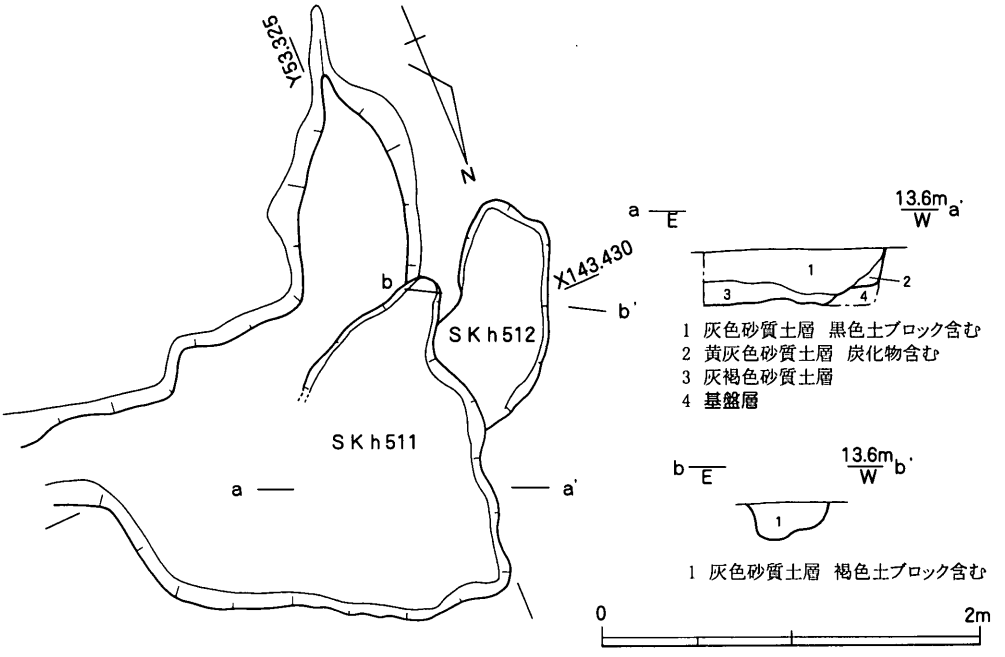
時期　詳細な時期決定は困難であるが、概ね中世と考えられる。

ＳＤｈ018・ｈ019（発掘調査時遺構名：Ⅲ－16区ＳＤ18）

ＳＤ018は東西方向の条里型地割に沿う溝で、南北方向のＳＤｈ010に直交する。ＳＤｈ019は、ＳＤｈ010の東側にのみ存在し、ＳＤｈ018と併走する。



第95図　SKh 502・h 503・h 504・h 510・h 514平・断面図（S=1/40）



第96図　ＳＫｈ 511・ｈ 512 平・断面図（S=1/40）

ＳＤｈ 018 出土遺物　605 は黒色土器椀。606 は佐藤ＢⅢ－３型式の土師質土器小皿。

時期　606 からＳＤｈ 018 は 12 世紀後半～ 13 世紀前半の埋没と考えられる。併走するＳＤｈ 019 もほぼ同様の時期と想定できる。

ＳＤｈ 048（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＤ 48）

ＳＤｈ 010 に並行する、南北方向の条里地割に沿った溝。

出土遺物　607 は佐藤ＢⅢ－４型式の土師質土器小皿。

時期　出土遺物から、埋没時期は 13 世紀中葉～ 14 世紀前葉と考えられる。

ＳＤｈ 203（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 49 区ＳＤ 03）

Ⅲ－ 49 区で検出された、東西方向の条里地割に沿う溝。削平により途切れている部分があるが、本来はＳＤｈ 010 とＳＤｈ 406 を繋ぐ役割を担う溝であると思われる。ＳＤｈ 010 の東側にあるＳＤｈ 061 は、その位置関係からＳＤｈ 203 に連続していたものと考えられる。

出土遺物　608 は土師質土器椀高台部片。

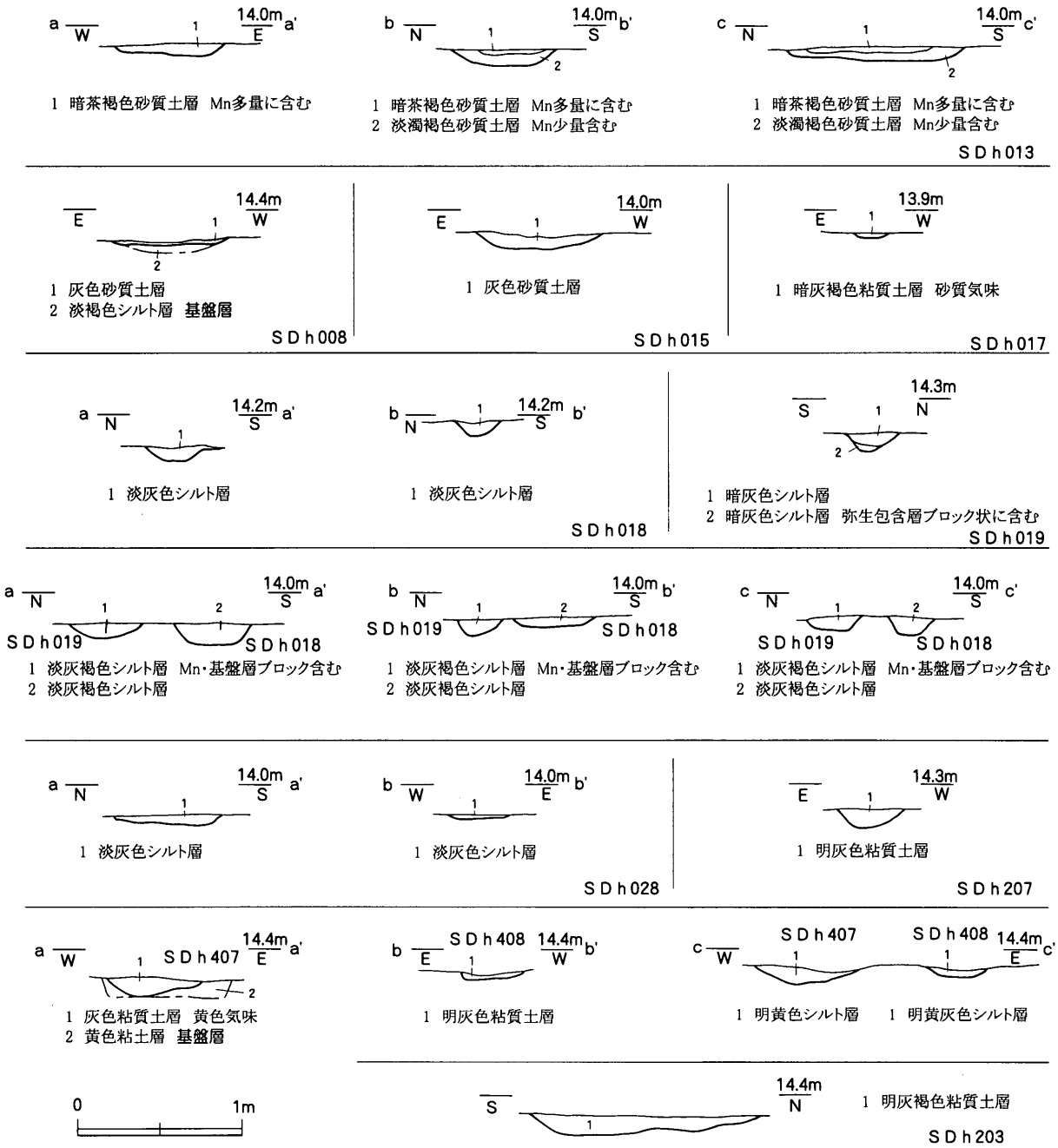
時期　出土遺物からの時期決定は困難であるが、608 の高台形状から 12 世紀後半～ 13 世紀前半と考えられる。

ＳＤｈ 407・ｈ 408（発掘調査時遺構名：Ⅲ－３区ＳＤ 07・08）

Ⅲ－ 49・３区で検出された南北方向に併走する溝。両溝は、坪界溝と想定されるＳＤｈ 406 の東約 11 ｍの位置にあり、１坪の 10 等分を示すものであろう。

ＳＤｈ 407 出土遺物　609 は土師質土器杯。610 は須恵器鉢か。色調は灰白色だが、瓦質土器の可能性もある。

時期　ＳＤｈ 407 は、609 から 12 世紀代の埋没と考えられ、ＳＤｈ 408 の埋没時期もほぼ同様であろう。



第97図 SDh 008・h 013・h 015・h 017・h 018・h 019・h 028・h 203・h 207・h 407・h 408 断面図（S=1/40）

小穴・柱穴（SP）

SPh 0001（発掘調査時遺構名：Ⅲ－15区SP 01）

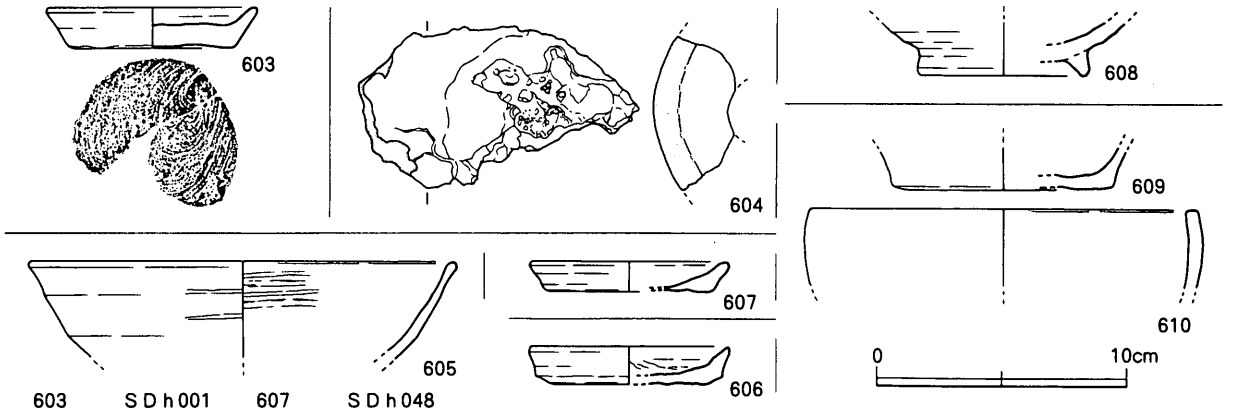
出土遺物 611は土師質土器足釜。

時期 611から13世紀後半以降と判断できる。

SPh 0002（発掘調査時遺構名：Ⅲ－15区SP 02）

出土遺物 612は土師質土器鍋。足鍋の可能性も考えられる。

時期 出土遺物から時期は決定し難いが、埋土の特徴も含めて古代末～中世の遺構とした。



603　ＳＤｈ001　607　ＳＤｈ048
604　ＳＤｈ015　608　ＳＤｈ203
605･606　ＳＤｈ018　609･610　ＳＤｈ407

第98図　ＳＤｈ 001・ｈ 015・ｈ 018・ｈ 048・ｈ 203・ｈ 407
出土遺物実測図（S=1/3）

ＳＰｈ 0149（発掘調査時遺構名：Ⅲ－16区ＳＰ 49）

出土遺物　613は土師質土器杯。佐藤ＤⅡ－７型式。

時期　出土遺物から13世紀末～14世紀前葉と判断できる。

ＳＰｈ 0194（発掘調査時遺構名：Ⅲ－16区ＳＰ 94）

出土遺物　614は土師質土器杯。

時期　出土遺物から13世紀後半と考えられる。

ＳＰｈ 0199（発掘調査時遺構名：Ⅲ－16区ＳＰ 99）

掘立柱建物ＳＢｈ 09を構成する柱穴。

出土遺物　615は土師質土器杯。底部外面には静止糸切りの痕跡が残る。616は土師質土器鍋。

時期　615から13世紀中葉～後半と考えられる。

ＳＰｈ 0212（発掘調査時遺構名：Ⅲ－16区ＳＰ 112）

出土遺物　617は佐藤ＢⅢ－４型式の土師質土器小皿。

時期　出土遺物から13世紀中葉～14世紀前葉と判断できる。

ＳＰｈ 0226（発掘調査時遺構名：Ⅲ－16区ＳＰ 126）

出土遺物　618土師質土器小皿。佐藤ＢⅢ－４型式。

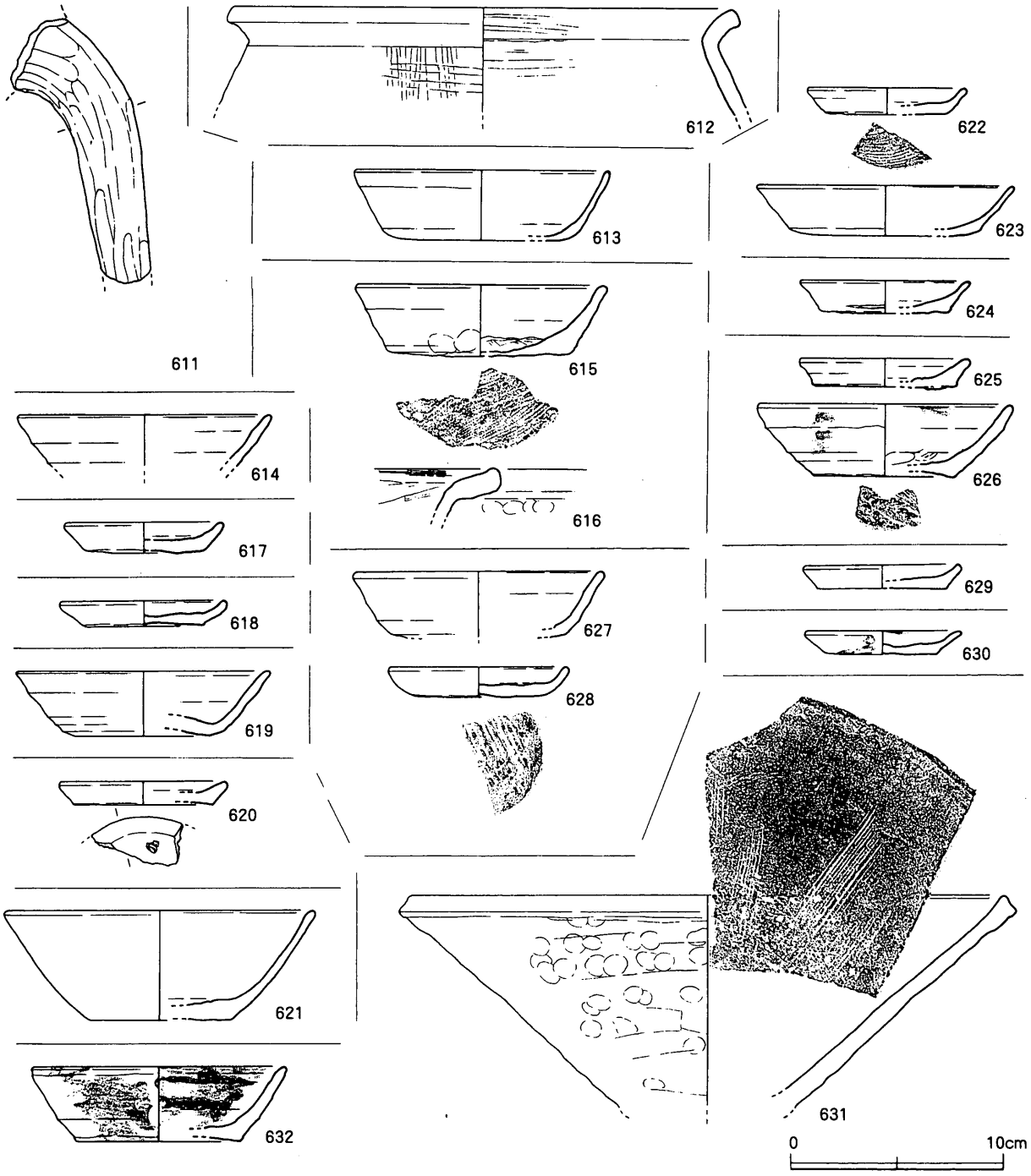
時期　出土遺物からは13世紀中葉～14世紀前葉と考えられる。

ＳＰｈ 0228（発掘調査時遺構名：Ⅲ－16区ＳＰ 128）

掘立柱建物ＳＢｈ 09を構成する柱穴。

出土遺物　619は土師質土器杯。

時期　出土遺物から14世紀前半と考えられる。



611	ＳＰｈ0001	618	ＳＰｈ0226	625･626	ＳＰｈ0724
612	ＳＰｈ0002	619	ＳＰｈ0228	627･628	ＳＰｈ0797
613	ＳＰｈ0149	620	ＳＰｈ0229	629	ＳＰｈ0796
614	ＳＰｈ0194	621	ＳＰｈ0405	630	ＳＰｈ0801
615･616	ＳＰｈ0199	622･623	ＳＰｈ0673	631	ＳＰｈ0810
617	ＳＰｈ0212	624	ＳＰｈ0684	632	ＳＰｈ1214

第99図　中世ＳＰ出土遺物実測図（S=1/3）

ＳＰｈ 0229（発掘調査時遺構名：Ⅲ－16区ＳＰ129）

出土遺物　620は土師質土器小皿。底部外面には、なんらかの圧痕とみられる径約4 mmの窪みが残る。

時期　出土遺物から13世紀末～14世紀前半と捉えられる。

ＳＰｈ 0405（発掘調査時遺構名：Ⅲ－18区ＳＰ05）

出土遺物　621は土師質土器杯。

時期　出土遺物から 12 世紀後半～ 13 世紀前葉と考えられる。

ＳＰｈ 0673（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＰ 73）

出土遺物　622 は土師質土器小皿。底部外面には回転糸切りの痕跡が残る。623 は土師質土器杯。小片のため、復元径が小さくなる可能性はあるが、器壁の厚さや体部の立ち上がり角度から１ｃ型式と判断できる。

時期　623 から 14 世紀中葉から第３四半期と考えられる。なお、622 はやや遡る時期の所産である。

ＳＰｈ 0684（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＰ 84）

出土遺物　624 は佐藤ＢⅢ－４型式の土師質土器小皿。

時期　出土遺物から 13 世紀中葉～ 14 世紀前葉と考えられる。

ＳＰｈ 0724（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＰ 124）

出土遺物　625 は土師質土器小皿。佐藤ＢⅢ－５型式。626 は底部外面に回転糸切りの痕跡が認められる土師質土器杯。

時期　625 から 13 世紀後半～ 14 世紀前葉と考えられる。

ＳＰｈ 0797（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＰ 197）

出土遺物　627 は土師質土器杯。628 は土師質土器小皿。底部外面には、回転ヘラ切り痕と明瞭な板状圧痕が残る。

時期　627 から 13 世紀末～ 14 世紀前葉と判断できる。

ＳＰｈ 0796（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＰ 196）

出土遺物　629 は土師質土器小皿。

時期　出土遺物からは 13 世紀末～ 14 世紀前葉と考えられる。

ＳＰｈ 0801（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＰ 201）

出土遺物　630 は土師質土器小皿。内外面の一部に煤の付着が確認できる。

時期　出土遺物から 13 世紀末～ 14 世紀前葉と考えられる。

ＳＰｈ 0810（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＰ 210）

出土遺物　631 は十瓶山窯系須恵器鉢。

時期　出土遺物から 13 世紀代と考えられる。

ＳＰｈ 1214（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 40 区ＳＰ 14）

出土遺物　632 は土師質土器杯。内外面にはタール状の付着物が多量に認められ、灯明皿として使用されたことが分かる。

時期　出土遺物からは 13 世紀中葉～後半と考えられる。

４．近世以降の遺構と遺物

土坑（ＳＫ）

ＳＫｈ 022（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 16 区ＳＫ 22）

出土遺物　633 は肥前系陶器鉢。

時期　出土遺物から 18 世紀代と考えられる。

ＳＫｈ 053（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＫ 53）

出土遺物　634 は肥前系磁器皿。見込み部の蛇の目釉剥ぎが行われている部分には、陶土が塗布されている。635 は堺・明石系擂鉢。636 は備前擂鉢。637・638 は土師質土器大甕。639 は器種不明の瓦質土器。皿か。

時期　堺・明石系擂鉢の存在から 18 世紀第４四半期以降の埋没と考えられる。

ＳＫｈ 058（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＫ 58）

出土遺物　640 は施釉陶器碗。641・642 は土師質土器大甕。

時期　641・642 から 19 世紀前半以降と考えられる。

ＳＫｈ 065（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＫ 65）

出土遺物　643 は備前擂鉢。644 は土師質土器大甕。

時期　644 から 19 世紀前半以降と考えられる。

ＳＫｈ 066（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＫ 66）

出土遺物　645 は御厩系焙烙。646 は土師質土器大甕。647 は安山岩製の砥石。４面は破損し、残存する２面には使用痕が残る。本来は方柱状のものか。

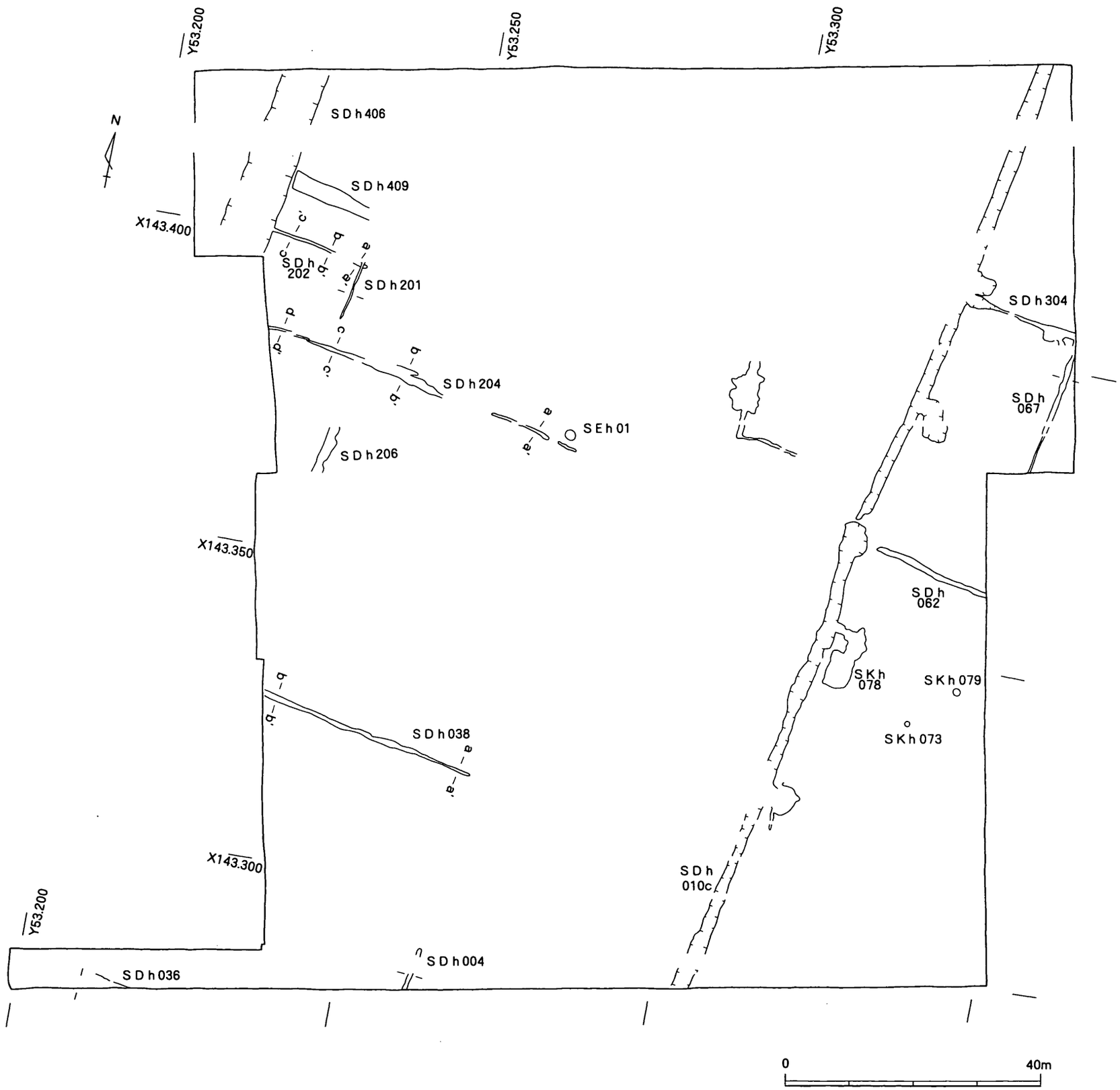
時期　645・646 から 19 世紀後葉以降の埋没と考えられる。

ＳＫｈ 072（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＫ 72）

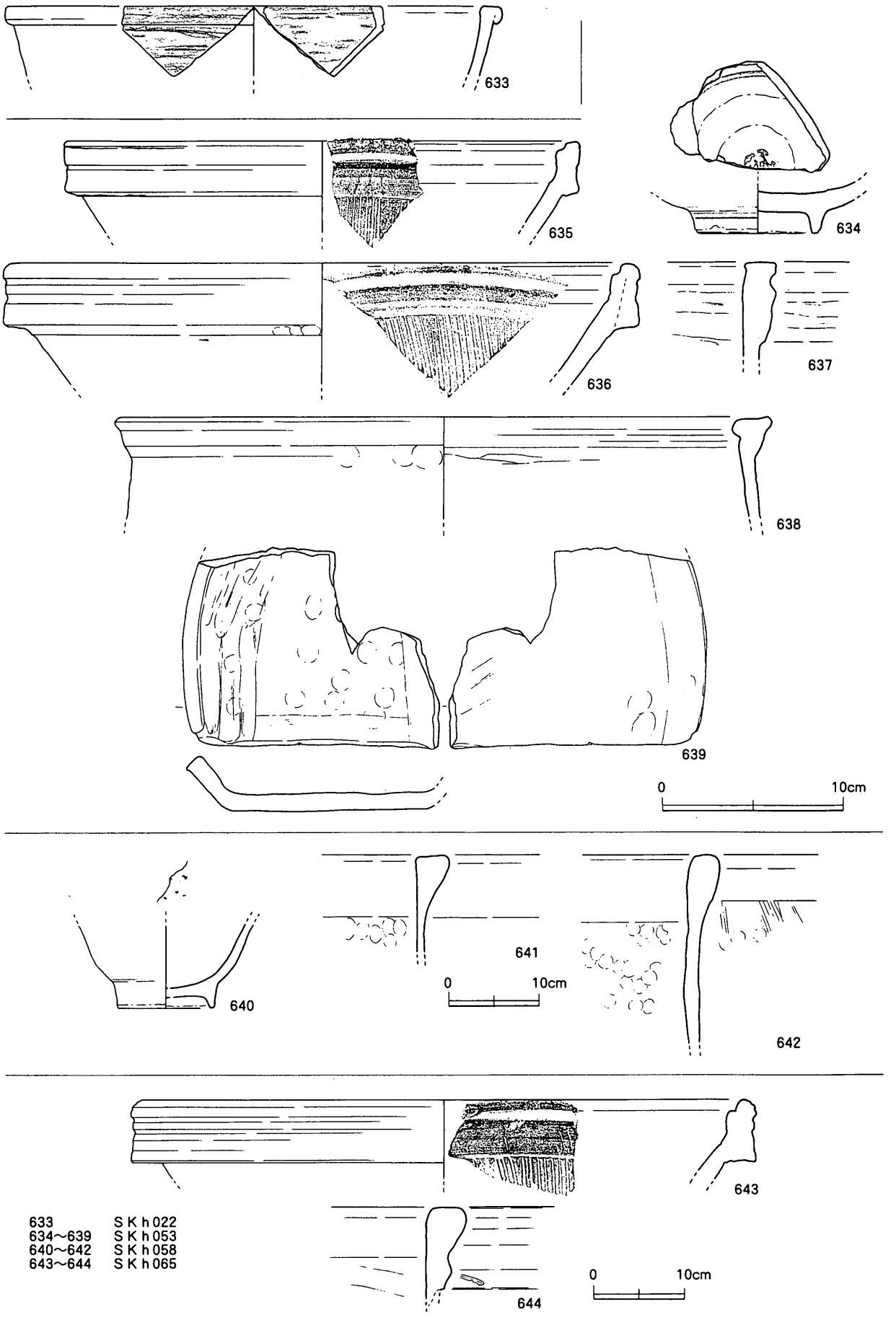
Ⅲ－ 19 で検出の土師質土器風呂釜が設置された土坑。

出土遺物　648 は瓦質土器火鉢。外面の底部よりやや上位には、植物の文様が陽刻により施されている。649 はサヌカイト製火打石。650 は外型成形の御厩系焙烙。651 は口径 98.8cm の土師質土器甕。口縁部直下の外面には把手状の突出部が認められる。652 は底径 41.6cm の土師質土器大甕。この形態の大甕は、底部よりやや上位に孔が穿たれ、底面が存在しないことから風呂釜とも考えられている（森下 1998）が、本土坑では、設置状況から風呂釜としてではなく、貯蔵容器として使用されたものと想定できる。

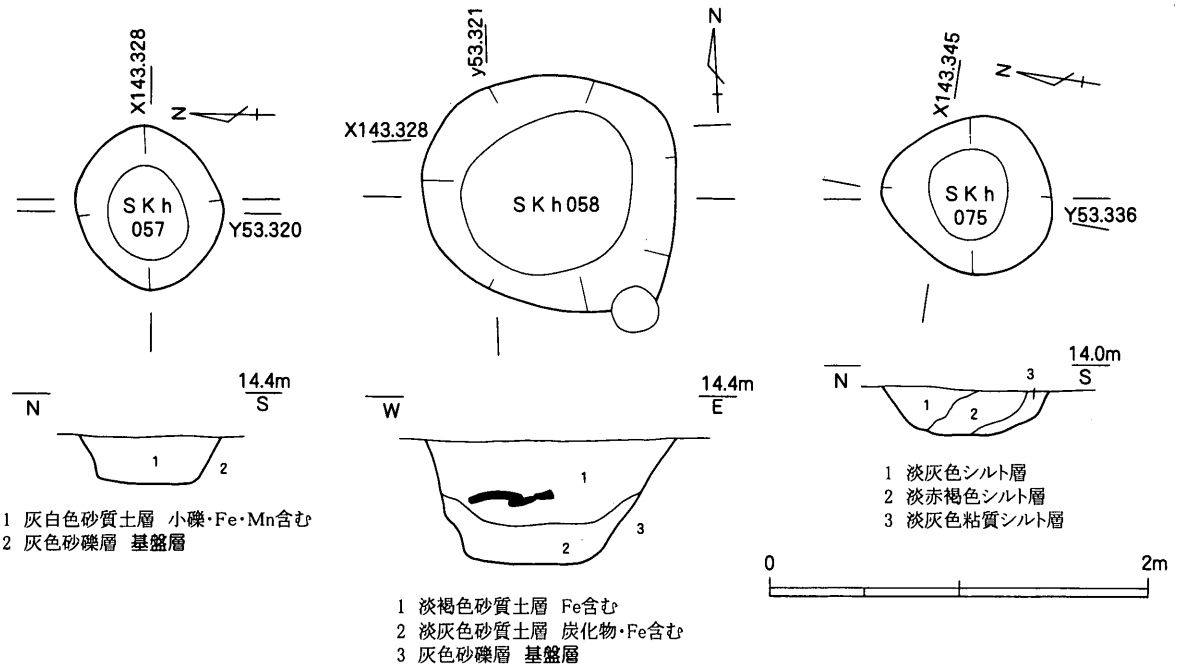
時期　650 から 19 世紀後葉～末の埋没と判断できる。



第100図　H地区近世～近代主要遺構配置図（S=1/800）



第101図　ＳＫｈ022・ｈ053・ｈ058・ｈ065出土遺物実測図（S=1/3・1/6）



第102図　ＳＫｈ 057・ｈ 058・ｈ 075 平・断面図（S=1/40）

ＳＫｈ 073（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＫ 73）

Ⅲ－ 19 区で検出された土師質土器大甕設置土坑。掘り方の平面形は円形である。掘り方内の中位に数枚の板が並べられ、さらにその上位にＳＫｈ 072 同様、底面をもたない土師質土器大甕が設置されている。削平により大甕は下半部のみの残存であるが、その内部には大甕の上半部が破片となって落ち込んでいる。

時期　ＳＫｈ 073 同様、19 世紀後葉～末の埋没と判断できる。

ＳＫｈ 075（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＫ 75）

出土遺物　653 は口径 46.0cm の土師質土器大甕。654 は御厩系焙烙。655 は施釉陶器皿。緑色系と茶色系（鉄釉か）の２色の釉が用いられている。

時期　653 から 19 世紀前半以降の埋没と考えられる。

ＳＫｈ 076（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＫ 76）

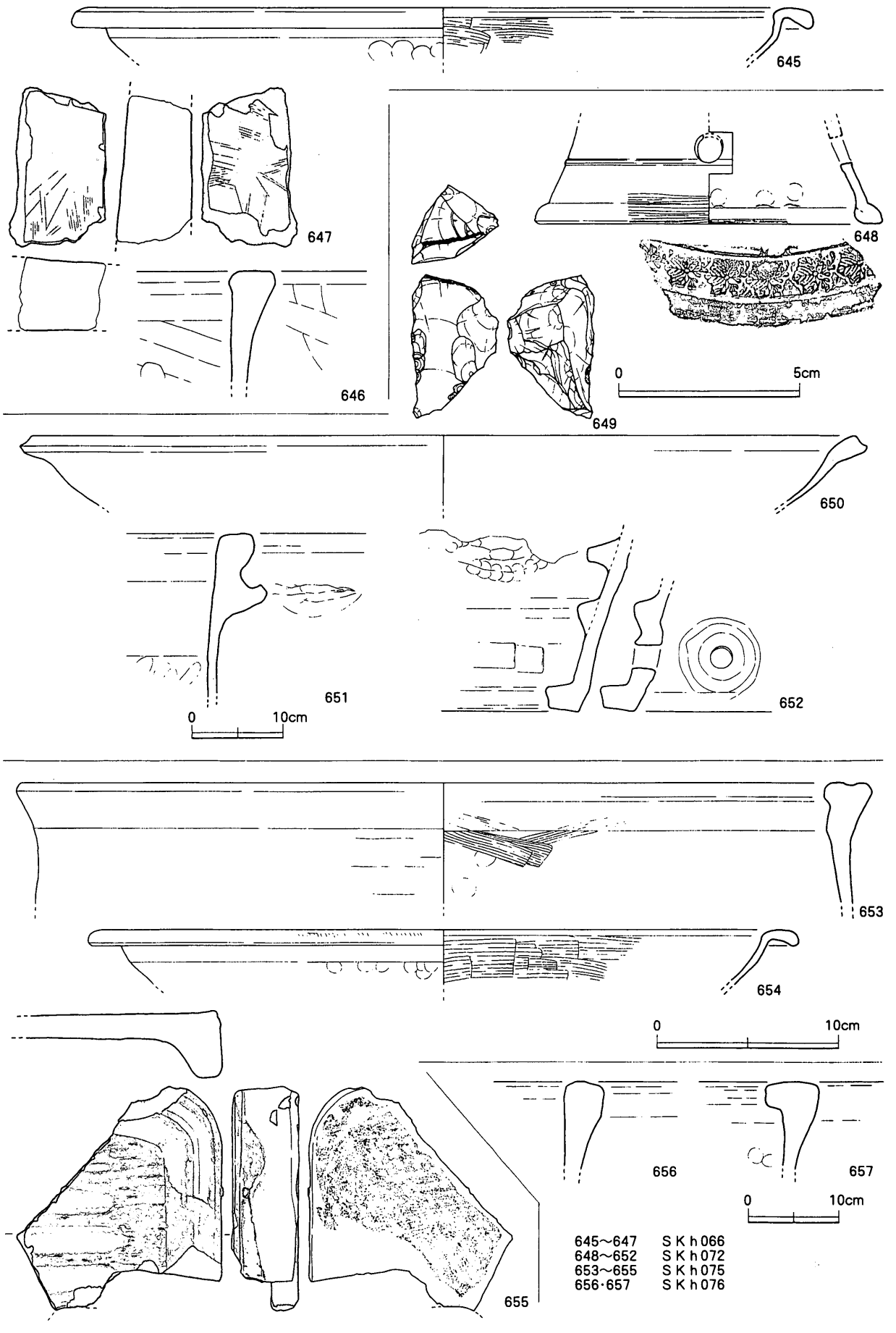
出土遺物　656・657 は土師質土器大甕。

時期　出土遺物から 19 世紀前半以降の埋没と判断できる。

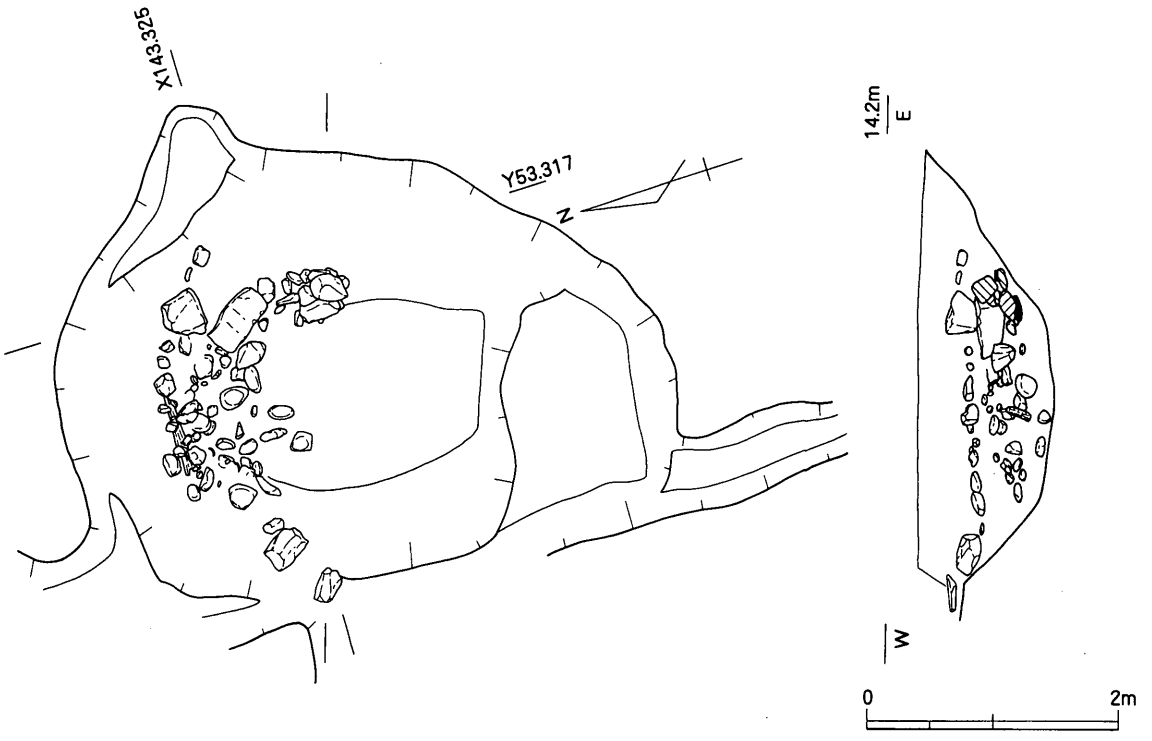
ＳＫｈ 077（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 19 区ＳＫ 77　概報遺構名：ＳＫ 32）

Ⅲ－ 19 区南端の中央部で検出した石積みの土坑。掘り方は、不定形な楕円形もしくは長方形を呈し、西側は隣接する溝に向かって張り出している。溝との重複関係からは、本土坑の埋没時期が降ることがわかる。掘り方内部の北半部では石組を検出したが、そのほとんどが崩落した状態であった。また、石組の下位からは擁壁状の木組みを検出したが、これが石組みに先行するものなのか、裏込めの施設なのかについては判断できない。遺物はいずれも石組みの内部から出土している。

出土遺物　658 肥前系磁器皿。659 は瀬戸・美濃系陶器碗の高台部片。660 は施釉陶器鉢。信楽



第103図　S K h 066・h 072・h 075・h 076 出土遺物実測図（S=1/3・1/6・2/3）



第104図　ＳＫｈ 077平・立面図（S=1/60）

か。661は備前擂鉢。662～664は堺・明石系擂鉢。665は瓦質土器羽釜。666は砂岩製の方柱状砥石。長軸方向の４面に使用痕が認められ、いずれの面も湾曲する。

時期　埋没時期は、堺・明石系擂鉢の存在から18世紀第４四半期と考えられる。

ＳＫｈ 079（発掘調査時遺構名：Ⅲ－19区ＳＫ79）

Ⅲ－19区で検出した、掘り方の平面形が円形を呈する土坑。土坑内には土師質土器大甕（671）が設置されているが、上半部は削平により残存していない。

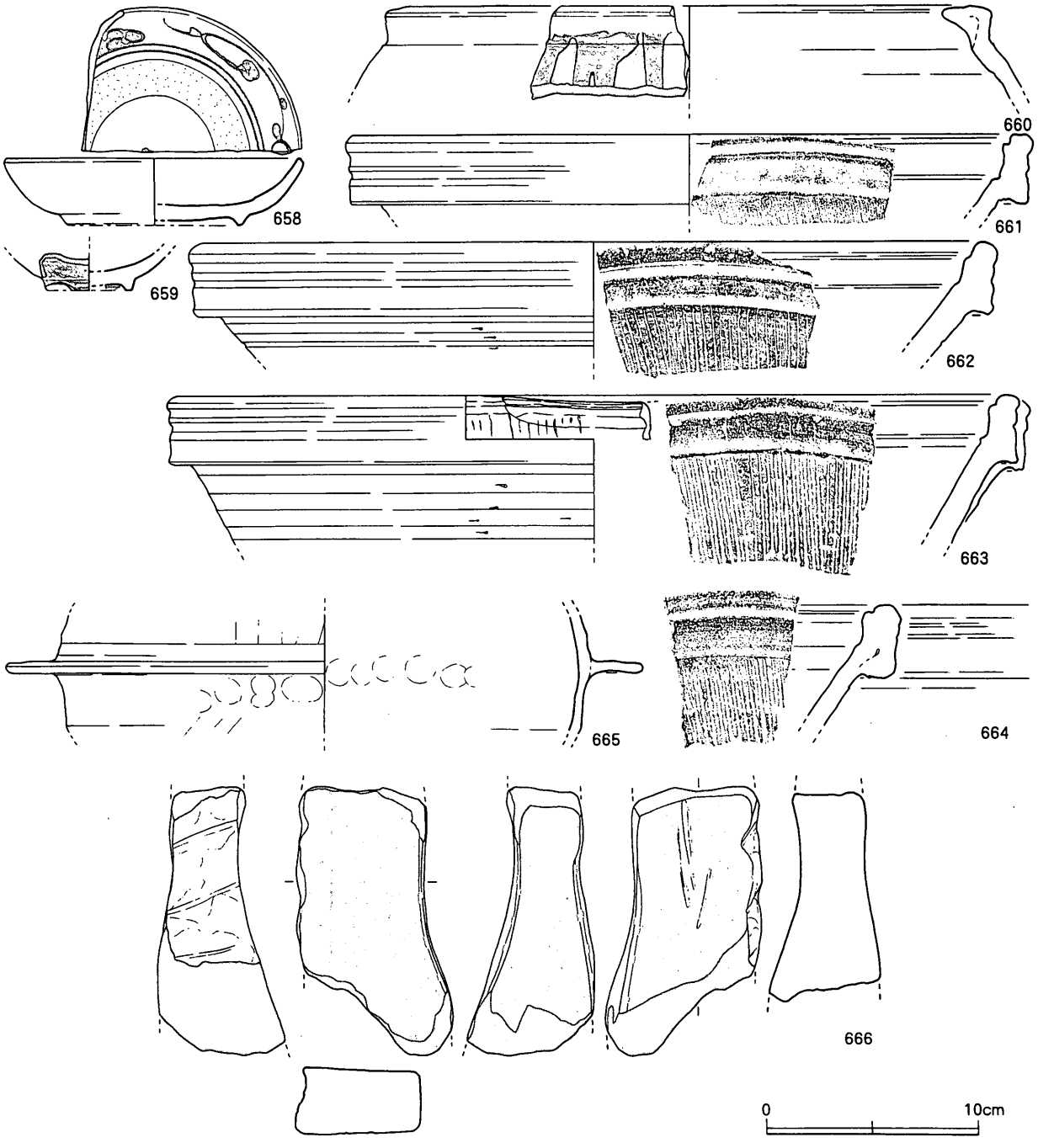
出土遺物　671は土師質土器大甕。外面の、口縁部よりやや下がった位置に格子状の文様が施されているが、これは結物のたがを模したものと考えられる（乗松2004ｃ）。

時期　671から19世紀前半以降と考えられる。

ＳＫｈ 078（発掘調査時遺構名：Ⅲ－19区ＳＫ78　概報遺構名：ＳＫ33）

Ⅲ－19・20区の境界で検出した石積みの土坑。掘り方の平面形は5.8×3.8ｍの長方形で、深さは0.6ｍである。北部では浅い土坑に隣接するが、その土坑との間に先後関係は認められず、さらに北部でＳＤｈ 010 Ｃに繋がるため、３者は有機的な関係を有するとみられる。

掘り方内部には、四方の壁面に切石と自然石が積まれ、その内法は4.5×2.8ｍである。石の積み方は粗雑で、西壁のみ木杭と板材で補強されている。底面はほぼ平坦で、南東隅に土師質土器大甕が埋められている。底部全体より水が湧き出ていることから、湧水施設の可能性も考えられるが、北部土坑との隣接部分には水門の一部が残存しており、ＳＤ 010 Ｃから導水していた可能性がより高いと思われる。取水口にあたる北東部にも石が積まれているが、石積みの上端と水門の下端のレベル差が少ないことから、北部土坑から導水していたとすることは可能である。

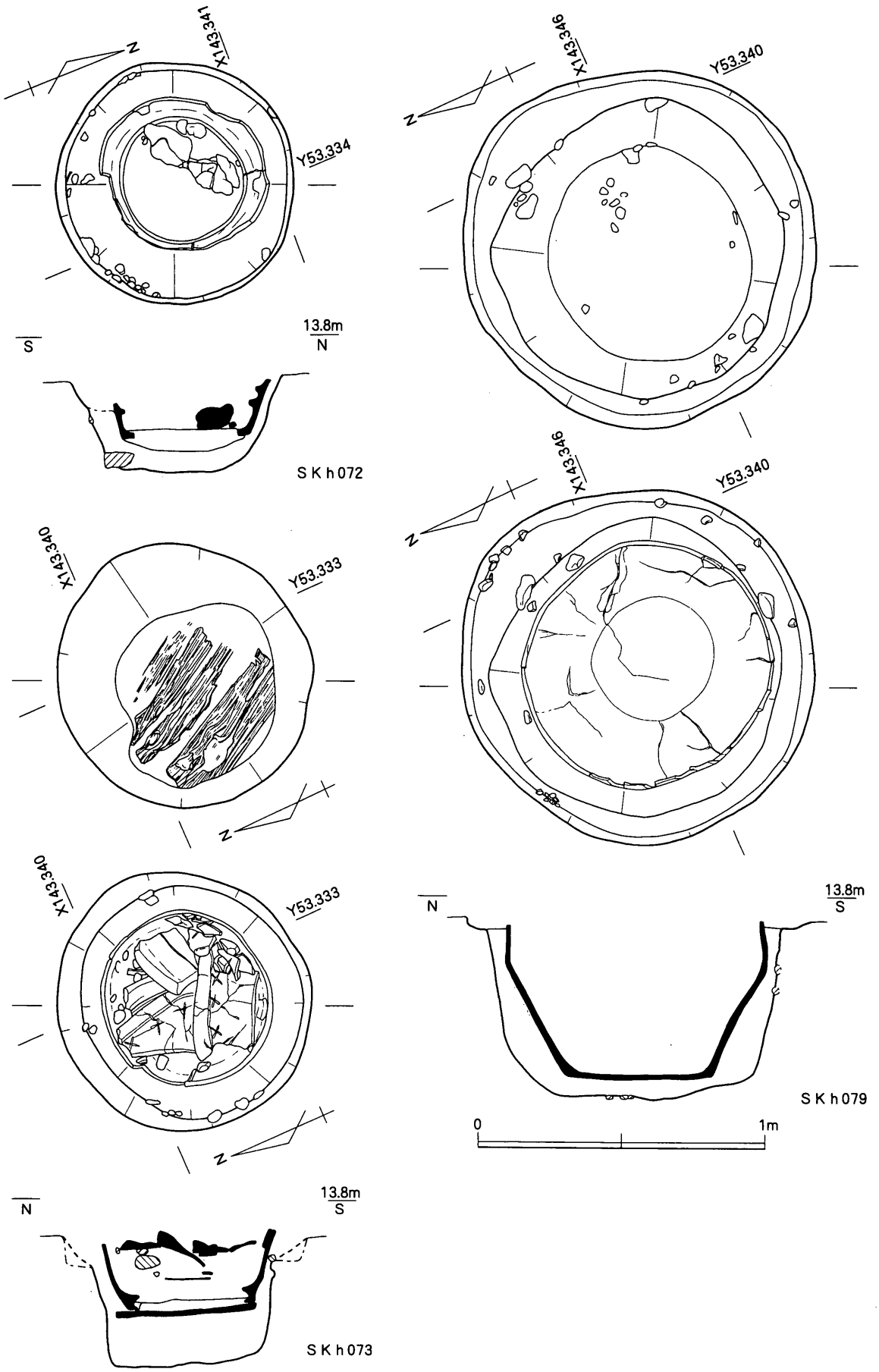


第105図　ＳＫｈ077出土遺物実測図（S=1/3）

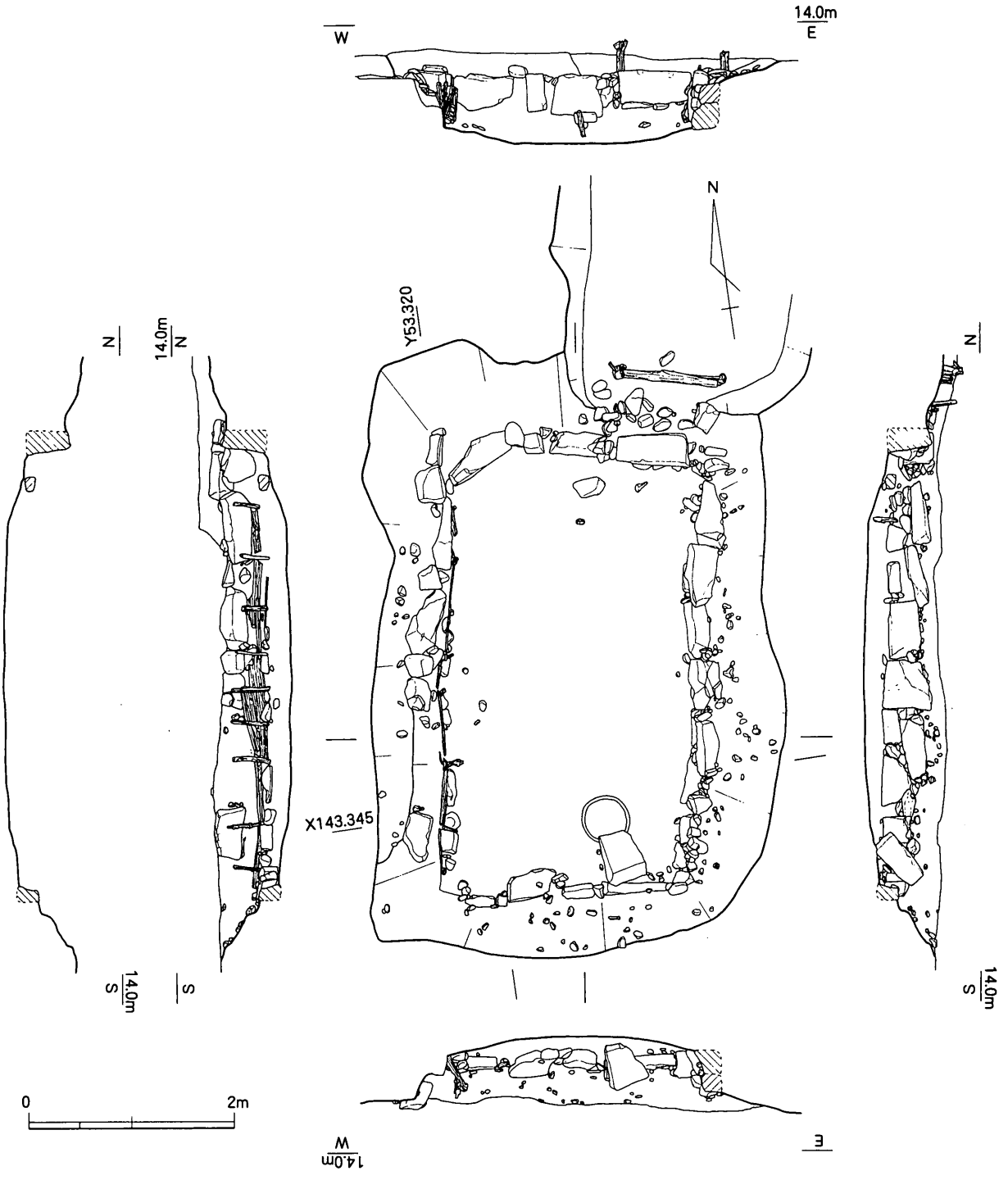
また、明治21年製作の地籍図によれば、周辺は宅地であるため、本土坑は日常生活に伴う施設であると考えられるが、詳細な性格は不明である。

出土遺物　667～669は土師質土器大甕。670は凝灰岩製の板状砥石。最も面積の大きな２面に使用痕が残る。また、長軸方向の側面の一方には線状痕がみられる。

時期　埋め戻し土中に多量に陶磁器・瓦が含まれている状況からみて、埋没時期は旧陸軍飛行場造成時と考えられる。



第106図　ＳＫｈ 072・ｈ 073・ｈ 079　平・断面図（S=1/20）



第107図　ＳＫｈ 078 平・立面図（S=1/60）

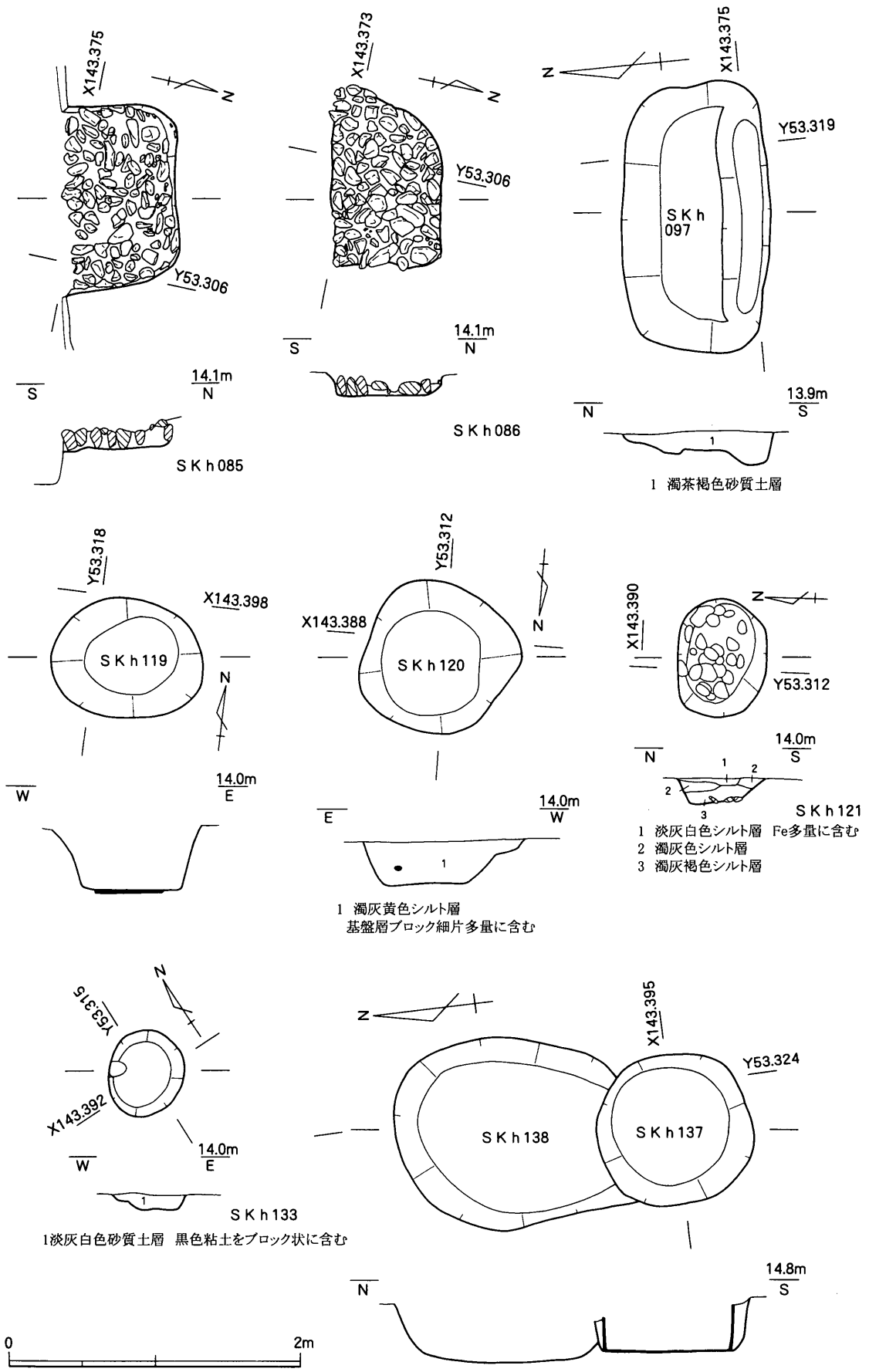
ＳＫｈ 102（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 40 区ＳＫ 102）

出土遺物　672 は土師質土器大甕。

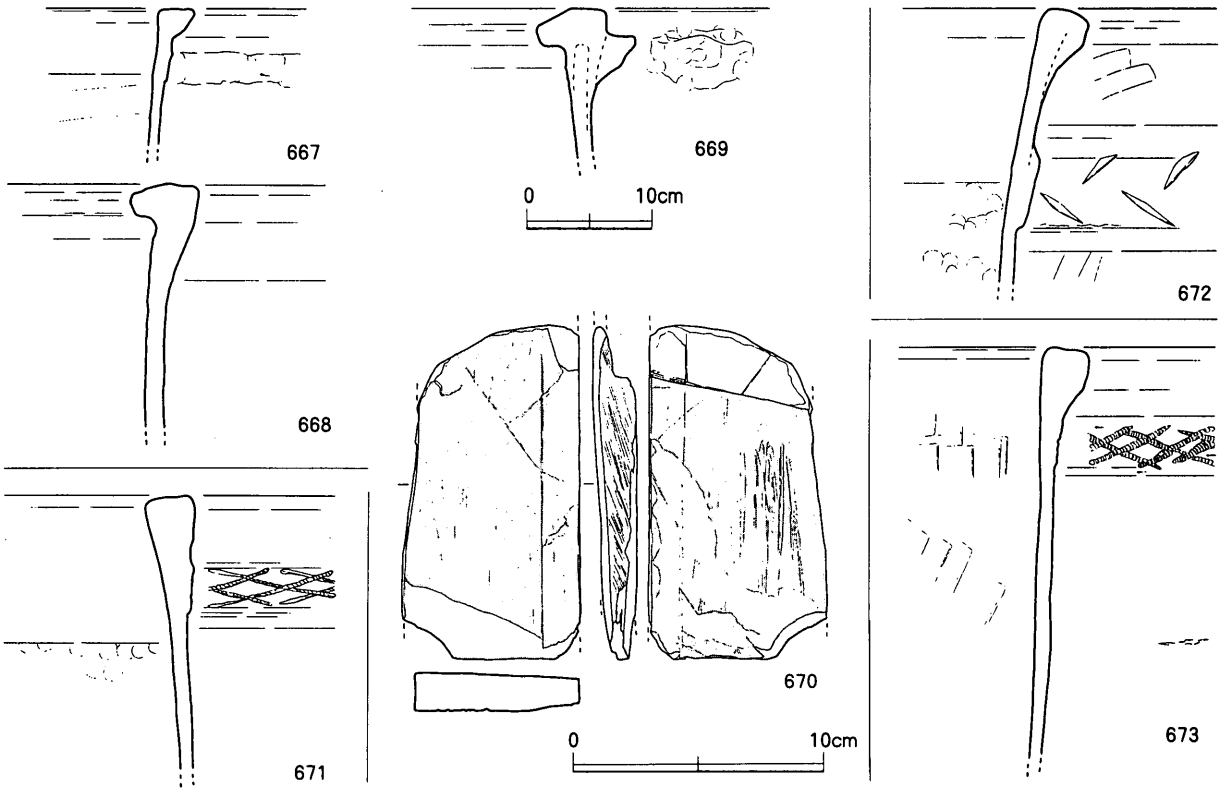
時期　出土遺物から 19 世紀前半以降と考えられる。

ＳＫｈ 105（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 40 区ＳＫ 105）

出土遺物　673 は土師質土器大甕。口縁部よりやや下位に結物のたがを模した、格子状の文様が



第108図 SKh 085・h 086・h 097・h 119・h 120・h 121・h 133・h 137・h 138 平・断面図 (S=1/40)



667～670　ＳＫｈ078
671　ＳＫｈ079
672　ＳＫｈ102
673　ＳＫｈ105

第109図　ＳＫｈ078・ｈ079・ｈ102・ｈ105出土遺物実測図（S=1/6・1/3）

施されている。

時期　出土遺物から19世紀前半以降と考えられる。

ＳＫｈ106（発掘調査時遺構名：Ⅲ－40区ＳＫ106）

出土遺物　674は施釉陶器碗。675は施釉陶器皿。内面には3条の線状の文様が認められる。676は備前擂鉢。677は土師質土器甕。外面の頸部よりやや下った位置には2条の波状文が施されている。678は土師質土器甕。頸部よりやや下った位置に弧状を描く文様が認められるが、破片のため詳細は不明である。679は口径69.6cmの土師質土器大甕。680・681は御厩系焙烙。682は瓦質土器竈。

時期　埋没時期は、679から19世紀前半以降と考えられる。

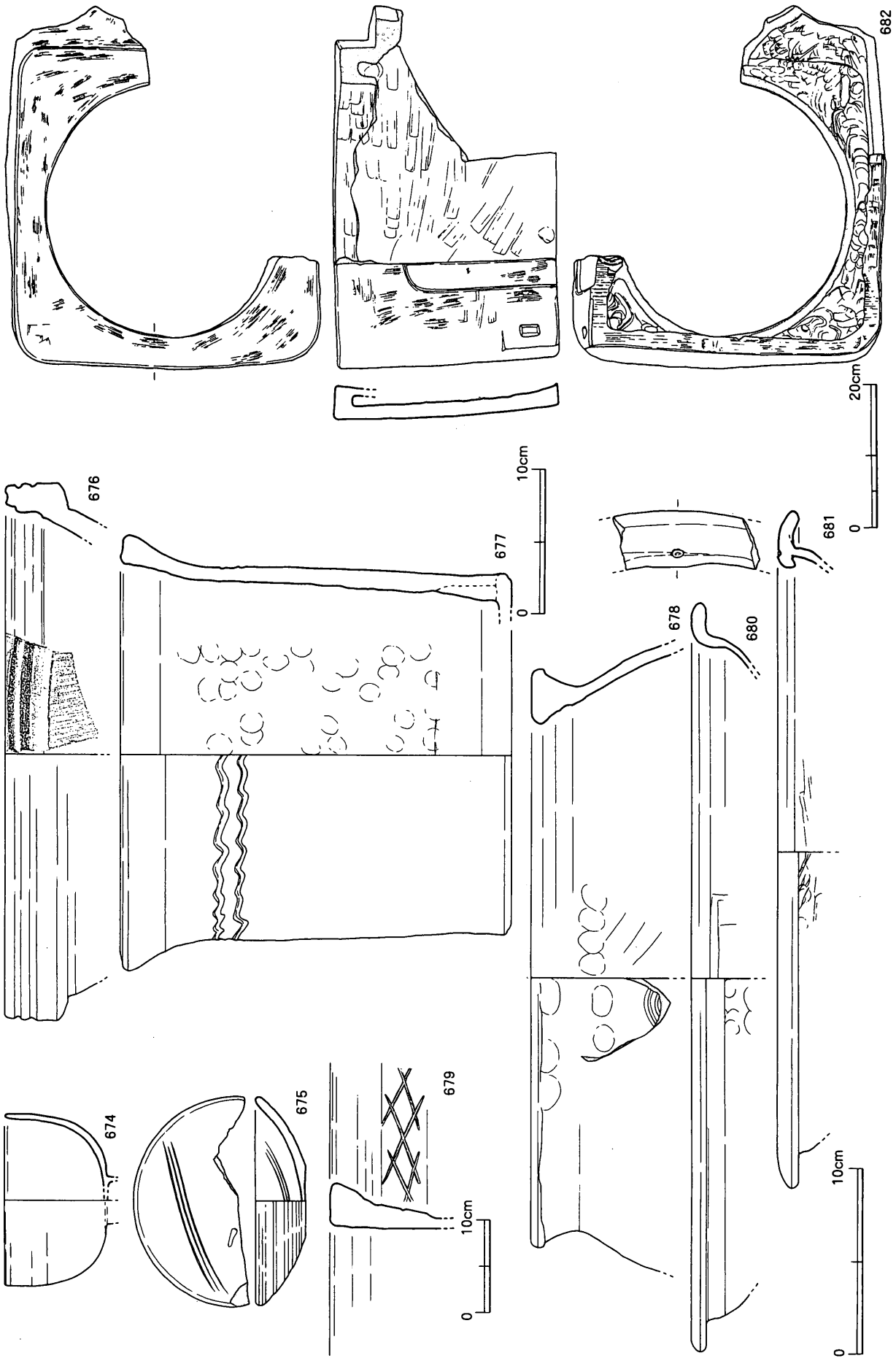
ＳＫｈ107（発掘調査時遺構名：Ⅲ－40区ＳＫ107）

出土遺物　683は口径47.2cmの土師質土器大甕。外面の頸部直下にはヘラケズリによる施文が認められる。

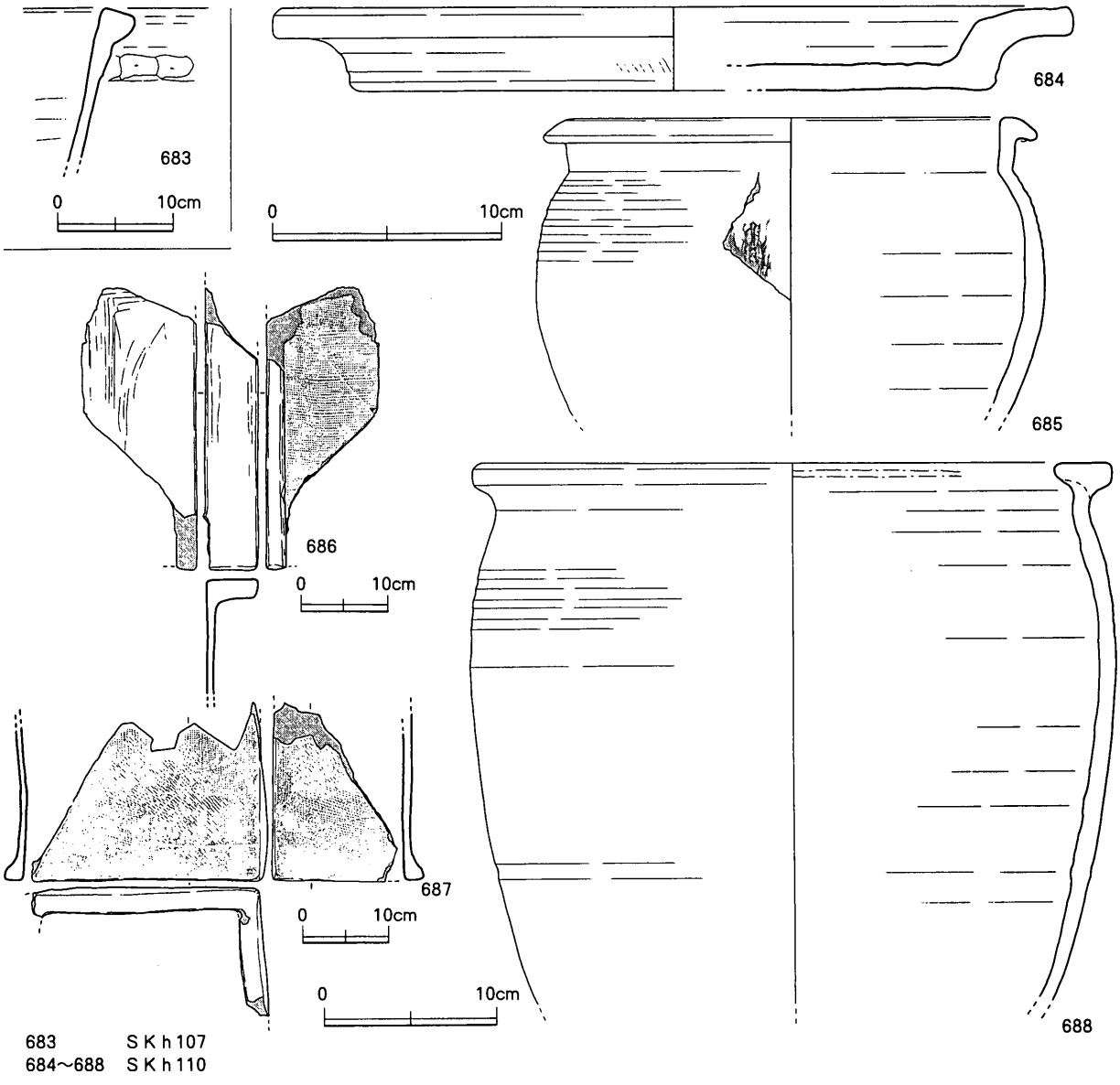
時期　出土遺物から19世紀前半以降と考えられる。

ＳＫｈ110（発掘調査時遺構名：Ⅲ－40区ＳＫ110）

出土遺物　684は土師質土器の火消壺蓋。685は施釉陶器壺。686・687は器種不明の土師質土器。



第110図　ＳＫｈ 106出土遺物実測図（S=1/3・1/4・1/6・1/8）



第111図　ＳＫｈ107・ｈ110出土遺物実測図（S=1/3・1/4・1/6・1/8）

外面は板ナデ、内面はハケによる調整が施されている。竈か。688は施釉陶器甕。

時期　684から19世紀中葉以降と考えられる。

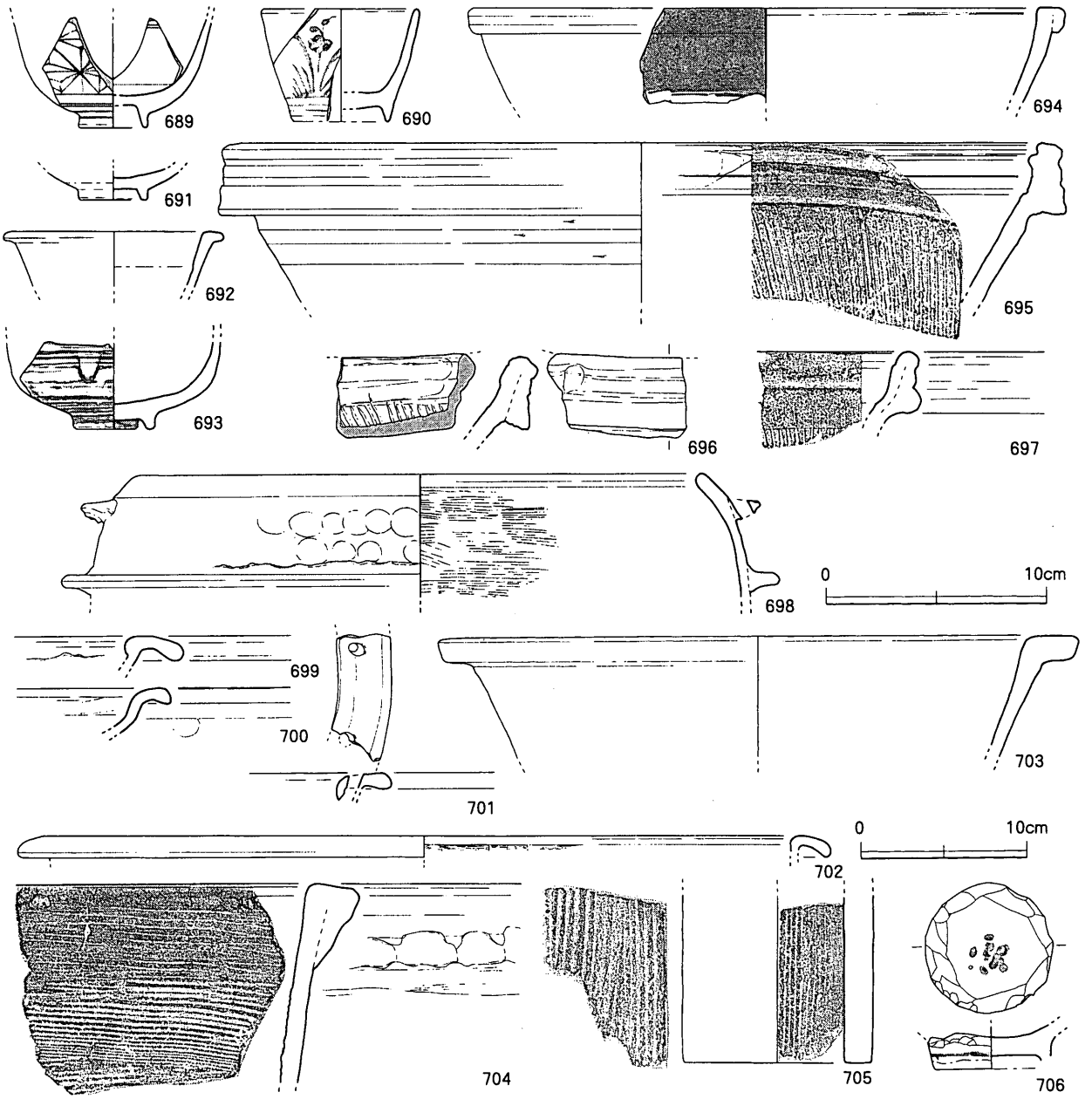
ＳＫｈ116（発掘調査時遺構名：Ⅲ－40区ＳＫ116）

出土遺物　689は肥前系磁器碗。690は肥前系磁器杯。691は産地不明磁器碗。692は瀬戸・美濃系磁器碗。693は瀬戸・美濃系陶器碗。694は施釉陶器鉢。695・697は備前擂鉢。696は堺・明石系擂鉢。698は瓦質土器羽釜。699～702は御厩系焙烙。703は土師質土器鉢。704は口径29.2cmの土師質土器火鉢。705は土師質土器土管。706は肥前系陶器碗転用の円盤状加工品。

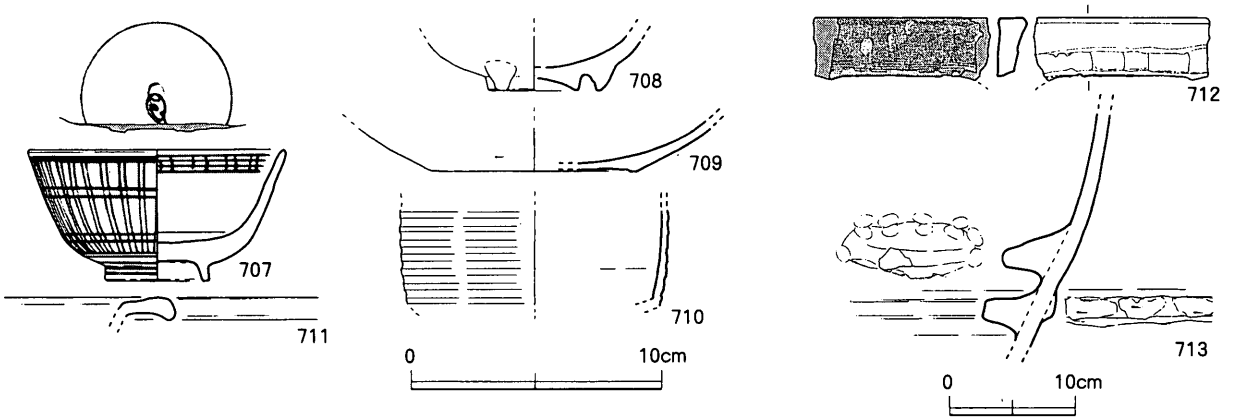
時期　705から幕末前後の埋没と考えられる。

ＳＫｈ119（発掘調査時遺構名：Ⅲ－40区ＳＫ119）

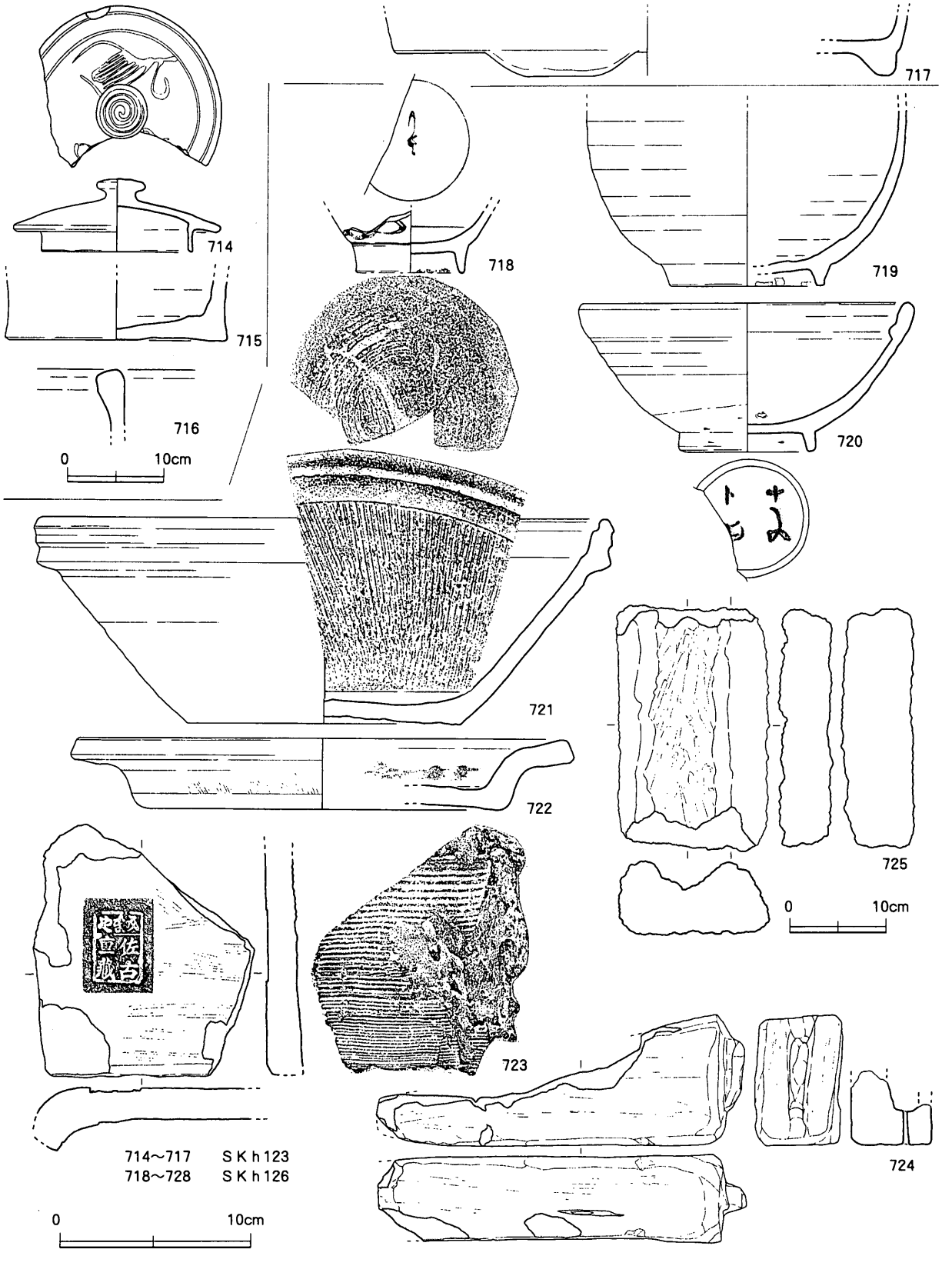
出土遺物　707は肥前系磁器碗。708は肥前系磁器鉢か。高台の外側には、３方向の脚部が確認できる。709は施釉陶器皿か。710は施釉陶器碗。711は御厩系焙烙。712は土師質土器火鉢か。



第112図　ＳＫｈ116出土遺物実測図（S=1/3・1/4）



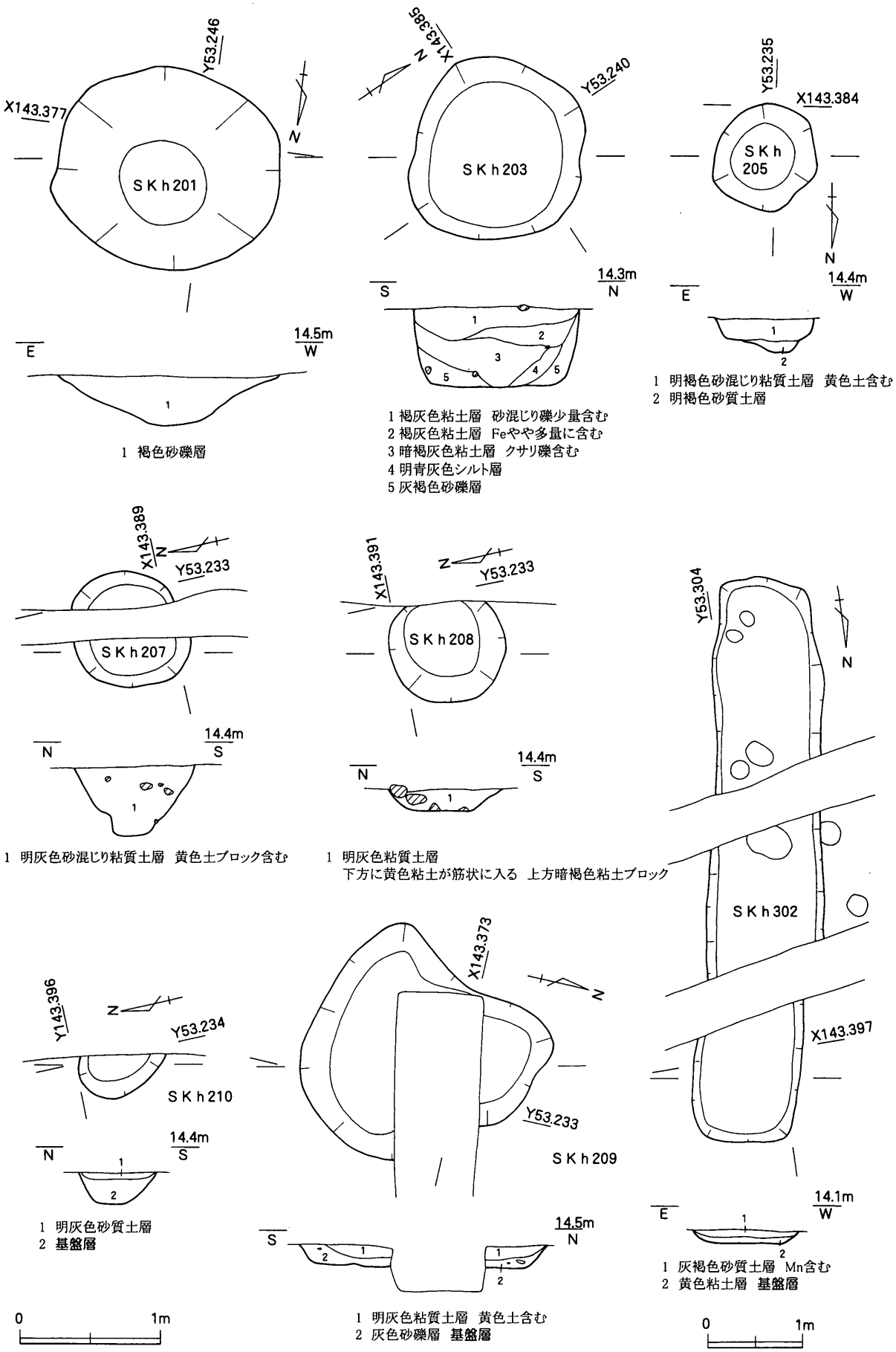
第113図　ＳＫｈ119出土遺物実測図（S=1/3・1/6）



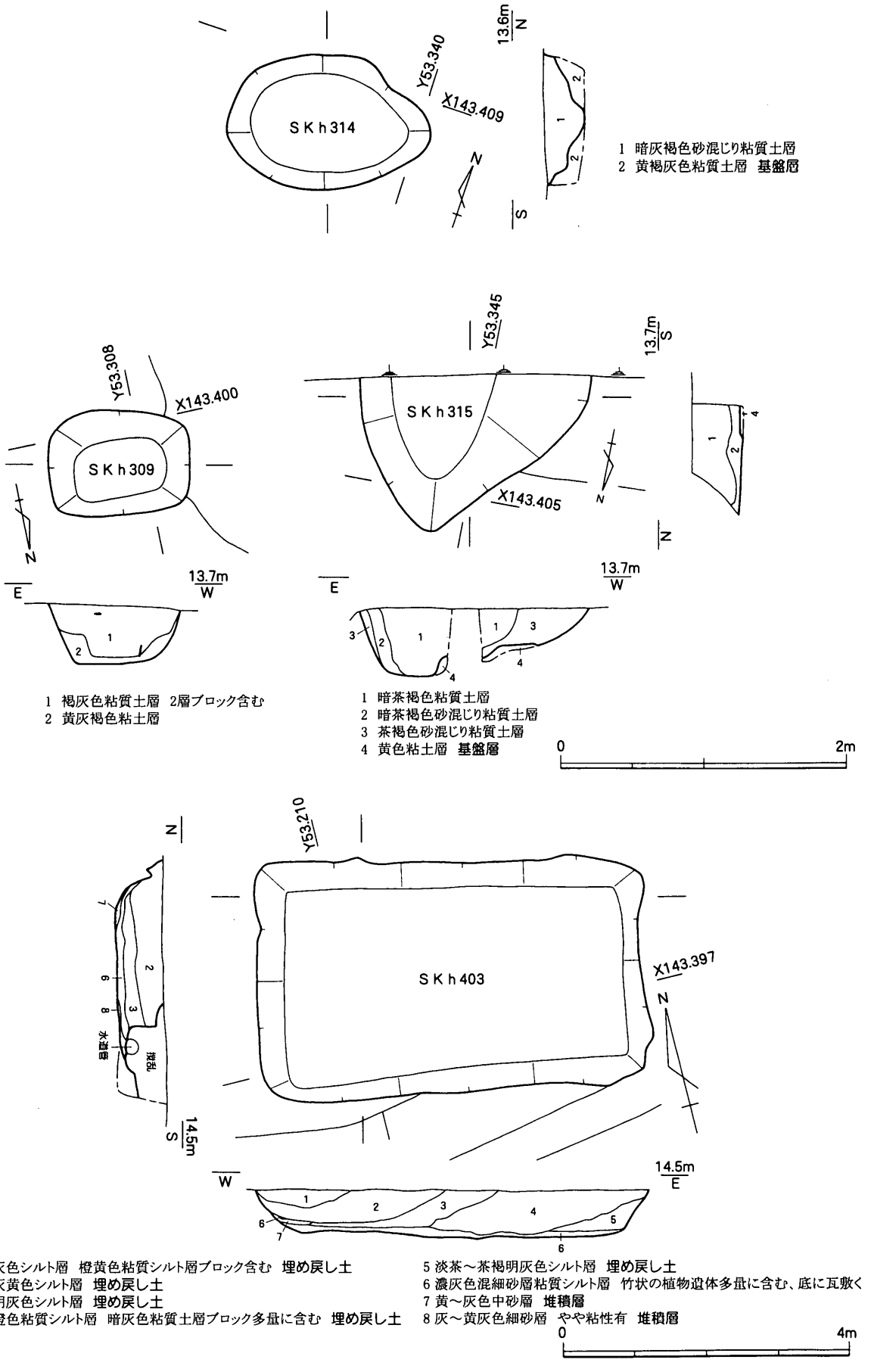
第114図　ＳＫｈ 123・ｈ 126 出土遺物実測図（S=1/3・1/6）

外面の口縁部直下にはヘラケズリによる施文が認められる。713 は土師質土器大甕。底面が存在せず、内面の底部やや上位に突出部を有する。

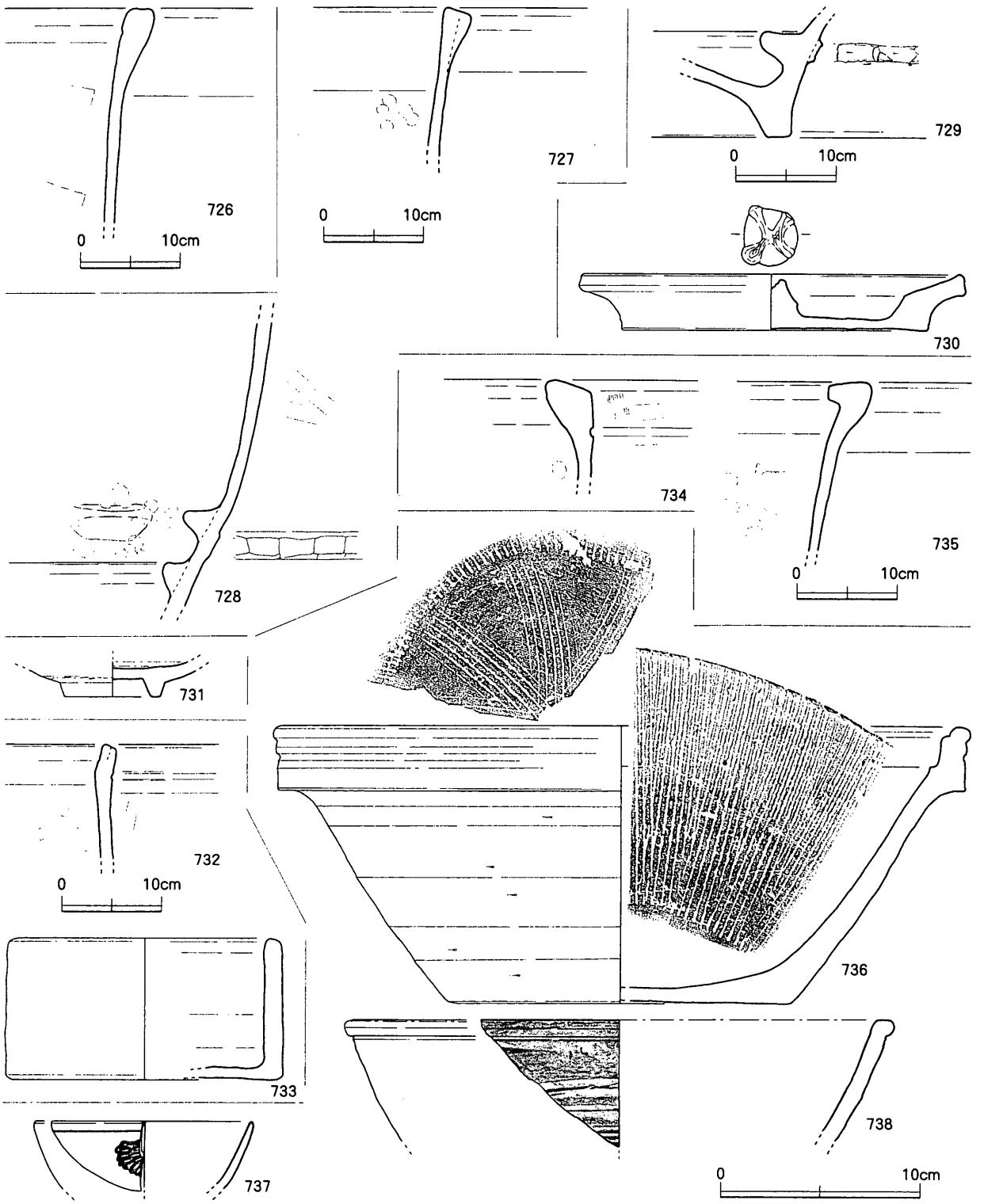
時期　713 から 19 世紀前半以降と判断できる。



第115図 SKh 201・h 203・h 205・h 207・h 208・h 209・h 210・h 302
平・断面図（S=1/40・1/60）

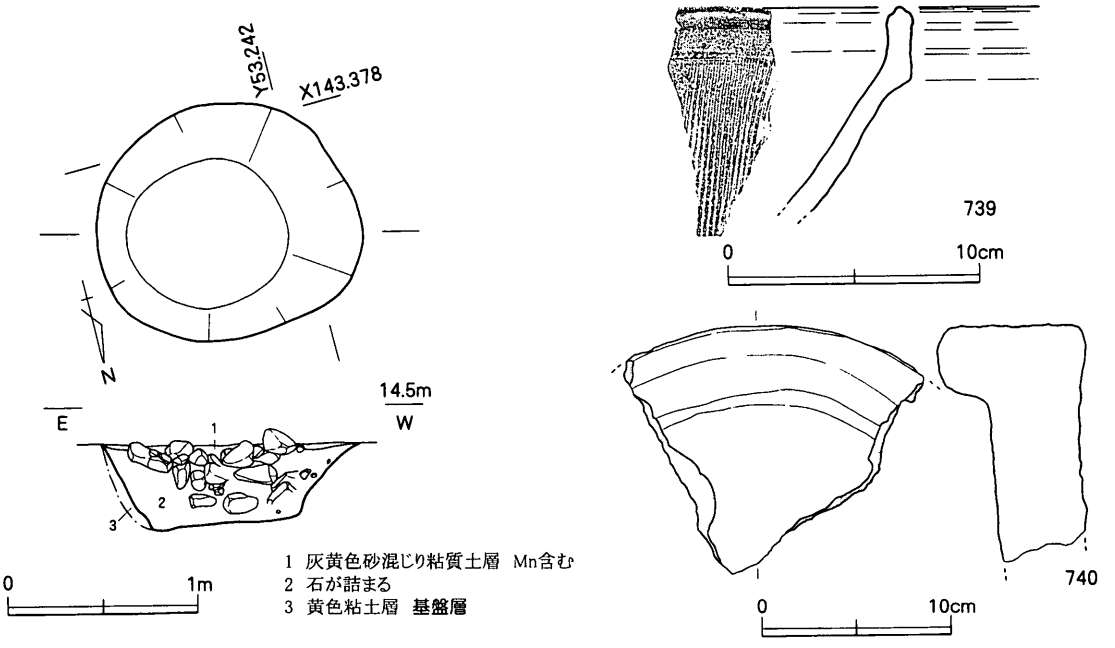


第116図 SKh 309・h 314・h 315・h 403平・断面図（S=1/40/・1/80）



726	ＳＫｈ135	732・733	ＳＫｈ405
727・728	ＳＫｈ139	734・735	ＳＫｈ402
729・730	ＳＫｈ140	736～738	ＳＫｈ309
731	ＳＫｈ404		

第117図　ＳＫｈ135・ｈ139・ｈ140・ｈ309・ｈ402・ｈ404・ｈ405
出土遺物実測図（S=1/3・1/6）



第118図　ＳＫｈ 391 平・断面図（S=1/40）、出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

ＳＫｈ 123（発掘調査時遺構名：Ⅲ－40 区ＳＫ 123）

出土遺物　714 は施釉陶器蓋。715 は備前鉢。716 は土師質土器甕。717 は土師質土器鉢。逆台形状の脚部を３方向に有する。

時期　詳細な時期決定は困難であるが、716 から 19 世紀前半以降と考えられる。

ＳＫｈ 126（発掘調査時遺構名：Ⅲ－40 区ＳＫ 126）

出土遺物　718 は肥前系磁器碗。719・720 は施釉陶器鉢。720 の高台内には墨書が認められる。721 は堺・明石系擂鉢。722 は土師質土器の火消壺蓋。723 は瓦質土器竈片。「みまや　佐古重蔵」の刻印が施され、御厩産であることが確実である。724 は竈部材。二連竈の前面両端部の接地部分に付されるものである。725 は凝灰岩製の器種不明石製品。平面形は長方形、断面形は凹形を呈する。

時期　722 から幕末前後の時期と考えられる。

ＳＫｈ 135（発掘調査時遺構名：Ⅲ－40 区ＳＫ 135）

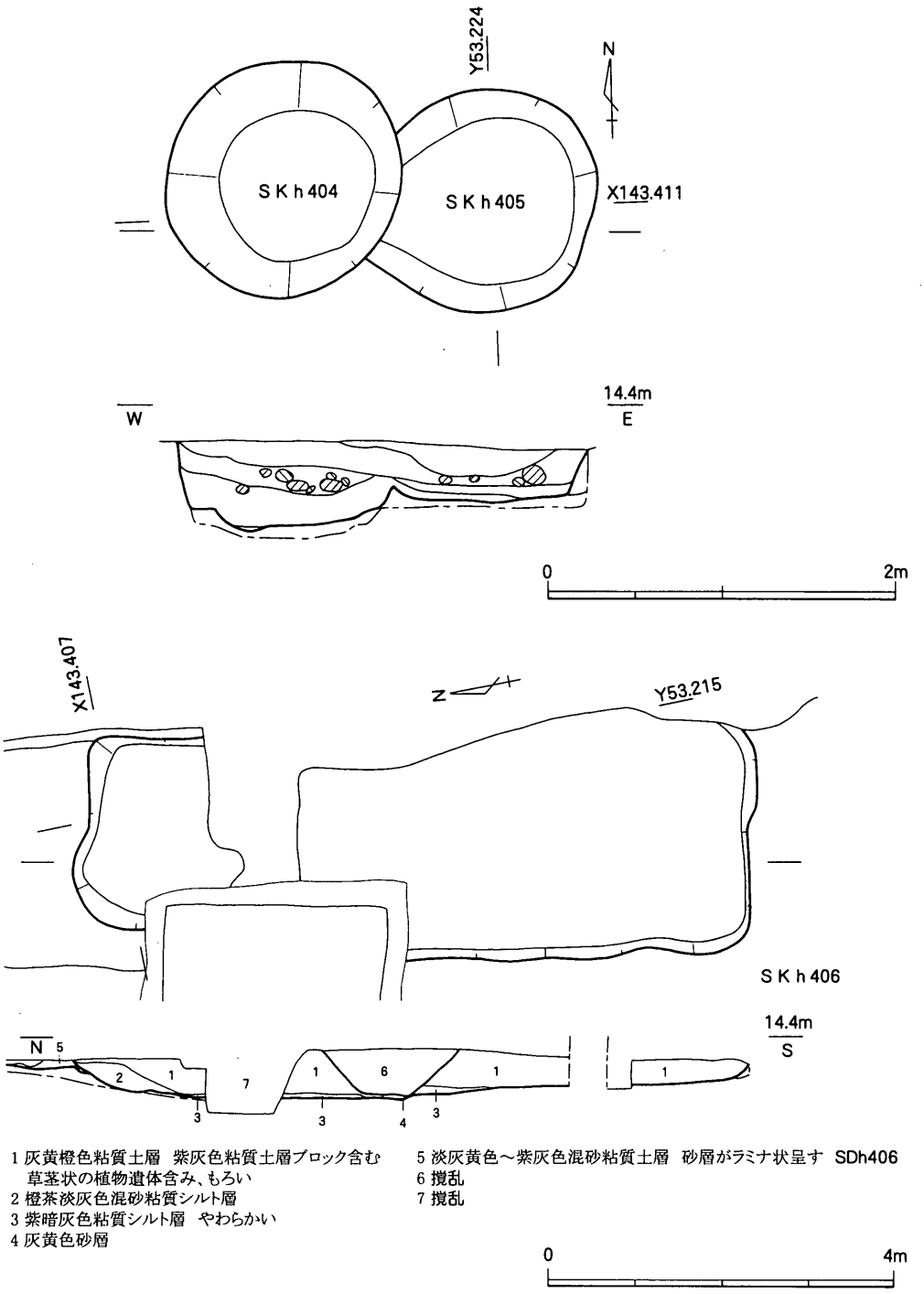
出土遺物　726 は口径 29.0cm の土師質土器大甕。

時期　出土遺物から 19 世紀後半頃と考えられる。

ＳＫｈ 139（発掘調査時遺構名：Ⅲ－40 区ＳＫ 139）

出土遺物　727 は口径 48.0cm の土師質土器大甕。728 は底面をもたず、内面の底部やや上位に突出部を有する形態の土師質土器大甕。

時期　出土遺物から 19 世紀前半以降の埋没と判断できる。

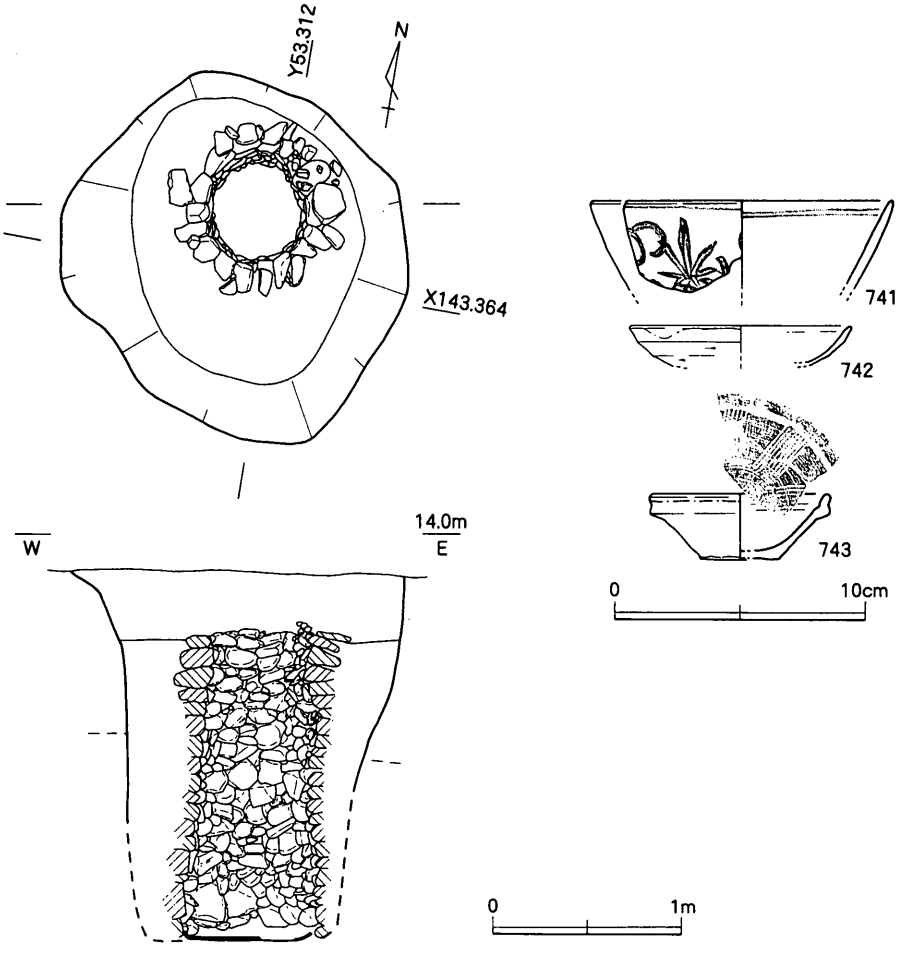


第119図　ＳＫｈ 404・ｈ 405・ｈ 406 平・断面図（S=1/40/・1/80）

ＳＫｈ 140（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 40 区ＳＫ 140）

出土遺物　729 の土師質土器大甕は、内面の底部よりやや上位に突出部を有し、底面も存在するタイプである。730 は土師質土器火消壺蓋。

時期　730 から幕末前後と考えられる。



第120図　ＳＥｈ01平・立面図（S=1/40）、出土遺物実測図（S=1/3）

ＳＫｈ309（発掘調査時遺構名：Ⅲ－50区ＳＫ09）

出土遺物　736は堺・明石系擂鉢。737は肥前系磁器碗。外面の文様はコンニャク印判によるものであろう。738は施釉陶器鉢。肥前系の可能性もある。

時期　736から18世紀第４四半期埋没の遺構と考えられる。

ＳＫｈ404（発掘調査時遺構名：Ⅲ－３区ＳＫ04）

出土遺物　731は肥前系磁器皿高台部片。

時期　出土遺物からの時期決定は困難であるが、周辺の遺構の状況から19世紀代の遺構と捉えたい。

ＳＫｈ405（発掘調査時遺構名：Ⅲ－３区ＳＫ05）

出土遺物　732は口径31.8cmの土師質土器大甕。頸部外面に１条の沈線が施されている。733は備前鉢。

時期　732から19世紀前半以降と考えられる。

ＳＫｈ 402（発掘調査時遺構名：Ⅲ－３区ＳＫ 02）

出土遺物　734 は口径 41.6cm の土師質土器大甕。外面の口縁部直下には 1 条の沈線が施されている。735 は口径 33.8cm の土師質土器大甕。

時期　出土遺物から 19 世紀前半以降と考えられる。

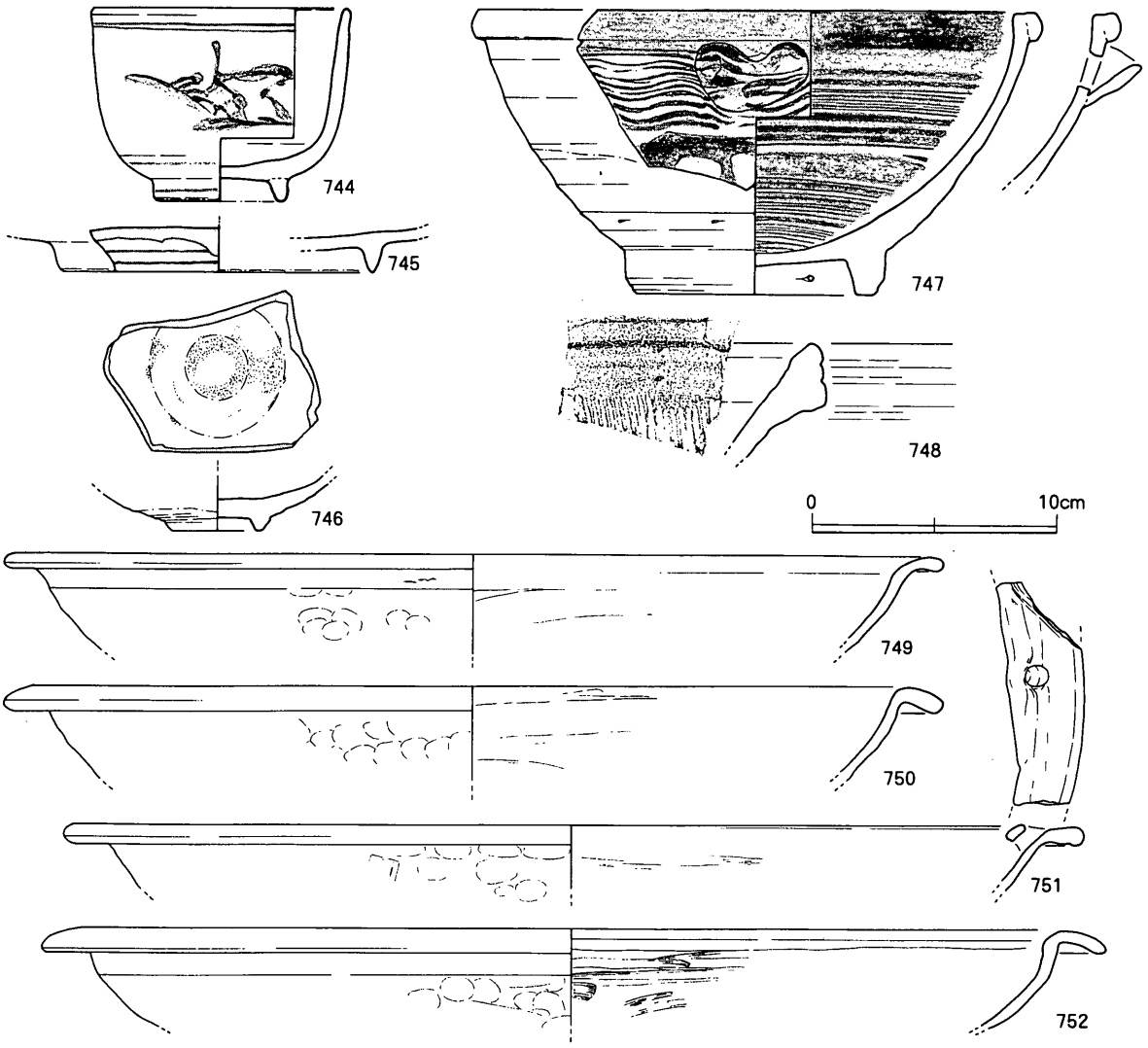
ＳＫｈ 309（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 50 区ＳＫ 09）

出土遺物　736 は堺・明石系擂鉢。737 はコンニャク印判により文様が施されている肥前系磁器碗。738 は肥前系陶器鉢。

時期　出土遺物から 18 世紀後半と考えられる。

ＳＫｈ 391（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 49 区ＳＥ 01）

Ⅲ－ 49 区で検出した土坑。掘り方はやや不整な円形である。内面には礫が詰められていたが、その性格については不明である。



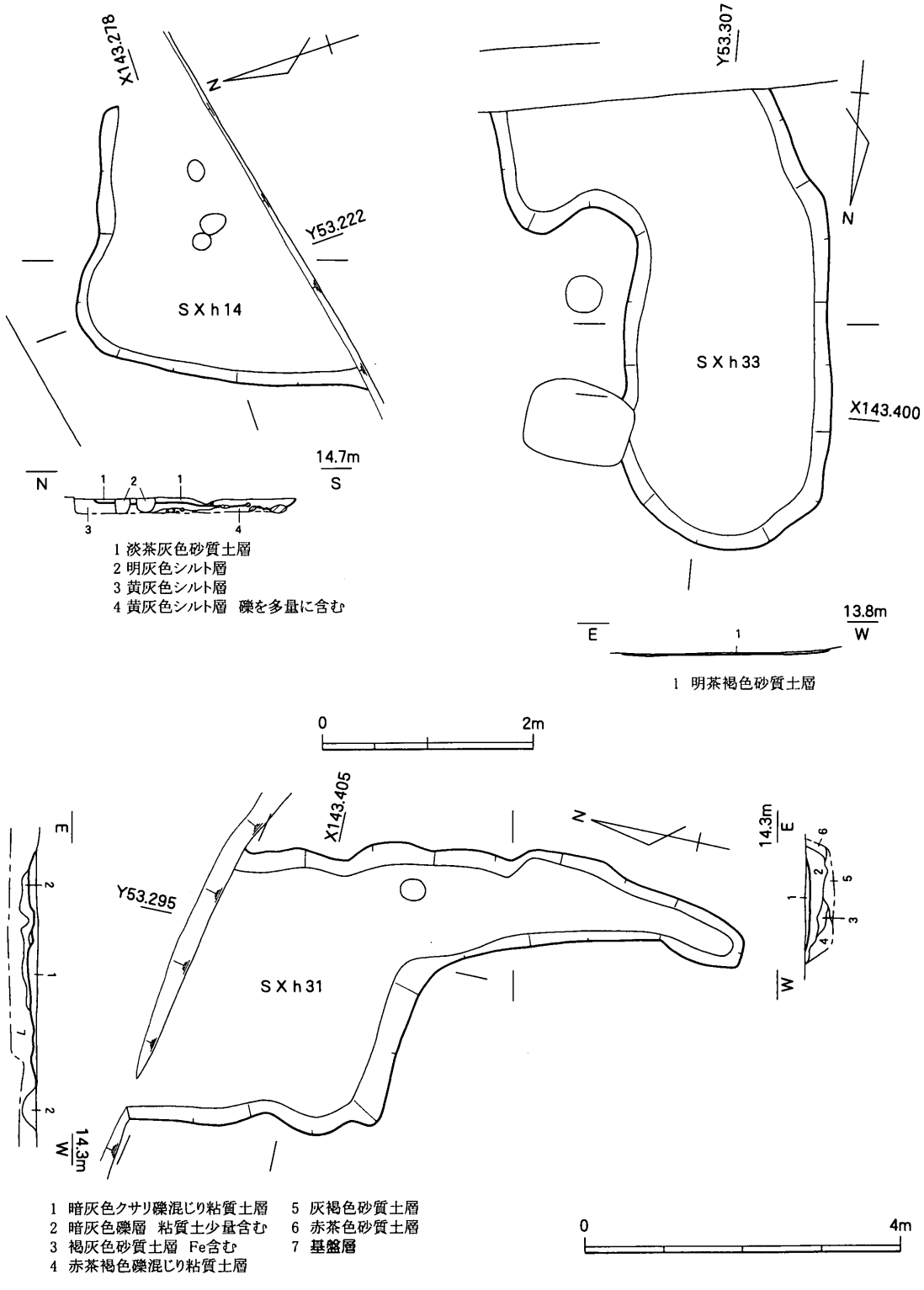
第 121 図　ＳＥｈ 03 出土遺物実測図（S=1/3）

出土遺物　739は備前擂鉢。740は凝灰岩製の石臼。

時期　739から19世紀中葉と判断できる。

ＳＥｈ01（発掘調査時遺構名：Ⅲ－20区ＳＥ01　概報遺構名：ＳＥ04）

Ⅲ－20区中央部で検出された井戸。掘り方の平面形は不整円形で、石積みによる井側は掘り方の北部寄りに位置する。石積みの直径は約0.6ｍである。石積み底部には土師質土器甕が設置されて



第122図　ＳＸｈ14・ｈ31・ｈ33平・断面図（S=1/60・1/80）

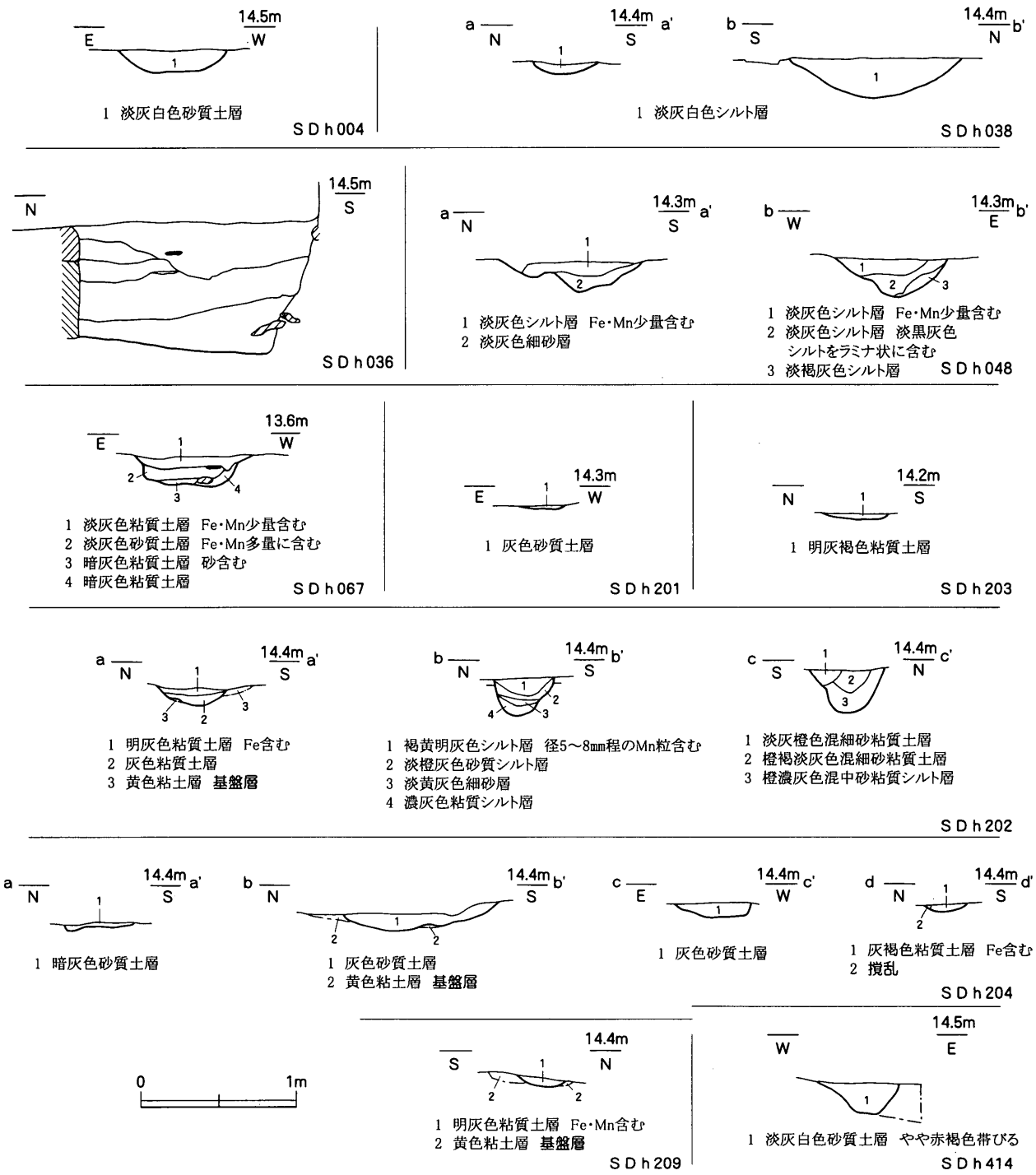
いる。

出土遺物　741 は肥前系磁器碗。742 は備前灯明皿。743 はミニチュア陶器の擂鉢。

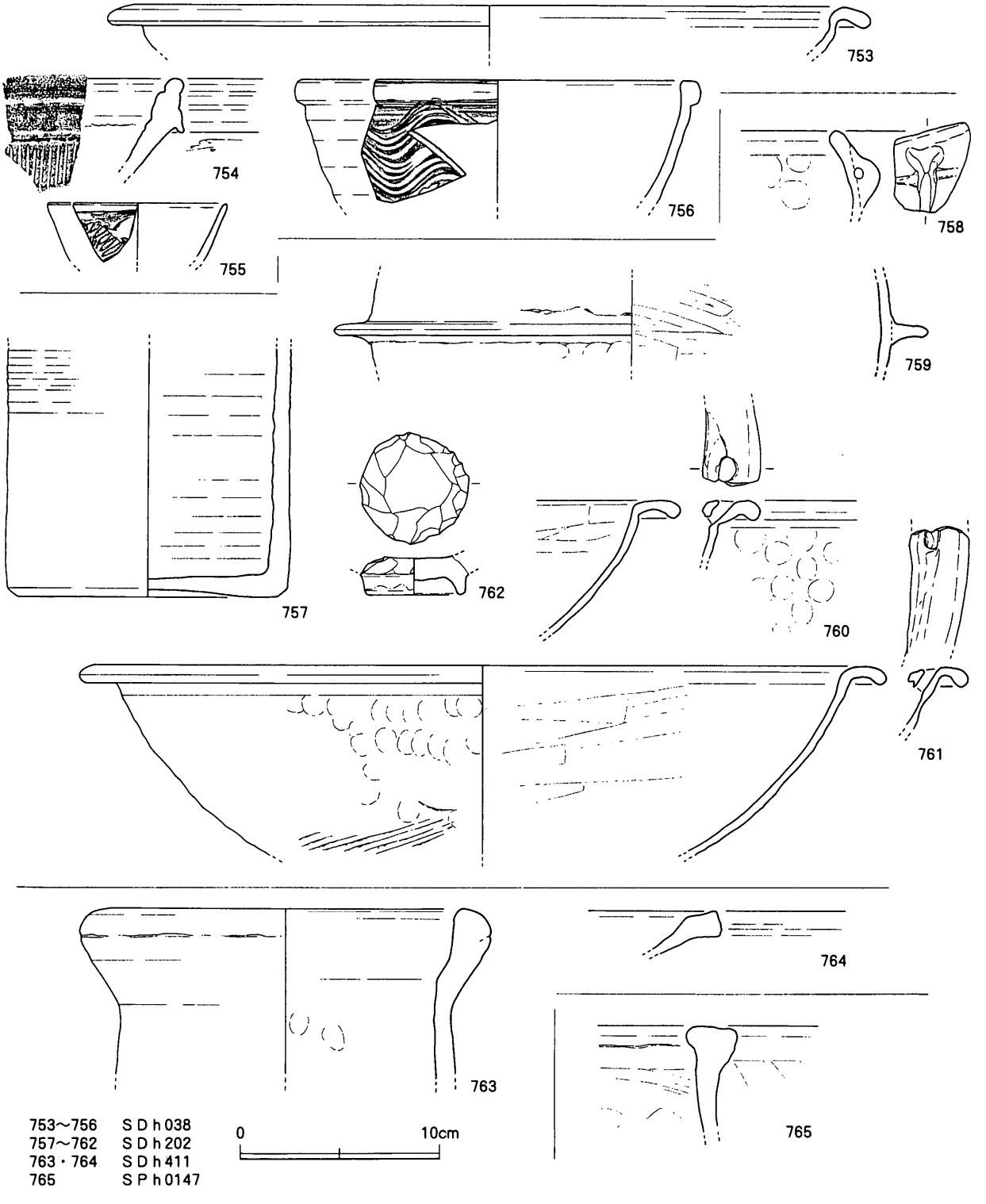
時期　741 から 18 世紀後半～ 19 世紀と考えられる。

ＳＥｈ 03（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 40 区ＳＥ 03）

Ⅲ－ 40 区で検出された井戸。詳細は不明。



第 123 図　ＳＤｈ 004・ｈ 036・ｈ 038・ｈ 048・ｈ 067・ｈ 201・ｈ 202・ｈ 203・ｈ 204・ｈ 209・ｈ 414 断面図（S=1/40）



第124図　S D h 038・h 202・h 411、S P h 0147出土遺物実測図（S=1/3）

出土遺物　744は陶胎染付碗。745・746は肥前系磁器皿。747は肥前系陶器鉢。748は備前擂鉢。749～752は御厩系焙烙。

時期　748から19世紀前半～中葉と考えられる。

溝（ＳＤ）

ＳＤｈ 010 Ｃ

（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 15・16・19・20・40 区ＳＤ 10 ａ・ｂ・ｃ他　概報遺構名：ＳＤ 58）

ＳＤｈ 010 Ｃは、古代末～中世の溝ＳＤｈ 010 Ａ・Ｂ埋没後に、その東側に接して掘削された南北方向の条里地割に沿った溝。

時期　最終埋没は旧陸軍飛行場造成時（1944 年）であるが、出土遺物や周辺遺構の状況を考慮すれば、18 世紀後半から機能していたものと想定できる。

ＳＤｈ 038（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 18 区ＳＤ 38）

Ⅲ－ 18 区で検出された東西方向の条里地割に沿った溝。

出土遺物　753 は御厩系焙烙。754 は堺・明石系擂鉢。755 は産地不明磁器碗。756 は肥前系陶器碗。

時期　754 から幕末に近い年代が与えられる。

ＳＤｈ 202（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 49 区ＳＤ 02 他）

Ⅲ－ 10 区で検出されたＳＤｈ 406 から東へ伸びる溝。南北方向のＳＤｈ 201 とは重複関係にあり、本溝埋没後にＳＤｈ 201 が掘削されている。

出土遺物　757 は備前鉢。758・759 は瓦質土器羽釜。760・761 は御厩系焙烙。762 は中世の青磁碗転用の円盤状加工品。

時期　758 ～ 761 から 18 世紀代の埋没と考えられる。

ＳＤｈ 411（発掘調査時遺構名：Ⅲ－ 3 区ＳＤ 11 他）

出土遺物　763 は土師質土器の土管か。764 は外型成形の御厩系焙烙。

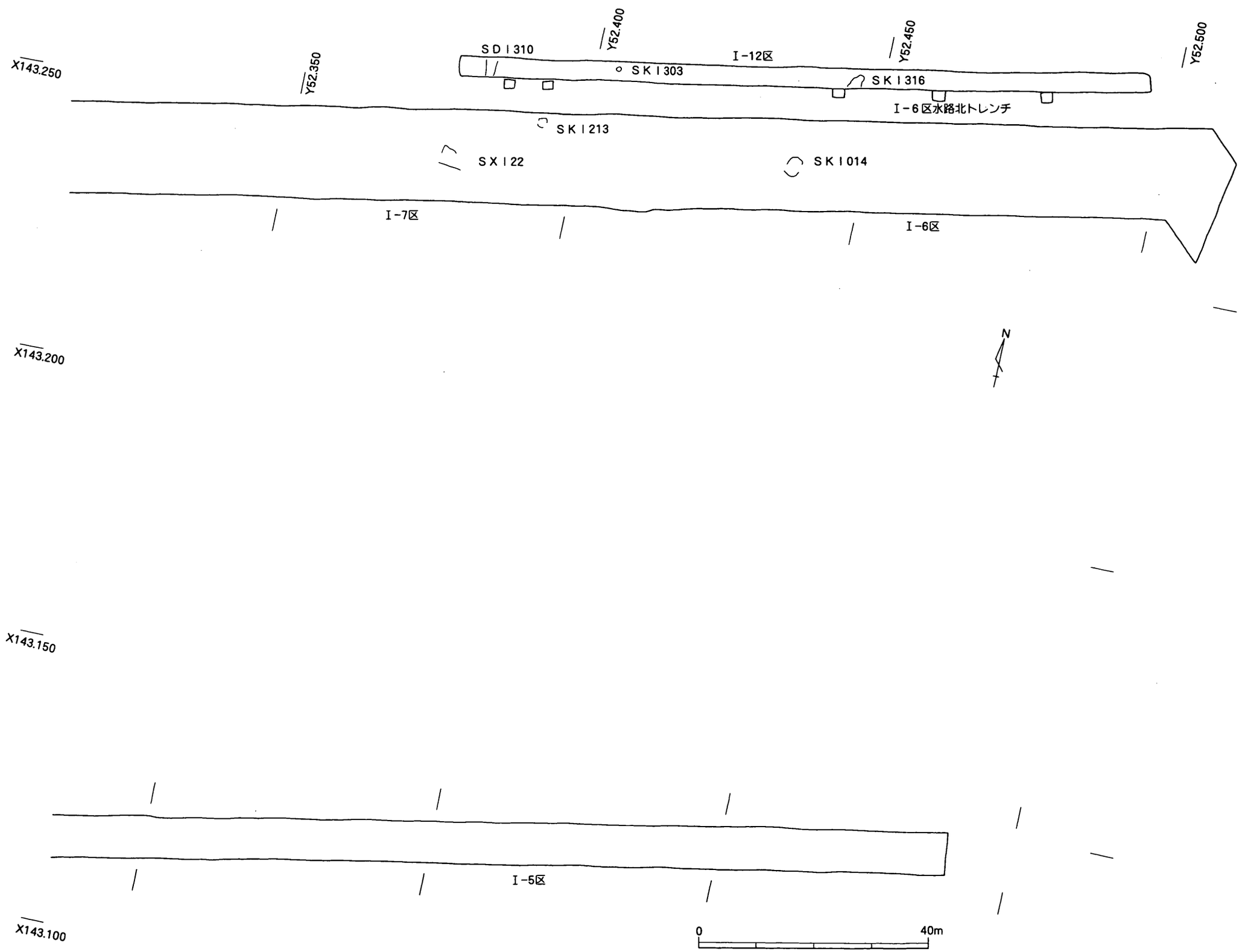
時期　出土遺物から 19 世紀後半頃の埋没と考えられる。

小穴・柱穴（ＳＰ）

ＳＰｈ 147

出土遺物　765 は土師質土器大甕

時期　出土遺物から 19 世紀前半以降と考えられる。



第125図　L地区弥生時代前期主要遺構配置図（S=1/800）

第３節　Ｌ地区の遺構と遺物

１．弥生時代前期の遺構と遺物

土坑（ＳＫ）

ＳＫⅠ014（発掘調査時遺構名：Ⅰ－６区ＳＫ14）

Ⅰ－６区西部で検出された楕円形の平面形を有する土坑。埋土中には多量の円礫が含まれている。

出土遺物　766～769は壺。口縁部片である767の内面には２条の突帯が貼付されている。770～772は甕。逆Ｌ字状口縁を有する770には４条のヘラ描き沈線文が施されている。773はサヌカイト製の大型スクレイパー。腹面にはほぼ同一方向からの剥離面２面が残ることから、定型的な横長剥片剥離技術によって作出された剥片を素材としている可能性がある。また、このスクレイパーは中軸付近で分割されているが、割れ口はその他の部分同様に風化が認められるため、当時の分割（割れ）であると思われる。

時期　出土遺物から弥生時代前期後半と判断できる。

ＳＫⅠ213（発掘調査時遺構名：Ⅰ－７区ＳＫ13）

Ⅰ－７区で検出した土坑。平面形は方形に近い不定形である。

出土遺物　774・775は壺。774は、口縁端部外面に１条の沈線が施されている。776・777は鉢。

時期　出土遺物から弥生時代前期後半と考えられる。

ＳＫⅠ303（発掘調査時遺構名：Ⅰ－12区ＳＫ03）

Ⅰ－12区西部で検出された平面形が円形の土坑。土坑内には少数の礫が存在する。

出土遺物　778は逆Ｌ字状口縁の甕。ヘラ描き沈線４条が施されている。779は甕底部片。780はサヌカイト製のスクレイパー。

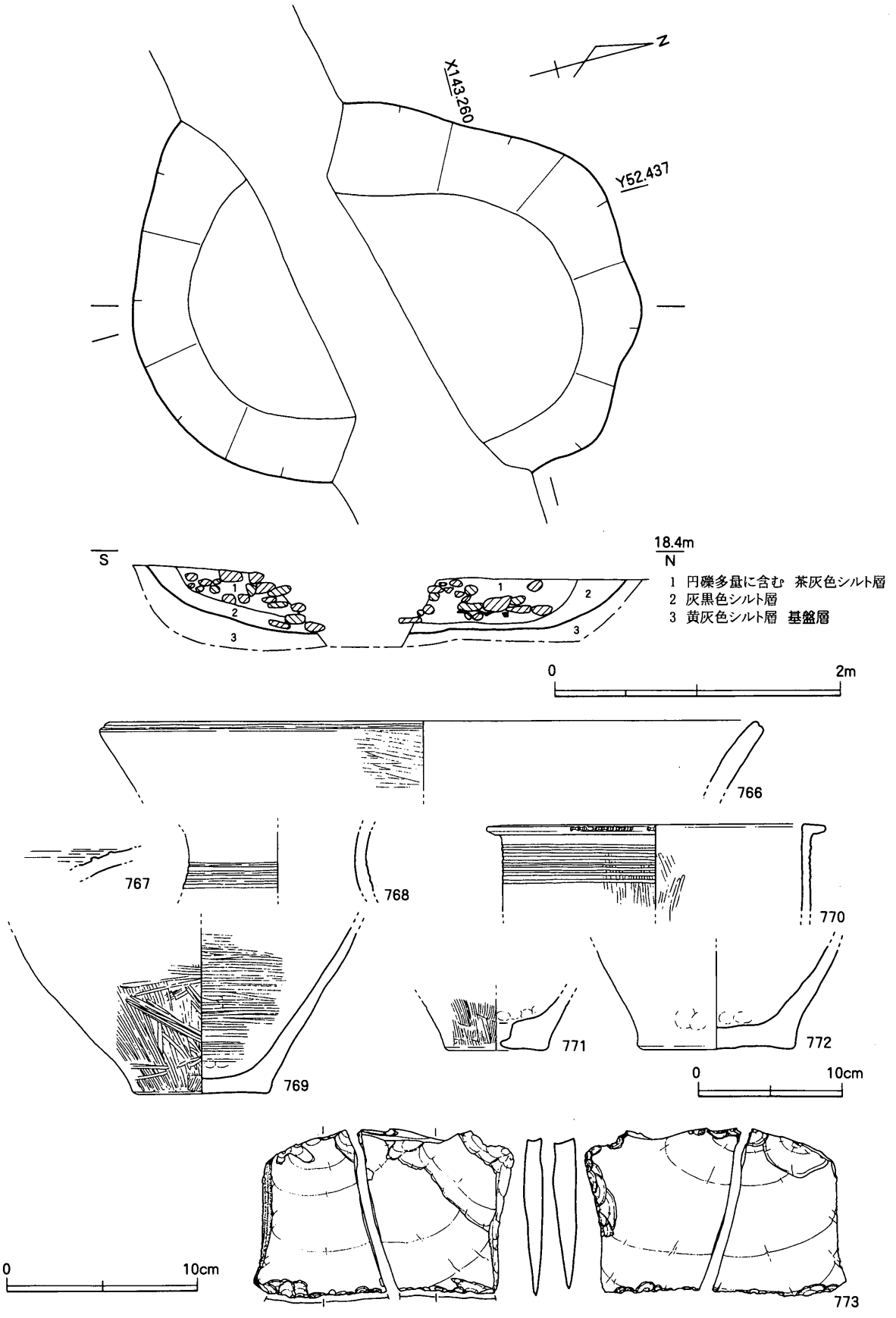
時期　出土遺物から弥生時代前期後半と考えられる。

ＳＫⅠ316（発掘調査時遺構名：Ⅰ－12区ＳＤ06）

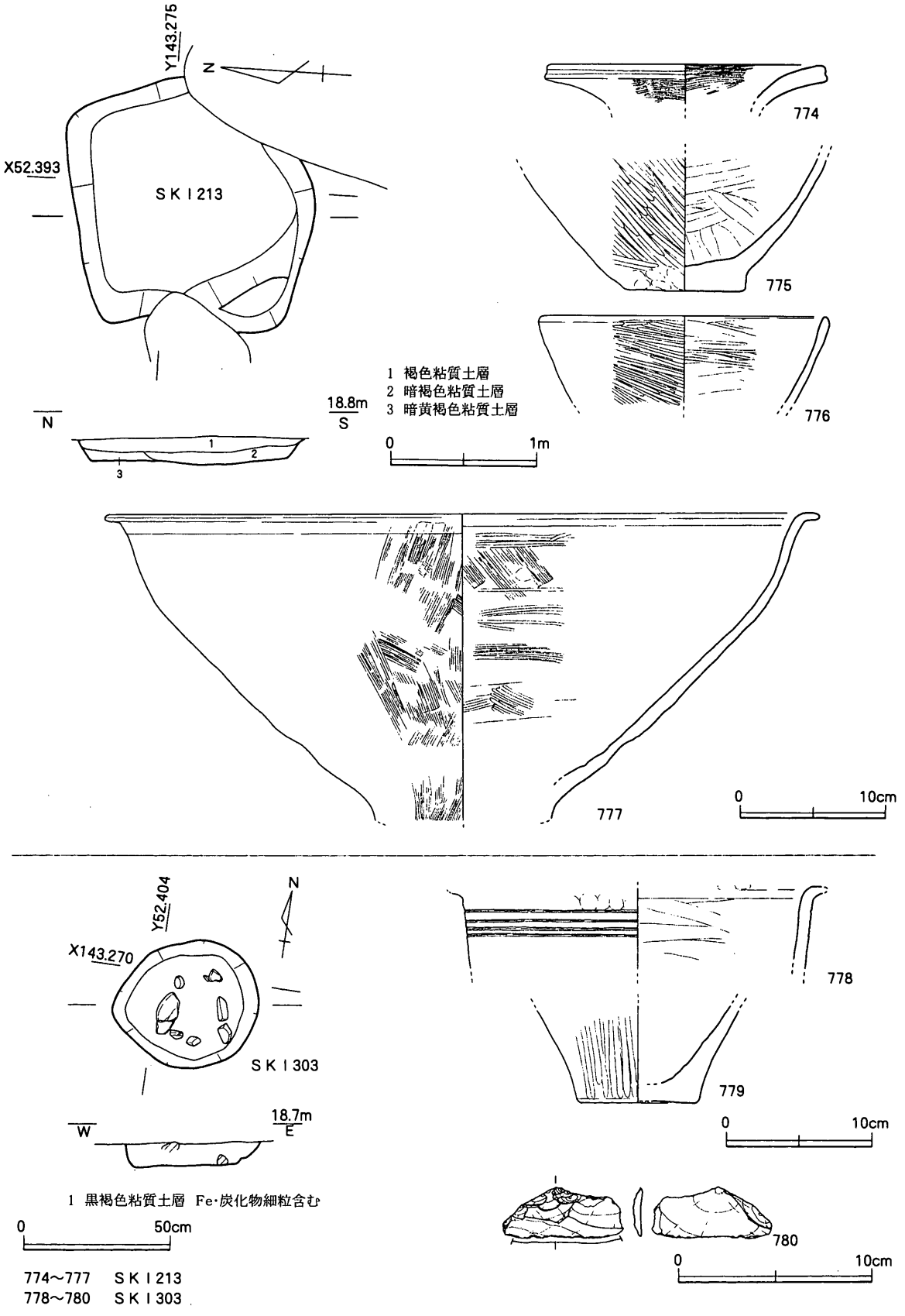
Ⅰ－12区西端部で検出された平面形が不定形の土坑。２層中に含まれる多量の小礫は、３・４層堆積後に西肩部から投棄されたものと想定される。

出土遺物　781～783は壺。781の口縁部外面は、ナデによりやや窪んでいる。782の頸部には突帯が貼付されている。784～786は甕。如意形口縁を有する784は、口縁端部に刻み目が施され、４条のヘラ描き沈線をもつ。

時期　出土遺物から弥生時代前期後半と考えられる。



第126図　ＳＫＩ014平・断面図（S=1/40）、出土遺物実測図（S=1/4・1/3）



第127図 SKI213・I303平・断面図（S=1/40・1/20）、
出土遺物実測図（S=1/4・1/3）

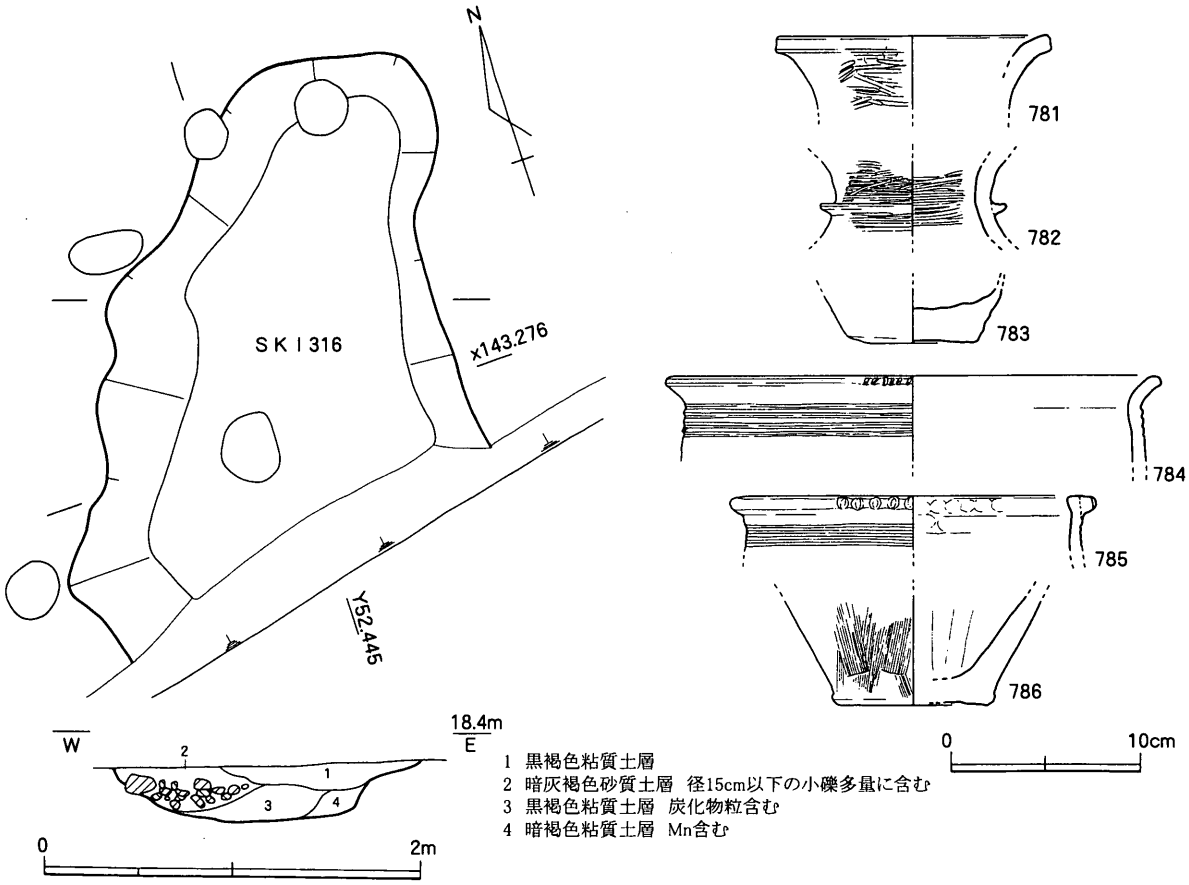
その他の遺構（ＳＸ）

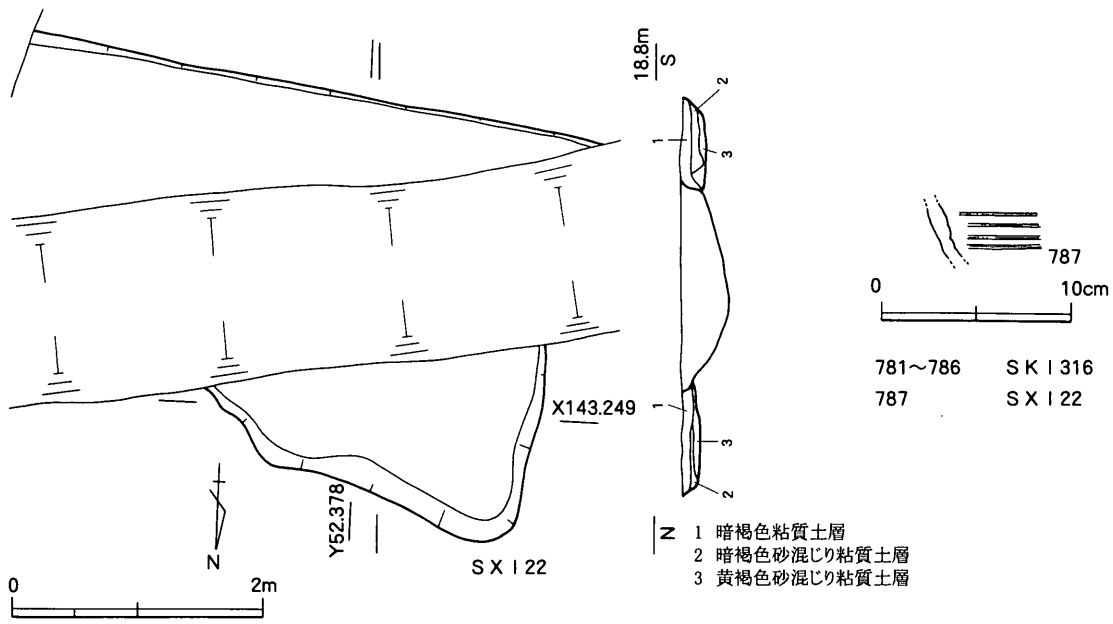
ＳＸＩ22（発掘調査時遺構名：Ｉ－７区ＳＸ02）

Ｉ－７区で検出された性格不明の遺構。遺構のほぼ中央部は現代のパイプ埋設に伴う撹乱により破壊されているが、推定される平面形は長方形に近いものと思われる。

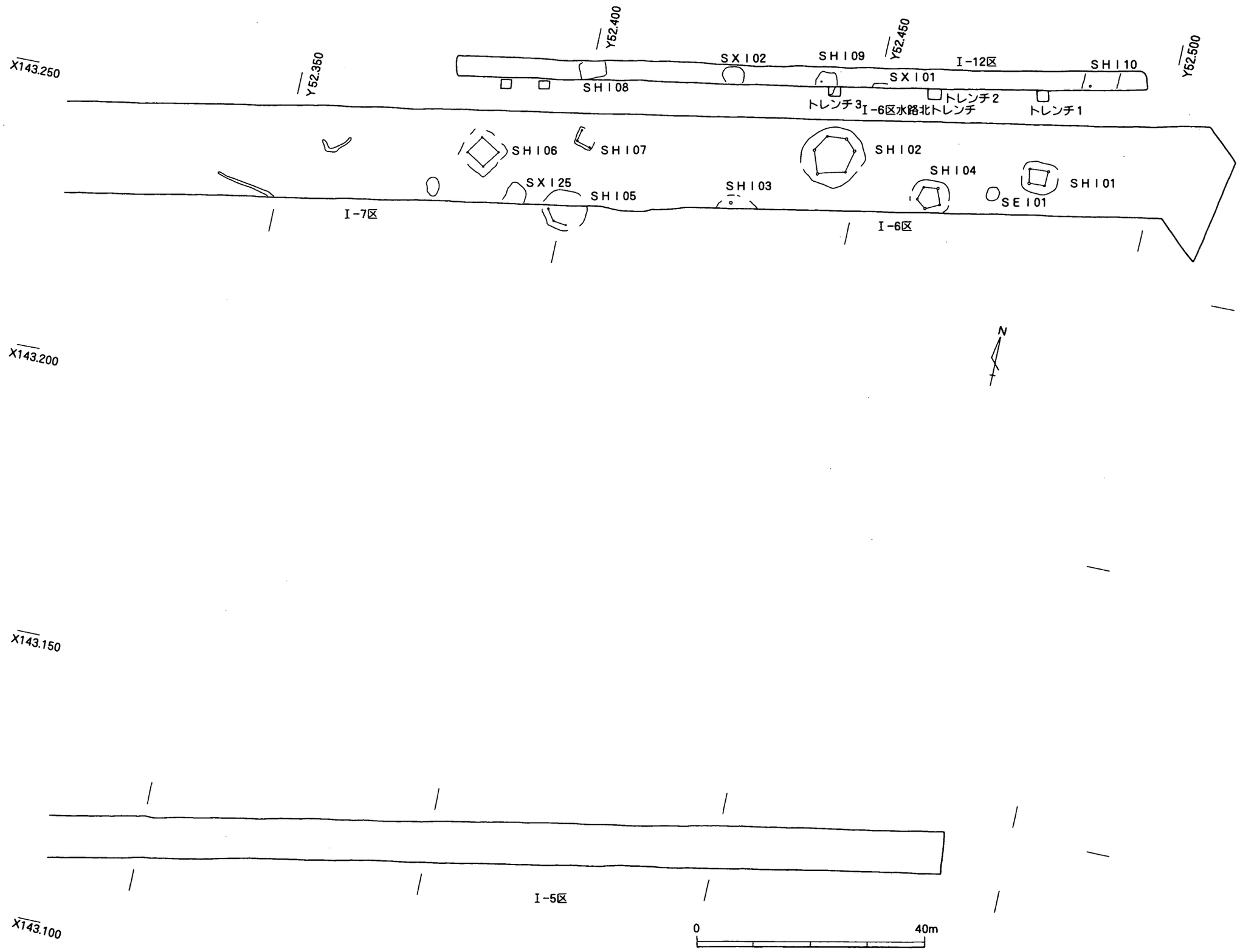
出土遺物　787は壺。頸部に４条のヘラ描き沈線文が認められる。

時期　出土遺物から弥生時代前期後半と考えられる。





第128図　ＳＫＩ316・ＳＸＩ22平・断面図(S=1/40・1/60)、出土遺物実測図(S=1/4)



第129図　弥生時代後期～古墳時代前期主要遺構配置図（S=1/800）

２．弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物

竪穴住居（ＳＨ）

ＳＨＩ01（発掘調査時遺構名：Ｉ－６区ＳＨ01　概報遺構名：ＳＨ22）

Ｉ－６区中央やや東部で検出。平面形は隅丸方形、長軸長は6.2ｍ、短軸長は5.8ｍである。

床面は２面認められ、基盤層直上の下位床面には主柱穴４基（Ｐ１～４）が存在する。それぞれの柱穴における住居床面から底部までの深さは、Ｐ１－0.25ｍ、Ｐ２－0.25ｍ、Ｐ３－0.20ｍ、Ｐ４－0.30ｍである。四周は床面より若干高く、ベッド状遺構となっている。Ｐ１・Ｐ３間、およびＰ３・４間の一部には、細長い溝が巡らされることでベッド状遺構とその内部が画されている。この細長い溝は立て板の痕跡の可能性がある。また、Ｐ１の北西にはＰ５が存在し、内部から土器片が出土している。

貼床（９層）によって上位床面が形成され、上位床面の主柱穴は、下位床面の主柱穴４基よりもやや四隅寄りの外方向に４基（Ｐ６～９）確認され、Ｐ６には柱痕が残る。下位床面同様、四周がベッド状遺構となっており主柱穴間を結んだ内側はやや低くなっている。

住居中軸のやや南寄りには埋土中に炭化物を含む（18層）Ｋ１が存在する。さらに、住居の中央には平面形が円形に近い不定形の土坑Ｋ２が、そのやや南東にＫ３（住居床面からの深さ0.07ｍ）が認められる。Ｋ２の埋土には炭化物が含まれる（７層）。

出土遺物　788～791は胎土中に黒雲母が多量に含まれる壺。一部角閃石が見られるものもある。792～797・800・801は白色系の甕。798はにぶい橙色を呈し、黒雲母をやや多く含む甕。黒化層が断面に認められる。799は橙色を呈する甕。802・803は胎土に黒雲母が多量に含まれる甕。802については黒雲母粒がやや大きく、角閃石も少量認められる。804は吉備系の甕。摩滅が著しいため、口縁部外面の櫛描文は残存していない。805～807は高杯。細粒の角閃石を多量に含む胎土１類で構成される805・807は弥生時代後期前葉の所産であろう。806は壺口縁部の可能性もあるが、内面に黒班が認められるため高杯とした。808は脚部を有する鉢か。摩滅は顕著であるが、内外面に緻密なヘラミガキが認められる。胎土は白色系に近い。809～824は白色系の鉢。813・815の断面には黒化層が看取される。825～827はにぶい橙色を呈し、大粒の黒雲母を多量に含む胎土で構成される鉢。828の製塩土器は白色系か。829はサヌカイト剥片。刃部らしきものを有する。830は砂岩製の砥石。

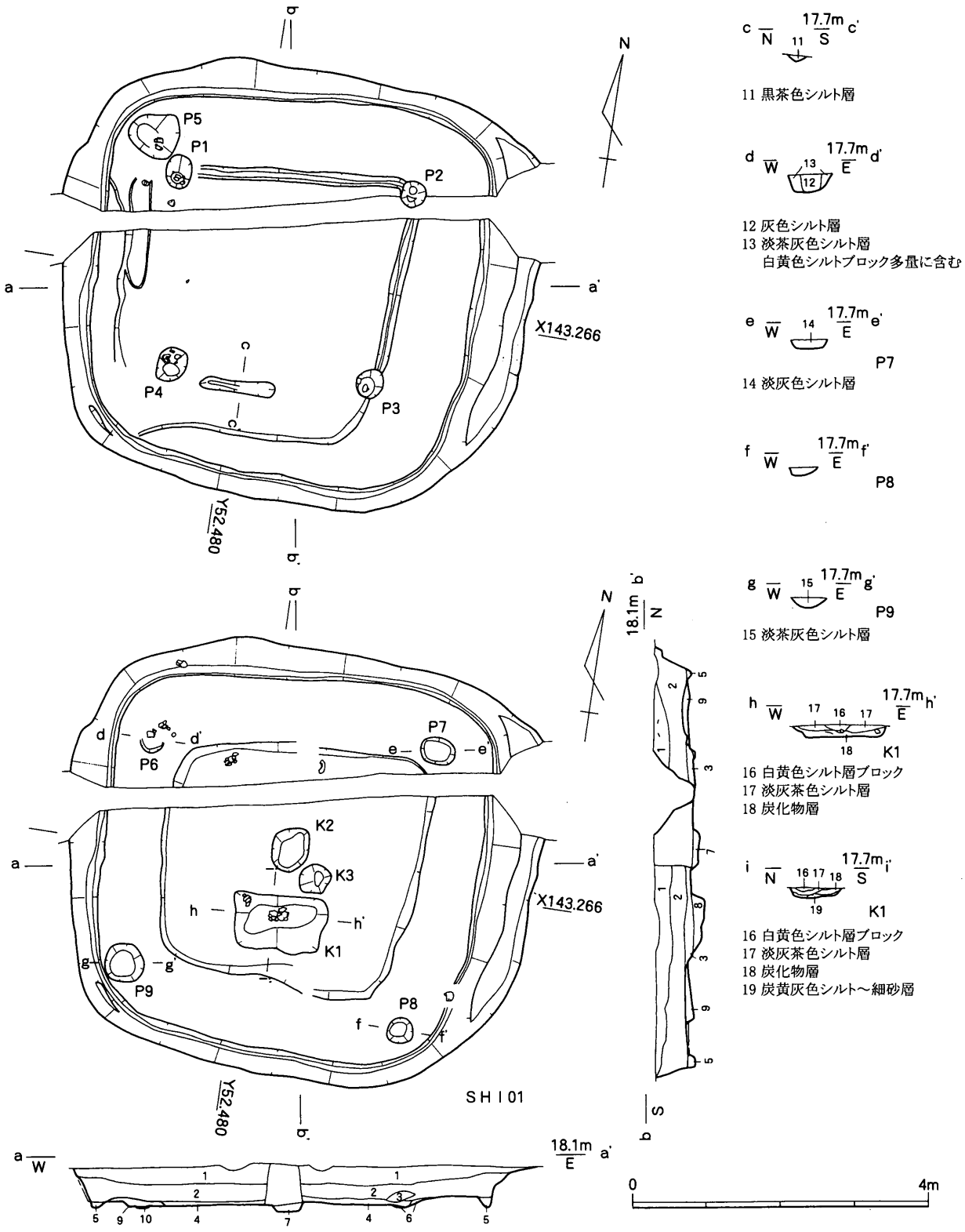
時期　出土遺物から古墳時代前期初頭と考えられる。

ＳＨＩ02（発掘調査時遺構名：Ｉ－６区ＳＨ02　概報遺構名：ＳＨ20）

Ｉ－６区中央部で検出された11.0ｍ×10.8ｍの円形竪穴住居。

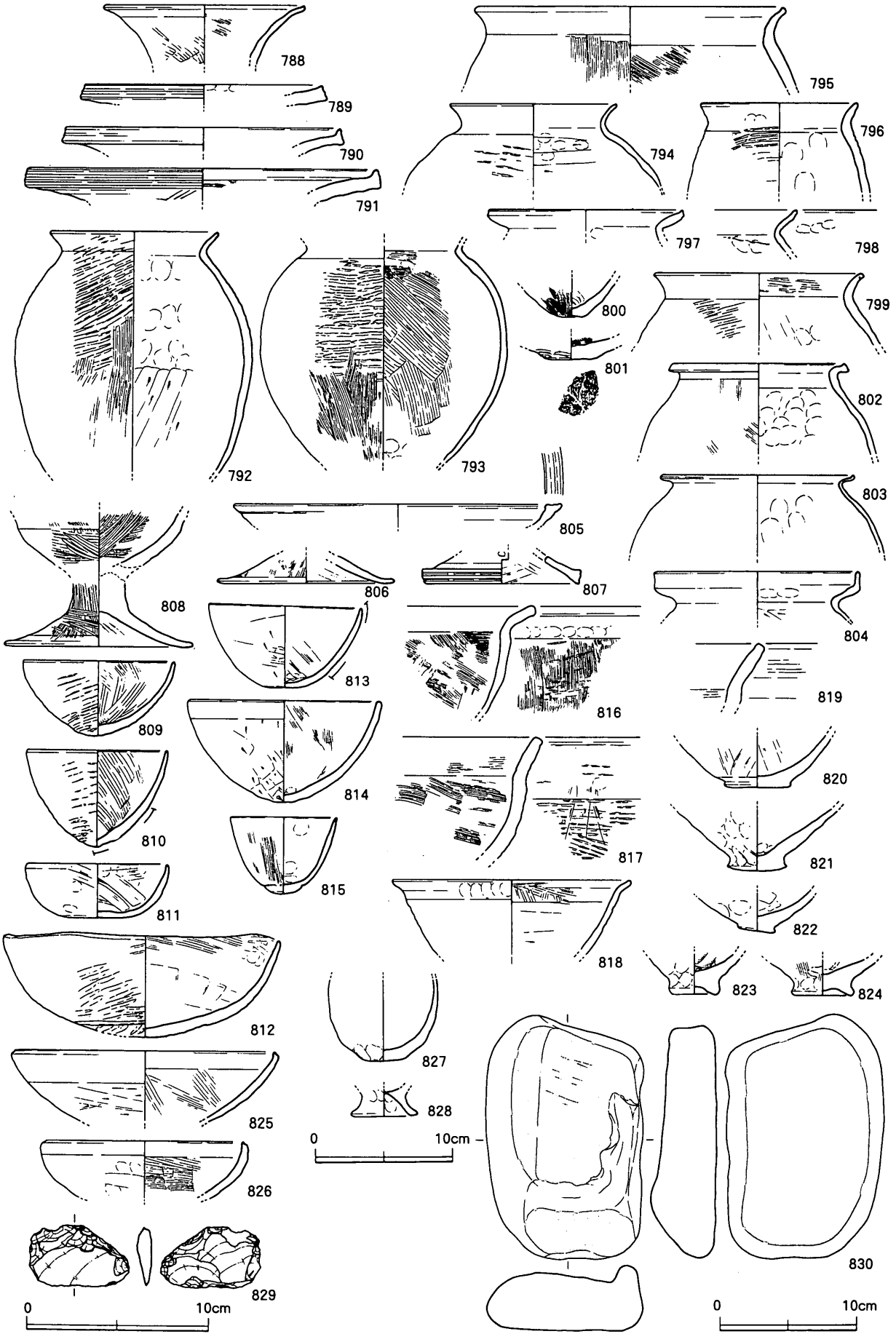
床面は２面存在し、基盤層直上にある下位床面ではＰ１～６の柱穴６基を主柱穴とする。それぞれの柱穴における住居床面から底部までの深さは、Ｐ１－0.20ｍ、Ｐ２－0.30ｍ、Ｐ３－0.45ｍ、Ｐ４－0.35ｍ、Ｐ５－0.40ｍ、Ｐ６－0.25ｍである。

住居中央部には円形の土坑Ｋ１が確認される。Ｋ１の埋土中に炭化物は認められず、上位床面形成時に埋め戻されている。またこのＫ１の周囲には４基の柱穴Ｐ７～10が巡る。それぞれの住居

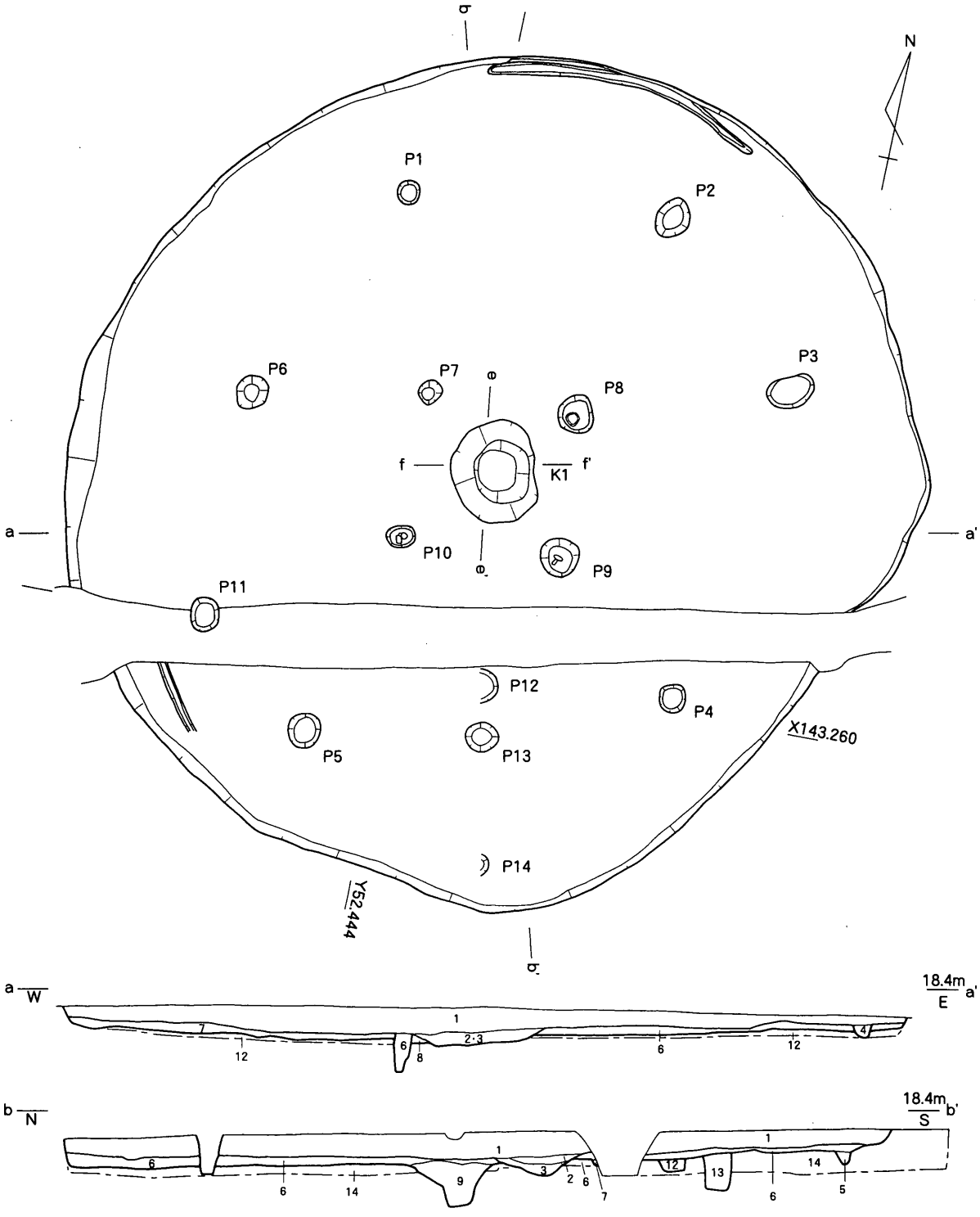


1 黒茶色シルト層　土器細片及び径5cmの円礫多量に含む
2 淡黄灰色シルト層　白黄色シルトブロック含む
3 白黄色シルトブロック層　遺物とり上げ
4 灰色シルト層　炭・灰含む　遺物とり上げ
5 淡茶灰色シルト層　遺物とり上げ　壁溝
6 淡黄灰色シルト層　白黄色シルトブロック含む
7 炭灰含む灰色シルト層　K2
8 炭灰色層　K1
9 淡黄シルト層　貼床
10 黒茶色シルト層　壁溝

第130図　ＳＨＩ01平・断面図（S=1/80）

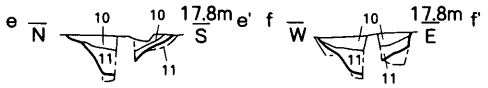


第 131 図　ＳＨＩ 01 出土遺物実測図（S=1/4・1/3）

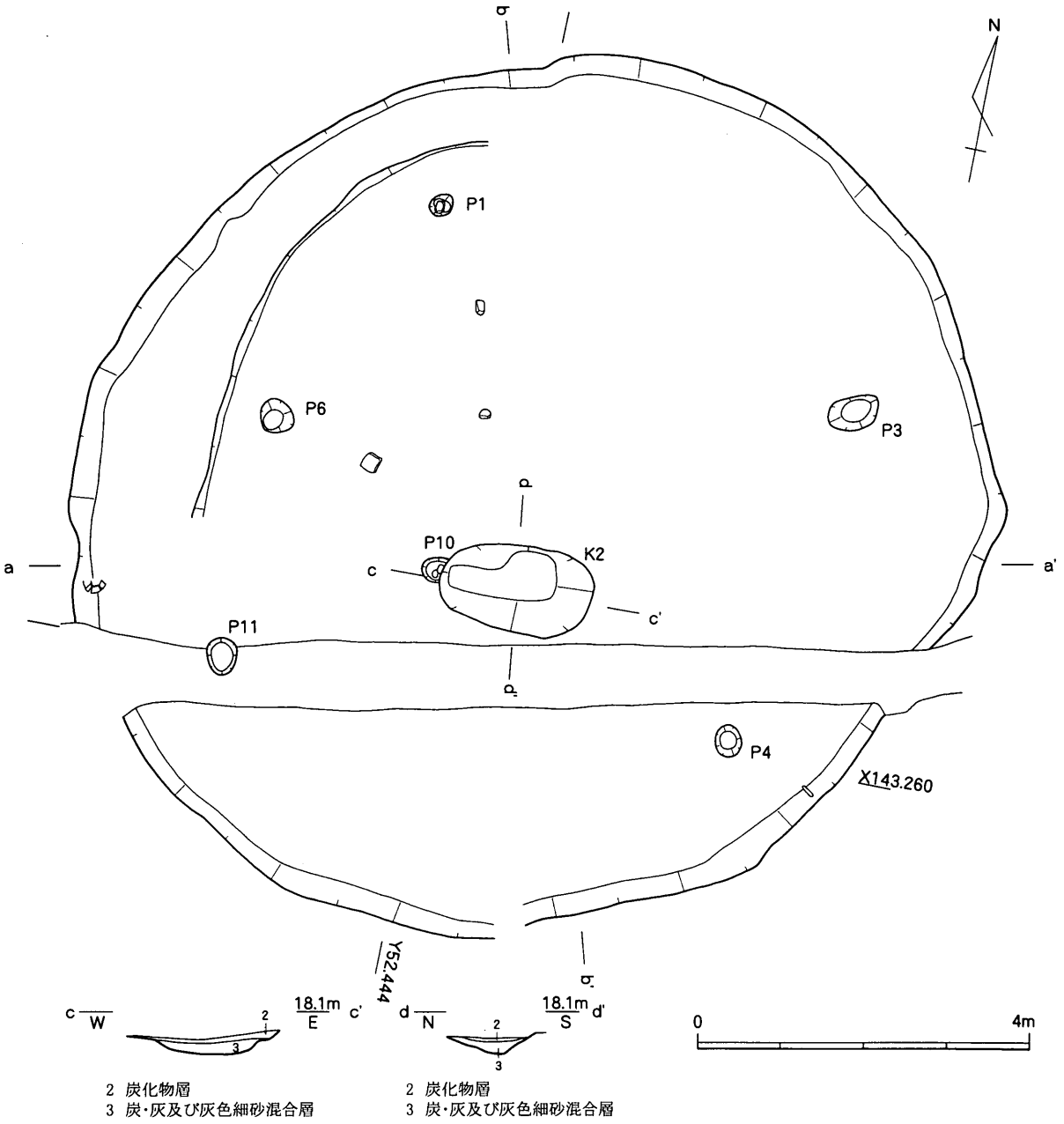


1 淡灰茶色シルト層
2 炭化物層 K2
3 炭灰及び灰色細砂混合層 K2
4 淡灰茶色シルト層 7層よりシルト質が強い
5 灰色シルト層
6 炭混じり灰色シルト層 P10
7 淡灰茶色シルト層 一部に炭の堆積が見られる K2
8 炭灰混じり淡灰黄色細砂層
9 淡茶灰色シルト～淡灰色シルト層 下層は灰色シルト K1
10 淡茶灰シルト層 白黄色ブロック含む K1
11 灰色シルト層 K1
12 淡茶灰色シルト層
13 淡茶灰色シルト層
14 白黄色シルト～淡黄灰色粗砂層 基盤層

0 4m



第132図 ＳＨＩ02平・断面図1 (S=1/80)



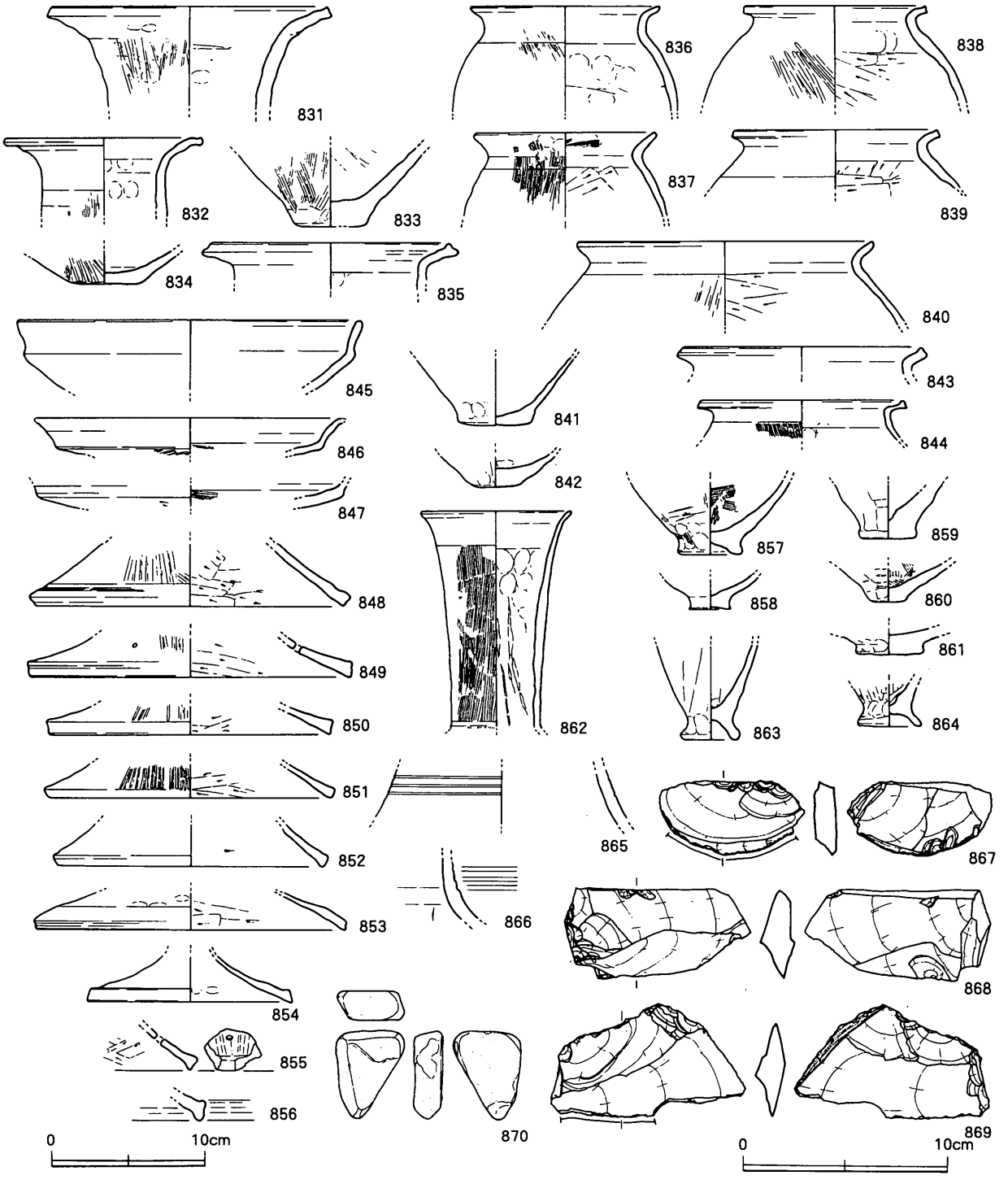
第133図　ＳＨＩ02平・断面図２（S=1/80）

床面から底部までの深さは、Ｐ７－0.30ｍ、Ｐ８－0.35ｍ、Ｐ９－0.30ｍ、Ｐ10－0.20ｍである。さらにＰ11～14の柱穴も確認できる。上位床面は貼床（６層）により形成される。

上位床面では、下位床面の柱穴のうちＰ１・３・４・６・10・11が確認されている。このうちＰ１・３・４・６は下位床面の主柱穴を構成するものであり、おそらく上位床面の主柱穴は下位床面の主柱穴Ｐ１～６を踏襲したもので、Ｐ２・５については調査時に未検出であったとするのが妥当であろう。

住居主軸のやや南寄りには楕円形の平面形を有する土坑Ｋ２が認められる。Ｋ２の埋土は、炭化物が充填される下層（３層）と、炭化物を含む灰色細砂層で構成される上層（２層）からなる。

出土遺物　831～834・841・842は白色系の壺。831の断面は、器面から1.0～1.5mm程度を除いて黒化層で占められる。摩滅が激しく、内面の一部は器壁剥落のため黒化層が露出している。834・841・842も同様に、断面に黒化層が看取され摩滅が著しい。835は胎土に黒雲母を多量に



第134図　ＳＨＩ02出土遺物実測図（S=1/4・1/3）

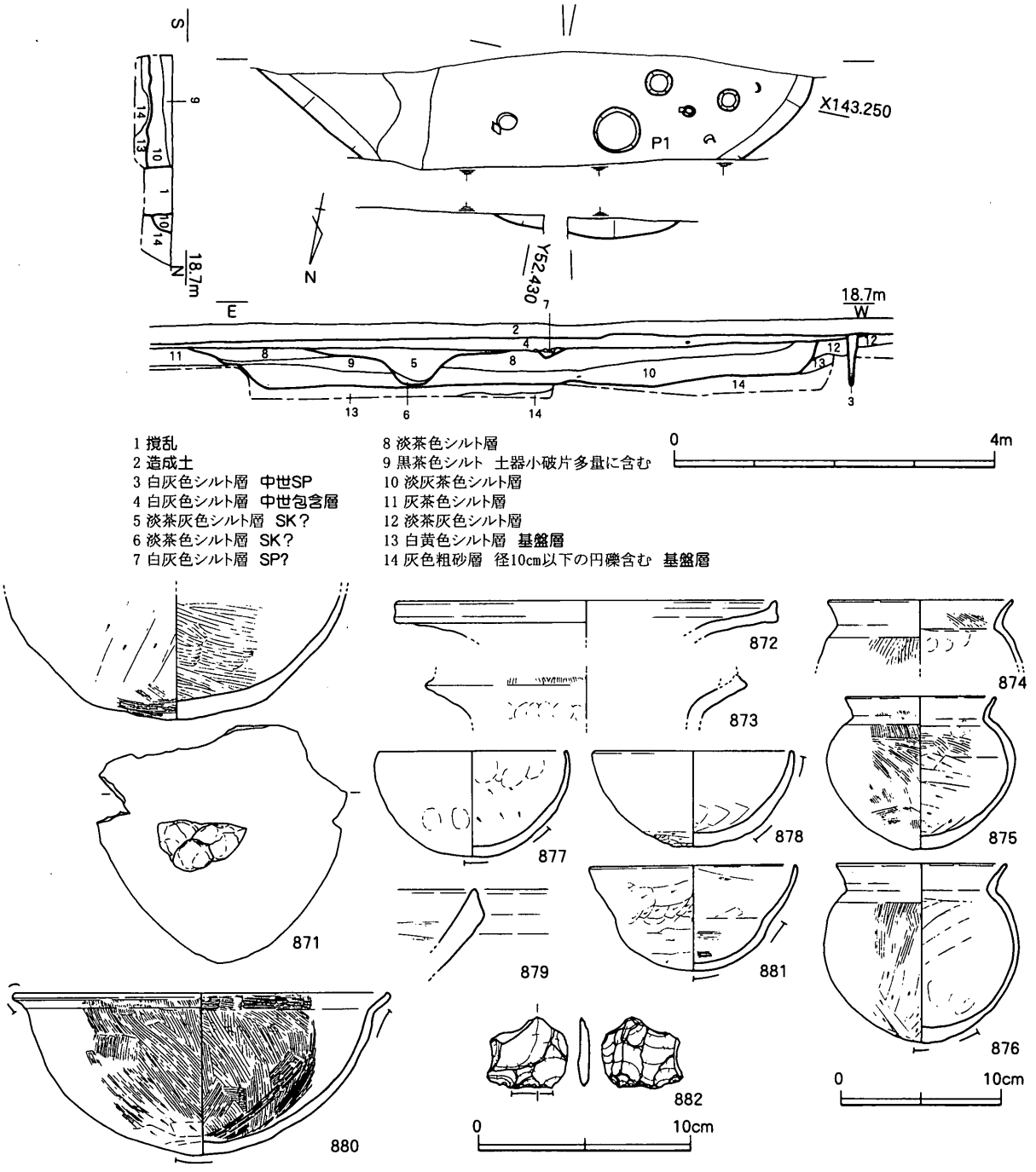
含み、にぶい橙色を呈する壺。836～839は白色系の甕。836の断面には一部黒化層が確認できる。840・843の甕は、にぶい橙色を呈し胎土に黒雲母が多く含まれる。840の断面には器面から1.0～1.5mm程度を除いて黒化層が存在する。844は香東川下流域産の甕。845～855は、胎土中に黒雲母を多量に含み、にぶい橙色を呈する高杯。856は白色系の高杯。断面には器面から1.0～1.5mm程度を除いて黒化層が明瞭に認められる。857～861は白色系の鉢。摩滅が激しい861の断面にはやや焼成不良の部分が残る。細頸壺862はにぶい橙色を呈し、胎土には多量の黒雲母と少量の角閃石を含む。863・864は製塩土器。863は白色系、864は胎土に黒雲母が多量に含まれ、にぶい橙色を呈するもの。865・866は頸部に沈線を有する前期末～中期初頭の壺。867～869はサ

ヌカイト製のスクレイパー。870は用途不明の砂岩製石製品。

時期　出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。やや古い時期を示す844は混入と考えたい。

ＳＨＩ03（発掘調査時遺構名：Ｉ－６区ＳＨ03）

Ｉ－６区南西部での検出。中央土坑や確実な主柱穴等は確認されなかったが、明瞭な掘り込みが認められるため竪穴住居であると判断した。本竪穴住居の大部分は調査区外にあたるため平面形や規模は不明であるが、北辺に直線的な上端のラインがあることから方形の平面形が考えられる。ただしそうした場合、西辺ラインが調査区南壁と接する部分でやや孤を描く点について疑問が残るが、現時点では検証不可能である。

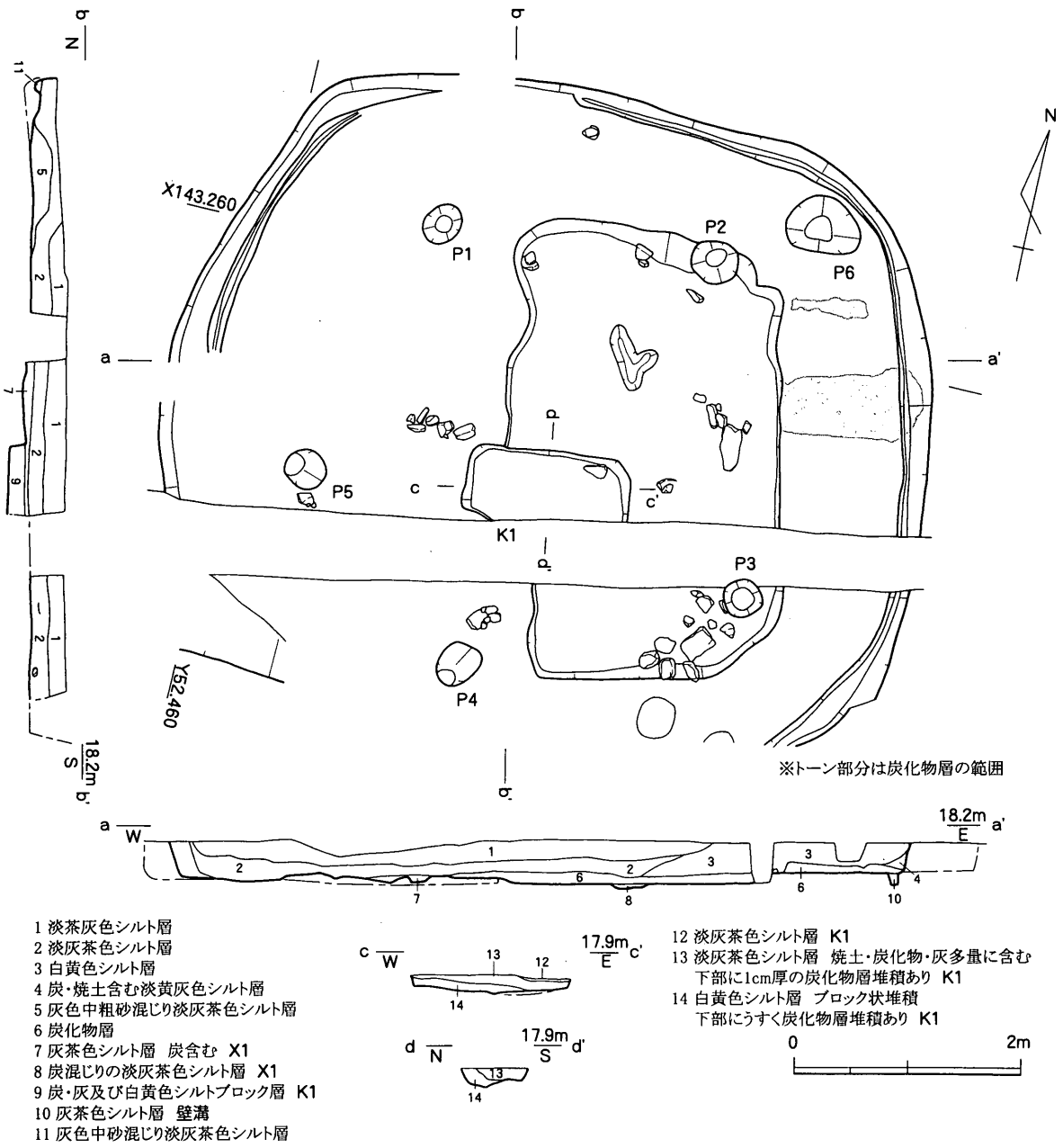


第135図　ＳＨＩ03平・断面図（S=1/80）、出土遺物実測図（S=1/4・1/3）

本竪穴住居の平面形が方形であるとすれば、床面で検出した４基の柱穴のうちＰ１（住居底部からの深さ 0.10 m）のみが主柱穴を構成する柱穴であろう。しかし、この点についても平面形態同様確証はない。なお、壁溝は存在しない。

埋土は上下２層に分かれ、上層は土器小破片を大量に含む。ある程度埋没した後（10 層埋没後）、廃棄物とともに埋め戻しが行われたか、もしくは窪みを利用した廃棄箇所となっていたことが推測される。ただし土層観察記録によれば、埋土はブロックを含まないため、埋め戻しが実施されたとは断定できない。

出土遺物　871 ～ 873 は壺。871 は、底部外面に複数隣接する不定円形の剥離が認められる。断面には部分的に黒化層が観察される。872・873 はにぶい褐色を呈する広口壺口縁部。胎土には多量の黒雲母が含まれ、872 については角閃石も少量含まれる。874 ～ 876 は胴部最大径が上半にあるものの、全体的には球形化している甕。いずれも色調はにぶい褐色で、黒雲母を多く含有する胎



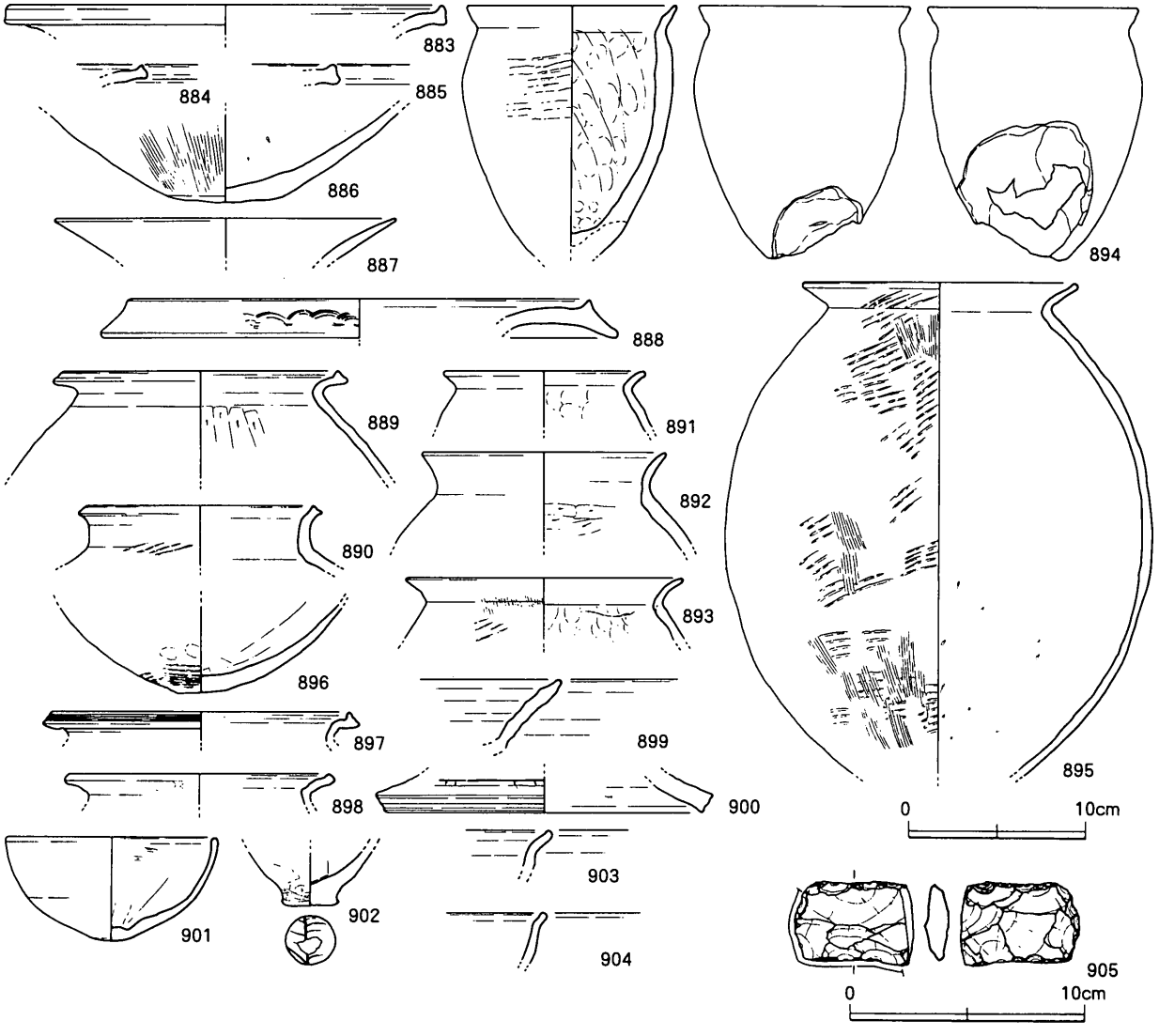
第 136 図　ＳＨＩ 04 平・断面図（S=1/60）

土で構成される。白色系の鉢である877・878の外面は、仕上げの調整が甘いためか絞り目が明瞭に残る。対して内面は、板ナデ・ヘラケズリ等によって丁寧な仕上げが認められる。877・878ともに、断面には器壁から0.5～1.0mm程度を除いて黒化層が確認される。また黒班は、一方の底部から胴部上半部にかけて認められる。879の鉢は、通常の白色系のものに比べて胎土に含まれる石英の粒径が大きい。880は内外面に密にハケが施される白色系の鉢。外面下半部にはハケが及ばないため、先行するヘラケズリが残る。黒班は、外面の底部から口縁部直下にかけてと、それとは反対側の口縁部に認められる。断面には黒化層が確認される。881の鉢はにぶい橙色を呈し、胎土に含まれる黒雲母は非常に多い。882は細かな剥離が施されているサヌカイト製剥片。一部に摩耗痕が看取されるが、この部分が意識して作出された刃部であるとは言い難い。

時期　出土遺物から古墳時代前期初頭に位置付けられる。

ＳＨＩ04（発掘調査時遺構名：Ｉ－７区ＳＸ01・ＳＨ04　概報遺構名：ＳＨ17）

Ｉ－６区南端部中央で検出された竪穴住居。東西軸長は6.8ｍ、南北軸長は、住居全体を検出していないため確実ではないが、おそらく6.3ｍ程度と思われる。



第137図　ＳＨＩ04出土遺物実測図（S=1/4・1/3）

平面形は、後述するように主柱穴が５基であることからも、五角形である可能性もある。周囲には壁溝が巡る。

中軸より東側にある落ち込み部分により、東辺沿い及び南北辺の東寄り部分が相対的に高くなり、ベッド状遺構となっている。

主柱穴はＰ１～５の５基で、住居床面から柱穴底部までの深さはＰ１－0.05ｍ、Ｐ２－0.30ｍ、Ｐ３－0.40ｍ、Ｐ４－0.50ｍ、Ｐ５－0.25ｍである。また、住居北東隅に柱穴Ｐ６（床面から底部までの深さ0.30ｍ）が認められる。中央部よりやや南の中軸上には、平面形が長方形の土坑Ｋ１が存在する。Ｋ１の埋土中には炭化物・焼土が多量に含まれる。

出土遺物　883～886は白色系の壺。886の断面には焼成不良の部分が看取され、特に内面は摩滅が著しい。887はにぶい褐色を呈する壺の口縁部片。胎土中には多量の黒雲母が含まれる。断面は、器面からのわずかな部分を除いて黒化層で占められ、激しい摩滅により内面は黒化層が露出している。888は壺もしくは器台。色調はにぶい褐色で、胎土には黒雲母の他にも角閃石がやや多めに認められる。889もにぶい橙色を呈し、多量の黒雲母と若干の角閃石を含む胎土で構成される甕。890～896は白色系の甕。892・893の断面には黒化層が存在する。894の底部外面には、不定形の剥離が複数隣接して認められる。断面には器壁から0.5～1.0mm程度を除いて黒化層が確認され、摩滅も顕著である。895はやや間延びした胴部をもつ白色系の甕。内面は摩滅しているが、断面に黒化層は存在しない。896は白色系の甕底部。摩滅は顕著である。897は後期初頭に比定される胎土１類を有する甕口縁部。898はにぶい褐色を呈する甕口縁部片。胎土にはやや粒径の大きな黒雲母を多く含む。899・900はにぶい褐色を呈する高杯。899は、胎土中に黒雲母の他に一定量の角閃石を含む。900は、壺口縁部の可能性も考えられる。901～904は白色系の鉢。902の底部外面には葉脈痕が残る。905はサヌカイト製剥片。実測図上の右側縁部は両極打法により切断されている。また、左側縁部から下側の縁部にかけて摩耗痕が確認できる。

時期　やや古い時期を示すものもあるが、出土遺物全体の傾向から古墳時代前期初頭と考えられる。

ＳＨＩ05（発掘調査時遺構名：Ｉ－７区ＳＨ01、Ｉ－19区ＳＨ01　概報遺構名：ＳＨ19）

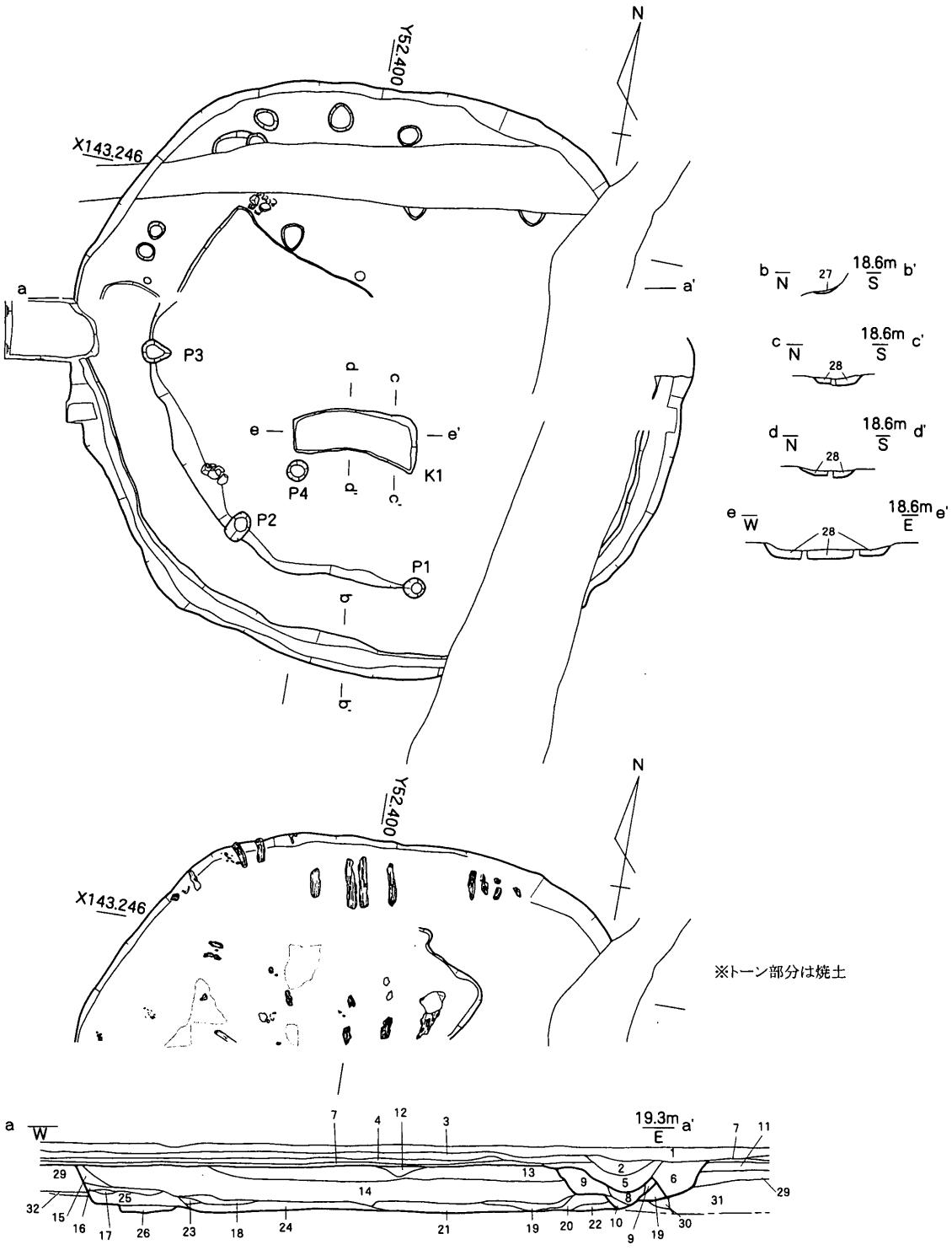
Ｉ－７区からＩ－19区にかけて検出した円形の竪穴住居。住居の東部は中世の溝によって、北部の一部は現代の鉄製管埋設に伴う撹乱によって破壊されている。住居の規模は7.8ｍ×7.2ｍ。

本住居はいわゆる焼失住居で、床面上には垂木と考えられる炭化材と焼土が認められる。住居南半部には周溝が巡り、北西部から南部の周囲にはベッド状遺構が存在する。

住居床面で柱穴が複数確認されているが、うちＰ１～３の３基のみが主柱穴と考えられる。とすれば主柱穴は、本来は６基からなる可能性が高く、残り３基は北部の撹乱および、中世溝によって破壊されていると思われる。各主柱穴の住居床面から柱穴底部までの深さは、Ｐ１－0.10ｍ、Ｐ２－0.10ｍ、Ｐ３－0.10ｍである。なお、主柱穴を構成しない柱穴（小穴）の埋土は暗茶褐色粘質土である。

中軸のやや南には平面形長方形の土坑Ｋ１が存在するが、埋土中に炭化物は確認できない。

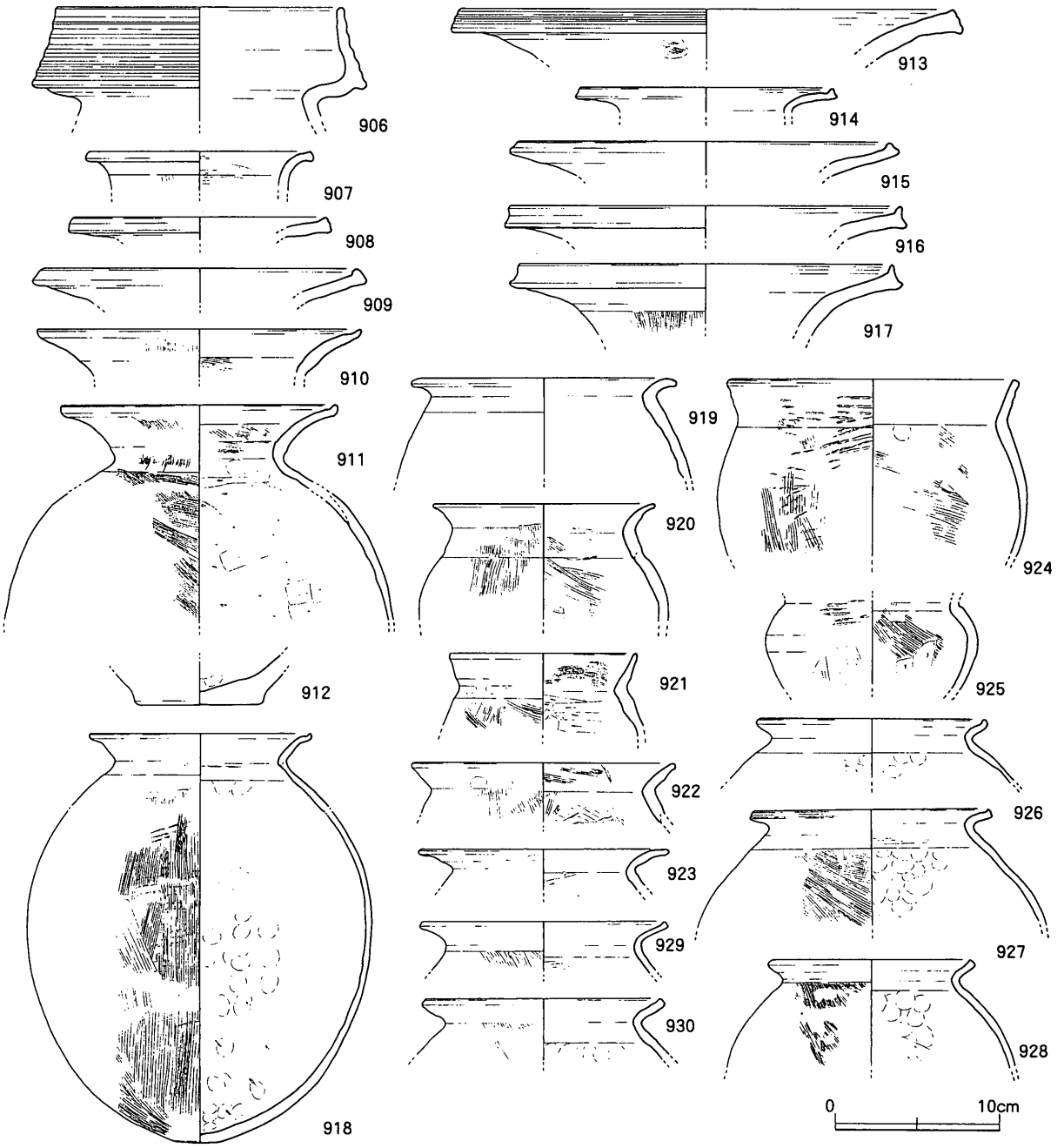
出土遺物　906～912は白色系の壺。906の口縁部外面には６条の凹線文が施されている。摩滅が著しいが、断面に黒化層は確認されない。912はやや粒径の大きな石英が胎土に含まれる。底部



1 造成土
2 暗灰色粘質土層
3 旧耕作土
4 旧耕作土
5 淡灰色粘質土層
6 褐色砂礫層 径2～10cmの礫含む
7 床土
8 暗灰茶色砂混じり粘質土層 SD
9 灰茶色砂混じり粘質土層 Mn含む SD
10 灰黄色粘質土層 SD
11 灰茶色粘質土層 Mn含む
12 灰色砂質土層
13 黒茶色粘質土層
14 茶褐色粘質土層
15 褐色砂混じり粘質土層
16 暗灰色粘土層 炭化物多量に含む
17 焼土層
18 暗茶色粘質土層
19 暗灰色粘土層 炭化物多量に含む
20 焼土層
21 暗茶色粘質土層
22 黄灰色粘質土層
23 暗茶灰色粘質土層
24 暗灰色粘土層 炭化物多量に含む
25 暗茶褐色粘質土層
26 暗茶灰色粘質土層
27 黄灰色粘質土層 壁溝
28 灰褐色粘質土層 K1
29 黄褐色粘質土層 基盤層
30 灰褐色粘質土層 基盤層
31 褐色砂礫層 径2～10cmの礫含む 基盤層
32 茶色砂質土層 基盤層

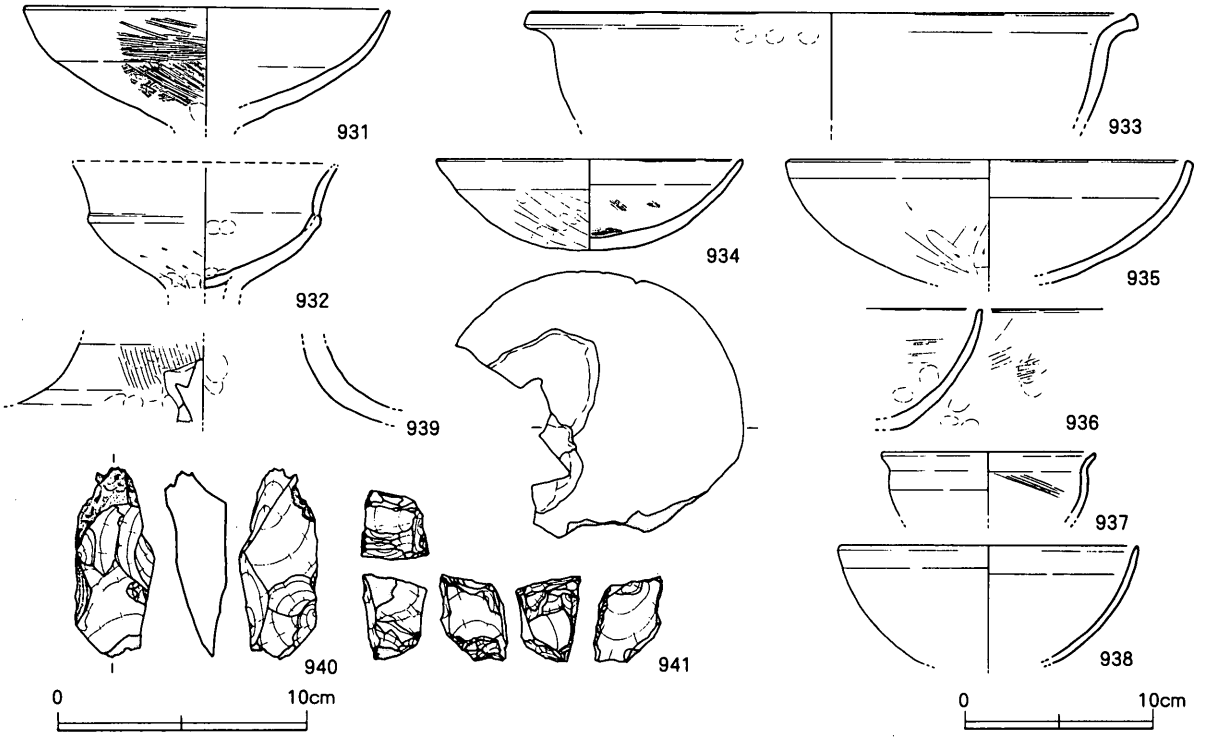
0 4m

第138図 ＳＨＩ05平・断面図（S=1/80）



第139図　ＳＨＩ05出土遺物実測図１（S=1/4）

片のためか、断面の一部にはやや焼成不良の箇所がある。913～917は、にぶい褐色を呈し、胎土中に多量の黒雲母を含む壺。915の胎土には角閃石も少量確認される。918・919は白色系の甕。内面は摩滅しているが、断面に黒化層は存在しない。920は胎土中に黒雲母を含み、にぶい褐色を呈する甕。ただし、通常の香東川下流域産系譜のものに比べてやや黒雲母の粒径が小さく、含有量もやや少ないように思える。器壁が厚く、口縁部が緩く外反するなど形態も大きく異なる。921～927は白色系の甕。921・922の断面には黒化層が看取される。928～930の甕口縁部片は、多量の黒雲母を含む胎土をもち、色調がにぶい褐色のもの。931は白色系の高杯もしくは台付鉢。摩滅がかなり激しい。932は台付鉢。933～938は鉢。933～937は白色系の鉢。934の底部外面には隣接する２つの不定円形剥離が認められる。また、934･937の断面には黒化層が存在する。939は器種不明の脚部片。色調はにぶい褐色で、多量の黒雲母と若干の角閃石を含む胎土を有する。折



第140図　ＳＨＩ05出土遺物実測図２（S=1/4・1/3）

損面に隣接するため確実ではないが、不定形の透かしを有する可能性がある。また、外面には条間の広いハケが施される。940・941はサヌカイト製の石製品。940には明確な使用痕が確認されず、用途は不明である。941は、左右両側縁が両極打法により折られることで柱状の剥片となり、その後、上下端部が剥離されている。明確な刃部や使用痕が認められないことから、剥片作出のための石核としておきたい。

時期　出土遺物から古墳時代前期初頭と考えられる。

ＳＨＩ06（発掘調査時遺構名：Ｉ－７区ＳＨ04　概報遺構名：ＳＨ17）

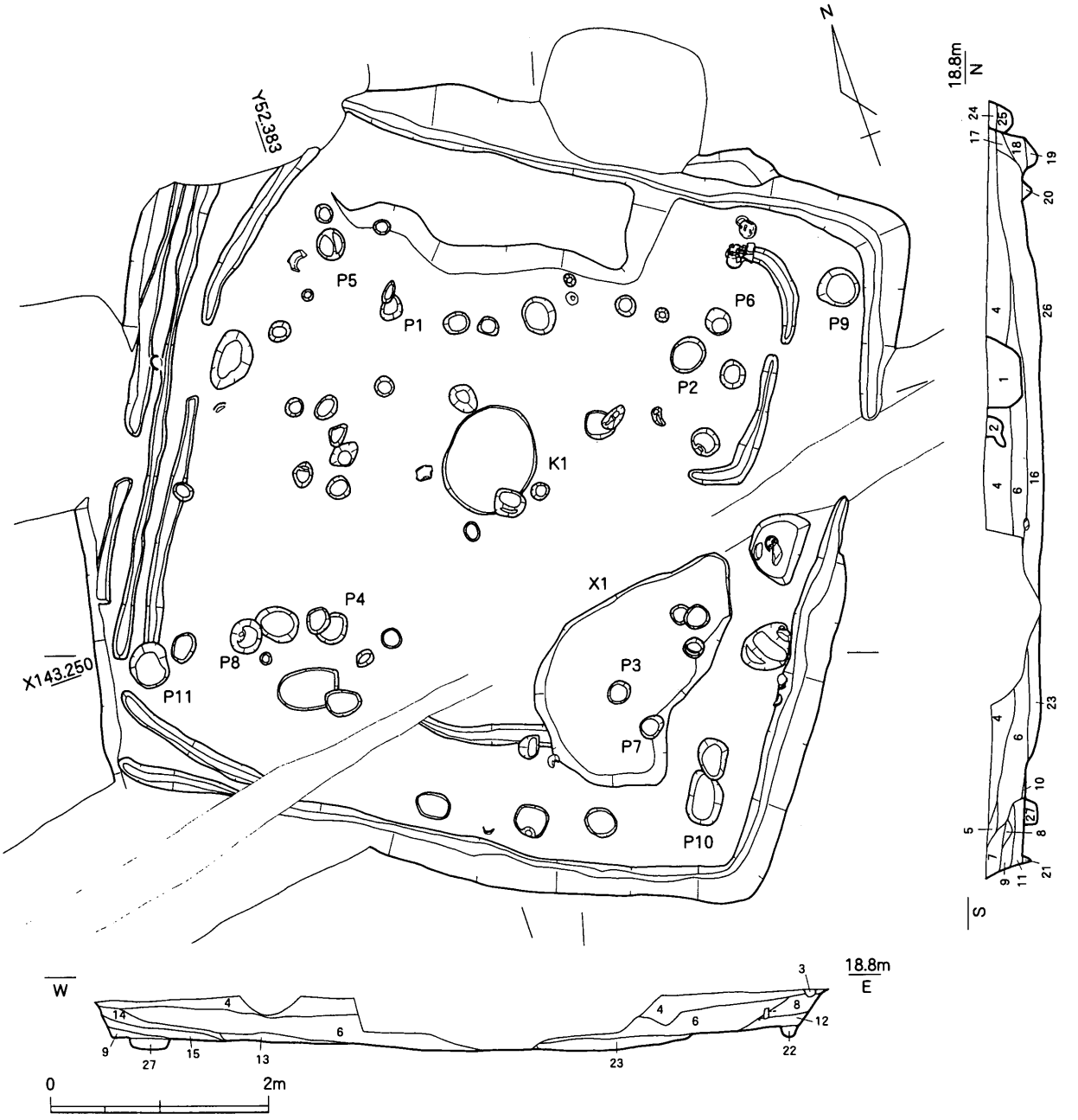
Ｉ－７区中央部で検出された方形の竪穴住居。埋土中には、東部を中心として多量の礫が含まれる。

四周には壁溝が巡るが、西辺には壁溝の内側に並行して２条の溝が認められる。壁溝の埋土は灰褐色粘質土である。

床面では多数の柱穴（小穴）が検出されたが、確実に竪穴住居に伴うものは、主柱穴を構成すると思われるＰ１～４、もしくはＰ５～８のいずれかと、残存する３コーナーに認められるＰ９～11の３基のみである。その他多くの柱穴については、確実に本竪穴住居に伴うものか疑わしい。主柱穴および主柱穴を構成しない柱穴（小穴）埋土は黒褐色粘質土である。

同じく黒褐色粘質土の埋土を有する中央部分の土坑Ｋ１は、明瞭な落ち込みを持たず、いわゆる炉などの機能を想定することは困難である。

北東部辺には、若干の高まりを有するベッド状遺構が確認できる。また、南コーナー部分には、黒色粘土層が堆積した落ち込みが見られる（Ｘ１）。写真で判断する限り、この落ち込みより南のコーナー部分はやや高くなり、そこから東、西に向かってそれぞれ緩やかに下がることから、高い部分をベッド状遺構とも捉えることも可能である。この高まりとＸ１底面には約0.15ｍの高低差が

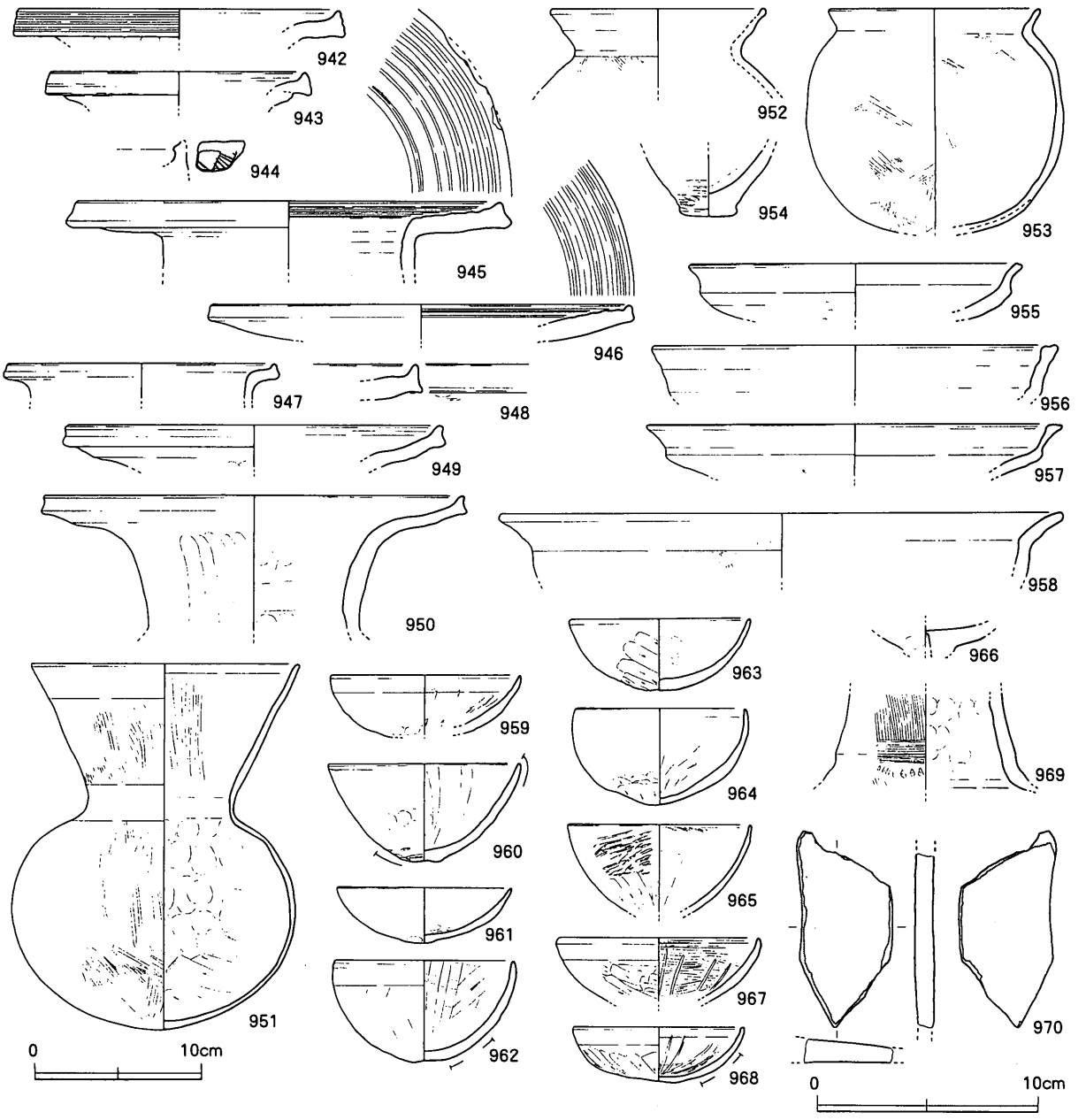


1 茶色粘質土層 SP？
2 灰褐色砂質土層 SP？
3 灰褐色砂質土層
4 暗茶褐色粘質土質
5 暗茶色砂混じり粘質土層
6 黒褐色粘土層 土器多量に含む
7 暗茶色粘質土層
8 暗茶褐色粘土層
9 褐色砂質土層
10 灰褐色粘質土層
11 暗茶褐色粘土層
12 褐色粘質土層
13 黄灰色粘質土層
黒褐色粘土層ブロック含む
14 茶灰色砂質土層
15 灰褐色砂質土層
16 黒褐色粘質土層
土器多量に含む
17 暗茶褐色粘質土層
18 暗茶褐色砂混じり粘質土層
19 灰褐色粘質土層
20 黒灰色粘質土層 壁溝
21 灰褐色粘質土層 壁溝
22 茶灰色粘質土層
23 黒色粘土層 X1
24 褐色粘質土層 SP?
25 暗茶褐色粘土層 SP?
26 黄褐色粘土層
27 暗灰色粘質土層 P

第141図 ＳＨＩ06平・断面図（S=1/60）

認められるが、Ｘ１底面とその北部の床面との高低差はほとんど見られない。よってＸ１は、その南部コーナーの高まり部分と床面との高低差を示すもので、平面図で表現されているような落ち込みとはやや異なるものと思われる。

出土遺物 942～944は白色系の壺口縁部片。943の外面口縁端部直下には接合痕が残る。また、断面には黒化層が看取される。944の外面には鋸歯文が描かれている。945～950はにぶい褐色を



第142図　ＳＨＩ06出土遺物実測図（S=1/4・1/3）

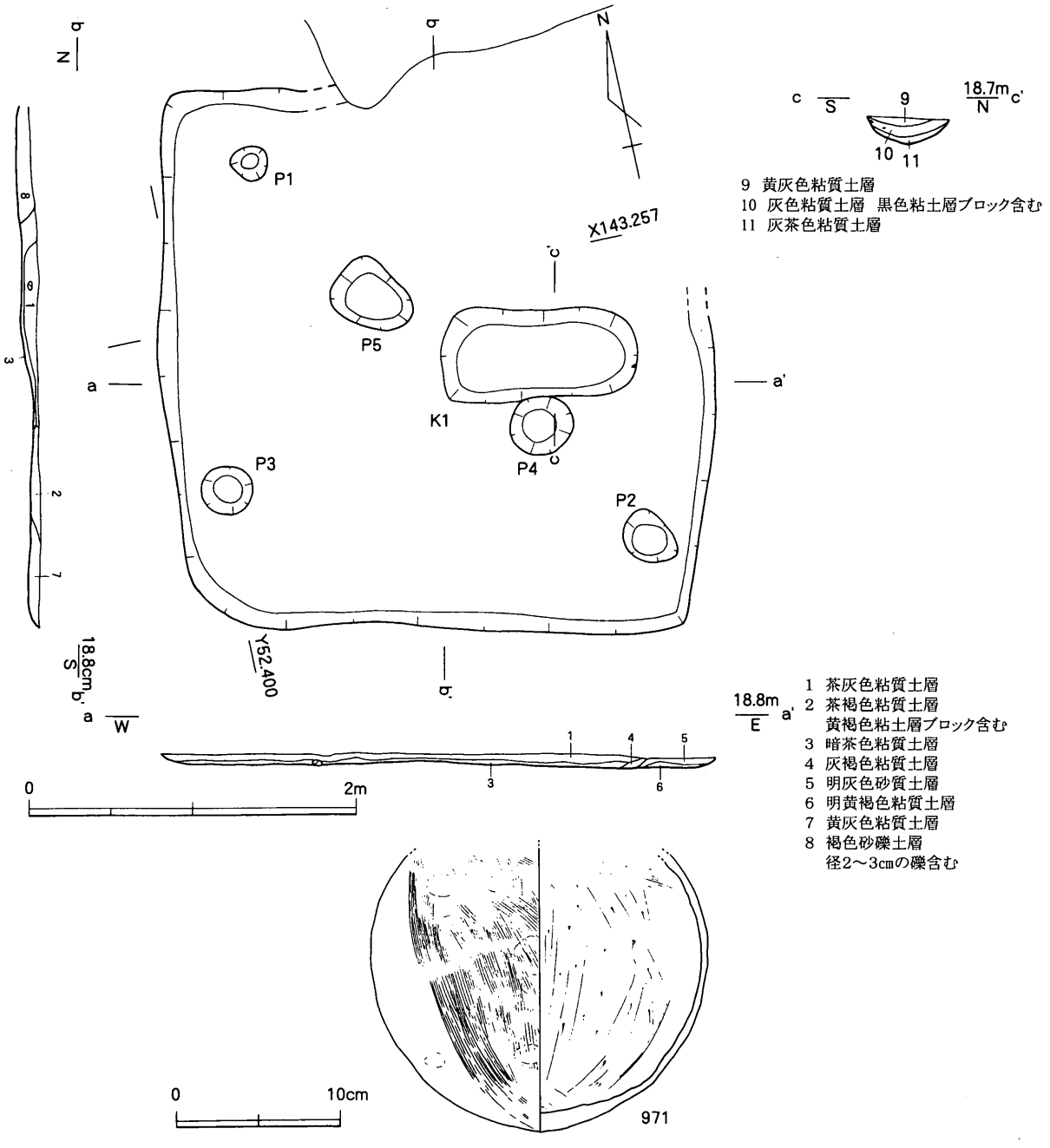
呈し、胎土に多量の黒雲母を含む壺。945の断面にはやや焼成不良の部分が見られる。950は香東川下流域産の広口壺。951は白色系の直口壺。頸胴部境と口縁部に横ナデが確認できる。焼成は良好である。952・953は白色系の甕。磨滅が顕著な952の内面は黒化層が露出している。白色系の甕、もしくは鉢である954も断面には黒化層が認められる。955～957の高杯は、いずれもにぶい褐色を呈し、胎土中に多量の黒雲母が確認できる。957にはわずかに角閃石も含まれる。958は白色系の鉢。断面には、器面から1.0～2.0mm程度を除いて黒化層が存在し、激しい摩滅によりその黒化層が露出している部分もある。959～967は白色系の鉢。959の断面は、器面からごくわずかな部分を除いて黒化層で占められる。また、摩滅が顕著なため、器壁の大半は剥落して黒化層が露出している。960の外面には、底部から口縁端部まで細長い黒班が確認できる。完形品である961は、一部器面に黒化層が露出しているが、断面観察が不可能であるため、断面のうち黒化層の占める割合は不明である。962の底部に近い胴部下半部には黒班がある。963の断面には一部焼成

不良の部分が看取される。964は内面に黒班が存在する。底部片966の外面中央部には内面まで貫通しない窪みが認められる。967･968はにぶい褐色を呈し、胎土中に黒雲母が含まれる鉢。外面がヘラケズリにより成形される点は963～965と同様である。968の胴部下半部には黒班が確認される。969は頸胴部境に沈線文を有する前期末～中期初頭の壺。胎土は弥生時代後期中葉以降に認められる白色系のものに類似する。970は石材不明の石製品。石材中には少量の黒雲母が含まれる。面積が広い2面に研磨痕らしきものが確認される。

時期　出土遺物から古墳時代前期初頭と考えられる。

ＳＨＩ07（発掘調査時遺構名：Ｉ－７区ＳＸ03）

Ｉ－７区東部で検出された、6.8ｍ×6.4ｍの平面形が方形の竪穴住居である。北東部は撹乱によ



第143図　ＳＨＩ07平・断面図（S=1/40）、出土遺物実測図（S=1/4）

り破壊されている。

住居埋土のうち底部付近の６層については、黄褐色粘土（基盤層か）ブロックを含むことから貼床である可能性もある。

Ｐ１～３の３基が主柱穴と考えられ、それぞれの柱穴の住居底面からの深さはＰ１－0.10ｍ、Ｐ２－0.15ｍ、Ｐ３－0.10ｍである。

住居中央部のやや東よりには長方形の土坑Ｋ１が認められるが、埋土中に炭化物・焼土は含まない。Ｋ１の南には隣接して小穴（柱穴）Ｐ４（住居床面から底部までの深さ0.10ｍ）が存在するが、Ｋ１に伴うものか否かについては判断できない。

また、住居中央部からやや北西よりには柱穴Ｐ５（住居床面から底部までの深さ0.10ｍ）がある。

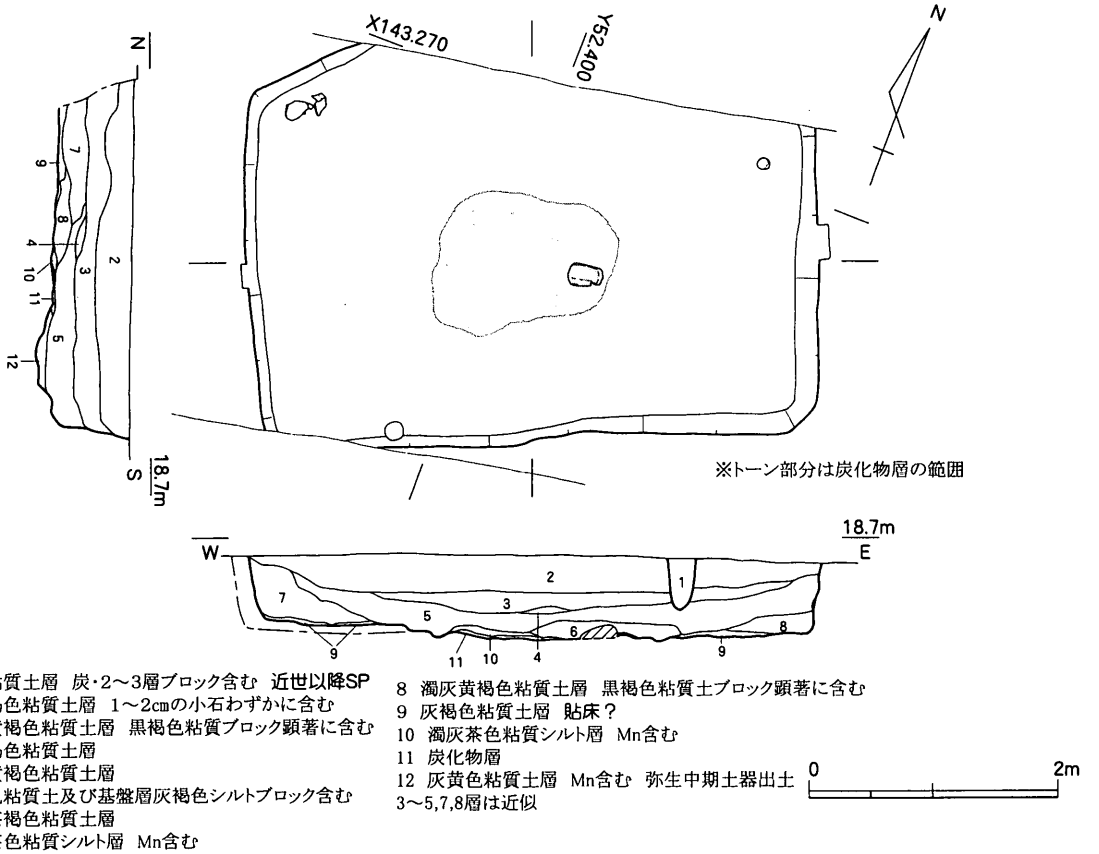
出土遺物　971はＫ１直上から出土した白色系の甕。底部は丸く、全体的に球形に近い。内面の色調は全体的に暗灰色を呈するが、断面には黒化層が見られず、焼成は良好である。

時期　出土遺物の底部形状から古墳時代前期初頭と考えられる。

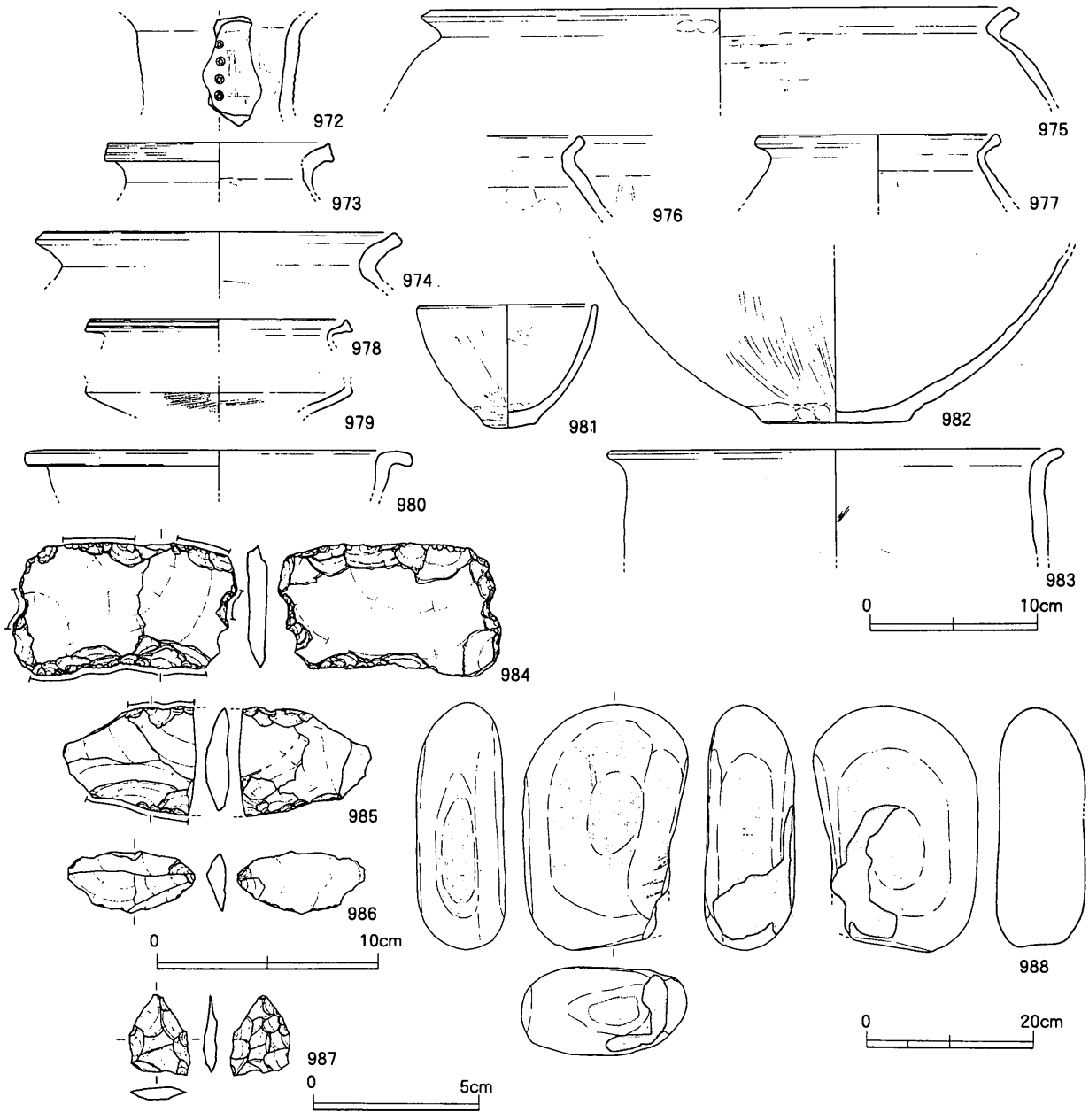
ＳＨＩ08（発掘調査時遺構名：Ｉ－12区ＳＨ01　概報遺構名：ＳＨ48）

Ｉ－12区西部で検出された方形の竪穴住居。北東－南西軸長は9.2ｍ、北西－南東軸長は、全体を検出していないため不明であるが、6.8ｍ程度であると思われる。検出面から住居床面までの深さは0.6ｍと、残存状況は比較的良好である。

主柱穴は確認されていないが、平面形と壁面の立ち上がりが垂直に近いことから竪穴住居とした。なお、主柱穴が検出されていないのは、周辺の基盤層が礫層であることにより、検出が困難であったためと思われる。



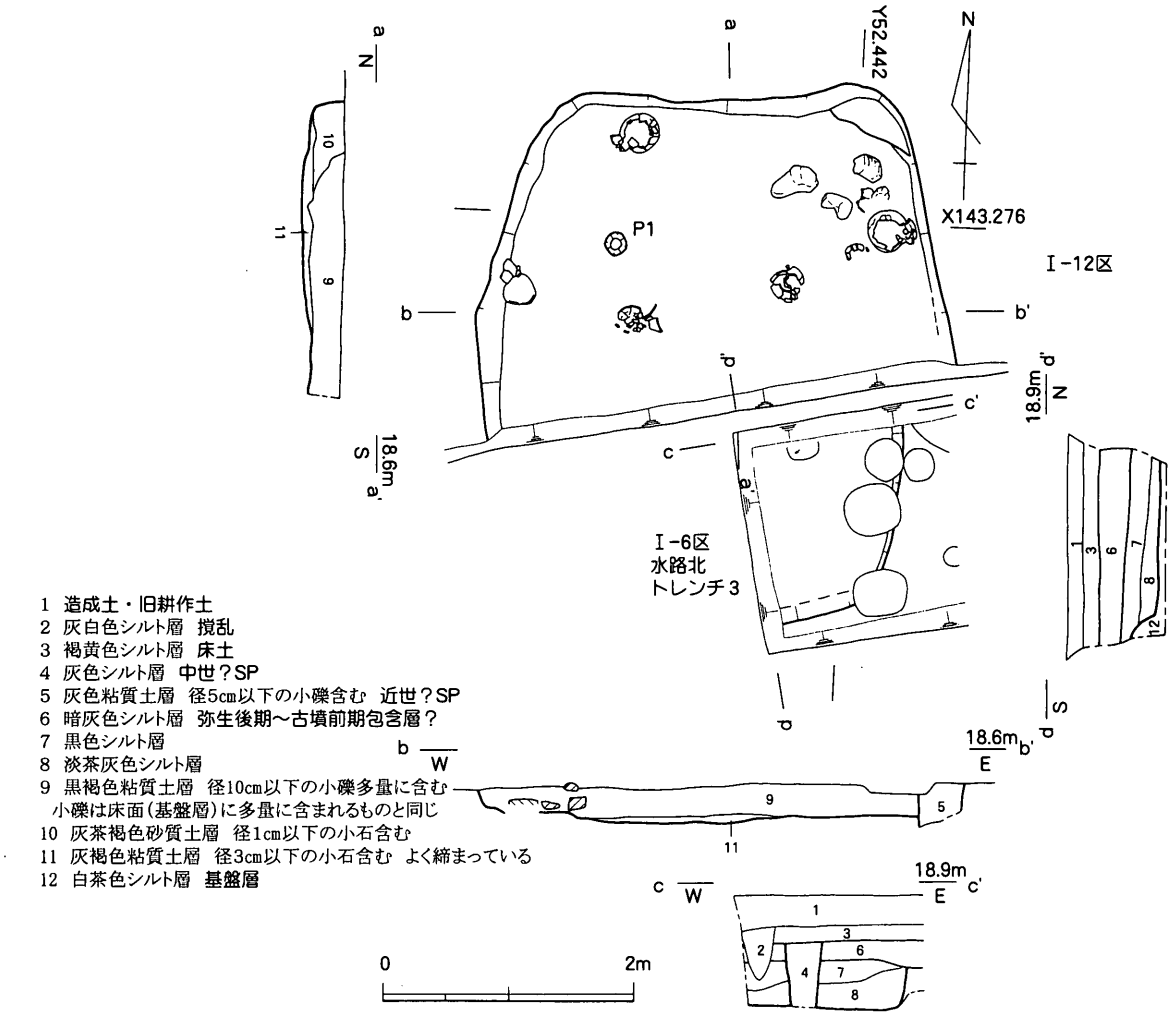
第144図　ＳＨＩ08平・断面図（S=1/60）



第145図　ＳＨＩ08出土遺物実測図（S=1/4・1/3・1/8・1/2）

住居床面の中央部には炭化物層が広がっているが、その下面に炉と考えられるような遺構は認められない。

出土遺物　972は頸部に刺突文が施された壺。胎土に細かな黒雲母と角閃石を含む。973は弥生時代後期初頭の胎土１類の甕口縁部。974～977は白色系の甕。摩滅が顕著である974～976の断面には黒化層が認められる。978は香東川下流域産の甕。979は香東川下流域産高杯。980･981は白色系の鉢。両者ともに摩滅が激しく、器面の剥落により断面に確認される黒化層が露出している。982は弥生時代前期の壺底部。983も弥生時代前期に位置付けられる如意形口縁を有する甕。摩滅が著しいが、外面にはハケの痕跡がわずかに確認できる。984はサヌカイト製石包丁。腹面に残る剥離面からは、本資料と同程度の大きさの剥片が作出されたことが想定され、定型的な剥片剥離技術による剥片を素材としている可能性がある。ただし、背面には上方からの、腹面には左下および左上からの剥離方向が確認され、剥片作出は連続する一定方向からの剥離によるものではない。



第146図　ＳＨＩ09平・断面図（S=1/60）

985・986はサヌカイト製のスクレイパー。985の右側面には両極打法による折れが確認できる。986は、上下縁辺部のエッジが鋭いものの、摩耗痕が認められないため単なる剥片である可能性もある。987はサヌカイト製石鏃。調整が粗いため未製品と考える。988は砂岩製の砥石。

時期　弥生時代前期の982・983および後期前葉に比定される972・973を除く出土遺物からは、弥生時代後期中葉と判断できる。

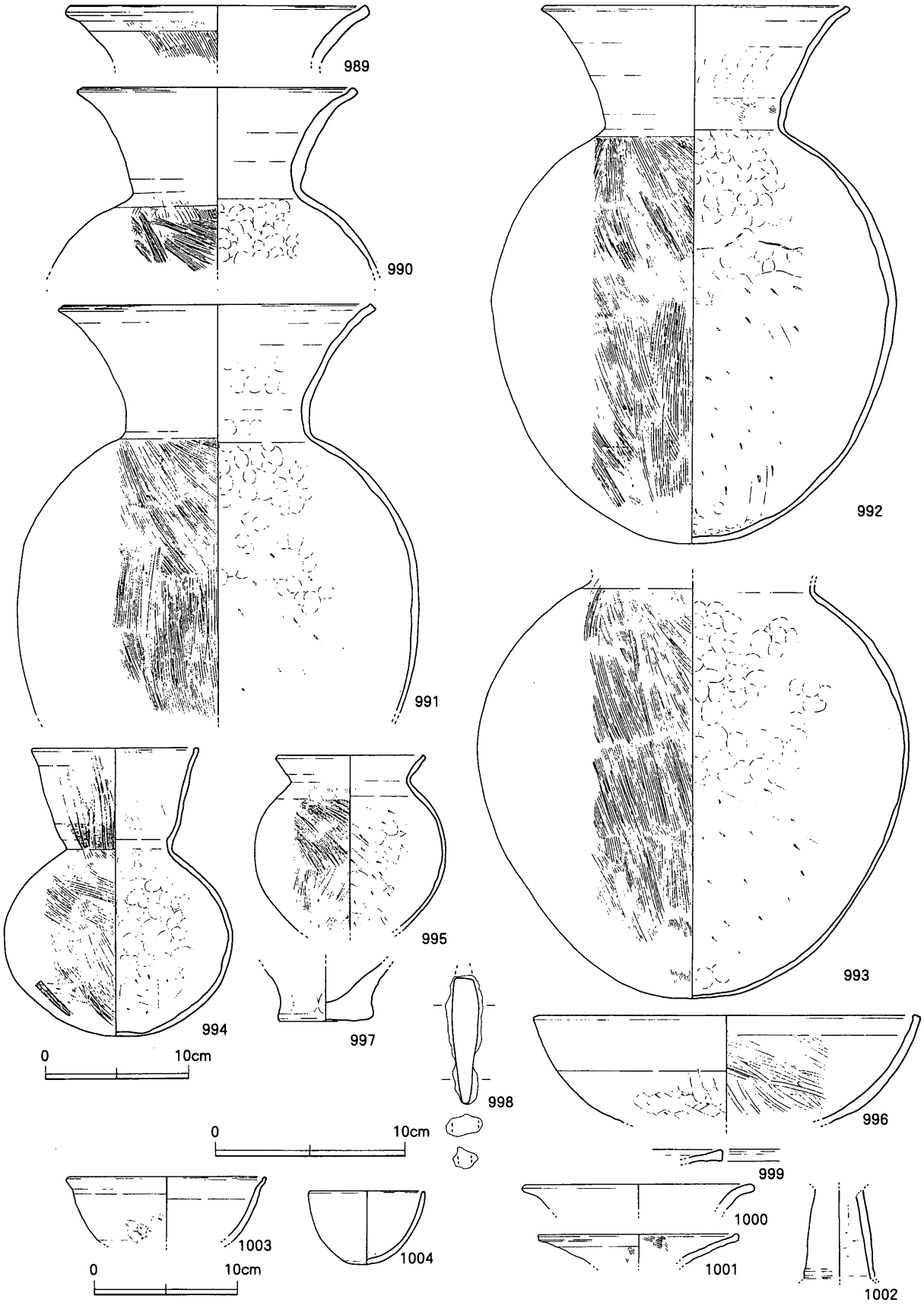
ＳＨＩ09（発掘調査時遺構名：Ｉ－12区ＳＨ02　概報遺構名：ＳＨ49）

Ｉ－12区からＩ－６区水路北トレンチ３にかけて検出された矩形の平面形を有する竪穴住居。当初（平成３年度）、Ｉ－６区水路北トレンチ３で部分的に確認し、その後（平成４年度）Ｉ－12区の調査で北半部を検出した。規模は長軸長4.1ｍ、短軸長3.7ｍである。検出面から床面までの深さは0.35ｍだが、埋土直上の層（６層）が包含層であることを考慮すれば、削平は被っていないものと思われる。

北半部で１基のみ確認できる柱穴Ｐ１は、主柱穴を構成するものと思われる。なお、住居底面から底部までの深さは不明である。

なお、北半部の床面直上からは完形に近い遺物が出土している。

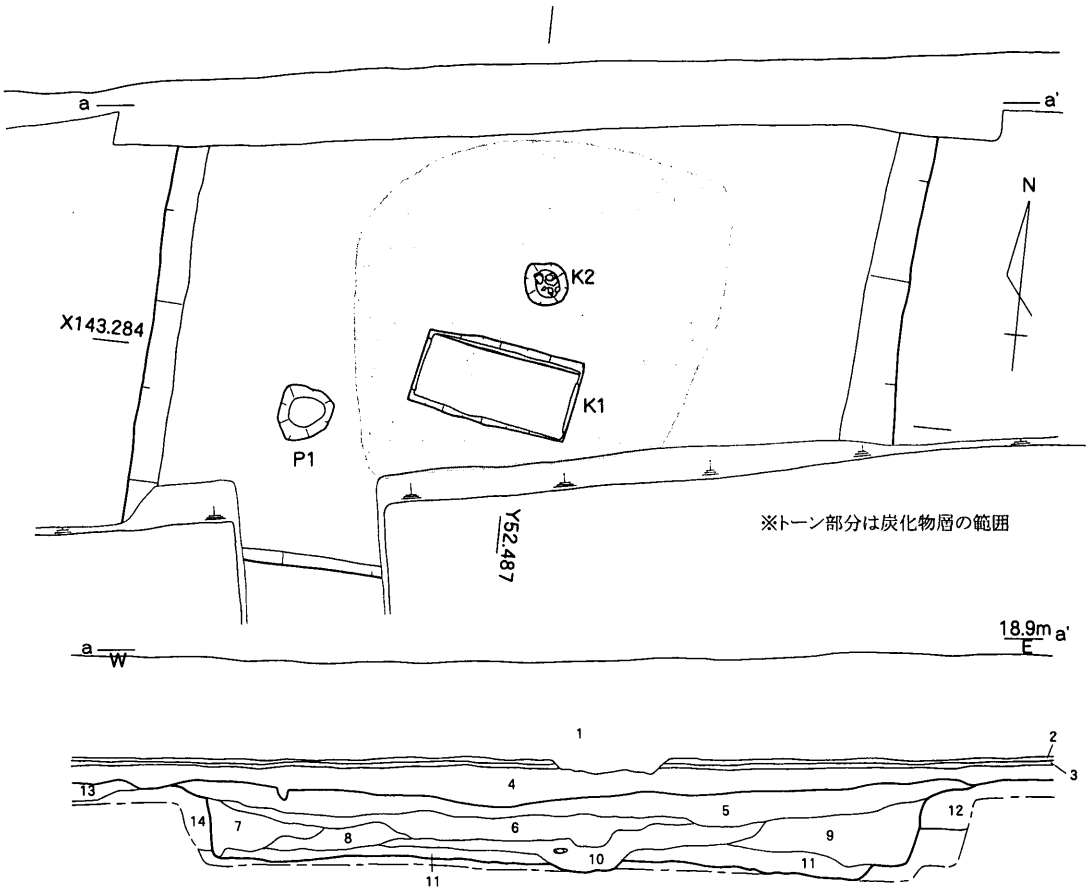
出土遺物　989～998はＩ－12区出土。989～993は壺。989は白色系に近い色調を有するが、胎土がやや精緻なように思える。990～993はにぶい褐色を呈し、多量の黒雲母を含む胎土を有す



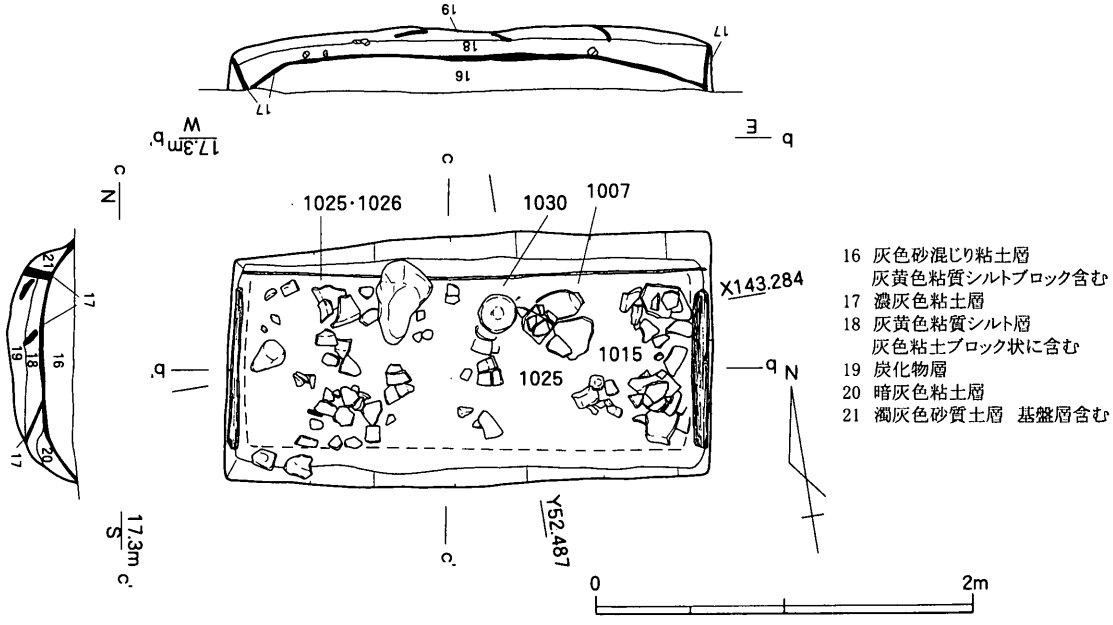
第147図　ＳＨＩ09出土遺物実測図（S=1/4・1/3）

る。990の胎土は角閃石をごくわずかに含む。994～996はにぶい橙色を呈するもの。994は直口壺、995は甕、996は鉢。997は弥生時代前期の甕底部片。998は器種不明の鉄製品。

999～1004はＩ－６水路北トレンチ３出土。999・1000は胎土に多量の黒雲母を含む壺。色調

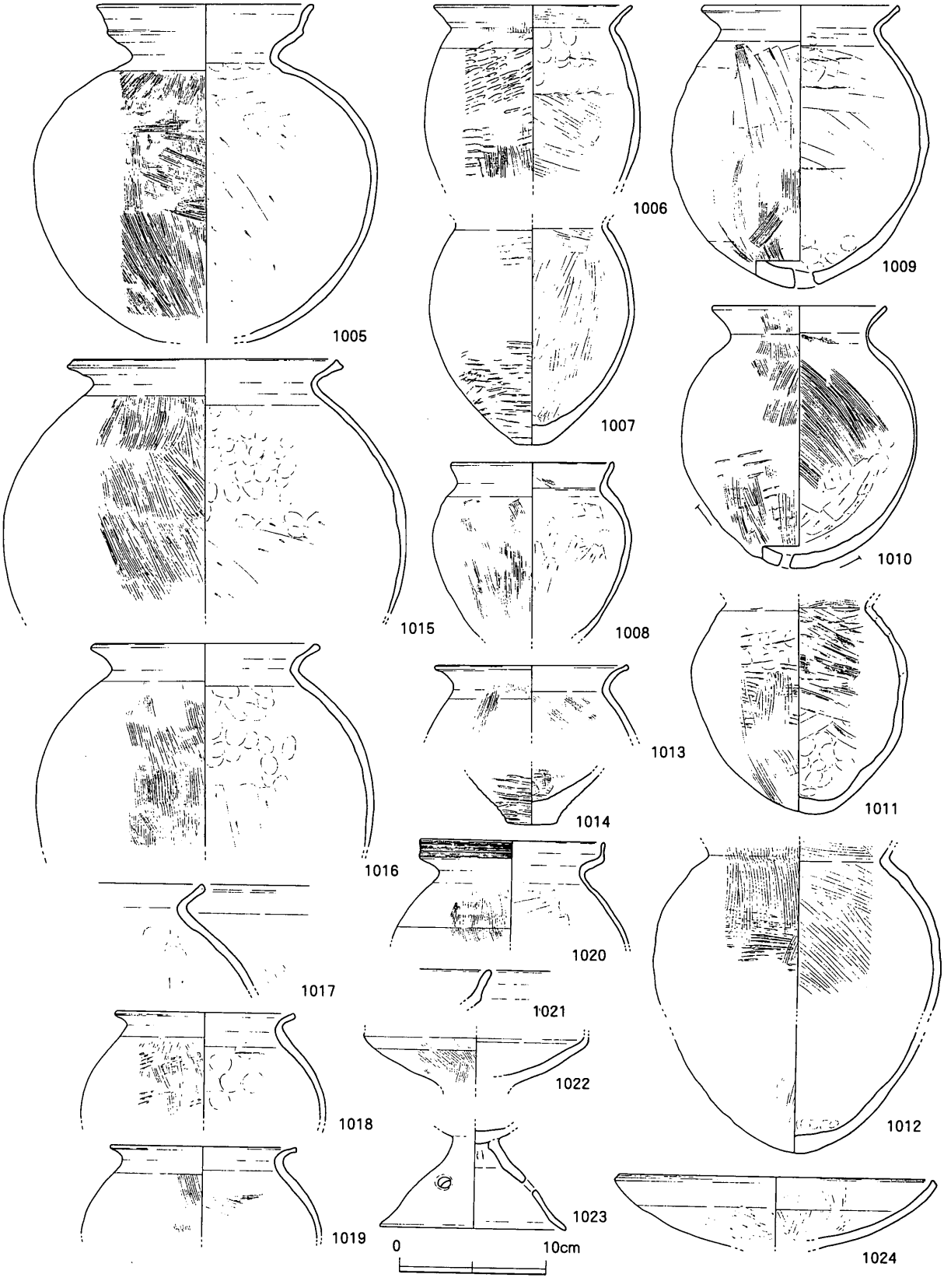


1 造成土・旧耕土
2 床土
3 灰褐色粘質土層 Mn 須恵器・弥生土器含む
4 黒褐色粘質土層 Mn 土器破片多量に含む
弥生後期～古墳前期包含層
5 灰茶褐色砂質シルト層 径1cm以下の小石多量に含む
土器少ない 6層に近似
6 灰褐色砂質シルト層 径1cm以下の小石多量に含む
土器少ない 5層に近似
7 暗灰色粘質土層 炭化物・土器多量に含む
8 灰色粗砂層 8層ブロック状に含む
9 茶褐色砂質シルト層 径1cm以下の小石多量に含む
10 灰色砂混じり粘土層 10cmの石礫含む
12層ブロック状に含む 土器多い
11 明灰色シルト層
濁灰色粗砂ラミナ・暗灰色シルトブロック状に含む
12 明灰茶色シルト層 基盤層
13 濁黒褐色粘質土層 Mn・16層ブロック含む 基盤層
14 黄色粘土層 基盤層
15 灰色粗砂層 基盤層



16 灰色砂混じり粘土層
灰黄色粘質シルトブロック含む
17 濃灰色粘土層
18 灰黄色粘質シルト層
灰色粘土ブロック状に含む
19 炭化物層
20 暗灰色粘土層
21 濁灰色砂質土層 基盤層含む

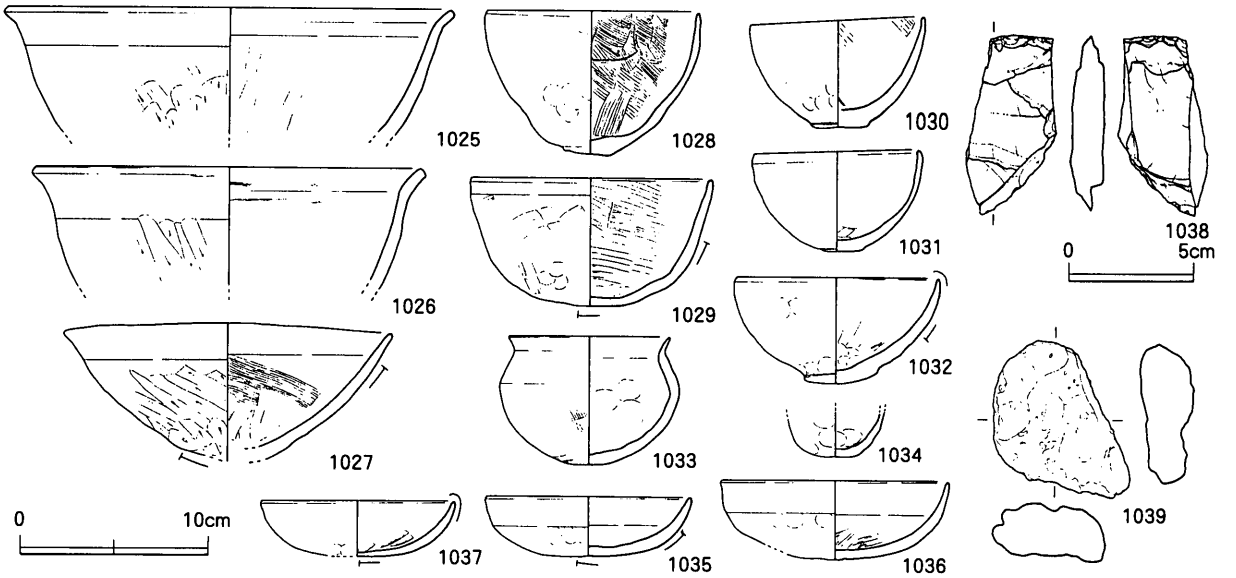
第148図 ＳＨＩ 10平・断面図（S=1/40）



第149図　ＳＨＩ10出土遺物実測図１（S=1/4）

はにぶい褐色。1001はにぶい橙色の壺の口縁部片。1002は白色系の高杯脚部片。1003・1004はにぶい橙色の鉢。

時期　出土遺物から古墳時代前期初頭と考えられる。



第150図　ＳＨＩ10出土遺物実測図２（S=1/4・1/3）

ＳＨＩ10（発掘調査時遺構名：Ｉ－12区ＳＸ01・ＳＨ05　概報遺構名：ＳＨ76）

Ｉ－12区西端部で検出された方形の竪穴住居。東西軸長は5.9ｍ、南北軸長は、住居北辺が検出されていないため不明である。検出面から床面までの深さは0.7ｍと残存状況は良好で、検出面の上層が弥生時代後期～古墳時代前期の包含層であることからすれば、ほとんど削平を被っていないものと考えられる。

底部近くの10・11層（下層）はブロック状の土を含み、埋め戻し行為が認められる。その直上の５・６層（上層）は埋め戻し土と断定できないため、ある程度時間をかけて堆積した土であるとも考えられる。最終的には窪地となっていたようで、包含層（４層）がその上位を覆っている。

住居南西部で検出した唯一の柱穴Ｐ１は、主柱穴と考えられる。Ｐ１の住居床面から底部までの深さは、不明である。

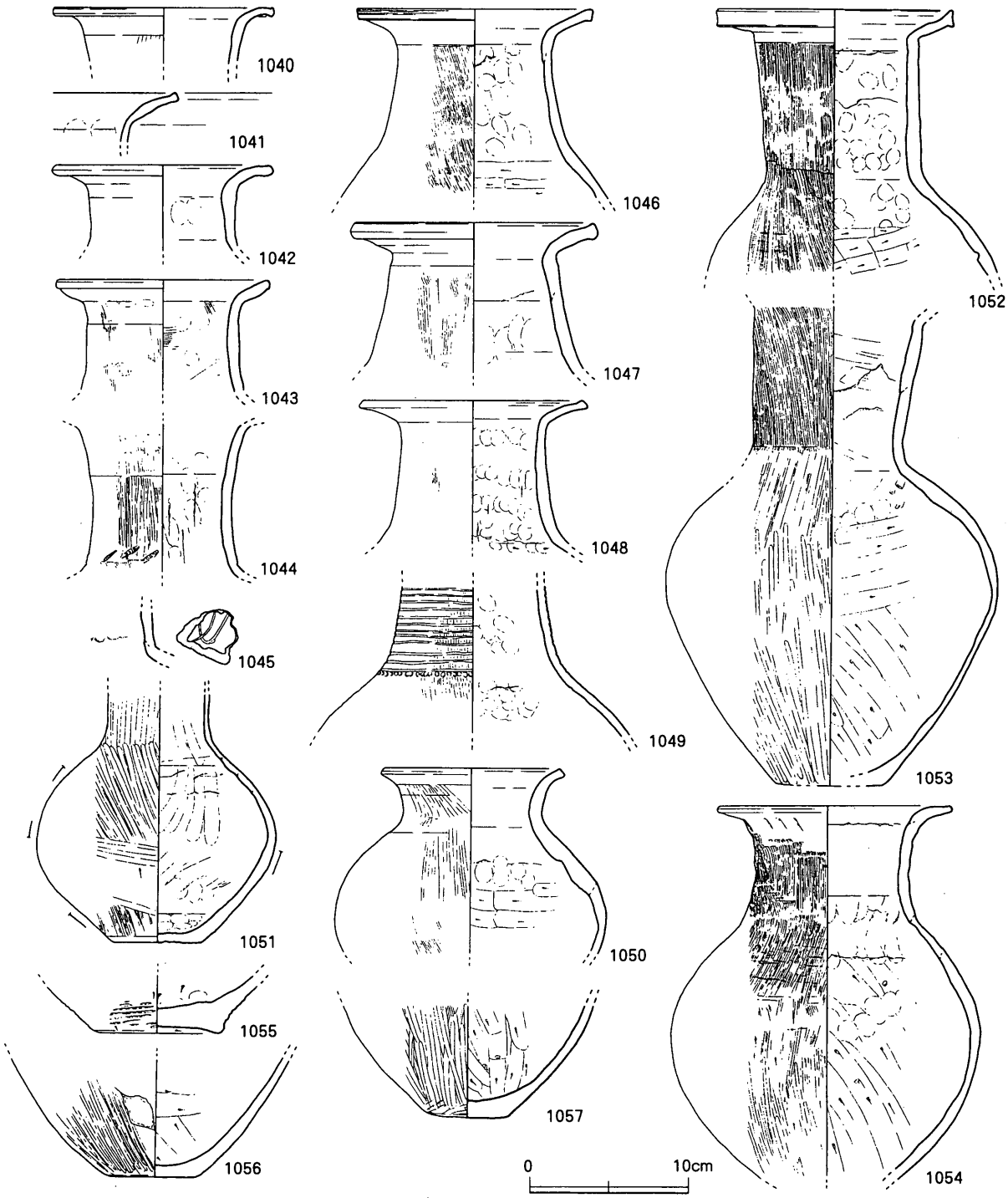
住居の中央部と想定される位置には、内部に礫を包含する円形の土坑（Ｋ２）が認められる。またＫ２の南側には、長軸長1.2ｍ、短軸長0.5ｍの木枠が収められた土坑（Ｋ１）が確認された。Ｋ１は、長軸長1.3ｍ、短軸長0.7ｍ、床面からの深さ0.17mの平面形長方形の土坑で、主軸方向は竪穴住居のそれと一致する。木枠は短側板のみ残存しており、埋土の観察から蓋板および長側板の痕跡が確認された。なお底板は認められない。木枠内の底面には厚さ約５cmの炭化物層があり、その上面を中心として土器が出土している。炭化物層の上面はほぼ平坦で焼土は含まれていない。

出土遺物　1007・1015・1025・1026・1030・1036はＫ１内出土、1005・1006・1008～1014・1016～1018・1020～1023・1027～1029・1031～1035・1037・1039は下層出土、1019・1024は上層（発掘調査時の取り上げ名称は中層）出土。

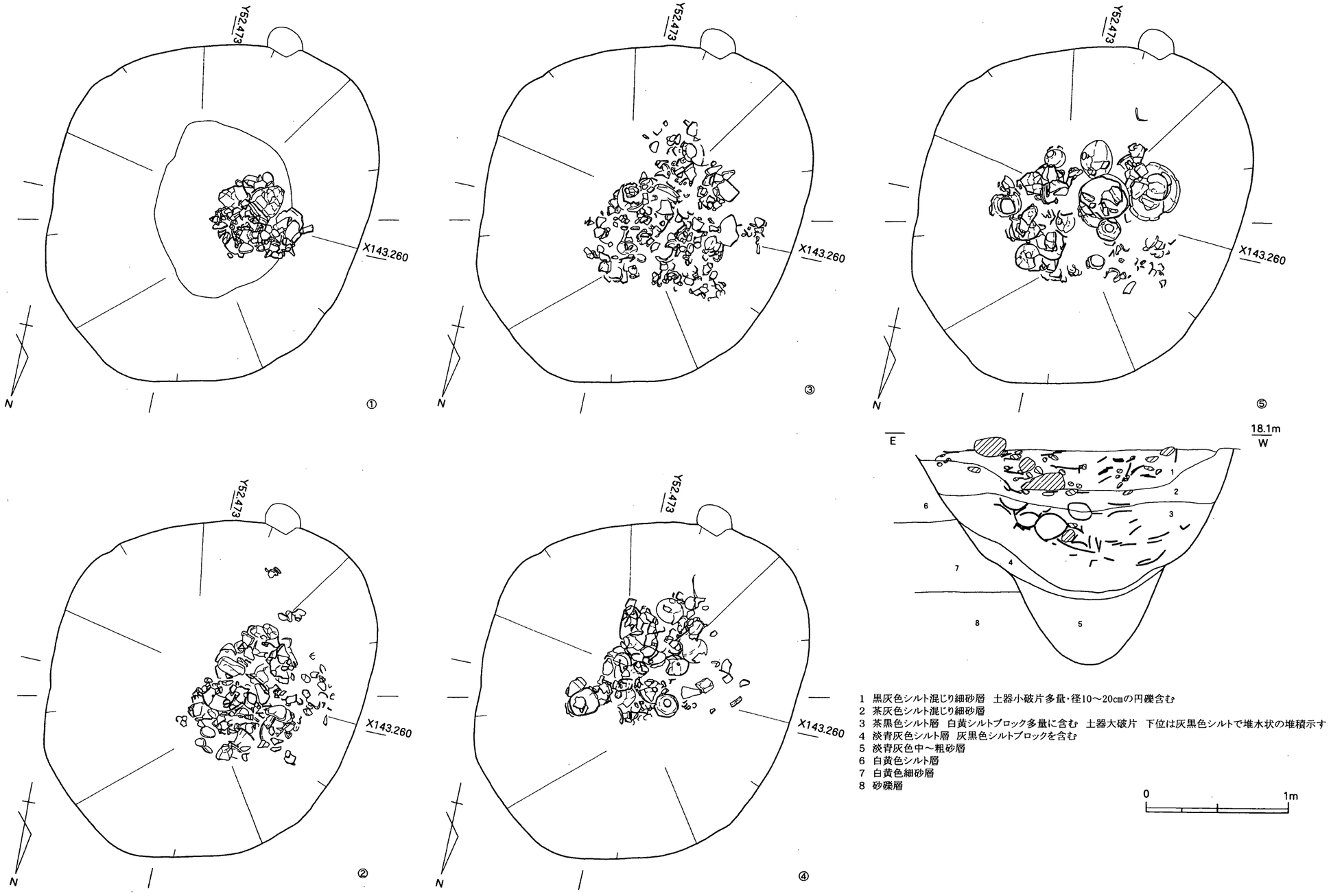
1005～1009・1011・1012・1014は白色系の甕。1012の断面には器面から0.5～1.0mm程度を除いて黒化層が認められ、激しい摩滅のため、その黒化層が一部露出している。にぶい褐色の甕1010の胎土には多量の黒雲母と少量の角閃石が含まれ、通常の香東川下流域産系譜のものとは異なり、やや粒径の大きな石英を多く含有する。底部には焼成前に外面から内面に向かって穿たれた孔がある。1013はにぶい橙色を呈する甕。1015～1019は、色調がにぶい褐色で胎土に多量の黒雲母を含む甕。1020は吉備系甕。1021はにぶい橙色の高杯。1022・1023は白色系の高杯。1023はやや焼成不良で、摩滅が著しい。1024はにぶい褐色を呈し、黒雲母を多量に含む胎土を有する鉢。

1025 ～ 1036 は白色系の鉢。完形に近い 1027・1029・1035 の外面には、一方の底部から胴部上半部にかけて黒班が認められる。1037 の鉢はにぶい褐色を呈し、胎土に多量の黒雲母を含む。外面に看取される黒班は底部から口縁部にまで及んでいる。1038 はサヌカイト製剥片。両側面には両極打法による折れが認められ、上部の縁辺部にはその際に生じたと思われる潰れがある。1039 は焼成不良の土塊。一部に細長い窪みがあり、その窪みの中には炭化物が認められる。これらの状況を積極的に評価すれば、竪穴住居の屋根構成材の可能性も考えられようか。

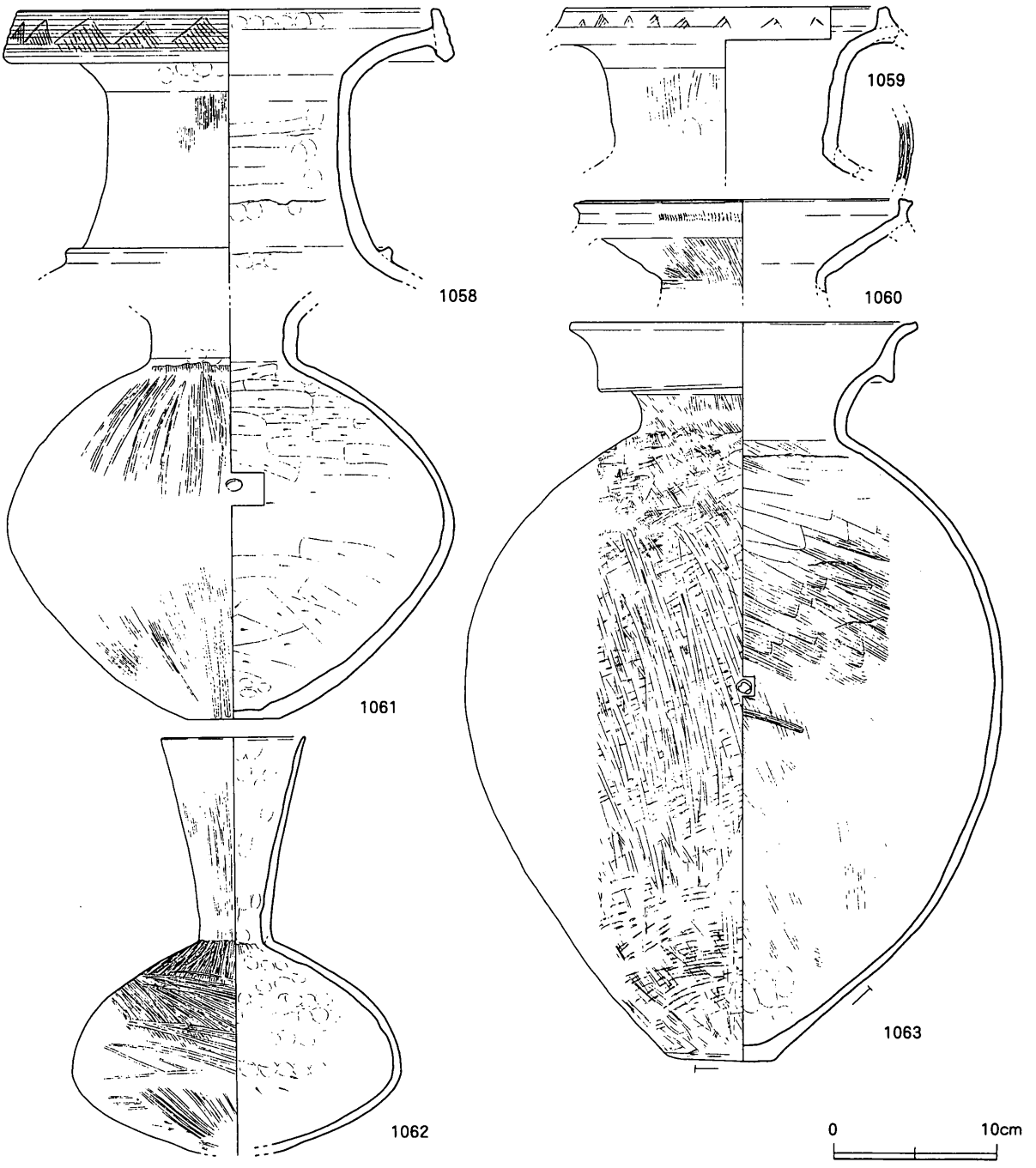
時期　出土遺物から古墳時代前期初頭と考えられる。



第 151 図　ＳＥＩ 01 出土遺物実測図 1 （S=1/4）



第152図　ＳＥＩ01平・断面図（S=1/30）

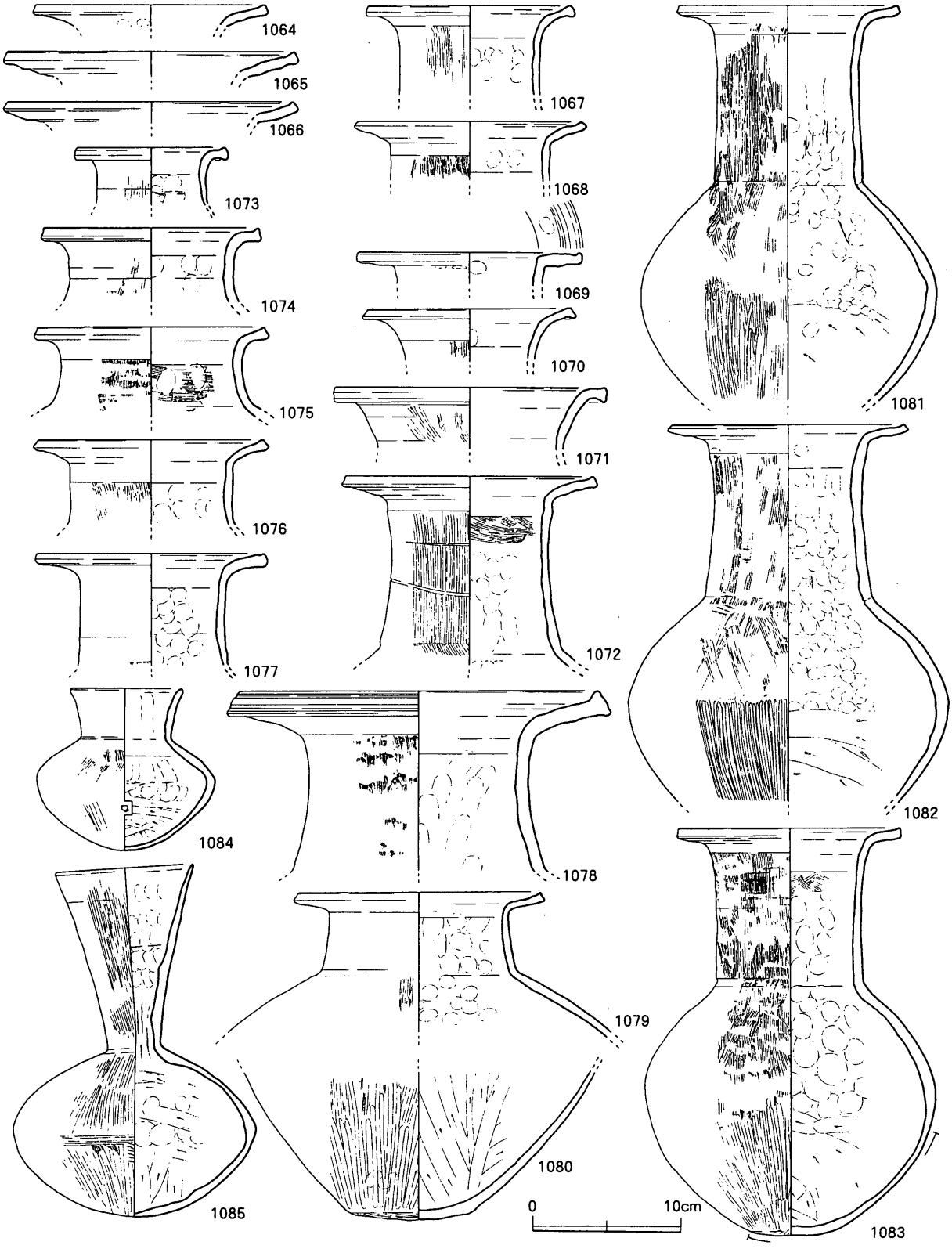


第153図　ＳＥＩ01出土遺物実測図２（S=1/4）

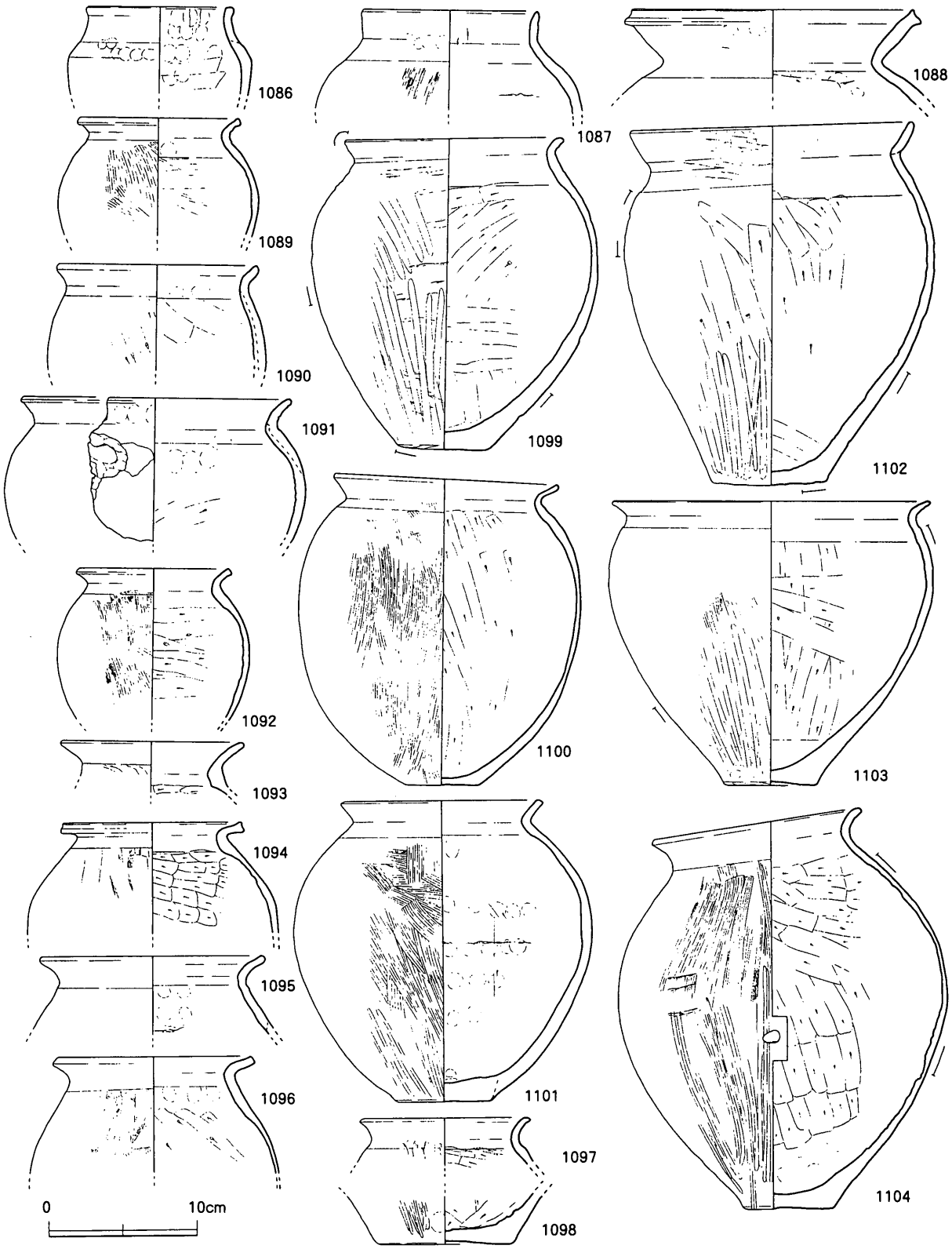
井戸（ＳＥ）

ＳＥＩ01（発掘調査時遺構名：Ｉ－６区ＳＸ05　概報遺構名：ＳＥ01）

Ｉ－６区南東部で検出された井戸。ほぼ同時期と考えられる大型の円形竪穴住居ＳＨ１02からは約23ｍ離れた位置にある。平面形は円形に近い不整形で、長軸長2.6ｍ、短軸長2.2ｍ、検出面から底部までの深さは1.6ｍである。底部が湧水層に達し、調査時にも湧水が認められたため、井戸と判断した。埋土は上下２層に大別され、うち下層はグライ化した淡青灰色の中・粗砂層で構成されるため、井戸機能時の堆積層と考えられる。なお、本層に遺物は含まれない。上層は、多量のブロックおよび径10～20cm の礫を含有する黒灰～茶灰色シルト層で構成され、埋め戻しが行われた



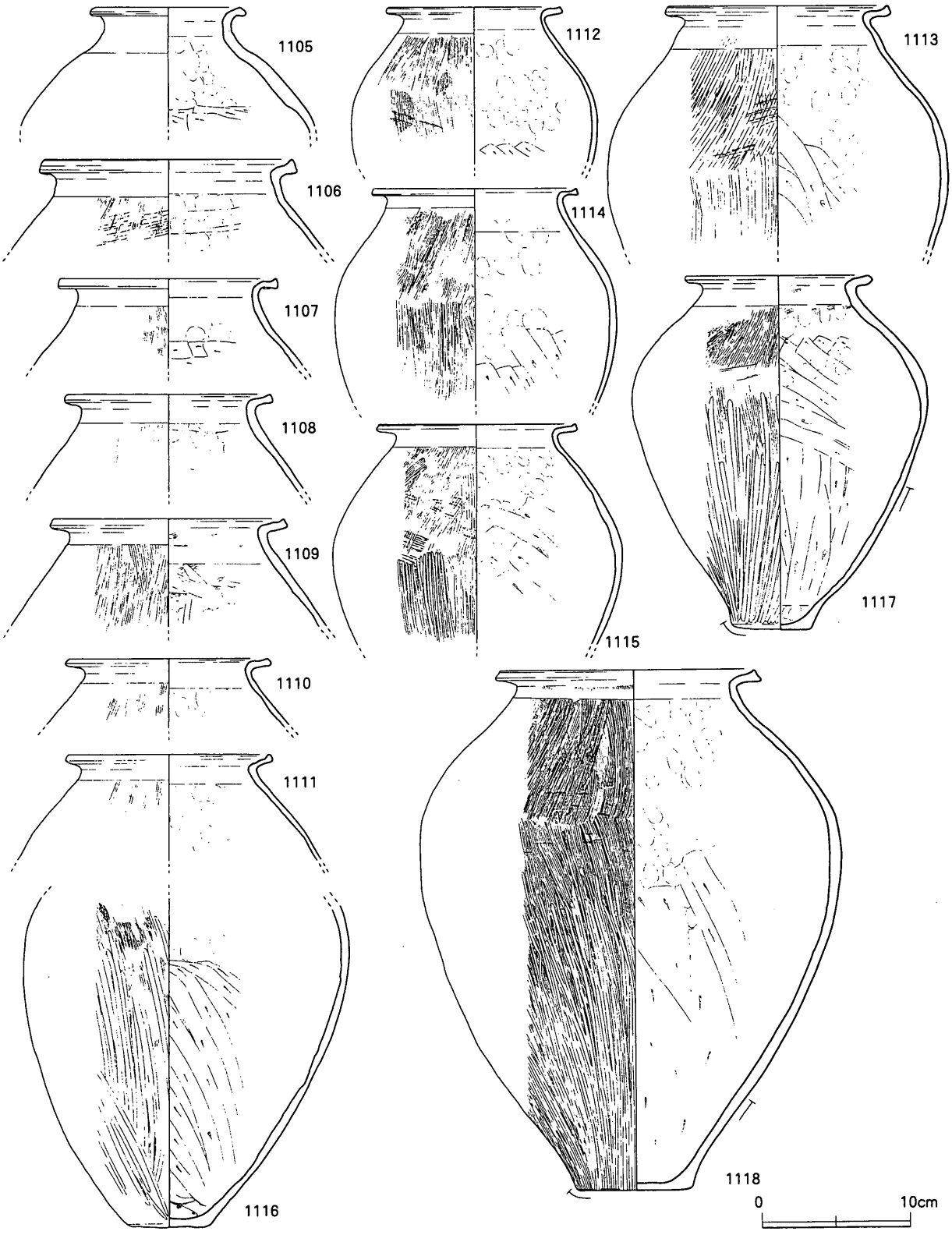
第154図　ＳＥＩ01出土遺物実測図３（S=1/4）



第155図　ＳＥＩ01出土遺物実測図４（S=1/4）

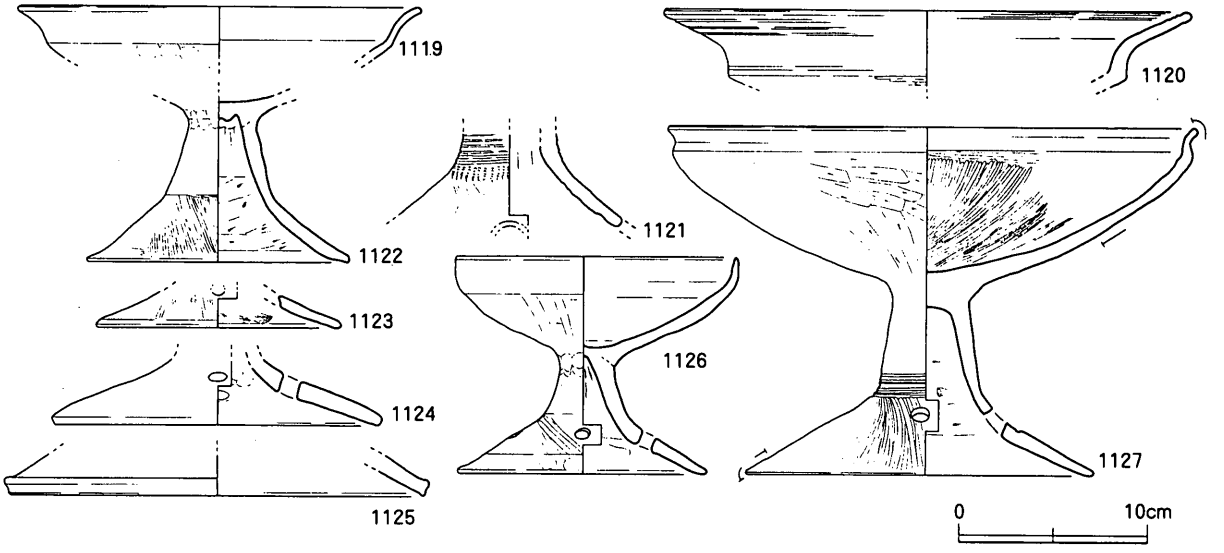
ことが分かる。さらに本層には、弥生土器を主体とする多量の遺物（28リットル入りコンテナ約20箱分）が含まれ、これらの土器は井戸廃絶に際して一括廃棄されたものと想定される。

出土遺物　1040～1057は白色系の壺。1040・1043・1044・1048・1052・1054・1055・1057の断面には黒化層が存在し、明瞭な黒化層が確認されない1046にもやや焼成不良の箇所があ



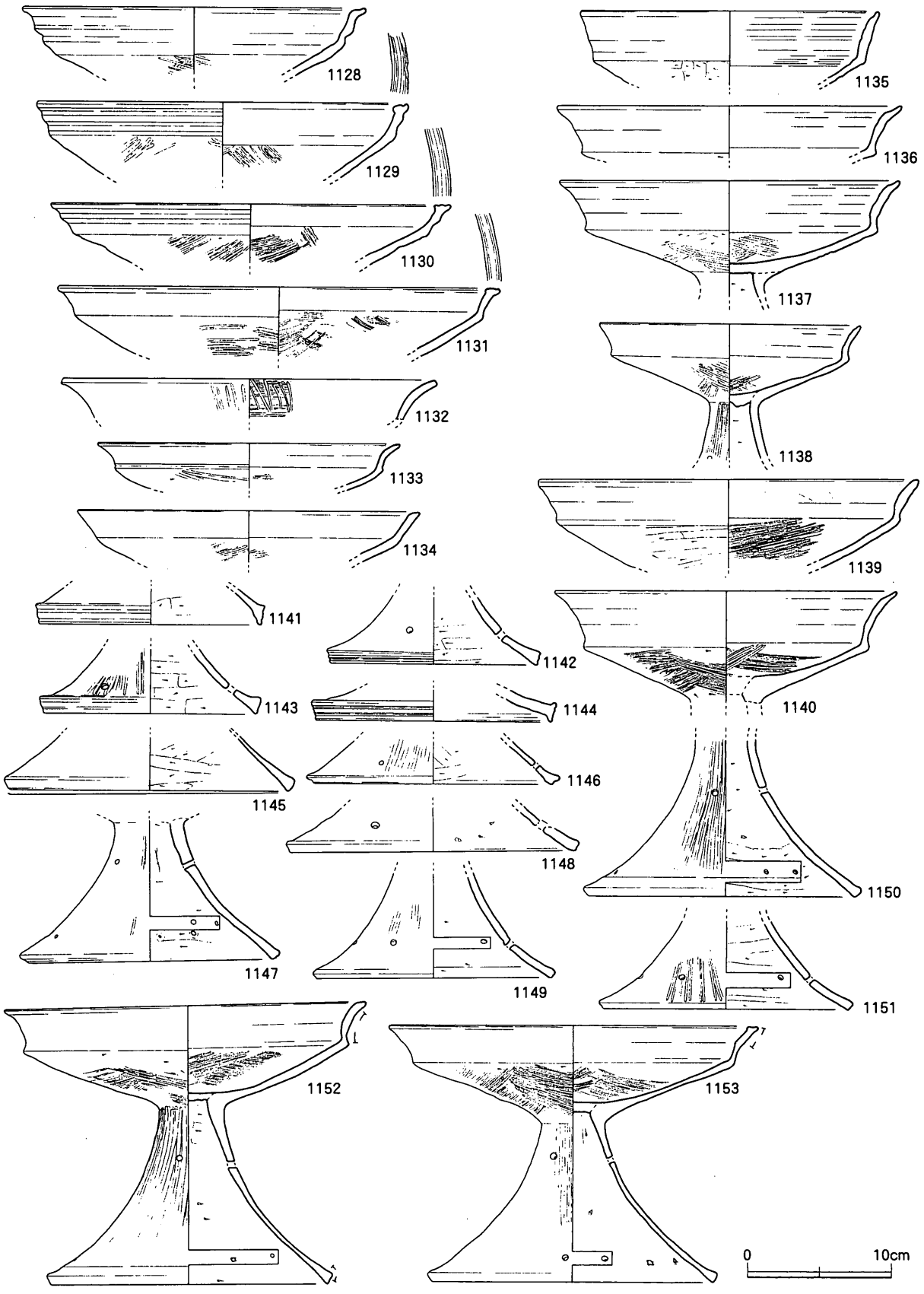
第156図　ＳＥＩ01出土遺物実測図５（S=1/4）

る。また、1040・1042・1049・1050は摩滅が特に著しく、1040の器面には黒化層が露出している。1044の頸部下端にはハケ原体による列点文が見られる。1045の胴部に近接する頸部には、弧状の文様が描かれている。1050・1054の胴部内面には、不十分な仕上げにより、接合痕が明瞭に残る。胴部が完形に近い1051は、底部全体および胴部下半と、その反対側に位置する胴部上半に黒班が確認される。1058・1059は拡張口縁を有する壺。拡張された口縁部外面には鋸歯文が描か

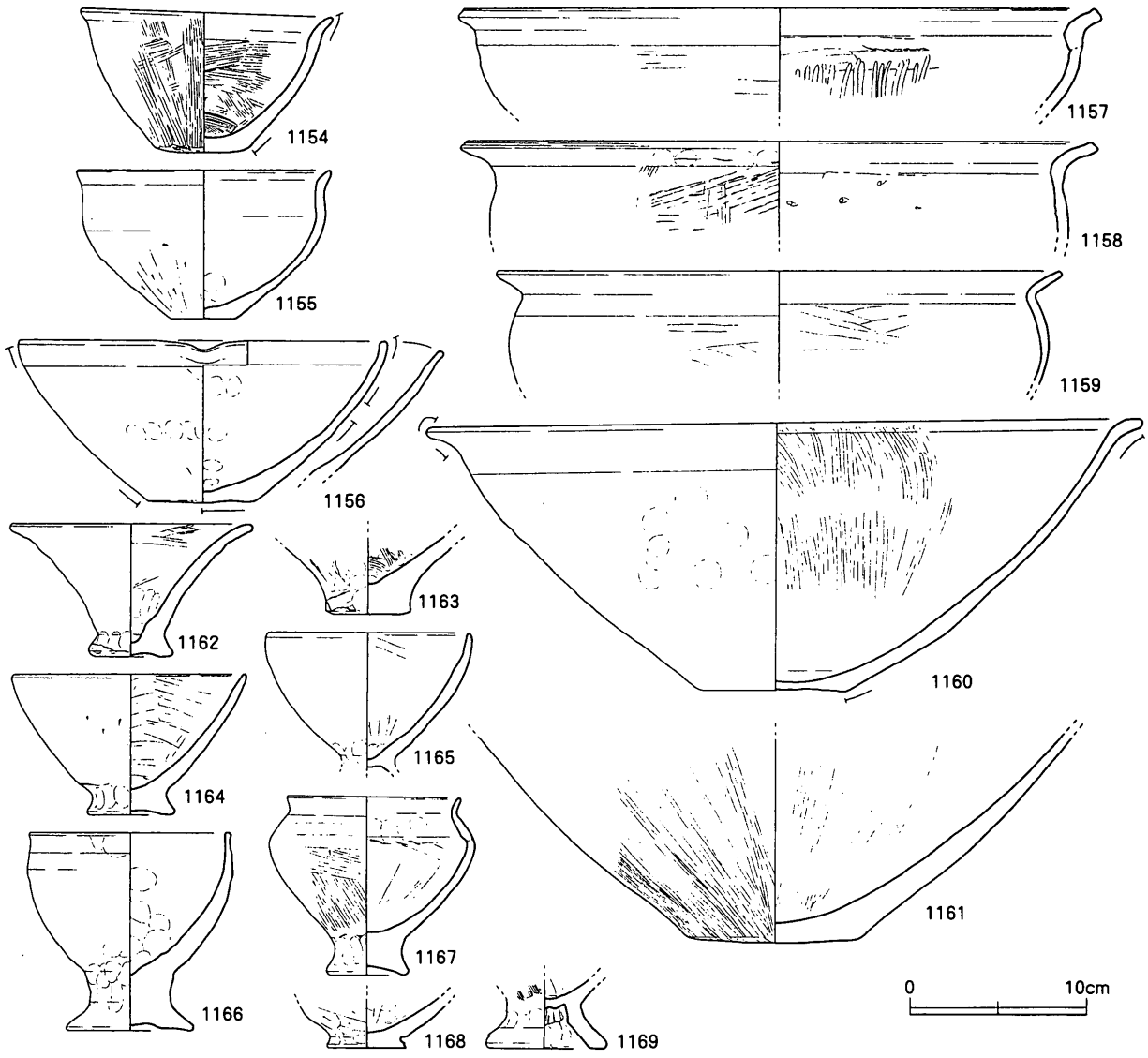


第157図　ＳＥＩ01出土遺物実測図６（S=1/4）

れ、1058には凹線文も見られる。いずれも、断面には器壁からのわずかな部分を残して黒化層が確認され、摩滅が激しい1059の内面は黒化層が露出している。壺1060の、下方に拡張する口縁部の欠損は、当該箇所に良好な焼成が認められることから、焼成前、もしくは焼成時の欠損と思われる。胎土・色調からは白色系と考えられる。1061はラグビーボール状の胴部を有する白色系の壺。胴部最大径やや上位には焼成後に内面から孔が穿たれている。頸部断面には内外面の器面から2.0mm程度を除いて黒化層が存在し、胴部内面に至っては器面にも黒化層が見られる。1062は白色系の細頸壺。断面は、外面の器面より1.0～2.0mm程度を除いて黒化層で占められる。1063は胴部最大径に内面からの焼成後穿孔が認められる二重口縁壺。外面にはタタキの後にストロークの短いハケが施され、さらにさほど密度の高くないヘラミガキが行われている。内面には条痕の深いハケが認められる。胎土はにぶい褐色を呈するが、角閃石は認められず、多量に含有される黒雲母も香東川下流域産のものに比べてやや粒径が大きい。1064～1072・1074～1083は香東川下流域産の壺。1081の内面にはやや焼成不良の痕跡が見られる。1073は細粒の角閃石・黒雲母を多量に含む胎土１類で構成される壺。後期初頭に位置付けられるものか。1084は香東川下流域産の直口壺。胴部最大径よりやや下位に焼成後の穿孔が見られるが、意図的なものとは断定できない。1085は香東川下流域産の細頸壺。1086～1092・1094～1096・1098～1104は白色系の甕。1090～1092・1098・1100・1103の断面には黒化層が認められる。なお、完形に近い1099・1101・1102・1104の断面には黒化層が見られないものの、摩滅は顕著である。1091の外面胴部上半にある、隣接する２面の剥離面のうち、右側のものについては内部の黒化層が露出しているが、左側には黒化層が認められないため、左側の剥離が焼成時によるものと考えられる。摩滅がかなり激しい甕1093は、橙色系の色調を呈するが、発色の異なる白色系とも考えられる。断面は、内外面の器壁からのわずかな部分以外は黒化層で占められる。甕1097は、にぶい褐色を呈し、胎土に黒雲母と角閃石が含まれ、香東川下流域産の胎土にやや類似する。なお、断面には器壁から1.0～1.5mmを除いて黒化層が認められる。1105は細粒の角閃石を多量に含む胎土１類で構成される甕。1106～1118は香東川下流域産の甕。1119～1127は白色系の高杯。1119・1121・1123・1125～1127の断面には黒化層が認められる。なお、1126は摩滅がかなり激しい。破片資料である1127の杯部

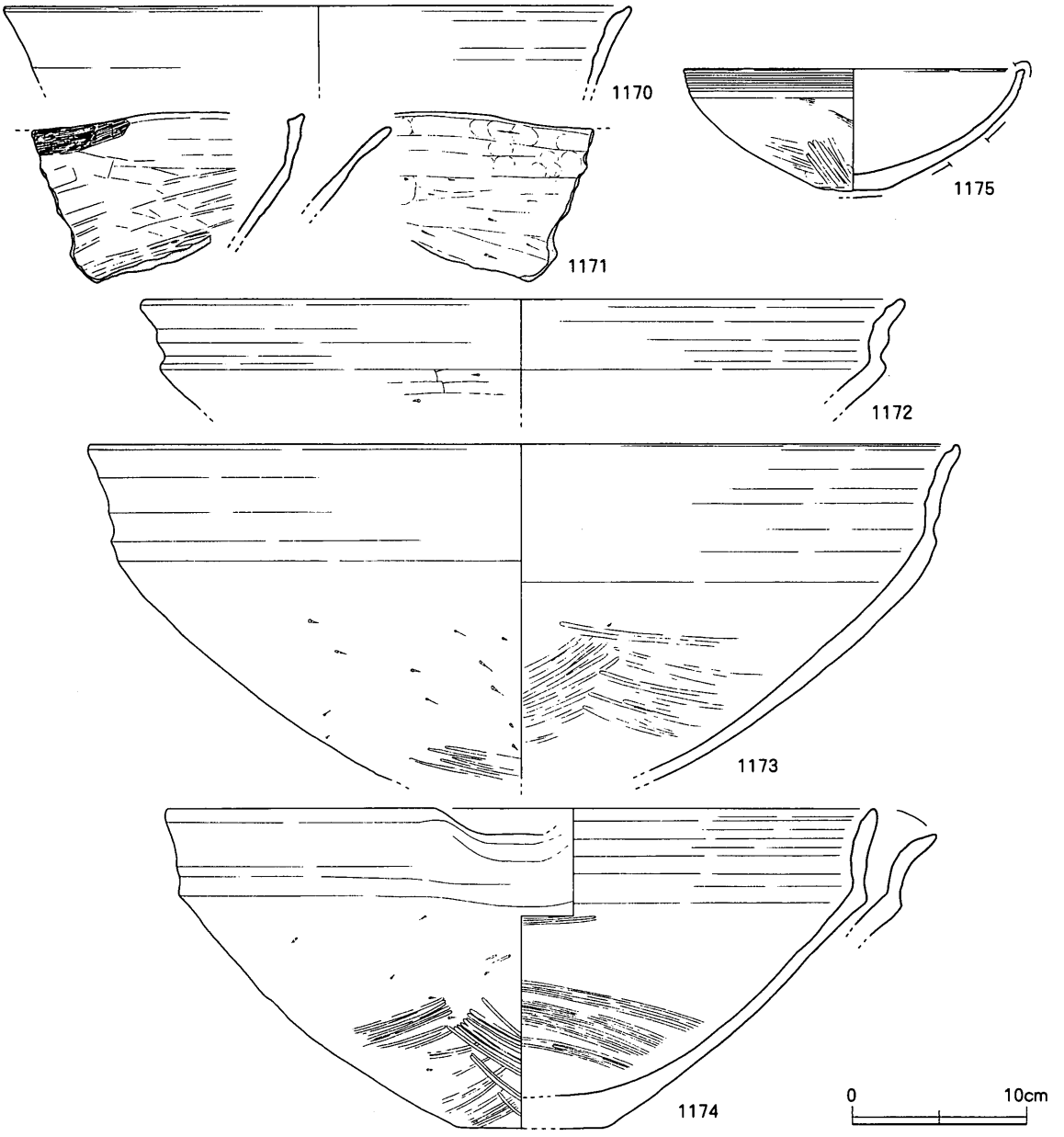


第158図　ＳＥＩ01出土遺物実測図７（S=1/4）



第159図　ＳＥＩ01出土遺物実測図８（S=1/4）

上半と杯部下半・脚部に接合部分は確認できないが、胎土・復元径から同一個体と判断した。杯部内面には密度の高いヘラミガキが施されている。1128～1131・1133～1140・1142～1153は香東川下流域産の高杯。1128～1131は杯屈曲部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部上端が拡張する形態のもの。1128の杯部上半外面には明瞭な突出部が作出されているが、1129・1130の同部分は突出部ではなく凹線文が施される。1131に至ってはその凹線文すら認められない。顕著な摩滅により器壁が一部剥落している1138の断面には黒化層が存在する。1149・1151の断面は、内外面の器壁から0.5～1.0mmを除いて黒化層で占められる。口縁部の内外面に縦方向のヘラミガキが施されている1132は、胎土１類の高杯。1141の高杯脚部は胎土１類を有し、後期初頭に比定される。1154～1169は白色系の鉢。1157～1160・1162・1163・1165・1167・1168の断面には黒化層が認められる。ほぼ完形の大型鉢1160の外面には、一方の底部から口縁部直下と、もう一方の口縁部に黒班が見られる。1170～1174は香東川下流域産の鉢。1175は口縁部外面に凹線文が施された鉢。胎土は香東川下流域産のものに類似する。また、底部付近の断面にはやや焼成不良の箇所が確認される。1176は香東川下流域産の器台。1177・1178は白色系の器台。1177の断面は、器壁から1.0mm程度を除いて黒化層で占められる。1178は、断面に黒化層が見られない



第160図　ＳＥＩ01出土遺物実測図９（S=1/4）

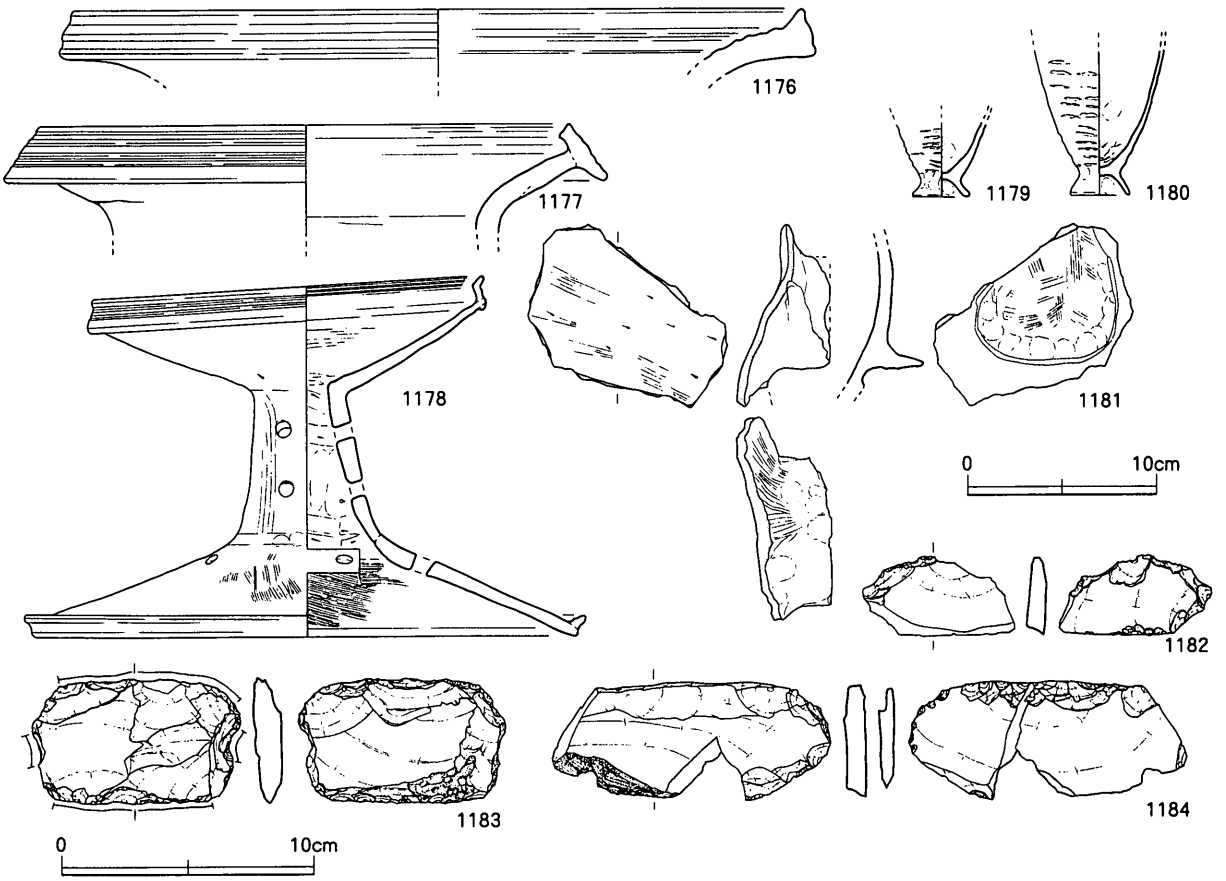
が摩滅は著しい。1179・1180は香東川下流域産の製塩土器。白色系の1181は、外面に方形の突帯が添付され、接合部はハケにより仕上げられる。内面にはハケとヘラケズリが施され、一部朱らしきものの付着が確認される。片口皿か。なお、摩滅はかなり激しい。1182はサヌカイト製の剥片。1183はサヌカイト製の石包丁。両側縁部の抉りの他、上下の刃部に使用痕が残る。1184はサヌカイト製のスクレイパーか。刃部に使用痕は認められない。

時期　出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。

土坑（ＳＫ）

ＳＫＩ203（発掘調査時遺構名：Ｉ－７区ＳＫ03）

Ｉ－７区で検出した、矩形に近い平面形を有する土坑。



第161図　ＳＥＩ01出土遺物実測図10（S=1/4・1/3）

出土遺物　1185は香東川下流域産の長頸壺。1186は白色系の鉢。

時期　1185から弥生時代後期中葉～後半と考えられる。

ＳＫＩ207（発掘調査時遺構名：Ｉ－７区ＳＫ07）

Ｉ－７区で検出した土坑。南部は鉄製管埋設により破壊されている。

出土遺物　1187は香東川下流域産の壺。1188は香東川下流域産甕。

時期　出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。

ＳＫＩ221（発掘調査時遺構名：Ｉ－７区ＳＸ01）

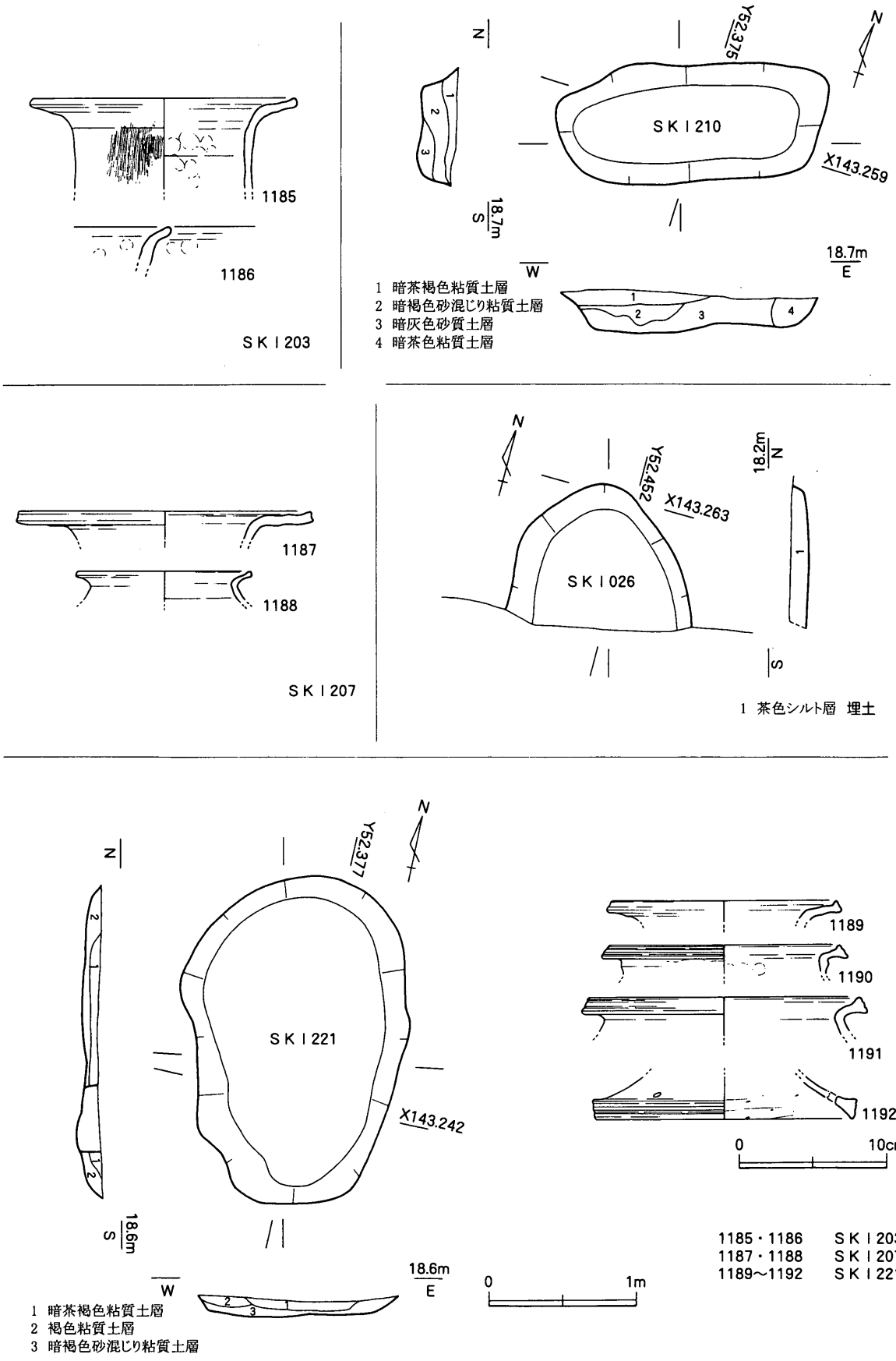
Ｉ－７区で検出した土坑。平面形は楕円形に近い。

出土遺物　1189～1192は、いずれも細粒の角閃石を多量に含む胎土１類で構成される。1189は壺、1190・1191は甕、1192は高杯脚部。

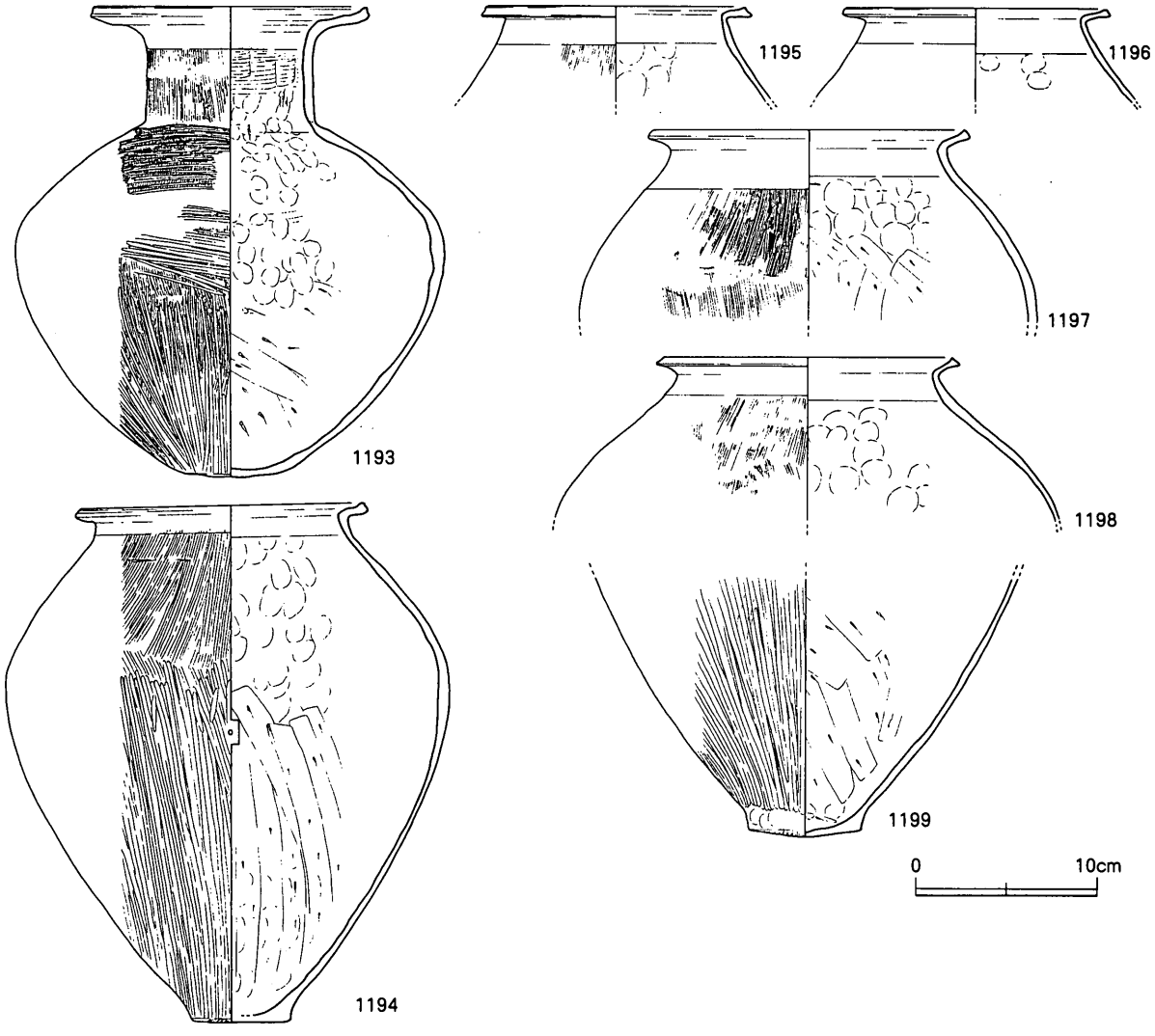
時期　出土遺物から弥生時代後期初頭と判断できる。

ＳＫＩ248（発掘調査時遺構名：Ｉ－７区ＳＰ18　概報遺構名：ＳＫ02）

Ｉ－７区で検出された小規模な土坑。検出面には炭化物・焼土が確認された。埋土は黒褐色粘質土で、写真からブロックを含有することが窺えることから、最終的には埋め戻されたものと考えられる。底面付近に完形に近い甕（1194）があるなど、出土土器の残存状況は比較的良好である。



第162図 SKI026・I210・I221平・断面図（S=1/40）、
SKI203・I207・I221出土遺物実測図（S=1/4）



第163図　ＳＫＩ248出土遺物実測図（S=1/4）

出土遺物　1193は香東川下流域産の広口壺。1194～1199は香東川下流域産の甕。

時期　埋没時期は、出土遺物から弥生時代後期中葉と判断できる。

その他の遺構（ＳＸ）

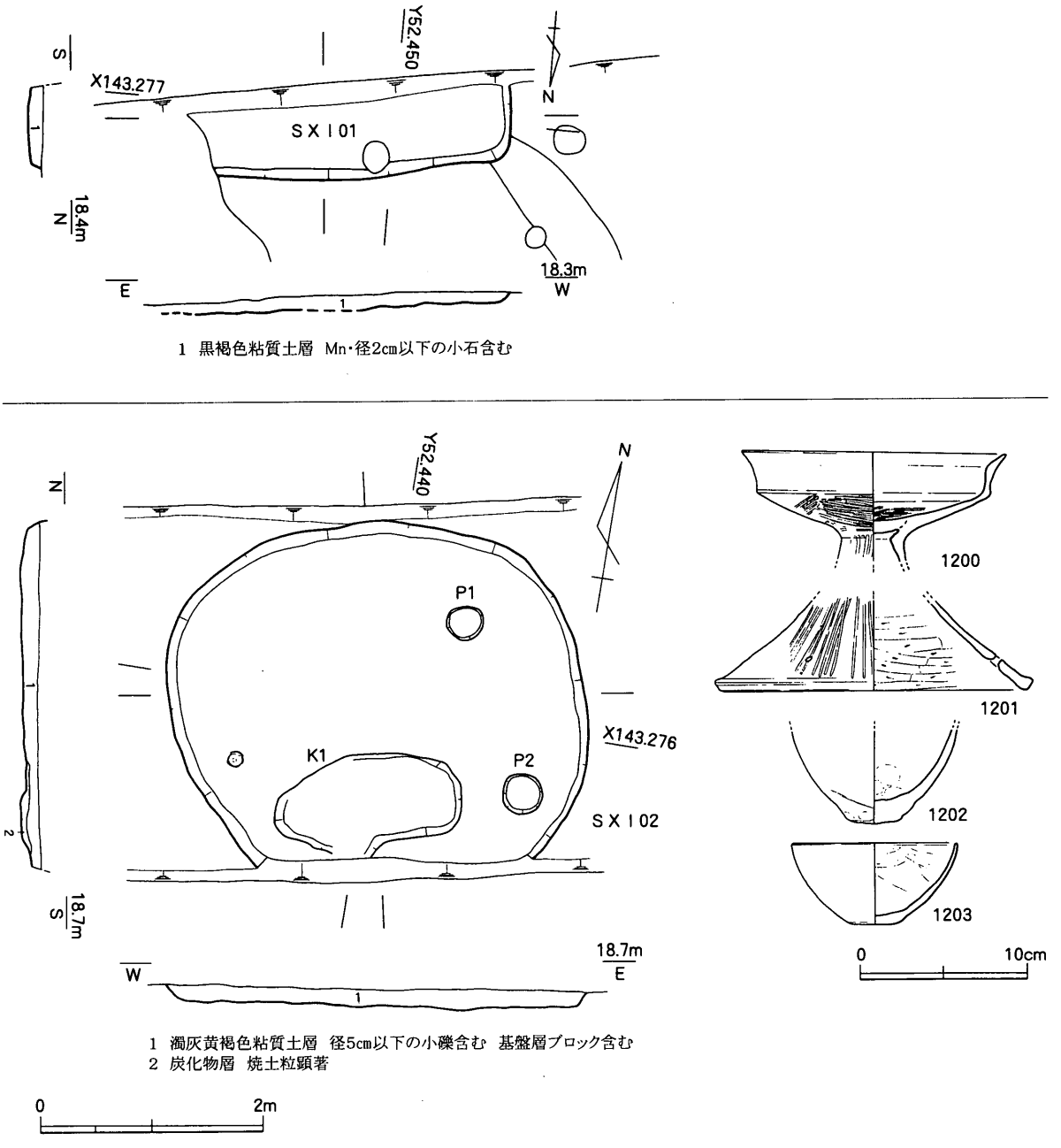
ＳＸＩ01（発掘調査時遺構名：Ｉ－12区ＳＨ03　概報遺構名：ＳＨ74）

Ｉ－12区中央部で検出した平面形が方形の遺構。検出したのは部分的であるため、全体形は不明であるが、２辺が直線であること、その２辺に挟まれるコーナーが直角に近いことから竪穴住居の一部である可能性もある。

時期　出土遺物が確認できないため詳細な時期は不明であり、埋土の状況から弥生時代後期～古墳時代前期初頭と推定できるのみである。

ＳＸＩ02（発掘調査時遺構名：Ｉ－12区ＳＨ04　概報遺構名：ＳＨ75）

Ｉ－12区中央やや西よりで検出した円形の平面形を有する遺構。２基の柱穴Ｐ１・２を主柱穴と捉えれば、竪穴住居とも考えられるが、壁面の立ち上がりがやや緩やかなこと、Ｉ－12区で検出し



第164図　ＳＸＩ01・Ｉ02平・断面図（S=1/60），ＳＸＩ02出土遺物実測図（S=1/4）

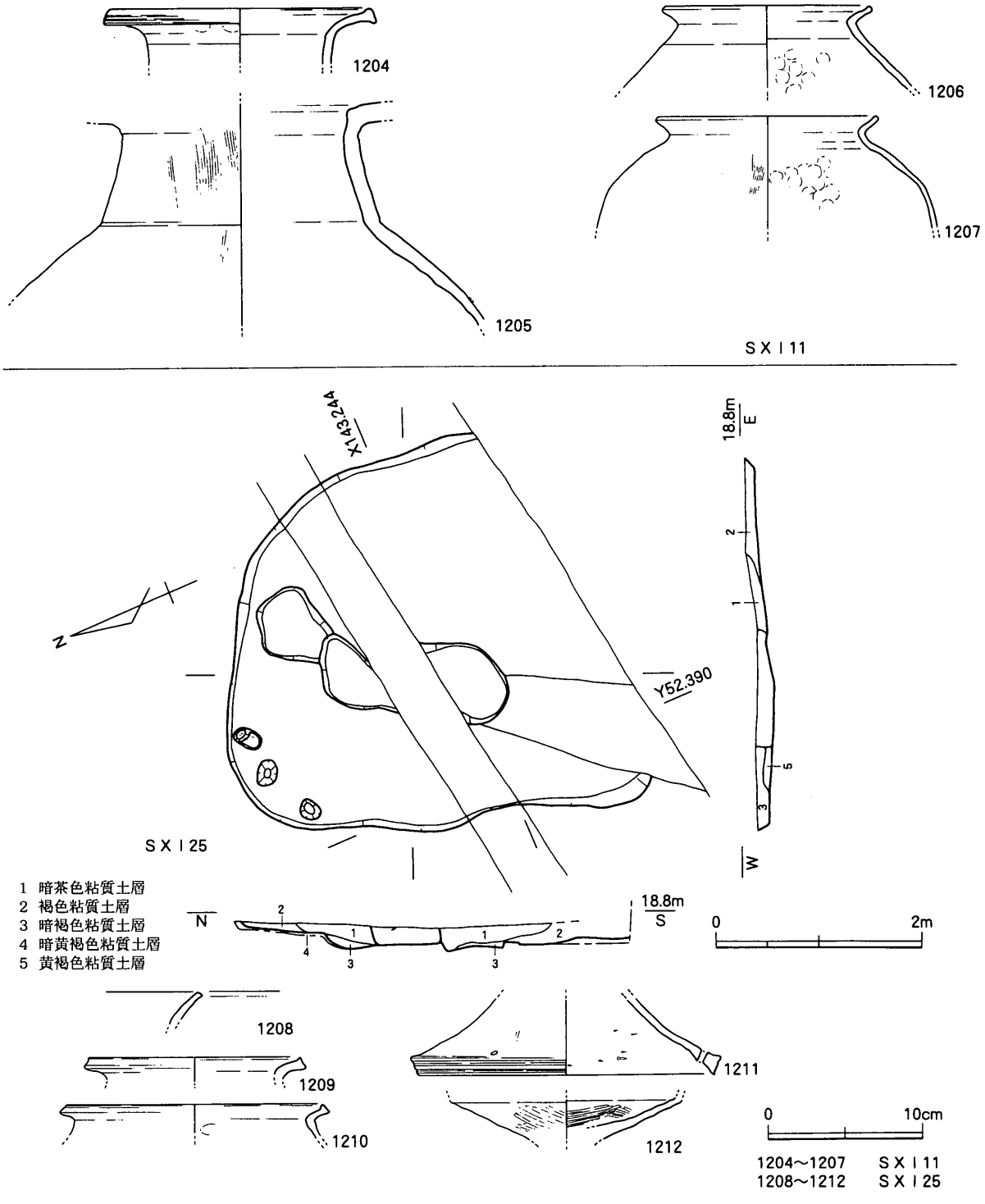
ている確実な竪穴住居に比べて、検出面からの深さがないことから「その他の遺構」とした。なお、南部には楕円形に近い不定形の土坑（Ｋ１）が認められ、その埋土中には炭化物・焼土が含まれる。

出土遺物　1200・1201は香東川下流域産の高杯。1202・1203は白色系の鉢。これらの鉢の断面には黒化層が認められる。

時期　出土遺物から弥生時代後期後半と考えられる。

ＳＸＩ11（発掘調査時遺構名：Ｉ－６区ＳＤ01内土器集積）

Ｉ－６区で検出した中世の溝ＳＤＩ001内のある地点から出土した土器群。これら土器群の出土状況に関する記録はないものの、「土器集積」として取り上げが行われていること、土器の残存状況が比較的良好であることから、本来は弥生時代後期の遺構（土坑か）であった可能性が高い。



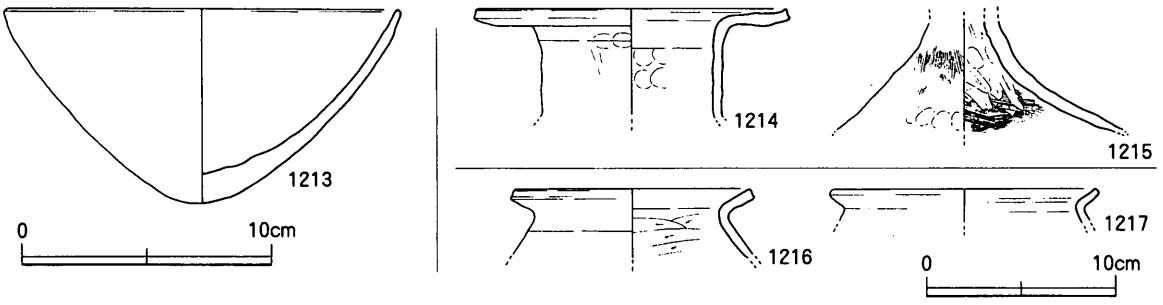
第165図　SXI25平・断面図（S=1/60），SXI11・I25出土遺物実測図（S=1/4）

出土遺物　1204・1205は香東川下流域産の壺。1206・1207は香東川下流域産の甕。

時期　出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。

SXI25（発掘調査時遺構名：I－6区SH03　概報遺構名：SH18）

I－6区東部の南端で、B地区（I－19区）に跨って検出した落ち込み状の遺構。発掘調査時、および概報作成時には竪穴住居と認識されているが、平面形が不定形であること、壁面が明瞭な立



1213　　ＳＰＩ0014
1214・1215　　ＳＰＩ2008
1216・1217　　遺構外

第166図　ＳＰＩ0014・Ｉ2008・遺構外出土遺物実測図（S=1/4・1/3）

ち上がりを有していないこと、主柱穴や炉跡等の竪穴住居付帯施設が認められないことから、本報告では「その他の遺構」とした。

出土遺物　1208は甕か。甕口縁部1209～1210の胎土には細粒の角閃石を含むが、摩滅が顕著なこと、色調が黄橙色を呈することから、胎土１類かどうかについては判断できない。1211は胎土１類の高杯。1212の高杯は、胎土１類と思われるが角閃石の粒径はやや大きい。なお、脚部に近い位置の断面には黒化層が確認できる。

時期　本遺構の埋没時期は、1209～1211から弥生時代後期前半と捉えられる。

柱穴・小穴（ＳＰ）

ＳＰＩ0014

出土遺物　1213は白色系の鉢。

時期　出土遺物から古墳時代前期初頭と考えられる。

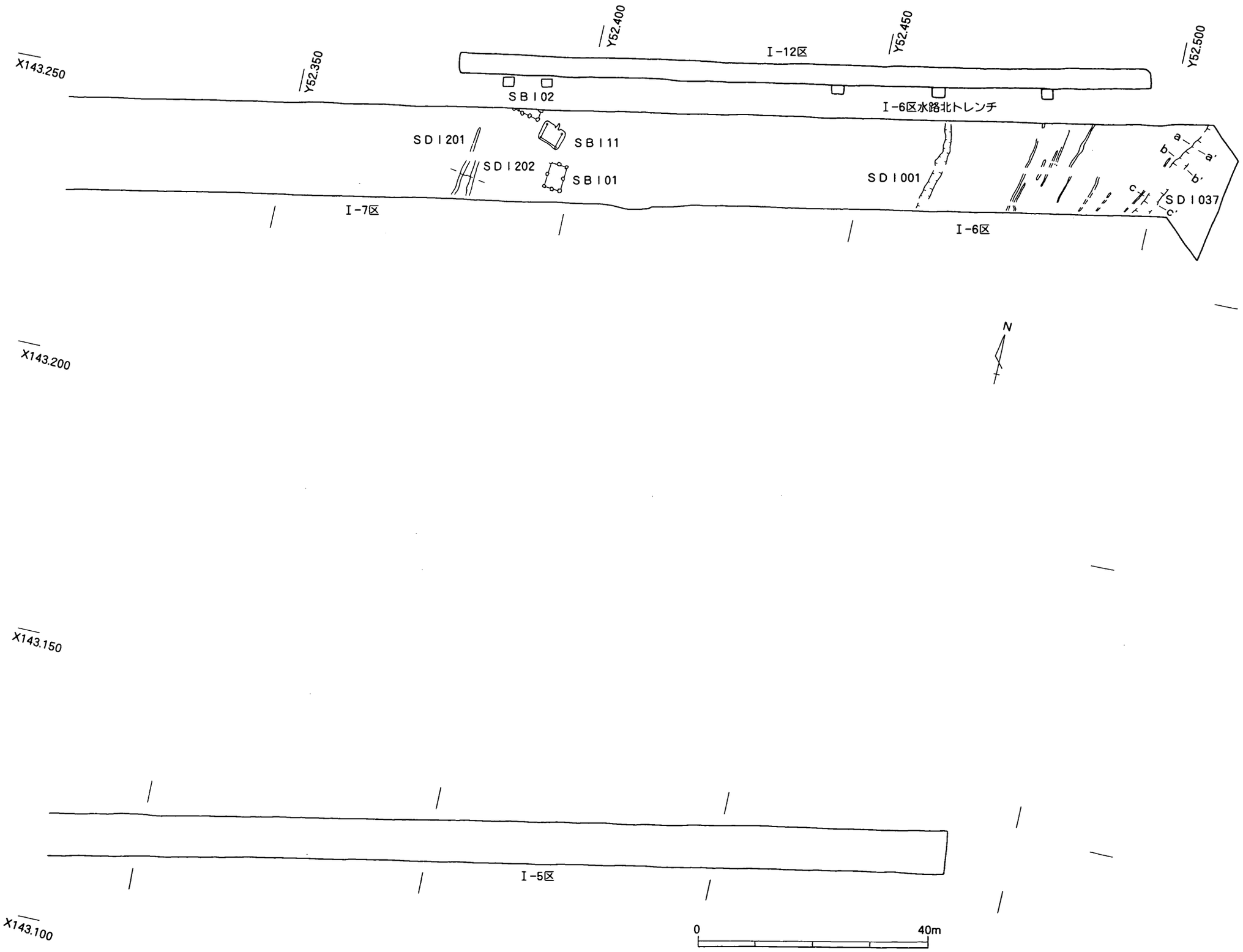
ＳＰＩ2008

出土遺物　1214は香東川下流域産の広口壺。1215は白色系の高杯。摩滅はかなり激しい。

時期　1214から弥生時代後期中葉～後半と考えられる。

遺構外出土遺物

1216・1217はＩ－６区水路北トレンチ３の中世ピットＳＰ１1201からの出土である。1216・1217ともに弥生土器であることから、ここでは遺構外出土遺物とした。1216は白色系の甕。1217は香東川下流域産の甕。いずれも弥生時代後期中葉～後半と思われる。



第167図　古墳時代後期～古代主要遺構配置図（S=1/800）

3．古墳時代後期～古代の遺構と遺物

竪穴住居（ＳＨ）

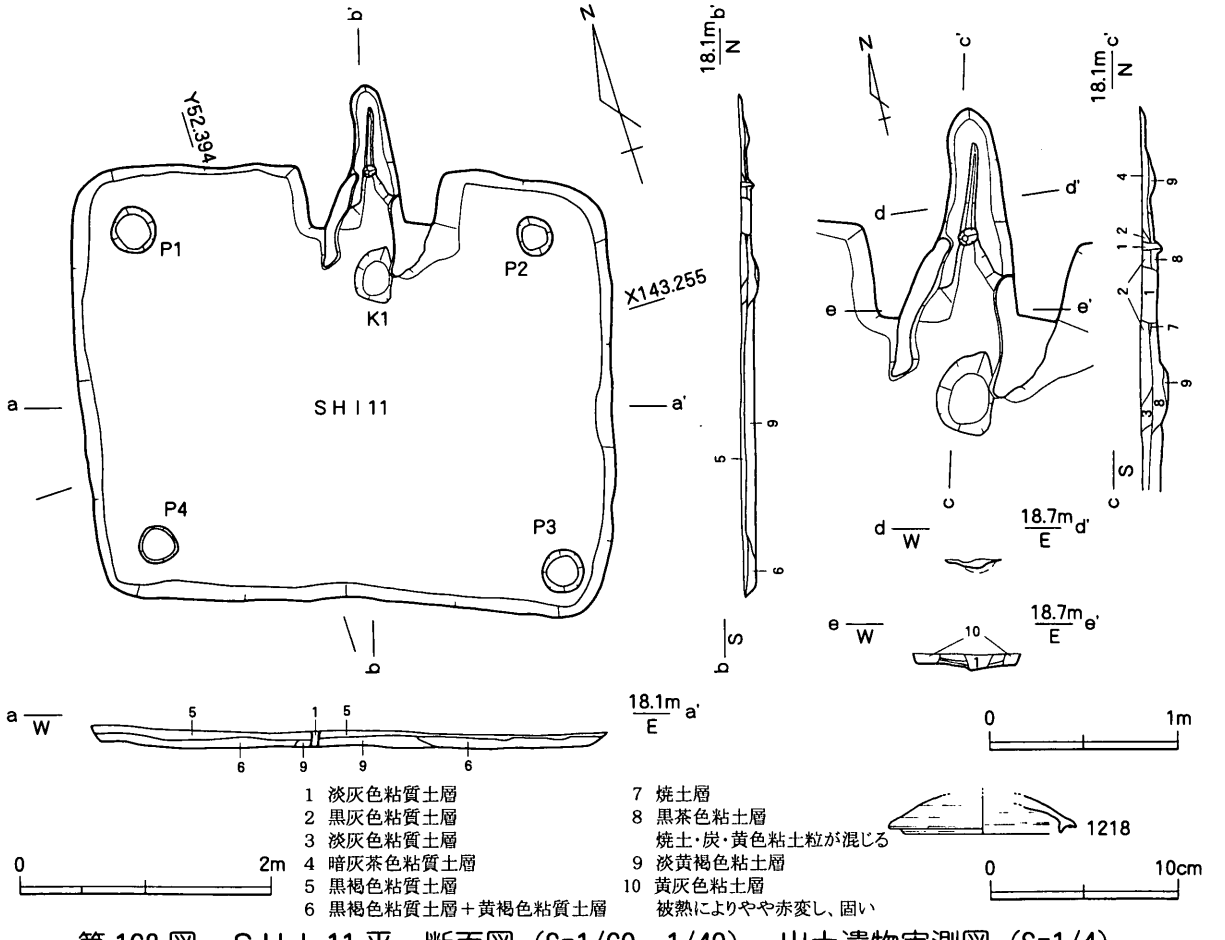
ＳＨＩ11（発掘調査時遺構名：Ｉ－７区ＳＨ02　概報遺構名：ＳＨ42）

Ｉ－７区で検出された、竈を有する4.2ｍ×3.5ｍの方形竪穴住居。残存する深さは約0.1ｍと、削平が著しい。

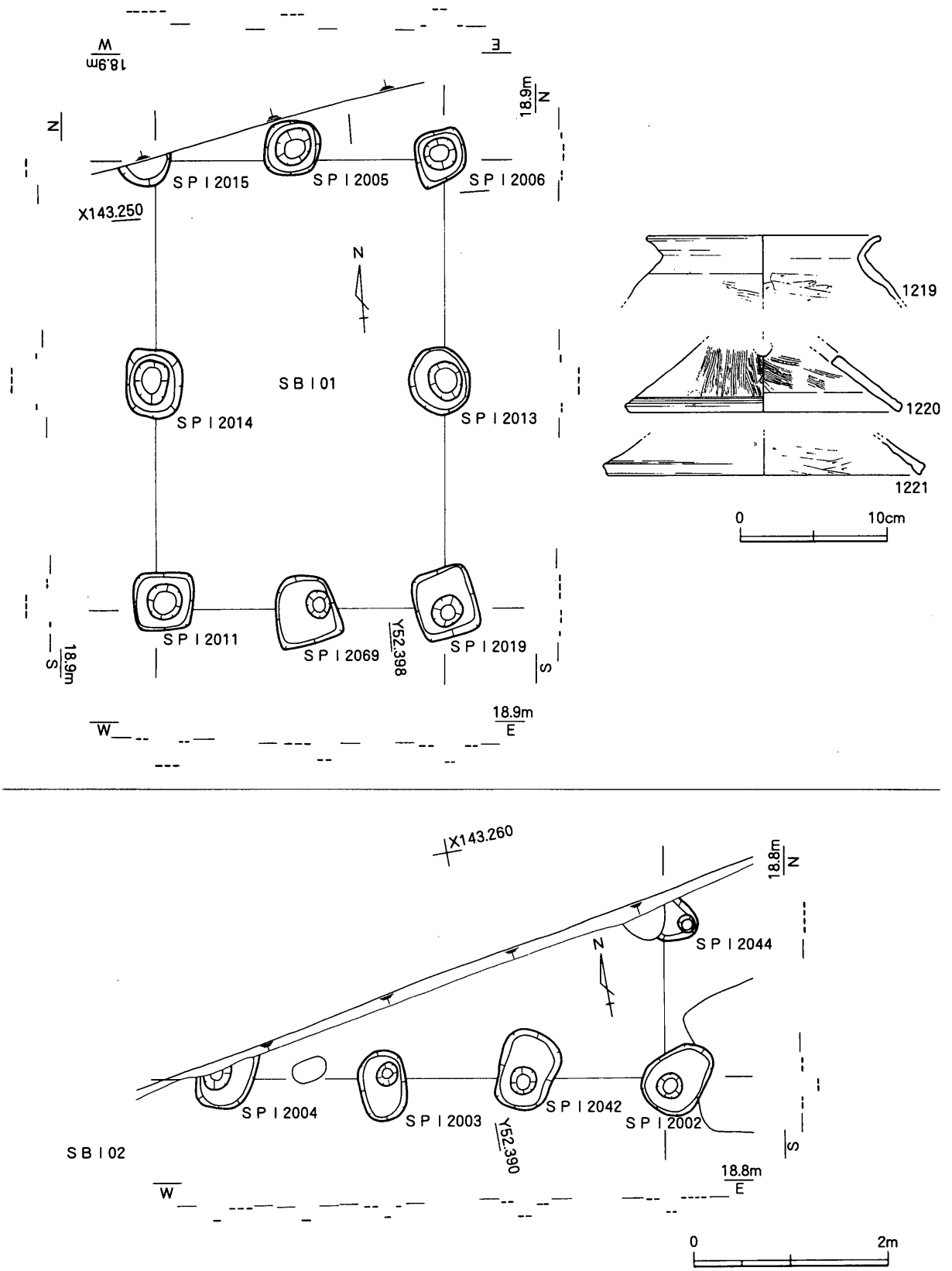
貼床の存在に関する記録は残されていないものの、住居埋土の土層記録に竈まで連続する水平の分層ラインが看取されることから、この部分が貼床に相当する可能性もある。ただし、これより下層（６・９層）が整地や埋め戻しに伴うものなのか否かについては不明である。

４基の主柱穴（Ｐ１～４）は、住居の四隅に近接する位置にある。主柱穴の埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。住居底面から柱穴底部までの深さはそれぞれ、Ｐ１－0.12ｍ、Ｐ２－0.19ｍ、Ｐ３－0.19ｍ、Ｐ４－0.10ｍである。

竈は北辺のほぼ中軸線上に取り付けられており、基盤層を２条の尾根状に掘り残すことで左右の袖部が作出されている。袖部内面は被熱により赤変・硬化している。袖部の前面には、住居底面からの深さ0.04ｍの浅い土坑Ｋ１がある。焚口に伴う施設であろう。焚口部分および煙道部分の埋土（６・７層）中には焼土・炭化物・黄色粘土（基盤層か）ブロックが混じるが、天井部崩落に伴うものか否かについては判断できない。



第168図　ＳＨＩ11平・断面図（S=1/60・1/40），出土遺物実測図（S=1/4）



第169図　ＳＢＩ01・Ｉ02平・断面図（S=1/60），ＳＢＩ01出土遺物実測図（S=1/4）

出土遺物　1218は須恵器杯蓋。

時期　1218から7世紀後半頃と考えられる。

掘立柱建物（ＳＢ）

ＳＢＩ01・Ｉ02（発掘調査時遺構名：Ｉ－７区ＳＢ01・02　概報遺構名：ＳＢ01・02）

Ｉ－７区中央部で検出した掘立柱建物。両建物間には７世紀後半の竪穴住居ＳＨ１11が存在する。２棟ともに主軸方向は条里地割の方向に合致し、柱痕よりやや大きめの方形もしくは隅丸方形の掘り方を有する。ＳＢ１01は、桁行4.5ｍ、梁間3.0ｍの２間×２間の建物で、梁間に比べて桁行の柱間の方が広い。ＳＢ１02は部分的な検出のため、全体の規模は不明であるが、ＳＢ１01と異なり、桁行・梁間の柱間はほぼ同間隔である。

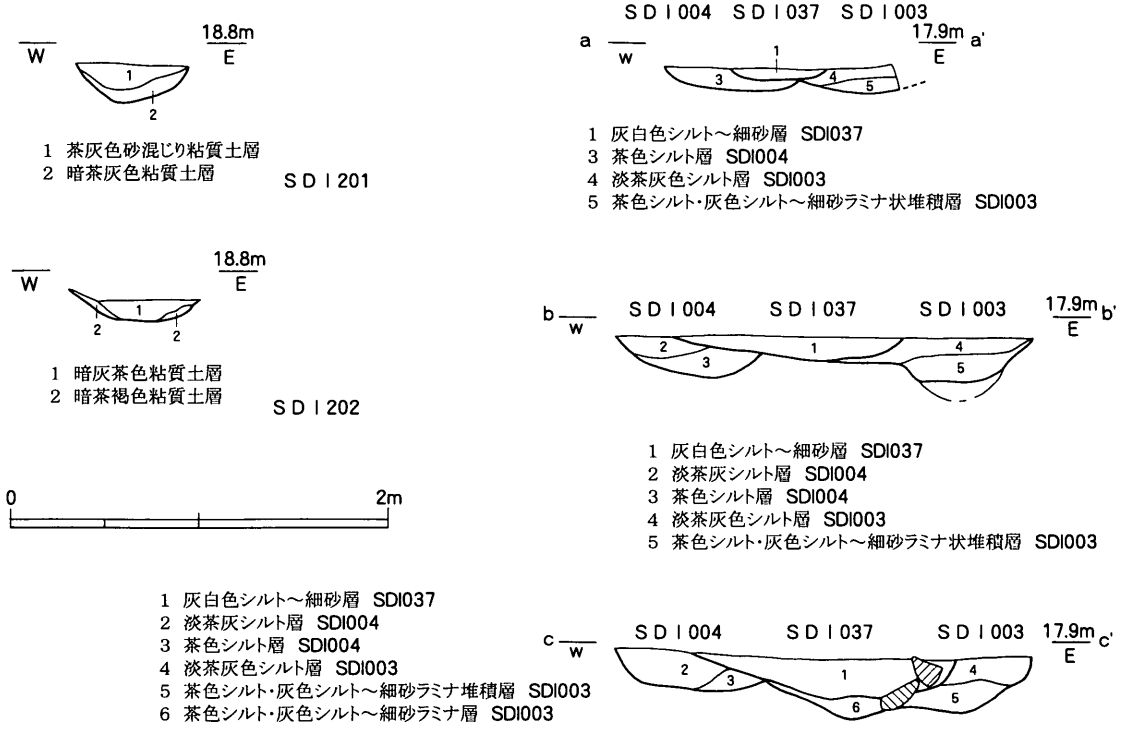
ＳＢ101出土遺物　1219～1221は弥生土器。1219は白色系の甕。1220は白色系の台付鉢。1221は香東川下流域産の高杯脚部片。

時期　ＳＢ１01・１02ともに主軸方向が条里地割に沿っていること、柱穴の掘り方が方形であること、および埋土の色調から古代の建物と考えられる。ＳＢ１01出土の弥生土器は混入であろう。

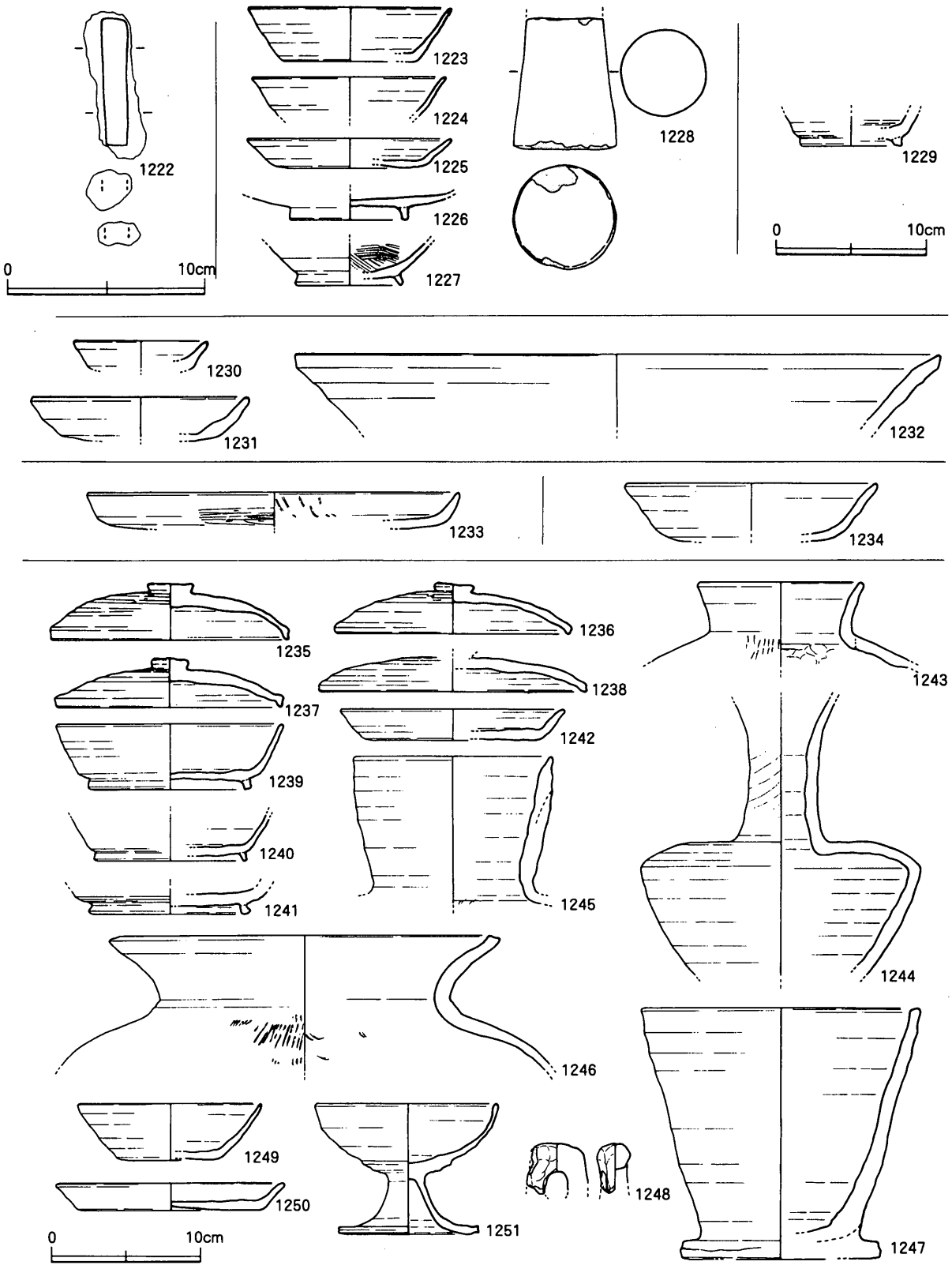
溝（ＳＤ）

ＳＤＩ027（発掘調査時遺構名：Ｉ-6区ＳＤ27）

出土遺物　1222は柱状の鉄製品。器種は不明である。



第170図　ＳＤＩ003・Ｉ004・Ｉ037・Ｉ201・Ｉ202断面図（S=1/40）



1222	ＳＤＩ027	1230～1232	ＳＰＩ4001
1223～1228	ＳＤＩ037	1233	ＳＰＩ4021
1229	ＳＤＩ303	1234	ＳＰＩ4029
		1235～1251	遺構外

第171図　ＳＤＩ027・Ｉ037・Ｉ303・ＳＰＩ4001・Ｉ4021・Ｉ4029・遺構外出土遺物実測図（S=1/4・1/3）

時期　埋土の色調から古墳時代後期～古代の遺構と判断できる。

ＳＤＩ003・Ｉ004・Ｉ037（発掘調査時遺構名：Ｉ－６区ＳＤ03・04・37）

Ｉ－６区東部で検出された、条里地割に沿う南北方向の溝。ＳＤＩ037埋没後に西側に隣接してＳＤＩ03・04が掘削されている。

ＳＤＩ037出土遺物　1223・1224は須恵器杯。1225は須恵器皿。1226は土師器椀。1227は黒色土器椀。1228は先端部を欠損する砂岩製の円錐状石製品。表面は丁寧に研磨されている。

時期　ＳＤＩ037は、1223～1226から10世紀前半と捉えられる。ＳＤＩ037に後出するＳＤＩ003・Ｉ004は埋土の色調から古代末～中世の遺構と判断できる。

ＳＤＩ303（発掘調査時遺構名：Ｉ－７区ＳＤ01・02・03）

出土遺物　1229は須恵器椀。

時期　出土遺物から８世紀中葉と判断できる。

小穴・柱穴（ＳＰ）

ＳＰＩ4001（発掘調査時遺構名：Ｉ－５区ＳＰ01）

出土遺物　1230は土師質土器小皿。1231は土師質土器杯。1232は十瓶山窯系須恵器鉢。

時期　出土遺物から８世紀後半と考えられる。

ＳＰＩ4021（発掘調査時遺構名：Ｉ－５区ＳＰ21）

出土遺物　1233は土師質土器皿。内面には放射状の暗文（ヘラミガキ）が認められる。

時期　出土遺物から８世紀後半と考えられる。

ＳＰＩ4029（発掘調査時遺構名：Ｉ－５区ＳＰ29）

出土遺物　1234は土師器杯。

時期　出土遺物から８世紀後半と考えられる。

遺構外出土遺物

1235～1251はＩ－５区包含層から出土した遺構に伴わない遺物。土師器の飯蛸壺1248を除き全て須恵器である。1235～1238は蓋。1239～1241は椀。1242・1250は皿。1243は壺。1244は長頸壺。1245は壺。1246は甕。1247は鉢。1249は杯。1251は高杯。

４．古代末～中世の遺構と遺物

掘立柱建物（ＳＢ）

ＳＢＩ03（概報遺構名：ＳＢ11）

Ｉ－５区東部で検出。桁行の間数は不明であるが、検出部分でも東辺と西辺に関しては柱穴１基ずつが撹乱により破壊されていると想定されるため、３間以上であると考えられる。梁行は２間である。

時期　柱穴（ＳＰ１4006）出土遺物から13世紀後半と考えられる。

ＳＢＩ04（発掘調査時遺構名：Ｉ－５区ＳＰ21）

Ｉ－６区東部、弥生時代後期の竪穴住居ＳＨ１03の上面で検出された。北西部コーナー部分のみの検出であるため、全体の大きさなどは不明である。

時期　遺物が出土していないため詳細な時期決定は困難であるが、埋土の状況から古代末～中世の建物とした。

ＳＢＩ05（概報遺構名：ＳＢ25）

Ｉ－６区で検出された桁行３間、梁行１間の掘立柱建物。

時期　出土遺物が認められず時期決定は困難であるが、周辺遺構との重複関係や埋土の状況から古代末～中世の遺構と判断した。

ＳＢＩ06（概報遺構名：ＳＢ26）

Ｉ－６で検出された掘立柱建物。構成する柱穴の配置が不均等なため、桁行・梁行の間数は不明であるが、おそらく２間×２間程度であると思われる。

時期　遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、埋土の状況から古代末～中世と考えられる。

井戸（ＳＥ）

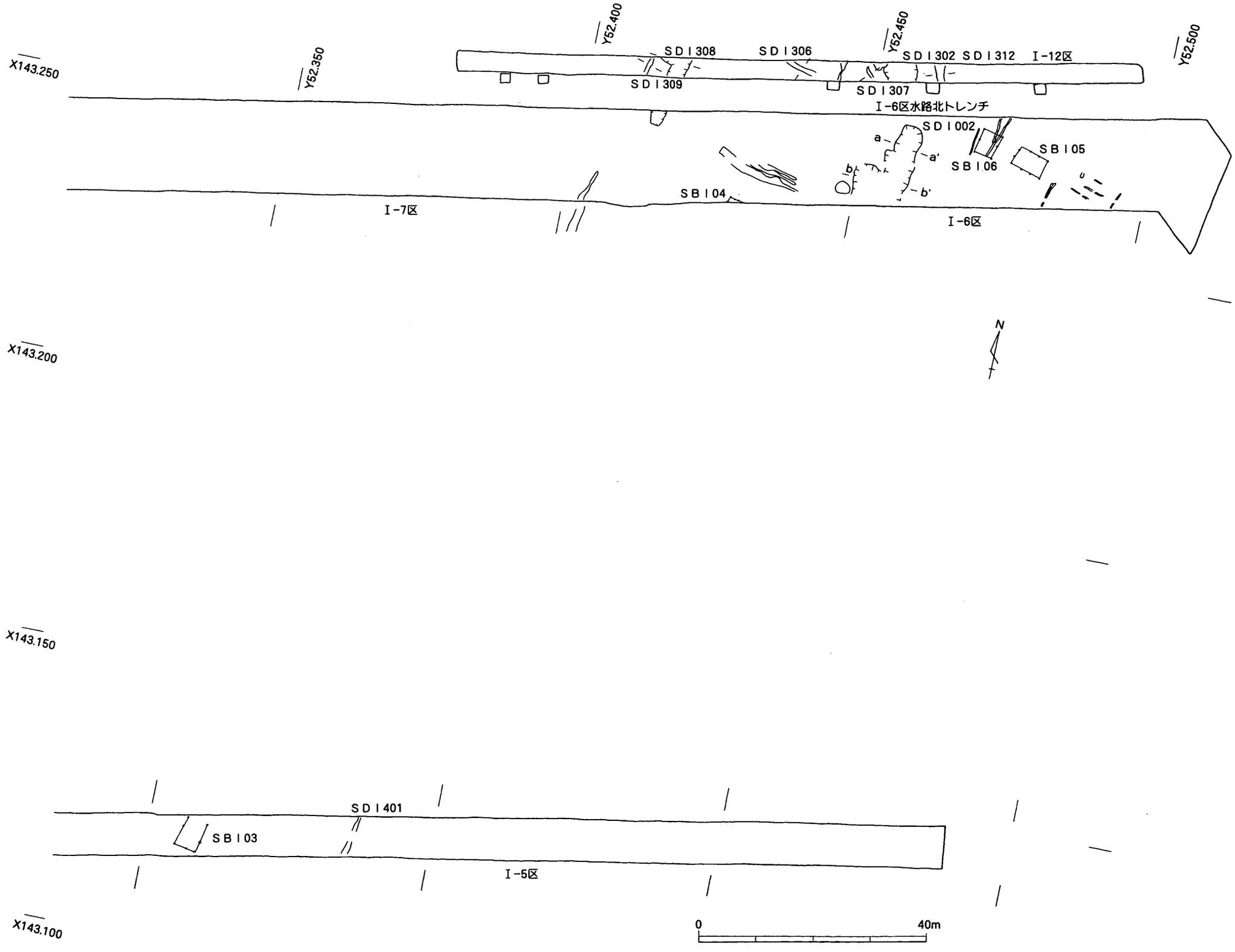
ＳＥＩ02（発掘調査時遺構名：Ｉ－６区ＳＥ01）

Ｉ－６区で検出された石積の井側を有する井戸。最終的に埋め戻す際に火輪（1255）が投棄されている。

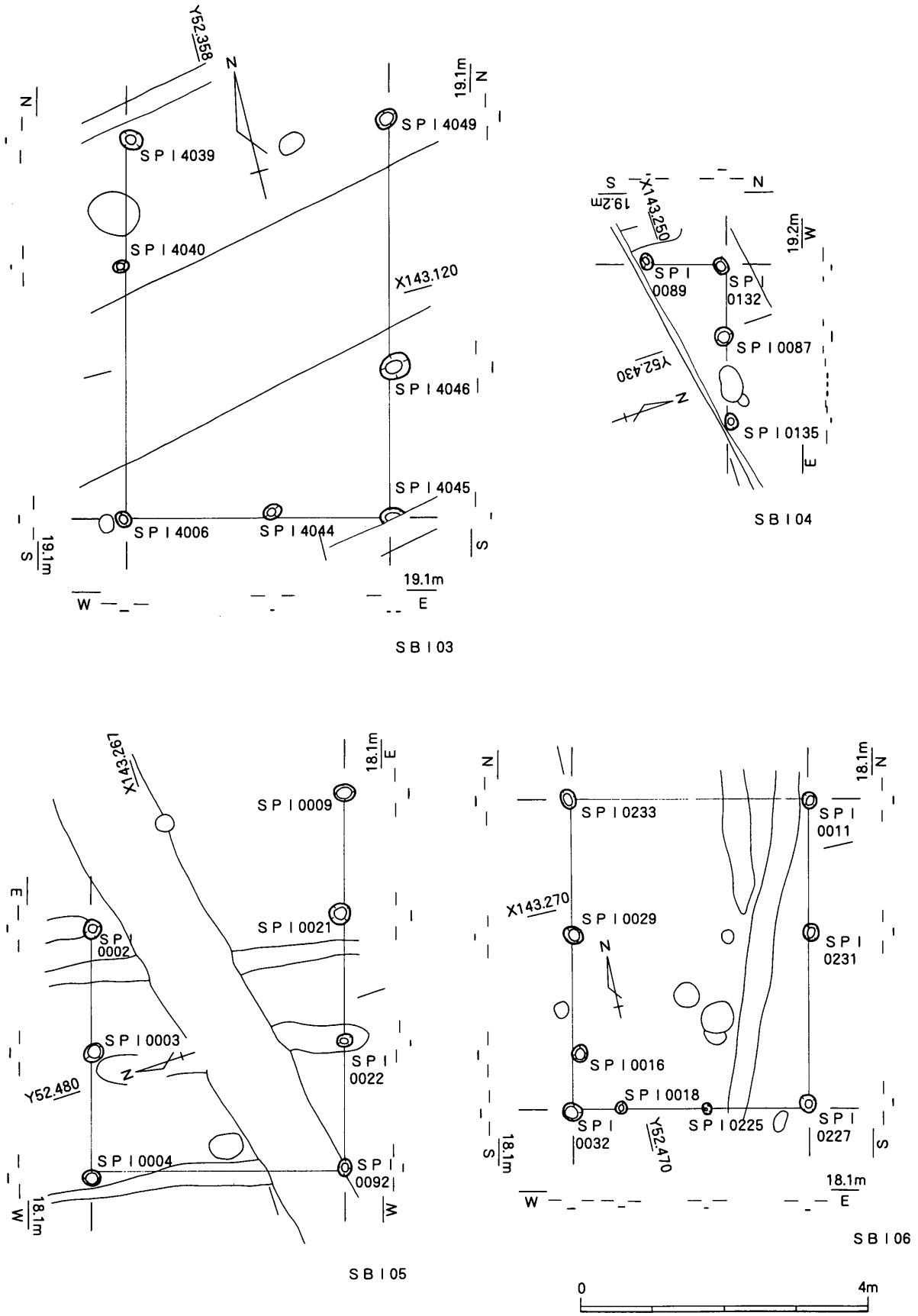
出土遺物　1252は土師質土器椀。1253は十瓶山窯系須恵器椀。1254は土師質土器焼成の楠井窯産擂鉢。1255は五輪塔の火輪。使用石材は灰色を呈する凝灰岩で、安山岩の小礫を含むことから三野町弥谷寺周辺産と想定されている柏・松田Ｂ類と判断できる。

時期　1254から14世紀前半と考えられるが、1255はやや降る時期の所産の可能性もある。

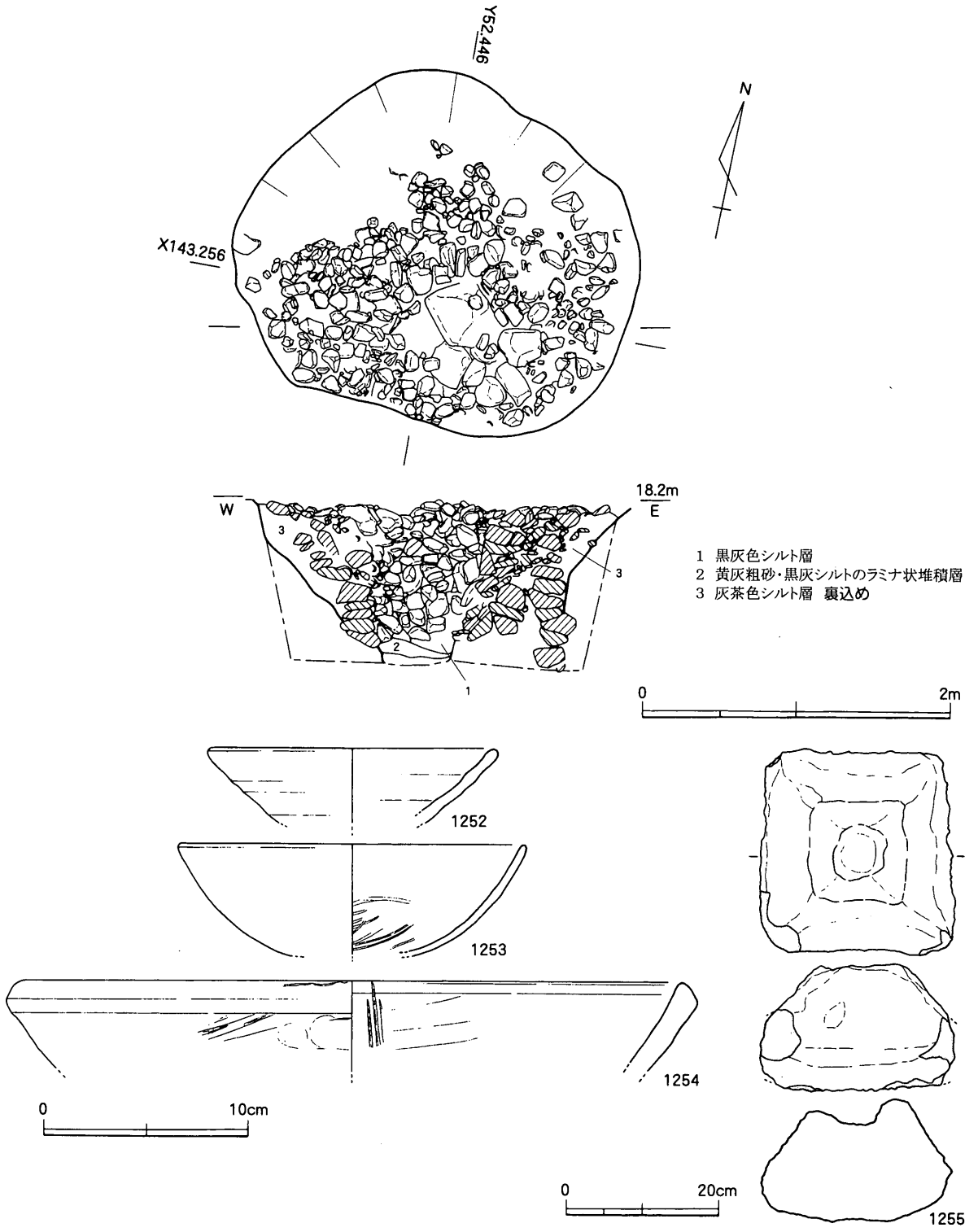
ＳＤＩ002（発掘調査時遺構名：Ｉ－６区ＳＤ02）



第172図　L地区古代末・中世主要遺構配置図（S=1/800）

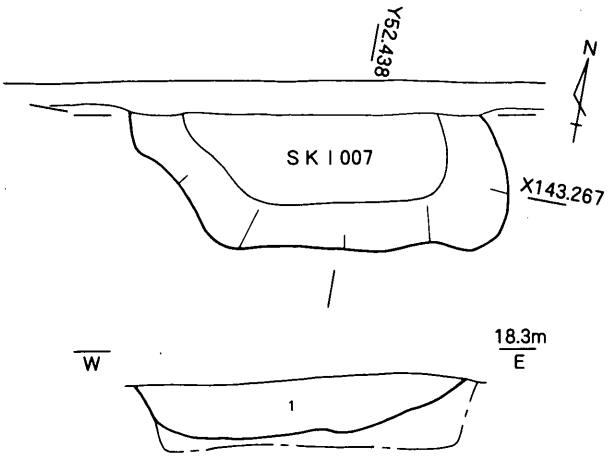


第173図　ＳＢＩ03～Ｉ06平・断面図（S=1/80）

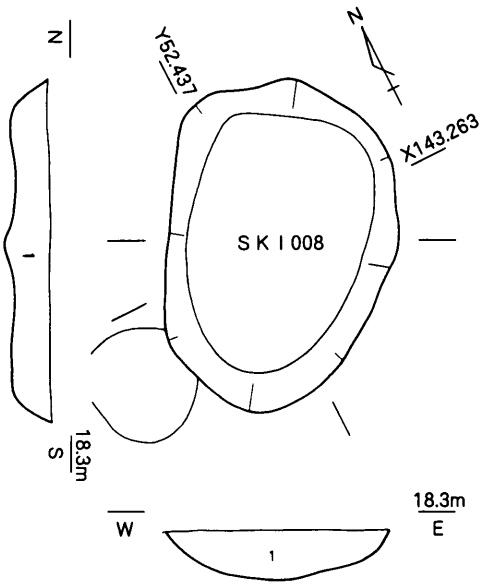


第174図　ＳＥＩ02平・断面図（S=1/40），出土遺物実測図（S=1/3・1/8）

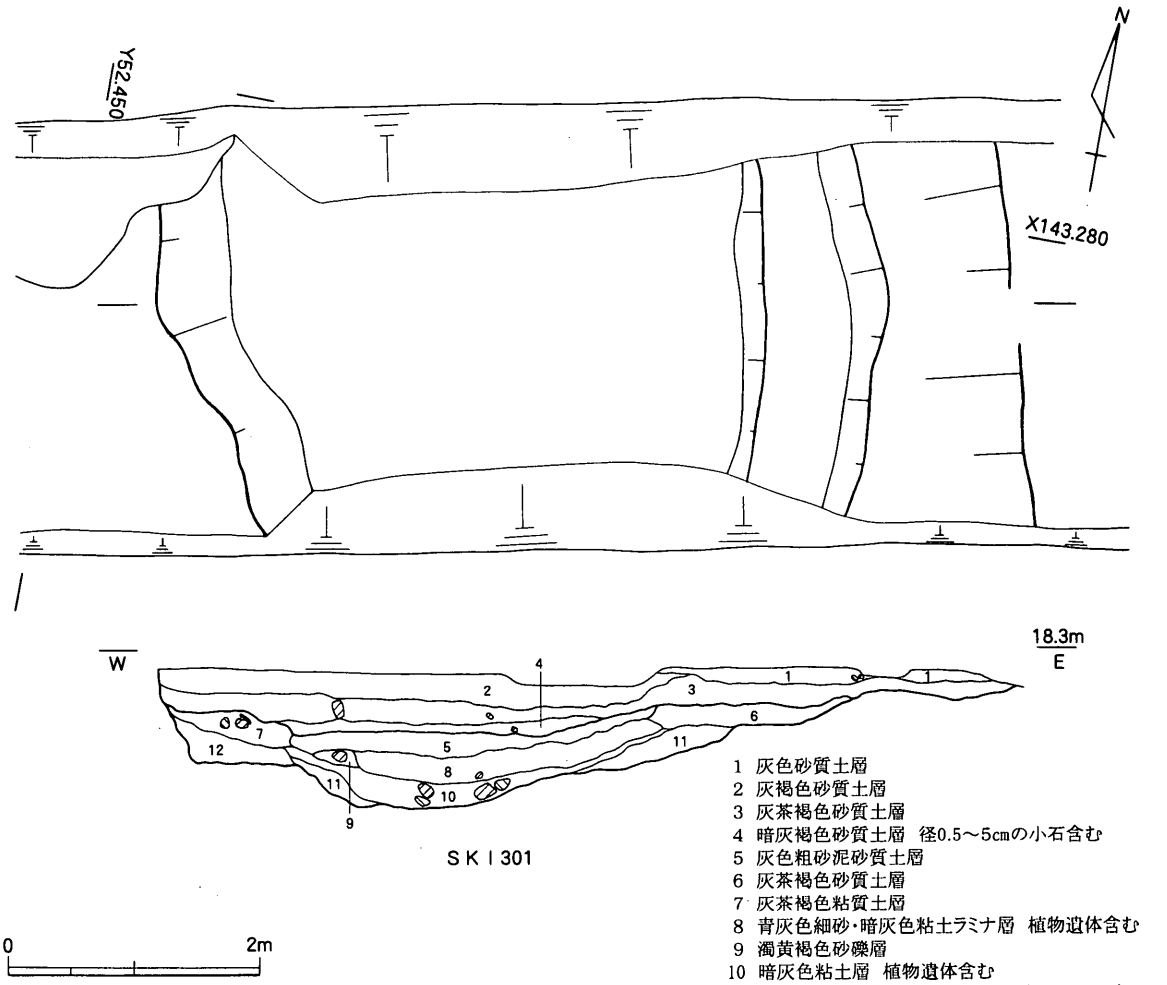
Ｉ－６区で検出された南北方向の溝。14～15世紀の資料がまとまって得られた本遺構、およびほぼ同時期の高松平野中世遺跡から出土した土器・陶磁器の破片数をカウントし、組成表を作成した（第３表）。その結果、海浜部に位置する浜ノ町遺跡に近畿地方や岡山県からの搬入品が多く見られる他は、ほぼ同様の組成を示すことが明らかとなった。



1 灰茶色シルト層 径10cm～20cmの円礫及び淡黄色粗砂含む

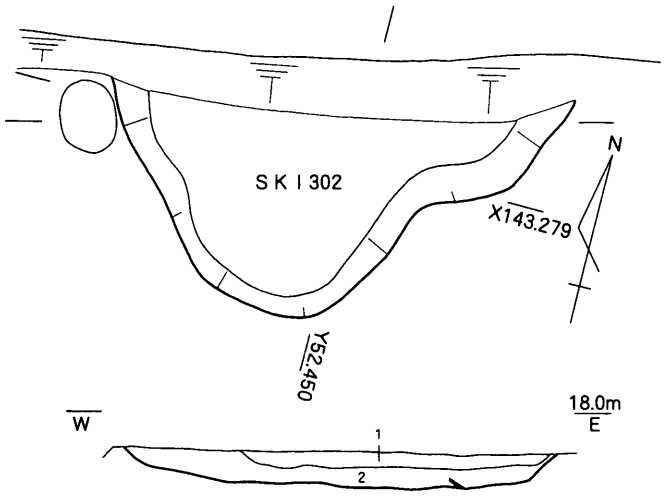


1 灰茶色シルト層

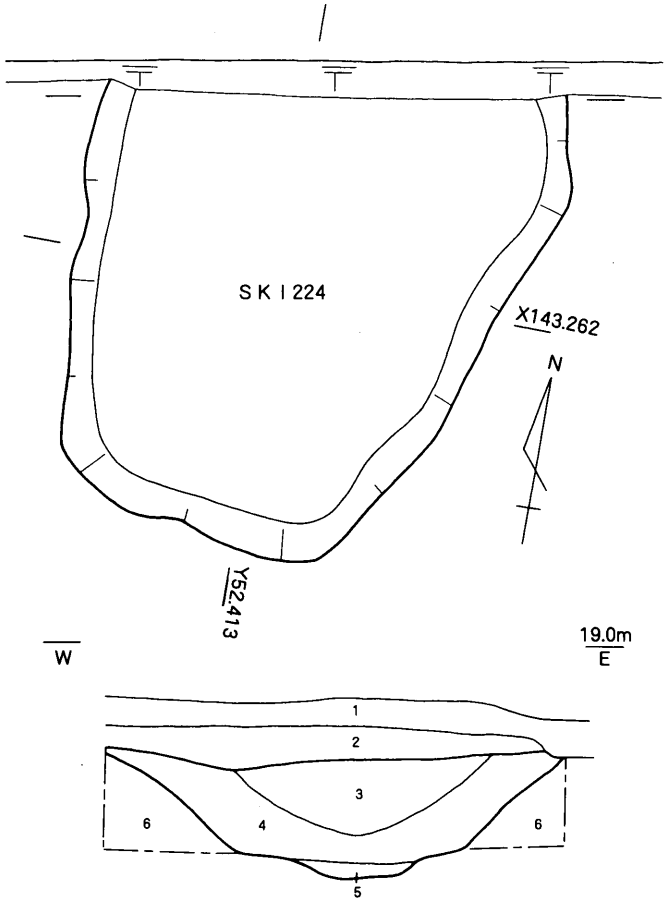


1 灰色砂質土層
2 灰褐色砂質土層
3 灰茶褐色砂質土層
4 暗灰褐色砂質土層 径0.5～5cmの小石含む
5 灰色粗砂泥砂質土層
6 灰茶褐色砂質土層
7 灰茶褐色粘質土層
8 青灰色細砂・暗灰色粘土ラミナ層 植物遺体含む
9 濁黄褐色砂礫層
10 暗灰色粘土層 植物遺体含む
11 濁黄褐色中～粗砂層 灰色粘土ブロック状に含む
12 濁黄褐色中砂層

第175図 SKI 007・I 008・I 301平・断面図（S=1/40・1/60）



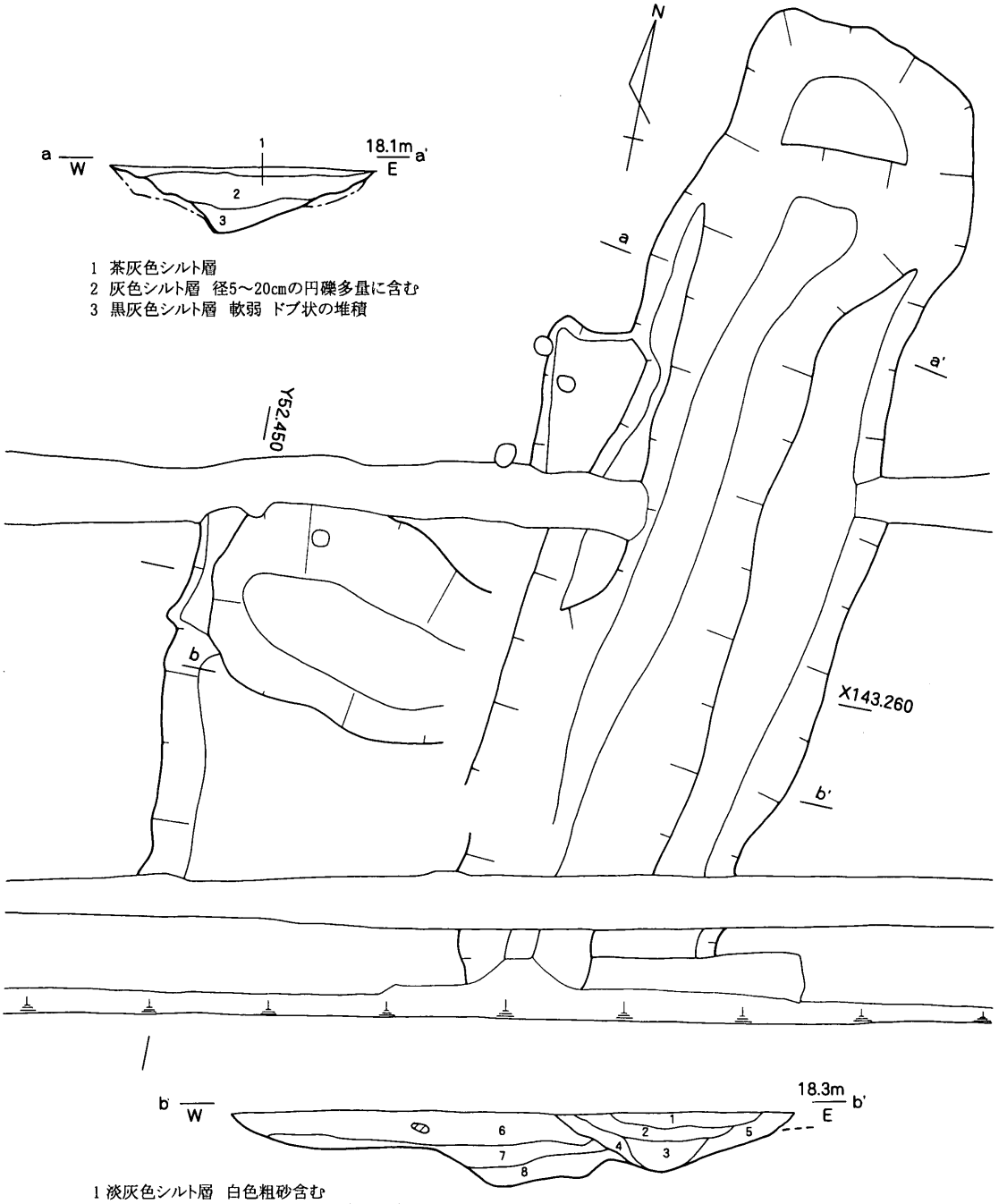
1 黒褐色粘質土層 Mn・炭化物粒含む
2 灰褐色粘質土層 Mn含む



1 旧耕作土
2 暗茶褐色粘質土層
3 褐色粘土混じり礫層 径3～10cmの礫
4 暗褐色砂礫層 径2～5cmの礫
5 暗灰色砂層
6 褐色砂層 粒子が細かい

0 2m

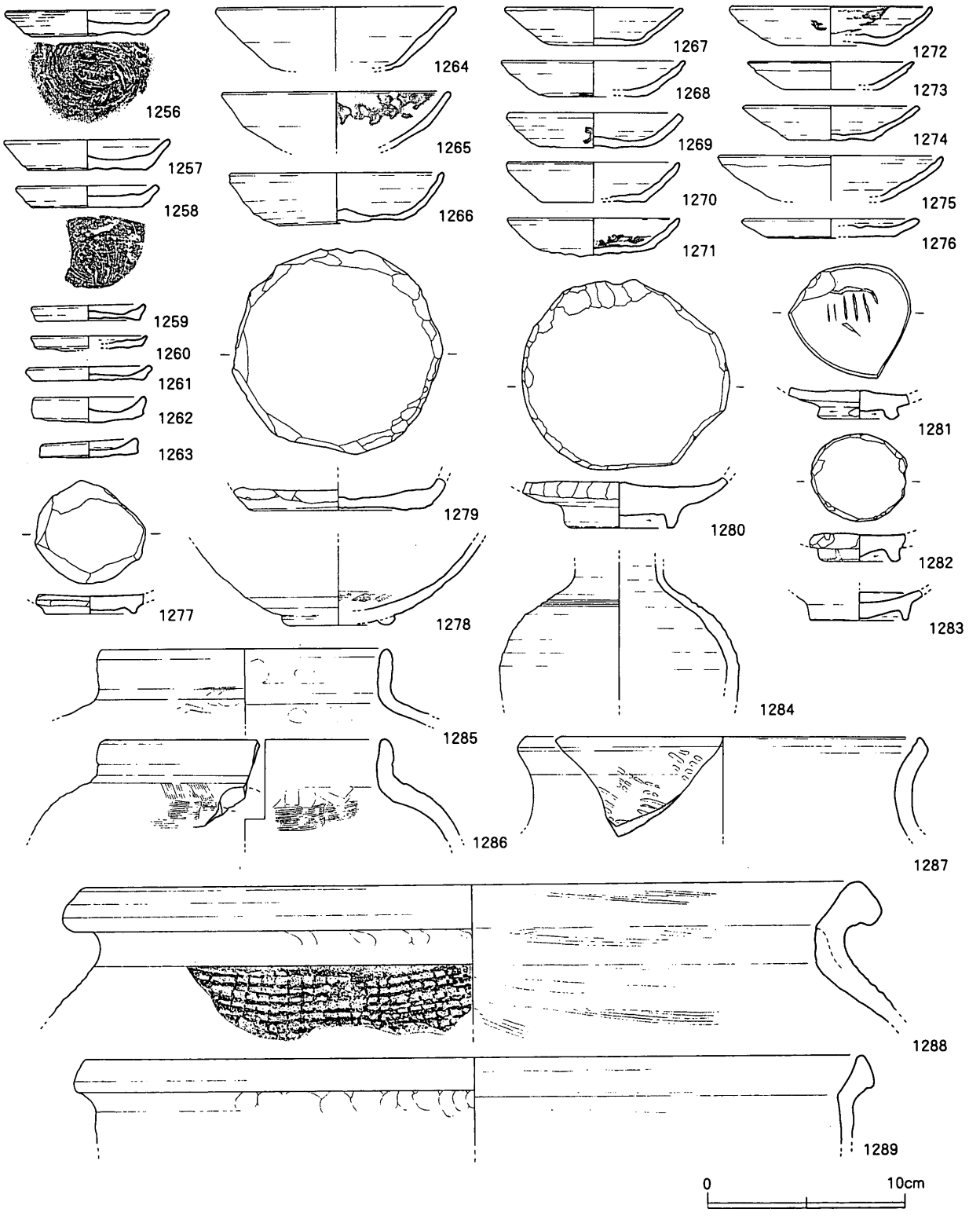
第176図 SKI 224・I 302 平・断面図 (S=1/40)



第177図　ＳＤＩ002平・断面図（S=1/100）

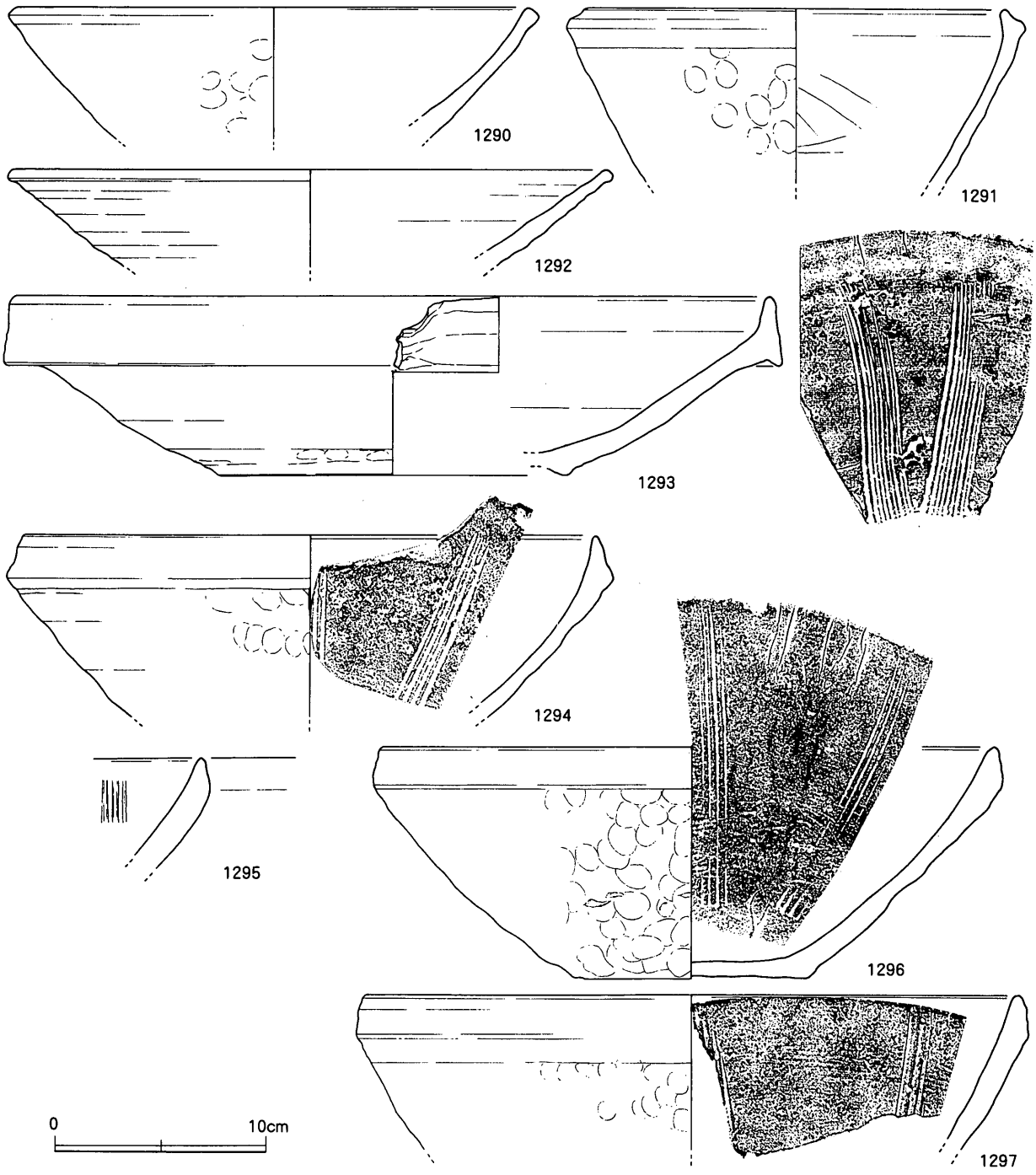
			空港跡地 SD1 002	浜ノ町SX 401＋SX 642	西打B3区 SX 08	東山崎・水田E区SD 04	百相坂 SX 08
在地	土師質土器	小皿	23	120	3		33
		杯	113	2009	239	55	271
		椀	1	1			
		甕	4	2			
		鉢	25	7	3	7	5
		鍋	46	25	13	14	10
		把手付鍋	7		1		
		足釜	311	191	125	43	55
		羽釜		7			
		計	530	2362	384	119	374
	十瓶山窯系	小皿		2			
		杯		3			6
		椀	6	29	3	17	16
		甕	13	14	5	1	
		鉢	3	3		1	1
		黒色土器椀					2
		計	22	51	8	19	25
	楠井窯系	鉢	40	7	9	1	
	在地産瓦質土器	鍋		1			
		茶釜		1			
		計	0	2	0	0	0
	在地	計	592	2422	401	139	399
			92.64%	85.01%	95.70%	92.67%	99.25%
吉備	吉備系	椀		3			
		鍋		2			
		計	0	5	0	0	0
	亀山	鉢		2			
		甕	2	5		1	
		計	2	7	0	1	0
	備前	大甕	9	18	1		
		鉢	5	27	2		
		壺	3	17	1	2	
		不明	19	263	13	7	
		計	36	325	17	9	0
	吉備	計	38	337	17	10	0
			5.95%	11.83%	4.06%	6.67%	0.00%
播磨	東播系須恵器	鉢	1	10		1	
	播磨	計	1	10		1	0
	播磨		0.16%	0.35%	0.00%	0.67%	0.00%
畿内	瓦器	椀	1				
		皿		3			
		計	1	3	0	0	0
	京都系土師器	皿		55			
	瓦質土器	甕		2			
		火鉢		1			
		風炉		1			
		計	0	4	0	0	0
	畿内	計	1	62	0	0	0
			0.16%	2.18%	0.00%	0.00%	0.00%
東海	常滑	甕		3			
	古瀬戸	鉢・皿	1	2			
		水注		1			
		計	1	3	0	0	0
	東海	計	1	6	0	0	0
			0.16%	0.21%	0.00%	0.00%	0.00%
肥前	滑石製	石鍋		2			
	肥前		0	2	0	0	0
			0.00%	0.07%	0.00%	0.00%	0.00%
中国	青磁	碗	2	5	1		2
	白磁	杯		2			1
		椀・皿	4	3			
		計	4	5	0	0	1
	中国	計	6	10	1	0	3
			0.94%	0.35%	0.24%	0.00%	0.75%
	総計		639	2849	419	150	402

第3表 14～15世紀における高松平野出土土器・陶磁器組成表



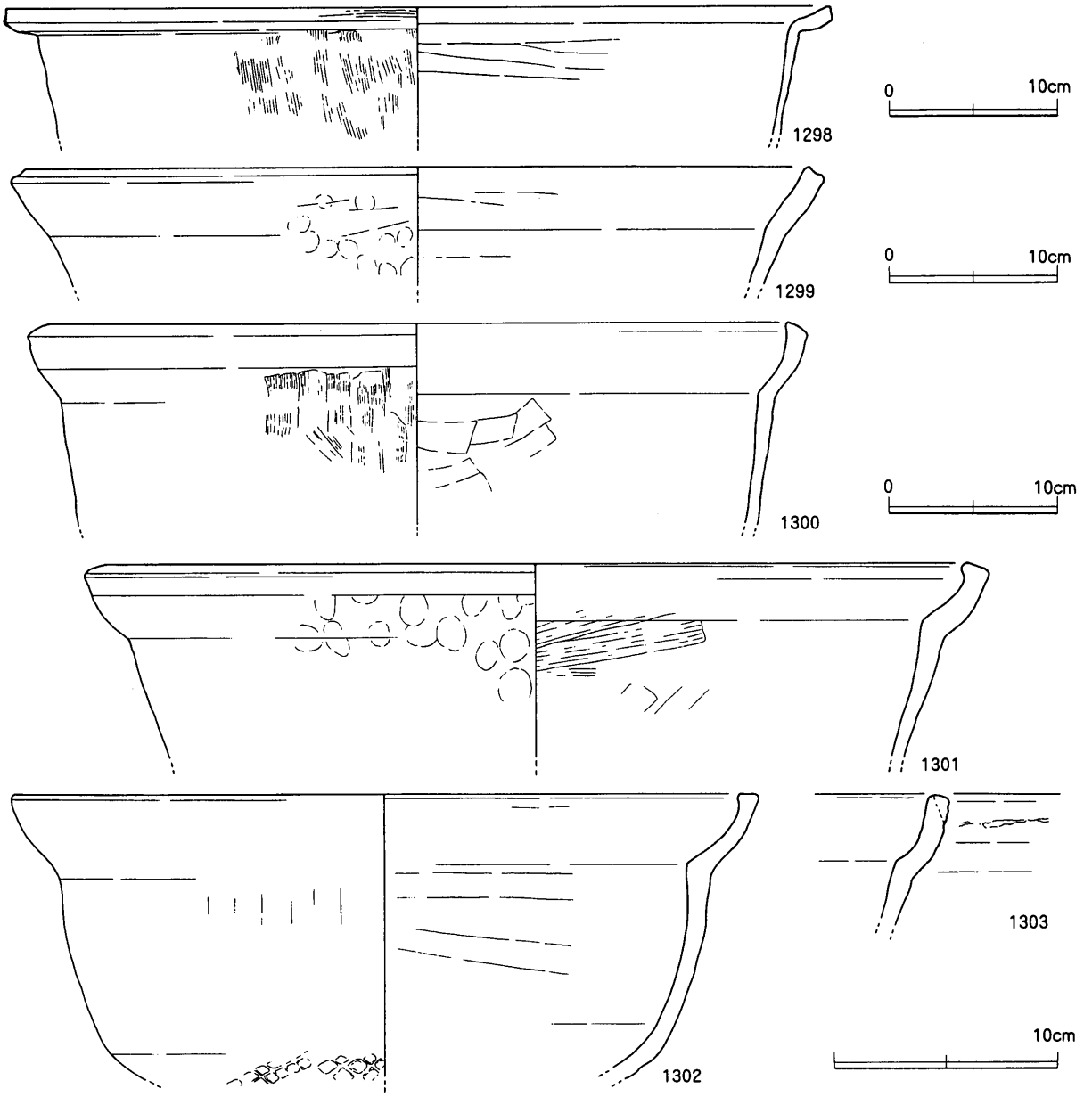
第178図　ＳＤＩ002出土遺物実測図１（S=1/3）

出土遺物　1256～1263は土師質土器小皿。1256・1258の底部外面には回転糸切りの痕跡が残る。1264はロクロ未使用の京都系土師器皿。1265～1276は土師質土器杯。1270には「口縁部→体部ナデ手法」の痕跡が認められない。1273は乗松１ｅ型式。1277・1279～1282は円盤状加工品。1277は土師質土器椀、1278は十瓶山窯系須恵器椀、1279は古代の須恵器杯、1280



第179図　ＳＤＩ002出土遺物実測図２（S=1/3）

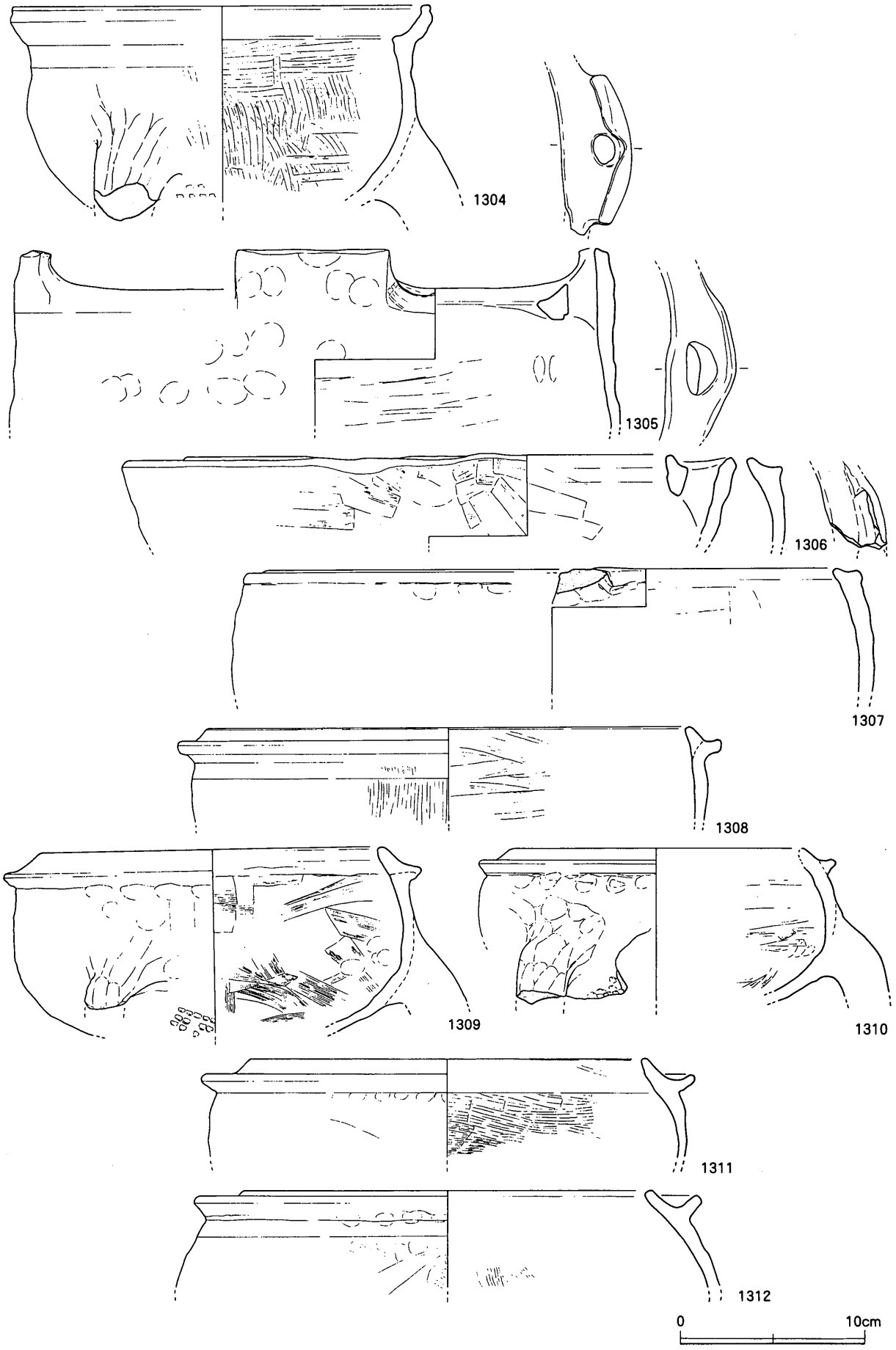
は青磁碗、1281・1282は白磁碗の転用。1281の打ち欠かれた部分には、研磨のためか剥離面が見られない。また、見込み部には釉を削ることで表現された文様（記号）が認められる。1283は白磁碗。1284は備前徳利。肩部には２条の沈線が施されている。1285・1286は土師質土器甕。1286の頸部直下には孔が穿たれている。1287は亀山窯系須恵器甕。1288は十瓶山窯産の甕。1289は土師質土器甕か。1290は須恵器鉢。1291は土師質土器鉢。1292は古瀬戸盤類。1293は体部の立ち上がりの角度がかなり緩い、乗岡中世５ａ期の備前擂鉢。破片資料ではあるが、口縁部が水平であるため部分的な歪みとは考えられない。1294～1297は楠井窯産擂鉢。1295～1297は暗灰色を呈する瓦質焼成。1297は佐藤Ａ－３類。1298～1303は土師質土器鍋。1304は土師質土器足鍋。1305～1307は土師質土器把手付鍋。1305の把手部はほぼ垂直に立ち上がり、上端



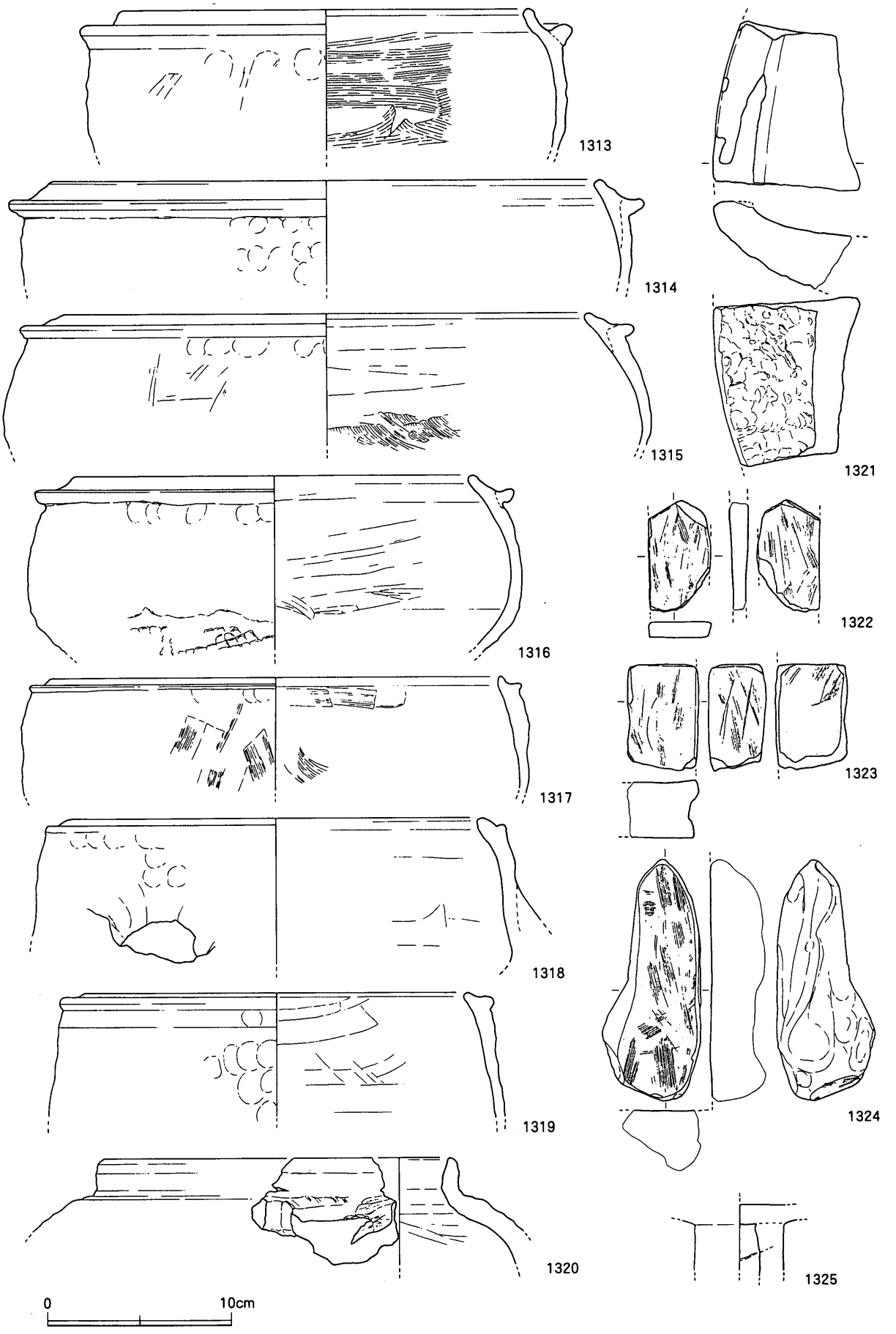
第180図　ＳＤＩ002出土遺物実測図３（S=1/4・1/3）

面・側面が角を持つよう面取りされている。一方、1306・1307の把手部は体部よりやや外に膨らむかたちで取り付けられ、上端面・側面の面取りも認められない。両者の差異を時期的なものと捉えれば、後者の方が17世紀の資料により近い形態であるため、1305→1306・1307の変遷が想定できる。1308は土師質土器羽釜。1309～1319は土師質土器足釜。1320は土師質土器茶釜。器種不明の1321は砂岩製。片面には工具痕が残り、もう一方の面は研磨により丁寧に仕上げられている。1322～1324は砥石。流紋岩製の1322・1323は乗松２類、1324は砂岩製。1325は古墳時代の須恵器高杯。

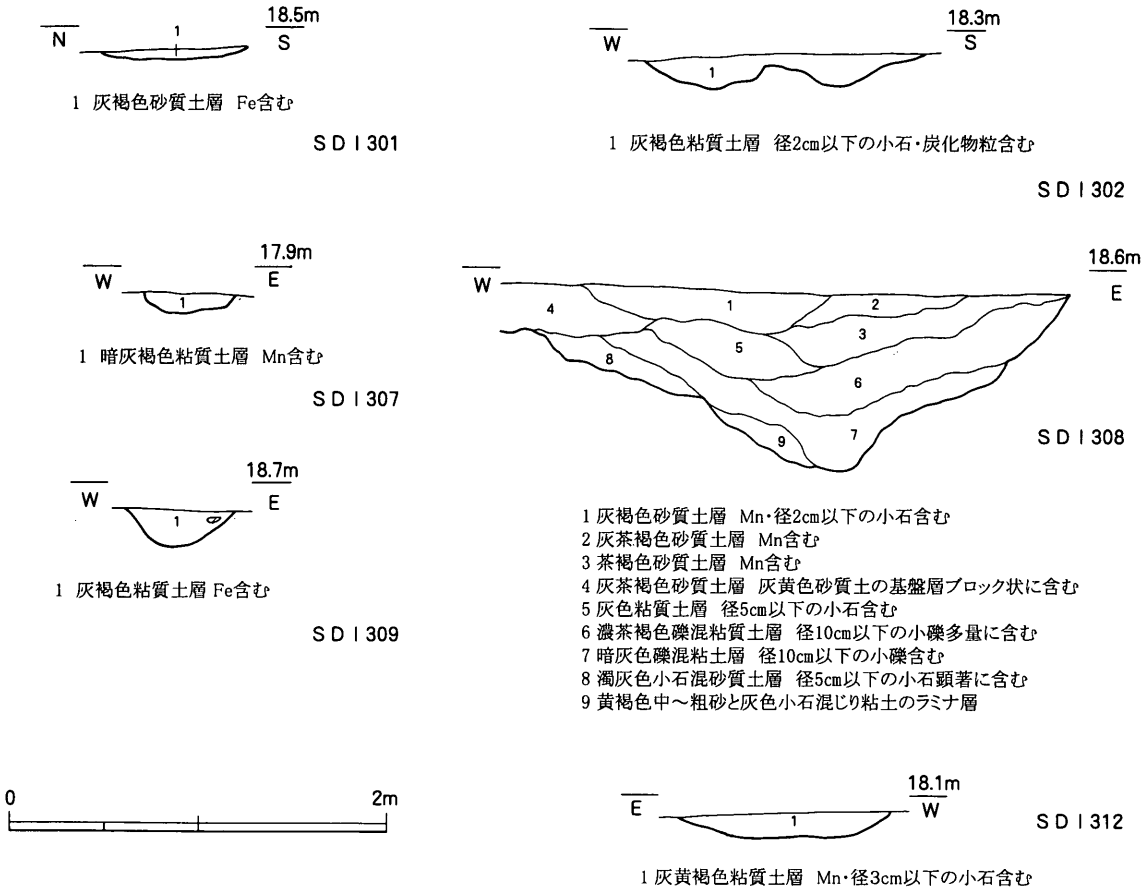
時期　最終埋没は、最も新しい時期を示す1065から15世紀後半と考えたい。ただし、14世紀初頭からの遺物を含むため、存続の時期幅はあると考える。



第181図　ＳＤＩ002出土遺物実測図４（S=1/3）



第182図　ＳＤＩ002出土遺物実測図５（S=1/3）



第183図　ＳＤＩ301・Ｉ302・Ｉ307・Ｉ308・Ｉ309・Ｉ312断面図（S=1/40）

ＳＤＩ308（発掘調査時遺構名：Ｉ－12区ＳＤ08）

Ｉ－12区中央部からＩ－７区北東部にかけて検出された南北方向の溝。なお本溝の南端はＩ－７区で収束する。

出土遺物　1326は土師質土器小皿。1327・1329は土師質土器杯。1328は青磁碗。1330は須恵器甕。1331は土師質土器鉢。1332は土師質土器擂鉢。1333は楠井窯産擂鉢。軟質の須恵質焼成である。1334は土師質土器擂鉢。1335は土師質土器鍋。1336～1338は土師質土器足釜。1339は竈。1340・1341は平瓦。1342は丸瓦。1343は中期初頭と考えられる弥生土器壺。

時期　1327・1329から14世紀中葉埋没と考えたい。

ＳＤＩ034（発掘調査時遺構名：Ｉ－６区ＳＤ34）

Ｉ－６区で検出された南北方向の溝。

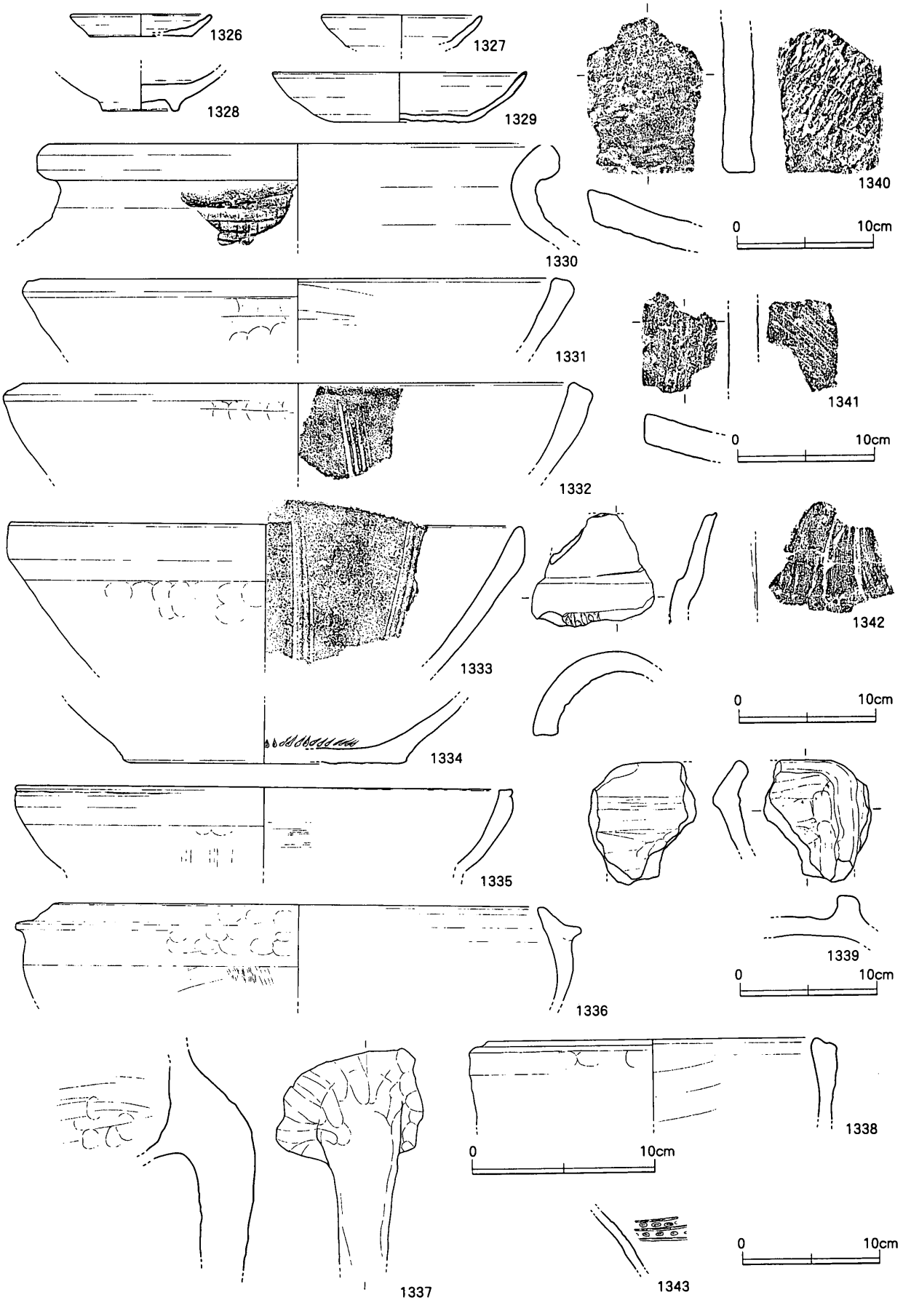
出土遺物　1344は土師質土器杯。1345は青磁碗。1346は備前甕口縁部。1347・1348は土師質土器足釜。1349は平瓦。

時期　1347・1348から16世紀初頭最終埋没と判断できる。16世紀後半にまで降る1346は混入と考えたい。

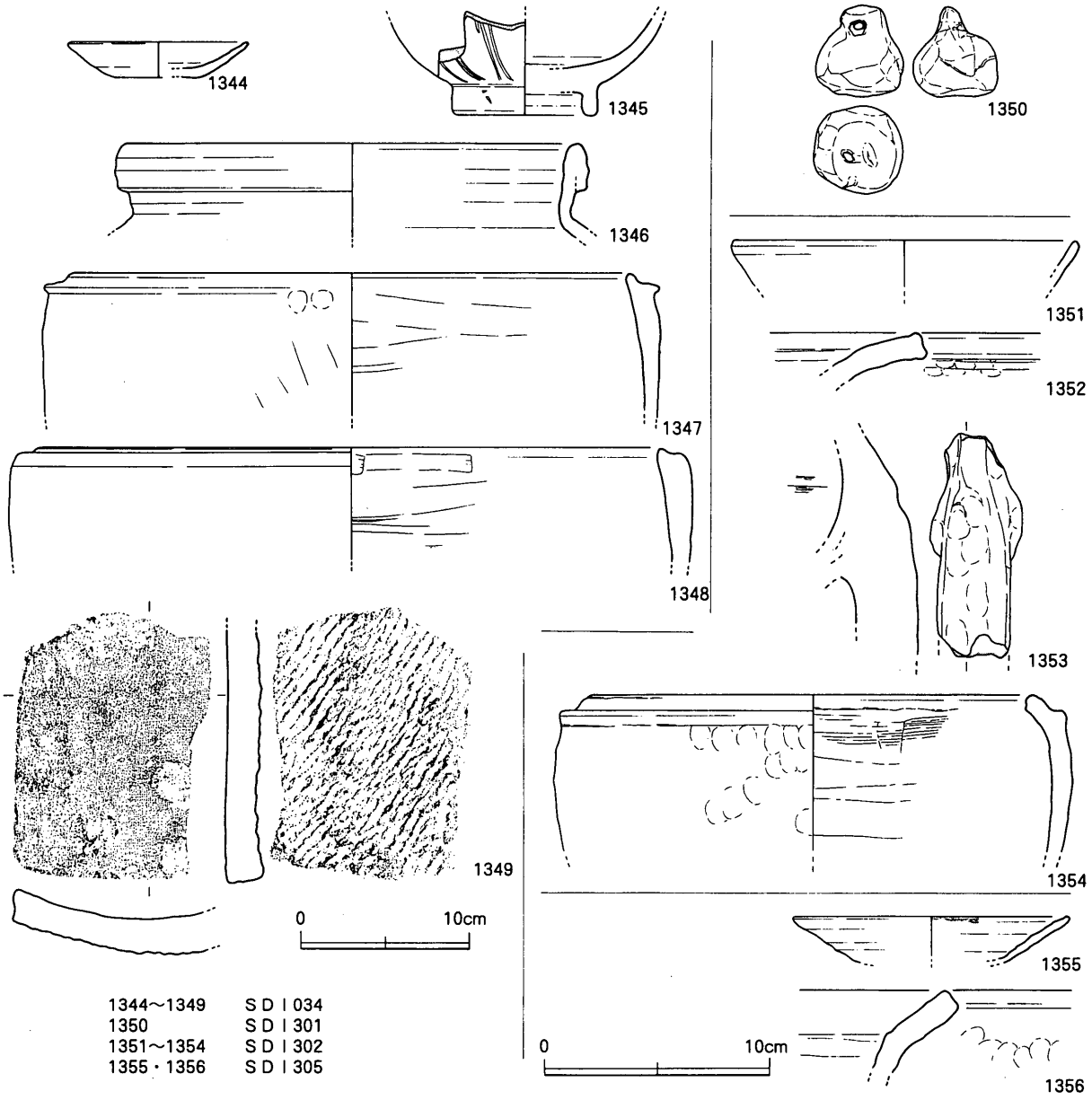
ＳＤＩ301（発掘調査時遺構名：Ｉ－12区ＳＤ01）

Ｉ－12区で検出された南北方向の溝。

出土遺物　1350は土製の鈴。



第184図　ＳＤＩ 308出土遺物実測図（S=1/3・1/4）



第185図　ＳＤＩ034・Ｉ301・Ｉ302・Ｉ305出土遺物実測図（S=1/4・1/3）

時期　遺物が1350のみであるため、詳細な時期は決定し難いが、周辺の遺構の状況から概ね中世と思われる。

ＳＤＩ302（発掘調査時遺構名：Ｉ－12区ＳＤ02）

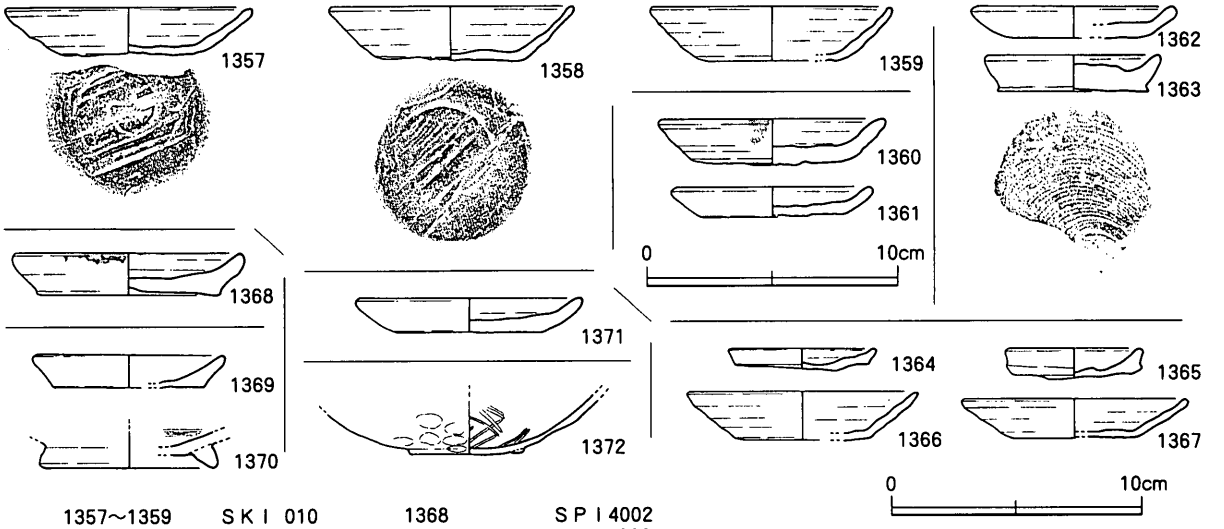
出土遺物　1351は土師質土器杯。小片のため、口径・傾きが実測図とは異なる可能性もある。1352は土師質土器鍋。1353・1354は土師質土器足釜。

時期　1354から15世紀後半と考えられる。

ＳＤＩ305（発掘調査時遺構名：Ｉ－12区ＳＤ05）

出土遺物　1355は乗松１ｅ型式の土師質土器杯。口縁部内面には部分的に煤が付着している。1356は土師質土器鍋。

時期　1355から15世紀前葉と考えられる。



1357～1359	ＳＫＩ 010	1368	ＳＰＩ4002
1360・1361	ＳＫＩ 301	1369・1370	ＳＰＩ4006
1362・1363	ＳＰＩ0095	1371	ＳＰＩ4007
1364・1367	ＳＰＩ0097	1372	ＳＰＩ4008

第186図　ＳＫＩ010・Ｉ301、ＳＰＩ0095・Ｉ0097・Ｉ4002・Ｉ4006・Ｉ4007・Ｉ4008出土遺物実測図（S=1/3）

土坑（ＳＫ）

ＳＫＩ010（発掘調査時遺構名：Ｉ－６区ＳＫ10）

出土遺物　1357は乗松１ｄ型式、1358・1359は乗松１ｃ型式の土師質土器杯。

時期　出土した杯から14世紀後葉と判断できる。

ＳＫＩ301（発掘調査時遺構名：Ｉ－12区ＳＫ01）

出土遺物　1360・1361は土師質土器小皿。

時期　出土遺物から12世紀後半と考えられる。

小穴・柱穴（ＳＰ）

ＳＰＩ0095（発掘調査時遺構名：Ｉ－６区ＳＰ95）

出土遺物　1362・1363は土師質土器小皿。1363の底部切り離し手法は回転糸切りである。

時期　1363から13世紀末～14世紀前葉と考えられる。

ＳＰＩ0097（発掘調査時遺構名：Ｉ－６区ＳＤ97）

出土遺物　1364・1365は土師質土器小皿。1366は乗松１ｃ型式、1367は１ｄ型式の土師質土器杯。

時期　1367から14世紀後葉と判断できる。

ＳＰＩ4002（発掘調査時遺構名：Ｉ－５区ＳＰ02）

出土遺物　1368は土師質土器小皿。口縁部外面には部分的に煤が付着している。

時期　出土遺物から 13 世紀前半と考えられる。

ＳＰＩ 4006（発掘調査時遺構名：Ｉ－５区ＳＰ 06）

掘立柱建物ＳＢ１ 03 を構成する柱穴。

出土遺物　1369 は土師質土器小皿。1370 は黒色土器椀。

時期　1369 から 13 世紀後半と考えられる。

ＳＰＩ 4007（発掘調査時遺構名：Ｉ－５区ＳＰ 07）

出土遺物　1371 は土師質土器小皿。

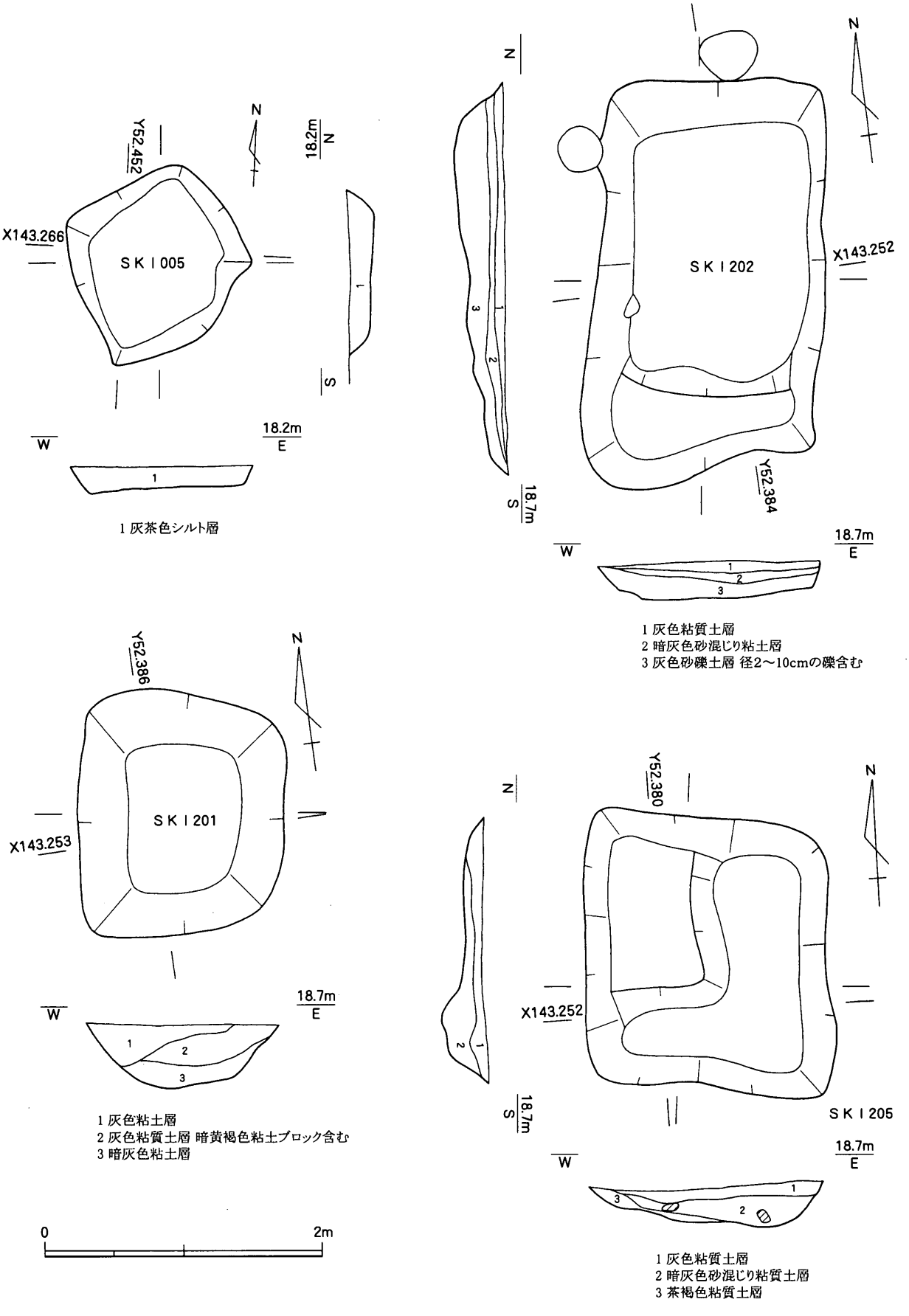
時期　出土遺物から 12 世紀後半～ 13 世紀前半と考えられる。

ＳＰＩ 4008（発掘調査時遺構名：Ｉ－５区ＳＰ 08）

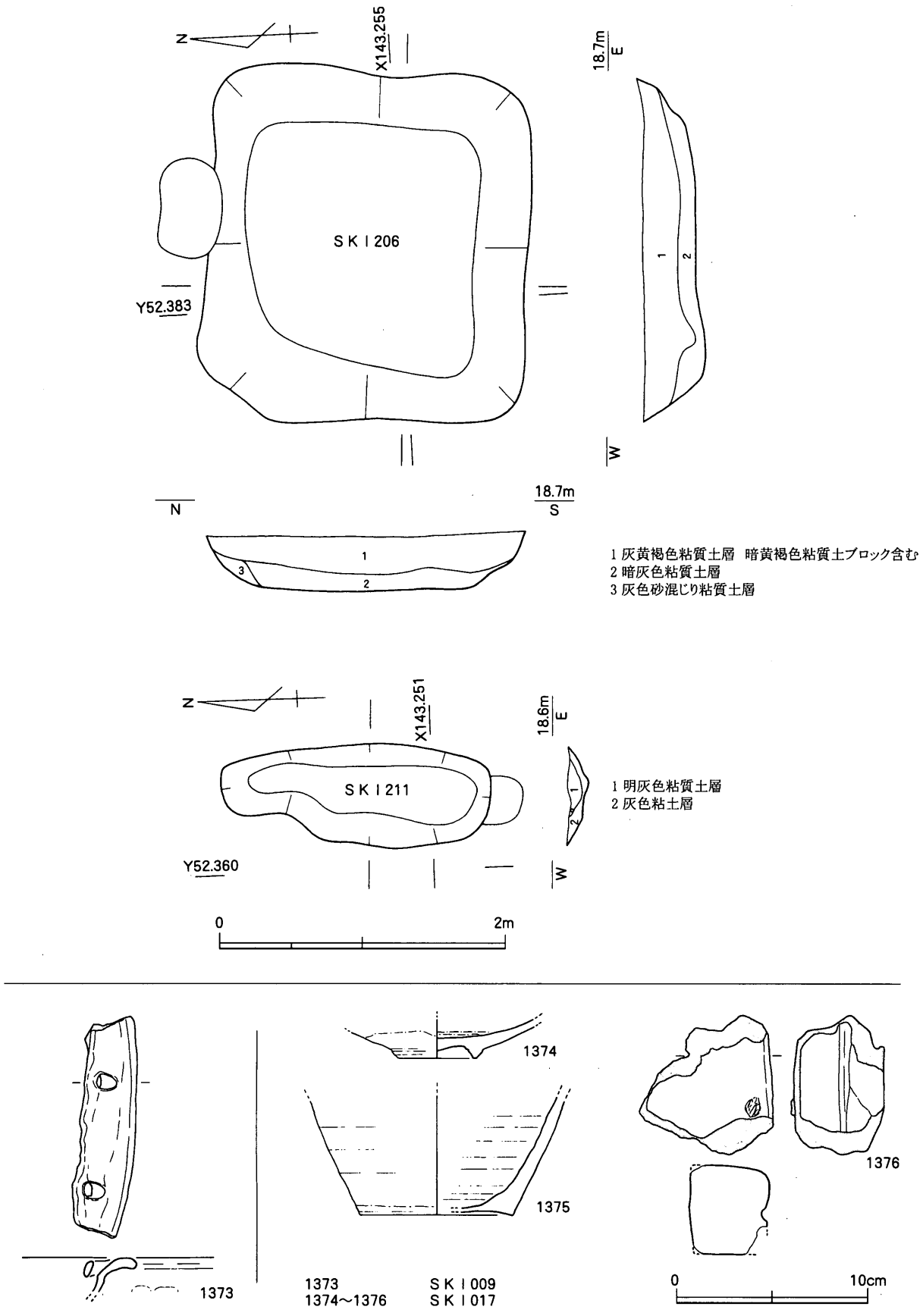
出土遺物　1372 は瓦器椀。

時期　出土遺物から 13 世紀前半と考えられる。

5. 近世以降の遺構と遺物



第187図　SK I 005・I 201・I 202・I 205 平・断面図（S=1/40）



第188図　SKI 206・I 211　平・断面図（S=1/40）、SKI 009・I 017
出土遺物実測図（S=1/3）

土坑（ＳＫ）

ＳＫＩ009（発掘調査時遺構名：Ｉ－６区ＳＫ09）

出土遺物　1373は御厩系の焙烙。

時期　18世紀前半以降と考えられる。

ＳＫＩ017（発掘調査時遺構名：Ｉ－６区ＳＫ17）

出土遺物　1374は肥前系磁器碗。1375は施釉陶器壺。1376は器種不明。

時期　1374から18世紀後半～19世紀前半と捉えられる。

第４節　近世以降の瓦

１．はじめに

近年、高松城跡の発掘調査及び資料整理の進展に伴い、高松城下を中心とした近世～近代の瓦について分類・編年等が行われ、重要な知見が得られつつある（佐藤 2003・乗松編 2004）。一方、農村部である空港跡地遺跡では刻印瓦の検討が行われ、近代に遺跡周辺（林地区）で小規模な瓦生産が始まったと想定されている（佐藤 1994・2000）。

本節では、佐藤 2003 の手法に準じて軒瓦の同笵関係を中心とした分類を行い、佐藤 2003 及び乗松編 2004 で列挙されたもの以外に、新たに確認されたものについて報告する。

２．軒平瓦

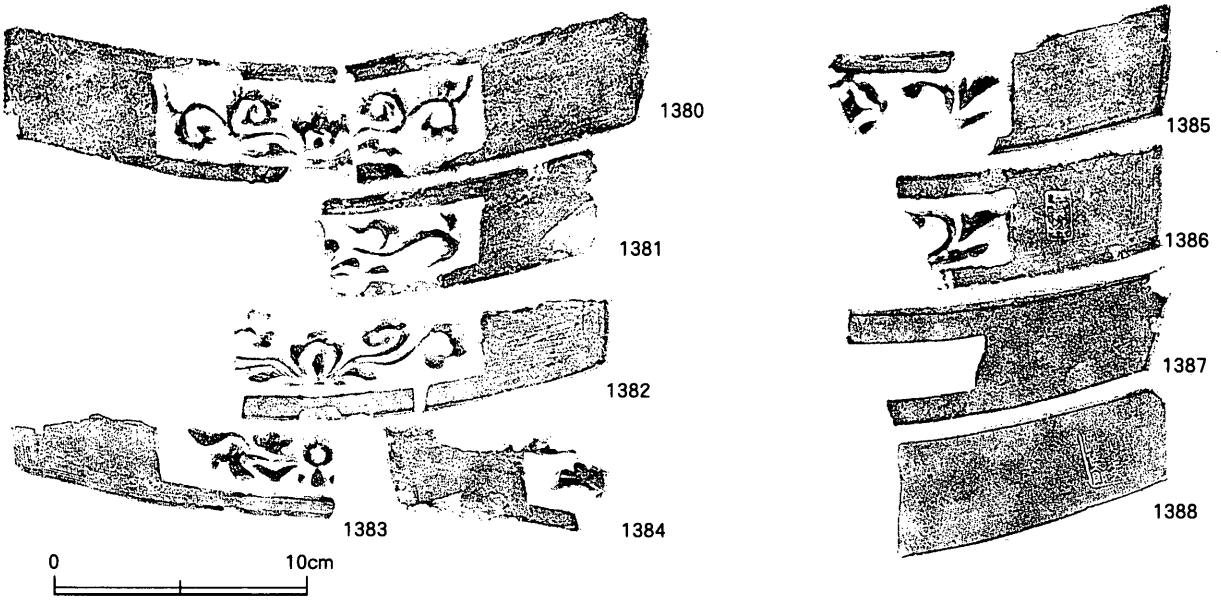
軒平瓦は、中心飾りの形態と唐草文の巻き方を中心に分類されており（佐藤 2003）、これに準じて分類・記述を行う。

1380 ～ 1383 は上向きの半裁花菱文を中心飾りにもつもの。佐藤ＸＸⅡ類。

1380・1381 は中心飾りから伸びる唐草文が２転（上・下）するもの。子葉は２転目の唐草から連続して伸びる。1380 は唐草の輪郭外側が波状を呈し、半裁花菱文花弁の外形と同形状のもの。1381 の唐草文はやや肉厚で明瞭である。

1382 は中心飾りから上・下転する２つの唐草文が伸びるもの。唐草の外郭はやや波状を呈する。

1383 の中心飾りは上向きの半裁花菱文が変化したもの。中心飾りから伸びる唐草文は外郭が波状を呈し、やや肉厚である。



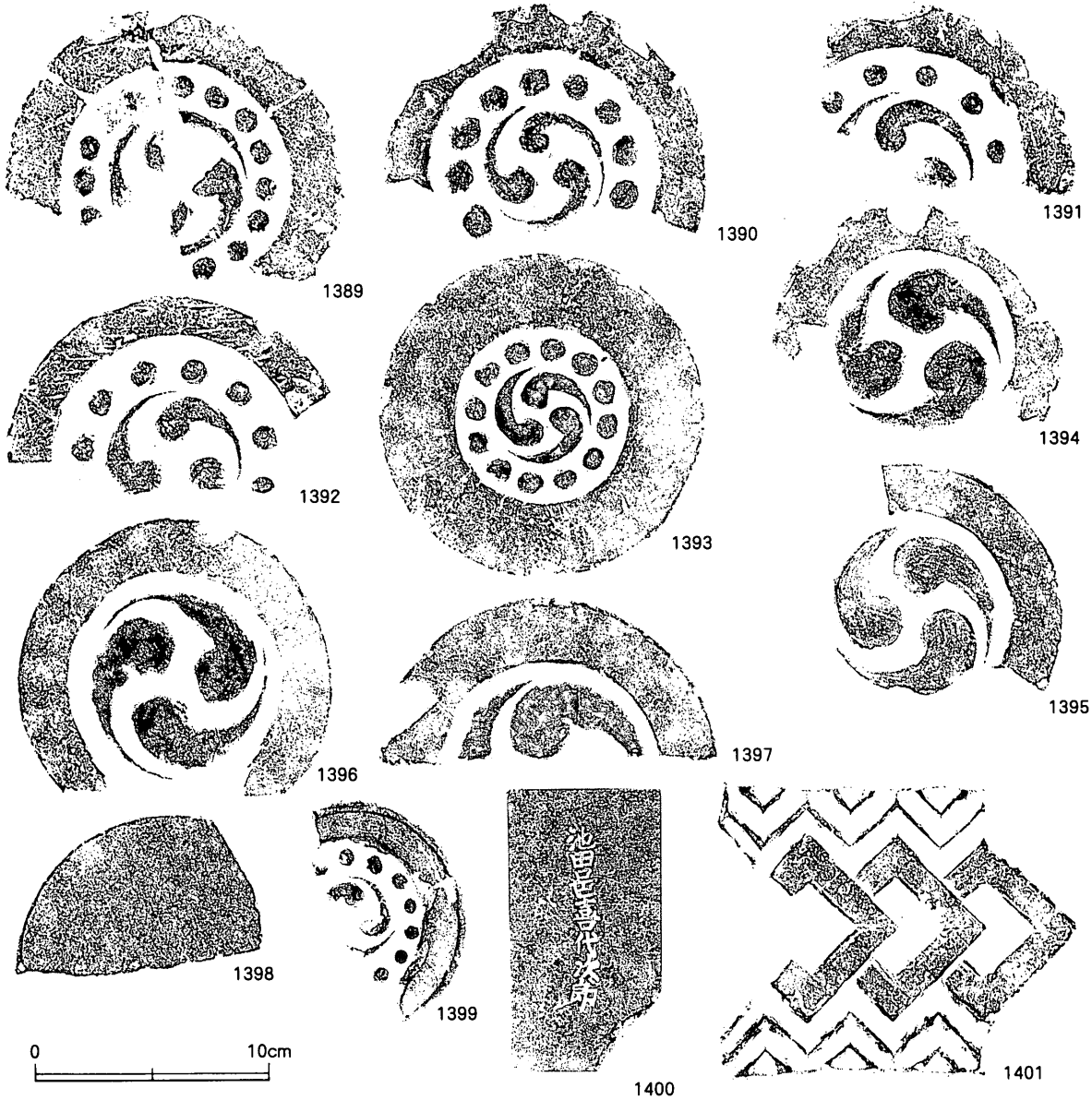
第 189 図　軒平瓦拓影図（S=1/3）

1385 の中心飾りは、菱形とその周囲がさらに菱形状に囲まれたもの。中心飾りの外側に上転する唐草文および子葉が変化したと思われる文様が認められる。1386 は 1385 と同笵であるが、「林善」の刻印が認められる。

1387 は内区内に文様を有しないもの。

1388 は文様をもたないもの。瓦当面に「山田郡林村瓦製造人岡崎佐太郎」の刻印が認められる。

1384 の中心飾りは不明であるが、わずかに残る文様は、下転する外側の唐草文が変化したものであろう。



第 190 図　軒丸瓦・丸瓦・垂木瓦拓影図（S=1/3）

3．軒丸瓦

軒丸瓦は、内外区を画する圏線の有無、巴文尾部の形状、珠文の数によって分類が行われている（佐藤 2003）。ここではこの基準に従って分類・記述を行う。

1389 ～ 1393 には内外区を画する圏線がなく、巴部同士も連続しないもの。佐藤Ⅳ類。1389 ～ 1392 は大振りな巴頭部と、太くやや短く伸びる巴尾部を有する。珠文数は、1389 が 16、1390 ～ 1392 が 12。1393 は巴頭部が小さく、巴尾部が短い。外区は広い。

1394 ～ 1397 は三巴文の周囲に珠文が配されないもの。佐藤Ⅴ類。

1398 は文様を有しないもの。

4．軒桟瓦

1399 は軒桟瓦の小丸部。やや小さめの巴文頭部に、やや長い巴尾部を有する。

5．丸瓦

1400 は丸瓦。上面に「池田邑喜代次郎」の刻印が認められる。

6．垂木瓦

1401 は垂木瓦。中央部に菱形が連続して重なる文様をもち、その上下には鋸歯文が施される。

第３章　弥生土器の胎土分析

第１節　分析の目的と今後の課題

１．分析の目的

空港跡地遺跡出土の後期中葉の弥生土器には、形態・胎土ともに明瞭に異なる二者が存在する。一方は、下川津Ｂ類土器（大久保 1990b）とされている香東川下流域産の土器群であり、もう一方は、香東川下流域産に比べてつくりが粗雑で、灰白色～にぶい橙色の色調を有する土器群である。本報告書では、この土器群を仮に「白色系」と呼称している。

香東川下流域産の胎土である、角閃石を多量に含む特徴的な胎土は「胎土１類」と呼ばれ（森下 1995）、その粘土採取地は石清尾山南麓と想定されている（奥田 1995）。一方、白色系の土器については、空港跡地遺跡で顕著に認められるほか、約 800 m北に位置する林・坊城遺跡や約 200 m西の多肥松林遺跡で確認できる。

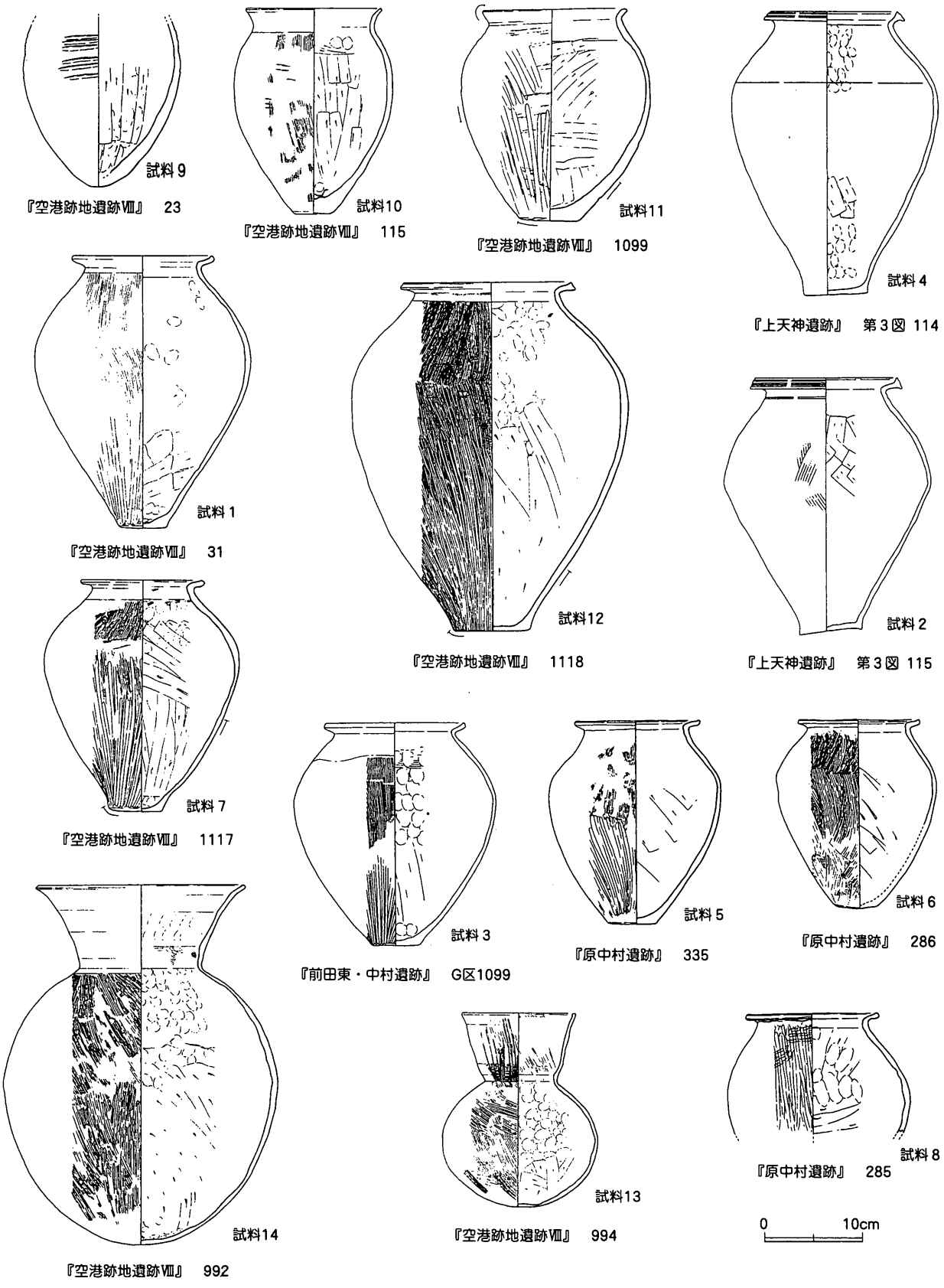
そこで、形態・胎土が異なる香東川下流域産と白色系の土器について自然科学的手法による胎土分析を行った。また、空港跡地遺跡Ｇ地区では多数の粘土採掘坑が検出されており、本遺跡内での

					角閃石含む				角閃石・黒雲母含む		角閃石含まない							
			岩石・鉱物片		A	B	B	C	B	B	A	A	A	B	B	B	B	D
			石英・長石以外の鉱物片		2	2	2	C	3	3	1	1	1	1	1	1	1	D
			蛍光X線分析		c	e	e	c	a	d	a	a	a	a	a	b	b	a
			粒径		④	①	②	②	②	①	①	③	④	①	②	②	③	②
試料番号	遺跡名	遺物番号	時期	肉眼観察による胎土の特徴等														
2	上天神	115	後期初頭	胎土1類														
4	上天神	114	後期初頭	胎土1類														
1	空港跡地Ⅷ	31	後期中葉	香東川下流域産														
7	空港跡地Ⅷ	1117	後期中葉	香東川下流域産														
12	空港跡地Ⅷ	1118	後期中葉	香東川下流域産														
5	原中村	335	後期後半	黒雲母細粒含む、角閃石含まない														
6	原中村	286	後期後半	黒雲母細粒含む、角閃石含まない														
8	原中村	285	後期後半	角閃石含む														
3	前田東・中村	1252	後期後半															
9	空港跡地Ⅷ	23	後期中葉	白色系、焼成時破損														
10	空港跡地Ⅷ	115	後期中葉	白色系														
11	空港跡地Ⅷ	1099	後期中葉	白色系														
16	空港跡地Ⅵ	採掘坑	後期															
19	空港跡地Ⅵ	採掘坑	後期															
17	空港跡地Ⅵ	基盤層	後期															
18	空港跡地Ⅵ	基盤層	後期															
13	空港跡地Ⅷ	842	古墳初頭															
14	空港跡地Ⅷ	859	古墳初頭															
15	空港跡地Ⅷ	粘土塊	古墳初頭															

第4表　胎土分析試料一覧表

第４表　胎土分析試料一覧表

土器製作が推測されるため、粘土採掘坑が位置する基盤層の土も分析対象とした。さらに、周辺遺跡出土土器との比較も行った。分析の詳細な目的は次の５点である。



第191図　試料一覧図

① 空港跡地遺跡に見られる香東川下流域産土器と白色系土器の比較

試料１・７・12は空港跡地遺跡出土の香東川下流域産（弥生時代後期中葉）である。試料９・10・11は空港跡地遺跡出土の弥生時代後期中葉の白色系である。このうち試料９（23）は、底部外面に連続する不定円形の剥離が認められ、焼成時破損品と考えられるものである。

② 両者の土器と空港跡地遺跡粘土採掘坑との関連性

試料16～19は空港跡地遺跡Ｇ地区にある粘土採掘坑付近の土である。この土と上記の両者との関連性の有無について分析を実施した。

③ 後期中葉の香東川下流域産土器と後期初頭の上天神遺跡出土土器との比較

この両者以外に、「胎土１類」である後期初頭の土器として試料２・４も同時に分析した。上天神遺跡出土の後期初頭の土器群の胎土は、香東川下流域産同様「胎土１類」とされているが、肉眼観察の限りでは若干異なり、上天神遺跡出土資料には細粒の角閃石が多量に含まれる。この差が分析結果に表れるのか否かについて分析を行った。

④ 香東川下流域産土器とそれにやや形態が似る土器との比較

また、調整や微妙な成形手法等が異なるものの、香東川下流域産に形態がやや似る前田東・中村遺跡出土資料（試料３）、原中村遺跡出土資料（試料５・６・８）も試料として用いた。これについても、香東川下流域産と胎土が異なるのか否かについての情報を得るために分析を実施した。

⑤ 古墳時代初頭の竪穴住居ＳＨ１09出土粘土塊と同竪穴住居出土土器との関連性

古墳時代初頭の竪穴住居に残されていた粘土塊と、同竪穴住居から出土した土器との比較も行った。

なお、目的⑤以外の分析には甕を用い、胴部最大径と頸部の間で試料を採取した。

２．今後の課題

分析委託者から分析結果として提示されている分類（第10表）は、土器の分類とは合致しない。むしろ、小分類の項目とされている角閃石・黒雲母の有無を指標にした方が土器の分類を反映するようにも思える（第４表参照）。

いずれにしても、分析者との検討を実施することで、提示されたデータの有効的な活用方法を見出すことが可能となるであろう。

第２節　高松平野内遺跡出土弥生土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

高松平野に位置する空港跡地遺跡では、弥生時代後期とされる竪穴住居跡や溝、さらには粘土採掘坑の可能性があるとされる土坑などの遺構が検出され、それらの遺構に伴い、比較的遺存状態のよい弥生土器も多数出土している。高松平野内の弥生時代後期の土器は、大きく茶褐色系と淡色系とに分類されており、前者は胎土が精緻で焼きがよく、後者は胎土が粗く、焼成時のハゼも目立つとされている。これらの違いから、色調による系統の違いは、土器製作技術の系統の違いなど、当時の社会における何らかの事象の表れとも考えられている。

本報告では、上記の課題に対する基礎的な資料として、高松平野内各地から出土した弥生土器の胎土の特徴を岩石学な手法で捉え、記載、分類を行う。なお、空港跡地遺跡では、竪穴住居跡から粘土塊も出土しており、今回の分析では、粘土採掘坑の堆積物、住居内の粘土塊、集落内で作られたとされる土器、そして近隣の遺跡から出土した土器という試料が揃えられた。これは、本分析結果が、今後の高松平野内における弥生時代後期の土器を考える上で、貴重な分析例になり得る可能性のあることを意味する。

１．試料

試料は、空港跡地遺跡および高松平野内に所在する各地の同時期の遺跡より出土した弥生土器片14点（試料番号１～14）と空港跡地遺跡の竪穴住居ＳＨ１ 09内から出土した粘土塊１点（試料番号15)、同遺跡Ｇ地区粘土採掘坑（ＳＫｇ 285）がある基盤層１点（試料番号16)、同遺跡粘土採掘坑において採掘の対象と考えられる粘土層２点（試料番号17: Ⅲ－33区南壁24層、試料番号18: Ⅲ－35区北壁２層）および同遺跡Ｇ地区粘土採掘坑（ＳＫｇ 298）がある基盤層１点（試料番号19）の合計19点である。

２．分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉砕による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光Ｘ線分析が最もよく用いられている方法である。今回の試料のように比較的粗粒の砂粒を含み、低温焼成と考えられる土器の分析では、前者の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。一方、蛍光Ｘ線分析は、胎土中の砂粒だけではなく、素地を作っている粘土も含めた特性を表しており、また、機器分析による数値データで表されることから、客観性、再現性がよいということがある。したがって、ここでは薄片観察法および蛍光Ｘ線分析を併用して胎土分析を行う。以下に手順を述べる。

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成																		合計
			鉱物片									岩片								植物珪酸体	
			石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	黒雲母	雲母鉱物	ジルコン	不透明鉱物	砂岩	凝灰岩	流紋岩	多結晶石英	花崗岩類	ホルンフェルス	粘土塊	火山ガラス		
1	砂	細礫														1					1
		極粗粒砂														2					2
		粗粒砂	3	1	1		2	4								8					19
		中粒砂	4	1	4		9	5								2					25
		細粒砂	4	5	8		13	3													33
		極細粒砂	9	1	8		6	1													25
		粗粒シルト	5		2		2													1	10
		中粒シルト																			0
	基質																				240
	孔隙																				13
2	砂	細礫																			0
		極粗粒砂		1																	1
		粗粒砂																			0
		中粒砂	2		2		4														8
		細粒砂	1		3		21				1										26
		極細粒砂	2		2		28				1										33
		粗粒シルト	1	1	1		13													1	17
		中粒シルト					4														4
	基質																				227
	孔隙																				10
3	砂	細礫																			0
		極粗粒砂	1	2											2						5
		粗粒砂	6																		6
		中粒砂	6		2														9		17
		細粒砂	5	1	2	1	1												19		29
		極細粒砂	7	1	1		1												12		22
		粗粒シルト	3																4		7
		中粒シルト																			0
	基質																				155
	孔隙																				21
4	砂	細礫																			0
		極粗粒砂														1					1
		粗粒砂					2														2
		中粒砂	1	1	1		14				1										18
		細粒砂	5		1		40				1										47
		極細粒砂	2		2		59				2										65
		粗粒シルト	3				21														24
		中粒シルト	1																		1
	基質																				254
	孔隙																				16
5	砂	細礫																			0
		極粗粒砂																			0
		粗粒砂																			0
		中粒砂	1																11		12
		細粒砂	2																25		27
		極細粒砂	4		2		1												43		50
		粗粒シルト	2		1														17		20
		中粒シルト																			0
	基質																				305
	孔隙																				43

第５表　薄片観察結果（1）

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成																	合計
			鉱物片									岩片							植物珪酸体	
			石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	黒雲母	雲母鉱物	ジルコン	不透明鉱物	砂岩	凝灰岩	流紋岩	多結晶石英	花崗岩類	ホルンフェルス	粘土塊	火山ガラス		
6	砂	細礫																			0
		極粗粒砂	1												1	2		2			6
		粗粒砂	4		2											2					8
		中粒砂	5	2	9										1						17
		細粒砂	12	2	9		3	1											1		28
		極細粒砂	5	6	7		1												2		21
		粗粒シルト	3	6	3															2	14
		中粒シルト		1	1																2
	基質																				307
	孔隙																				11
7	砂	細礫																			0
		極粗粒砂														1		2			3
		粗粒砂	1					1								5		1			8
		中粒砂	4		5		5	2								5			1		22
		細粒砂	4	1	15		20	3		1	2								2		48
		極細粒砂	5	1	11		15	1			2										35
		粗粒シルト	3	1	1		1				1									2	9
		中粒シルト																			0
	基質																				350
	孔隙																				22
8	砂	細礫																			0
		極粗粒砂	2	2																	4
		粗粒砂	3	1	1			2								1					8
		中粒砂	10	1	1		1	5											5		23
		細粒砂	11	2	5		2	3											7		30
		極細粒砂	8	1	4		3	1		1									8		26
		粗粒シルト	3		2						1								6	1	13
		中粒シルト			1																1
	基質																				306
	孔隙																				18
9	砂	細礫																			0
		極粗粒砂	1												1						2
		粗粒砂	14																		14
		中粒砂	18	2	3														2		25
		細粒砂	8	4	2		2				1								3		20
		極細粒砂	10		1				1										2	1	15
		粗粒シルト	9		3				1											4	17
		中粒シルト	5																		5
	基質																				262
	孔隙																				19
10	砂	細礫																			0
		極粗粒砂	1	1												4					6
		粗粒砂	7	2	1										1	1					12
		中粒砂	7	3	4																14
		細粒砂	11	3	6		1	3											2		26
		極細粒砂	16	6	7		2	2											2		35
		粗粒シルト	16	3	10		1													3	33
		中粒シルト	4	1	3																8
	基質																				285
	孔隙																				18

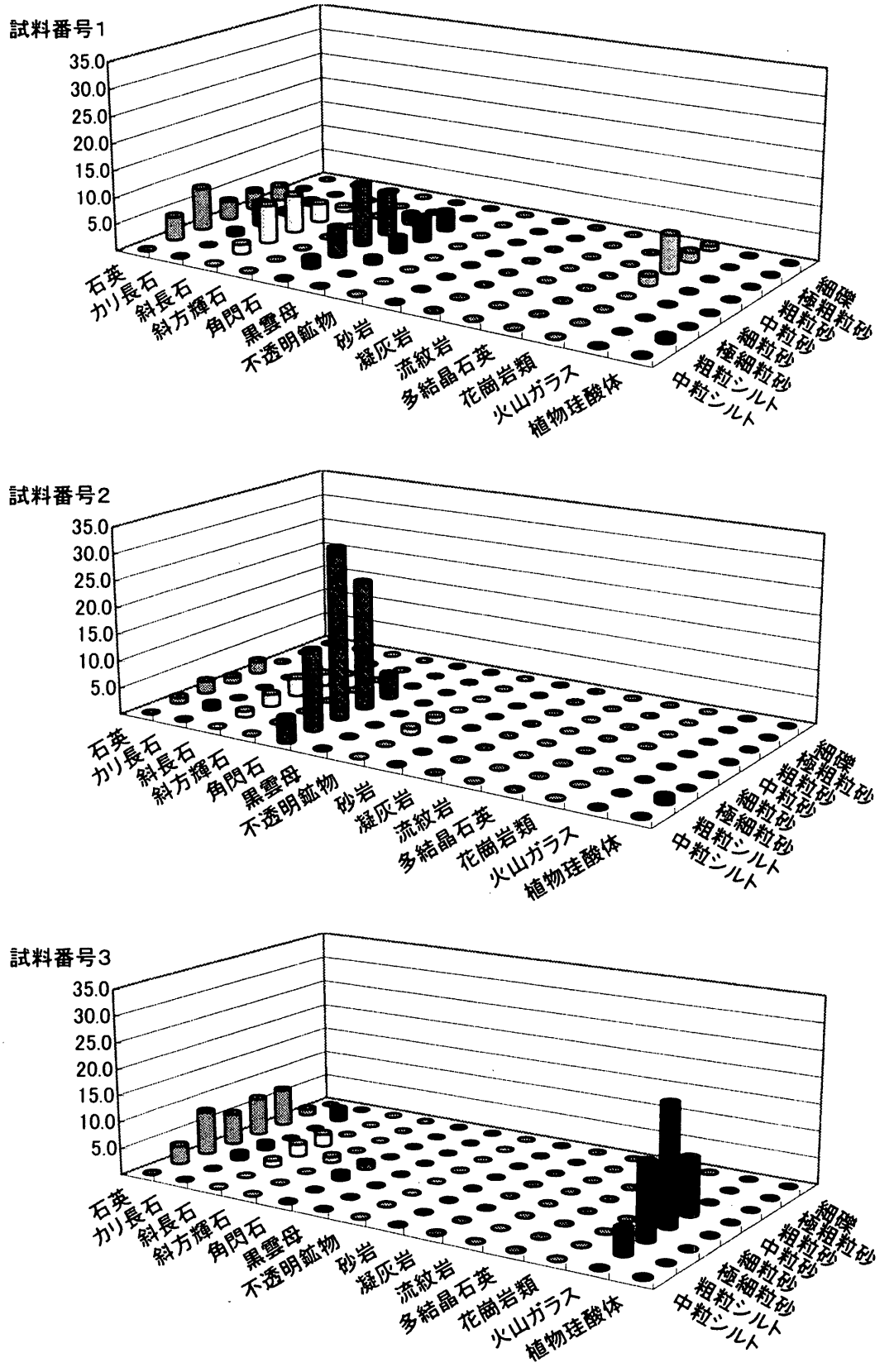
第６表　薄片観察結果（2）

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成																		合計
			鉱物片									岩片								植物珪酸体	
			石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	黒雲母	雲母鉱物	ジルコン	不透明鉱物	砂岩	凝灰岩	流紋岩	多結晶石英	花崗岩類	ホルンフェルス	粘土塊	火山ガラス		
11	砂	細礫																			0
		極粗粒砂		1														1			2
		粗粒砂	8										1		2						11
		中粒砂	13	4	1								5		1	1					25
		細粒砂	21	2															1		24
		極細粒砂	19	1	2														4		26
		粗粒シルト	15	2	2															2	21
		中粒シルト	5	1	1																7
	基質																				331
	孔隙																				10
12	砂	細礫																			0
		極粗粒砂			1																1
		粗粒砂	3	1	1		1						1								7
		中粒砂	6	4	4		13				1		2	1		2					33
		細粒砂	5	2	2		26	1			1										37
		極細粒砂	5		1		32														38
		粗粒シルト	1				11														12
		中粒シルト					3														3
	基質																				243
	孔隙																				9
13	砂	細礫																			0
		極粗粒砂			1			1								1					3
		粗粒砂	10	1	1		1	5							2	2					22
		中粒砂	12	1	4		7	10													34
		細粒砂	12	1	8		11	10													42
		極細粒砂	12		4		7	2													25
		粗粒シルト	4	1			1	1													7
		中粒シルト																			0
	基質																				307
	孔隙																				22
14	砂	細礫																			0
		極粗粒砂																			0
		粗粒砂	1		3																4
		中粒砂	3	2	8										2	1			1		17
		細粒砂	10	3	7														3		23
		極細粒砂	15	2	6		1														24
		粗粒シルト	5	1	6															1	13
		中粒シルト	1	1	2																4
	基質																				289
	孔隙																				18
15	砂	細礫			1										1						2
		極粗粒砂		1	3										2						6
		粗粒砂	8	3	5							1			2	5					24
		中粒砂	17	3	16			1						1	1	2			1		42
		細粒砂	18	6	13					1			2						3		43
		極細粒砂	18	1	8														1		28
		粗粒シルト	10	1	7															2	20
		中粒シルト	6		4																10
	基質																				352
	孔隙																				26

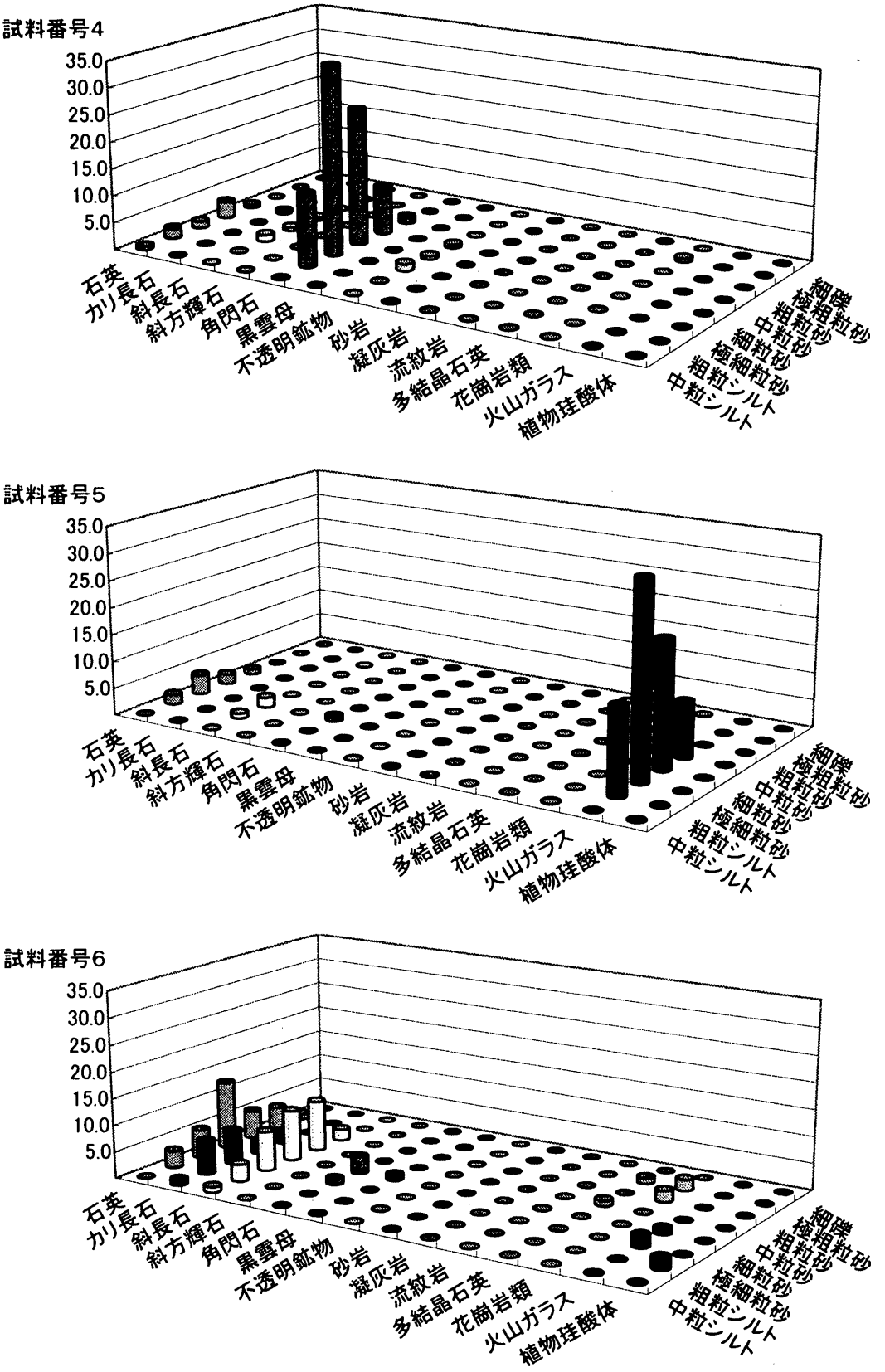
第７表　薄片観察結果（3）

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成																	合計
			鉱物片									岩片								
			石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	黒雲母	雲母鉱物	ジルコン	不透明鉱物	砂岩	凝灰岩	流紋岩	多結晶石英	花崗岩類	ホルンフェルス	粘土塊	火山ガラス	植物珪酸体	
16	砂	細礫																			0
		極粗粒砂																			0
		粗粒砂																			0
		中粒砂	1	1	3											1					6
		細粒砂	7	3	5								1								16
		極細粒砂	9	10	17								1								37
		粗粒シルト	10	19	19						2									3	53
		中粒シルト	6	9	16															1	32
	基質																				463
	孔隙																				17
17	砂	細礫																			0
		極粗粒砂	1																		1
		粗粒砂		2	3			1								1					7
		中粒砂	18	16	11								2		4	4					55
		細粒砂	23	18	23																64
		極細粒砂	16	14	13																43
		粗粒シルト	12	9	11						1									1	34
		中粒シルト	5	4	4																13
	基質																				354
	孔隙																				17
18	砂	細礫																			0
		極粗粒砂		1																	1
		粗粒砂		1	2																3
		中粒砂	2	4	2								1		1	1			1		12
		細粒砂	9	7	10																26
		極細粒砂	26	10	22																58
		粗粒シルト	19	9	21															1	50
		中粒シルト	5	2	7																14
	基質																				487
	孔隙																				15
19	砂	細礫										2				1					3
		極粗粒砂	2		2											6					10
		粗粒砂	9	8	5			1					5			8	1				37
		中粒砂	30	21	18			2					7			5					83
		細粒砂	27	9	18			1					4		1						60
		極細粒砂	12	3	7					1											23
		粗粒シルト	4	1	2																7
		中粒シルト	2	1	1																4
	基質																				244
	孔隙																				23

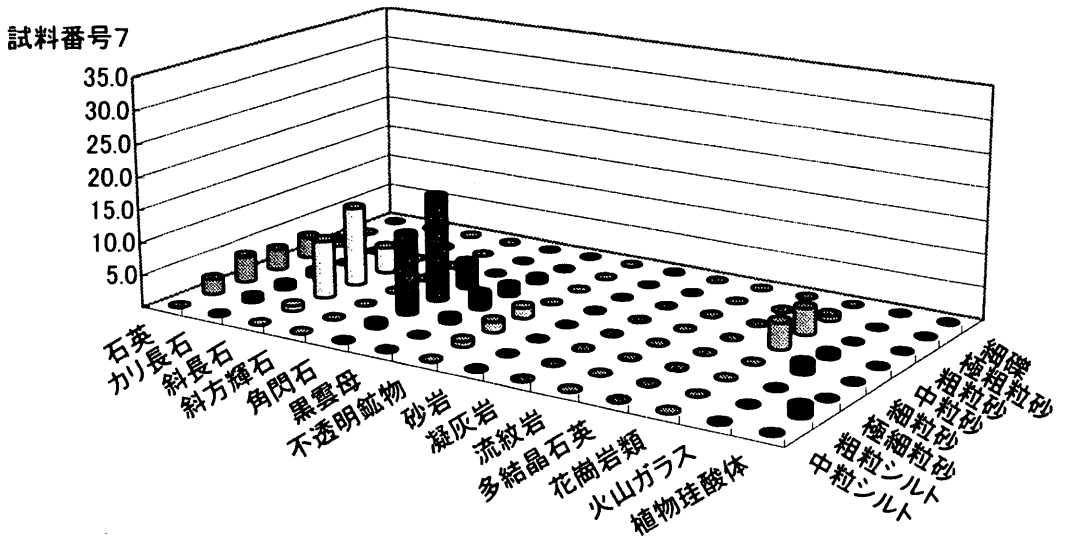
第８表　薄片観察結果（4）

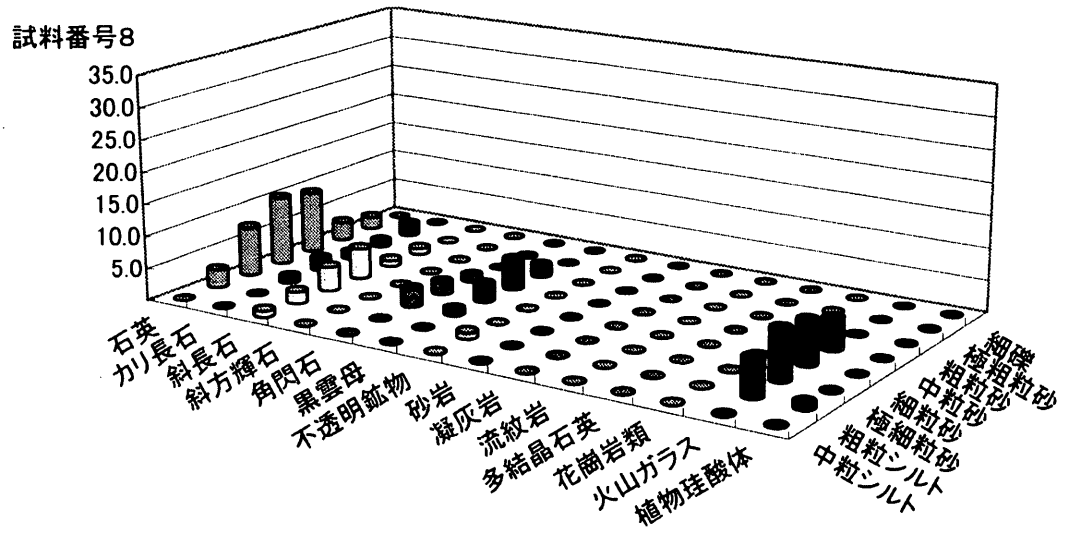


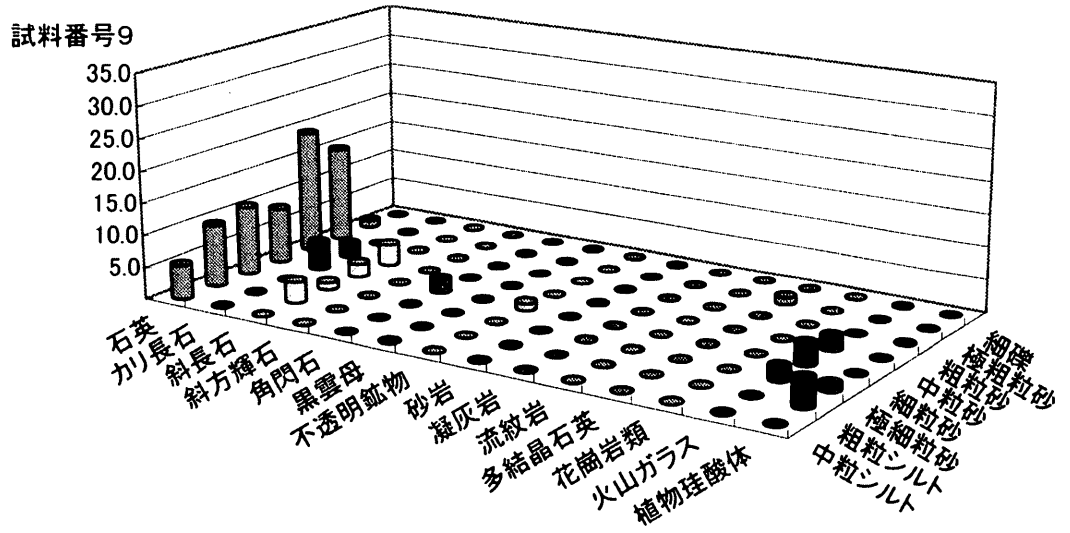
第 192 図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（1）



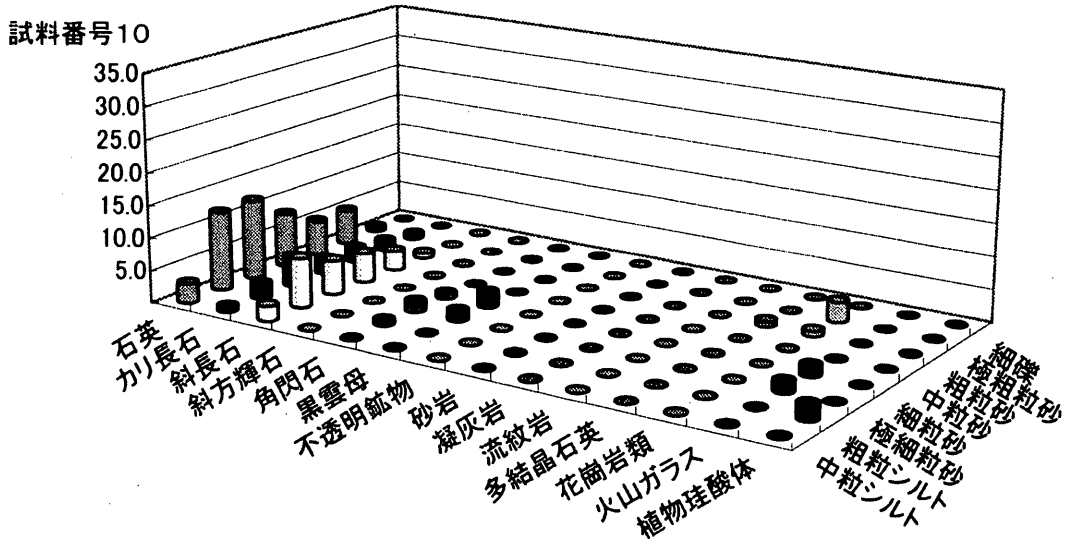
第 193 図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（2）

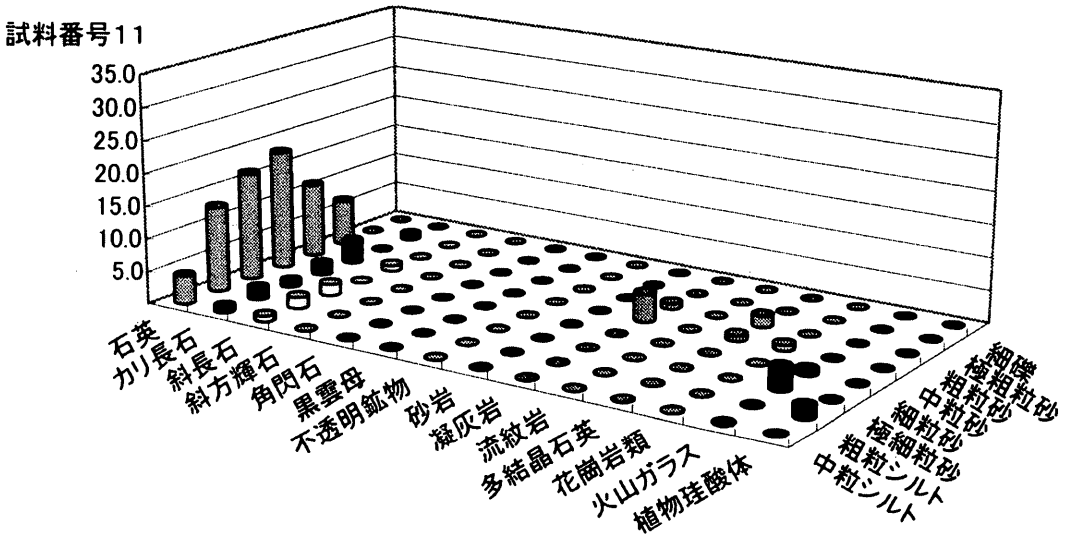


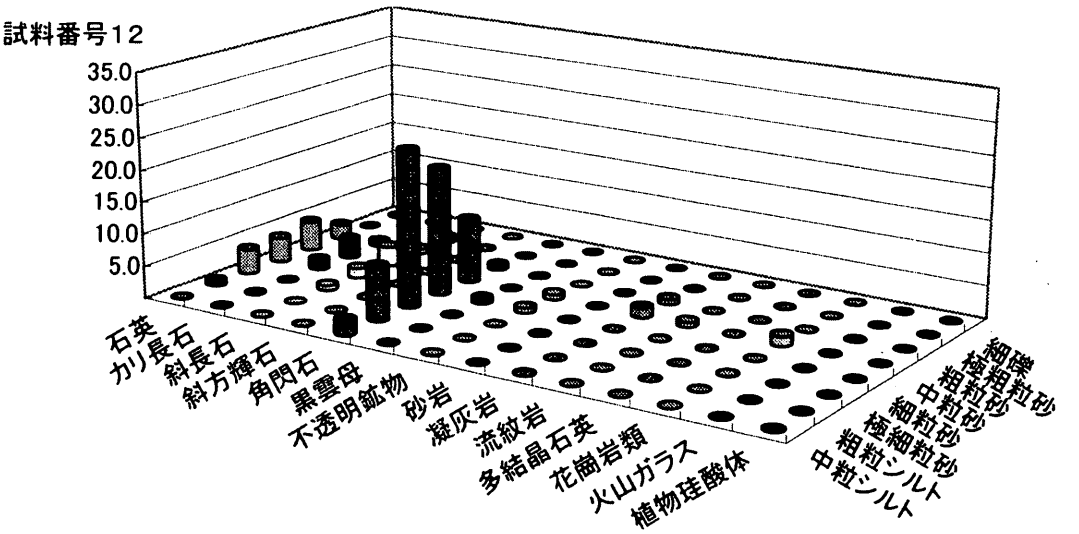




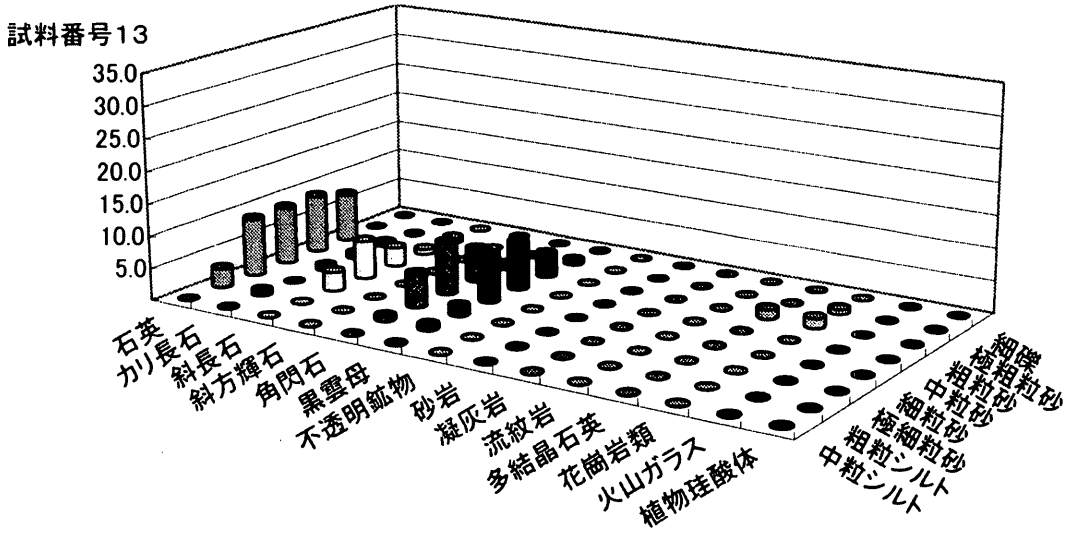
第194図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（3）

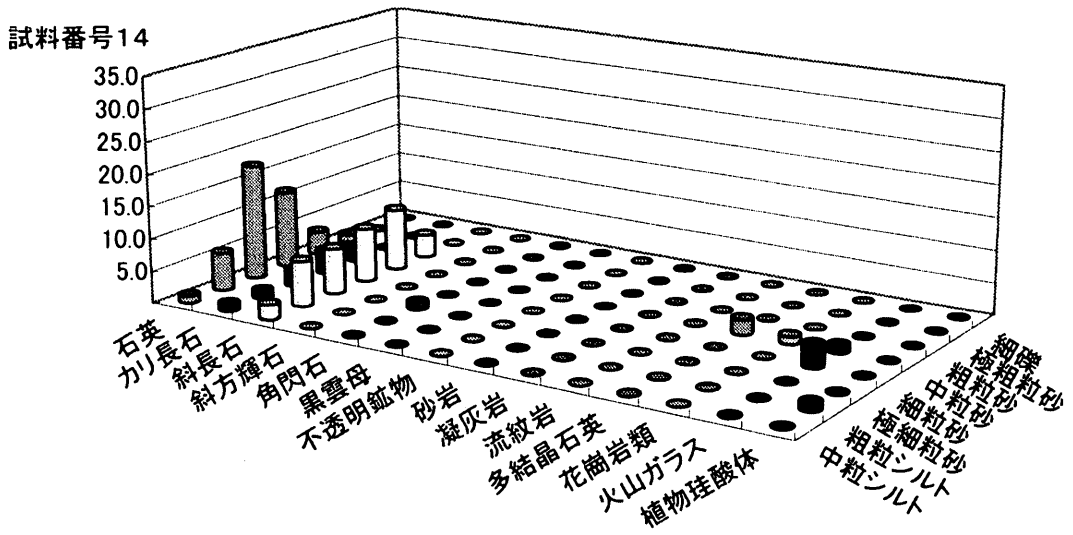


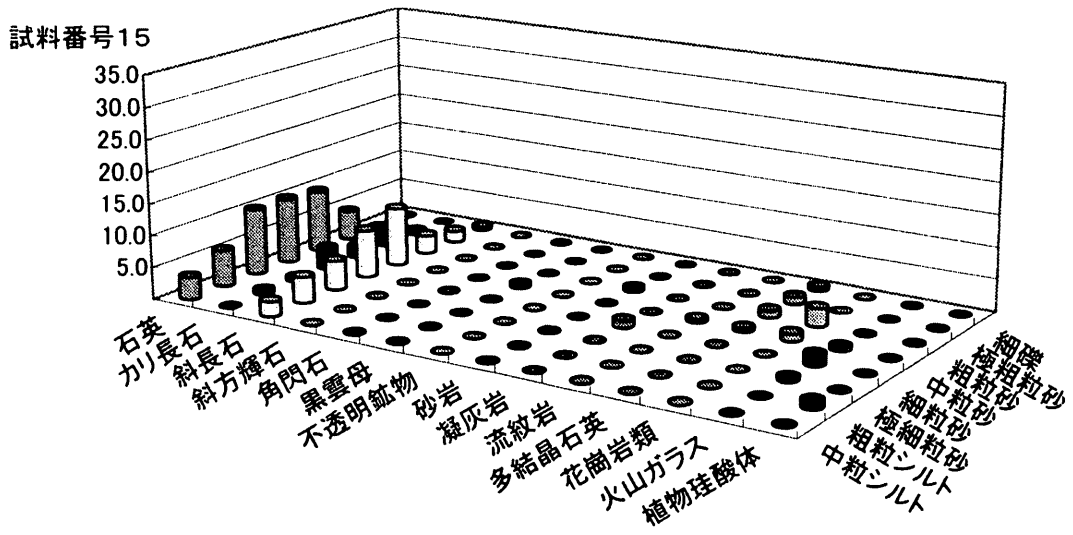




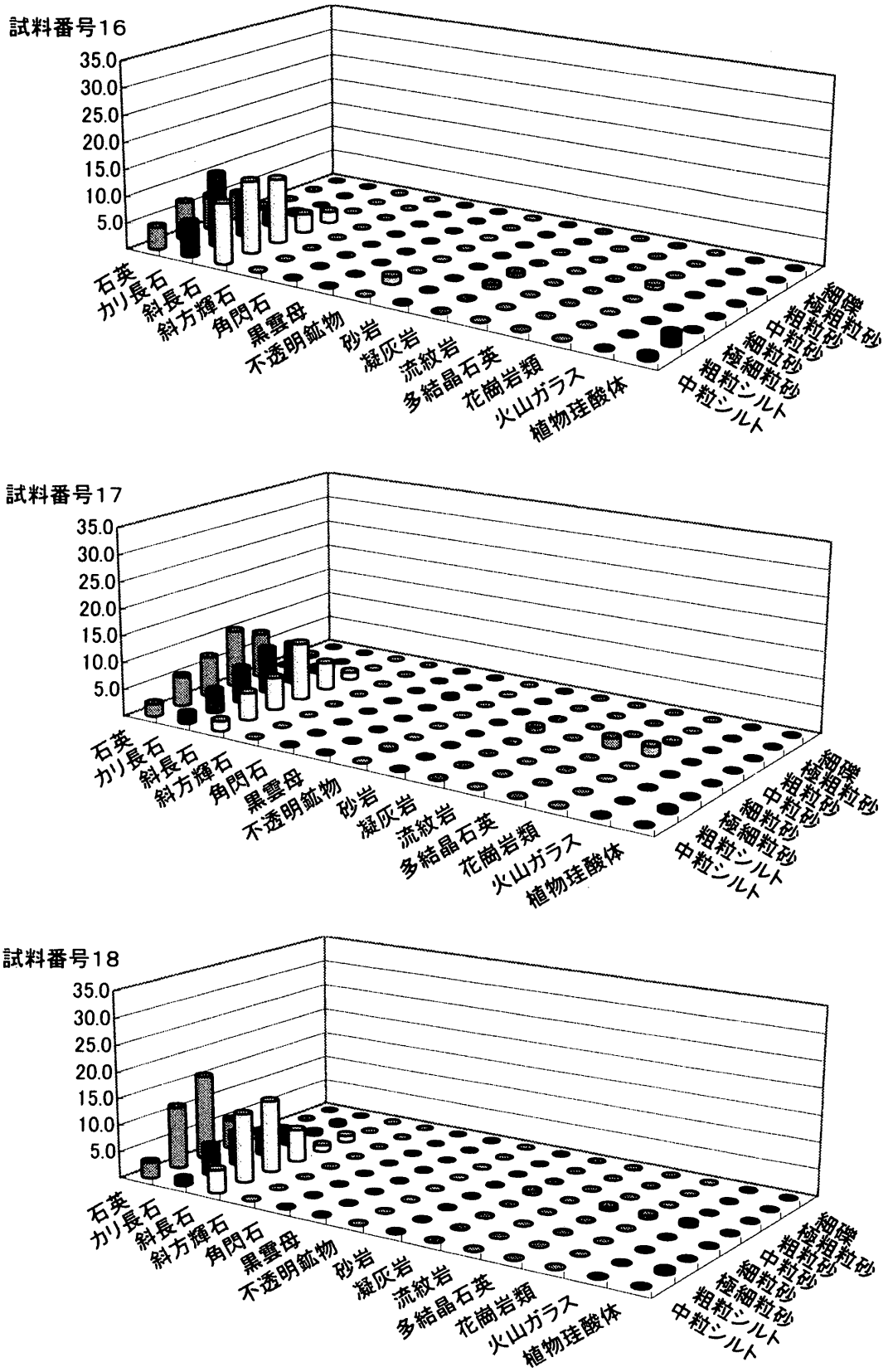
第 195 図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（4）



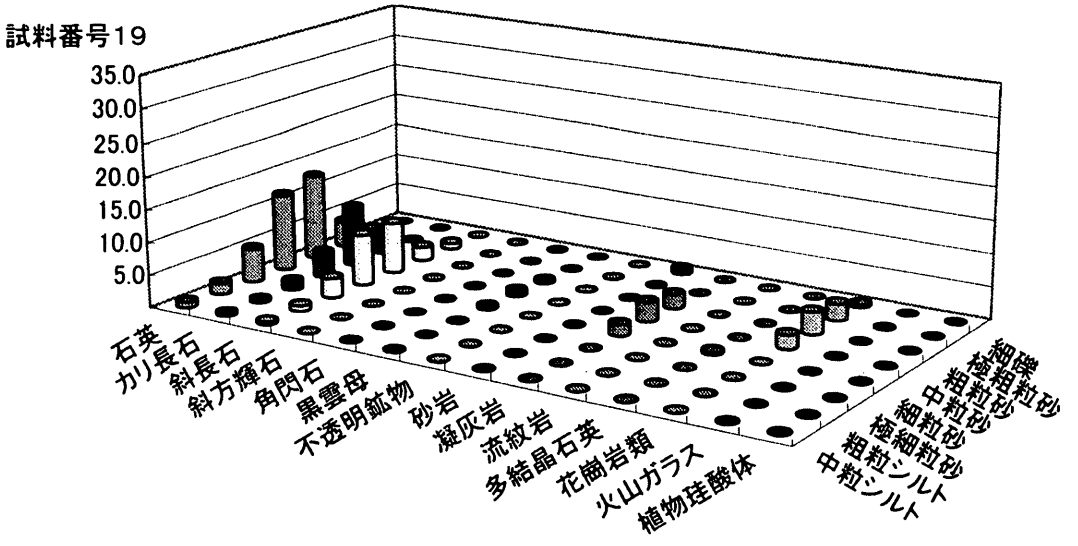




第 196 図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（5）



第 197 図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（6）



第198図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（7）

(1)　薄片作製観察

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

データの呈示は、松田ほか1999が示した仕様に従う。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

(2)　蛍光X線分析

波長分散型蛍光X線装置を用いたガラスビード法による定量分析を行う。

a)　測定元素

測定元素はSiO_2、TiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3、MnO、MgO、CaO、Na_2O、K_2O、P_2O_5の10元素およびLOIである。

b)　装置

理学電機工業社製RIX1000(FP法のグループ定量プログラム)

c)　試料調製

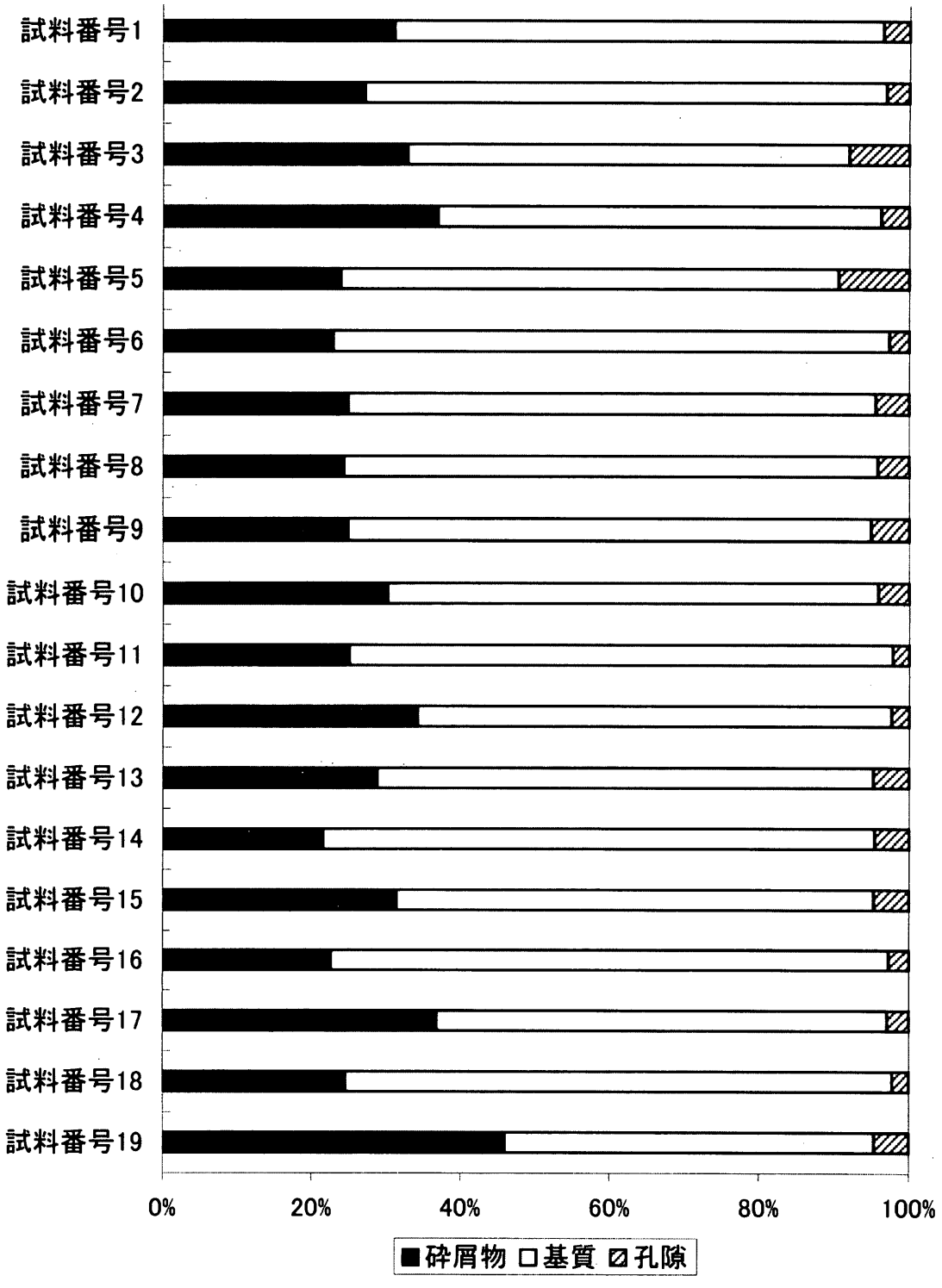
試料を振動ミル(平工製作所製TI100；10ml容タングステンカーバイト容器)で微粉砕し、105℃で4時間乾燥させた。この微粉砕試料についてガラスビートを以下の条件で作成した。

溶融装置；自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー(3491A1)

溶剤及び希釈率；融剤(ホウ酸リチウム)5.000g: 試料0.500g

剥離剤；LiI(溶融中1回投入)

溶融温度；1200℃　約7分



第 199 図　孔隙・砂粒・基質の割合

d)　測定条件

X線管；Cr(50Kv － 50mA)

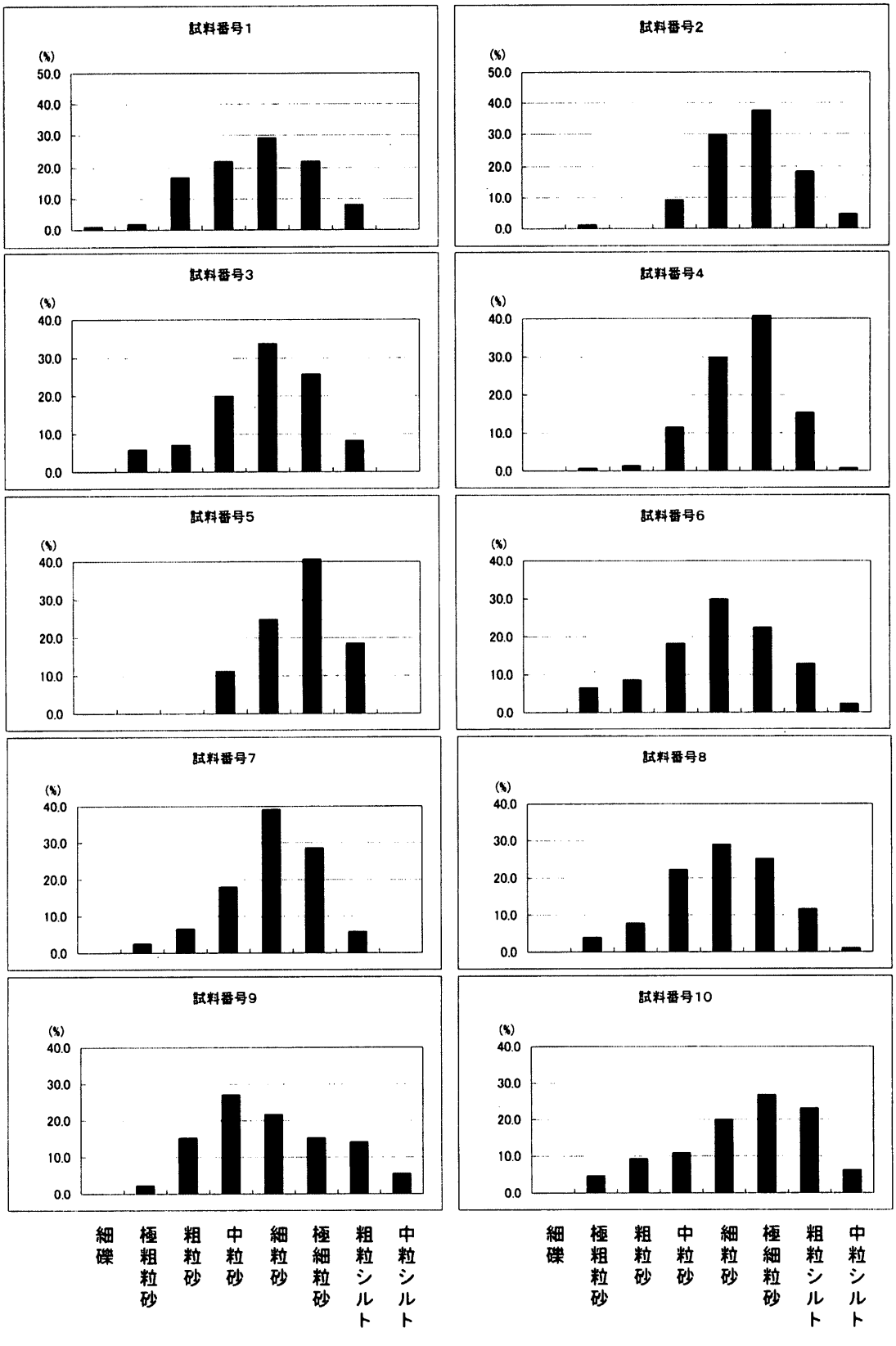
スペクトル；全元素Kα

分光結晶；LiF,PET,TAP,Ge

検出器；F-PC,SC

計数時間；PeaK40sec,Back20sec

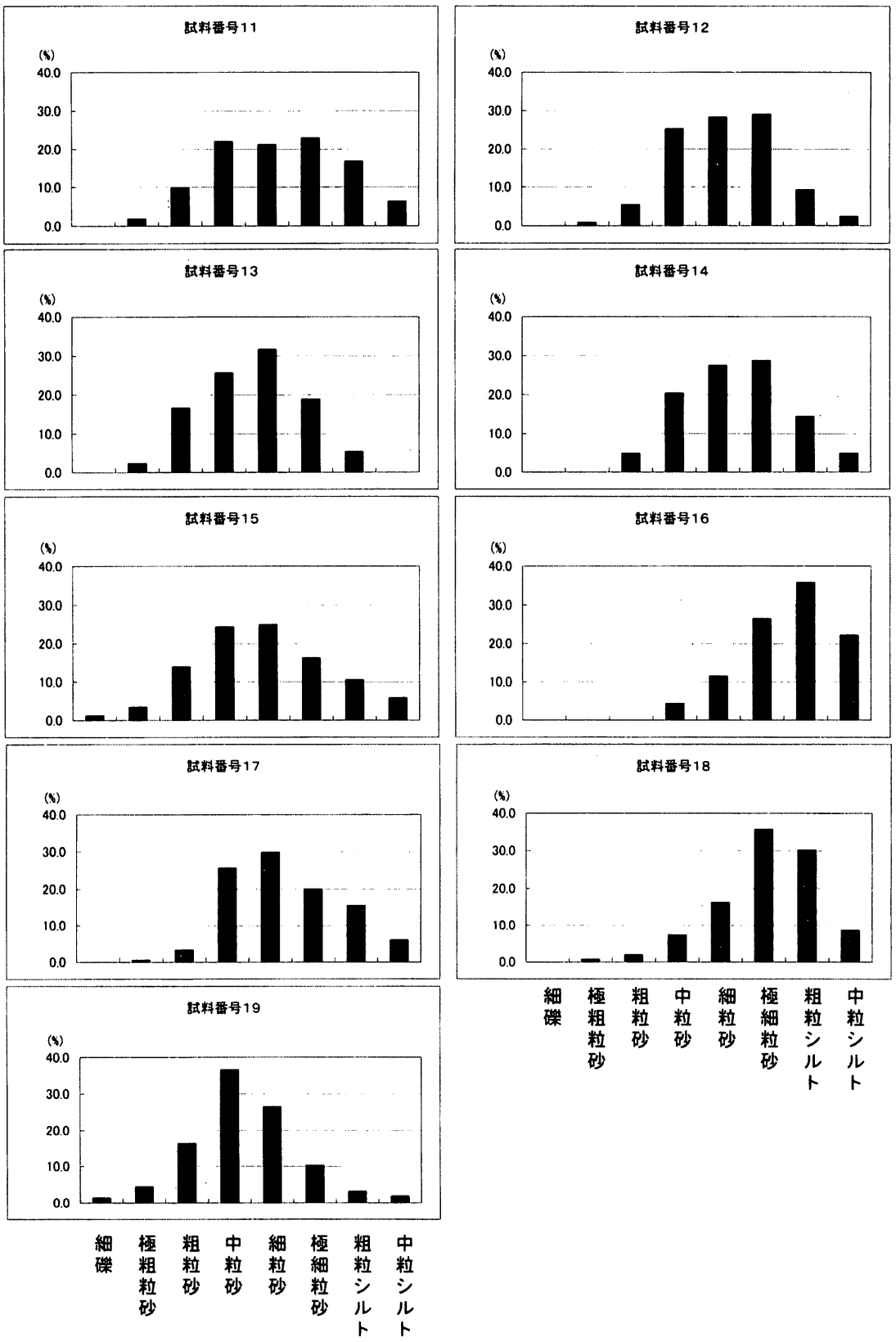
3．結果



第 200 図　胎土中の砂の粒径組成（1）

(1)　薄片作製観察

分析結果を表５～８、図 192 ～ 201 に示す。土器片試料 14 点では、鉱物片や岩石片の種類構成に比較的明瞭な違いが認められる。鉱物片では、石英および斜長石は全点に、カリ長石もほぼ全



第 201 図　胎土中の砂の粒径組成（2）

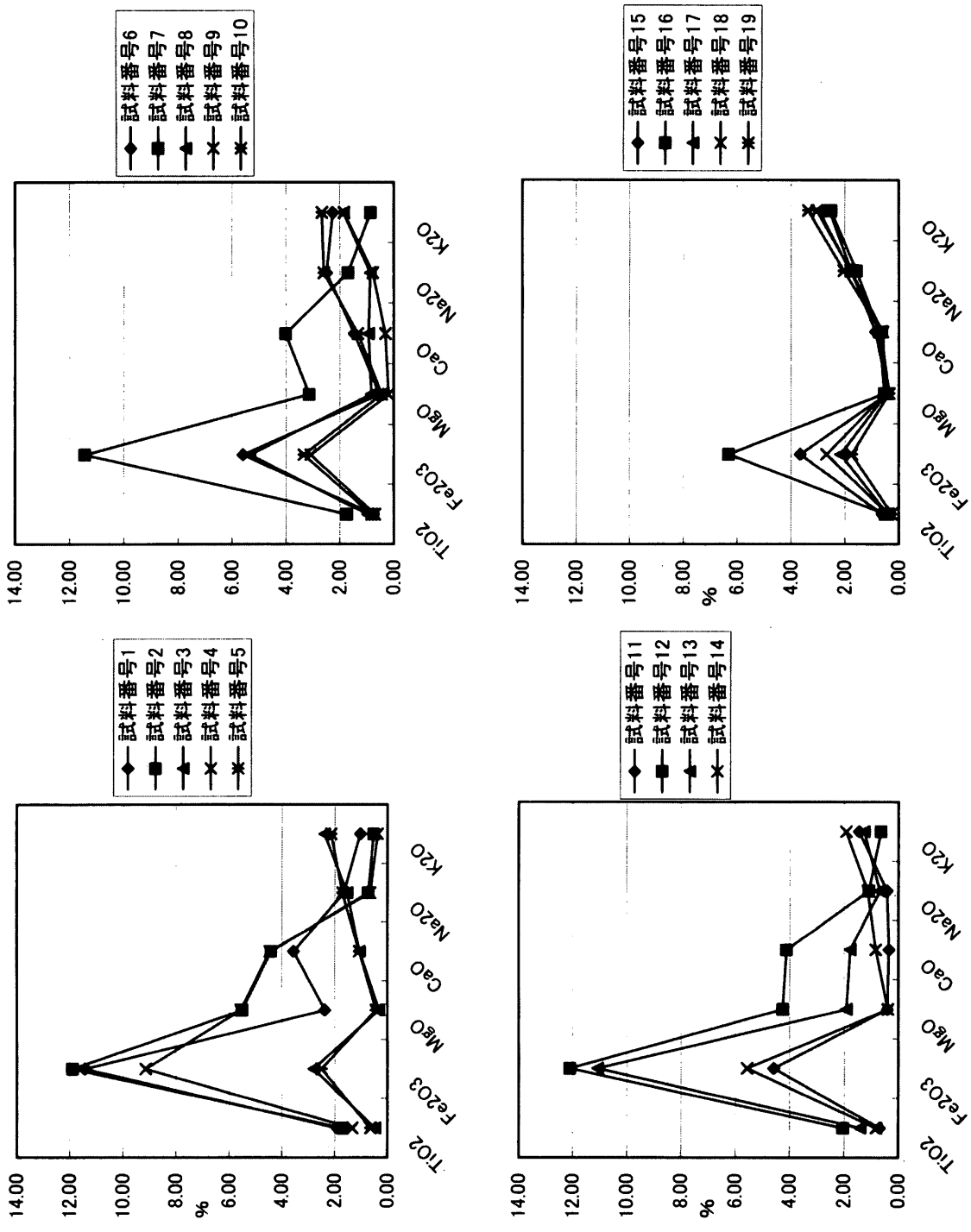
点に認められるが、これらは必ずしも砂粒の主体とはなっていない。試料によっては、角閃石または黒雲母またはその両者を多く含むものもある。岩石片では、火山ガラスを非常に多く含むものがあるが、多くの試料では、花崗岩類および多結晶石英（ここではほとんどが花崗岩由来と考えられる）の岩石片が少量含まれている。また、試料によっては凝灰岩を微量伴うものもある。

表2. 蛍光X線分析結果(化学組成)

試料番号	備考	SiO2	TiO2	Al2O3	Fe2O3	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	P2O5	Ig.loss	合計
1	弥生土器 甕	51.93	1.90	18.82	11.43	0.16	2.37	3.55	1.65	1.03	0.23	6.93	100.00
2	弥生土器 甕	46.54	1.68	19.08	11.90	0.16	5.51	4.41	0.73	0.52	0.18	9.29	100.00
3	弥生土器 甕	66.34	0.47	15.83	2.80	0.02	0.32	1.06	1.53	2.38	0.99	8.26	100.00
4	弥生土器 甕	47.90	1.33	21.36	9.15	0.16	5.56	4.46	0.65	0.37	0.26	8.80	100.00
5	弥生土器 甕	62.67	0.64	18.73	2.49	0.02	0.44	1.07	1.70	2.13	0.59	9.52	100.00
6	弥生土器 甕	62.02	0.75	18.38	5.60	0.02	0.53	1.47	2.49	2.26	0.40	6.08	100.00
7	弥生土器 甕	52.23	1.74	19.10	11.44	0.16	3.13	4.01	1.70	0.86	0.85	4.78	100.00
8	弥生土器 甕	64.66	0.97	16.19	5.34	0.04	0.83	0.94	0.88	1.86	0.27	8.02	100.00
9	弥生土器 甕	75.35	0.70	12.75	3.08	0.01	0.19	0.32	0.78	1.84	0.06	4.92	100.00
10	弥生土器 甕	64.70	0.82	18.14	3.34	0.03	0.45	1.33	2.59	2.67	0.61	5.32	100.00
11	弥生土器 甕	73.74	0.69	12.24	4.58	0.03	0.41	0.35	0.42	1.45	0.74	5.35	100.00
12	弥生土器 甕	48.56	2.04	19.19	12.11	0.15	4.26	4.11	1.09	0.64	0.81	7.04	100.00
13	弥生土器 壺	53.10	1.41	20.50	11.08	0.13	1.91	1.77	0.68	1.26	1.21	6.95	100.00
14	弥生土器 壺	63.94	0.81	16.39	5.56	0.12	0.39	0.84	1.13	1.92	1.12	7.78	100.00
15	竪穴住居内粘土塊	71.60	0.62	16.00	3.66	0.02	0.40	0.86	1.77	2.56	0.07	2.44	100.00
16	粘土採掘坑(SKg285)基盤層	64.98	0.50	16.68	6.31	0.02	0.53	0.73	1.57	2.51	0.00	6.17	100.00
17	Ⅲ33区南壁24層	69.97	0.41	16.10	2.16	0.01	0.45	0.64	1.81	2.95	0.00	5.50	100.00
18	Ⅲ35区北壁2層	69.59	0.39	15.32	2.68	0.02	0.48	0.60	1.78	3.03	0.00	6.11	100.00
19	粘土採掘坑(SKg298)基盤層	72.29	0.26	14.82	1.75	0.01	0.36	0.67	2.04	3.35	0.00	4.45	100.00

＊単位は重量%

第９表　蛍光Ｘ線分析結果（化学組成）



第 202 図　特徴的な元素の割合

胎土中の砂粒の粒径組成は、中粒砂、細粒砂、極細粒砂のいずれかをモードとするが、モードの不明瞭な試料も認められる。

空港跡地遺跡住居跡出土粘土塊、粘土採掘坑基盤および粘土採掘坑粘土の試料５点は、いずれも石英、カリ長石、斜長石の３種類の鉱物片を主体とし、微量または少量の凝灰岩および花崗岩類（多結晶石英含む）を伴うという種類構成である。一方、これらの粒径組成は、それぞれ異なり、住居内出土粘土の試料番号 15 と粘土採掘坑粘土の試料番号 17 は細粒砂、粘土採掘坑基盤の試料番号 16 は粗粒シルト、同試料番号 19 は中粒砂、粘土採掘坑粘土の試料番号 18 は極細粒砂をそれぞれモードとする。

表3. 胎土分類結果

試料番号	備考	A				B								C	D
		1			2	1				2		3			
		a			c	a		b		e		a	d	c	a
		1	3	4	4	1	2	2	3	1	2	2	1	2	2
1	弥生土器 甕									■					
2	弥生土器 甕													■	
3	弥生土器 甕														■
4	弥生土器 甕													■	
5	弥生土器 甕														■
6	弥生土器 甕							■							
7	弥生土器 甕										■				
8	弥生土器 甕											■			
9	弥生土器 甕					■									
10	弥生土器 甕								■						
11	弥生土器 甕			■											
12	弥生土器 甕				■										
13	弥生土器 壺												■		
14	弥生土器 壺						■								
15	竪穴住居内粘土塊	■													
16	粘土採堀坑(SKg285)基盤層		■												
17	Ⅲ33区南壁24層	■													
18	Ⅲ35区北壁2層		■												
19	粘土採堀坑(SKg298)基盤層	■													

A:凝灰岩と花崗岩類を含む
B:花崗岩類を含むが凝灰岩は含まれない
C:岩石片はほとんど含まれず、角閃石の鉱物片が卓越する
D:火山ガラスを非常に多く含み、それ以外の岩石片はほとんど含まれない
1:石英・カリ長石・斜長石以外の鉱物片が微量かほとんど含まれない
2:石英・カリ長石・斜長石以外の鉱物片では角閃石が多い
3:石英・カリ長石・斜長石以外の鉱物片では角閃石と黒雲母が多い
a:MgO-K2Oの折れ線が右上がり
b:MgO-K2Oの折れ線が右上がりだが、Na2O-K2Oで傾きが変わる
c:MgO-K2Oの折れ線が右下がり
d:MgO-K2Oの折れ線が右下がりだが、Na2O-K2Oで傾きが変わる
e:MgO-K2Oの折れ線でCaOに山がある
1:中粒砂または細粒砂がモード
2:細粒砂または極細粒砂がモード
3:極細粒砂または粗粒シルトがモード
4:中粒砂～極細粒砂にモードがあるが明瞭ではない

第10表　胎土分類結果

(2)　蛍光X線分析

各試料の分析結果を表9に示す。14点の土器片試料は、主要な元素では、SiO_2が47～75%、Al_2O_3が12～21%、Fe_2O_3が2～12%といういずれも広範囲にわたる。これは、薄片観察で認められた、試料による鉱物片および岩石片の産状の違いが反映されているものである。したがって、上記の主要な元素以外の元素でも試料による値の差が比較的顕著である。ここでは、特にTiO_2、Fe_2O_3、MgO、Na_2O、K_2Oの各元素の含有量を取り出して、折れ線グラフに表現し、図202に示す。

(3) 胎土の分類

胎土中の砂粒を構成する岩石片は、胎土の材料となった砂や粘土の採取地の後背にある地質を反映している。したがって、胎土を比較した時に、胎土中の岩石片の種類構成が異なる場合には、それらの土器の材料となった砂や粘土の採取地は、互いに後背となる地質が異なる地域にあると考えることができる。また、鉱物片は、その岩石片に由来するものが多いから、岩石片の種類構成と調和的であることが多い。さらに、後背となる地質が同じ地域内でも、採取地あるいは人為により、胎土中の砂の粒径組成に差異が生じることも考えられる。そこで、ここでは、胎土中の岩石片の種類構成、鉱物片の種類構成、両者を併せた化学組成、砂の粒径組成の順に分類基準を設定する。今回の分析結果からは、以下の基準が設定される。

＜岩石片＞

A：凝灰岩と花崗岩類を含む

B：花崗岩類を含むが凝灰岩は含まれない

C：岩石片はほとんど含まれず、角閃石の鉱物片が卓越する

D：火山ガラスを非常に多く含み、それ以外の岩石片はほとんど含まれない

＜鉱物片＞

1：石英・カリ長石・斜長石以外の鉱物片が微量かほとんど含まれない

2：石英・カリ長石・斜長石以外の鉱物片では角閃石が多い

3：石英・カリ長石・斜長石以外の鉱物片では角閃石と黒雲母が多い

＜化学組成＞

a：図 202 における MgO-K2O の折れ線が右上がり

b：図 202 における MgO-K2O の折れ線が右上がりだが、Na2O-K2O で傾きが変わる

c：図 202 における MgO-K2O の折れ線が右下がり

d：図 202 における MgO-K2O の折れ線が右下がりだが、Na2O-K2O で傾きが変わる

e：図 202 における MgO-K2O の折れ線で CaO に山がある

＜粒径組成＞

1：中粒砂または細粒砂がモード

2：細粒砂または極細粒砂がモード

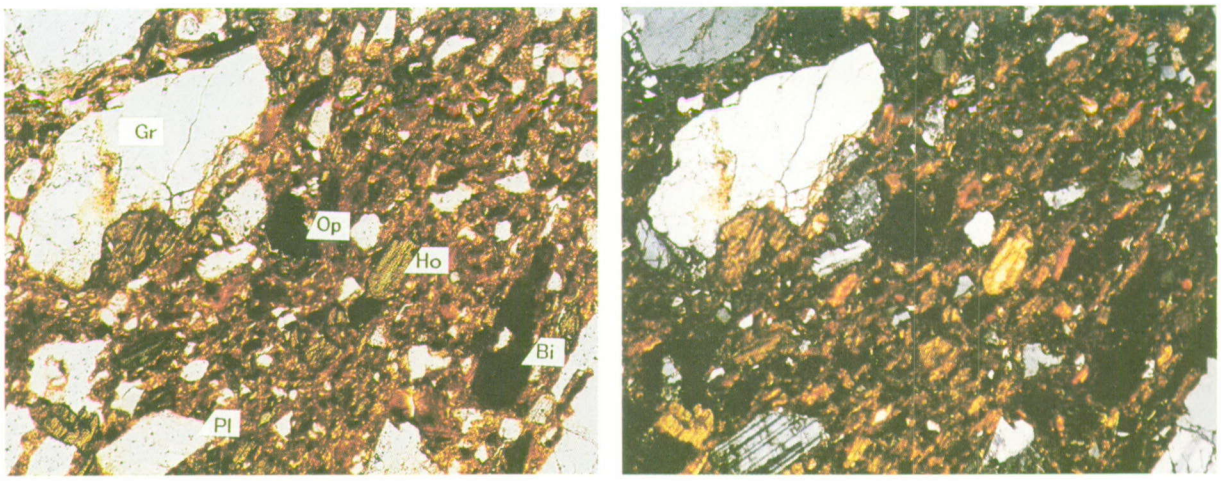
3：極細粒砂または粗粒シルトがモード

4：中粒砂～極細粒砂にモードがあるが明瞭ではない

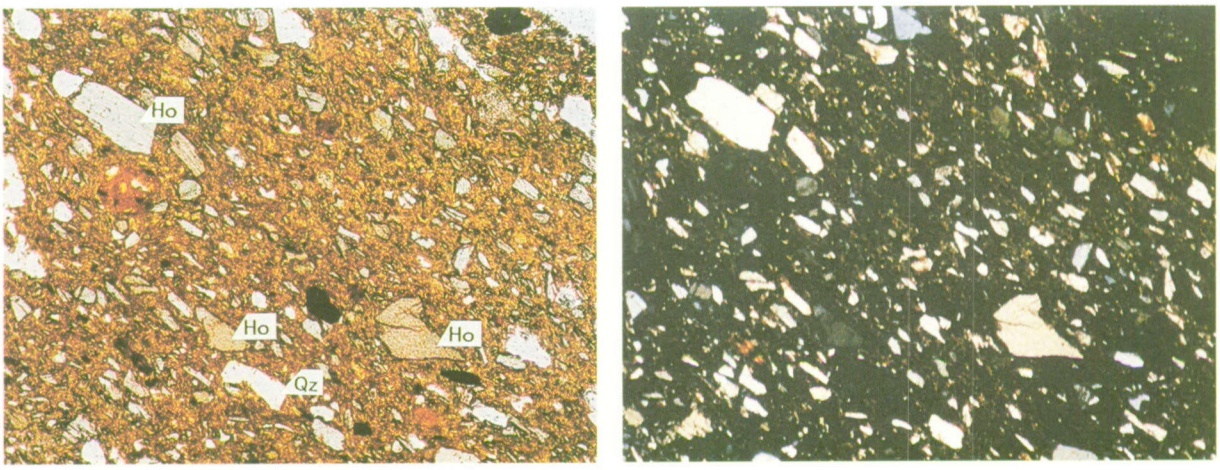
以上の分類を順に行い、例えば A1a1 のように表現する。粘土試料も含めて、今回の試料を分類した結果を表 10 に示す。

空港跡地遺跡内で採取された粘土塊および粘土層などの試料は、いずれも A1a 類に分類され、粘土採掘坑（ＳＫｇ 285）基盤層とⅢ 35 区北壁 2 層は、他の粘土塊、粘土層に比べてやや細粒に分類される。また、粘土採掘坑（ＳＫｇ 285）基盤層は、Fe ２ Ｏ ３の含有量も比較的高い。

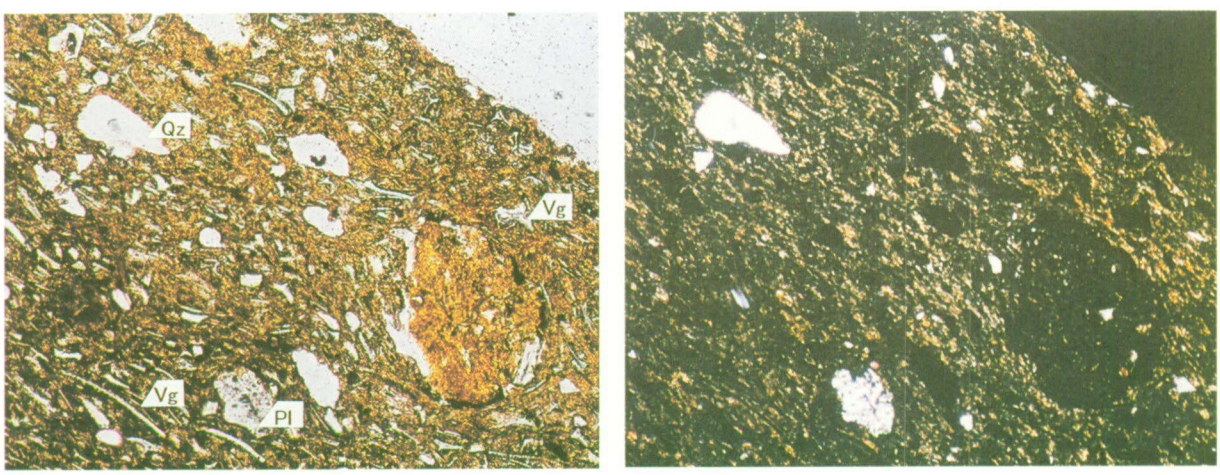
土器試料は、様々な特性のものが混在し、最も細分した分類では、A1a4 類から Da2 類まで 12 種類に及ぶ。ただし、大分類では、8 点までが B 類に分類され、空港跡地内遺跡の粘土試料と同様の A 類は 2 点、他に C 類と D 類が 2 点ずつという構成である。



1. 試料番号１　弥生土器　甕



2. 試料番号２　弥生土器　甕

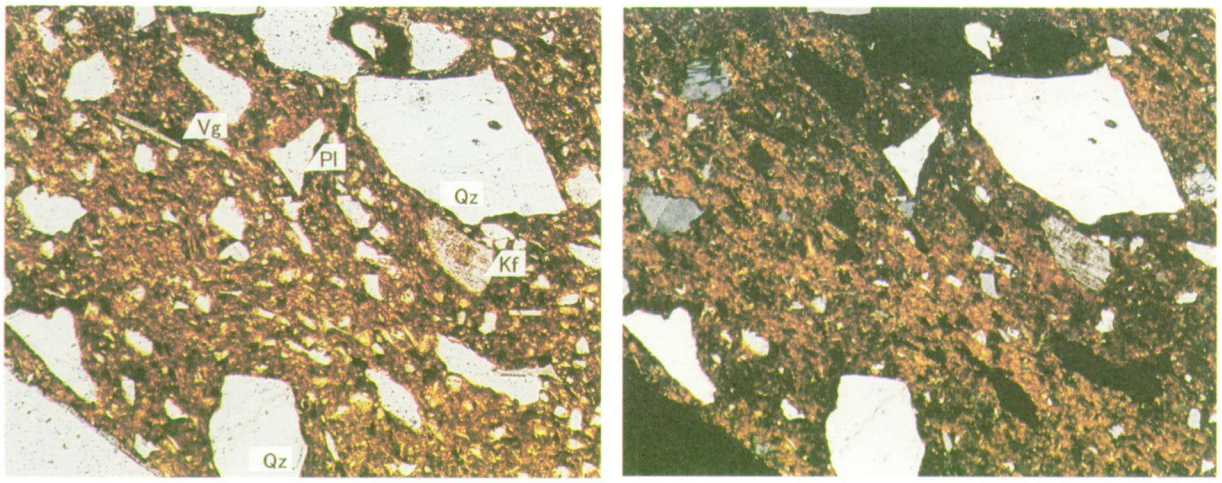


3. 試料番号５　弥生土器　甕

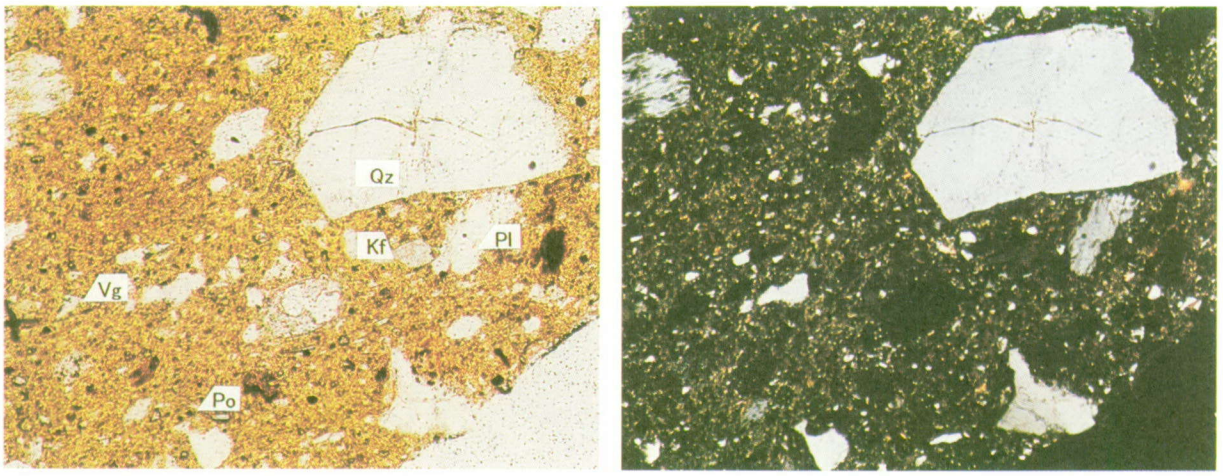
Ｑｚ：石英．Ｐｌ：斜長石．Ｈｏ：角閃石．Ｂｉ：黒雲母．
Ｏｐ：不透明鉱物．Ｇｒ：花崗岩．Ｖｇ：火山ガラス．
写真左列は下法ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

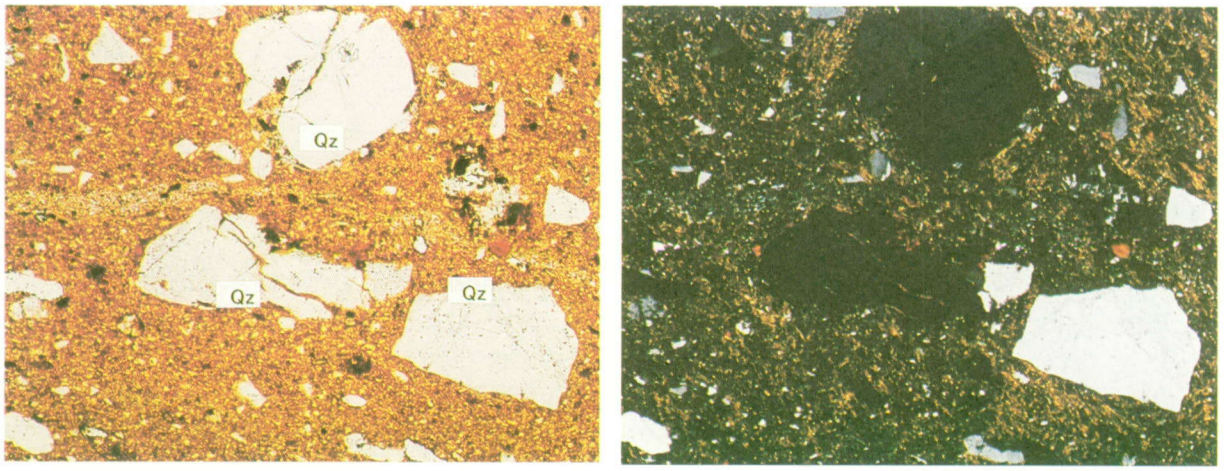
図版１　胎土薄片（1）



4. 試料番号６　弥生土器　甕



5. 試料番号９　弥生土器　甕

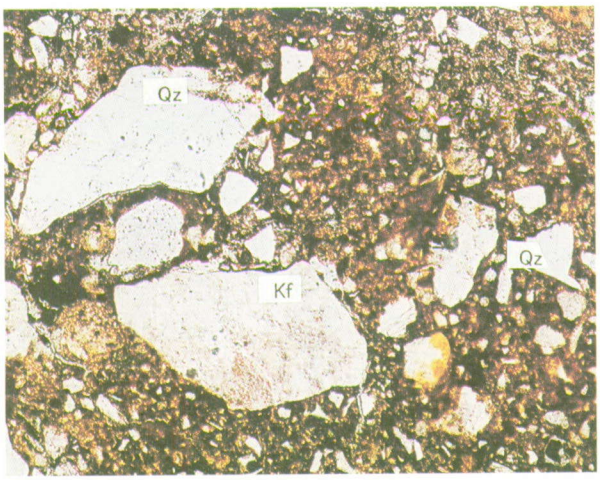


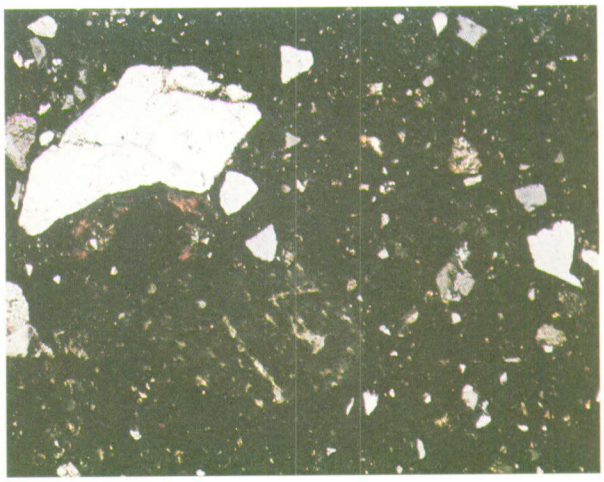
6. 試料番号１１　弥生土器　甕

Ｑｚ：石英．Ｋｆ：カリ長石．Ｐｌ：斜長石．Ｖｇ：火山ガラス．Ｐｏ：植物珪酸体．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

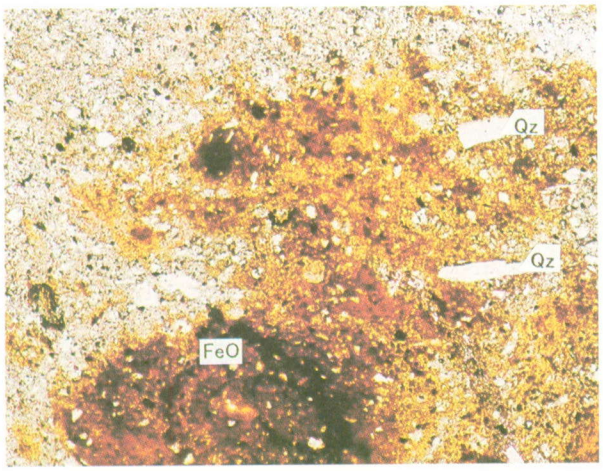
0.5mm

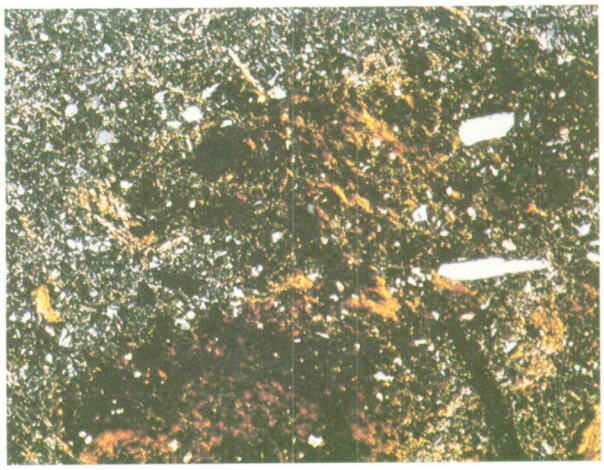
図版２　胎土薄片（2）



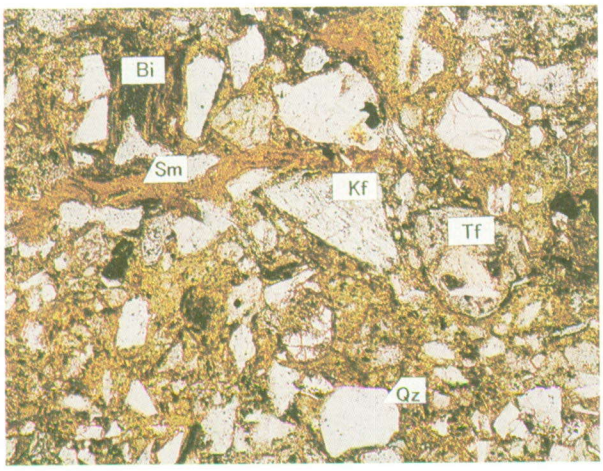


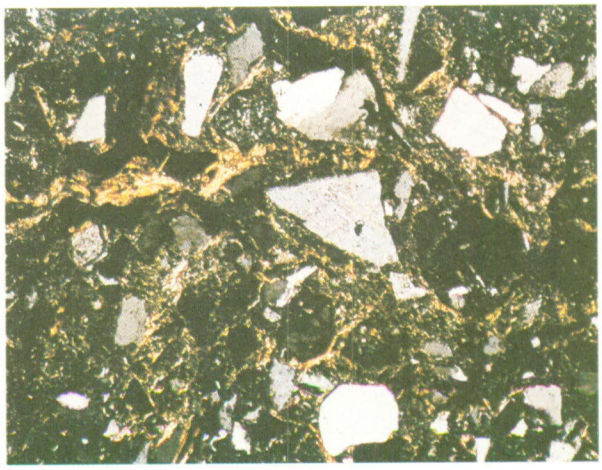
7. 試料番号 15　堅穴住居内粘土塊





8. 試料番号 16　粘土採掘坑 (SKg285) 基盤層





9. 試料番号 17　Ⅲ 33 区南壁 24 層

Ｑｚ：石英．Ｋｆ：カリ長石．Ｂｉ：黒雲母．Ｔｆ：凝灰岩．
ＦｅＯ：水酸化鉄．Ｓｍ：スメクタイト．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

図版３　胎土薄片（3）

4．考察

空港跡地遺跡が位置する高松平野は、北側は瀬戸内海に臨んでいるが、それ以外の三方を山地に取り囲まれている。これらの山地を構成している地質は、主に白亜紀に形成された領家花崗岩類である。日本の地質「四国地方」編集委員会 1991 などの記載によれば、角閃石- 黒雲母花崗閃緑岩や黒雲母花崗岩などにより構成されており、それら花崗岩類の捕獲岩として石英閃緑岩や斑れい岩などが認められている。さらに、これら花崗岩を覆う、新第三紀中新世の火山岩類も山地を構成する主要な地質である。上記文献によれば、火山岩類を構成する岩石には、デイサイトや流紋岩およびサヌキトイドをはじめとする安山岩類などがあげられており、これらの岩質の凝灰岩の分布も記載されている。

今回の試料の内、空港跡地遺跡で採取された粘土試料に認められた砂粒の種類構成は、上述の地質学的背景をよく反映していると言える。すなわち、A類の組成は、花崗岩類と火山岩類が接して分布し、それらに由来する砕屑物が混在して供給されるような低地の堆積物を窺わせる。A 類に分類された土器試料も今回は 2 点認められている。したがって、今回の空港跡地遺跡で検出された粘土層が土器の材料として使用された可能性はあると考えられる。ただし、今回の試料では、粘土試料と A 類の土器試料との間に、砂の粒径組成の違いが認められることから、粘土はそのまま素地となったのではなく、砂を加えるなどの調整をした可能性がある。

B類については、高松平野内でも火山岩類の分布しない花崗岩類からなる山地内の谷や山地の麓などの堆積物が想定される。さらに、C類については、石英閃緑岩か斑れい岩などの角閃石の非常に卓越する岩石の岩体直下の谷底低地などの非常に限られた地質に由来する可能性がある。D類については、その特徴である火山ガラスが、基盤岩の岩石に由来するものではなく、おそらく第四紀更新世以降に高松平野に降下堆積したテフラ層に由来するものであることから、場所の特定には至らない。更新世の地層から構成される丘陵あるいは段丘堆積物中のテフラ層から砂を採取し、土器材料として使用した可能性がある。

今後、土器試料について、出土遺跡、型式、色調の系統等の分類項目と対応させることにより、今回の分類結果が示唆することを見出せると考える。特に、出土遺跡の場所と高松平野を取り囲む地質学的背景との関係が、胎土分類によって具体的に示せる可能性が高い。今回の分析結果をもとに、発掘調査者との協議検討が望まれる。

引用文献

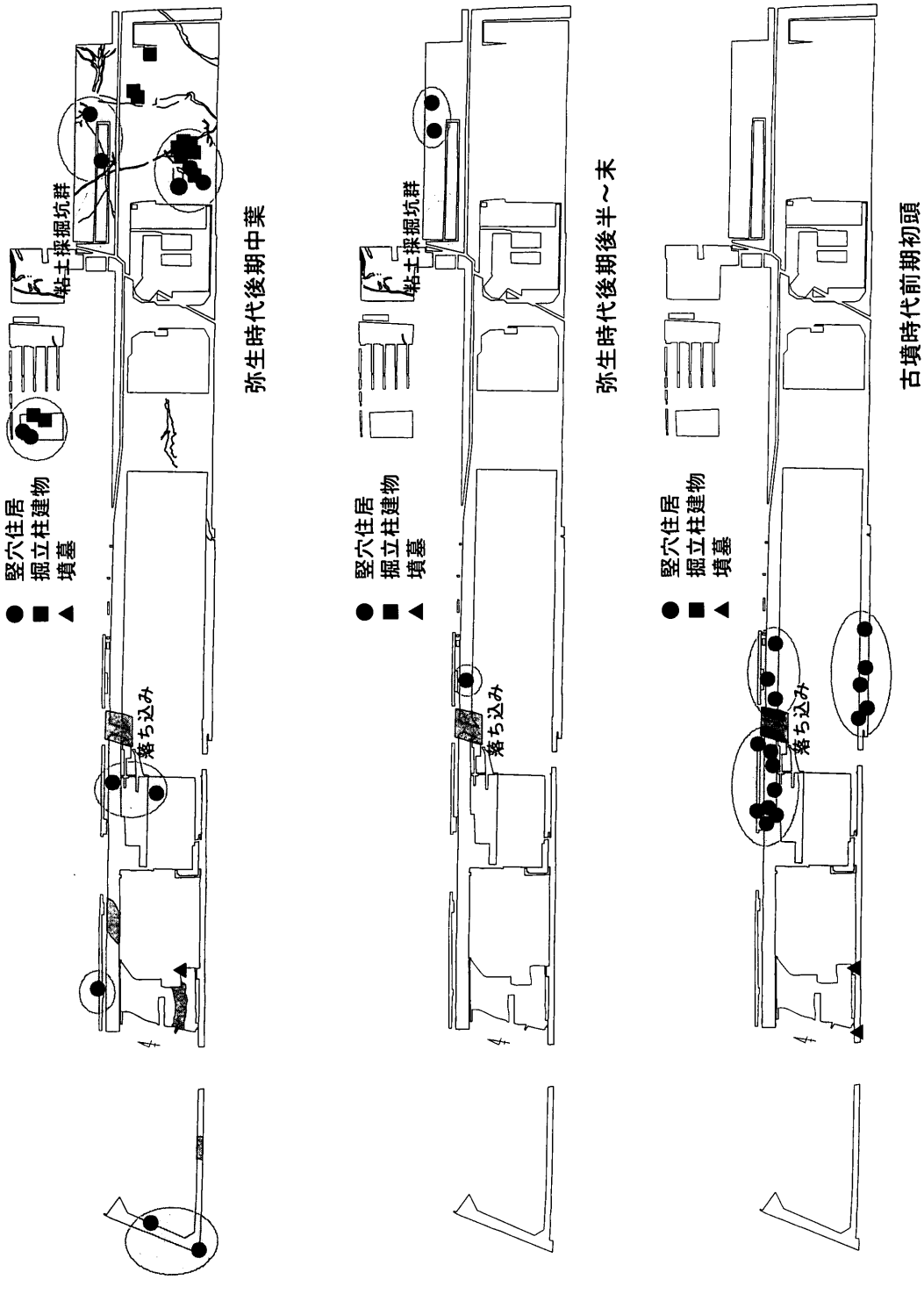
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高 1999「瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－」『日本文化財科学会第 16 回大会発表要旨集』120-121.

日本の地質「四国地方」編集委員会 1991『日本の地質 8　四国地方』共立出版，266p.

第４章　調査の成果

空港跡地遺跡の発掘調査では、弥生時代～近代までの遺構・遺物が確認されているが、ここでは、本報告書収録地区で主体をなす弥生時代後期中葉～古墳時代前期初頭に絞って、遺跡内の集落動態について触れることとする。

弥生時代後期中葉　Ｈ地区を中心とする箇所には、南から北へ流れる基幹水路（ＳＤｈ 016）が存在し、下流には耕作域があったことが想定される。この基幹水路は、一部出水（ＳＸｈ 01・ｈ



第 203 図　空港跡地遺跡弥生時代後期中葉～古墳時代前期初頭主要遺構配置図

02）から派生する水路から水を集めており、出水付近に認められる住居群は、なんらかのかたちで耕作域に関わっていたことが推測される。また、G地区には住居群の他に、土器製作に伴うものであるとされる粘土採掘坑（蔵本 1992）がある。一方、L地区にも竪穴住居が1棟のみ存在するが、これは、B地区（報告書未刊）にある当該期の竪穴住居と住居群を構成するものと考えられる。この住居群と同一微高地上の南西部には、周溝墓の可能性が考えられるＳＤｋ 06（山元 2003）が存在する。

このように、当該期においては、竪穴住居と掘立柱建物数棟からなる住居群が点在することにより集落景観を形成する姿が見て取れる。

弥生時代後期後半～末　竪穴住居をはじめ、当該期の遺構は非常に少ない。北東部には、水路の一部と粘土採掘坑が、前段階から引き続いて見られる。

古墳時代前期初頭　この時期、遺跡内の東側は居住域として利用されておらず、水路や粘土採掘坑も認められない。その反面、B・L地区と落ち込みを挟んだ東側に位置するC地区には、方形の竪穴住居数棟で構成される住居群が展開する。また、B・L地区単位と同一微高地上の南西部には墳墓（古墳）がある。それまでと決定的に異なるのは、竪穴住居が集中することにより集落景観を形成している点である。水路網の廃絶や、集落内での土器生産の停止なども含めたこういった現象は、この間に、例えば古墳の出現に代表される大きな社会変化があったことを物語っているといえよう。

引用・参考文献

市村拓二・濱野圭司・真下拓也 1993「小学生を対象とした発掘調査体験学習について－高松市林町空港跡地遺跡における普及啓蒙活動の実施報告」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅰ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

大久保徹也 1990 a「地理的環境」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会

大久保徹也 1990 b「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会

大久保徹也 2003「四国北東部地域における首長埋葬祭祀様式の画期－土器編年との対応関係について－」『古墳出現期の土師器と実年代』（財）大阪府文化財センター

奥田尚 1995「太田下・須川遺跡の土器の砂礫」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　太田下・須川遺跡』香川県教育委員会ほか

木下晴一 1992「遺跡の地理的環境」『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成３年度』香川県教育委員会ほか

木下晴一 2002「立地と環境」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　空港跡地遺跡Ⅴ』香川県教育委員会ほか

蔵本晋司・真鍋昌宏編 2003『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊　空港跡地遺跡Ⅵ』香川県教育委員会ほか

佐藤竜馬 1994「18～19 世紀の土器・瓦について」『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成５年度』香川県教育委員会ほか

佐藤竜馬 2000 a「中世林地域の村落景観」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ』

佐藤竜馬 2000 b「刻印瓦の検討」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会ほか

佐藤竜馬 2001「瀬戸内海沿岸地域からみた讃岐の焙烙」『第３回　四国徳島城下町研究会　四国と周辺の土器－焙烙の生産と流通－』徳島大学総合科学部歴史学研究室ほか

佐藤竜馬 2003「瓦」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』香川県教育委員会ほか

田崎博之 2000『遺跡出土の焼成粘土塊・焼成剥離土器片からみた弥生土器の生産・供給形態　－平成９～11 年度科学研究費補助金＜基盤研究（C）（２）＞研究成果報告書－』

乗松真也 2004 a「14～15 世紀の土師質土器杯編年」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊　浜ノ町遺跡』香川県教育委員会ほか

乗松真也 2004 b「高松平野中世遺跡出土の砥石について」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊　浜ノ町遺跡』香川県教育委員会ほか

乗松真也 2004 c「高松平野における井戸枠の変遷」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊　浜ノ町遺跡』香川県教育委員会ほか

乗松真也編 2004『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊　浜ノ町遺跡』香川県教育委員会ほか

松本和彦 2003「近世～近現代」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊　空港跡地遺跡Ⅵ（Ｇ地区）』香川県教育委員会ほか

森下英治 1998「龍川五条遺跡出土前期弥生土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 29 冊　龍川五条遺跡Ⅱ　飯野東分山崎南遺跡』香川県教育委員会ほか

森下友子 1995「胎土１類土器について」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　太田下・須川遺跡』香川県教育委員会ほか

森下友子 1998『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第３冊　空港跡地遺跡Ⅲ』香川県教育委員会ほか

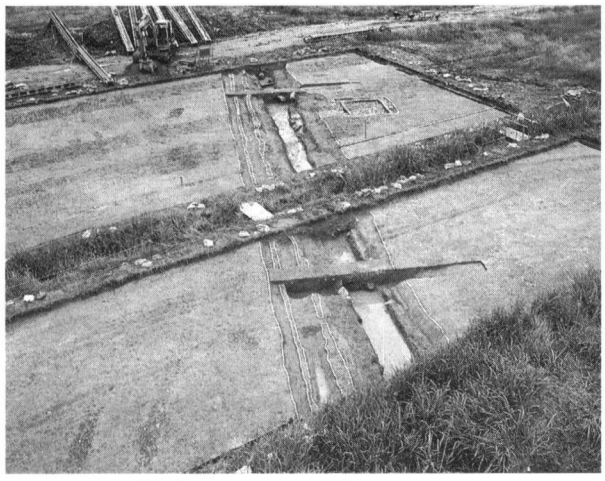


写真１　Ⅲ－３区ＳＤｈ406

写真２　Ⅲ－10区調査前風景

写真３　Ⅲ－10区全景

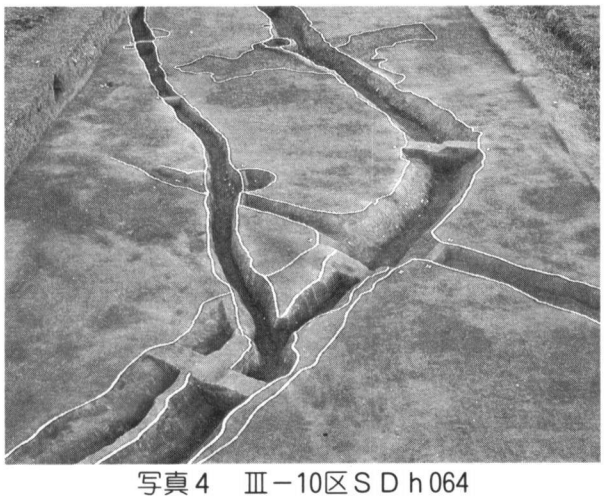


写真４　Ⅲ－10区ＳＤｈ064

写真５　Ⅲ－10区ＳＤｈ064土層断面

写真６　Ⅲ－10区ＳＫｈ506調査風景

写真７　Ⅲ－10区ＳＫｈ506遺物出土状況

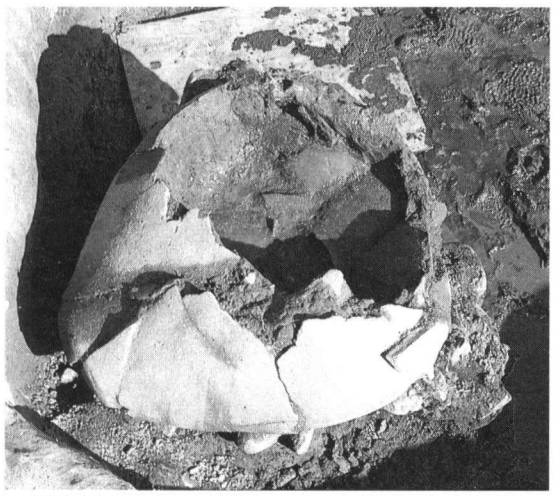


写真８　Ⅲ－10区ＳＫｈ506遺物出土状況

写真９　Ⅲ－10区ＳＫｈ506礫出土状況

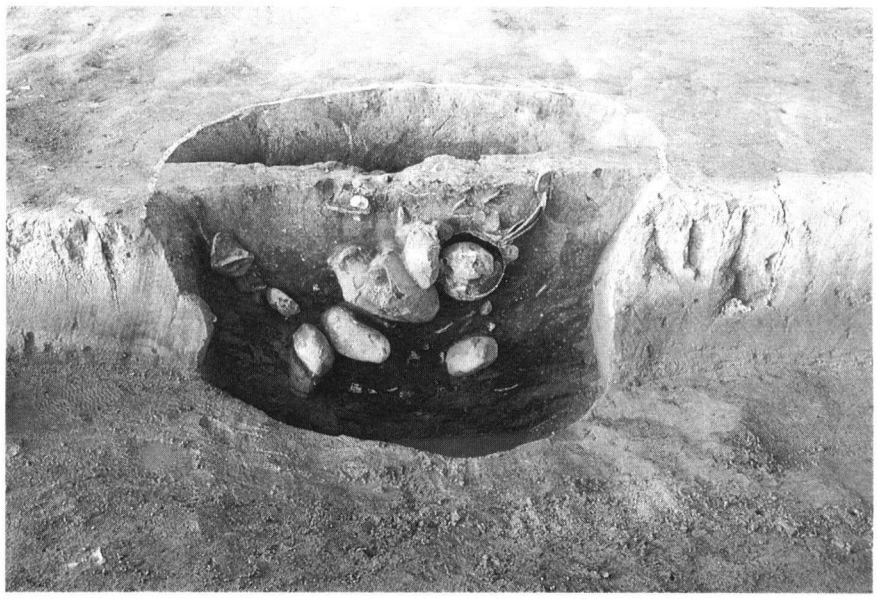


写真10　Ⅲ－10区ＳＫｈ507土層断面

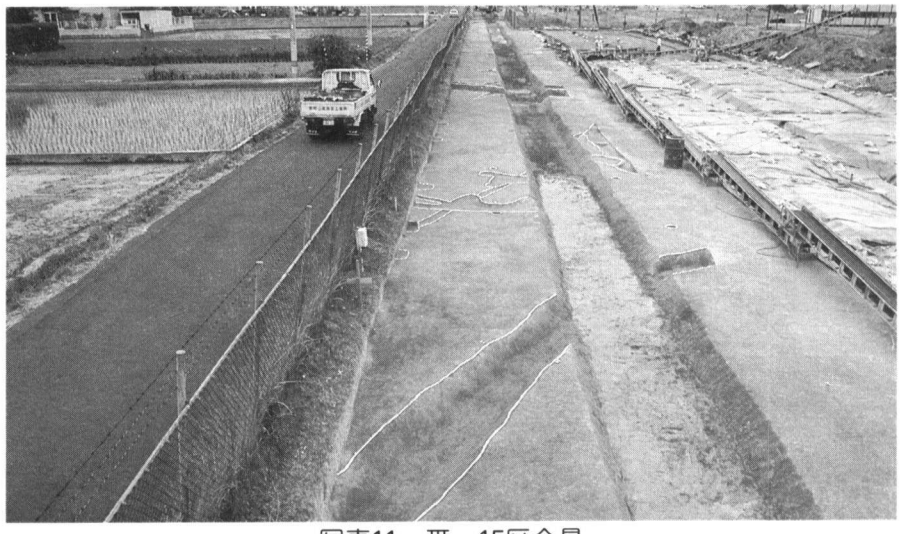


写真11　Ⅲ－15区全景

写真12　Ⅲ－15区深掘トレンチ土層断面

写真13　Ⅲ－16区ＳＤｈ016遺物出土状況

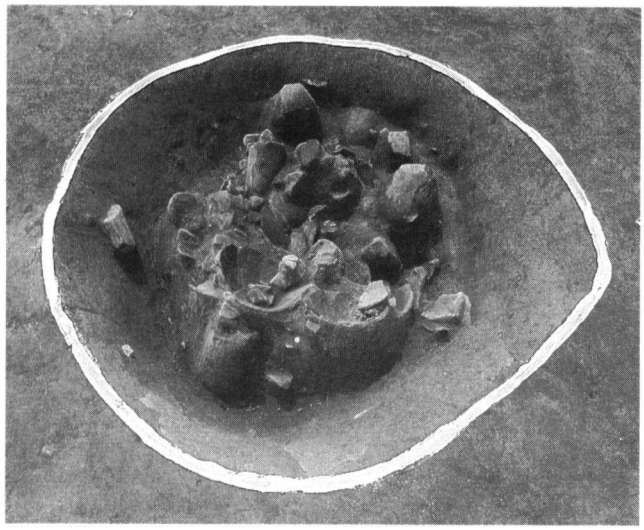


写真14
Ⅲ－16区ＳＫｈ012
遺物出土状況

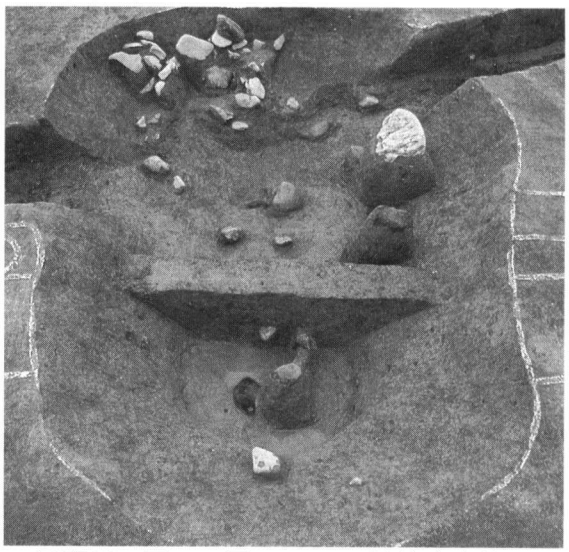


写真16　Ⅲ－16区ＳＫｈ018遺物出土状況

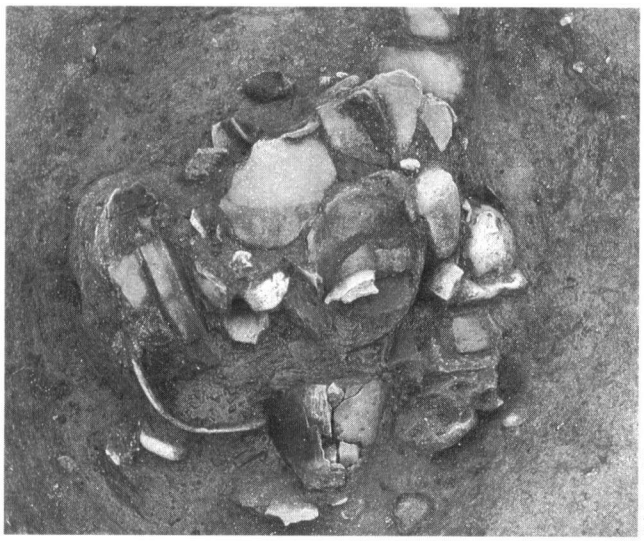


写真15
Ⅲ－16区ＳＫｈ012
遺物出土状況

写真17　Ⅲ－16区ＳＨｈ02

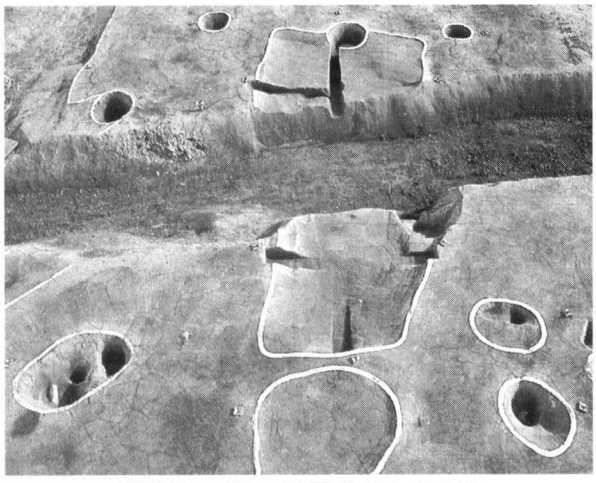


写真18　Ⅲ－16区ＳＨｈ02Ｋ1

写真19　Ⅲ－16区ＳＨｈ02Ｐ5遺物出土状況

写真20　Ⅲ－16区周辺風景

写真21　Ⅲ－17区ＳＸｈ01・ｈ02